鹿児島県

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（152）

狩俣遺跡
建山遺跡
西原段Ⅰ遺跡

二〇一〇年三月　鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（152）

東九州自動車道建設（曽於弥五郎IC～末吉財部IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

狩俣遺跡
建山遺跡
西原段Ⅰ遺跡

（曽於市大隅町）

2010年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

狩俣遺跡全景（建山遺跡方向を望む）

狩俣遺跡　畝状遺構11

序　　文

この報告書は，東九州自動車道（曽於弥五郎ＩＣ～末吉財部ＩＣ）建設に伴って，平成17・18年度に実施した曽於市大隅町に所在する狩俣遺跡，平成20・21年度の建山遺跡，平成21年度の西原段Ｉ遺跡の発掘調査の記録です。

狩俣遺跡は，縄文時代から近世までの複合遺跡で，まさに歴史情報の宝庫でした。特に1471年の桜島から噴出した軽石に覆われた畝状遺構が，ほぼ遺跡の全域で発見されていますが，今後，本県の中世における「畠」研究の貴重な資料として期待されると確信します。

建山遺跡の２軒の竪穴住居跡は，新たな縄文時代早期資料として追加され，西原段Ｉ遺跡では，新たな発見はできませんでしたが，内陸部遺跡のあり方を改めて検討する機会となりました。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心と理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査に当たり協力をいただいた国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，曽於市教育委員会，関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成22年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　山　下　吉　美

報　告　書　抄　録

ふりがな	かりまたいせき　たてやまいせき　にしはらだんいちいせき
書名	狩俣遺跡　　建山遺跡　　西原段Ⅰ遺跡
副書名	東九州自動車道建設（曽於弥五郎IC～末吉財部IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅴ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第152集
編著者名	平木場秀男，楸田岳志，大久保浩二，藤島伸一郎（中村耕治，岩元康成，岩下直樹）
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　℡0995－48－5811
発行年月日	西暦2010年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
狩俣遺跡 （かりまたいせき）	鹿児島県（かごしまけん） 曽於市（そおし） 大隅町（おおすみちょう） 岩川（いわがわ） 2154他	46217	63-254	31° 37′ 40″	130° 56′ 37″	確認調査 20010107～20020322 確認・本調査 20051101～20060322 本調査 20060509～20070320	4,813 18,647	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
建山遺跡 （たてやまいせき）	大隅町（おおすみちょう） 岩川（いわがわ） 2217他	46217	63-253	31° 37′ 50″	130° 56′ 14″	本調査 20090218～20090319 20090413～20090428	1,120	
西原段Ⅰ遺跡 （にしはらだんいちいせき）	大隅町（おおすみちょう） 中之内（なかのうち） 2731他	64217	63-27	31° 39′ 11″	130° 56′ 02″	本調査 20090413～20090526	2,550	

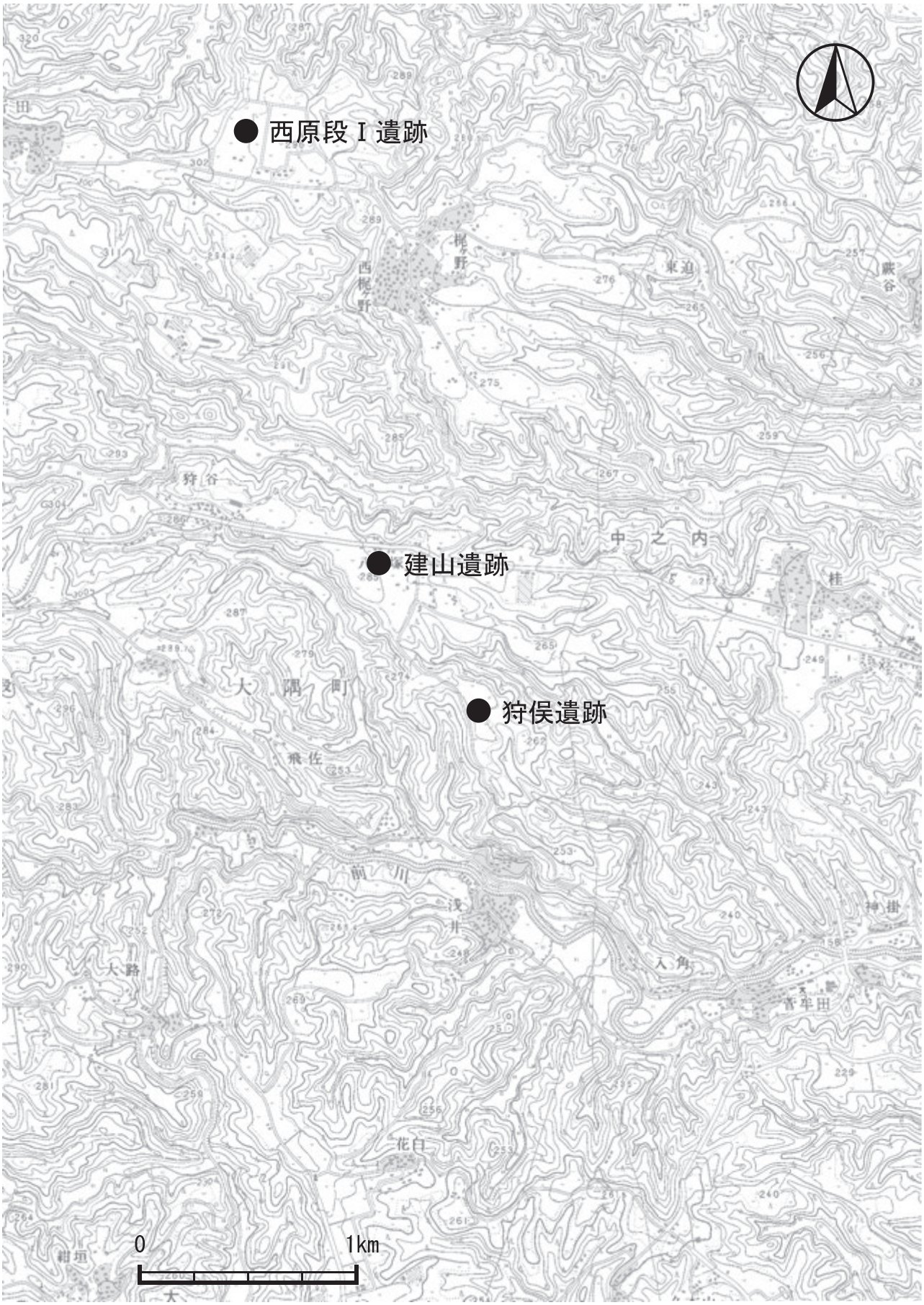
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
狩俣遺跡	包含地	縄文早期 縄文中～晩期 古代・中世	集石遺構 落とし穴 畝状遺構，溝跡，古道	石坂式土器，手向山式土器 宮ヶ迫式土器，黒川式土器 土師器，須恵器，墨書土器	
建山遺跡	集落 包含地	縄文早期 縄文前期 縄文中期	竪穴住居跡 落とし穴	加栗山式土器，桑ノ丸式土器 手向山式土器 轟式土器，曽畑式土器 石鏃，石皿	
西原段Ⅰ遺跡	包含地	縄文早期	土坑	押型文土器，石鏃，石皿，磨石	

遺跡の概要

狩俣遺跡では，縄文時代早期，中～晩期，古代，中世，近世の遺構，遺物が発見された。縄文時代早期の集石遺構は25基検出され，その周辺からは多くの遺物が出土した。特に中世の畝状遺構は1471年桜島噴出の軽石に覆われており，削平を受けていない台地部や斜面部などほぼ遺跡全体で検出され，その分布が明らかとなった。

建山遺跡は台地の谷頭に位置し，縄文時代早期前葉の竪穴住居跡が２軒発見された。縄文時代中期の落とし穴も検出され，時代により遺跡の役割が異なっていたことも明らかとなった。

西原段Ⅰ遺跡では，縄文時代早期の土坑や石鏃，石皿などが発見された。



遺跡位置図

例　　言

1　本報告書は，東九州自動車道建設（曽於弥五郎IC～末吉財部IC）に伴う「狩俣遺跡・建山遺跡・西原段Ⅰ遺跡」の発掘調査報告書である。
2　狩俣遺跡，建山遺跡は鹿児島県曽於市大隅町（旧曽於郡大隅町）岩川に所在し，西原段Ⅰ遺跡は鹿児島県曽於市大隅町（旧曽於郡大隅町）荒谷に所在する。
3　発掘調査は，平成13，17年度は日本道路公団（現西日本高速道路株式会社），平成18，21年度は国土交通省からの受託事業として，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
4　発掘調査は，確認調査を平成13年度（狩俣遺跡）に実施し，本調査を平成17，18年度（狩俣遺跡），平成21年度（建山遺跡・西原段Ⅰ遺跡）に実施した。整理作業は平成20年度（狩俣遺跡），平成21年度（狩俣遺跡・建山遺跡・西原段Ⅰ遺跡）に実施した。
5　本書の遺物番号は遺跡ごとの通し番号であり，本文，挿図，図版の番号と一致する。
6　出土した遺物の実測・トレースの一部は，国際航業株式会社，㈱埋蔵文化財サポートシステム，大成エンジニアリング株式会社に委託した。また，放射性炭素年代測定については，㈱加速器分析研究所，㈱パレオ・ラボ，出土種子の同定については㈱加速器分析研究所に依頼した。
7　本書で用いたレベル数値は，すべて海抜高である。
8　本書で使用した方位は，すべて磁北である。
9　現地調査に関する実測及び写真撮影は，それぞれ各調査年度の各遺跡調査担当者で行ったが，狩俣遺跡の一部の実測については㈱ジパング・サーベイに，航空写真についてはふじた航空写真，㈲スカイサーベイ九州に委託した。
10　土器の実測・トレース，遺構図の製図・トレース等は，狩俣遺跡は平木場秀男，楸田岳志が，建山遺跡・西原段Ⅰ遺跡は大久保浩二，藤島伸一郎が中心となり整理作業員の協力を得ながら行った。
11　本書の執筆分担は，次の通りである。

調査に至るまでの経過と環境

第Ⅰ～Ⅲ，Ⅴ章……平木場　　第Ⅳ章……楸田

狩俣遺跡

第Ⅰ，Ⅱ章，第Ⅲ～Ⅴ章の１～３節，第Ⅵ，Ⅶ章，第Ⅷ章の第１，２（古代～近世），４節… 平木場

第Ⅲ章第４節……岩元康成　　第Ⅳ章第４，５節……岩下直樹

第Ⅴ章第４節（縄文～古墳），第Ⅷ章の第２節（縄文）……中村耕治

第Ⅴ章第４節（古代～近世），５節，第Ⅷ章の第３節……楸田

建山遺跡

第Ⅰ～Ⅲ章……大久保

西原段Ⅰ遺跡

第Ⅰ章第１，２節　第Ⅱ章第１節……大久保

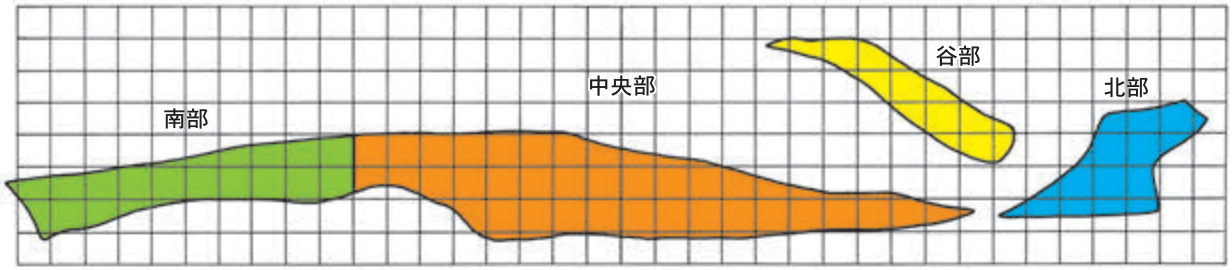
第Ⅰ章第３節，第Ⅱ章第２，３節，第Ⅲ章……藤島

12　本書に掲載した遺物写真の撮影は，西園勝彦，吉岡康弘が行った。
13　本書の編集は鹿児島県立埋蔵文化財センターで行い，狩俣遺跡は平木場，建山遺跡は大久保，西原段Ⅰ遺跡は藤島が担当した。
14　本報告書に掲載した出土遺物及び発掘調査・整理作業に関わる図面・写真等の記録類は，鹿児島県埋蔵文化財センターで保管し活用する。
15　各遺跡の遺物注記記号は，狩俣遺跡「KM」，建山遺跡「タテ」，西原段Ⅰ遺跡「NHD」である。

凡　　例

1　調査区

狩俣遺跡は調査区が広範囲であり，谷部や台地部により特徴が異なるため，調査区全体を「谷部」「北部」「中央部」「南部」４つのエリアに分割し，遺構・遺物を掲載した。



各エリアの名称

2　遺構

⑴　遺構図については次の縮尺を基本としたが，大型の遺構についてはこの限りではない。各々，図中に示したスケールを参考とされたい。

集石，落とし穴 1/20　　焼土 1/30　　掘立柱建物跡 1/40　　古道，溝，土坑 1/60

⑵　畝状遺構については広範囲に広がるため，遺構規模や形状に応じて1/100～1/300で示している。また，一部の畝状遺構については分割して掲載している。

⑶　遺構図の断面については平面図と同縮尺を基本としたが，大型の遺構についてはこの限りではない。特に畝状遺構については，凹凸の判別しやすさを優先して示している。

⑷　掘立柱建物跡，土坑等の炭化物集中域については，スクリーントーンで表現している。

⑸　遺構番号については，調査時に付されたものから，報告書掲載順に新たに付け替えた。

⑹　計画変更による本調査区縮小のため，区域外となった狩俣遺跡の確認トレンチの検出遺構については第Ⅰ章第３節にて，出土遺物については包含層出土遺物（２，10T→北部，22～24T→中央部）として取り扱った。

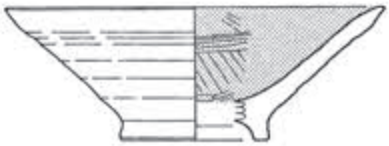
3　遺物

⑴　掲載遺物の縮尺は，土器が1/3，石器は石鏃など小型のものを1/1，石斧など中型のものを1/2，礫石器など大型のものを1/3を基本としたが，個々の大きさによりこの限りではない。各々，図中に示したスケールを参考とされたい。

⑵　土器の外面に付着した煤付着，赤色顔料については，二色刷とアミかけで区別した。

⑶　古代の土器のうち，内黒土師器，須恵器については，アミかけ，断面黒塗りを使用して下のように区別した。

普通の土師器



内黒土師器

須恵器

目　　次

巻頭カラー
序　　文
報告書抄録
遺跡位置図
例　　言
凡　　例
本文目次
挿図目次
表　目　次
図版目次
あとがき

本文目次

Ⅰ　調査に至るまでの経緯と環境

第Ⅰ章　調査に至るまでの経緯……1
第Ⅱ章　地理的環境……3
第Ⅲ章　地質的環境……4
第Ⅳ章　歴史的環境……4
第Ⅴ章　層位……9

挿図目次

第1図　東九州自動車道遺跡位置図……2
第2図　遺跡周辺地形分類図……6
第3図　周辺遺跡図……7
第4図　基本土層柱状模式図……9

表　目　次

第1表　周辺遺跡一覧表……8

Ⅱ　狩俣遺跡

第Ⅰ章　発掘調査の経緯……11
　第1節　調査の概要と経緯……11
　第2節　調査の組織……11
　第3節　確認調査……16
　　1　平成13年度……16
　　2　平成17年度……28
　第4節　本調査……28
　　1　平成17年度……28
　　2　平成18年度……31
　第5節　日誌抄……32
第Ⅱ章　狩俣遺跡の層位……37
第Ⅲ章　谷部の調査……39
　第1節　調査の概要……39
　第2節　谷部の層位……39
　第3節　検出遺構……44
　　1　古代～中世……44
　　2　中世～近世……50
　第4節　出土遺物……59
　　1　縄文時代……59
　　2　古墳時代……59
　　3　古代……59
　　4　近世……61
第Ⅳ章　北部の調査……65
　第1節　調査の概要……65
　第2節　北部の層位……65
　第3節　検出遺構……69
　　1　縄文時代……69
　　2　古代～中世……75
　　3　中世～近世……81
　第4節　出土土器……91
　　1　縄文時代……91
　　2　古代……100
　第5節　出土石器……103
　　1　縄文時代早期……103
　　2　縄文時代晩期……105
第Ⅴ章　中央部の調査……111
　第1節　調査の概要……111
　第2節　中央部の層位……111
　第3節　検出遺構……119
　　1　縄文時代早期……119
　　2　縄文時代中～晩期……136
　　3　古代～中世……142
　　4　中世～近世……150
　第4節　出土土器……171
　　1　縄文時代……171
　　2　古墳時代……193
　　3　古代……194
　　4　中世～近世……203
　第5節　出土石器……216

1　縄文時代早期 ……216
2　縄文時代晩期 ……230
3　古代 ……231
第６節　金属製品 ……235
第Ⅵ章　南部の調査 ……239
第１節　調査の概要 ……239
第２節　南部の層位 ……239
第３節　検出遺構 ……243
1　縄文時代 ……243
2　古代～中世 ……243
3　中世～近世 ……251
第４節　出土土器 ……261
1　縄文時代 ……261
2　古代 ……261
3　中世～近世 ……273
第５節　出土石器 ……279
1　石鏃 ……279
2　石匙 ……279
3　磨製石斧 ……279
4　磨石 ……279
5　軽石製品 ……279
第Ⅶ章　科学分析 ……283
第１節　放射性炭素年代測定 ……283
1　㈱加速器分析研究所測定結果１ ……283
2　㈱加速器分析研究所測定結果２ ……286
3　㈱加速器分析研究所測定結果３ ……288
4　㈱加速器分析研究所測定結果４ ……291
5　パレオ・ラボ測定結果 ……293
第２節　種実同定 ……295
1　㈱加速器分析研究所測定結果１ ……295
2　㈱加速器分析研究所測定結果２ ……296
第Ⅷ章　まとめ ……301
第１節　検出遺構 ……301
1　縄文時代 ……301
2　古代～中世 ……301
第２節　出土土器 ……302
1　縄文時代 ……302
2　古代 ……303
3　中世～近世 ……304
第３節　出土石器 ……304
1　縄文時代早期 ……304
2　縄文時代晩期 ……304
3　古代 ……304
第４節　畝状遺構 ……305
1　変遷について ……305
2　栽培作物について ……306
3　調査方法について ……306

挿　図　目　次

第 1 図　狩俣遺跡周辺地形図……15
第 2 図　平成13年度，17年度調査範囲図……17
第 3 図　２Ｔ　縄文時代中～後期
落とし穴１号……18
第 4 図　２Ｔ　縄文時代中～後期
落とし穴２号……19
第 5 図　２トレンチ遺構配置図……21
第 6 図　中世　畝状遺構１……21
第 7 図　平成13年度トレンチ配置図……21
第 8 図　23T　縄文時代早期　集石１，２号……22
第 9 図　23T　縄文時代早期
土坑１，２，３号……23
第 10 図　23T　縄文時代早期　土坑５，６号……25
第 11 図　23T　縄文時代早期　竪穴住居跡……26
第 12 図　23T　遺構配置図……26
第 13 図　平成13年度確認調査結果……27
第 14 図　狩俣遺跡　トレンチ配置図……29
第 15 図　狩俣遺跡　グリッド配置図……30
第 16 図　狩俣遺跡　基本土層柱状模式図……37
第 17 図　狩俣遺跡　各地点の層位……38
第 18 図　谷部　調査範囲図及びトレンチ配置図…40
第 19 図　谷部　土層断面図⑴……41
第 20 図　谷部　土層断面図⑵……42
第 21 図　谷部　土層断面図⑶……43
第 22 図　谷部　古代～中世　溝状遺構１，２……45
第 23 図　谷部　古代～中世
溝状遺構３，４，５，６……47
第 24 図　谷部　古代～中世　溝状遺構７……48
第 25 図　谷部　古代～中世　土坑……49
第 26 図　谷部　中世　畝状遺構２－⑴……51
第 27 図　谷部　中世　畝状遺構２－⑵……52
第 28 図　谷部　中世　畝状遺構２　断面図……53
第 29 図　谷部　中世～近世　土坑……54
第 30 図　谷部　古代～中世　遺構配置図⑴……55
第 31 図　谷部　古代～中世　遺構配置図⑵……56
第 32 図　谷部　中世～近世　遺構配置図……57
第 33 図　谷部　縄文時代の遺物……60
第 34 図　谷部　古墳時代の遺物……61
第 35 図　谷部　古代～近世の遺物……62
第 36 図　谷部　遺物出土状況図……64
第 37 図　北部　調査範囲図及びトレンチ配置図…66
第 38 図　北部　土層断面図⑴……67
第 39 図　北部　土層断面図⑵……68
第 40 図　北部　縄文時代早期　集石３号……70
第 41 図　北部　縄文時代早期　集石４号……71
第 42 図　北部　縄文時代早期　集石５，６号……72
第 43 図　北部　縄文時代　土坑……73
第 44 図　北部　縄文時代　遺構配置図……74
第 45 図　北部　古代～中世　古道１，２……76
第 46 図　北部　古代～中世　古道３，４，５……77
第 47 図　北部　古代～中世　古道６，７，８……78
第 48 図　北部　古代～中世　溝状遺構８，９……79
第 49 図　北部　古代～中世　土坑……80

第 50 図　北部　古代～近世　古道９，10
溝状遺構11……82
第 51 図　北部　古代～近世　溝状遺構10，12……83
第 52 図　北部　中世～近世　溝状遺構13……84
第 53 図　北部　中世　畝状遺構３……85
第 54 図　北部　中世　畝状遺構４……86
第 55 図　北部　中世～近世　土坑……87
第 56 図　北部　古代～近世　遺構配置図……89
第 57 図　北部　中世～近世　遺構配置図……90
第 58 図　北部　縄文時代早期の土器⑴……92
第 59 図　北部　縄文時代早期の土器⑵……93
第 60 図　北部　縄文時代早期の土器⑶……94
第 61 図　北部　縄文時代早期の土器⑷……96
第 62 図　北部　縄文時代早期の土器⑸，
前期の土器……97
第 63 図　北部　縄文時代後期の土器……98
第 64 図　北部　縄文時代晩期の土器……99
第 65 図　北部　古代の土器 ……100
第 66 図　北部　縄文時代早期の石器⑴ ……104
第 67 図　北部　縄文時代早期の石器⑵ ……106
第 68 図　北部　縄文時代早期の石器⑶ ……107
第 69 図　北部　縄文時代早期の石器⑷ ……108
第 70 図　北部　縄文時代晩期の石器 ……109
第 71 図　北部　遺物出土状況図 ……110
第 72 図　中央部　調査範囲図及び
トレンチ配置図⑴ ……112
第 73 図　中央部　調査範囲図及び
トレンチ配置図⑵ ……113
第 74 図　中央部　土層断面図⑴ ……114
第 75 図　中央部　土層断面図⑵ ……115
第 76 図　中央部　土層断面図⑶ ……116
第 77 図　中央部　土層断面図⑷ ……117
第 78 図　中央部　土層断面図⑸ ……118
第 79 図　中央部　縄文時代早期　集石７，８号…120
第 80 図　中央部　縄文時代早期　集石９，10号…121
第 81 図　中央部　縄文時代早期　集石11号 ……122
第 82 図　中央部　縄文時代早期　集石12号 ……123
第 83 図　中央部　縄文時代早期
集石10～12号配置図 ……123
第 84 図　中央部　縄文時代早期
集石13，14，15号 ……125
第 85 図　中央部　縄文時代早期　集石16，17号…126
第 86 図　中央部　縄文時代早期　集石18号 ……127
第 87 図　中央部　縄文時代早期
集石15～18号配置図 ……128
第 88 図　中央部　縄文時代早期　集石20，21号…129
第 89 図　中央部　縄文時代早期　集石22，23号…130
第 90 図　中央部　縄文時代早期
集石20～23号配置図 ……131
第 91 図　中央部　縄文時代早期　集石24号 ……132
第 92 図　中央部　縄文時代早期　集石19，25号…133
第 93 図　中央部　縄文時代早期
集石24，25号配置図 ……133
第 94 図　狩俣遺跡　縄文時代早期　集石配置図 …133
第 95 図　中央部　縄文時代早期
石器集積遺構，土坑 ……135
第 96 図　中央部　縄文時代中期　落とし穴４号 …137
第 97 図　中央部　縄文時代中期　落とし穴５号 …138
第 98 図　中央部　縄文時代中～晩期　焼土１，２ …139
第 99 図　中央部　縄文時代中～晩期　土坑 ……139
第 100 図　中央部　縄文時代　遺構配置図⑴ ……140
第 101 図　中央部　縄文時代　遺構配置図⑵ ……141
第 102 図　中央部　古代～中世
掘立柱建物跡１号 ……143
第 103 図　中央部　古代～中世
掘立柱建物跡２号 ……144
第 104 図　中央部　古代～中世
掘立柱建物跡３号 ……146
第 105 図　中央部　古代～中世　溝状遺構14，15…147
第 106 図　中央部　古代～中世　溝状遺構16，17…148
第 107 図　中央部　古代～中世　土坑 ……149
第 108 図　中央部　中世～近世　古道11 ……150
第 109 図　中央部　中世～近世　溝状遺構18，19…152
第 110 図　中央部　中世～近世　溝状遺構20～24…153
第 111 図　中央部　中世～近世　溝状遺構25，26…154
第 112 図　中央部　中世　畝状遺構５ ……156
第 113 図　中央部　中世　畝状遺構６ ……157
第 114 図　中央部　中世　畝状遺構７，８ ……158
第 115 図　中央部　中世　畝状遺構９ ……159
第 116 図　中央部　中世　畝状遺構10 ……161
第 117 図　中央部　中世　畝状遺構11 ……162
第 118 図　中央部　近世　畝状遺構12 ……163
第 119 図　中央部　中世～近世　土坑⑴ ……165
第 120 図　中央部　中世～近世　土坑⑵ ……166
第 121 図　中央部　古代～近世　遺構配置図⑴ …168
第 122 図　中央部　古代～近世　遺構配置図⑵ …169
第 123 図　中央部　古代～近世　遺構配置図⑶ …170
第 124 図　中央部　縄文時代早期の土器（Ⅰa類①）…172
第 125 図　中央部　縄文時代早期の土器（Ⅰa類②）…173
第 126 図　中央部　縄文時代早期の土器（Ⅰb類）…174
第 127 図　中央部　縄文時代早期の土器（Ⅰ類） …175
第 128 図　中央部　縄文時代早期の土期
（Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ類） ……176
第 129 図　中央部　縄文時代早期の土器
（Ⅵ，Ⅶ，Ⅷ類） ……178
第 130 図　中央部　縄文時代早期の土器（Ⅸa類）…179
第 131 図　中央部　縄文時代早期の土器（Ⅸb類）…180
第 132 図　中央部　縄文時代早期の土器（Ⅹ類） …181
第 133 図　中央部　縄文土器出土状況図
（Ⅹ類，№339）……182
第 134 図　中央部　縄文時代早期の土器
（Ⅹ，Ⅺ，Ⅻ類） ……183

第135図　中央部　縄文時代前期，後期の土器
（XII，XV類）……183
第136図　中央部　縄文時代後期の土器
（XV類）……184
第137図　中央部　縄文時代晩期の土器
（XVIA-a類）……185
第138図　中央部　縄文時代晩期の土器
（XVIA-b類）……186
第139図　中央部　縄文時代晩期の土器
（XVIB類）……187
第140図　中央部　縄文時代晩期の土器
（XVIC-a類①）……188
第141図　中央部　縄文時代晩期の土器
（XVIC-a類②）……189
第142図　中央部　縄文時代晩期の土器
（XVIC-a類③）……190
第143図　中央部　縄文時代晩期の土器
（XVIC-b類）……191
第144図　中央部　縄文時代晩期の土器
（XVIC-c類）……192
第145図　中央部　古墳時代の土器……193
第146図　中央部　古代の土器⑴……195
第147図　中央部　古代の土器⑵……196
第148図　中央部　古代の土器⑶……197
第149図　中央部　古代の土器⑷……198
第150図　中央部　古代の土器⑸……199
第151図　中央部　古代の土器⑹……201
第152図　中央部　古代の土器⑺……202
第153図　中央部　中世～近世の土器……203
第154図　中央部　遺物出土状況図⑴……211
第155図　中央部　遺物出土状況図⑵……212
第156図　中央部　遺物出土状況図⑶……213
第157図　中央部　遺物出土状況図⑷……214
第158図　中央部　遺物出土状況図⑸……215
第159図　中央部　縄文時代早期の石器⑴……216
第160図　中央部　縄文時代早期の石器⑵……218
第161図　中央部　縄文時代早期の石器⑶……219
第162図　中央部　縄文時代早期の石器⑷……220
第163図　中央部　縄文時代早期の石器⑸……221
第164図　中央部　縄文時代早期の石器⑹……223
第165図　中央部　縄文時代早期の石器⑺……224
第166図　中央部　縄文時代早期の石器⑻……225
第167図　中央部　縄文時代早期の石器⑼……226
第168図　中央部　縄文時代早期の石器⑽……227
第169図　中央部　縄文時代早期の石器⑾……228
第170図　中央部　縄文時代早期の石器⑿……229
第171図　中央部　縄文時代晩期の石器⑴……230
第172図　中央部　縄文時代晩期の石器⑵……231
第173図　中央部　古代の石器⑴……232
第174図　中央部　古代の石器⑵……233
第175図　中央部　金属製品……235
第176図　中央部　石器出土状況図⑴……236
第177図　中央部　石器出土状況図⑵……237
第178図　中央部　石器出土状況図⑶，
金属製品……238
第179図　南部　調査範囲図及びトレンチ配置図…240
第180図　南部　土層断面図⑴……241
第181図　南部　土層断面図⑵……242
第182図　南部　縄文時代　土坑……243
第183図　南部　古代～中世　掘立柱建物跡４号…245
第184図　南部　古代～中世　掘立柱建物跡５号…246
第185図　南部　古代～中世　畝状遺構13……248
第186図　南部　古代～中世　土坑……249
第187図　南部　古代～中世　遺構配置図……249
第188図　南部　古代～中世　炭化木１～３……250
第189図　南部　古代～中世　炭化木出土状況…250
第190図　南部　中世　畝状遺構14……252
第191図　南部　中世　畝状遺構15……253
第192図　南部　中世　畝状遺構16……255
第193図　南部　中世　畝状遺構17，18……256
第194図　南部　近世　畝状遺構19……257
第195図　南部　中世～近世　土坑……258
第196図　南部　遺構配置図……260
第197図　南部　縄文時代の土器……262
第198図　南部　古代の土器⑴……263
第199図　南部　古代の土器⑵……264
第200図　南部　古代の土器⑶……265
第201図　南部　古代の土器⑷……267
第202図　南部　古代の土器⑸……268
第203図　南部　古代の土器⑹……269
第204図　南部　古代の土器⑺……270
第205図　南部　古代の土器⑻……271
第206図　南部　古代の土器⑼……272
第207図　南部　中世～近世の土器……274
第208図　南部　縄文時代の石器⑴……279
第209図　南部　縄文時代の石器⑵，古代の石器…280
第210図　南部　遺物出土状況図⑴……281
第211図　南部　遺物出土状況図⑵……282
第212図　暦年正年代データ⑴……288
第213図　暦年正年代データ⑵……290
第214図　暦年正年代データ⑶……293
第215図　狩俣遺跡　畝状遺構変遷図……305
付　　図　狩俣遺跡遺構配置図

表　目　次

第１表　23トレンチ　土坑計測表……25
第２表　谷部　土坑計測表……58
第３表　狩俣遺跡　石材分類表……58
第４表　谷部　土器観察表……63
第５表　谷部　石器観察表……63
第６表　北部　土坑計測表……88
第７表　北部　土器観察表⑴……101

第８表　北部　土器観察表⑵ ……102
第９表　北部　石器観察表 ……109
第10表　狩俣遺跡　集石集計表 ……134
第11表　狩俣遺跡　集石重量組成表 ……134
第12表　中央部　落とし穴４号小ピット計測表 …137
第13表　中央部　掘立柱建物跡１，２号計測表 …145
第14表　中央部　掘立柱建物跡３号計測表 ……146
第15表　中央部　土坑計測表 ……167
第16表　中央部　土器観察表⑴ ……204
第17表　中央部　土器観察表⑵ ……205
第18表　中央部　土器観察表⑶ ……206
第19表　中央部　土器観察表⑷ ……207
第20表　中央部　土器観察表⑸ ……208
第21表　中央部　土器観察表⑹ ……209
第22表　中央部　土器観察表⑺ ……210
第23表　中央部　石器観察表⑴ ……233
第24表　中央部　石器観察表⑵ ……234
第25表　中央部　金属製品観察表 ……235
第26表　南部　掘立柱建物跡４号計測表 ……245
第27表　南部　掘立柱建物跡５号計測表 ……246
第28表　南部　土坑計測表 ……259
第29表　狩俣遺跡　畝状遺構計測表 ……259
第30表　南部　土器観察表⑴ ……275
第31表　南部　土器観察表⑵ ……276
第32表　南部　土器観察表⑶ ……277
第33表　南部　土器観察表⑷ ……278
第34表　南部　石器観察表 ……280
第35表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果⑴…285
第36表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果⑵…287
第37表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果⑶…290
第38表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果⑷…292
第39表　測定試料及び処理 ……293
第40表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果⑸…294
第41表　種実同定結果⑴ ……295
第42表　種実同定結果⑵ ……297

図　版　目　次

巻頭カラー１　狩俣遺跡全景（建山遺跡方向を望む）
巻頭カラー２　畝状遺構11
図版　１　上空から見た狩俣遺跡周辺 ……14
図版　２　№709　木片付着痕拡大写真 ……235
図版　３　鉄製品X線写真 ……235
図版　４　狩俣遺跡出土の植物遺体⑴……296
図版　５　狩俣遺跡出土の植物遺体⑵……300
図版　６　狩俣遺跡遠景（北側より）……355
図版　７　狩俣遺跡遠景（確認トレンチ）……356
図版　８　13年度確認調査１（落とし穴１号ほか）…357
図版　９　13年度確認調査２（落とし穴２号，土坑）…358
図版 10　13年度確認調査３（竪穴住居跡ほか）　…359
図版 11　谷部の調査１（調査区全景）　……360
図版 12　谷部の調査２（調査風景，土層）　……361
図版 13　谷部の調査３（遺物出土状況，溝状遺構）…362
図版 14　谷部の調査４（土坑ほか）……363
図版 15　谷部の調査５（畝状遺構２-①）　……364
図版 16　谷部の調査６（畝状遺構２-②）　……365
図版 17　谷部の遺物１
（縄文時代，古墳時代，石器）　……366
図版 18　谷部の遺物２（古代～近世）……367
図版 19　北部の調査１（調査風景，土層）……368
図版 20　北部の調査２
（遺物出土状況，集石３～６号）　……369
図版 21　北部の調査３（古道２～６）……370
図版 22　北部の調査４
（古道９，10，溝状遺構８，11，13）　…371
図版 23　北部の調査５（溝状遺構10，12）　……372
図版 24　北部の調査６（土坑）　……373
図版 25　北部の調査７（畝状遺構3，4）　……374
図版 26　北部の土器１（縄文早期①）　……375
図版 27　北部の土器２（縄文早期②）　……376
図版 28　北部の土器３（縄文早期③）　……377
図版 29　北部の土器４（縄文早期④，縄文前期）…378
図版 30　北部の土器５（縄文後期，縄文晩期）……379
図版 31　北部の土器６（古代）
北部の石器１（石鏃）　……380
図版 32　北部の石器２（石斧，磨石，石皿ほか）…381
図版 33　中央部の調査１（土層断面）　……382
図版 34　中央部の調査２（作業風景）……383
図版 35　中央部の調査３（遺物出土状況）……384
図版 36　中央部の調査４（集石７～14号）……385
図版 37　中央部の調査５（集石15～21号）……386
図版 38　中央部の調査６（集石22～25号）……387
図版 39　中央部の調査７（集石24号，土坑）……388
図版 40　中央部の調査８（落とし穴４号）……389
図版 41　中央部の調査９
（落とし穴５号，焼土，土坑）　……390
図版 42　中央部の調査10（掘立柱建物跡１号）…391
図版 43　中央部の調査11
（掘立柱建物跡２，３号）　……392
図版 44　中央部の調査12（溝状遺構16～19）……393
図版 45　中央部の調査13（溝状遺構20，25，26）…394
図版 46　中央部の調査14（畝状遺構５，６）……395
図版 47　中央部の調査15（畝状遺構７～９）……396
図版 48　中央部の調査16（畝状遺構10）……397
図版 49　中央部の調査17（畝状遺構11）……398
図版 50　中央部の調査18
（畝状遺構12，古道，土坑）　……399
図版 51　中央部の土器１（縄文早期①）……400
図版 52　中央部の土器２（縄文早期②）……401
図版 53　中央部の土器３（縄文早期③）……402
図版 54　中央部の土器４（縄文早期④）……403
図版 55　中央部の土器５（縄文早期⑤）……404
図版 56　中央部の土器６（縄文早期⑥）……405

図版 57　中央部の土器７（縄文早期⑦）……406
図版 58　中央部の土器８（縄文早期⑧）……407
図版 59　中央部の土器９（縄文早期⑨）……408
図版 60　中央部の土器10（縄文前期，後期）……409
図版 61　中央部の土器11（縄文晩期①）……410
図版 62　中央部の土器12（縄文晩期②）……411
図版 63　中央部の土器13（縄文晩期③）……412
図版 64　中央部の土器14（縄文晩期④）……413
図版 65　中央部の土器15（縄文晩期⑤）……414
図版 66　中央部の土器16（縄文晩期⑥）……415
図版 67　中央部の土器17（縄文晩期⑦）……416
図版 68　中央部の土器18（古墳時代）……417
図版 69　中央部の土器19（土師器①）……418
図版 70　中央部の土器20（土師器②）……419
図版 71　中央部の土器21（土師器③）……420
図版 72　中央部の土器22（土師器④）……421
図版 73　中央部の土器23（土師器⑤）……422
図版 74　中央部の土器24（須恵器）……423
図版 75　中央部の土器25
　　（焼塩土器，中世～近世）……424
図版 76　中央部の石器１（縄文早期①）……425
図版 77　中央部の石器２（縄文早期②）……426
図版 78　中央部の石器３（縄文早期③）……427
図版 79　中央部の石器４（縄文晩期，古代）……428
図版 80　南部の調査１（南部全景，土層）……429
図版 81　南部の調査２（作業風景，出土状況）…430
図版 82　南部の調査３（掘立柱建物跡４，５号）…431
図版 83　南部の調査４（畝状遺構13，土坑）……432
図版 84　南部の調査５（土坑）……433
図版 85　南部の調査６（畝状遺構14，15）……434
図版 86　南部の調査７（畝状遺構15，16）……435
図版 87　南部の調査８（畝状遺構16）……436
図版 88　南部の調査９（畝状遺構17）……437
図版 89　南部の調査10（畝状遺構19）……438
図版 90　南部の調査11（畝状遺構11～17）……439
図版 91　南部の調査12（炭化木，土坑）……440
図版 92　南部の土器１（縄文土器，土師器①）…441
図版 93　南部の土器２（土師器②）……442
図版 94　南部の土器３（土師器③）……443
図版 95　南部の土器４（土師器④）……444
図版 96　南部の土器５（土師器⑤）……445
図版 97　南部の土器６（内黒土師器）……446
図版 98　南部の土器７（墨書土器，線刻土器）…447
図版 99　南部の土器８（須恵器）……448
図版100　南部の土器９（陶磁器），石器 ……449
図版101　現地指導，現地説明会……450

Ⅲ　建山遺跡

第Ⅰ章　調査の経緯 ……307
　第１節　調査に至るまでの経緯 ……307
　第２節　調査の組織 ……308
　第３節　調査の経過 ……309
第Ⅱ章　調査の概要 ……310
　第１節　調査の方法及び層位 ……310
　第２節　縄文時代早期の調査 ……312
　　１　調査の概要 ……312
　　２　遺構 ……312
　　⑴　３号竪穴住居跡 ……312
　　⑵　４号竪穴住居跡 ……323
　　３　遺物 ……325
　　⑴　土器 ……325
　　⑵　石器 ……330
　　４　その他 ……336
　第３節　縄文時代前期の調査 ……337
　　１　調査の概要 ……337
　　２　遺物 ……337
　第４節　縄文時代中期の調査 ……338
　　１　調査の概要 ……338
　　２　遺構 ……338
　　⑴　１号落とし穴 ……338
　　⑵　２号落とし穴 ……338
　　⑶　３号落とし穴 ……340
第Ⅲ章　まとめ ……344
　　１　竪穴住居跡について ……344
　　２　竪穴住居跡の掘り込み面について ……344
　　３　遺物について ……344
　　４　全体を通して ……345

挿　図　目　次

第１図　建山遺跡調査範囲図 ……307
第２図　調査区グリッド図 ……310
第３図　土層断面図 ……311
第４図　３号竪穴住居跡 ……312
第５図　３号竪穴住居跡内遺物出土状況図 ……313
第６図　３号竪穴住居跡内土器別出土状況図 ……314
第７図　Ⅰ類土器・石器出土状況図 ……315
第８図　３号竪穴住居跡内遺物① ……318
第９図　３号竪穴住居跡内遺物② ……319
第10図　３号竪穴住居跡内遺物③ ……320
第11図　３号竪穴住居跡内遺物④ ……321
第12図　３号竪穴住居跡内遺物⑤ ……322
第13図　４号竪穴住居跡 ……323
第14図　４号竪穴住居跡内遺物① ……323
第15図　４号竪穴住居跡内遺物② ……324
第16図　縄文時代早期の土器①（Ⅰ類） ……326

第17図　縄文時代早期の土器②（Ⅰ類）……327
第18図　縄文時代早期の土器③（Ⅰ類）……328
第19図　Ⅱ・Ⅲ類土器出土状況図……329
第20図　縄文時代早期の土器④（Ⅱ・Ⅲ類）……329
第21図　縄文時代早期の石器①……330
第22図　縄文時代早期の石器②……332
第23図　縄文時代早期の石器③……333
第24図　縄文時代早期の石器④……334
第25図　縄文時代早期の石器⑤……335
第26図　集石31号……336
第27図　集石31号周辺遺構配置図……336
第28図　Ⅴa層残存範囲……337
第29図　縄文時代前期の土器……337
第30図　周辺地形と落とし穴配置図……338
第31図　１・２号落とし穴……339
第32図　３号落とし穴……340
第33図　全体遺構配置図（縄文時代早期）……346

表　目　次

第１表　出土土器観察表①……341
第２表　出土土器観察表②……342
第３表　出土土器観察表③……343
第４表　出土石器観察表……343

図　版　目　次

図版１　方形押引刺突文の施文法……345
図版２　遺跡近景……451
図版３　遺物出土状況　地層断面……452
図版４　３号竪穴住居跡……453
図版５　４号竪穴住居跡……454
図版６　落とし穴１号・２号……455
図版７　落とし穴３号……456
図版８　３号竪穴住居跡内土器①……457
図版９　３号竪穴住居跡内土器②……458
図版10　３号竪穴住居跡内土器③……459
図版11　３号竪穴住居跡内土器④……460
図版12　Ⅰ類土器①……461
図版13　Ⅰ類土器②……462
図版14　Ⅰ類土器③　竪穴住居跡内出土石器……463
図版15　Ⅷ層出土石器①……464
図版16　Ⅷ層出土石器②……465
図版17　Ⅱ・Ⅲ類土器　縄文前期土器……466

Ⅳ　西原段Ⅰ遺跡

第Ⅰ章　調査の経緯……347
　第１節　調査に至るまでの経緯……347
　第２節　調査の組織……347
　第３節　調査の経過……348
第Ⅱ章　調査の概要……350
　第１節　調査の方法・概要及び層位……350
　第２節　遺構……352
　　１　土坑……352
　第３節　遺物……353
　　１　土器……353
　　２　石器……354
第Ⅲ章　まとめ……354

挿　図　目　次

第１図　西原段Ⅰ遺跡全体図……349
第２図　調査区グリッド図及びトレンチ配置図…350
第３図　土層断面図……351
第４図　Ⅸ層上面コンタ図と土坑位置図・
　　遺物出土地点……352
第５図　土坑……352
第６図　出土遺物……353

表　目　次

第１表　出土土器観察表……354
第２表　出土石器観察表……354

図　版　目　次

図版１　遺跡遠景　近景　作業風景……467
図版２　遺物出土状況　土坑……468
図版３　トレンチ等調査状況……469
図版４　出土遺物……470

Ⅰ　調査に至るまでの経過と環境

第Ⅰ章　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は，東九州自動車道（志布志ＩＣ～末吉財部ＩＣ）建設を計画し，当該事業区の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育委員会（文化財課）に照会を行った。

これを受けて鹿児島県教育委員会は，平成11年１月に鹿屋串良ＩＣ～末吉財部ＩＣ間を，平成12年２月には志布志ＩＣ～鹿屋串良ＩＣ間の埋蔵文化財の分布調査を実施し，50か所の遺跡（854,100㎡）の存在を報告した。

分布調査の結果を基に，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，鹿児島県土木部高速道対策室，文化財課，県立埋蔵文化財センターの４者で協議を重ね対応を検討してきた。

その後，日本道路公団民営化の政府の方針が提起され，事業の見直しと建設コストの削減も検討され，併せて遺跡の緻密な把握が求められることとなり，詳細な分布調査や試掘調査を実施することとした。

そこで，文化財課と県立埋蔵文化財センターは，平成13年７月10日～７月26日の間，鹿屋串良ＩＣ～末吉財部ＩＣ間の33の遺跡についての詳細分布調査を実施し，平成13年９月17日～12月26日までと，平成13年12月３日～12月25日の間，遺跡の範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

上記の詳細分布調査に加え，既に合意されていた本線及び工事用道路部分，側道部分の確認調査も実施することとなり，関山西遺跡，関山遺跡，狩俣遺跡の３遺跡を平成13年10月１日～平成14年３月22日の間実施した。

平成14年４月には，志布志ＩＣ～鹿屋串良ＩＣ間について再度分布調査を実施し，遺跡面積を678,700㎡と報告した。

その後，日本道路公団の民営化と新直轄方式に基づく道路建設が確定し，平成15年12月に曽於弥五郎ＩＣ～末吉財部ＩＣ間の発掘調査協定書締結により，本格的な発掘調査を実施することとなった。

なお，日本道路公団からの再委託は曽於弥五郎ＩＣまでで終了し，曽於弥五郎ＩＣ～志布志ＩＣまでの先線部は国土交通省からの受託事業となった。

狩俣遺跡の調査は，当初道路公団方式に基づきサービスエリアとして計画され，休憩所や駐車場等を備えた広範な45,900㎡が対象とされたが，新直轄方式の導入により大幅に工事計画が縮小されることとなった。発掘調査は平成17年11月から開始し，情報の少ない部分では確認調査を本調査と平行して実施し，平成19年３月までに終了した。

建山遺跡，西原段Ⅰ遺跡の未調査部分の発掘調査は，平成21年３月から確認調査を本調査と平行して実施し，平成21年５月までに終了した。

第１図　東九州自動車道遺跡位置図

第Ⅱ章　地理的環境

狩俣遺跡，建山遺跡は曽於市大隅町岩川に，西原段Ⅰ遺跡は曽於市大隅町中之内に所在する。曽於市は，鹿児島県の東部を形成する大隅半島の北部に位置し，東側に志布志市，南側に曽於郡大崎町及び鹿屋市，西側に霧島市，北側は都城市と接し，宮崎県との県境に位置している。

北部の財部，末吉市街地は，都城盆地の一角をなし大淀川上流にあたる溝ノ口川，横市川に沿って水田や集落が点在している。中心部の大隅町は，菱田川支流の佳例川，前川，月野川，梅渡瀬川の４河川によって南北に３つの台地に大きく分けられ，これらの河川や支流の小河川に沿って水田が点在し，岩川市街地は菱田川に前川が合流する岩川低地にある。

遺跡の所在する曽於地域を含めた鹿児島県北部から大隅半島北半分にかけての地勢を外観すれば，東西の山地とこれらに挟まれた低地帯から構成されている。東側には志布志湾北部から宮崎県に突出した形で，北から南へ延びている鰐塚山地（鰐塚山1,119m，南那珂山地ともいう）がある。西側は瓶臺山（543m），白鹿岳（604m），陣ヶ丘（430m）と山地が南北に連なり，北東部の都城盆地と南部の肝属平野に傾斜する台地からなっている。そして，この台地間を大淀川の支流である溝ノ口川，横市川が東流し，菱田川の支流である佳例川，前川，月野川が南東に流れる。地質は，大部分がシラス，ボラなどの火山灰土壌となっている。年平均気温は，17.6℃，年間降水量は，約2,230㎜程度である。

狩俣遺跡，建山遺跡，西原段Ⅰ遺跡の３遺跡が所在する大隅町岩川，中之内地区は曽於市のほぼ中央部にあたり，西部の牧ノ原台地から東部の岩川低地に漸移する標高200m～300mの丘陵性台地が卓越する地域である。かつて高隈山地東斜面から鰐塚山地（南那珂山地ともいう）まで広がる地域は一続きのシラス台地を形成していたと思われるが，大淀川水系と菱田川水系に属する諸河川により浸食を受け，小台地群に分断されている。３遺跡はいずれもこうした小台地群に立地している。

狩俣遺跡は，曽於市のほぼ中央部にあたる，西部の牧ノ原台地から東部の岩川低地に漸移する標高約270mの丘陵性台地上に位置する。谷部には志布志湾に注ぐ菱田川の支流である前川が流れ，さらにその支流となる川の開析により北西から南東に延びるやせ尾根上の台地が形成されている。台地の北側と南側に開析する谷により南北方向にさらに，小さな舌状台地が形成されている。谷の底部と遺跡の立地する台地との比高差は約30mである。

建山遺跡は，狩俣遺跡と同じく，大淀川水系と菱田川水系に属する諸河川により浸食を受けた標高約270mの丘陵性台地上に位置している。遺跡の南東側には小さな谷を挟んで同一台地縁辺に狩俣遺跡，高古塚遺跡が所在し，谷底平地を挟んで佐敷台地が広がる。北東側の急峻な谷と南西側の谷に挟まれた台地状に位置し，現地形は圃場整備や土壌改良等により平坦な畑地となっている。

西原段Ⅰ遺跡は，曽於市大隅町中之内の標高約270mの台地状に位置する。谷部には志布志湾に注ぐ菱田川の支流である前川が流れ，さらにその支流となる川の開析によって南東から北西に延びるやせ尾根状の台地が形成されている。台地の北側と南側に開析する谷により，南北はさらに，小さな舌状台地が形成されている。谷の底部と遺跡の立地する台地との比高差は約30mである。

第Ⅲ章　地質的環境

本図幅中にみられる最も古い岩石は，大隅半島の他の地域と同じく，中生界に属するもので，砂岩頁岩の互層よりなる。比較的砂岩部に富んだ急峻な山地を形成し，山体全体の大部分が中生層によって構成されている。西南部の高隈山地では中生層に属する砂岩頁岩の互層を貫いた第三紀中新世の花崗岩がみられる。この花崗岩は風化が著しく，新鮮な露頭はほとんどみられない。これら図幅西側の山地地域では中生界や花崗岩などの基底岩類を覆って溶結凝灰岩，シラスが分布し，局部的に安山岩もみられる。上記すべての岩類を覆って広くローム層が分布するため，平坦部や傾斜の緩やかな斜面ではローム層下位の岩類の露出するところは極めて少ない。

山地地域の東側には広大なシラス台地が広がり，図幅全域のおよそ2/3の面積を占めている。この台地においては，シラスの下位に普遍的に溶結凝灰岩が存在するが，実際に露出しているのは，佳例川，前川，月野川，大鳥川など菱田川上流の本支流の下床部に限られる。同じことがシラスについてもいえ，一般的にはシラスを覆って広くローム層が分布するため直接これが露出するのは，台地を切る河谷の斜面か切り取り面，あるいはかつての崩壊地などである。シラス台地の基底部にも西部の高隈山地を構成する中生界あるいは古第三系に属する固結堆積岩類が全面的に伏在するが，実際には河谷の一部にわずかに露出するか，台地上に島状の小丘を形成して点在するに過ぎない。このシラス下面の中生界と溶結凝灰岩との間には降下軽石層，砂礫層，泥岩層などをはさむことが多い。西部の海岸は大隅半島と鹿児島湾を画するもので，急峻な崖をもって湾内に没し，急傾斜を示しつつ海深200m前後の深度に達する。この斜面は当地域をはじめ大隅半島北部に広く分布するシラスと溶結凝灰岩の大部分が放出された姶良カルデラの東縁を画するカルデラ壁にほぼ相当するものと考えられている。

図幅北西部にはシラス上位に角礫層がみられるほか，最上部にはおもに桜島火山より放出された降下軽石層が数10㎝の厚さで分布し「ボラ」とよばれ農耕上の障害をなしている。

第Ⅳ章　歴史的環境

古代の唐尾遺跡，高古塚遺跡，菅牟田遺跡，中之迫遺跡の立地する場所は，「続日本紀」に日向の国から「贈於」など４郡が分置されたと大隅国分立（和銅６年）の記事に記載されている。律令制下では，日向国諸県郡財部郷に属したとする説が有力である。

中世に島津新立庄としてみえる深川院は財部郷から分立したものと考えられ，大隅国建久図田帳に島津庄の新立庄七五〇丁のうち「深川院百五十余丁」とあり，財部院などとともに保延年間（1135～41）以降の新庄で，近衛家領で惣地頭は中原親能（島津忠久とも），国務に従わなかったと記されている。

また，中世に入ると延文元年(1356)８月６日の「足利義詮袖判安堵下文」（島津家文書）に大隅国本庄内として「岩河村」の名があり，島津貞久に安堵されている。この地は菱田川上流の右岸一帯を中心とし，現曽於市大隅町岩川から同市末吉町南西部にわたる地に比定される。

近世に入ると，文禄３年(1594)８月に北郷忠虎領内として末吉など15カ所・六万九千石の検地が

行われている（「北郷忠虎譜」旧記雑録）。庄内の乱（1599）後，島津氏の直轄領となり外城の一つとして末吉郷が置かれ７か村が属した。それぞれの遺跡の所在する村は，唐尾遺跡が諏訪方村，高古塚遺跡は中之内村，菅牟田遺跡，中之迫遺跡は五拾町村である。

中之内村の梶ヶ野には鹿児島藩が末吉野牧といわれる馬牧を置き，その領域は西側の坂元村に及び福山野牧と隣り合っていた。中之内村と五拾町村は，島津氏家老職伊勢家の私領となったが，戊辰戦争後岩川郷として独立（1869）した。

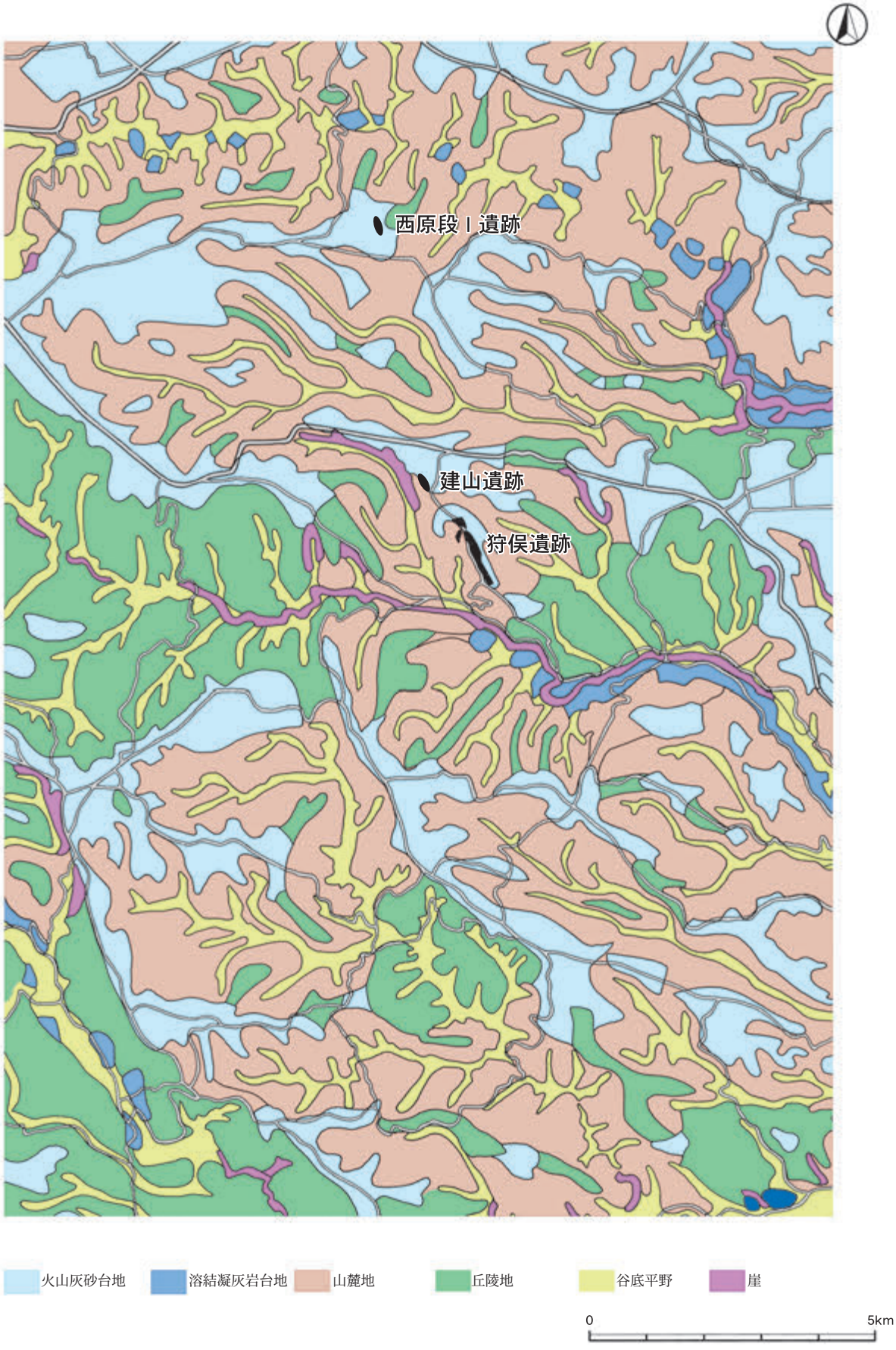
当地は，明治４年の廃藩置県後７月に鹿児島県，同年11月に都城県に属し，同６年鹿児島県に編入された。同20年東囎唹郡の管轄となり，同22年町村制の施行に伴い，末吉村，岩川村が成立。同29年成立の囎唹郡に属し，末吉村が大正11年町制施行して末吉町に，岩川村が同13年町制を施行して岩川町となり，昭和30年に岩川町・恒吉町・月野村が合併し大隅町となり，同年４月に荒谷地区を編入し，平成17年に財部町・末吉町・大隅町が合併し曽於市となった。

遺跡の所在する曽於市末吉町と大隅町の考古学的発掘調査は，末吉町では1930年に鳥井竜蔵博士による姥石（住吉神社）の調査が行われた。本格的な調査は，1963年に河口貞徳氏により入佐遺跡が，1969年には中岳洞穴遺跡が発掘され，それぞれ縄文時代晩期の入佐式土器などの標識遺跡となった。平成８年から東九州自動車道建設（曽於弥五郎ＩＣ～国分ＩＣ）に伴う大規模な発掘調査が行われ，桐木耳取遺跡，関山西遺跡，関山遺跡では旧石器時代から近世にかけての遺構，遺物が確認された。

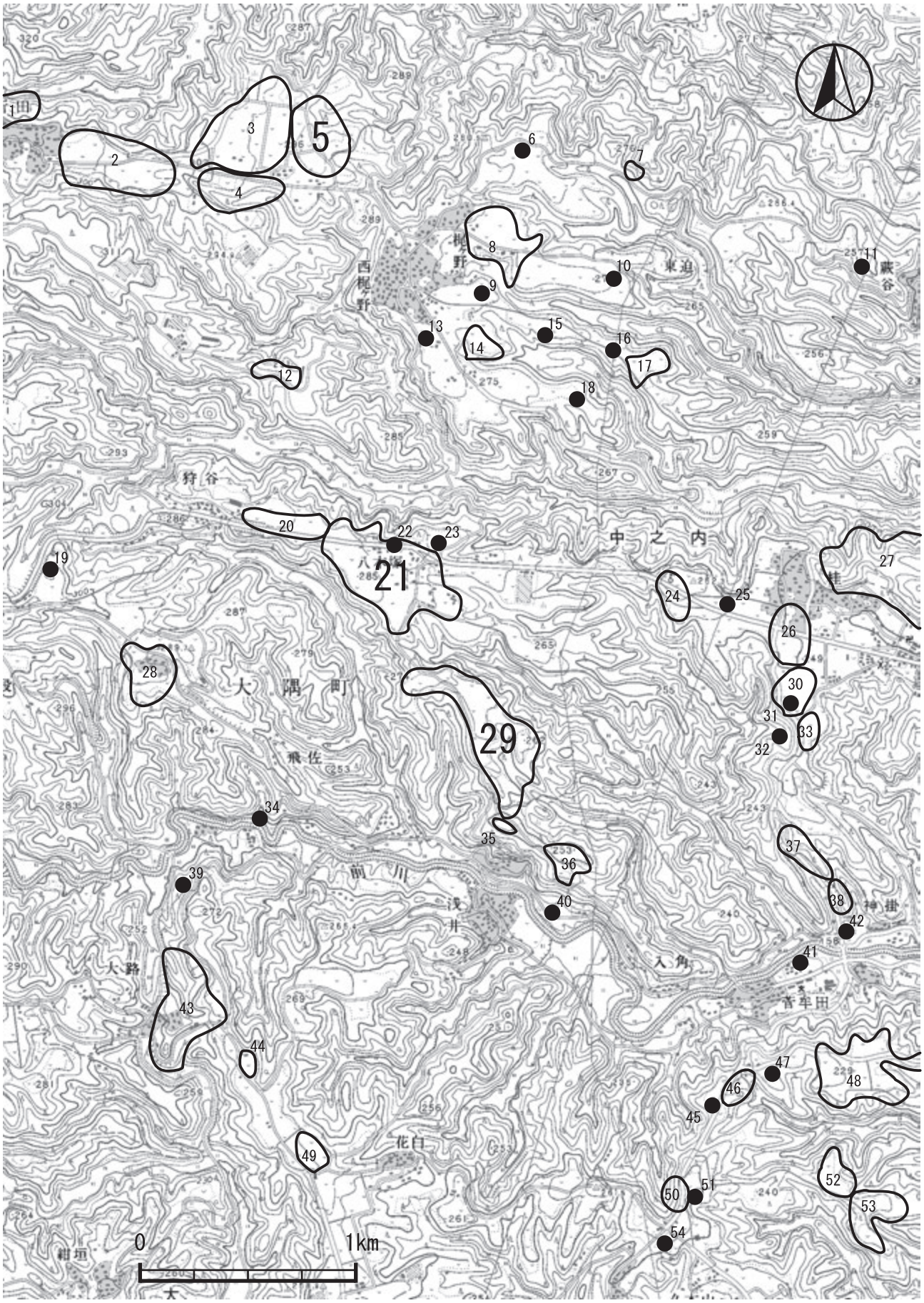
大隅町では1956年に同志社大学の酒詰仲男博士が行った上八合遺跡の発掘調査である。調査では，縄文時代の遺物が出土したといわれている。その後，本格的な発掘調査は長く行われていなかったが，平成４年以降からは町教育委員会が調査主体となって各種農業基盤整備に伴う発掘調査が実施され，鳴神遺跡（縄文時代晩期），宮田遺跡（縄文時代早期），炭床Ⅰ遺跡（縄文時代早期，平安時代），川路山遺跡（縄文時代後期），向ノ段・大丸・小迫遺跡（縄文時代早期，後期），立馬遺跡（縄文時代早期）などの発掘調査が実施されたが，調査結果の報告は概報がほとんどであるために詳細な内容は不詳である。平成11年には，県道改良事業に伴い出水平遺跡の発掘調査が行われ，縄文時代早期，晩期，弥生時代前期の遺物が出土し遺構では縄文時代早期の集石が８基検出された。中でも特筆するものは縄文時代早期の耳栓状土製品が出土している。平成13年から東九州自動車道建設（曽於弥五郎ＩＣ～末吉財部ＩＣ）に伴う大規模な発掘調査が行われ，旧石器時代から近世までの遺構，遺物が確認された。

参考文献

1 「土地分類基本調査－岩川」国土調査1972
2 「出水平遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書（43）
3 「九養岡遺跡・踊場遺跡・高篠遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書（36）
4 「桐木耳取遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書（91）
5 「末吉町郷土史」
6 「大隅町郷土史」
7 「鹿児島県風土記」芳　即正・塚田公彦編　旺文社
8 「鹿児島県の地名」日本歴史地名大系47　平凡社
9 「関山西遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書（126）
10 「唐尾遺跡・高古塚遺跡・菅牟田遺跡・中之迫遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書（127）



第２図　遺跡周辺地形分類図



第３図　周辺遺跡図

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡台帳番号	遺跡名	所在地	地形	時　代	遺物等	備　考
1	63-36-0	前畑段	曽於市大隅町中之内前畑段	丘陵	縄文(後)	岩崎上層式	
2	63-101-0	東原	曽於市大隅町中之内東原	台地	縄文(早～晩)，弥生，奈良，平安	縄文土器･土師器･打製石斧(半欠)･鉄滓	
3	63-57-0	西原段Ⅱ	曽於市大隅町中之内西原段	台地	縄文	縄文土器	
4	63-186-0	峯段	曽於市大隅町中之内峯段	台地	縄文，平安	土器・土師器	町埋文報(16)
5	63-27-0	西原段Ⅰ	曽於市大隅町中之内西原段	台地	縄文(後)	岩崎上層式	**本報告書** 県埋文報(139)
6	63-99-0	ノトロ	曽於市大隅町中之内ノトロ	台地	縄文(晩)	縄文土器・局部磨製石斧・敲石	
7	63-206-0	谷川内	曽於市大隅町中之内谷川内	丘陵	奈良～平安	土師器	
8	63-115-0	打込	曽於市大隅町中之内打込	台地	弥生，歴史	土師器	
9	63-142-0	前岡	曽於市大隅町中之内前岡	台地	歴史	土師器	
10	63-95-0	わらび堂	曽於市大隅町中之内わらび堂	台地	縄文(晩)	縄文土器・頁岩剥片	
11	63-146-0	蕨谷	曽於市大隅町中之内蕨谷	丘陵	縄文(早)，歴史	小片のため時代不明	
12	63-252-0	野鹿倉	曽於市大隅町中之内野鹿倉	台地	縄文	土器	県埋文報(139)
13	63-141-0	前畑	曽於市大隅町中之内前畑	台地	縄文，歴史	須恵器	
14	63-40-0	中崎迫	曽於市大隅町中之内中崎迫	台地	縄文(晩)，歴史	土師器	
15	63-143-0	重ヶ迫	曽於市大隅町中之内重ヶ迫	台地	古代	土師器	
16	63-144-0	重吉迫Ⅰ	曽於市大隅町中之内重吉迫	台地	古代	土師器・黒色土器	
17	63-28-0	重吉迫Ⅱ	曽於市大隅町中之内重吉迫	台地	縄文(後)，古代	土師器	
18	63-145-0	高尾迫	曽於市大隅町中之内高尾迫	台地	歴史	土師器	
19	63-17-0	観音段	曽於市大隅町中之内4300	台地	縄文(早)	石皿	
20	63-29-0	狩谷	曽於市大隅町中之内狩谷	台地	縄文(後)		
21	63-253-0	建山	曽於市大隅町中之内建山	台地	旧石器，縄文，古墳	土器	**本報告書** 県埋文報(139)
22	63-187-0	八木塚	曽於市大隅町中之内八木塚	台地	中世	墳丘(消滅)	
23	63-102-0	柿木渡	曽於市大隅町中之内柿木渡	台地	縄文	石錘(５例)	
24	63-213-0	一里山	曽於市大隅町中之内一里山サセフ	台地	縄文(早)	前平式・塞ノ神式	
25	63-166-0	一里山	曽於市大隅町中之内一里山・二本杤	台地	縄文(晩)，歴史	土師器・青磁	
26	63-239-0	尾ノ迫	曽於市大隅町中之内桂	台地	縄文，中世，近世	土器・石器・陶磁器	町埋文報（21）
27	63-168-0	手取城跡	曽於市大隅町中之内手取・陣之元	丘陵	中世，近世		「日本城郭体系」18,町埋文報(15)
28	63-16-0	赤松迫	曽於市大隅町大谷赤松迫	台地	縄文(早)	石坂式	
29	63-254-0	狩俣	曽於市大隅町岩川狩俣	台地	縄文，古代	土器・石器	**本報告書**
30	63-240-0	吹切段Ａ	曽於市大隅町中之内西笠木	台地	縄文，中世，近世	土器・石器・陶磁器	町埋文報(21)
31	63-41-0	吹切段Ⅰ	曽於市大隅町中之内吹切段	台地	縄文(晩)	布目文	「大隅町誌」
32	63-118-0	吹切段Ⅱ	曽於市大隅町中之内吹切段	台地	縄文(早・晩)，弥生，奈良，平安，中世	弥生土器	
33	63-241-0	松ヶ迫田	曽於市大隅町中之内笠木	台地	縄文	土器・石器	町埋文報(21)
34	63-152-0	宗ノ段	曽於市大隅町大谷宗ノ段	丘陵	歴史	土師器	
35	63-234-0	入角	曽於市大隅町岩川入角	台地	古墳？	墳丘？	
36	63-255-0	高古塚	曽於市大隅町岩川高古塚	台地	古墳，古代	土器	県埋文報(127)
37	63-52-0	松ヶ迫田	曽於市大隅町中之内松ヶ迫田	台地	縄文(早･後･晩)，歴史	縄文土器	
38	63-242-0	長迫Ａ	曽於市大隅町中之内神掛	段丘	縄文，中世，近世	土器・陶磁器	町埋文報(21)
39	63-174-0	宮田	曽於市大隅町大谷宮田	丘陵	縄文	炭化物・鉄滓	
40	63-61-0	浅井	曽於市大隅町岩川向上・仮屋ヶ段	丘陵	縄文	石斧・敲石	「大隅町誌」
41	63-136-0	光神免	曽於市大隅町岩川2828-3	丘陵	古墳	土師器	削平を受けているが墳丘らしきものが残存
42	63-119-0	長迫	曽於市大隅町中之内長迫	丘陵	縄文(晩),弥生,歴史	石斧・敲石・土師器	
43	63-190-0	愛宕山墓跡	曽於市大隅町長江字大路他	丘陵	中世(南北朝～戦国末)		県埋文報(29)
44	63-211-0	吹谷迫	曽於市大隅町大谷2428-4	台地	縄文	土器片	
45	63-156-0	菅牟田	曽於市大隅町岩川菅牟田	丘陵	縄文，奈良，平安	土師器	県埋文報(127)
46	63-243-0	菅牟田Ａ	曽於市大隅町岩川菅牟田	山腹	縄文，中世，近世	土器・陶磁器	町埋文報(21)
47	63-43-0	イチノ木	曽於市大隅町岩川イチノ木・前畑上	台地	縄文(晩)		
48	63-44-0	上山	曽於市大隅町岩川上山	台地	縄文(晩)，歴史		
49	63-212-0	船窪	曽於市大隅町岩川船窪	台地	縄文，古墳，平安～近世	土師器	町埋文報(９)
50	63-244-0	井手山Ａ	曽於市大隅町岩川久木山	台地	縄文(早)，近世	土器・石器・陶磁器	報告書有
51	63-62-0	井手山	曽於市大隅町岩川井手山・定塚	台地	縄文，歴史	土師器	
52	63-2-0	定段	曽於市大隅町岩川定塚・入佐	台地	旧石器，縄文(早)，歴史	前平式・塞ノ神式・土師式	H15年，16年，17年発掘調査
53	63-63-0	稲村	曽於市大隅町岩川稲村	丘陵	縄文		H15年，17年発掘調査
54	63-70-0	久木山	曽於市大隅町岩川麦ヶ迫	台地	縄文	敲石・石皿・石斧	「大隅町誌」

第Ⅴ章　層位

狩俣遺跡，建山遺跡，西原段Ⅰ遺跡の基本層位は，層厚は遺跡により異なるが，曽於市末吉町諏訪方に所在する桐木耳取遺跡の基本層位と一致する。

桐木耳取遺跡は，南九州における霧島，姶良カルデラ，桜島，喜界カルデラ等からの噴出物が遺跡の相対的年代を推定する上で非常に良好な資料となっている。３遺跡の基本土層については，第４図の基本土層柱状模式図の通りである。また，姶良カルデラ噴出物で形成されたシラス台地は，場所により数百mの厚さに及ぶため，遺跡の発掘はシラス堆積層上面が限界となっている。

以下に各基本層位について順に述べるが，狩俣遺跡，建山遺跡，西原段Ⅰ遺跡それぞれの土層の残存状況，遺物包含層などについては，各遺跡ごとに本文で詳細に述べる。

第４図　基本土層柱状模式図

Ⅰ層　　暗褐色土　現表土

Ⅱ層　　黄白色軽石層　桜島を噴出源とした軽石層で，通称文明ボラと呼ばれている。ボラとは俗称で，軽石を指している表現である。西暦1471年（室町時代）に噴出されたことが文献により判明している。曽於市大隅町付近では，平均10～20㎝の堆積が確認されるが，曽於市北部よりは比較的層厚が薄くなっている。ボラの持つ保湿性の低さが耕作には不向きなことから，戦前はボラ抜きと呼ばれる人力による軽石の除去作業が行われ，近年は大型機械による整備が行われてきている。なお，ボラ抜きにより取り除かれ積み上げられた軽石はボラ塚と呼ばれ，あちこちに点在している。

Ⅲａ層　黒色土　粒の小さな土質で，腐植が発達している。主に古代～中世の遺物包含層である。

Ⅲｂ層　黒褐色土　主に縄文時代晩期～古代の遺物包含層である。

Ⅳａ層　黄褐色土　霧島御池火山灰の二次堆積層に相当する。主に縄文時代中期～晩期の遺物包含層である。

Ⅳｂ層　黄褐色細粒軽石混硬質土　霧島御池火山灰層（約4,600年前）に相当する。主に縄文時代中期～晩期の遺物包含層である。

Ⅴａ層　暗橙色土　鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰の二次堆積土で，縄文時代前期～中期の遺物包含層である。

Ⅴｂ層　黄橙色軽石混火山灰層　鬼界カルデラ起源の火山灰層で通称アカホヤ火山灰（約7,300年前）と呼ばれている。下位に赤橙色の火山豆石の体積が見られる。遺跡全体に安定して堆積している。

Ⅵａ層　黄褐色軽石混茶褐色土　Ⅵｂ層（桜島Ｐ11）の二次堆積土であり，縄文時代早期の遺物包含層である。

Ⅵｂ層　黄褐色軽石層　桜島起源のＰ11（約8,000年）下部に黄色や黄褐色軽石が堆積し，場所により厚い堆積も見られる。

Ⅶ層　　明茶褐色土　縄文時代早期の遺物包含層である。

Ⅷ層　　黒褐色土　桜島起源のＰ13（約10,600年）が点在している。縄文時代早期の遺物包含層である。

Ⅸ層　　黄白色砂粒硬質土　桜島起源のＰ14（薩摩火山灰　約12,800年前）ほぼ全域に20～30㎝程度堆積しており，上位は固結した火山灰，下位は３㎜前後の軽石で構成され，縦方向にクラックが発達しブロック状の堆積を成す。

Ｘ層　　黒褐色粘質土　桐木耳取遺跡では細石刃文化期～縄文時代草創期の遺物包含層となっている。

Ⅺ層　黄橙色粘質土　シラスの二次堆積土　桐木耳取遺跡では細石刃文化期の遺物包含層となっている。

Ⅻ層　暗茶褐色粘質土　硬質のブロックが混ざる弱粘質土で，桐木耳取遺跡では細石刃文化期の遺物包含層となっている。

ⅩⅢ層　黄褐色軽石混弱粘質土　ローム層の中に白い細粒なパミスが部分的に点在する。桐木耳取遺跡では台形石器や小型ナイフ形石器を主体とする後期旧石器時代ナイフ形石器文化期の遺物包含層となっている。

ⅩⅣ層　暗赤褐色硬質土　赤褐色をした桜島起源のＰ15（時代未定）が点在する。桐木耳取遺跡では後期旧石器時代ナイフ形石器文化期の遺物包含層となっている。

ⅩⅤ層　暗青灰色硬質土　硬質のローム層で，桐木耳取遺跡では後期旧石器時代ナイフ形石器文化期の遺物包含層となっている。

ⅩⅥ層　明褐色硬質土　径５～10㎜程度の赤褐色を呈した桜島Ｐ17（約26,000年前）が点在する。桐木耳取遺跡では中部から下部に剥片尖頭器や台形石器等で構成する後期旧石器時代ナイフ形石器文化期の遺物包含層となっている。

ⅩⅦ層　黄白色砂質土　上位はローム質，下位は砂質の状態である。桐木耳取遺跡では大型剥片尖頭器等の良好な資料が出土している。

ⅩⅧ層　明黄白色砂質土　姶良カルデラ（約26,000～29,000年前）を噴出源とする。通称シラスと呼ばれ，入戸火砕流堆積物でありＡＴと表示される遺跡の基盤層である。

（参考文献：町田洋・新井房夫「新編火山灰アトラス」）

Ⅱ　狩俣遺跡

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　調査の概要と経緯

本遺跡の確認調査は，平成13年度と平成17年度に実施し，平成13年度は遺跡の北側部分を，17年度は国土交通省所管による実施計画に基づいている。

平成13年当時，平成14年１月～３月の間，日本道路公団の実施計画（４車線，パーキングエリア予定地の対象面積45,900㎡，第２図参照）に基づいて実施した。その結果，急崖を成す谷部の斜面を利用した畝状遺構が発見され，一方，平坦面を成す台地のほぼ全域には縄文時代早期の遺構・遺物が良好に残存することが確認された。

平成16年，道路公団民営化の閣議決定による道路建設の全面凍結が実施されたが，その後，国土交通省主導による新直轄方式での道路建設を継続することとなった。その間，４車線は２車線に，パーキングエリア建設中止等の工事計画の大幅な縮小・見直しが行われることとなり，調査対象面積は23,460㎡となった。（第２図下参照）

上記を受け，平成16年，国土交通省九州整備局，西日本高速道株式会社，鹿児島県知事による新直轄方式施工に伴う確認書締結が行われた。

平成17年度は，11月以降に計画変更に基づき主として台地の中心部から南斜面の東端を対象に40ヶ所のトレンチを設定し確認調査を行った。平行してセンターライン上を軸に調査区（グリッド）を設定し，西側の谷斜面に展開している畝状遺構とＪ～Ｌ－16～22区の本調査を実施した。

平成18年度は，17年度実施分を除く台地部と南部斜面について本調査を実施し，畝状遺構の調査を中心に縄文時代早期～近世までの調査を行い，平成19年３月までに全ての調査を終了している。

確認調査及び本調査の概要については，第３節，第４節で詳細に記録している。

なお，平成13年度の確認調査範囲については，本調査から除外された部分が含まれるが，今後の土地利用状況によっては，発掘調査の必要性を含め，慎重な取り扱いが要求されることから，その成果を記載する。

第２節　調査の組織

【平成13年度（確認調査）】

事業主体者	日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所		
	鹿児島県土木部高速道路対策室		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	県立埋蔵文化財センター	所長	井上　明文
調査企画	〃	次長兼総務課長	黒木　友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東　晃一
	〃	課長補佐	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	彌榮　久志

調査企画	県立埋蔵文化財センター	主任文化財主事	長野　眞一
調査担当	〃	文化財主事	岩澤　和憲
	〃	文化財主事	山崎　省一
	〃	文化財主事	桑波田武志
事務担当	〃	総務係長	前田　昭信
	〃	主事	栗山　和己

【平成17年度（確認調査・一部本調査）】

事業主体者	西日本高速道路株式会社鹿児島工事事務所		
	鹿児島県土木部高速道路対策室		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	県立埋蔵文化財センター	所長	上今　常雄
調査企画	〃	次長兼総務課長	有川　昭人
	〃	次長兼調査第一課長	
	〃	兼南の縄文調査室長	新東　晃一
	〃	調査第二課長	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	彌榮　久志
調査担当	〃	文化財主事	平木場秀男
	〃	文化財主事	永濱　功治
	〃	文化財調査員	佐藤　真人
事務担当	〃	主幹兼総務係長	平野　浩二
	〃	主事	福山恵一郎

【平成18年度（本調査）】

事業主体者	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
	鹿児島県土木部高速道路対策室		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	県立埋蔵文化財センター	所長	上今　常雄(4～7月)
	〃	〃	宮原　景信(8～3月)
調査企画	〃	次長兼総務課長	有川　昭人
	〃	次長兼南の縄文調査室長	新東　晃一
	〃	調査第二課長	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	彌榮　久志
調査担当	〃	文化財主事	平木場秀男
	〃	文化財主事	楸田　岳志
	〃	文化財主事	田畑　哲治(2～3月)
	〃	文化財研究員	長﨑慎太郎

調査担当	県立埋蔵文化財センター	文化財調査員	佐藤　真人
事務担当	〃	総務係長	寄井田正秀
	〃	主事	五百路　真
現地指導者	別府大学文学部	教授	飯沼　賢司
	鹿児島大学農学部	〃	浜崎　忠雄
	〃	〃	佐々木　修

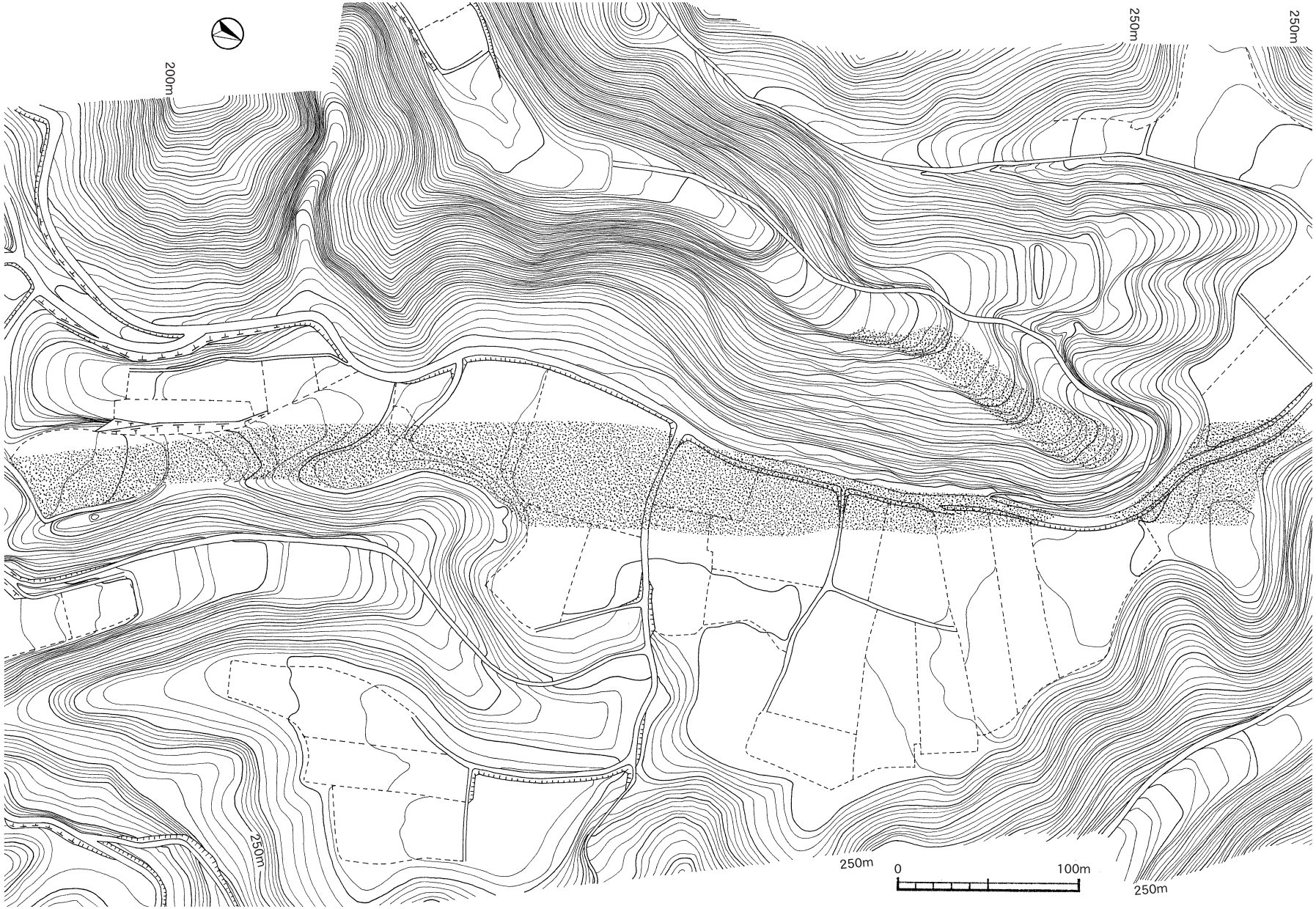
【平成20年度（報告書作成）】

事業主体者	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
作成統括	県立埋蔵文化財センター	所長	宮原　景信
作成企画	〃	次長兼総務課長	平山　　章
	〃	次長兼南の縄文調査室長	池畑　耕一
	〃	調査第二課長	彌榮　久志
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	中村　耕治
作成担当	〃	文化財主事	平木場秀男
	〃	文化財調査員	岩元　康成(4～10月)
	〃	文化財調査員	岩下　直樹(11～3月)
事務担当	〃	総務係長	紙屋　伸一
	〃	主査	五百路　真
遺物指導者	ラ・サール学園	教諭	永山　修一
	鹿児島大学法文学部	准教授	本田　道輝

【平成21年度（報告書作成）】

事業主体者	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
作成統括	県立埋蔵文化財センター	所長	山下　吉美
作成企画	〃	次長兼総務課長	齊藤　守重
	〃	次長兼南の縄文調査室長	青﨑　和憲
	〃	調査第二課長	彌榮　久志
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	長野　眞一
作成担当	〃	文化財主事	平木場秀男
	〃	文化財主事	楸田　岳志
事務担当	〃	総務係長	紙屋　伸一
	〃	主査	髙﨑　智博
企画担当者	〃	文化財主事	永濱　功治
報告書作成指導委員会	平成21年12月２日　青﨑次長ほか　２名		
報告書作成検討委員会	平成21年12月11日　山下所長ほか　９名		
遺物指導者	福岡大学人文学部	教授	桃崎　祐輔

図版１　上空から見た狩俣遺跡周辺



第１図　狩俣遺跡周辺地形図

第３節　確認調査

１　平成13年度

平成13年度は，遺跡の北側部分を中心に実施した。台地部は任意の方向で４ｍ×８ｍを10カ所，谷部には２ｍ×４ｍを15カ所，計25カ所トレンチを設定し調査を行った。調査は各トレンチとも表土は重機で除去し，その後は人力による掘削を行った。調査前の現地は，台地部の大半が畑地であり，谷部にかけて山林が広がっていた。

その結果，17カ所のトレンチで遺物・遺構が確認された。谷部では，斜面を利用した畝状遺構が広範囲に確認され，文明ボラに覆われ，削平や撹乱を受けていないことから，谷部全体に残存すると予想される。なお，谷部で下層確認を実施したが，それぞれの層が非常に厚く堆積し，急傾斜地であることから，古代以前の包含層は存在しないと判断した。

台地部は畑地整備により削平を受けていたが，部分的に縄文晩期～古代の遺物が確認された。北側の台地部全体から前平式土器，石坂式土器，下剥峯式土器，押型文式土器など縄文時代早期の遺物が出土した。遺構は，落とし穴や集石，住居跡，土坑などが良好に残存していた。特に23トレンチでは，遺構の密度が高く遺物量も多いことから，縄文時代早期の中心地域が近いのではないかと予想される。

検出された遺構の中で，調査終了したものについてこれより掲載する。なお，確認調査では検出のみで止め，先送りしたものが多数ある。この後，計画変更に伴い本調査範囲外となってしまったため，そのまま埋め戻されているのが現状である。

⑴　２トレンチ（第３～７図）

２トレンチでは，北側の台地部からIX層上面で落とし穴が３基検出された。落とし穴は，略南北方向に約３m間隔で並んで位置しており，いずれも埋土はＰ13をやや多く含む黒褐色土（Ⅷ層）が主体である。埋土及び周辺からはⅠ類の土器を中心に85点，石鏃などの石器が10点，計95点の遺物が出土しているが，その中から土器27点，石器５点を図化し，北部の遺物として掲載した。一方，南側の斜面部からは，Ⅱ層（文明ボラ）覆われるような状態で畝状遺構が検出された。

落とし穴（第３～５図）

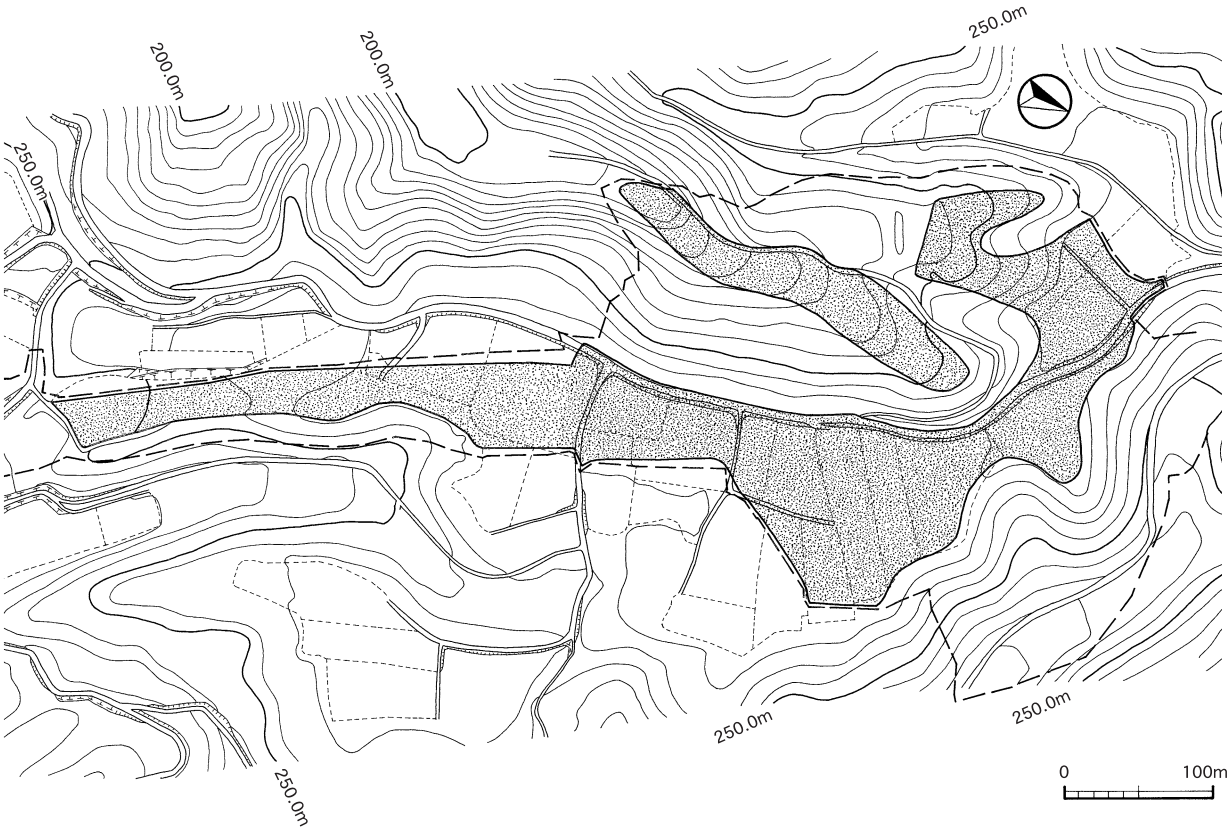
台地部のIX層上面で落とし穴が３基検出された。南側の谷へ向かって，主軸の向きはそれぞれ異なるが，北東から南西方向にほぼ３m前後の間隔で並んでいる。位置的に八つ手状に伸びた台地の先端部にあたることから，狭くなった台地を横切るように作られた落とし穴群の一部と考えられる。

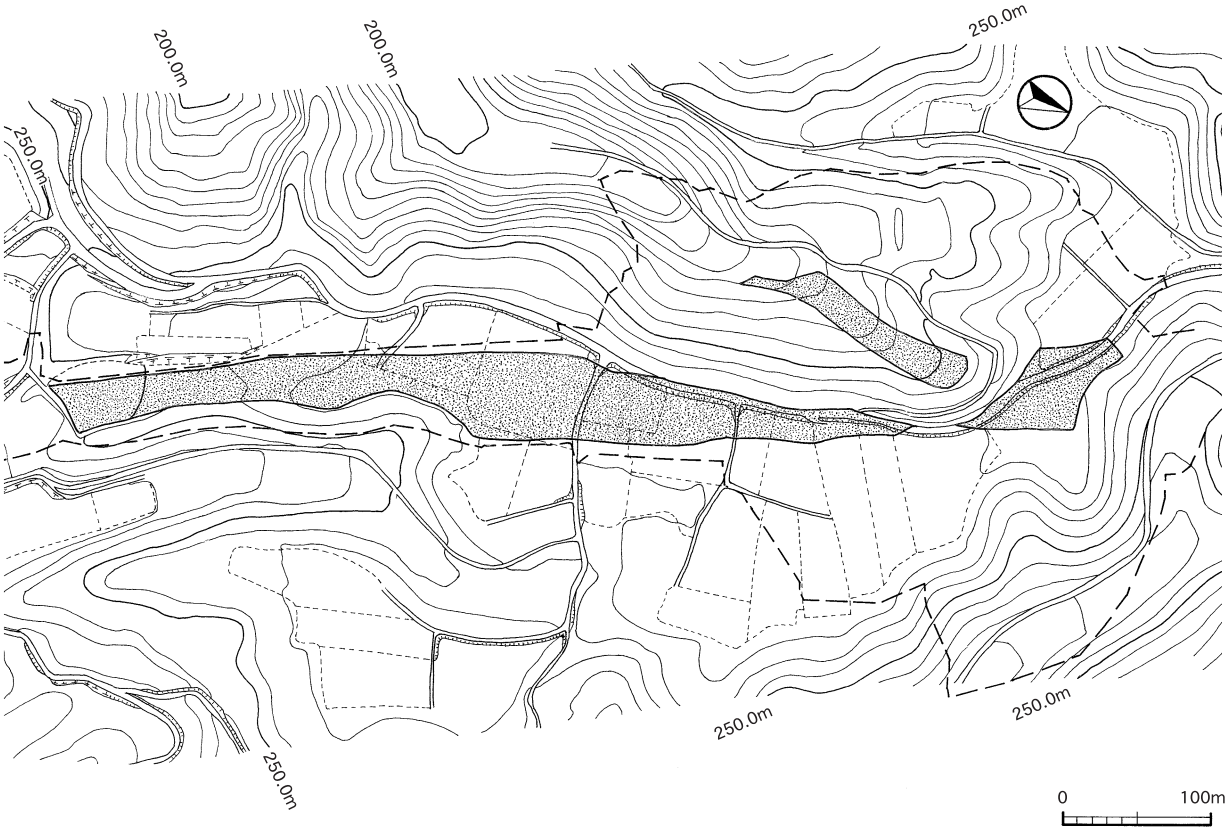
これより３基ある落とし穴の中で，未調査の３号を除く１，２号について詳しく掲載する。

落とし穴１号（第３，５図）

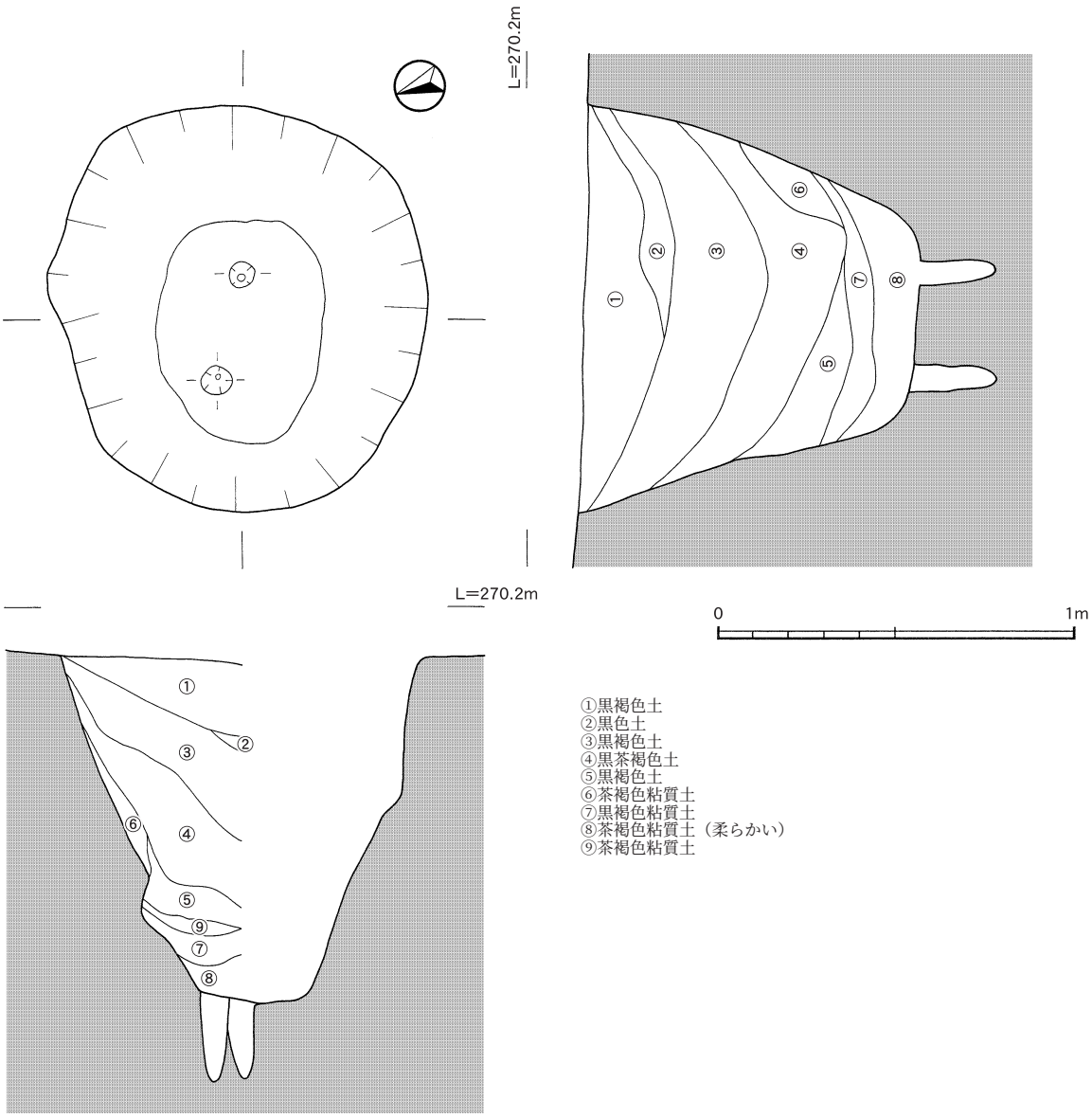
両側を谷で挟まれた台地のほぼ中央部で検出された。平面形は，ほぼ円形に近い形を呈している。長径×短径は117㎝×104㎝，深さは検出面から床面まで92㎝である。壁面は斜めに立ち上がる形状で，平坦な床面に小ピットを２つ検出した。両方とも床面中央の長軸方向に30㎝離れて位置し，深さ約20㎝で垂直にすぼまる形状であることから，逆茂木痕であると思われる。

埋土は，上部にＰ13を多く含んだ黒褐色土が主体となり，下部は黒褐色土と茶褐色土が交互に薄く堆積している。下部に薩摩火山灰の小ブロックが少量見られるが，壁面が崩れ落ちたものと思われる。





第２図　平成13年度，17年度調査範囲図



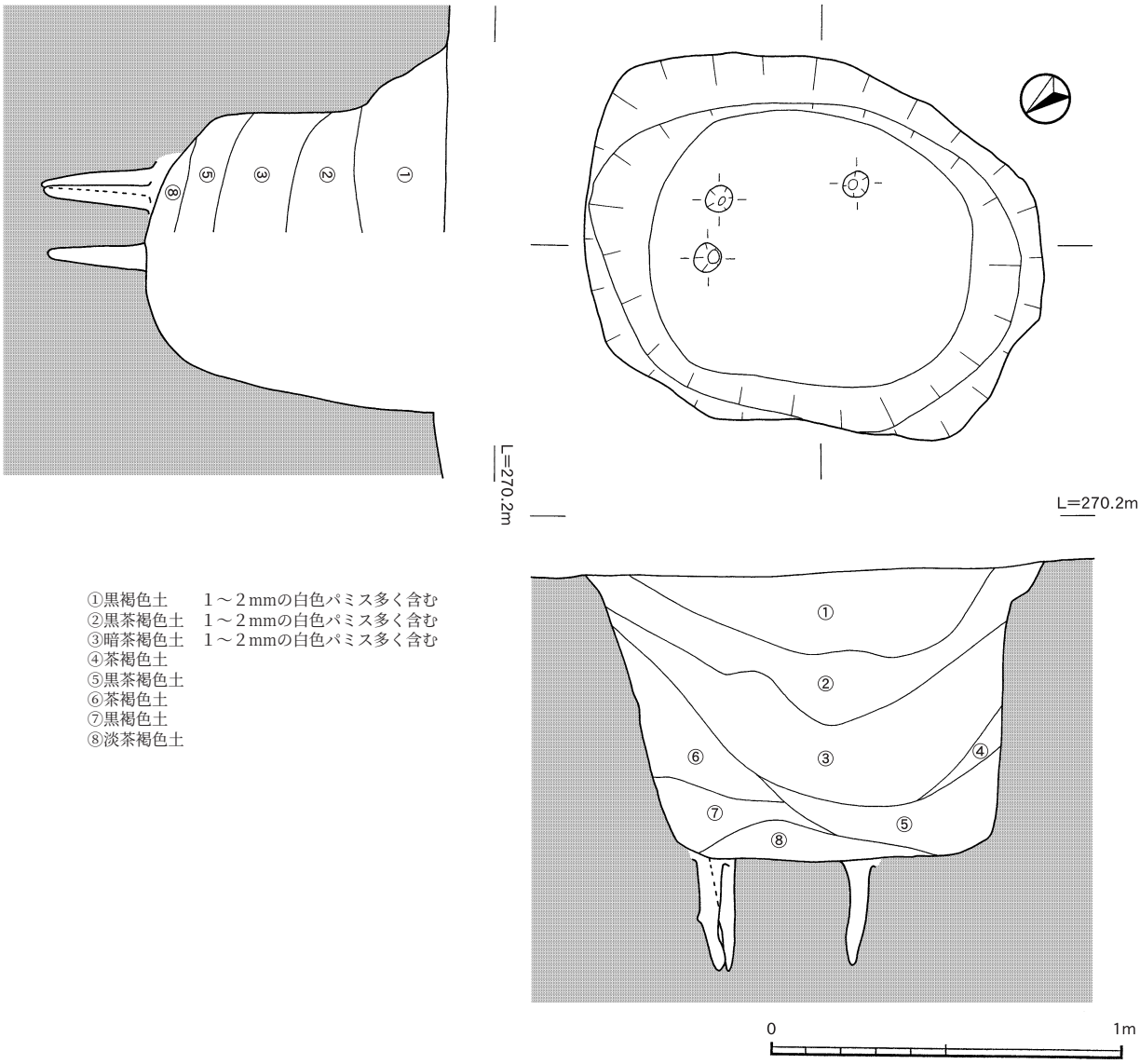
第３図　２Ｔ　縄文時代中～後期　落とし穴１号

落とし穴２号（第４，５図）

落とし穴１号から南西方向に約３m離れた平坦面で検出された。平面形は，やや東西方向に主軸を持つ方形に近い楕円形を呈している。長径×短径は130㎝×103㎝，深さは検出面から84㎝である。壁面はほぼ垂直に立ち上がる形状で，広めの平坦面を持つ床面に小ピットを３つ検出した。床面の西側に集中しており，径が約８㎝，深さ30㎝前後で垂直にすぼまる形状であることから，逆茂木痕であると思われる。埋土は，上部にＰ13を多く含んだ黒褐色土が主体となり，下部は茶褐色土が主体である。１号と同じく下部に壁面が崩れ落ちたものと思われる薩摩火山灰が少量見られる。

落とし穴３号（第５図）

落とし穴２号から南西方向に約３m離れた平坦面で検出された。平面形は，南北方向に主軸を持つ楕円形を呈し，長径×短径は120㎝×55㎝である。床面までの深さ，断面形，小ピットの有無など，詳細については未確認である。



第４図　２Ｔ　縄文時代中～後期　落とし穴２号

畝状遺構１（第５，６図）

トレンチの南側の畝状遺構は，台地を形成する急傾斜面で検出している。

検出された畝状遺構は，黒色土のⅢａ層に構築されたものである。遺構発見のきっかけは，遺構の上位に文明年間に桜島から噴出した軽石（通称文明ボラ）が被覆していることが起因となる。すなわち，個々の畝は被覆する軽石やその後の堆積物で押しつぶされ凸部が見あたらず，畝と畝の間の「畝間」の凹に軽石が安定して堆積することから検出が可能となる。この急斜面に発見された遺構は，畝方向を東西に，階段状に規則性を持って形成されていた。

畝の長さは１～2.3m，幅30㎝程度を基本に，それぞれは長楕円形を呈している。東側の列は，長さ４m弱，畝間の中心間は70～80㎝前後が多く，幅は55㎝前後のものが多い。西側の列は，長さ２m強，畝間の中心間は10～38㎝前後とばらつきが多い。幅は40㎝前後のものが多く，東側の列よりもやや小さめとなっている。これらの畝間は企画性を成して南北方向に整然と並ぶことが観察で

き，当時の営農意識を認識できる。

埋土のほとんどは文明ボラであるが，一次堆積物（１～２㎝大の軽石）と二次堆積物（砂粒大の軽石），細粒な黒色土がブロック状に混在している。斜面に位置し，上位に一次堆積物が多く含まれ，小規模な堆積を繰り返した痕跡が見られる。

正確な範囲は部分的な調査のため不明であるが，南側斜面のほぼ全域に広がると推測される。台地部についても，削平前の地形の状態次第では北側にも延びる可能性がある。

⑵ **23トレンチ**（第７～14図）

23トレンチでは，畑地整備による撹乱のため，縄文時代早期以降の遺物包含層は残されていない。確認できる遺構は縄文時代早期に限られ，集石遺構２基，土坑51基，竪穴住居跡が１基である。遺物はトレンチ内から土器片268点，石器46点の総数314点で，今回は土器96点，石器22点を図化し掲載した。後述するがⅠ類土器が主体を占め，Ⅱ類，Ⅴ類土器もわずかであるが見られる。

遺構が密集し，出土遺物も多いことから，縄文時代早期の集落の一端を検出したと推測できる。

集石遺構（第８，12図）

集石は，やや大型の土坑３～６号周辺で２基検出された。Ⅷ層で検出され土坑に隣接していることから，ほぼ同時代に使用されていた可能性が高い。どちらも集石の範囲内からの遺物出土はみられないが，周囲の出土状況からⅠ類土器の頃のものと考えられる。

集石１号（第８，12図）

土坑４の東側で検出された。礫数は９個と少なく，１ｍ×50㎝の範囲に散在した状態で検出された。石材は拳大の安山岩がほとんどであり，加熱を受け破砕礫も認められる。礫群下位に掘り込みは認められなかった。

集石２号（第８，12図）

土坑５の東側で検出され，集石１号との距離は約３ｍである。礫数は15個で，検出面は集石１号よりも下位であり，やや時期差があると思われる。40×30㎝の範囲にまとまった状態で検出された。石材は４～７㎝大の安山岩や砂岩であり，火熱を受けた破砕礫が中心である。周辺及び下面に掘り込みや炭化物等は認められなかった。

土坑（第９，10，12図）

本遺跡の土坑は，概ね以下のように区分することができる。

Ⅰ類・・・平面径が50㎝前後の円形を呈するもの（Ⅰ-ａ：深さの浅いもの　Ⅰ-ｂ：深いもの）

Ⅱ類・・・平面径が１㎝前後の円形を呈するもの（Ⅱ-ａ：深さの浅いもの　Ⅱ-ｂ：深いもの）

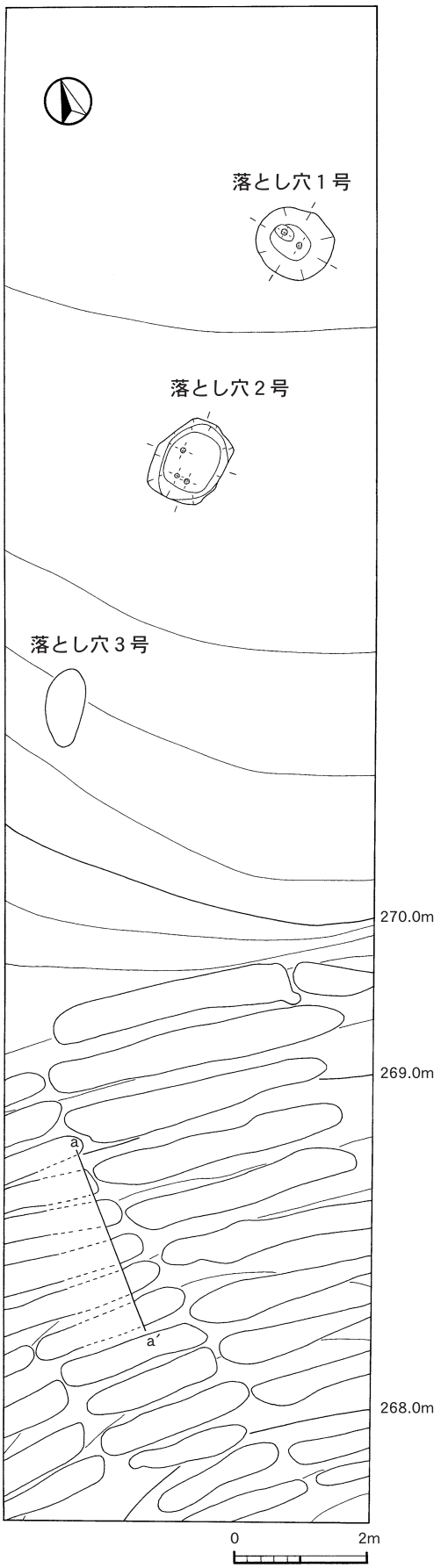
Ⅲ類・・・平面形状が楕円形を呈するもの

（Ⅲ-ａ：長径が１ｍ前後の浅いもの　Ⅲ-ｂ：３ｍを越える細長いものに分かれる）

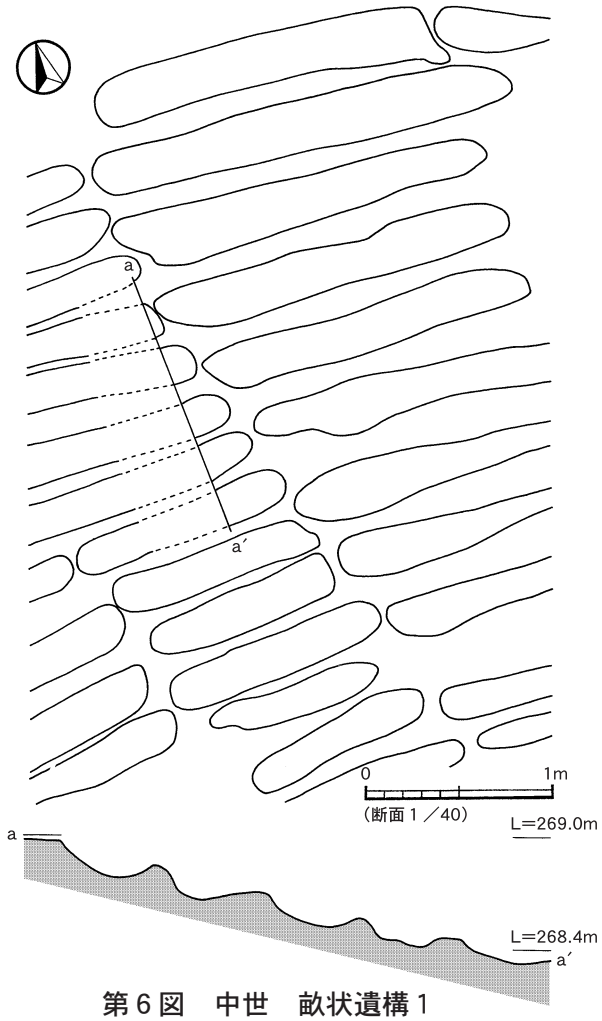
Ⅳ類・・・平面形状が方形を呈するもの

Ⅴ類・・・平面形状が不定形なもの

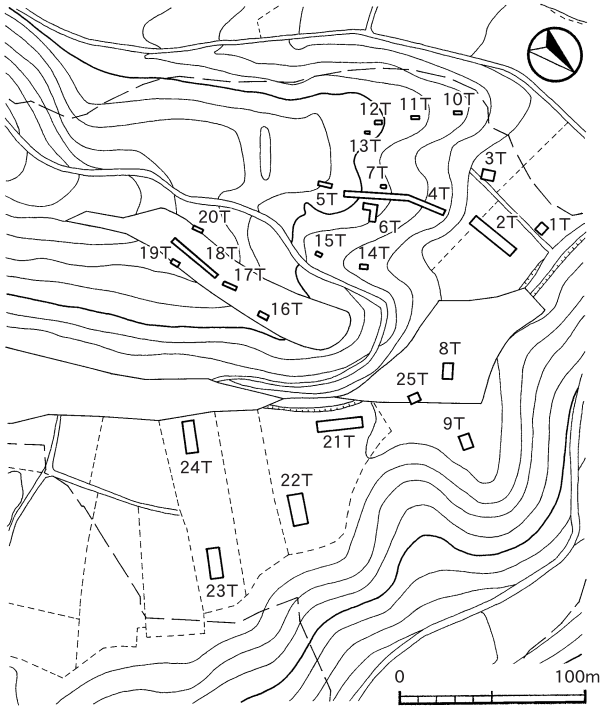
23トレンチでは，径が50㎝程度の円形を呈するもの（Ⅰ類）が33基，楕円形を呈するものが９基，やや大型で方形を呈するものが９基，計51基検出された。大きなものは竪穴住居跡の可能性も考えられるが，ほとんどが未調査のため不明である。切り合いを有する土坑は少なく，ほぼ同時期のものと思われるが，長軸方向に規則性はあまり見られない。土坑内から遺物の出土もあり，いくつか



第５図　２トレンチ遺構配置図



第６図　中世　畝状遺構１



第７図　平成13年度トレンチ配置図

は掲載した。

土坑１（第９，12図）

トレンチ西側から検出された。長径×短径は96×45㎝である。平面形はやや変形した楕円形を呈し，検出面からの深さは20㎝である。西側の壁は段を有する二段構造であり，底面は平坦である。埋土は，P13の火山灰を全体的に含む黒褐色土であり，２㎜程度の炭化物がわずかに混在する。トレンチ内に同規模の土坑が９基検出されており，形状は多少異なるが，いずれも大型土坑の周辺に位置している。

土坑２（第９，12図）

トレンチ西側，土坑１から東方向へ約2.5m離れて検出された。長径×短径は112×65㎝である。平面形は小判形を呈し，中心が一段深い二段構造を呈している。検出面からの深さは70㎝である。底面は平坦である。埋土は黒褐色土であり，遺物が５点出土した。中央部土器425はⅠ類土器の胴部である。北部石器152は面取り痕のある軽石製品である。

土坑３（第９，12図）

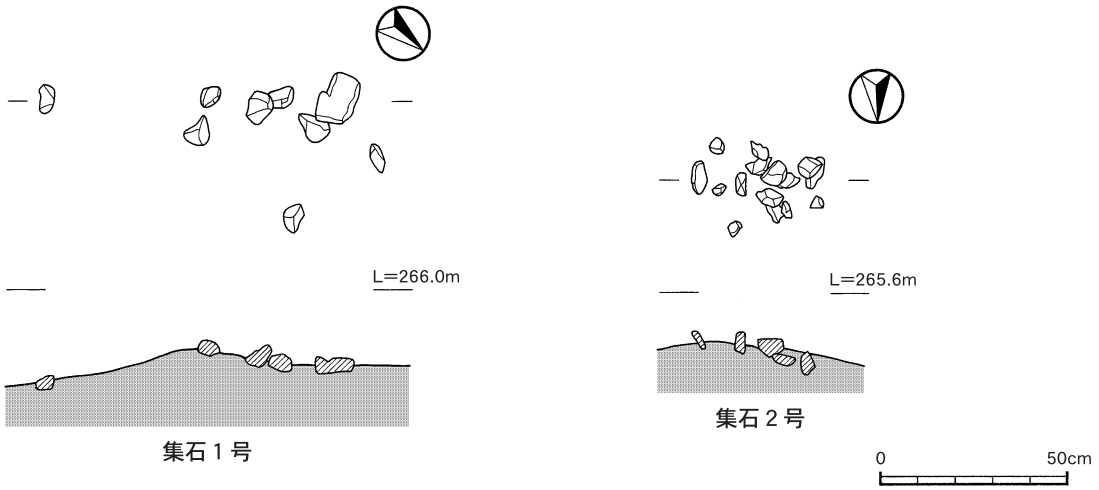
土坑２から北東方向へ約３m離れて検出された。長径×短径は188×124㎝である。平面形は長軸の２辺が並行した隅丸の長方形を呈している。Ⅸ層上面からの深さは約28㎝と比較的浅く，底面は平坦である。埋土はP13の火山灰を全体的に含む黒褐色土であるが，径２～５㎜の炭化物を多く含んでいた。土坑のほぼ中心部から遺物が２点出土した。中央部土器432はⅠ類土器の底部である。23トレンチ内からは同規模の土坑が計９基検出されているが，住居跡の可能性も考えられる。

土坑４（第12図）

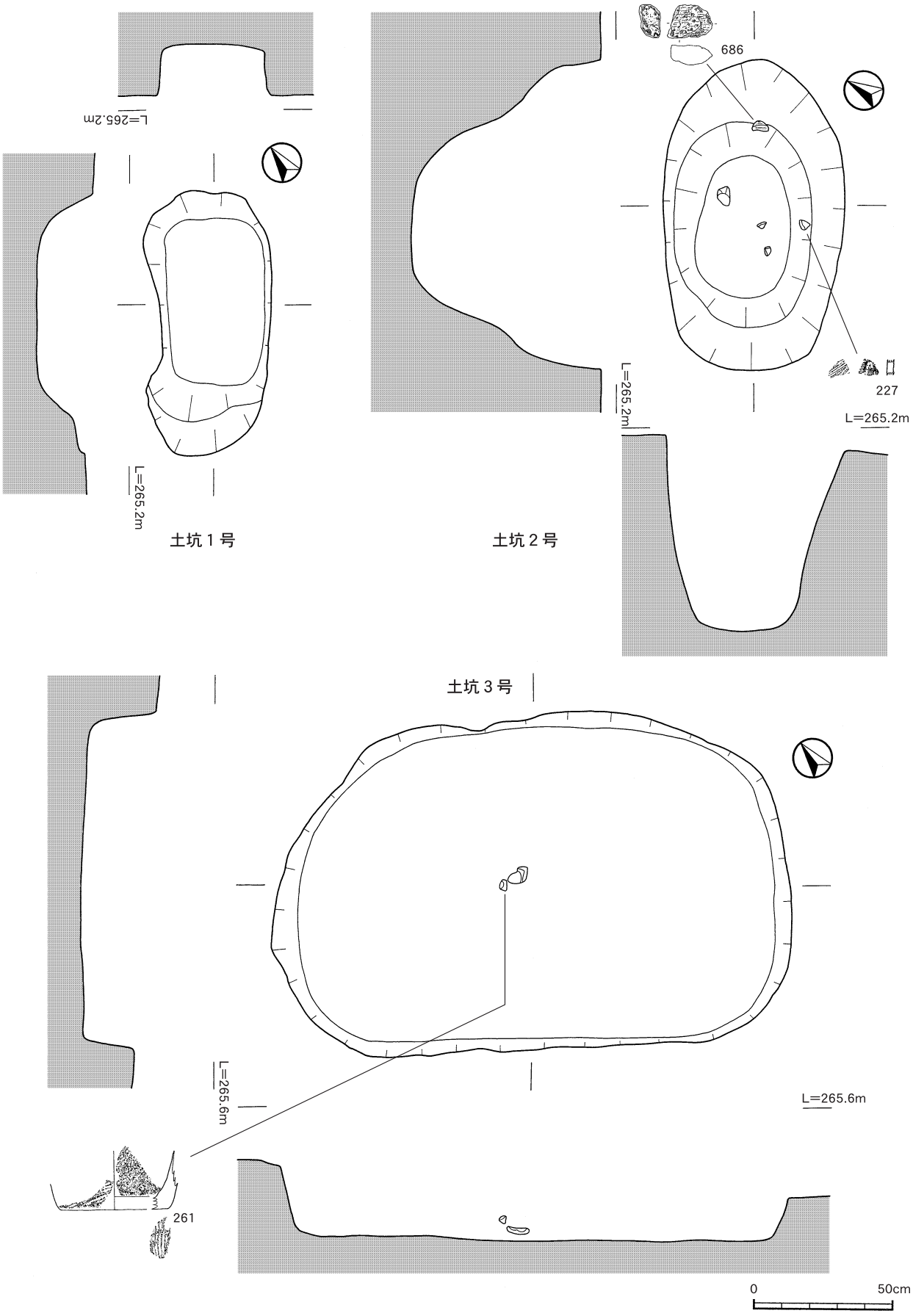
土坑３から北方向へ約１m離れて検出された。長径×短径は30×25㎝であり，平面形は隅丸方形を呈し，土坑３より一回り小さい。未調査のため深さや断面形，埋土中の遺物など全体像は不明であるが，樹痕による撹乱が一部見られる。

土坑５（第10，12図）

土坑３から北東方向へ約１m，土坑４から東方向へ同じく約１m離れて検出された。長径×短径は80×76㎝であり，平面形は円に近い方形を呈している。壁面はやや斜めに立ち上がり，底面は平



第８図　23Ｔ　縄文時代早期　集石１，２号



第９図　23Ｔ　縄文時代早期　土坑１，２，３号

坦であるが，東西方向の断面は，上位に段を有することから二段構造となっている。検出面からの深さは35㎝である。埋土は黒褐色土であり，遺物が３点出土した。中央部土器426はⅠ類土器の胴部である。他に軽石も出土している。

土坑６（第10，12図）

土坑５から南東方向へ隣接するように検出された。長径×短径は92×57㎝であり，平面形は，東西方向を長軸とした不定形なものである。壁面はほぼ垂直に立ち上がり，底面は平坦である。検出面からの深さは23㎝である。東側に径35㎝程度の土坑の切り合いが見られるが，土坑６とは時期が異なると思われる。埋土は，他の土坑と同じくP13の火山灰を全体的に含む黒褐色土であり，埋土中より遺物が５点出土した。Ⅰ類土器が大部分であるが小破片である。北部石器153は面取り痕のある軽石製品であり，何らかの調整に使われたと思われる擦痕が広範囲に残る。

竪穴住居跡（第11，12図）

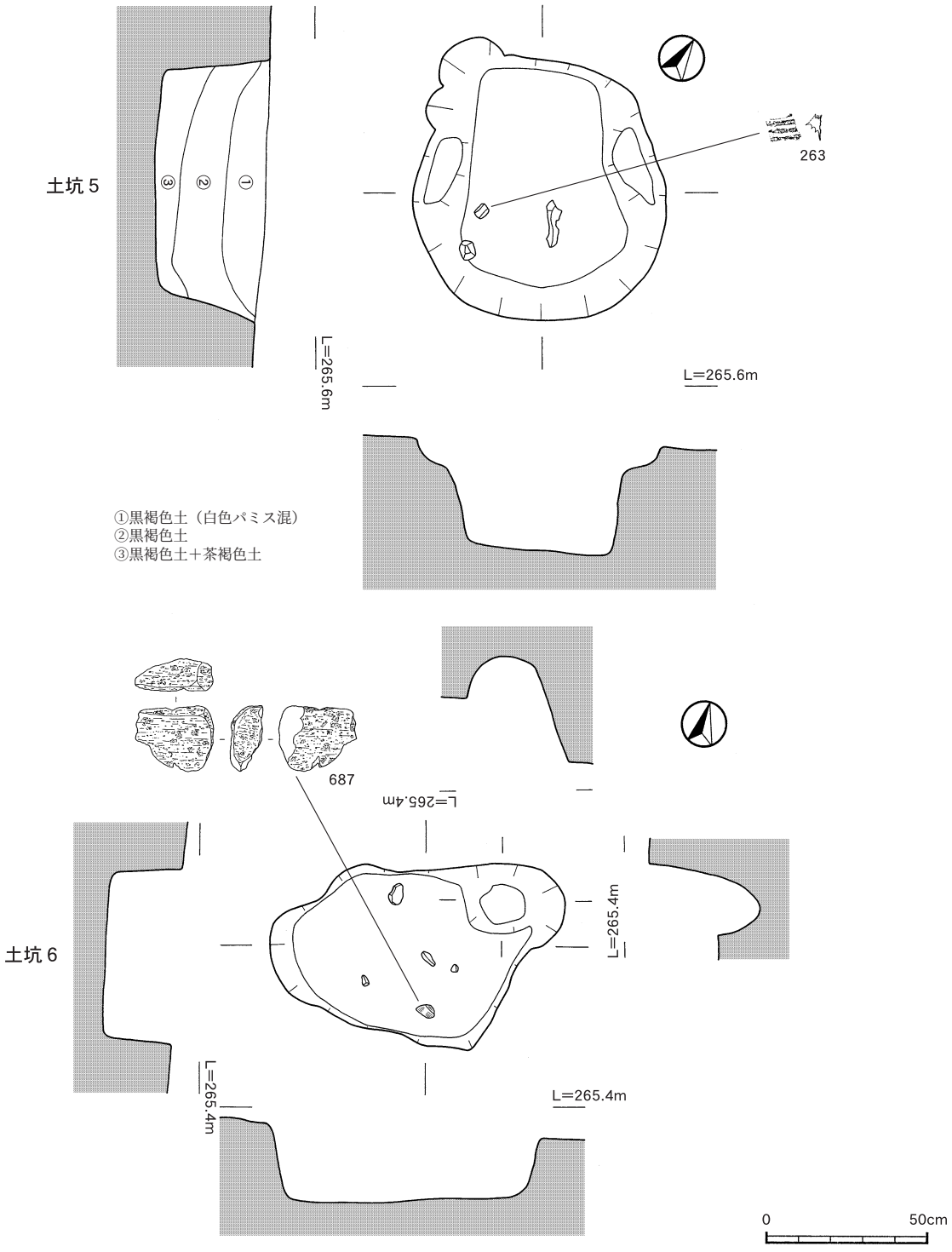
トレンチの東角で竪穴住居の掘り込みを確認した。当初，住居跡の一部が検出されていたので，東側を拡張し，全プランの検出を行った。遺構の平面形は，長径×短径は286×238㎝のほぼ円形を呈している。床面はほぼ水平面となるが，確認調査では，張り床構造の有無や柱状ピットの確認までは至っていない。

この竪穴住居跡の南西側に幅約30㎝，長さ約53㎝程度の長楕円形の突出部（土坑）が，また，北側にも幅約１m，長さ40㎝程度の張り出し部が確認されているが，竪穴住居跡に直接付随する施設か，時間差のある切り合い関係を成す施設であるかの最終判断には至っていない。なお，南西側の突出部の底面は，住居跡と同一でレベル差は認識できない。一方，南西側突出部では，埋土に薩摩火山灰のブロックが認められることから，住居の建物に関連したピットであると思われ，薩摩火山灰ブロックは，柱を建てる際の埋め込みに利用されたのではないかと推測される。

竪穴住居跡の埋土は，周辺の土坑同様，P13の火山灰をまんべんなく含む黒褐色土で，炭化物の混入も認められ，床面に近づくに従いその密度が高くなることも確認している。埋土中より遺物が14点出土した。土坑と同様にⅠ類土器が大部分であり，張り出し部からも同じ土器片が出土した。なお，図化した遺物は，第Ⅴ章「中央部の調査」第４節に掲載した。（№199，203，204，214，226，237，254，260，262，347）

竪穴住居跡については，全体の約50％を調査したに過ぎず，床面の詳細な構造解明も行っておらず，また，住居跡を取り巻く周辺の遺構もその確認を行っただけで，現地にそのまま残されている状況である。

出土遺物については，2トレンチ32点，８トレンチ４点，21トレンチ２点を第Ⅳ章「北部の調査」で，22トレンチ９点，遺構内遺物を含めた23トレンチの107点，24トレンチ２点を第Ⅴ章「中央部の調査」で掲載した。

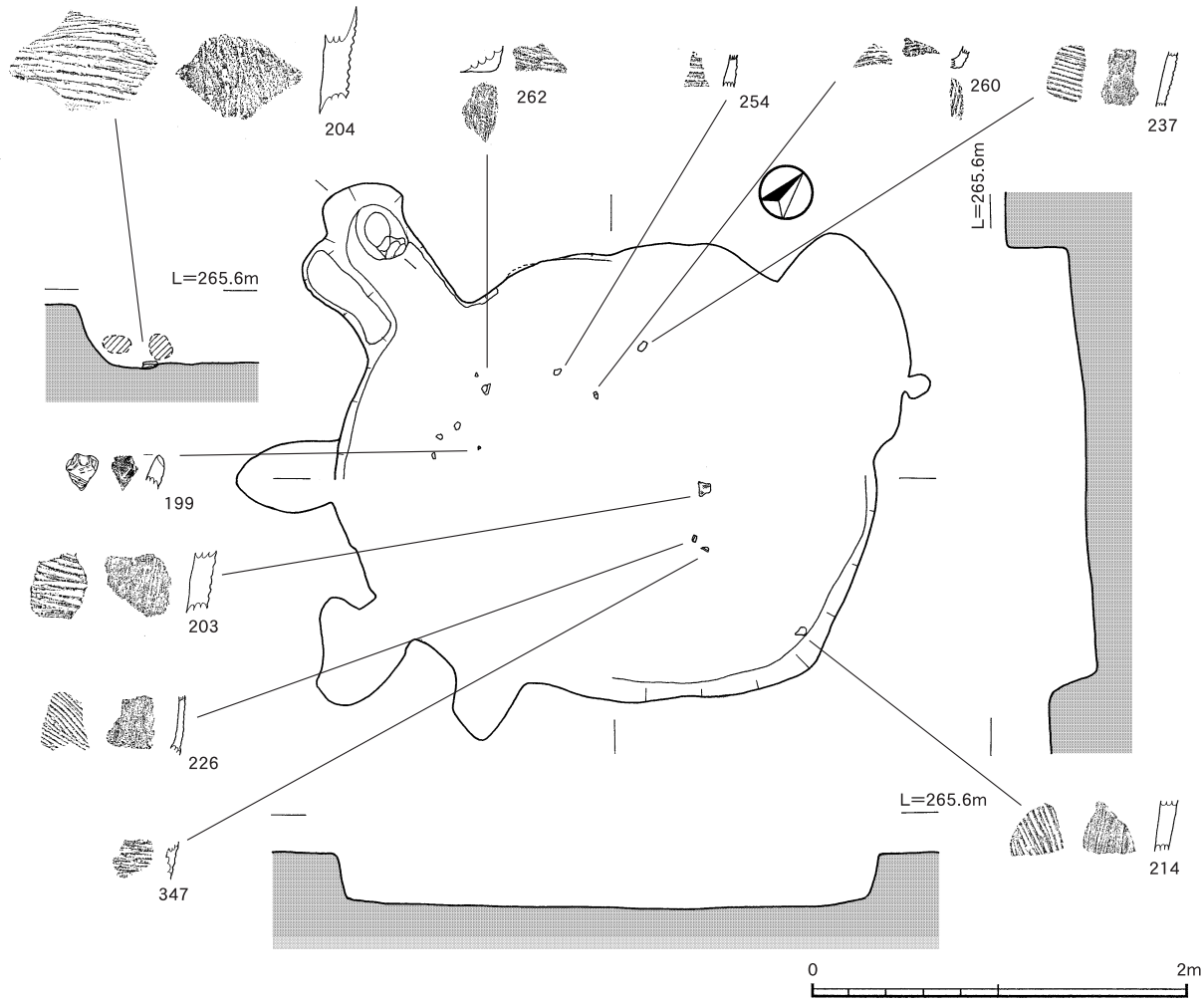


第10図　23Ｔ　縄文時代早期　土坑５，６号

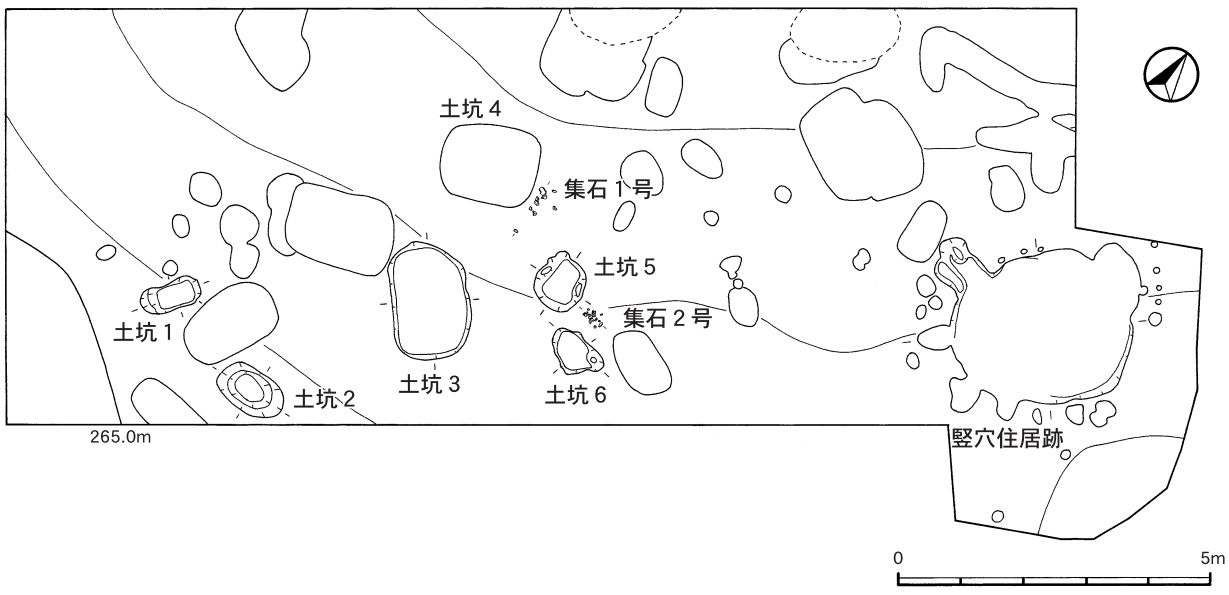
第１表　23トレンチ　土坑計測表

土坑番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	96	45	20
2	112	65	70
3	188	124	28

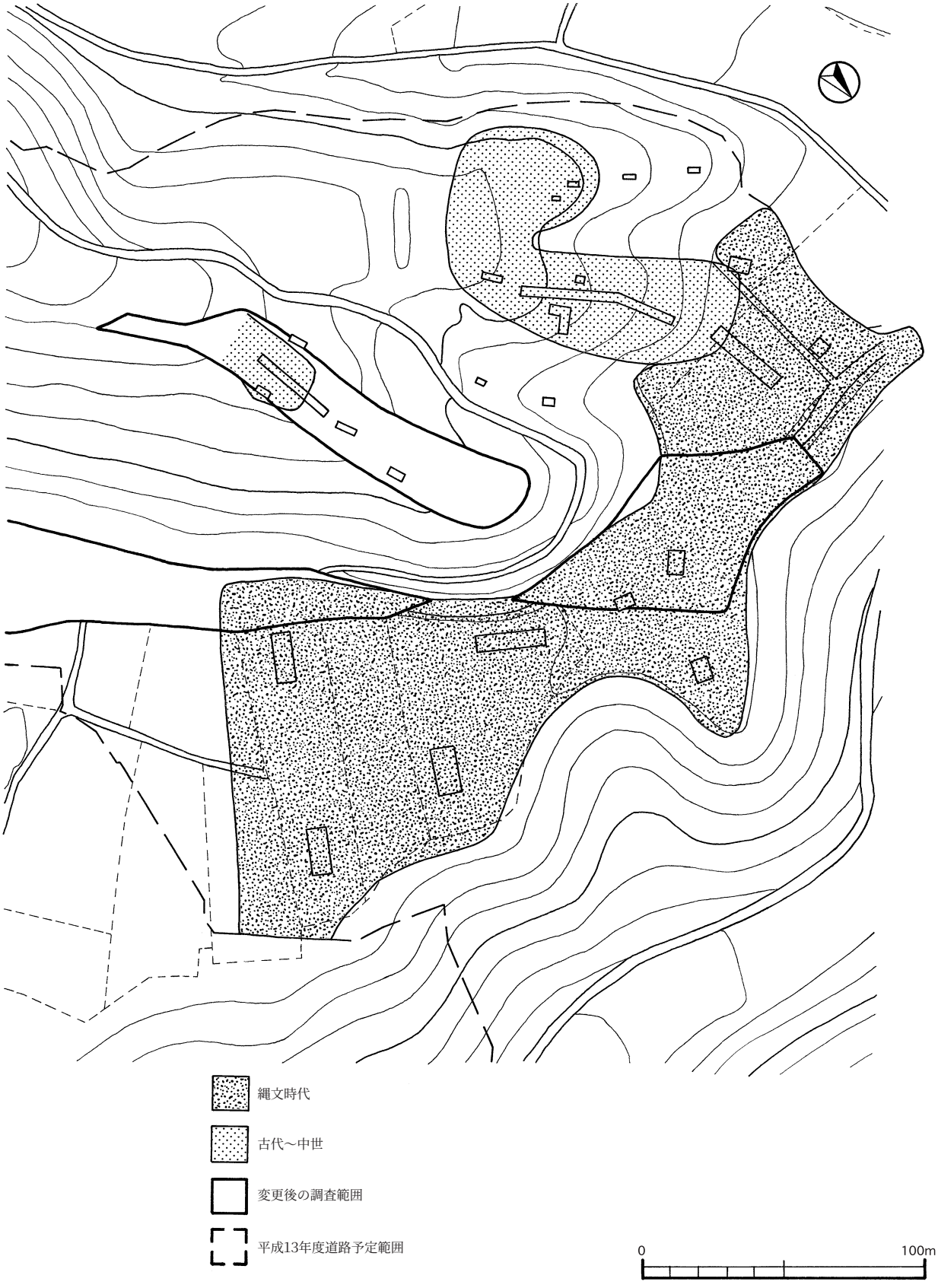
土坑番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
4	30	25	—
5	80	76	35
6	92	57	23



第11図　23Ｔ　縄文時代早期　竪穴住居跡



第12図　23Ｔ　遺構配置図



第13図　平成13年度確認調査結果

2　平成17年度（第14，15図）

平成17年度の確認調査は平成13年度に確認調査を実施した部分を除く，遺跡中央部の台地，南部の斜面部分を中心に実施した。トレンチ設定の前に，センターライン上の「ＳＴＡ232＋80」地点と「ＳＴＡ234＋00」地点の２点を結ぶ直線を軸に北西側から南東側に向かって１，２，３・・・，南西側から北東側に向かってＡ，Ｂ，Ｃ・・・とする10m間隔の調査区（グリッド）を設定し，トレンチ設定の基準とした。トレンチは，５ｍ×10mのものを中心に40カ所設定し調査を行った。調査前の現地は，台地部，斜面部ともに大半が畑地であった。

その結果，28カ所のトレンチで遺物・遺構が確認された。大規模な畑地整備のための撹乱を受けた場所では，概ねⅥｃ層（Ｐ11の一次堆積軽石）まで影響を受けており，遺物包含層は消失していた。台地部では，撹乱を受けた場所を除き，ほぼ全面に畝状遺構が残存し，形状や埋土に違いが見られるものもあるが，近世～古代に該当する。南部の斜面からは，谷部とほぼ同時期と思われる楕円形を呈した畝状遺構が広範囲に確認され，畝状遺構は，Ⅲｂ層の暗褐色土を主体とするものと，Ⅱ層の黄色ボラ（文明ボラ）を埋土の主体とするもの，黄色ボラ混じりの黒褐色土を主体とするもの，Ⅰ－ｂ層（安永ボラ）を埋土の主体とするものの４タイプに分けられる。

その他，台地のほぼ全面で縄文時代早期の遺物包含層が確認された。また，天地返しなどで撹乱受けた一部を除き，縄文時代前期，縄文時代後期，縄文時代晩期，古代，中世，近世の遺跡の存在が明らかとなった。中でも県内でも類例のない文明ボラに覆われ楕円形をした畝状遺構の存在が明らかとなり，谷部，南部の斜面全体にその貴重な資料の広がりを確認することができた。

平成17年度確認調査での検出遺構，出土遺物については，平成18年度の本調査の成果と併せて各調査区ごとに本文の中に含めて掲載した。

第４節　本調査（第15図）

本調査は，平成13年度，17年度の確認調査に基づき，平成17年度，18年度実施した。

1　平成17年度（第15図）

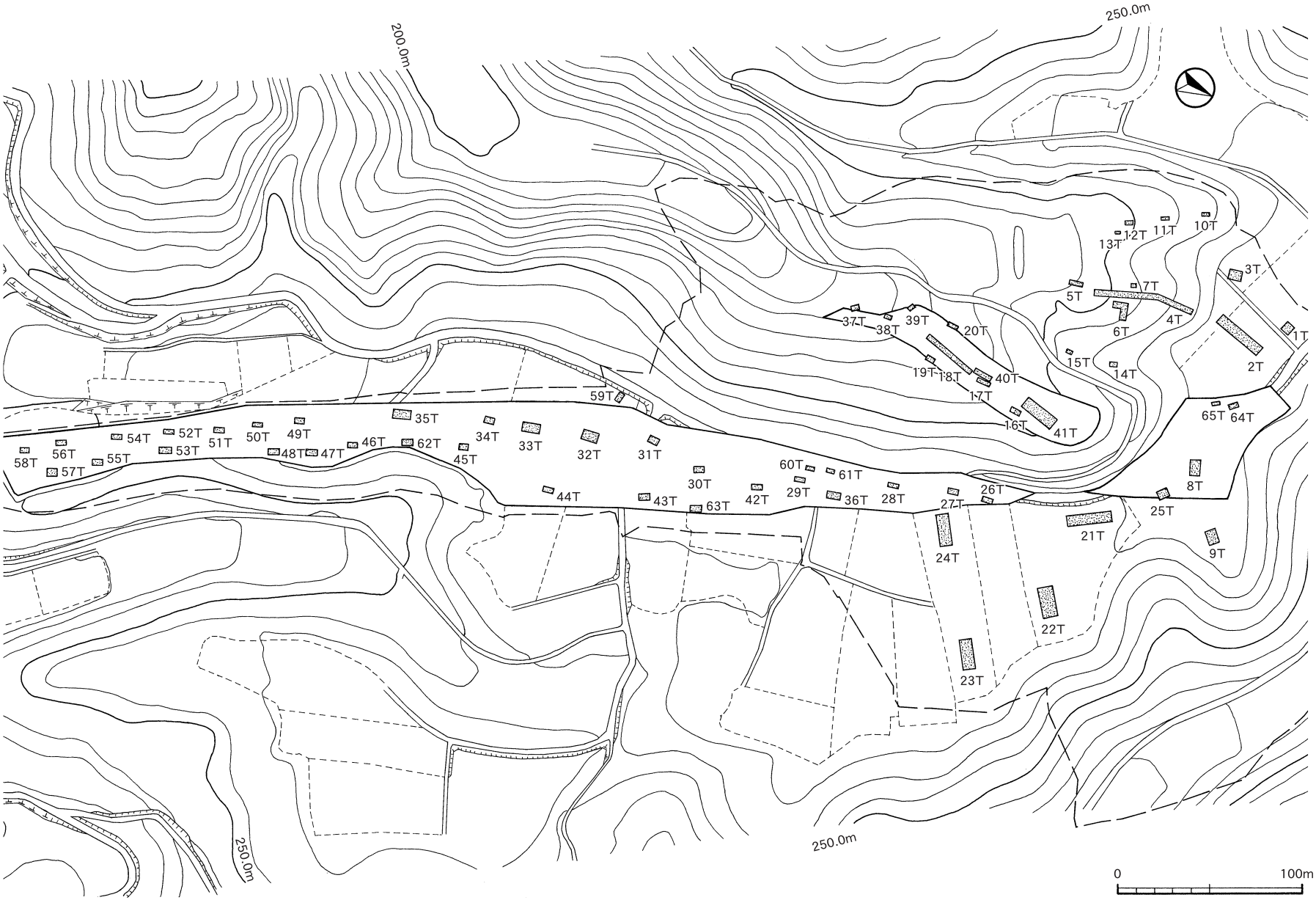
平成17年度は，谷部全体と台地部の一部について本調査を実施した。

谷部調査区は，孟宗竹や雑木に覆われていたため，それらの伐採や抜根から開始し，人力や重機を活用し，その搬出や表土除去を行っている。その後，確認調査で検出された畝状遺構の有無の確認を行い，残存する地域については人力で検出を行った。また，影響のない部分については，Ⅱ層（文明ボラ）まで重機で除去し，遺物出土の可能性があるⅢａ～Ⅳ層は人力で掘り下げを行った。Ⅴ層より下位については，堆積物が非常に厚く堆積し，包含層の有無を調べるための下層確認調査が実施できなかった。

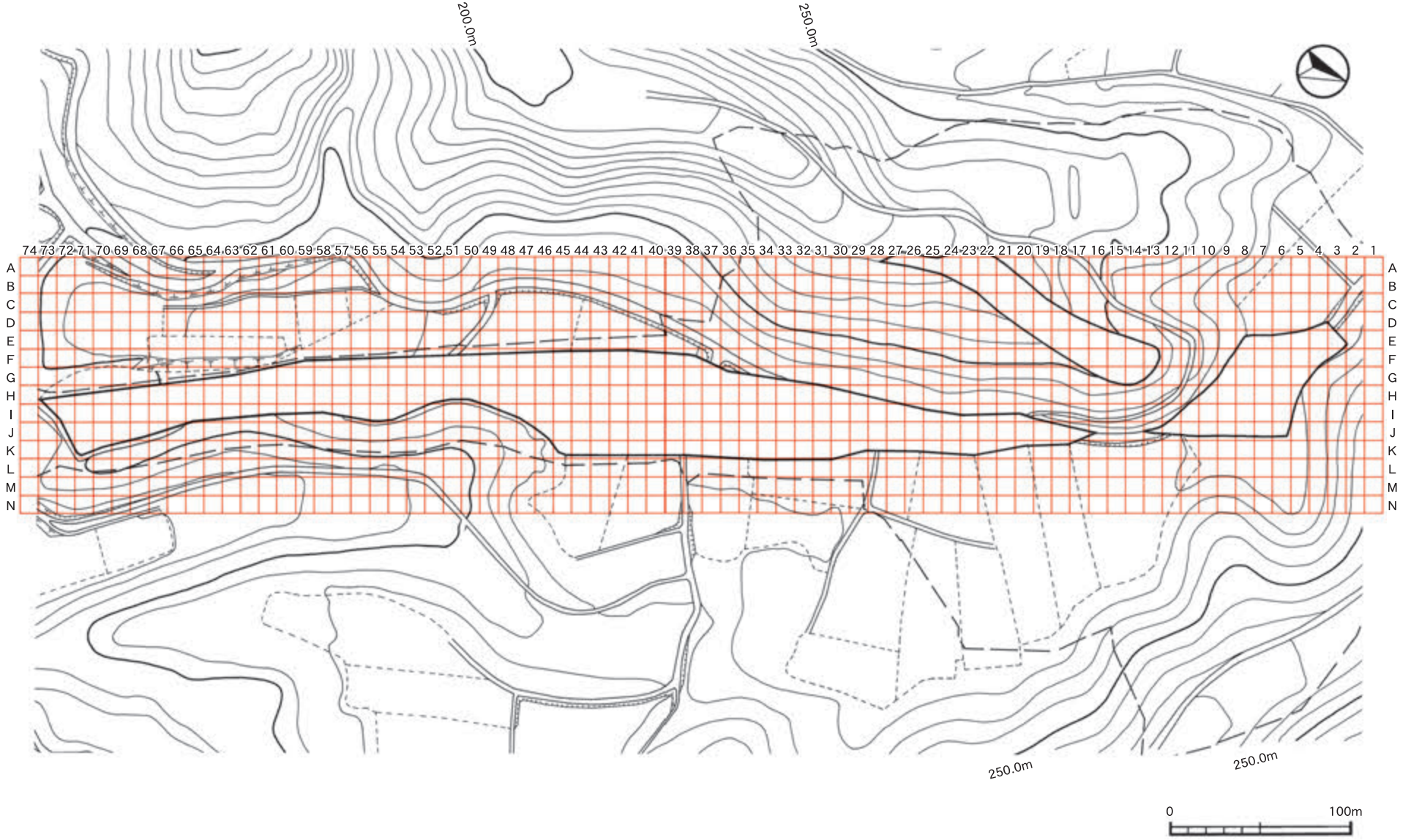
出土遺物はすべて出土状況の記録後取り上げを行い，検出した遺構については，写真撮影や図面作成作業を実施した。

調査の結果，谷部Ⅲａ層上面で文明ボラに覆われた楕円形をした畝状遺構が広く検出された。また，Ⅲ～Ⅳ層にかけて土師器や須恵器などの遺物や，溝状遺構や土坑などの遺構が検出された。

台地部では，Ｊ～Ｌ－16～22区について本調査を行った。一部で大規模な天地返しによりⅤ層（アカホヤ火山灰）～Ⅵ層まで撹乱を受けていたが，縄文時代早期の包含層は残存しており土器片



第14図　狩俣遺跡　トレンチ配置図



第15図　狩俣遺跡　グリッド配置図

が出土した。下層確認のため旧石器該当層（Ｘ～ⅩⅢ層）まで掘り下げを行ったが，遺構，遺物は発見されなかった。

２　平成18年度（第15図）

平成18年度は，台地部（17年度実施部分を除く）と南部斜面について本調査を実施した。

調査は，重機で表土を除去した後，確認調査で検出された畝状遺構の遺構検出に主眼を置き，有無の確認を行い，残存する地域については人力で検出を行った。また，影響のない部分については，Ⅱ層（文明ボラ）まで重機で除去し，遺物出土の可能性があるⅢａ～Ⅳ層は人力で掘り下げを行った。その後，無遺物層（Ⅵ層）を重機で除去後，Ⅸ層（薩摩火山灰）上面まで人力で掘り下げを行った。出土遺物はすべて出土状況の記録後取り上げを行い，検出した遺構については，写真撮影や図面作成作業を実施した。

本調査の結果，調査区の台地部から縄文時代早期～近世にかけての遺構・遺物などが発見され，斜面部から古代～近世にかけての遺構・遺物が確認された。

近世の遺構は，畝状遺構，溝状遺構，古道などがある。このほか土坑もシラスを敷き詰められたものを含め多数検出された。圃場整備等の土地改良事業による削平で残存部分は少ないが，残されていた畝状遺構は，安永ボラが筋状に残る近世のものから存在し，遺物は，陶器や磁器の小破片が中心である。

中世～近世の遺構は，畝状遺構，溝状遺構，古道，土坑などが検出された。畝状遺構は，天地返し等の大きな土地改良を受けていない地域に広がりを見せ，時期差があると思われる数種類のタイプに分けられる。特に，文明ボラを埋土とするものは，台地部の南端から最南端まで延び，斜面に沿って長径１ｍ前後の楕円形をした掘込みが規則的に続いていた。また，畝状遺構を区切るような溝状遺構も数条確認された。土坑は，遺跡全体で400基以上検出されているが，ほとんどが中世～近世のものであると推察される。

遺物は土師器，瓦質土器，青磁などが出土している。

古代～中世の遺構は，掘立柱建物跡，畝状遺構，溝状遺構，土坑などで，掘立柱建物跡は，いずれも中世の畝状遺構の下部，Ⅳ層上面より検出された。北部では古道や溝状遺構が現道に沿うようにして検出された。南部では掘立柱建物跡，畝状遺構，大型の浅い土坑が隣接している。

遺物は，土師器，内黒土師器，須恵器，墨書土器，線刻土器，外赤土器，焼塩土器，紡錘車，金属製品などが出土している。

縄文時代中期～晩期の遺構は，落とし穴，焼土，土坑などが検出された。Ⅲｂ～Ⅳ層にかけて検出されるが，明確な区分けができていない。

遺物は，後期の宮ヶ迫式土器，晩期の黒川式土器の土器や磨製石斧，石鏃，チップなどの石器が出土した。出土地域は限定的である。

縄文時代早期の遺構は，集石遺構，土坑などがⅦ～Ⅷ層にかけて検出された。集石遺構は，合計23基が検出され，台地部の中央，南側にやや集中がみられる。

遺物は，石坂式土器，押型文土器，前平式土器，手向山式土器などや打製石斧，石鏃，石匙，磨石，敲石，石皿，チップなどの石器が出土している。

第５節　日誌抄

以下，調査の経過については日誌抄により略述する。

【平成13年度】

平成14年１～３月

調査開始準備，重機進入路整備，樹木伐採等の環境整備（谷部，北部周辺を中心に）

確認調査開始

１～25トレンチ設定，掘り下げ，遺物取り上げ，遺構実測，下層確認

10・11・14～17・19・20トレンチ設定　重機による表土剥ぎ

遺物，遺構確認されず，土層断面実測後終了，埋め戻し

４～７・12・13・18・トレンチ設定　重機による表土剥ぎ

Ⅲ層上面より畝状遺構検出，遺構実測，写真撮影，埋め戻し

１・３・８・９トレンチ…Ⅳ，Ⅶ，Ⅷ層，平板実測，遺物取上，下層確認，埋め戻し

２トレンチ…Ⅲ層より畝状遺構検出，遺構実測，写真撮影

Ⅷ層より落とし穴検出，遺構実測，写真撮影，

Ⅲ・Ⅶ・Ⅷ層より遺物出土，平板実測，遺物取上，下層確認，埋め戻し

平成13年度　発掘作業状況

21～25トレンチ…撹乱有り（天地返し），Ⅳ，Ⅶ，Ⅷ層，平板実測，遺物取上

23トレンチ…Ⅷ層より集石，竪穴住居跡，土坑多数検出，遺構実測，写真撮影，

Ⅶ，Ⅷ層より遺物も多数出土，平板実測，遺物取上，炭化物サンプル採取

コンタ図作成，完掘写真撮影，土層断面図作成，埋め戻し

【平成17年度】

平成17年11～12月

発掘調査開始準備，重機進入路整備，樹木伐採等の環境整備

グリッド設定（Ａ～Ｎ－１～72区），グリッド杭打ち，レベル移動

平成13年度に引き続き確認調査開始　26～28トレンチ設定（中央部北側），掘り下げ

谷部（Ａ～Ｇ－14～28区）の確認調査，本調査を開始，重機による表土剥ぎ，掘り下げ

中央部（Ｇ～Ｍ－17～52区）の確認調査　26～36トレンチ設定，掘り下げ，遺構検出

26～28トレンチ設定，掘り下げ

遺物，遺構確認されず，土層断面実測，下層確認後終了

29～31トレンチ設定，重機による表土剥ぎ，掘り下げ

Ⅲ層上面より畝状遺構検出，遺構実測，写真撮影，土層断面実測，一部下層確認後終了

32～36トレンチ設定，重機による表土剥ぎ，掘り下げ

Ⅶ，Ⅷ層より遺物出土，平板実測，遺物取り上げ，写真撮影，土層断面実測，下層確認後終了

谷部の確認調査　37～41トレンチ設定，重機による表土剥ぎ，掘り下げ，遺構検出

37，38，41トレンチ…遺物，遺構確認されず，土層断面実測，下層確認後終了

39，40トレンチ…Ⅲ層上面より畝状遺構検出，引き続き本調査へ移行

谷部の本調査　Ａ～Ｅ－20～26区（斜面下段）の調査実施

Ⅲ層上面より畝状遺構検出，平板実測，コンタ図作成，写真撮影，土層断面実測

Ｅ，Ｆ－18，19区（斜面中段）の調査実施，重機による表土剥ぎ，掘り下げ，遺構検出

畝状遺構は現存せず，Ⅳ層上面より土坑検出，平板実測，写真撮影，土層断面実測

Ｆ～Ｈ－15～17区（斜面上段）の調査実施，重機による表土剥ぎ，掘り下げ，遺構検出

畝状遺構は現存せず，Ⅳ層上面より土坑検出，平板実測，写真撮影，土層断面実測

12月15日　産業医　発掘現場作業環境視察

平成18年１～３月

中央部（Ｇ～Ｍ－16～52区）の確認調査継続　中央部の一部本調査を開始，掘り下げ

南部（Ｇ～Ｍ－53～72区）の確認調査開始　新たに42～63トレンチ設定

谷部（Ａ～Ｇ－14～28区）の本調査を継続，掘り下げ

安全対策のため，確認トレンチ埋め戻し

中央部の確認調査　42，43，59～63トレンチ設定，掘り下げ

42，43トレンチ設定，重機による表土剥ぎ，掘り下げ，遺構検出

Ⅲ層上面より畝状遺構検出，遺構実測，写真撮影，土層断面実測，一部下層確認後終了

59トレンチ設定，重機による表土剥ぎ，掘り下げ，遺構検出

Ⅶ，Ⅷ層より遺物出土，平板実測，遺物取り上げ，写真撮影，下層確認後終了

60～62トレンチ設定，重機による表土剥ぎ，掘り下げ，遺構検出

遺物，遺構確認されず

土層断面実測，下層確認後終了，トレンチ埋め戻し

63トレンチ設定，重機による表土剥ぎ，掘り下げ，遺構検出

Ⅲ層上面より畝状遺構検出，測道部分のため遺構実測，写真撮影後終了，トレンチ埋め戻し

平成17年度　発掘作業状況

中央部の本調査　Ｊ～Ｌ－16～26区（台地北側）の調査実施

確認トレンチ拡張のため，重機による無遺物層の掘り下げ，大部分がⅠ～Ⅴ層まで天地返しを受けていたが，撹乱部分より遺物出土，遺構は確認されず，コンタ図作成，写真撮影，土層断面実測，一部下層確認後調査終了，トレンチ埋め戻し

南部の確認調査　46～58トレンチ設定，掘り下げ

46～48，53，55～58トレンチ設定，一部重機による表土剥ぎ，掘り下げ
遺物，遺構確認されず，土層断面実測，下層確認後終了
49～52トレンチ設定，一部重機による表土剥ぎ，掘り下げ
Ⅲ層上面より畝状遺構検出，引き続き本調査へ移行のため終了
谷部の本調査（Ａ～Ｇ－14～28区）継続
Ａ～Ｅ－20～26区（斜面下段）の調査実施
Ⅳ層上面より溝状遺構，土坑検出，平板実測，コンタ図作成，写真撮影，土層断面実測
Ｅ，Ｆ－18，19区（斜面中段）の調査実施，掘り下げ，遺構検出
Ⅳ層上面より土坑検出，平板実測，写真撮影，土層断面実測
Ｆ～Ｈ－15～17区（斜面上段）の調査実施，掘り下げ，遺構検出
Ⅳ層上面より溝状遺構，土坑検出，平板実測，写真撮影，土層断面実測
急傾斜面のため下層確認はできず，コンタ図作成後調査終了，埋め戻し
谷部調査区の本調査を終了，引き渡し
１月25日　空中写真撮影実施

【平成18年度】

平成18年５～６月
北部（Ｅ～Ｋ－１～14区）の本調査開始，環境整備，重機による表土剥ぎ，グリッド杭打ち，レベル移動，掘り下げ，県道を挟み西側と東側に分けて調査開始
中央部（Ｊ～Ｌ－24～28区）の本調査開始，重機による表土剥ぎ，掘り下げ
Ｅ～Ｇ－４～８区（北部西側）の調査
重機による表土剥ぎ，掘り下げ，遺構検出
谷部へ向かって急激に落ち込む斜面であり，４，５区は削平を受け遺物・遺構無し
６～８区は斜面に沿ってⅢ層上面より畝状遺構検出，実測，写真撮影
Ⅳ層上面では多数の土坑を検出，実測，写真撮影，一部下層確認実施
Ｆ，Ｇ－８区では，斜面沿いに遺構検出（古道，溝状遺構），実測，写真撮影

平成18年度　発掘作業状況

Ｈ～Ｋ－６～11区（北部東側）の調査
重機による表土剥ぎ，掘り下げ，遺構検出
台地の縁辺部に当たる，1～４区は削平を受け遺物・遺構無し，コンタ図作成，埋め戻し
５～10区は緩斜面に沿ってⅢ層上面より畝状遺構検出，実測，写真撮影
Ⅳ層上面では多数の土坑を検出，溝状遺構，古道も数条検出，遺物出土，写真撮影

Ｊ～Ｌ－24～28区（中央部）の調査，重機による表土剥ぎ，掘り下げ

Ⅲ層上面より畝状遺構検出，実測，写真撮影，Ｅ，Ｆ－24，25区は天地返しにより畝状遺構無し

６月７～９日　実務向上研修（現場研修）

平成18年７～９月

北部（Ｅ～Ｋ－１～14区），中央部（Ｇ～Ｍ－24～38区）の本調査継続，掘り下げ

Ｅ～Ｋ－１～14区（北部）の調査

北部西側については，下層確認後土層断面図，コンタ図作成，調査終了，埋め戻し

北部東側は，Ⅶ～Ⅷ層より遺物出土　遺構検出（集石），実測，写真撮影

下層確認後土層断面図，コンタ図作成，調査終了，埋め戻し

北部調査区の本調査終了，引き渡し

Ｊ～Ｌ－24～28区（中央部）の調査

Ⅳ層上面より遺物出土，遺構検出（溝状遺構，土坑），実測，写真撮影，地割れの痕跡あり

Ⅶ～Ⅷ層より遺物出土，遺構検出（集石，落とし穴），実測，写真撮影，一部下層確認後終了

Ｈ～Ｌ－28～38区（中央部）の調査

28～32区のＩｃ層上面より畝状遺構検出，実測，写真撮影，33～38区は削平により無し

Ⅲ層上面より形態の異なる畝状遺構検出，実測，写真撮影

Ⅲ～Ⅳ層より遺物出土，遺構検出（掘立柱建物跡，溝状遺構，土坑），実測，写真撮影

８月23日　発掘体験学習（大隅中１年３名）

８月25日　発掘作業員健康診断（建山遺跡にて実施）

平成18年10～12月

中央部（Ｇ～Ｍ－28～52区）の本調査継続

南部（Ｇ～Ｍ－53～66区）本調査開始グリッド杭打ち，レベル移動

Ｇ～Ｌ－38～44区（中央部）の調査，掘り下げ

大部分がＩ～Ⅴ層まで天地返しを受けていたため，重機による無遺物層の掘り下げ，Ⅵ層まで遺物・遺構無し

Ⅶ～Ⅷ層より遺物出土，遺構検出（集石），実測，写真撮影，一部下層確認Ｋ～Ｌ－40～46区（中央部）の調査，重機による表土剥ぎ，掘り下げ

天地返しを受けていない部分からは，Ⅲ層上面に古道，溝状遺構，畝状遺構検出，実測，写真撮影，Ⅲ，Ⅳ層遺物出土，平板実測，遺物取り上げ，Ⅸ層上面まで掘り下げ，コンタ図作成

平成20年度　整理作業状況

Ｇ～Ｌ－45～52区（中央部）の調査，重機による表土剥ぎ，掘り下げ

上層が削平を受けていない49～52区を中心に，Ⅲ層上面に溝状遺構，畝状遺構検出，実測，写真撮影，Ⅳ層上面より焼土遺構，土坑検出，実測，写真撮影

Ⅲ～Ⅳ層より遺物出土，平板実測，遺物取り上げ，写真撮影，Ⅳ層上面コンタ図作成

G～M－53～66区（南部）の調査，重機による表土剥ぎ，掘り下げ

Ⅰｃ層上面より畝状遺構検出，遺構実測，写真撮影

緩斜面のほぼ全域からⅢ層上面に畝状遺構検出，実測委託，写真撮影

傾斜が平坦になる62～64区のⅣ層上面から遺構検出（掘立柱建物跡，畝状遺構，土坑），実測

Ⅲ～Ⅳ層から多数の遺物（土師器類）出土，平板実測，遺物取り上げ，写真撮影

11月２日　空中写真撮影実施

11月４日　現地説明会実施

11月13日～１月22日　畝状遺構実測委託

12月18日，19日　現地指導（飯沼憲司　別府大学文学部教授）

平成19年１～３月

中央部（G～M－28～52区）の本調査継続，南部（G～M－53～66区）本調査継続，掘り下げ

G～L－28～52区（中央部）の調査

遺構検出（集石，土坑），遺構実測，写真撮影

Ⅶ～Ⅷ層より遺物出土，平板実測，遺物取り上げ

実測，写真撮影，一部下層確認

Ⅸ層上面コンタ図作成，写真撮影，

中央部の調査終了

安全対策のため一部重機による埋め戻し

G～M－53～66区（南部）の調査

Ⅳ層上面コンタ図作成，写真撮影

南部の調査終了

１月11日　空中写真撮影実施

１月11日　現地指導（濱崎忠雄　佐々木 修　鹿児島大学農学部教授）

平成21年度　報告書作成作業状況

調査終了

第Ⅱ章　狩俣遺跡の層位

狩俣遺跡の基本層位は，層厚は異なるが，Ⅰ－第Ⅴ章で述べたように曽於市末吉町諏訪方に所在する桐木耳取遺跡の基本層位と一致する。よって，南九州における霧島，姶良カルデラ，桜島，鬼界カルデラ等からの噴出物が遺跡の相対的年代を推定する上で非常に良好な資料となっている。狩俣遺跡の基本土層については，第16図の狩俣遺跡基本土層柱状模式図の通りである。

狩俣遺跡は標高約270mの台地上に位置しているが，台地の北側と南側に開析する谷により，台地部と谷部斜面とで形成されている。

台地部は，全般に文明ボラ抜きや圃場整備が行われ，台地中央付近の尾根を削り，縁辺部へ押し込む形で平地を形成している。そのため，台地中央は上層が削平され，際は地層が上層よりしっかりと残存していた。また，圃場整備以前に大規模な筋状の天地返しを行っている畑もあり，表土下は畑や山林等を単位として複雑な様相を呈している。なお，天地返しは縄文時代早期以下の包含層へは達しておらず，対象地全ての部分で残存していた。

※網かけの部分は本遺跡の遺物包含層

第16図　狩俣遺跡　基本土層柱状模式図

谷部斜面は，台地部方向から緩やかに傾斜しながら下っており，数多くの雨水による浸食と堆積を繰り返しながら谷を埋めるようにして地層を形成していた。特にⅠ層は，地表面からⅡ層上面までの間に多くの堆積を確認することができ，５ｍを超える厚さのところも少なくない。残存状況の良好な場所では，桜島を噴出源とした軽石層Ｐ１（大正火山灰），Ｐ２（安永火山灰），Ｐ３（文明ボラ）を同時に観察することができた。そこで狩俣遺跡では，桐木耳取遺跡の土層区分を基本とするが，部分的にＩａ層～Ｉｄ層の区分を用いたものを基本土層とする。

狩俣遺跡の基本土層，遺物包含層，火山灰等の詳細については，以下の通りである。

Ｉａ層　表土

Ｉｂ層　桜島Ｐ２　安永ボラ（1779年）

Ｉｃ層　暗褐色砂質土　近世の遺物包含層

Ｉｄ層　黒褐色砂質土

Ⅱ　層　桜島Ｐ３　文明ボラ（1471年）　主に斜面で10～20㎝の堆積が確認されるが，台地部ではボラ抜きや削平が行われたと考えられ，本来は遺跡全体にあったと思われる。斜面

を利用して噴火当時耕作していた畠を，ボラがパックした状態で検出される。

Ⅲａ層　黒色土　主に古代～中世の遺物包含層である。

Ⅲｂ層　黒褐色土　主に縄文時代晩期～古代の遺物包含層である。

Ⅳ　層　黄褐色土　霧島御池火山灰を含む　主に縄文時代中期～晩期の遺物包含層である。

Ｖａ層　暗橙色土　Ｖｂ層（アカホヤ火山灰）の腐食土

Ｖｂ層　黄橙色軽石混火山灰層　鬼界カルデラ起源の火山灰層で通称アカホヤ火山灰（約7,300年前）と呼ばれている。遺跡全体に安定して堆積している。

Ⅵａ層　黄褐色軽石混茶褐色土　Ⅵｂ層（桜島Ｐ11）の二次堆積土

Ⅵｂ層　黄褐色軽石層　桜島Ｐ11（約8,000年前）場所により厚い堆積も見られる。

Ⅶ　層　明茶褐色土　縄文時代早期該当の遺物包含層である。

Ⅷ　層　黒褐色土　縄文時代早期該当の遺物包含層である。

Ⅸ　層　黄白色砂粒硬質土　桜島Ｐ14（薩摩火山灰　約12,800年前）上位は固結した火山灰，下位は３㎜前後の軽石で構成され，縦方向にクラックが発達している。

Ⅹ　層　黒褐色粘質土

Ⅺ　層　黄橙色粘質土

Ⅻ　層　暗茶褐色粘質土

ⅩⅢ　層　黄褐色軽石混弱粘質土

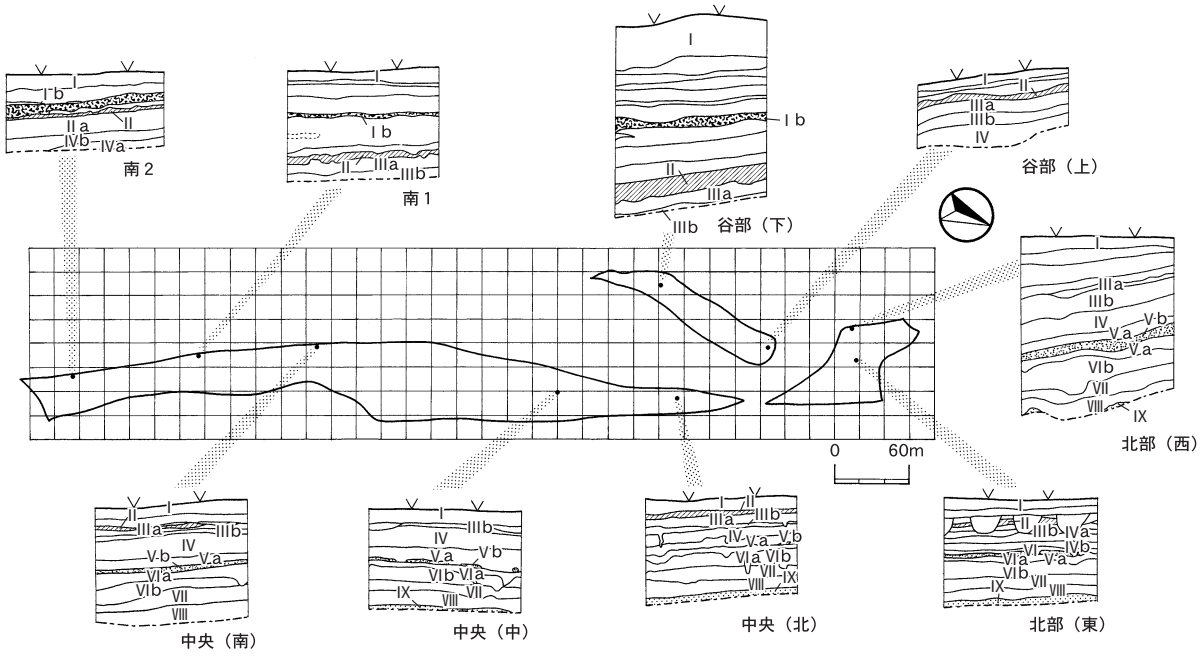
ⅩⅣ　層　暗赤褐色硬質土　桜島Ｐ15（時代未定）が点在する。

ⅩⅤ　層　暗青灰色硬質土

ⅩⅥ　層　明褐色硬質土　桜島Ｐ17（約26,000年前）が点在する。

ⅩⅦ　層　黄白色砂質土　上位はローム質，下位は砂質の状態である。

ⅩⅧ　層　明黄白色砂質土　姶良カルデラ（約26,000～29,000年前）を噴出源とする。シラス



第17図　狩俣遺跡　各地点の層位

第Ⅲ章　谷部の調査

第１節　調査の概要（第18図）

谷部調査区は，本遺跡の北西部に位置し，東西に延びた台地の南斜面の裾野に相当する。

平成14年１～３月に実施した確認調査で，斜面に階段状に作られた畝状遺構の存在が知られ，平成17年11月～平成18年３月に本調査を実施した。

調査範囲は，谷の裾野から台地端部までの斜面で，ほぼ南北130m，東西に幅20mの細長い短冊状を呈している。なお，およそ標高265mの頂部と裾野の高低差は約50mである。

平成13年度の確認調査では，斜面に沿って階段状に作られた畝状遺構が検出され，その際，第Ⅱ層（Ｐ３の文明ボラを含む）に覆われていることが確認されていた。そこで，平成17年度の本調査では畝状遺構の分布範囲を明らかにするため，５ヶ所に確認トレンチを設定し（37～41トレンチ），詳細の把握に努めた。

その結果，谷部上段（Ｆ～Ｈ－13～16区），中段（Ｅ，Ｆ－17，18区）では，時期の特定できない造成土が確認され，自然堆積土の下から文明軽石の存在は確認できたが，畝状遺構の確認までには至っていない。谷部下段（Ａ～Ｅ－19～25区）では，畝状遺構の広がりについて調査区境を中心に調査を実施し，畝状遺構が調査範囲のさらに南側に展開していることが確認された。

新たな確認調査の結果，畝状遺構は，傾斜の緩やかな谷部下段にのみ存在することが明らかとなった。すなわち，谷部のほぼ中心部を中心とした狭い平坦地を利用した営農が行われていたことが判明した。

本調査は，調査区を上段，中段，下段と区分し，具体的な調査方法として，第Ⅱ層の残存状況を把握することを第一とした。調査では，傾斜面であることから流入土が厚いところでは４mに達する場所もあり，側壁の崩壊等に注意しながら，畝状遺構の把握に努めた。

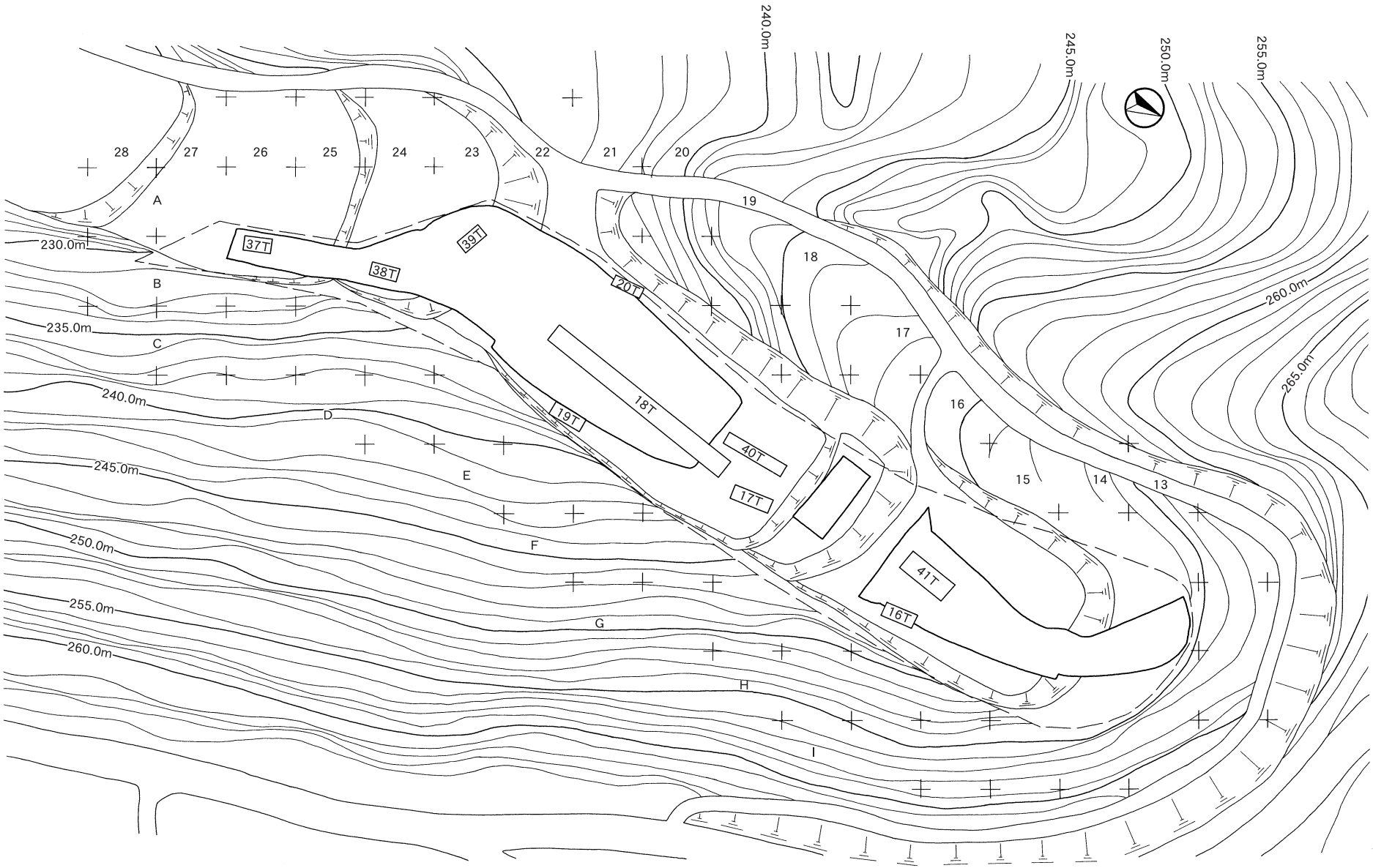
その結果，上段～中段では，古代～中世の土坑や溝状遺構が検出し，下段では，中世の畝状遺構と古代～中世の土坑や溝状遺構を検出している。

出土遺物は，縄文土器，古墳時代，古代，中世，近世と幅広く出土しているが，基本的には高所からの流入，転入と判断され，遺構時期を特定できるところまで至っていない。

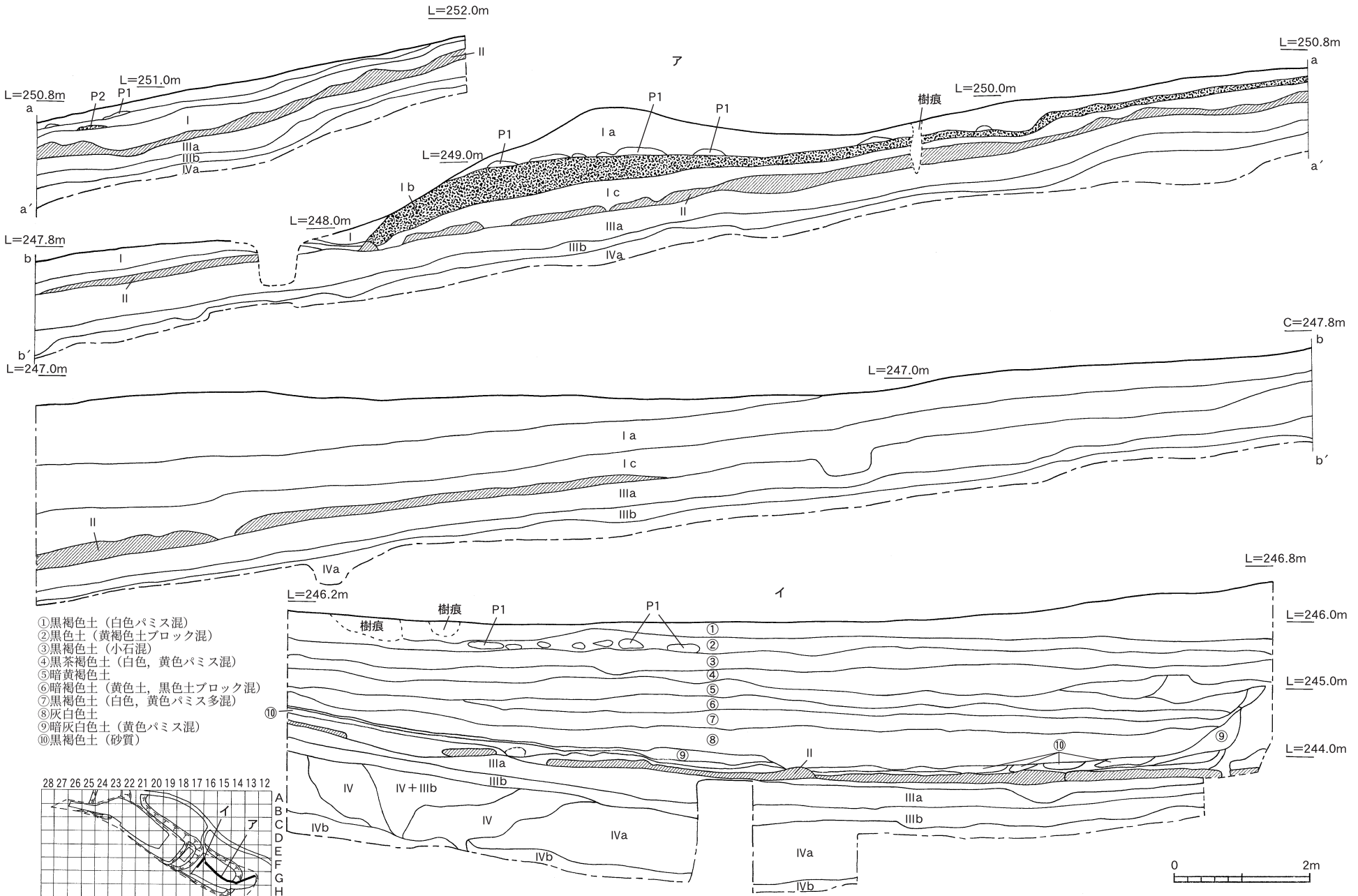
第２節　谷部の層位（第19～21図）

地形の特性から大量の土砂が長年に渡り流れ込み，谷を埋めていったと考えられる。その途中で何カ所か土砂が滞留する場所に自然堰が形成され，緩斜面を形成したと考えられる。Ⅱ～Ⅳ層については，谷部全体で確認することができた。なお，急斜面では薄く堆積しているが，緩斜面ではやや厚くなる傾向が見てとれる。表層は斜面の自然堆積土と流入土が混在して何層にも重なり合っており，自然堰の部分では約４mを越える部分も見られた。

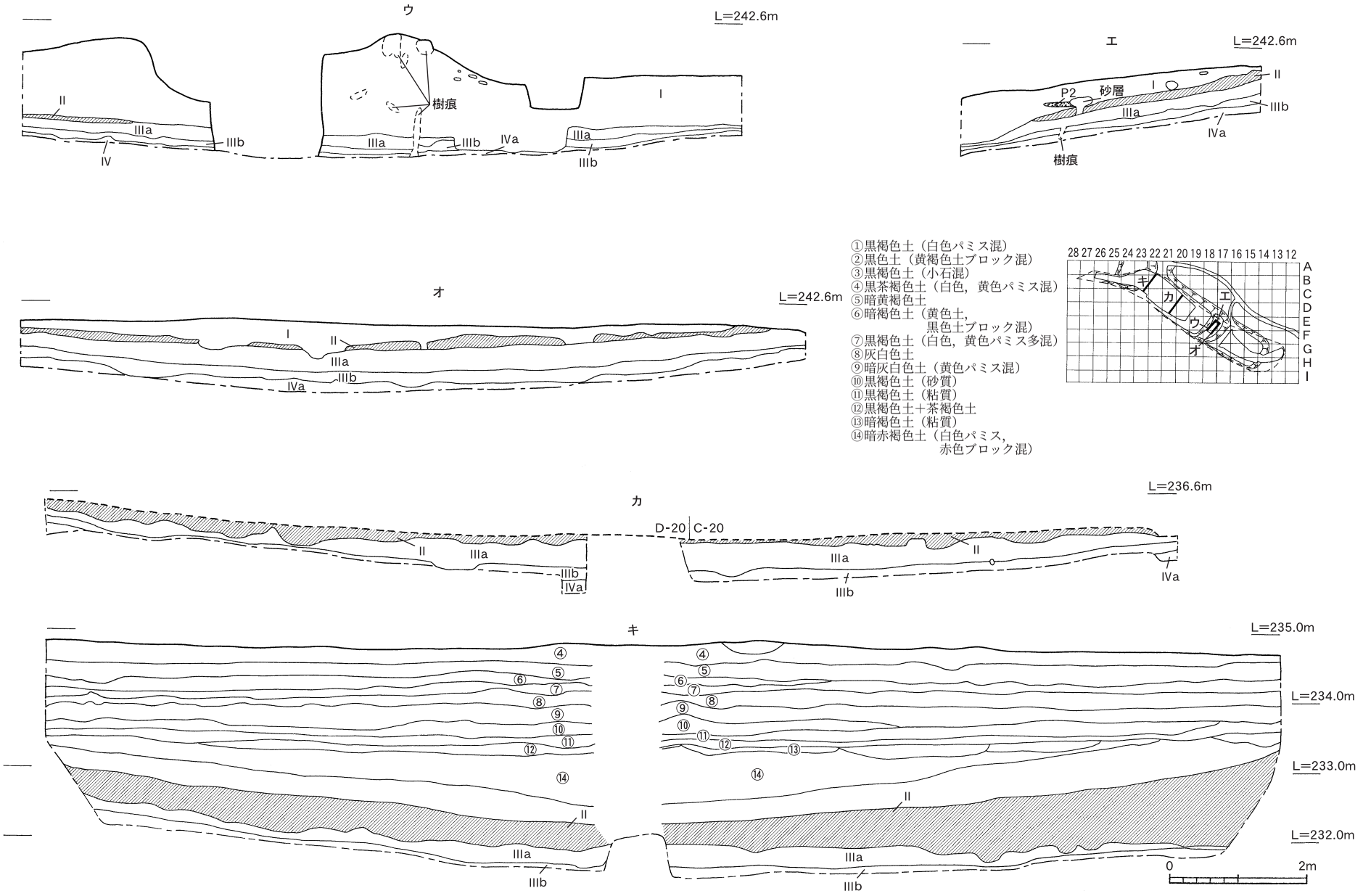
表層の中にはＰ２（安永軽石）の層も含まれ，上部には，部分的にＰ１（大正火山灰）も確認される。Ⅴ層以下については非常に厚く堆積しているため，幅の狭いこの調査区では確認することが難しく，明らかにすることが出来なかった。



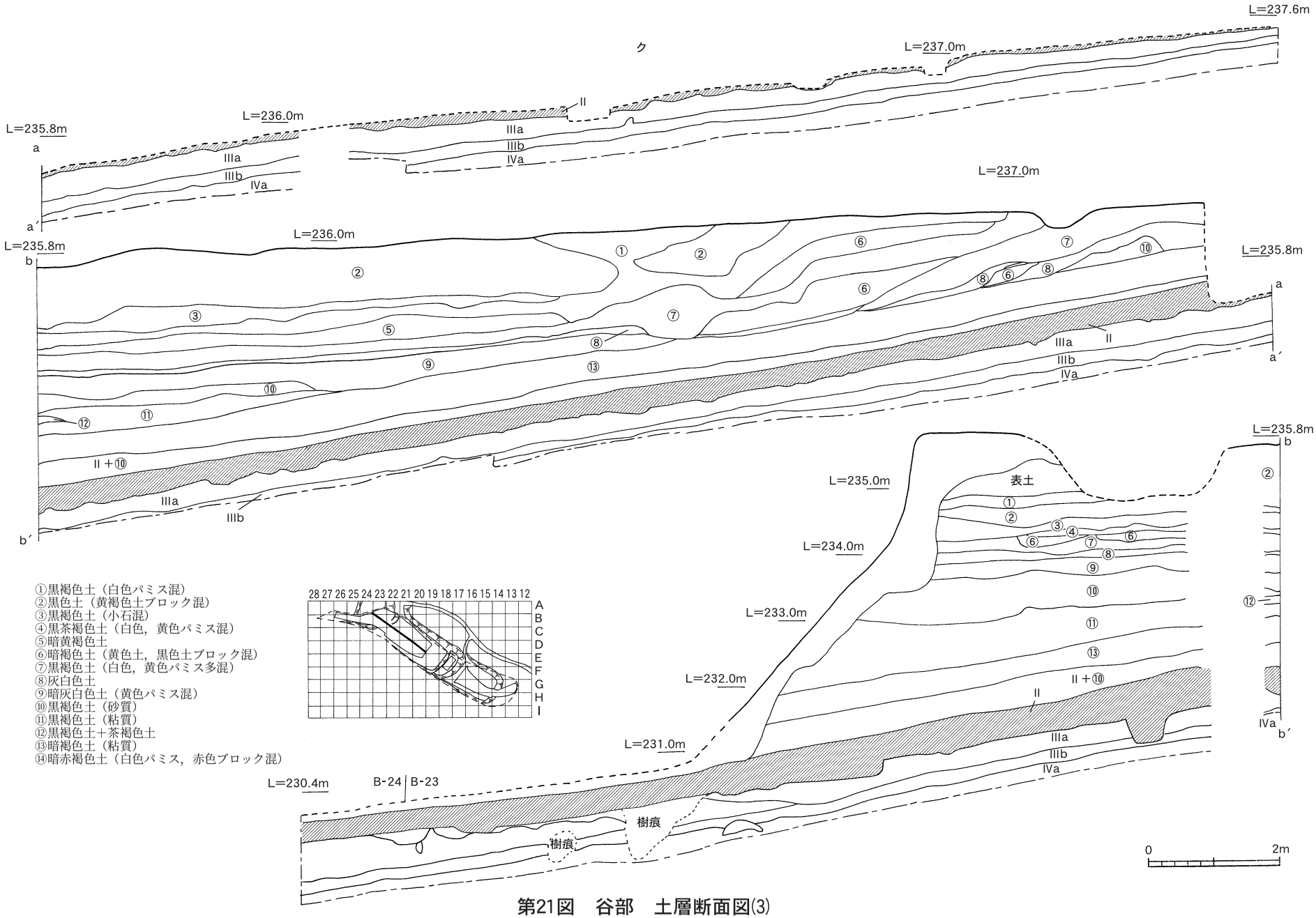
第18図　谷部　調査範囲図及びトレンチ配置図



第19図　谷部　土層断面図(1)



第20図　谷部　土層断面図(2)



①黒褐色土（白色パミス混）
②黒色土（黄褐色土ブロック混）
③黒褐色土（小石混）
④黒茶褐色土（白色，黄色パミス混）
⑤暗黄褐色土
⑥暗褐色土（黄色土，黒色土ブロック混）
⑦黒褐色土（白色，黄色パミス多混）
⑧灰白色土
⑨暗灰白色土（黄色パミス混）
⑩黒褐色土（砂質）
⑪黒褐色土（粘質）
⑫黒褐色土＋茶褐色土
⑬暗褐色土（粘質）
⑭暗赤褐色土（白色パミス，赤色ブロック混）

第21図　谷部　土層断面図(3)

第３節　検出遺構（第22～32図）

谷部での古代～中世と判断できる遺構は，Ⅲｂ～Ⅳ層で溝状遺構が７条，土坑が37基，中世～近世の遺構は，Ⅲａ層上面で畝状遺構１群，土坑４基を検出しているが，中には時期不明の大型土坑も検出している。

１　古代～中世（第22～25，30，31図）

古代～中世の溝状遺構は，谷の傾斜に沿って北側から南側へ向かって形成され，土坑は１ｍ前後の浅いものが上段側に集中し，下段では並んで検出された。

⑴　溝状遺構（第22～24，30，31図）

溝状遺構は，Ⅳ層上面にて上段で２条，下段で５条の計７条が検出された。

溝状遺構１（第22，30図）

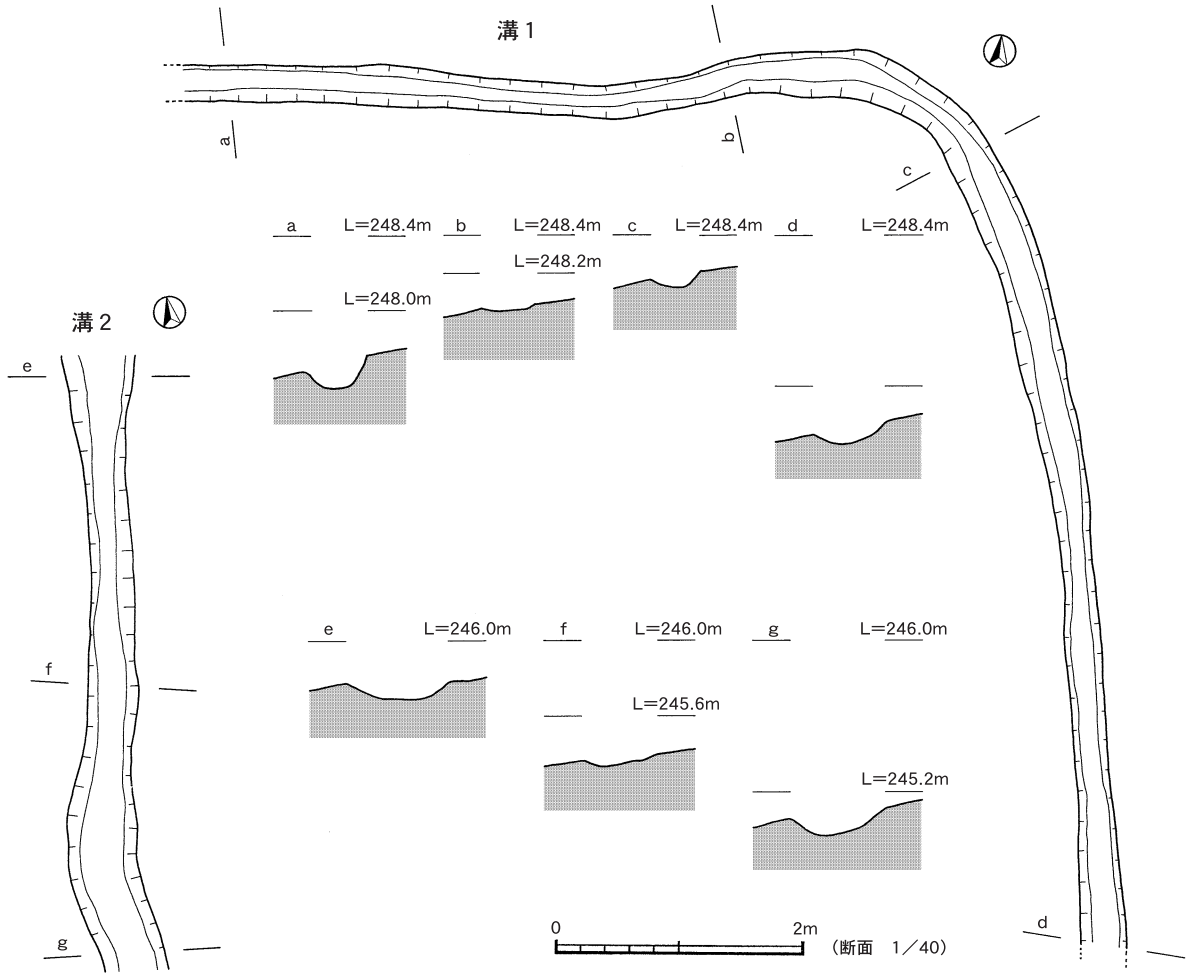
Ｇ，Ｈ－14，15区のⅣ層上面で，谷部調査区の上段から検出された。西方向から東方向へ直線的に延びた後，直角に近いＬ字状に屈曲しながら南下するように検出され，屈曲の角度は約100°である。検出された溝の規模は，平均して長さは，13.3m，幅33㎝，検出面からの深さが17.5㎝で，断面形態は逆台形を呈している。掘り込みの底面に平坦面は見られず，水の流れによりできたと思われる凸凹が続いている。屈曲部の標高地が最も高く，そこから西方向へ傾斜角５°，南方向へ傾斜角10°と地形に沿って流れており，下流側へ向かうほど溝が深くなっている。西方向は調査区外へと延びており，南方向は途中で消失するため全体像は明らかでないが，さらに谷側の溝状遺構２へつながる可能性が高い。埋土は黒褐色土が主体であり，流れ込んだと思われる黄褐色土や黄色パミス，小礫などが混在していた。

溝状遺構２（第22，30図）

Ｇ－16区のⅣ層上面で，溝状遺構１の南側から検出された。溝状遺構１の消失した南端の延長線上に当たることから，連続する遺構ではないかと考えられるが，直線にして約10m離れていることから，ここでは別の遺構として取り扱うこととする。検出された溝の規模は，長さは５ｍ，幅48㎝，検出面からの深さが18㎝で，断面形態は逆台形を呈しており，西側にわずかに傾斜している。傾斜角約10°の斜面を流れたと思われ，掘り込みの底面に平坦面は見られず，凸凹が続いている。上流側，下流側共に消失しており検出されなかったので，延長線上にある溝状遺構１との関係などは不明である。埋土は溝状遺構１とほぼ同じで，黒褐色土が主体であり，黄褐色土や黄色パミス，小礫などが混在していた。埋土中より遺物は出土しなかった。

溝状遺構３（第23，31図）

Ｂ～Ｄ－20～22区のⅣ層上面で，谷部調査区の下段から検出された。Ｄ－20区側からＢ－22区へ向けて，南北方向へ直線的に延びるように検出され，21，22区境では南西方向へわずかに蛇行して延びている。検出された溝の規模は，長さが30m，平均して幅43.3㎝，検出面からの深さが15㎝で，断面形態は皿状を呈している。谷部調査区の下段のⅣ層上面は，南北方向に全体が傾斜しており，中心部は少し低くなっている。その低くなった部分に沿うようにして，溝状遺構３が検出されている。やや流れの緩む蛇行部分の幅は約60㎝と，上下より広く，深さもわずかに浅くなっている。掘り込みの底面に平坦面は見られず，溝状遺構１，２と同様に，水の流れによりできたと思われる凸凹が続いている。溝は傾斜面に沿って南北方向にまだ延びていたと思われるが，北端，南端ともに



第22図　谷部　古代～中世　溝状遺構１，２

消失していた。埋土は暗褐色土が主体であり，黄色パミス，小礫なども含まれる。

溝状遺構４（第23，31図）

Ｂ－22区のⅣ層上面で，溝状遺構３の南西側へ約１m離れて検出された。溝状遺構３と同じように，Ａ－23区側へ向けて南北方向へ直線的に延びるように検出されたが，溝状遺構３より約15°西よりに流れている。検出された溝の規模は，長さが５m，平均して幅41.6㎝，検出面からの深さが17㎝で，断面形態は深皿状を呈している。底面に平坦面は見られず，凸凹が連続している。埋土は暗褐色土が主体で溝状遺構３とほぼ同じである。北端，南端ともに消失しており，溝の全体像は不明であるが，溝の延びる方向は谷部調査区の傾斜とほぼ同じである。

溝状遺構５（第23，31図）

溝状遺構４の西側約20㎝の位置に並んで検出された。流れの方向は南北方向で，検出された溝の規模は，長さが6.3m，平均して幅46㎝，検出面からの深さが13㎝と長さが１mほど長いが，溝状遺構４とほぼ同規模である。断面形態はレンズ状を呈しており，底面に平坦面は見られない。北端，南端ともに消失しており溝の全体像は不明である。溝状遺構４と埋土もほぼ同じ暗褐色土であり，方向，規模も同じであることから，ほぼ同時期に形成された自然流路の可能性も考えられる。

溝状遺構６（第23，31図）

溝状遺構４と５を，北東から南西方向へ断ち切るように検出された。検出された溝の規模は，長さが1.6m，平均して幅25㎝，検出面からの深さが18㎝である。断面形態は逆台形を呈している。埋土は，黒褐色土に黄色土や小礫が混ざるものの少量である。溝状遺構４，５とは切り合い関係ばかりではなく，方向や規模，埋土の違いから，異なる時期に形成された溝である。

溝状遺構７（第24，31図）

Ｂ～Ｃ－21～22区のⅣ層上面で，溝状遺構４～６の西側約３m離れて検出された。溝状遺構４，５と同じように，南北方向へ直線的に延びるように検出された。検出された溝の規模は，長さが9.2m，上流側に当たる北側の平均は幅24㎝，検出面からの深さが５㎝，下流側に当たる南側の平均は幅50㎝，検出面からの深さが６㎝と南側へ向かうほど幅が広く深さが浅くなっている。断面形態は全体を通して浅い皿状を呈している。底面に平坦面は見られず，谷部調査区の他の溝状遺構と同じく凸凹が連続している。埋土は暗褐色土が主体である。

北端，南端ともに消失しており，溝の全体像は不明であるが，溝の延びる方向は谷部調査区の傾斜とほぼ同じである。

⑵ **土坑**（第25，30，31図）

古代～中世の土坑は，計37基がⅣ層上面で検出された。埋土は主にⅢ層の黒褐色土が中心であり，暗褐色土や黄褐色土が混ざるものもある。平面形状の特徴から，大きさ径が１m未満の円形（Ⅰ類），１m前後の円形（Ⅱ類），楕円形（Ⅲ類），その他の定形（Ⅳ類），不定形なもの（Ⅴ類）に分けられる。そこで，各調査区の年代ごとの土坑をこの５種類に分類し述べる。さらに深さや断面形状，埋土などにより細分化されるが，特徴的なものについては個別に取り上げる。

土坑７～15は，Ⅰ類の土坑である。土坑７～９はやや浅めのレンズ状であるが，土坑10～15は45～90㎝の深さを持ち，側面の崩落で黄褐色土の混ざるものもある。

土坑16～37は，Ⅱ類の土坑である。土坑16～28は径70～80㎝程度のものであり，土坑17を除いて浅い皿状を呈し，黒褐色土の中に黄褐色土の小ブロックや炭化物が見られた。土坑29～37は径が１mを越えるやや大型で，薄いレンズ状を呈するものが多い。谷部調査区の上段に集中が見られ，重なりが見られないことからほぼ同時期に使用されたと思われるが，使用目的は不明である。土坑34の埋土中より土師器片が出土し図化した。（第35図29）

土坑38～40は，Ⅲ類の土坑である。土坑38，39は約1.2×0.7mの楕円形を呈し，断面形は浅い皿状である。埋土は黒褐色土を主体とするもので，底面に凸凹が見られる。

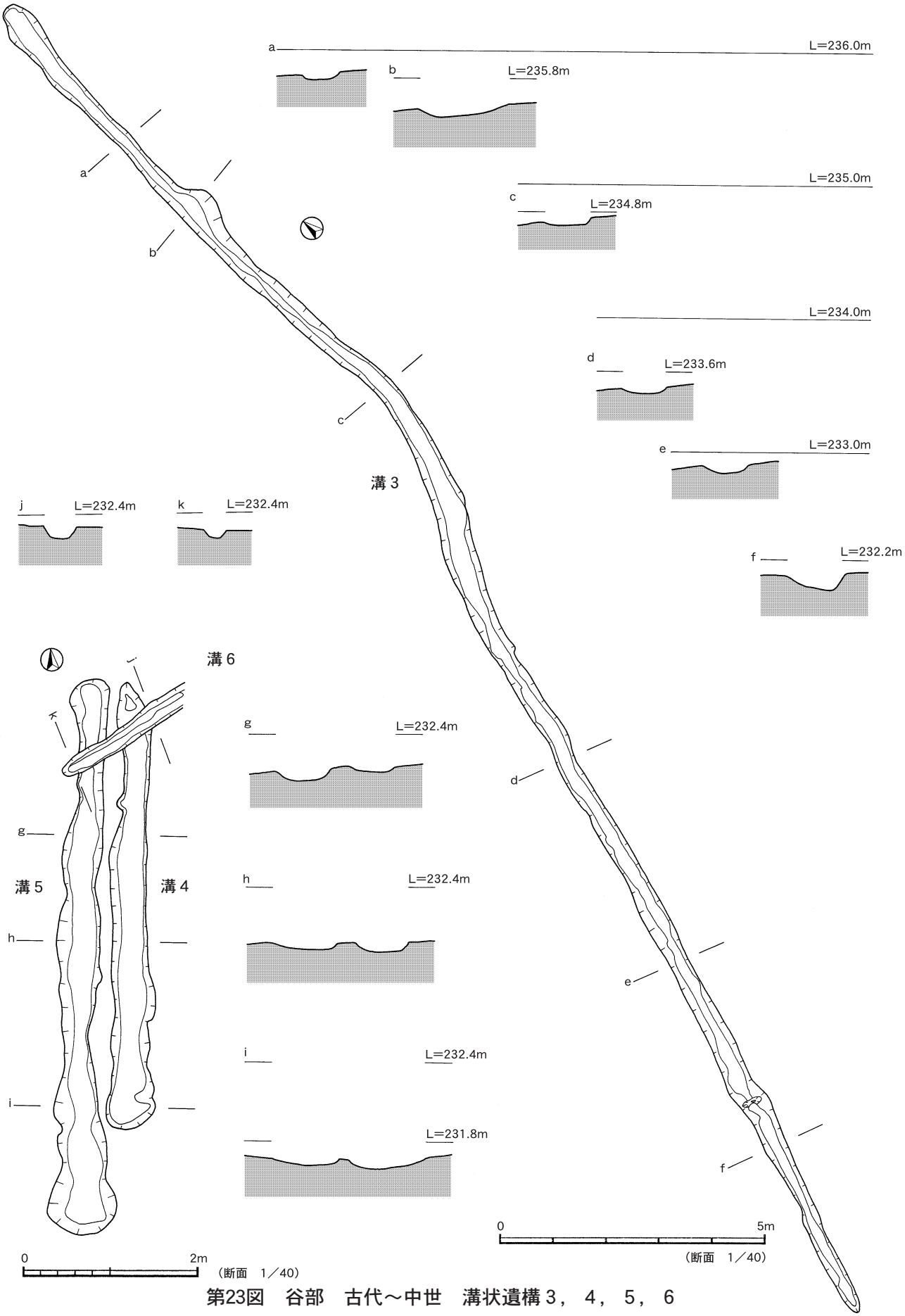
土坑41は，105×97㎝の方形を呈したⅣ類の土坑であり，断面形は浅い皿状である。

土坑42，43は，Ⅴ類に当たる不定形の土坑である。土坑42は，底面の北側に径が約30㎝の小ピットを確認した。土坑43は底面に平坦面を持ち，西隅に径60㎝前後の掘り込みが見られた。

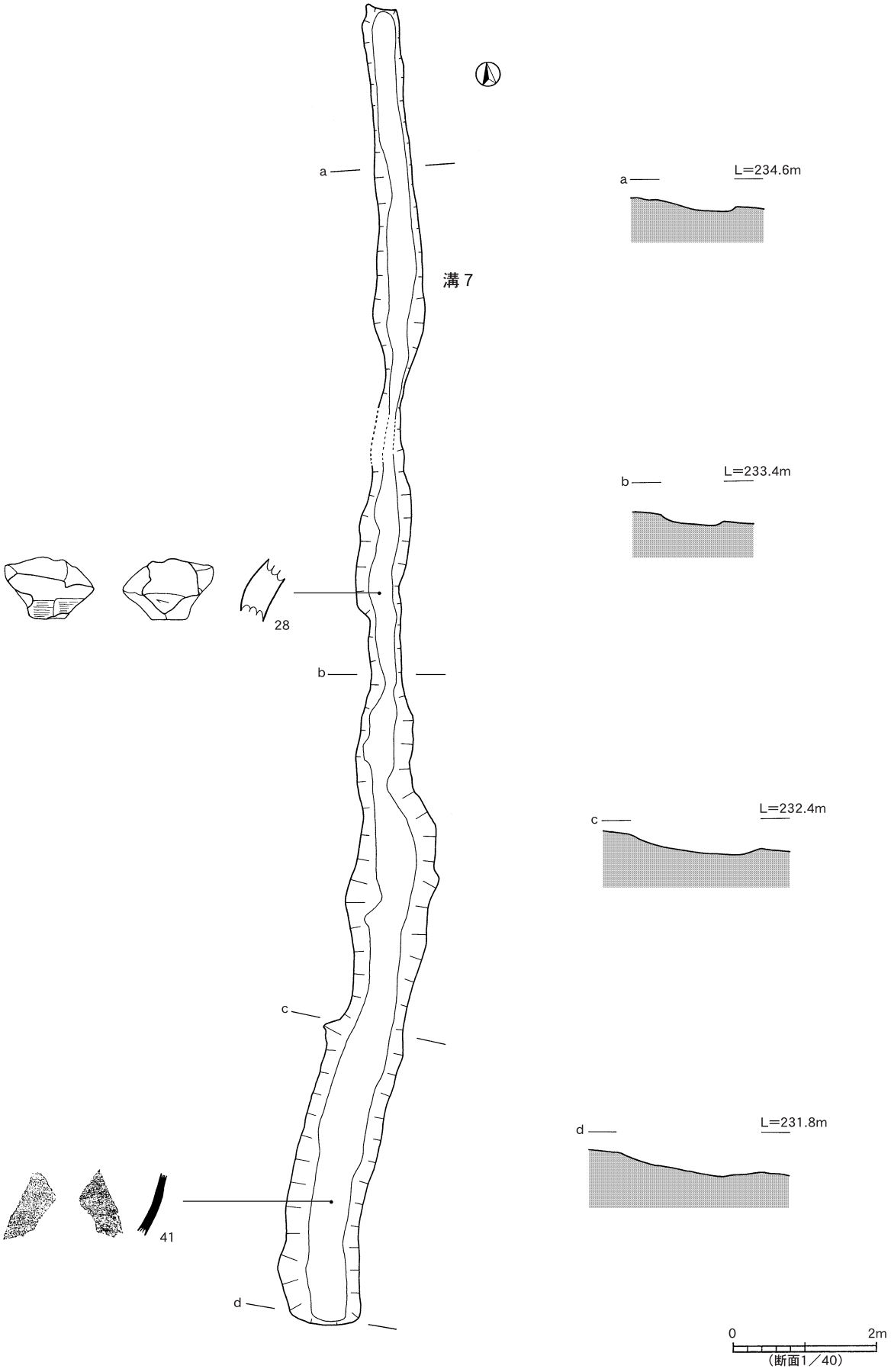
各土坑の計測値については，第２表に示した。

土坑40（第25図）

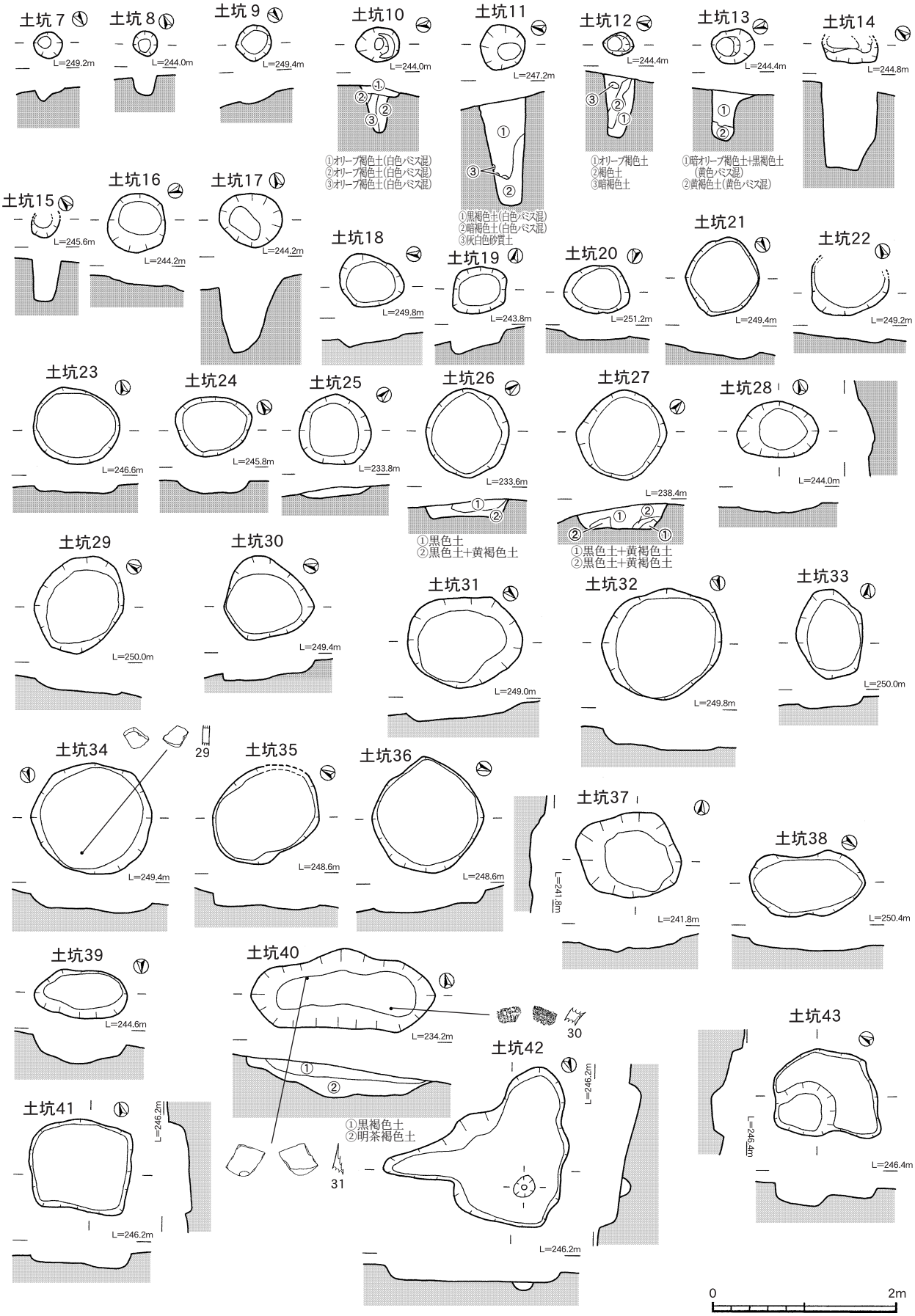
Ｂ，Ｃ－21区で検出された。平面径は198×82㎝の楕円形を呈し，深さは35㎝である。断面形はボウル状を呈し，底面に平坦面は見られない。埋土は，底面付近が暗褐色土，上位が黒褐色土でありやや粘質を持つ。埋土中より数点の礫と土師器片が２点出土し図化した。（第35図30，31）



第23図　谷部　古代～中世　溝状遺構３，４，５，６



第24図　谷部　古代～中世　溝状遺構 7



第25図　谷部　古代～中世　土坑

2　中世～近世（第26～29，32図）

中世～近世の遺構は，Ⅲａ層上面で畝状遺構１群，土坑４基が検出された。畝状遺構は，平成13年度の確認調査において既に存在が判明していたが，谷部の下段側全面に広がっていた。北側の尾根をひとつ越えた谷で検出された畝状遺構１と形状が同じであった。範囲はさらに南側の調査区外へ延びていたが，上段では確認することができなかった。

土坑44～46は，畝状遺構を切るように検出され，時期を特定する遺物の出土がなかったため，時期不明の土坑47を含めて中世～近世の遺構として取り扱った。

⑴　畝状遺構２（第26～28，32図）

Ａ～Ｅ－19～24区のⅢａ層上面にて，ほぼ全域から畝状遺構が検出された。

谷部調査区の下段に当たる斜面において，Ⅱ層（文明ボラ）直下の黒色土を掘り込む形で畝間が残存し，東西方向を基調とした畝間の列が，斜面を下る階段状に規則的に並んで検出されている。畝の凸部の残存は確認されておらず，文明ボラに覆われることで畝部が押しつぶされ堆積物に押し流されたと思われる。

畝間は畝状遺構１と形状が類似し，長さ１～2.3m，幅21.5㎝前後，深さ約15㎝を基本とする細長い楕円形を呈す凹みが階段状に配置され，谷底方向へ向かって規則的に並んでいる。一方，この畝状遺構を断ち切るように直交する溝状の窪地が検出されているが，これについては，その検出状況及び前後関係から，一時的に発生した自然流路痕と推測され，畝間の長さ，幅，深さともに安定しない部分も多い。

埋土のほとんどは文明ボラであるが，一次堆積物ではなく，二次堆積物や細粒な黒色土がブロック状に混在したり，小規模な堆積を繰り返し交互に堆積したりしている。断面は底面に凸凹を持つ不定型なものが多く，農耕具痕も想定できるが実証はできていない。

レベル的に標高の高い東側の列は，水流による影響をあまり受けておらず，長さ２m前後，幅は約25㎝，畝間の中心間隔は80～95㎝と安定している。階段状に並んだ畝間の列は規則的に南へ向かって延びているが，東端に当たる列はわずかに中央方向へ向きを変えている。反対に影響を受けやすい西側の列はばらつきが多く長さ0.9m，幅は20㎝前後と，東側よりも小さめとなっている。

⑵　土坑（第29，32図）

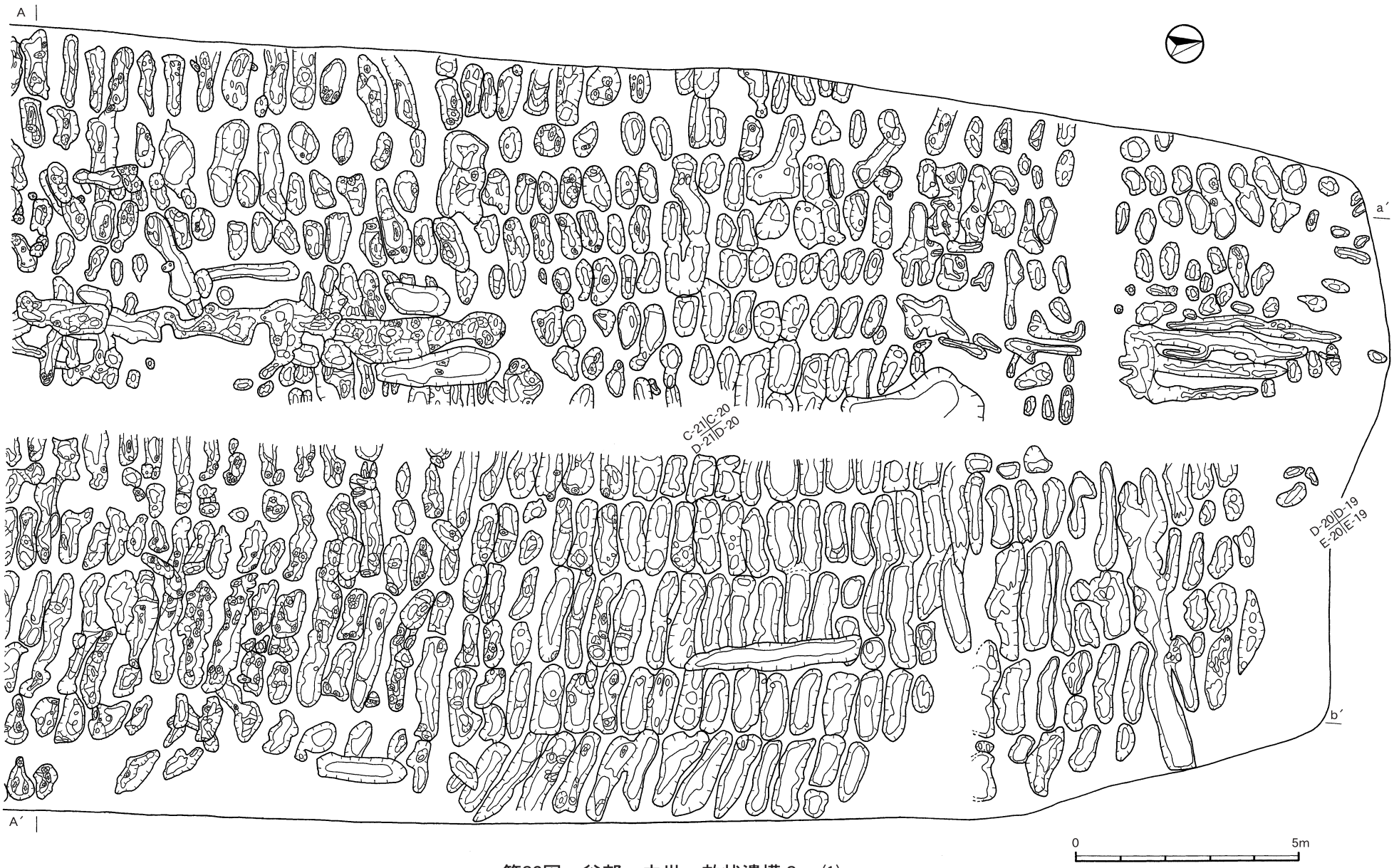
土坑は計４基検出され，土坑44～46は楕円形（Ⅲ類），土坑47は不定形である。（Ⅴ類）

土坑44～46（第29図）

土坑44～46は，Ｂ，Ｃ－23，24区で畝状遺構２を切るように検出された。いずれもⅢａ層上面で検出され，埋土は白色パミスや黄色パミスが混在した黒褐色土が主体であり，畝状遺構の埋土とは異なる。平面径は，平均して393×60.7㎝の楕円形を呈し，深さは約31㎝である。断面形は逆台形を呈し底面に平坦面を持つ。掘り込み面は検出面よりも上位と推定されるので貯蔵目的と思われる。

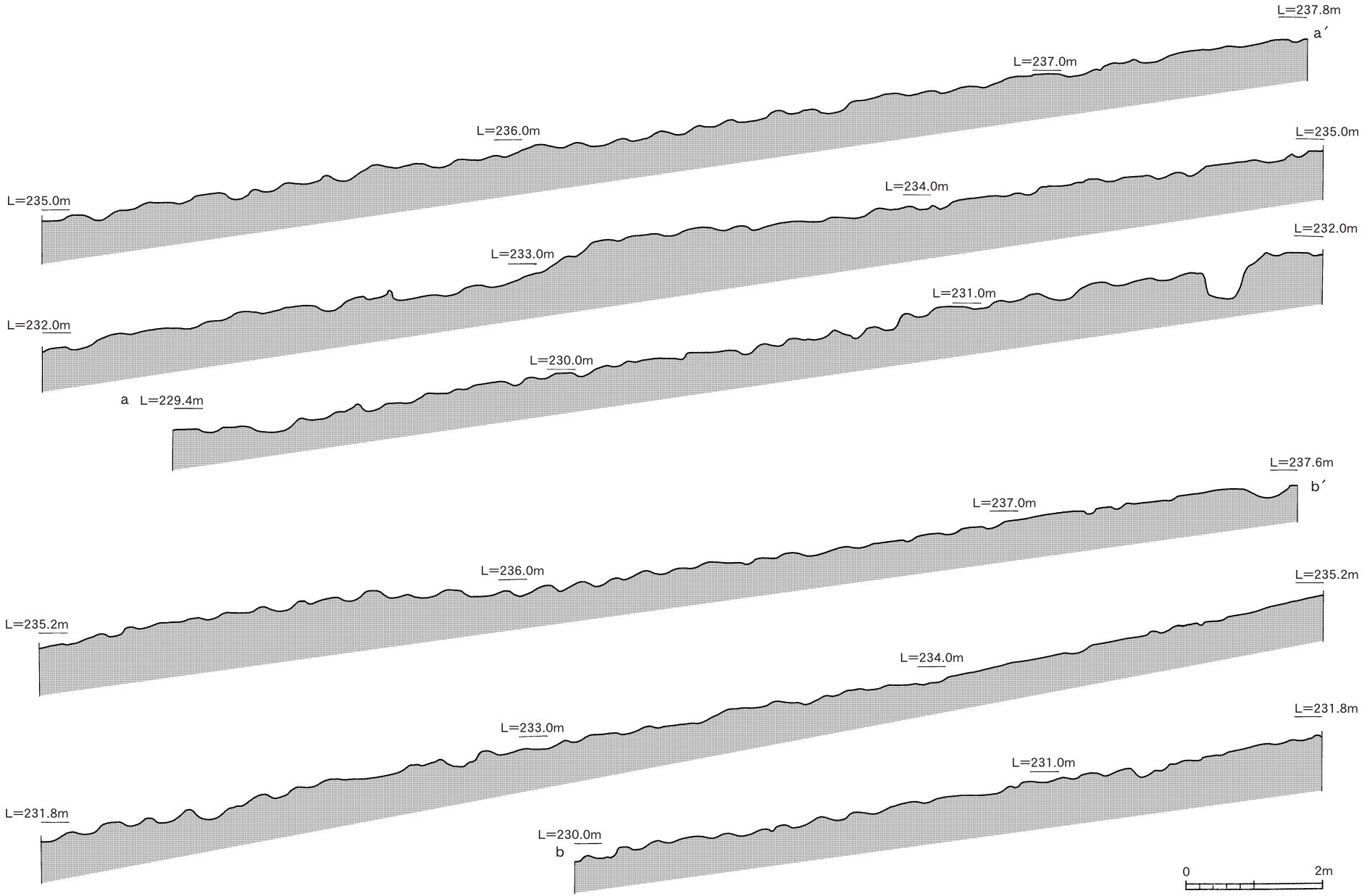
土坑47（第29図）

Ｆ－16区のⅣ層上面で検出された。検出された平面径は466×340㎝，深さは約１mと大型である。埋土は黄褐色土が主体であるが，黒色土，暗褐色土，赤橙色土などが混在していた。底面近くで炭化物が大量に見られ，底面は赤褐色に変色していた。埋土中より数点の土器片が出土したが流れ込みの可能性も強く，時期不明土坑と判断した。（第35図32）

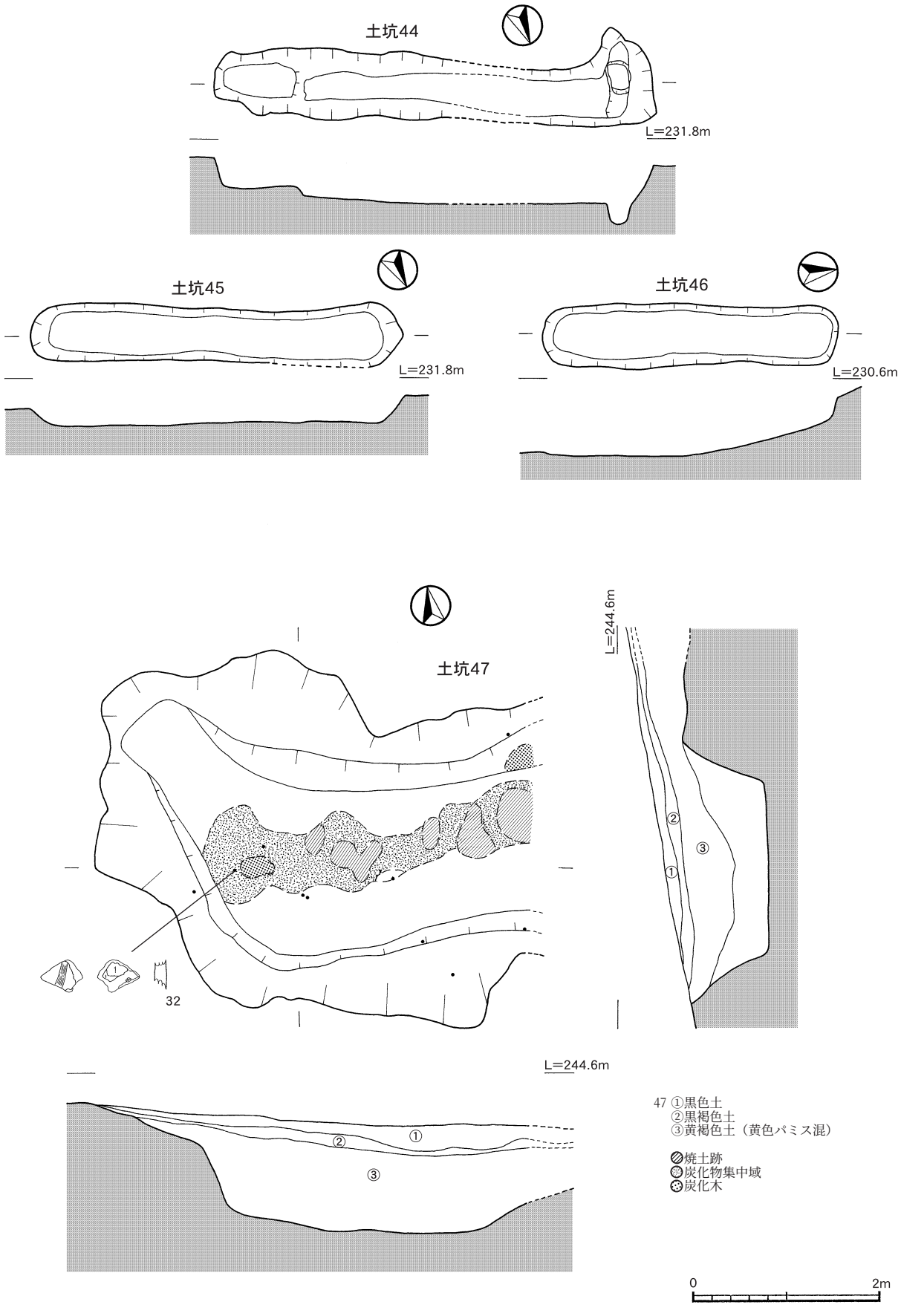


第26図　谷部　中世　畝状遺構２－(1)

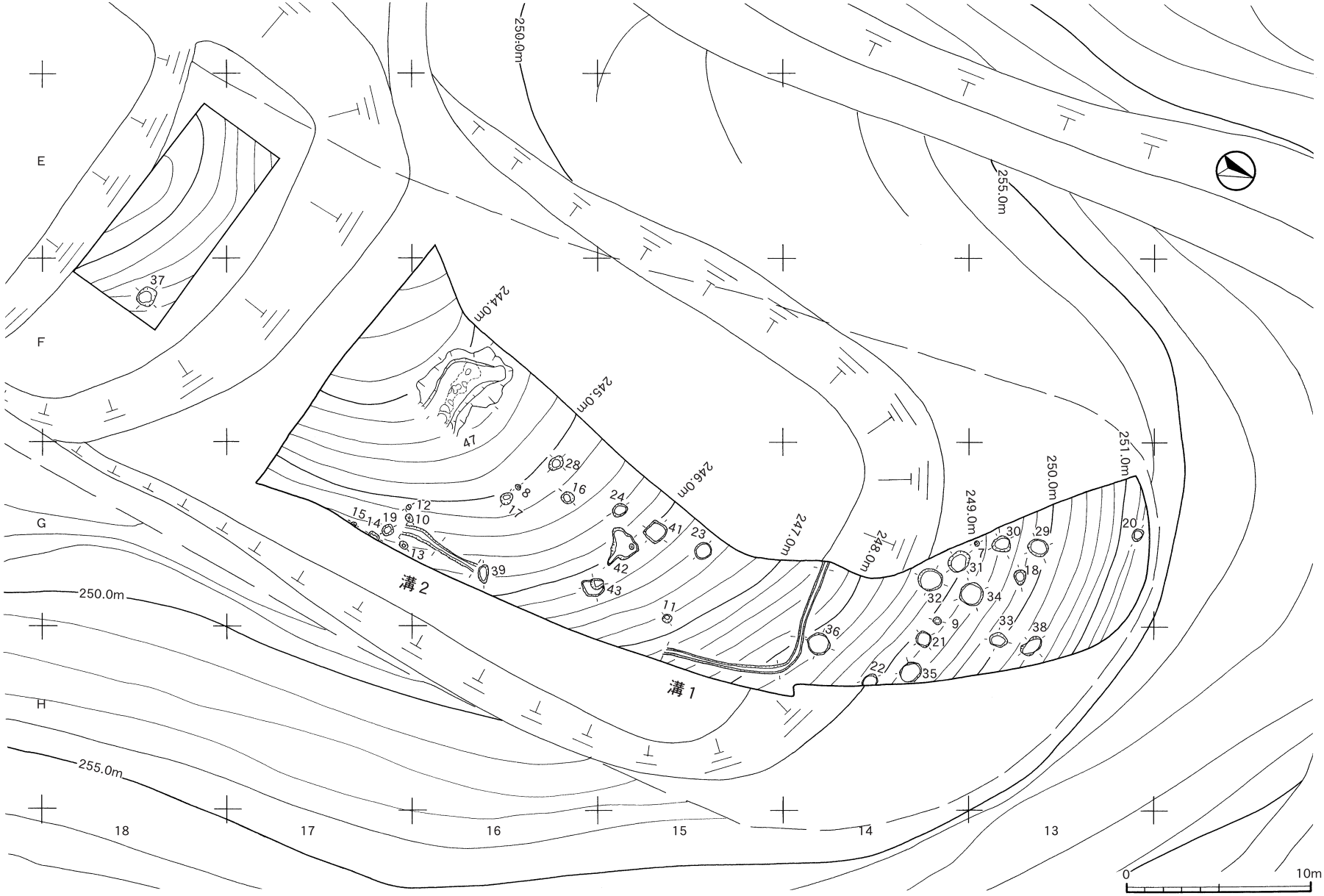
第27図　谷部　中世　畝状遺構２－(2)



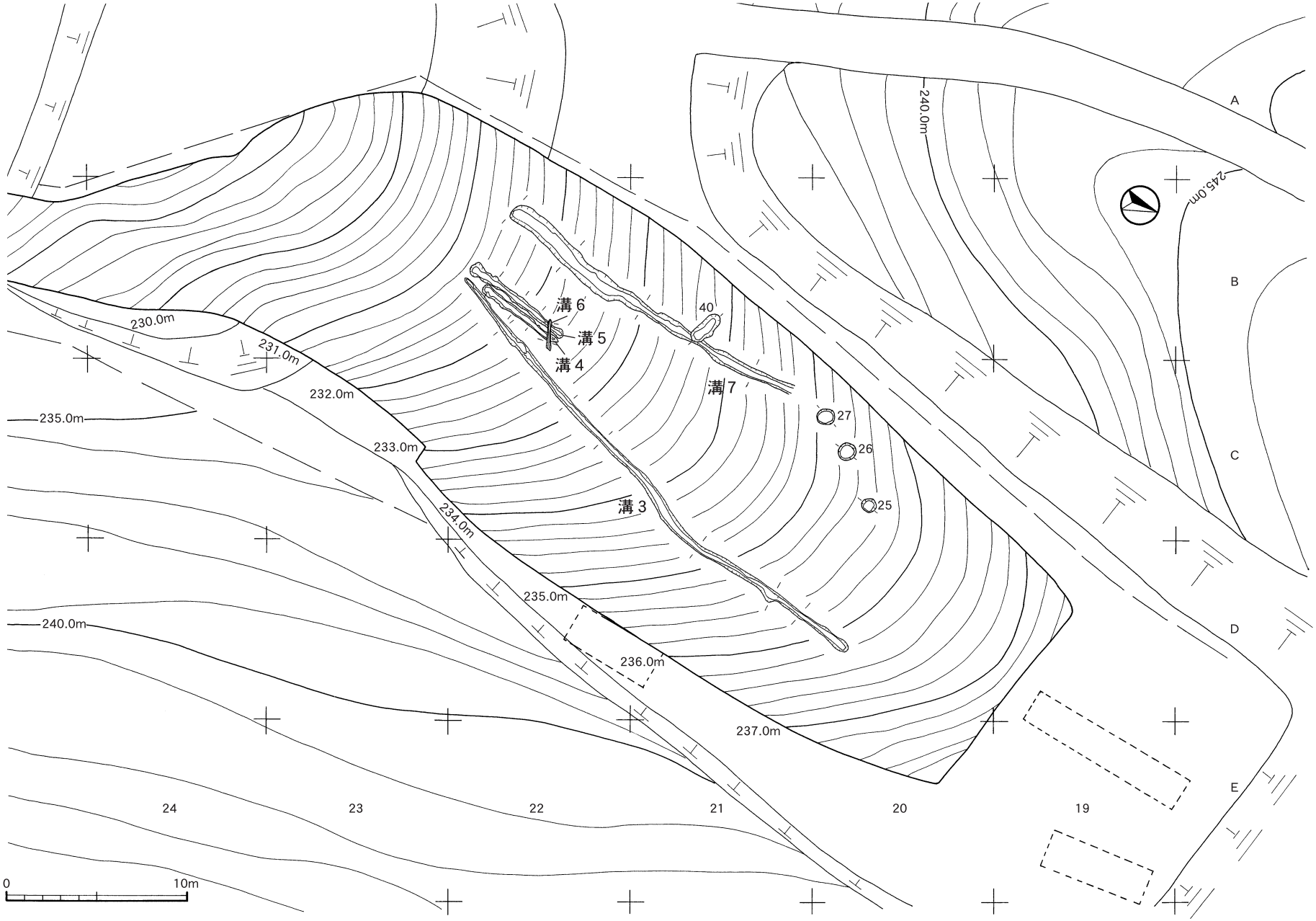
第28図　谷部　中世　畝状遺構２　断面図



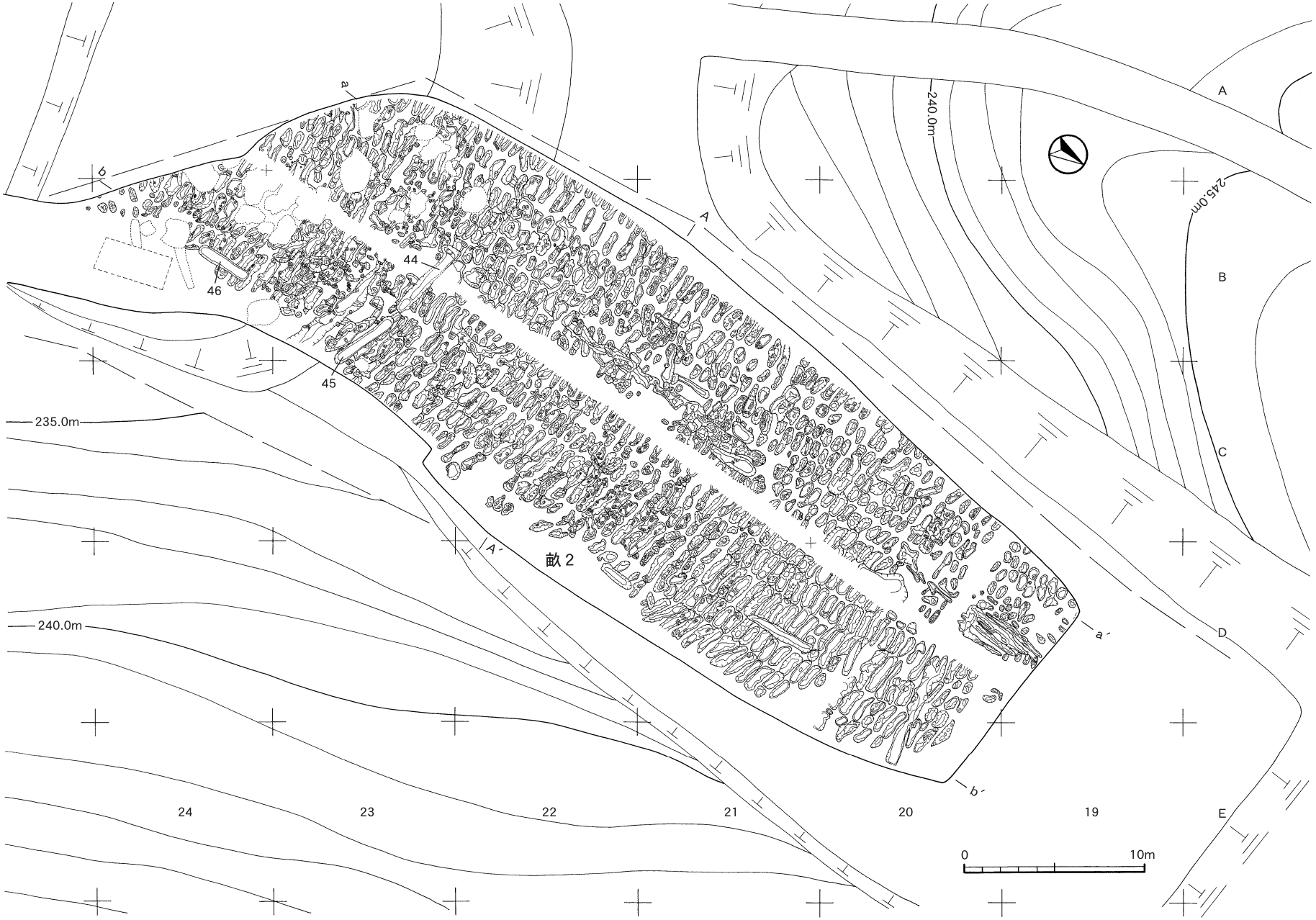
第29図　谷部　中世～近世　土坑



第30図　谷部　古代～中世　遺構配置図(1)



第31図　谷部　古代～中世　遺構配置図(2)



第32図　谷部　中世～近世　遺構配置図

第２表　谷部　土坑計測表

土坑番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
7	30	26	10
8	27	24	20
9	38	37	6
10	50	37	48
11	51	46	91
12	33	24	65
13	46	37	49
14	59	－	90
15	30	－	45
16	66	64	6
17	68	58	64
18	69	54	5
19	65	52	15
20	71	53	5
21	87	76	7
22	81	－	2
23	92	75	7
24	82	64	12
25	78	76	10
26	96	90	14
27	98	97	22

土坑番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
28	87	61	8
29	111	83	6
30	97	87	13
31	125	100	10
32	127	120	13
33	96	72	8
34	130	120	8
35	123	95	3
36	120	120	8
37	118	96	9
38	125	63	10
39	99	52	26
40	198	82	35
41	105	97	12
42	190	152	11
43	110	94	23
44	468	62	50
45	397	56	23
46	314	64	20
47	466	340	106

第３表　狩俣遺跡　石材分類表

石　材	概　　要
黒耀石	黒色を基調としガラス光沢を示す。断口は貝殻状。光を通すタイプ，光を通さない漆黒のタイプ，光を通し不純物を多量に含むタイプがある。割ったときに鋭利な切片が得られるので，石鏃など石器の材料として利用される。
玉　随	微結晶質の石英。同心円状の縞模様がある玉随を「めのう」と呼ぶ。縞の色は青灰色や濃赤色を基調としている。
チャート	微晶質の石英より緻密で硬い岩石。非晶質珪酸の殻を持つ放散虫などの遺骸が，微細な砕屑粒子とともに堆積し，続成作用を受けたもの。色調は灰色と黒色を基調としている。
玄武岩	代表的な火山岩で，全体的に黒っぽく見える。斜長石，かんらん石，輝石を含むが，まったく見えないものもある。ガラスや小さな磁鉄鉱を含むものもある。
安山岩	中性の火山岩で，日本の火山の多くはこの安山岩からできている。基調は灰色と黒色で輝石を多く含んだものや，表面が風化しているものもある。
凝灰岩	火山の爆発で飛ばされた火山灰が，陸上だけでなく海底にも堆積し，固まったものである。色調は灰色を基調としている。
花崗岩	地球上で一番多い深成岩で，全体に白っぽく見え，黒雲母がばらまかれたようになっている。ピンク色をしたカリ長石を含むきれいなものもある。
頁　岩	堆積岩のひとつで，泥岩が長い間続成作用を受け，数㎝～10数㎝くらいの厚さで地層面に沿って割れたものである。
砂　岩	径２～１／16㎜の粒子で構成される砕屑岩。水流の安定している河川では，粘土質粒子の混入が少ないものができやすい。色調は灰色を基調としている。
泥　岩	砂岩と同じく堆積岩の一種である。水流が弱かったり不安定なところでできやすい。色調は灰色を基調としており，大きめの石英を多量に含んでいる。

※参考文献　「検索入門　鉱物・岩石」保育社　「学研の図鑑　鉱物・岩石・化石」学習研究社

第４節　出土遺物

谷部の出土遺物点数は，狩俣遺跡全体の約７％弱にあたる419個である。なお，調査区域が急斜面に立地すること，また斜面上に不安定な流入土が厚く堆積していることなどから，調査の安全確保のためⅣ層面以下の掘り下げは実施していない。現在の畑地の下には厚い流入土の堆積物が何層にも重なり合っているが，大部分でⅡ層が残されていた。

調査の結果，縄文時代晩期，古墳時代，古代～中世，近世の遺物が認められた。出土の主体は古代の土師器や須恵器であるが，小破片も多く，土器40点，石器６点を図化した。

１　縄文時代（第33図１～８）

⑴　土器（第33図１～４）

１は深鉢形土器である。胴部はやや内弯気味に立ち上がり，口縁部は外反する。口縁部には貼り付けの刻目突帯がめぐる。外面には横方向の粗いヘラケズリによる凹凸がある。内面には横方向のナデが施されている。

２～４は底部片で外面には編布圧痕が残り，内面は丁寧にナデが施されている。２の焼成は比較的良好である。

⑵　石器（第33図５～８）

５は佐賀県多久産の安山岩，６は頁岩製の打製石鏃である。５は先端が欠損し，基部の抉りは比較的浅く正三角形を呈する。６はドーム状の形状を呈するもので，基部の抉りは深い。

７は頁岩を素材とした磨製石斧である。全面を丁寧に研磨し，右側面には表・裏面からの擦り切り技法による加工痕がみられ，薄くなった後に切断したと判断される。

８は玉随製の縦長剥片の素材とした石匙で，裏面に主要剥離をそのまま残している。

２　古墳時代（第34図９～11）

９は甕で胴部から底部までが残る。底部はやや外反し端部は丸くおさまる。底部は中空で，脚部内面の天井部は丸い。体部内外面ともにハケ目状の工具痕，体部と底部の境には指頭圧痕，脚部内面には爪跡が残る。また，内面にはススが付着している。

10は甕の口縁部片でやや外反気味になる。内外面ともにナデが行われている。

11は甕の底部片である。端部は外反気味で丸くおさまる。内外面ともにナデが行われている。

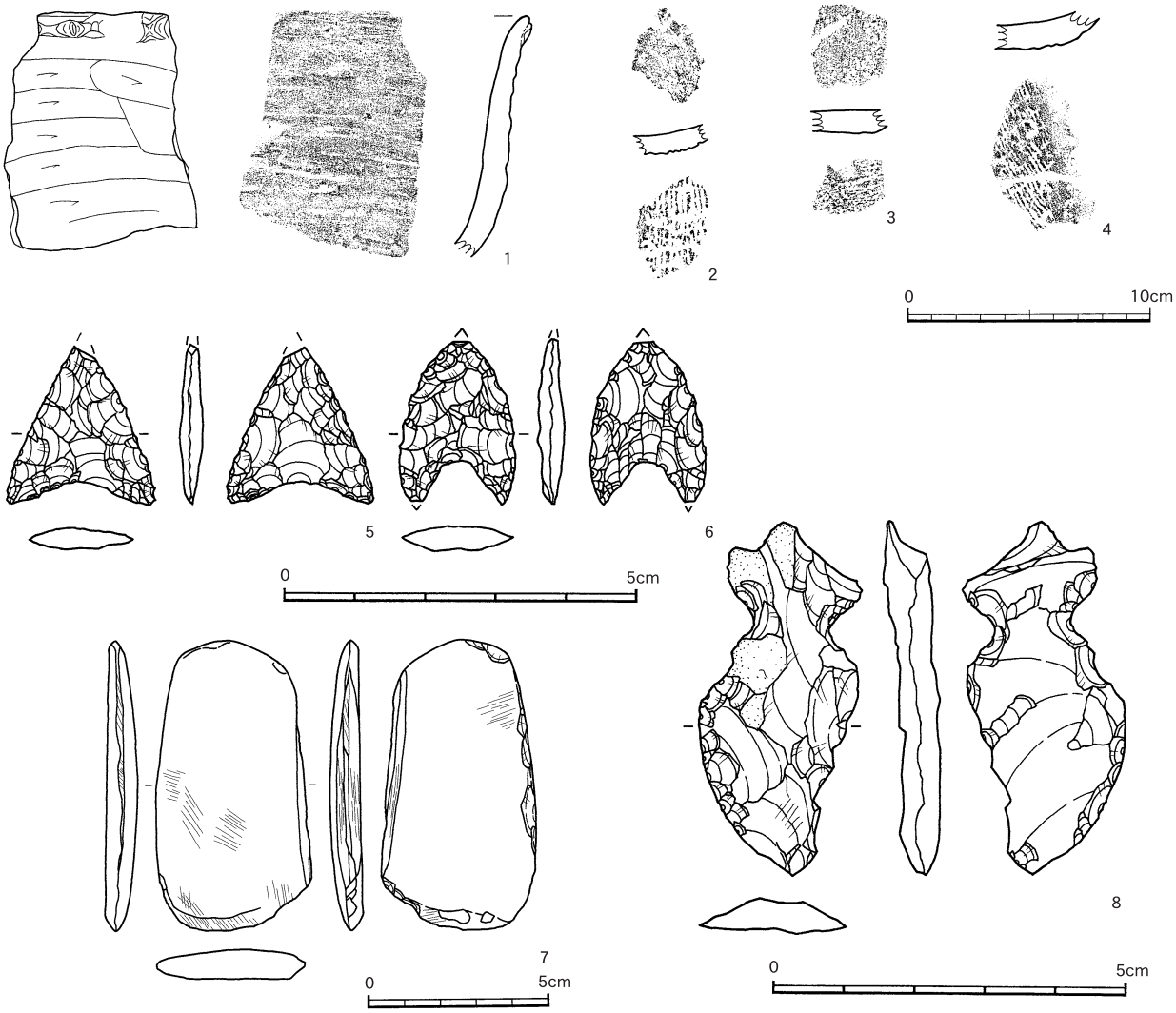
３　古代（第35図12～44）

⑴　土師器（第35図12～33）

12～15は坏の口縁部片で，内外面ともにヨコナデが行われている。14は復元口径が14.2㎝になり，焼成は良好である。

16は坏で底部から口縁部まで残り，口径が12.2㎝，器高4.4㎝，底径6.2㎝になる。体部と見込みの境は明確である。底部はヘラ切りの後に調整を行っていると思われる。体部内外面にはヨコナデが，内底面には成形時の調整痕が同心円状に残る。焼成は良好である。

17～24は坏の底部片である。復元底径は17，19，20が6.2㎝，18が7.0㎝，21が5.0㎝，24が8.8㎝になる。体部内外面はヨコナデが残る。いずれも底部切り離しはヘラ切りである。多くは切り離し後に底部の調整を行っているが，18，19は行われていない。22，23は底部切り離しの後，底部の端の調整が行われておらず，切り離しの際にはみ出した粘土の痕が残っている。



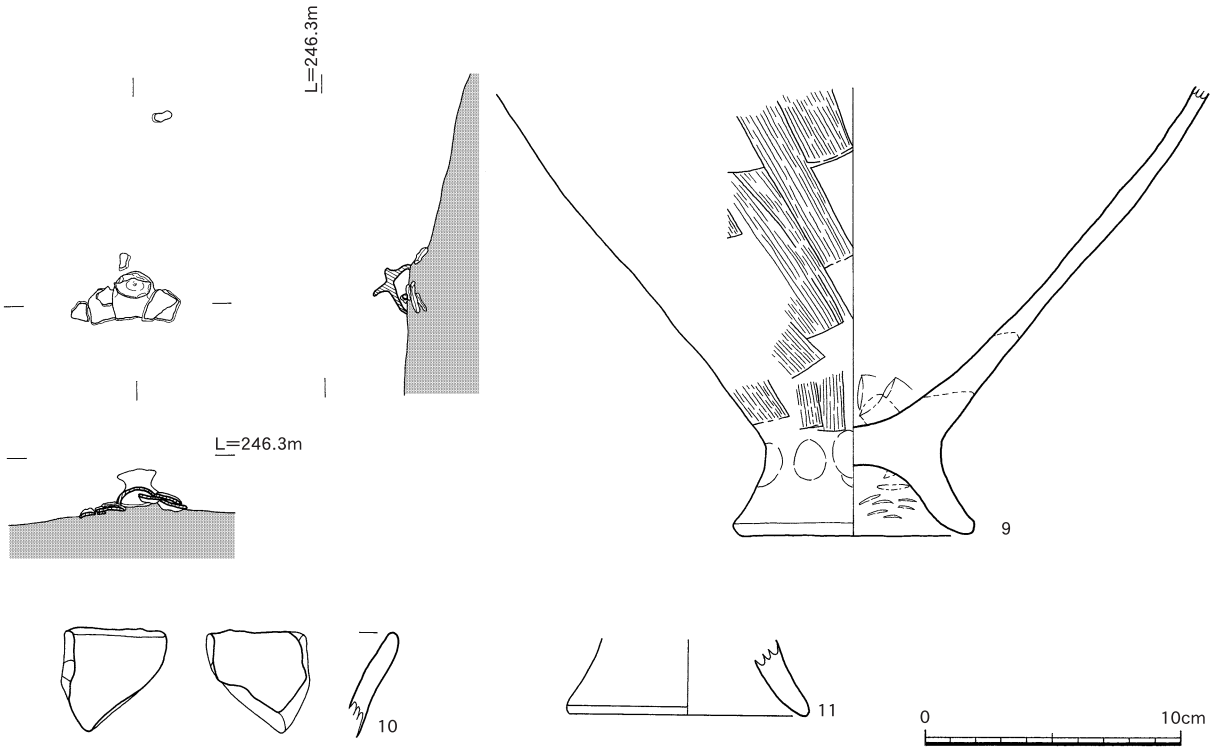
第33図　谷部　縄文時代の遺物

25は埦の底部片である。高台径は推定7.6㎝になる。高台は貼り付けられており，外反気味に開き，端部は丸い。内外面ともにヨコナデが残る。また，高台内も丁寧に調整が行われている。

26～33は甕の破片と思われる。26は口縁部片で直線的である。焼成は良好で内外面ともに丁寧なナデが施されている。27は外反気味で調整はナデが行われている。28は溝２出土の頸部片である。外面はナデ，内面の上方はナデが，下方はヘラケズリが行われて，その境には稜ができている。29は土坑11出土の胴部片である。細片のため器形はわからないが，内外面ともにナデが行われている。30は土坑39出土の頸部片である。外面には籾痕と考えられる凹みがある。外面にはヘラケズリ，内面は比較的丁寧なナデが行われている。31は土坑39出土の胴部片である。内面は大部分が削れている。内面は丁寧なナデが行われている。32は土坑２出土の胴部片で，外面はナデ，内面はヘラケズリが行われている。33は胴部から頸部の破片である。胴部から口縁部へ向けて頸部が強く外反する。頸部の内面は稜を持たない。内外面ともに丁寧なナデが行われ，焼成は良好である。

⑵　**黒色土器Ａ類**（第35図34～38）

34～38は黒色土器Ａ類の破片で，外面はヨコナデ，内面はミガキが行われている。34～36は口縁



第34図　谷部　古墳時代の遺物

部片で，36は復元口径11.8㎝になる。

37は体部下半の破片で器種はわからない。他に比べ外面の色は赤味が強い。

38は埦の底部片である。高台が貼り付けられていたようだが剥がれている。

⑶　**墨書土器**（第35図39）

39は黒色土器Ａ類の体部片で外面に墨書がある。小破片で文字は判読できない。外面はヨコナデが，内面はミガキが行われている。

⑷　**須恵器**（第35図40～42）

40は壺の肩部の破片である。肩部に頸部が貼り付けられていたようだが剥がれている。外面には自然釉がかかり格子目タタキが残る。内面には同心円状の当て具痕が残る。頸部が剥がれた部分にも叩き目の痕が残っている。

41は溝２出土の体部片である。外面は丸みを帯び，器壁は薄い。

42は壺もしくは甕の胴部片である。外面に格子目タタキが，内面には平行文当て具痕が残る。

⑸　**軽石製品**（第35図43，44）

43，44は軽石製品の破片である。

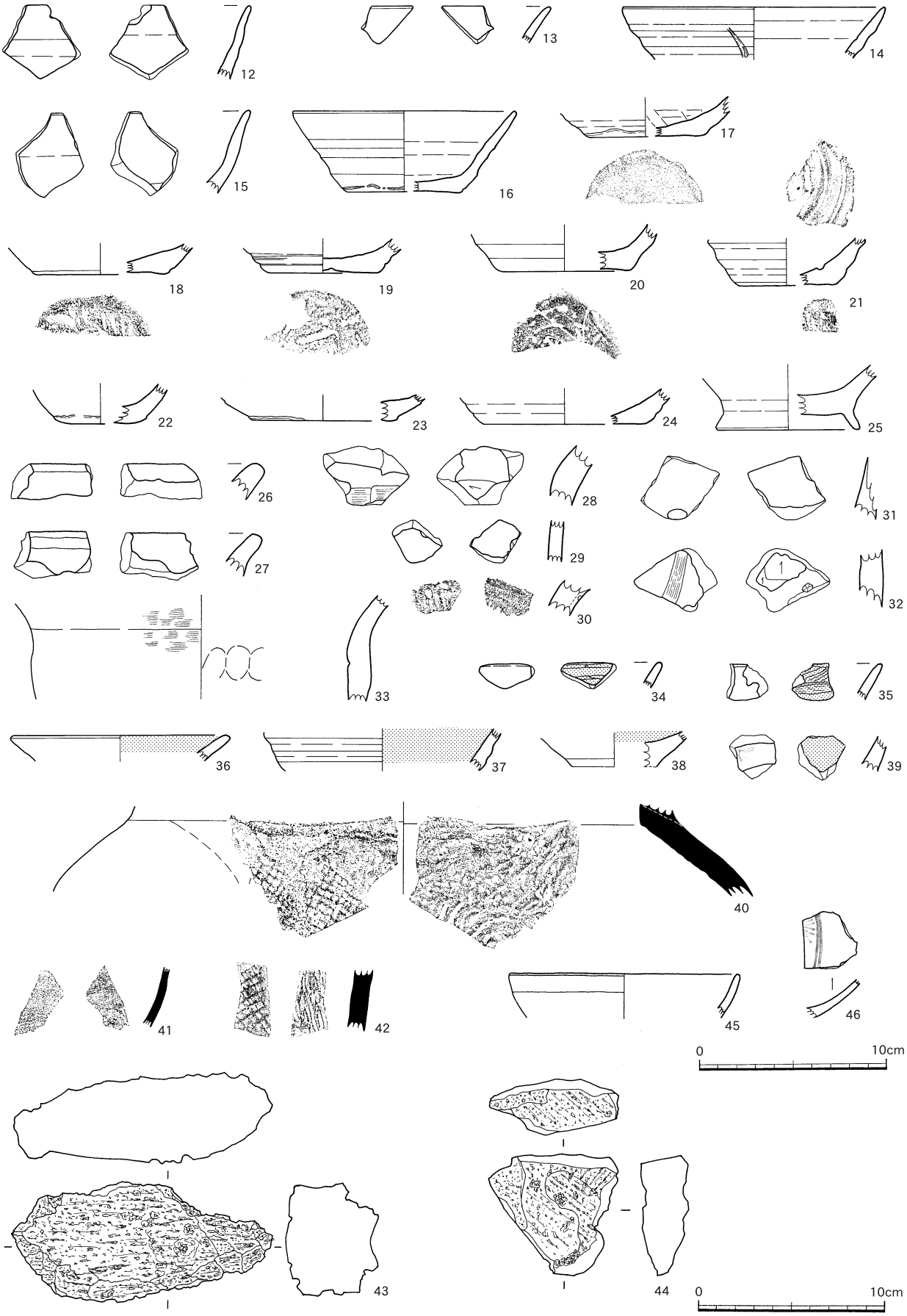
43は平坦な面が一面のみ残存する。残存面はやや赤く変色しており，火を受けた可能性がある。

44は全面に加工が確認され，比較的平坦に加工された面とケズリをそのまま残した凹凸で構成されている。なお，ケズリの幅は２㎝程度である。

４　**近世**（第35図45，46）

45は埦の口縁部片である。焼成は良好で外面には黒色の釉がかけられている。口縁部付近でわずかであるが稜を持つ。全体の形はわからないが，天目のような器形になると思われる。

46は磁器の碗もしくは皿の体部片である。釉色は灰色がかっている。文様は２条の圏線とその中に５本の線で松のような文様が描かれている。



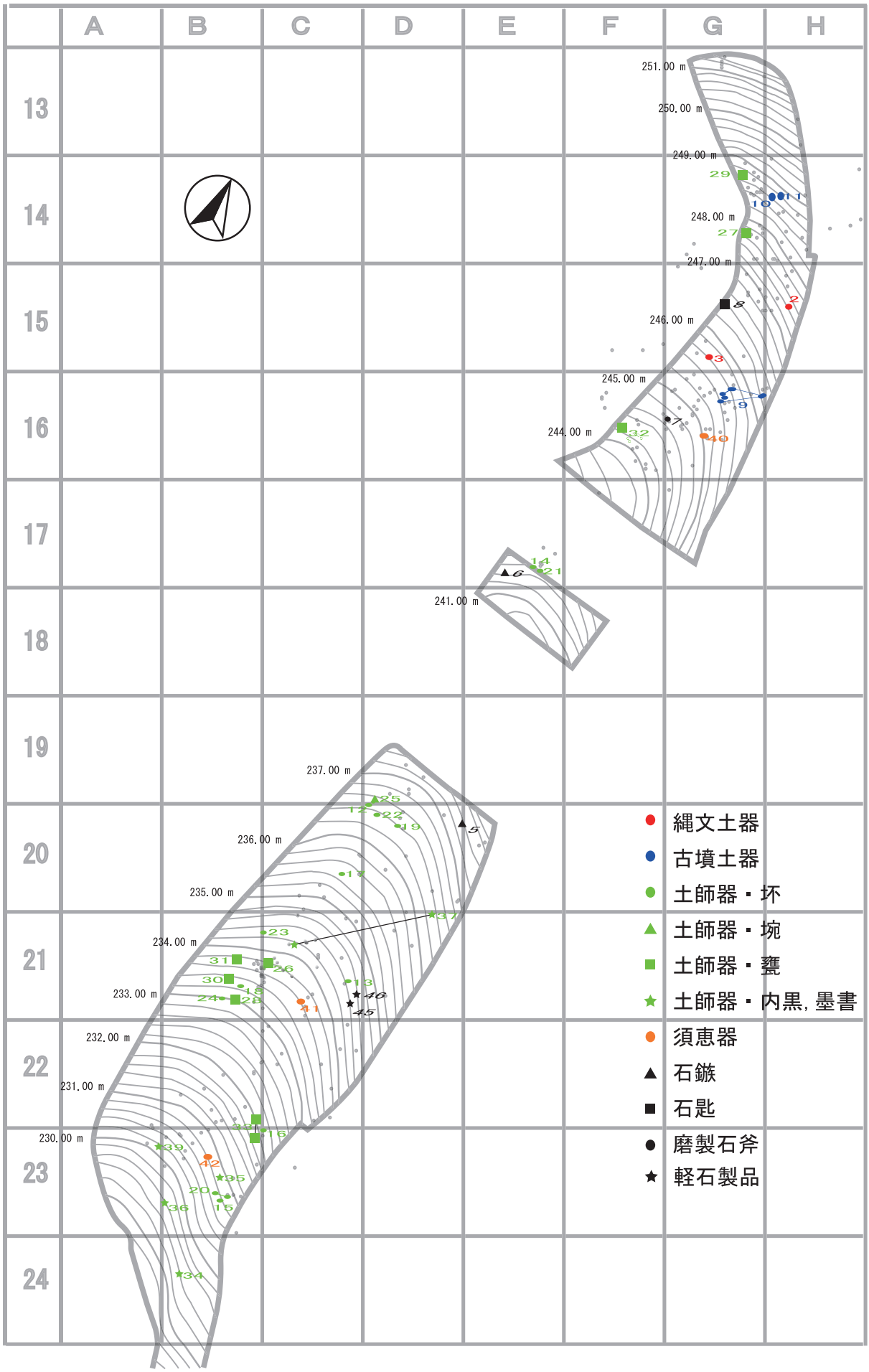
第35図　谷部　古代～近世の遺物

第４表　谷部　土器観察表

挿図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整		色調		胎土						分類	備考
										外面	内面	外面	内面	長石	石英	角閃	雲母	砂粒	その他		
33	1	G-17	Ⅲb	縄文土器（晩期）	深鉢	口縁部	－	－	－	口縁刻目突帯 条痕→ナデ	条痕→ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙		○		○	○	金雲母	Ⅻ	16T一括
	2	H-15	Ⅳa	縄文土器（晩期）	－	底部	－	－	－	条痕	ナデ	褐	にぶい黄橙	○	○			○	赤色粒 細砂	Ⅻ	
	3	F-16	Ⅳa	縄文土器（晩期）	－	底部	－	－	－	条痕	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙					○	赤色粒 細砂	Ⅻ	
	4	G-17	Ⅲb	縄文土器（晩期）	－	底部	－	－	－	条痕	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙		○			○		Ⅻ	16T一括
34	9	F-16 G-16	Ⅳ Ⅳa	古墳土器	甕	胴部～底部	－	9.0	－	指圧痕 工具ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙	暗灰黄	○	○	○			赤色粒		スス付着
	10	H-14	Ⅲa	古墳土器	甕	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙		○			○	赤色粒		
	11	H-14	Ⅲa	古墳土器	甕	底部	－	9.6	－	ナデ	ナデ	明黄褐	明黄褐		○			○			
35	12	D-20	Ⅲb	土師器	坏	口縁部	－	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	明橙	橙					○	赤色粒 細砂		
	13	D-21	Ⅲb	土師器	坏	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙					○	細砂		
	14	E-17	Ⅲb	土師器	坏	口縁部	14.2	－	－	ヨコナデ	ナデ	橙	橙					○	赤色粒 細砂		
	15	B-23	Ⅲb	土師器	坏	口縁部	－	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄褐	にぶい黄褐					○	細砂		
	16	D-21	Ⅲb	土師器	坏	口縁部～底部	12.2	6.2	4.4	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙		○			○	赤色粒 細砂		
	17	C-20	Ⅲb	土師器	坏	底部	－	6.2	－	ナデ	ナデ	橙	橙					○	赤色粒 細砂		
	18	C-21	Ⅲb	土師器	坏	底部	－	7.0	－	ヘラケズリ ナデ	ナデ	橙	浅黄橙					○			
	19	D-20	Ⅲa	土師器	坏	底部	－	6.2	－	ヨコナデ	ナデ	明褐	明褐					○	赤色粒 細砂		
	20	B-23	Ⅲb	土師器	坏	底部	－	7.2	－	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙					○	赤色粒 細砂		
	21	E-17	Ⅲb	土師器	坏	底部	－	5.0	－	ナデ	ナデ	橙	橙		○			○	赤色粒・細砂小石		
	22	D-20	Ⅲb	土師器	坏	底部	－	3.2	－	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙					やや精良			
	23	C-21	Ⅲb	土師器	坏	底部	－	7.6	－	ヨコナデ	ナデ	橙	橙					○	赤色粒		
	24	C-21	Ⅲb	土師器	坏	底部	－	8.8	－	ナデ	ナデ	橙	橙		○			○	赤色粒 細砂		
	25	C-21	Ⅲb	土師器	埦	底部	－	7.6	－	ヨコナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙					○	赤色粒・細砂小石		
	26	C-21	Ⅲb	土師器	甕	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	褐	にぶい褐		○			○	赤色粒・細砂小石		
	27	G-16	Ⅲa	土師器	甕	口縁部	－	－	－	ナデ	ヨコナデ	にぶい橙	橙		○			○	赤色粒		
	28	B-21	Ⅲb	土師器	甕	胴部	－	－	－	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐		○			○	細砂		溝7
	29	G-14	Ⅶ	土師器	甕	胴部	－	－	－	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐		○			○	細砂		土坑34
	30	B-21	Ⅲb	土師器	甕	胴部	－	－	－	ヨコキザミ	ナデ	褐灰	にぶい橙	○	○			○	細砂		土坑40
	31	B-21	Ⅲb	土師器	甕	胴部	－	－	－	ナデ	ナデ	橙	橙		○			○	細砂		土坑40
	32	F-16	Ⅲb	土師器	甕	胴部	－	－	－	ナデ	ナデ	橙	橙		○	○		○	細砂 小石		土坑41
	33	D-21	Ⅲb	土師器	甕	胴部	－	－	－	ナデ	ナデ	暗褐	灰褐		○			○	小石		
	34	B-24	Ⅲb	内黒土師器	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ミガキ	灰黄褐	黒褐					○	細砂		
	35	B-23	Ⅲb	内黒土師器	－	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	黒褐					○	細砂 小石		
	36	A-23	Ⅲb	内黒土師器	Ⅲ	口縁部	11.8	－	－	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	黒褐					○	細砂		
	37	C-21 D-21	Ⅲa	内黒土師器	－	胴部	－	－	－	ヨコナデ	ミガキ	橙	褐灰					○			
	38	斜面中段	Ⅲb	高台付土師器	埦	胴部	－	4.5	－	ヨコナデ	ナデ	にぶい黄橙	黒褐					○	赤色粒 細砂		
	39	A-23	Ⅲb	内黒土師器・墨書土器	－	胴部	－	－	－	ヨコナデ	ミガキ	にぶい橙	黒褐					○	細砂		
	40	G-16	Ⅲb	須恵器	甕	胴部	－	－	－	自然釉	タタキ痕	にぶい褐	灰					○	細砂		
	41	B-22	Ⅲb	須恵器	Ⅲ	胴部	－	－	－	ナデ	ナデ	緑灰	緑灰					密			溝7
	42	B-22	Ⅱb	須恵器	甕	胴部	－	－	－	タタキ痕	タタキ痕	灰	灰					○	細砂		
	45	中上段	表採	陶器	埦	口縁部	12.4	－	－	ヨコナデ	ナデ	黒褐	黒褐					密			
	46	中上段	表採	磁器	Ⅲ	胴部	－	－	－	施釉	施釉 草花文	灰	灰		○						

第５表　谷部　石器観察表

挿図番号	レイアウト番号	器　種	出土区・層		石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
33	5	石鏃	E-20	Ⅲb	頁岩	2.3	2.1	0.3	1.15	
	6	石鏃	E-17	Ⅲb	チャート	2.4	1.6	0.3	1.26	
	7	磨製石斧	F-16	Ⅳa	ホルンフェルス	8.1	4.3	0.8	48.37	
	8	石匙	G-14	Ⅲb	チャート	4.9	2.3	0.5	5.77	
35	43	軽石製品	D-21	Ⅲb	－	14.1	6.4	5.1	120.00	
	44	軽石製品	D-21	Ⅲb	－	6.5	7	3	28.40	



第36図　谷部　遺物出土状況図

第Ⅳ章　北部の調査

第１節　調査の概要（第37図）

北部の調査は，平成18年５～９月に調査を行った。

北部調査区は本遺跡北部に位置し，主体となる台地に当たる部分である。海抜高は約270mの台地であるが，東側，西側とも大きく開析され，高低差約40mの谷に挟まれた尾根状になっている。中央部調査区とは野首状につながっており，高低差約５m程の小高い台地となっている。調査区の面積は3,320㎡で，南北約120m，東西約70mのゆがんだ菱形を呈している。

平成13年度の確認調査では，市道を挟み西側に３ヶ所，東側に４ヶ所トレンチを設定し調査を行った。しかし，その後の計画変更により東側の２ヶ所（８，25T）のみが工事対象地となり，その他のトレンチ部分は工事対象地から除外された。

確認調査では，縄文時代早期，晩期の遺物包含層の存在が確認されているので，北部調査区の現市道部分を挟んで西側，東側に分けて本調査を行った。現市道は大きく掘削して作られており，部分的に包含層が残っている状態であるが，遺構の広がりなどを考慮しながら調査を進めた。

北部西側は，市道に沿って約70m，最大幅約20mほどの細長い調査区となった。上段は削平を受け表土下がⅣ～Ⅶ層であったが，下段側は谷部方向へ向かっての斜面となっており，遺物包含層が良好に残されていた。斜面のⅡ層直下より畝状遺構を検出した。平成13年度の確認調査で検出した畝状遺構とはやや離れているが，形状や埋土など同じ特徴を持ったものであった。その他にも，古道や溝状遺構，土坑，縄文時代早期の集石などが発見された。

北部東側では，表土下よりほぼ全域にⅡ～Ⅳ層が混在した埋土を持つ畝状遺構が検出された。また，市道に沿うような位置で数条の古道が見つかり，溝状遺構，土坑，縄文時代早期の集石なども発見された。

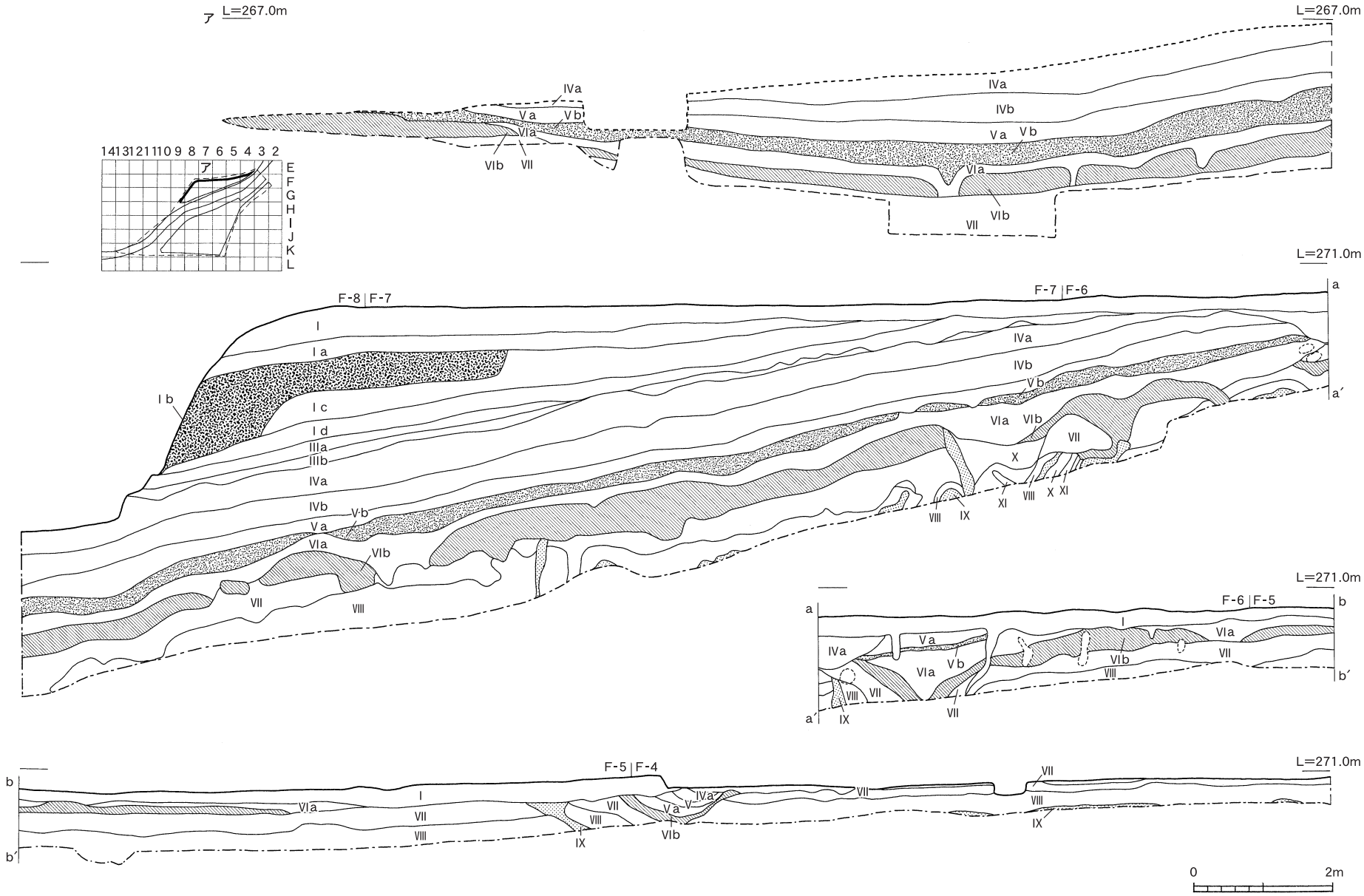
出土遺物は，Ⅱ，Ⅲ層がほとんど削平されているため，中世～近世の遺物は見られなかった。縄文時代早期の包含層から前平式土器や石坂式土器などの土器や石鏃，スクレイパーなどの石器が多数出土した。また，縄文時代前期，後期の土器，縄文時代晩期の石器も出土したが，数量的には多くない。古代については，削平の影響を受けていると考えられ，東側調査区よりわずかに出土した。

第２節　北部の層位（第38，39図）

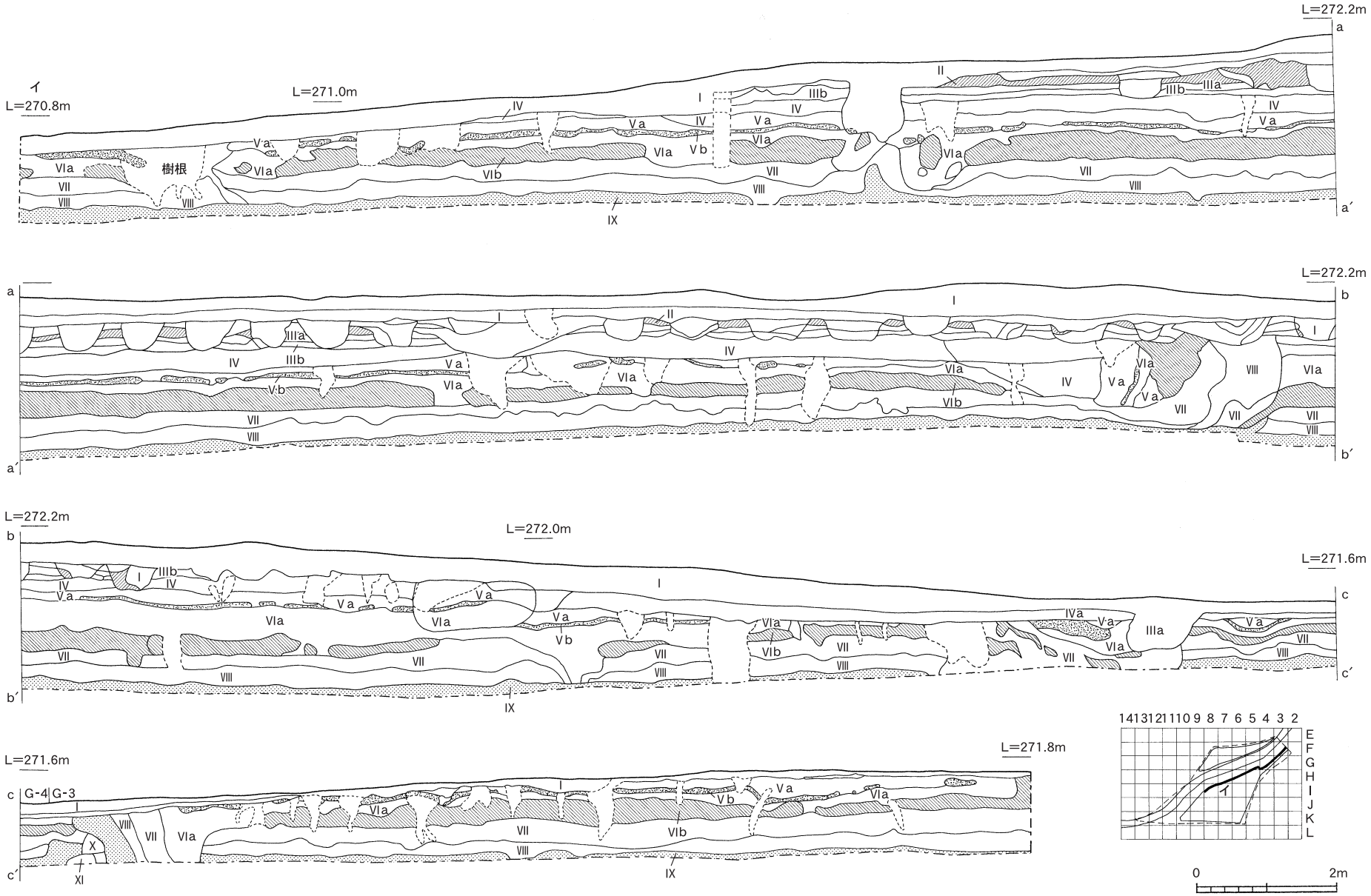
市道を挟んで西側では，上段側は圃場整備により大きく削平され，表土下よりⅣ～Ⅶ層が露出している状態である。谷部へ向けての斜面となっている下段側は，地形の特性から大量の土砂が長年に渡り流れ込み，谷を埋めていったと考えられ，表土（現耕作面）の下からⅡ層までは自然堆積土と流入土が混在して何層にも重なり合い，谷方向へ向かうほど層は厚くなっているが，土砂が滞留する場所に緩斜面が形成されている。なお，厚い表土下のⅡ層以下は良好に残存している。

東側では表土下がほぼⅣ層であり，緩やかに下る台地の縁辺部にⅡ，Ⅲ層がわずかに残っている。Ⅴ層以下については下層確認の結果，樹痕による撹乱が多少見られるが良好に残されており，表土下約1.5～２mがⅨ層上面にあたる。

第37図　北部　調査範囲図及びトレンチ配置図



第38図　北部　土層断面図(1)



第39図　北部　土層断面図(2)

第３節　検出遺構（第40～57図）

北部の検出遺構は以下の通りである。

縄文時代の遺構は，集石が４基，土坑48基検出された。土坑は埋土に御池火山灰を含むものを，縄文時代後～晩期のものと判断した。

古代～中世の遺構は，Ⅳ層上面で古道が10条，溝状遺構が６条，土坑が25基検出された。大部分が県道より東側の調査区より検出された。

中世～近世の遺構は，Ⅲ層より畝状遺構２群，土坑39基が検出された。東側の畝状遺構は，掘り込みの方向が異なる部分も含まれるが，埋土や形状などの特徴が同じであることから同じ一群として取り扱った。

１　縄文時代（第40～44図）

縄文時代の遺構は，Ⅷ層上面より集石が４基，Ⅳ～Ⅴ層上面より土坑28基検出された。集石は縄文時代早期のものであるが，Ⅶ層直下のものと，Ⅷ層のものに分かれることから時代差がある。

⑴　集石遺構（第40～42，44図）

狩俣遺跡全体から検出された集石遺構は，確認調査のものも含めて25基である。北部の４基を除いて，ほとんどが中央部調査区からの検出であり，縄文時代早期の遺物出土分布とほぼ同じである。台地部の未調査部分も多く，谷部，南部調査区では，急傾斜のため縄文時代の調査ができなかったことを考えると，狩俣遺跡全体の集石の総数はまだ増える可能性がある。

集石遺構は，割と狭い範囲に集中度が強いものと，比較的広い範囲に散在しているもの，どちらも兼ね備えたものとに大きく分けられる。また，下面に掘り込みを持つものと，持たないものにも分かれる。

以下，本遺跡北側から南側へ向かって記述していく。（確認調査分についてはＰ20，22参照）なお，各集石の規模，炭化物や掘り込みの有無，礫総数，石材については，第10表，重量組成については第11表に示した。

集石３号（第40，44図）

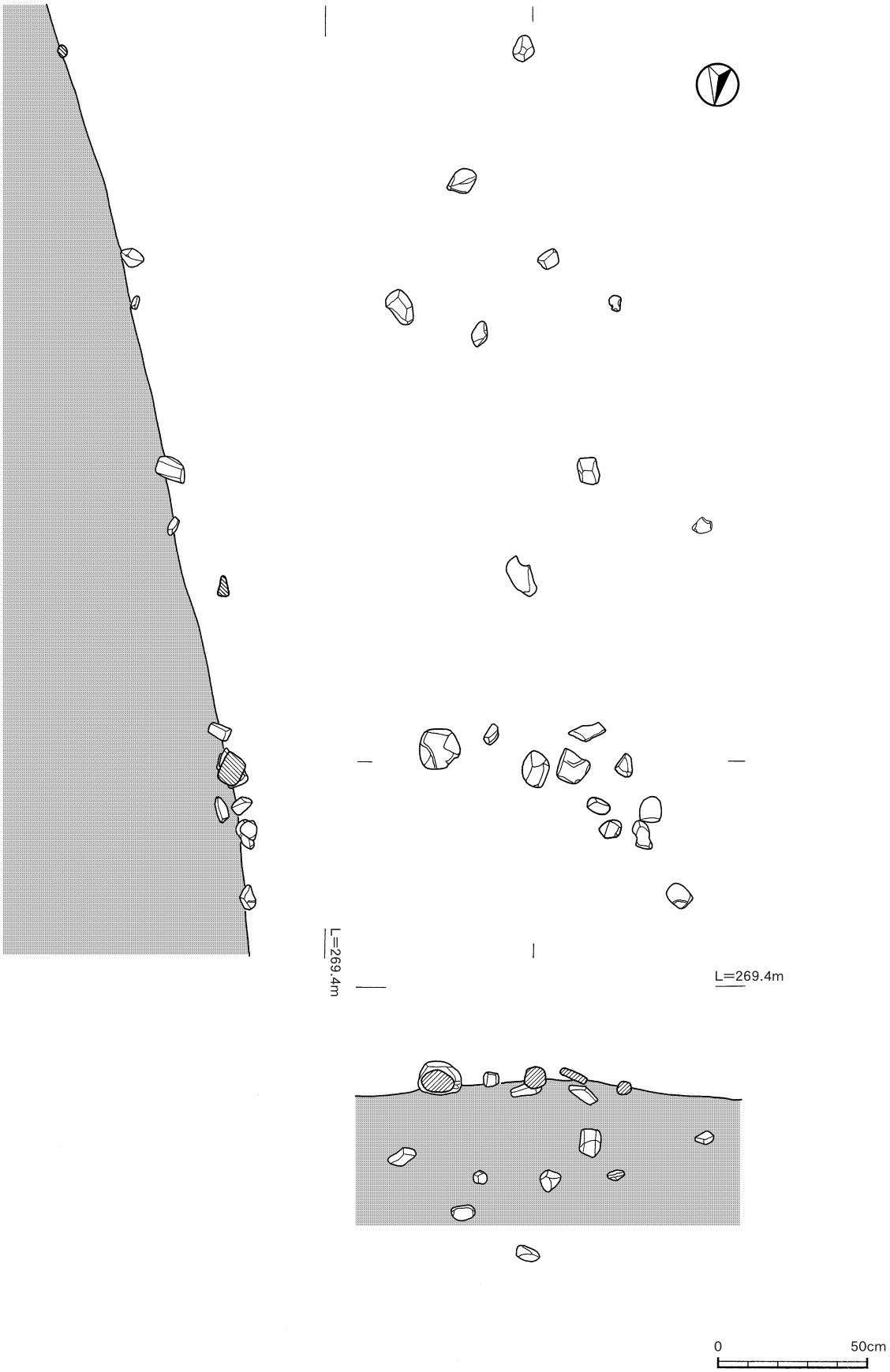
Ｆ－５区で検出された。礫総数は24個と少ないが，３×１ｍ程の範囲内に礫の分布が限定できることから集石と認定した。なお，若干集中傾向を見せる部分と，散在した部分で構成される。集中部分の礫は，径15㎝前後，重さ約150ｇの火熱を受けた破砕礫で構成するが，その周辺からは炭化物や掘り込みは確認していない。

石材は大部分が安山岩である。密集部から南側の緩やかな傾斜に沿って小礫が散在していることから，廃棄された集石遺構と判断される。

集石４号（第41，44図）

Ｆ－６区，集石３号の南東約５ｍ離れた斜面上で検出された。３×1.3mの範囲内に，大きさ径５～10㎝の火熱を受けた破砕礫が，斜面に沿って散在した状態で検出された。本体となるべき礫の集中は見られなかった。

３号はⅧ層上面，Ⅶ層との境目で検出され，４号はⅧ層中からの検出であることから，集石４号が古くなると判断できる。集石４号は，西側調査区の調査対象外地域との境目付近で隣接して検出された。礫総数は14個と少ないが，西側の調査区外へ広がる可能性があり，集石本体が未調査部分



第40図　北部　縄文時代早期　集石３号

に存在することも考えられる。検出された集石の範囲内に炭化物や掘り込みは認められなかった。

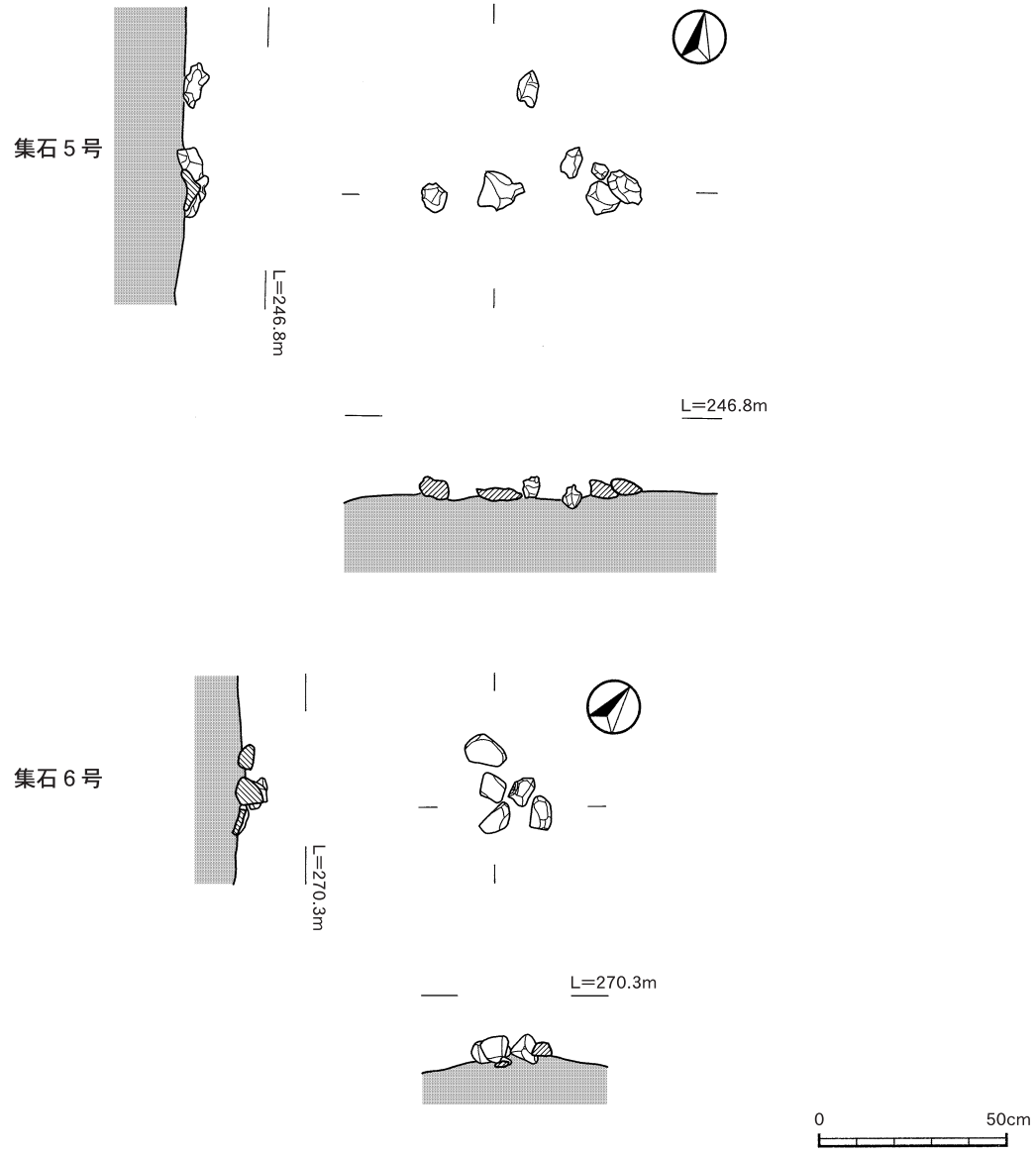
集石５号（第42，44図）

市道を挟んで東側調査区に当たるⅠ－６区で検出された。100×80㎝の範囲内に礫のまとまりが見られ，礫数は８個である。北側，南側が斜面になる尾根上の微高地で検出されている。礫数は少ないが，周辺の斜面には礫の散在が見られるため，集石の礫が多数斜面に流失したと考えられる。礫は，径５～16㎝前後，重さ50～500ｇの角礫であり，石材は大部分が安山岩である。火熱を受けたと思われる破砕はあまり見られないが，赤化が見られた。下部に炭化物や掘り込みは認められなかった。

集石６号（第42，44図）

Ｊ－８区，集石５号の南東約24m離れた地点で検出された。南側約３ｍ先には急斜面が迫っており，台地の縁辺部に当たる49×49㎝の範囲内に，大きさ径10㎝前後の拳大の角礫がまとまって検出された。礫数は５個と少なく，重量300ｇ程度とほぼ同程度の礫で構成されていた。石材は安山岩と花崗岩であり，火熱を受けたと思われ，部分的に破損が認められた。検出された集石の範囲内に炭化物や掘り込みは認められなかった。

第41図　北部　縄文時代早期　集石４号



第42図　北部　縄文時代早期　集石５，６号

⑵　**土坑**（第43，44図）

縄文時代の土坑は計28基検出された。全てⅣ層での検出であるため，縄文時代後～晩期の土坑であると推定される。埋土はⅣ層黄色パミスの少し混じる暗褐色土が主体である。

土坑48～70は平面径50㎝前後の円形（Ⅰ類），土坑71は平面径約１ｍの円形（Ⅱ類），土坑72～74は平面形が楕円形（Ⅲ類）を呈するものであり，土坑75は不定形（Ⅴ類）である。

土坑48～70はⅠ類の土坑であり，平面径の平均は28.5×24.0㎝であり，ほぼ円形を呈する。土坑48～59はⅠ類の中でも浅めのもので，深さ14～39㎝である。断面形状はU字型またはボウル状を呈するものが大部分を占める。土坑60～70はⅠ類の中でもやや深めのもので，深さ29～57㎝である。断面形状は長方形またはU字型を呈するものが多い。埋土中に御池カルデラを起源とする黄色パミスが混在しており，内壁の崩落と思われる赤褐色土の小ブロックも見られる。

土坑72～74はⅢ類で，平面形の長径×短径の平均は93.6×39.6㎝，深さ17～19㎝であり断面形状は皿状を呈する。土坑74の埋土中に黄色パミスのブロックや炭化物が確認された。

土坑48（第43図）

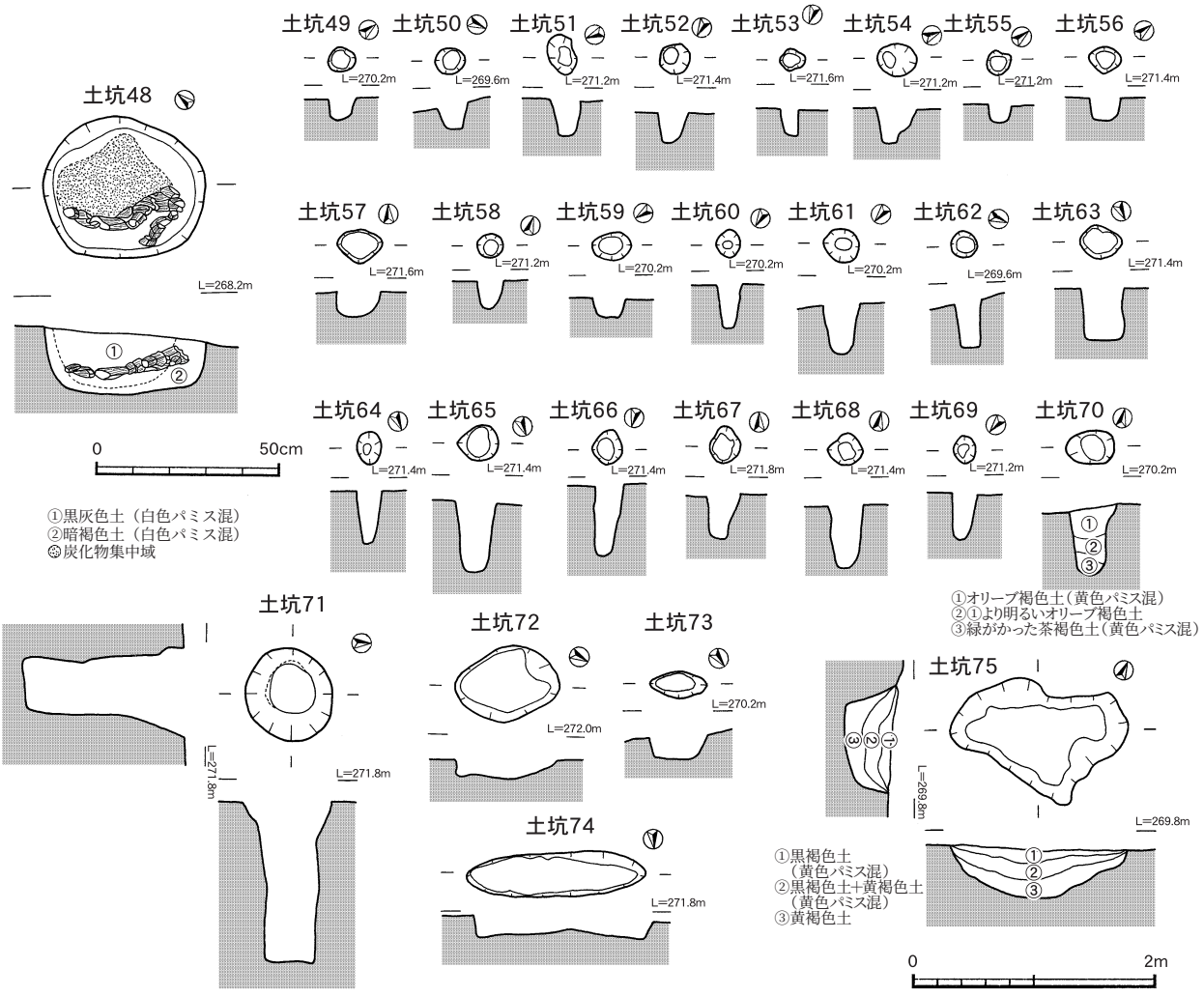
G－8区のⅣ層で検出された。検出された平面径は45×38㎝，深さは39㎝である。断面形状はかまぼこ型を呈する。平坦面を持つ底部付近から炭化木が出土した。残存状況が良く，33×17㎝，厚さ5㎝のしっかりとした木片である。埋土は黄色パミスの混ざった暗褐色土が主体であるが，中心部は粘質の強い炭化物の集中した黒灰色土が堆積していた。樹種は不明であるが，放射性炭素年代測定の結果は2,900±30という測定結果を得ている。

土坑71（第43図）

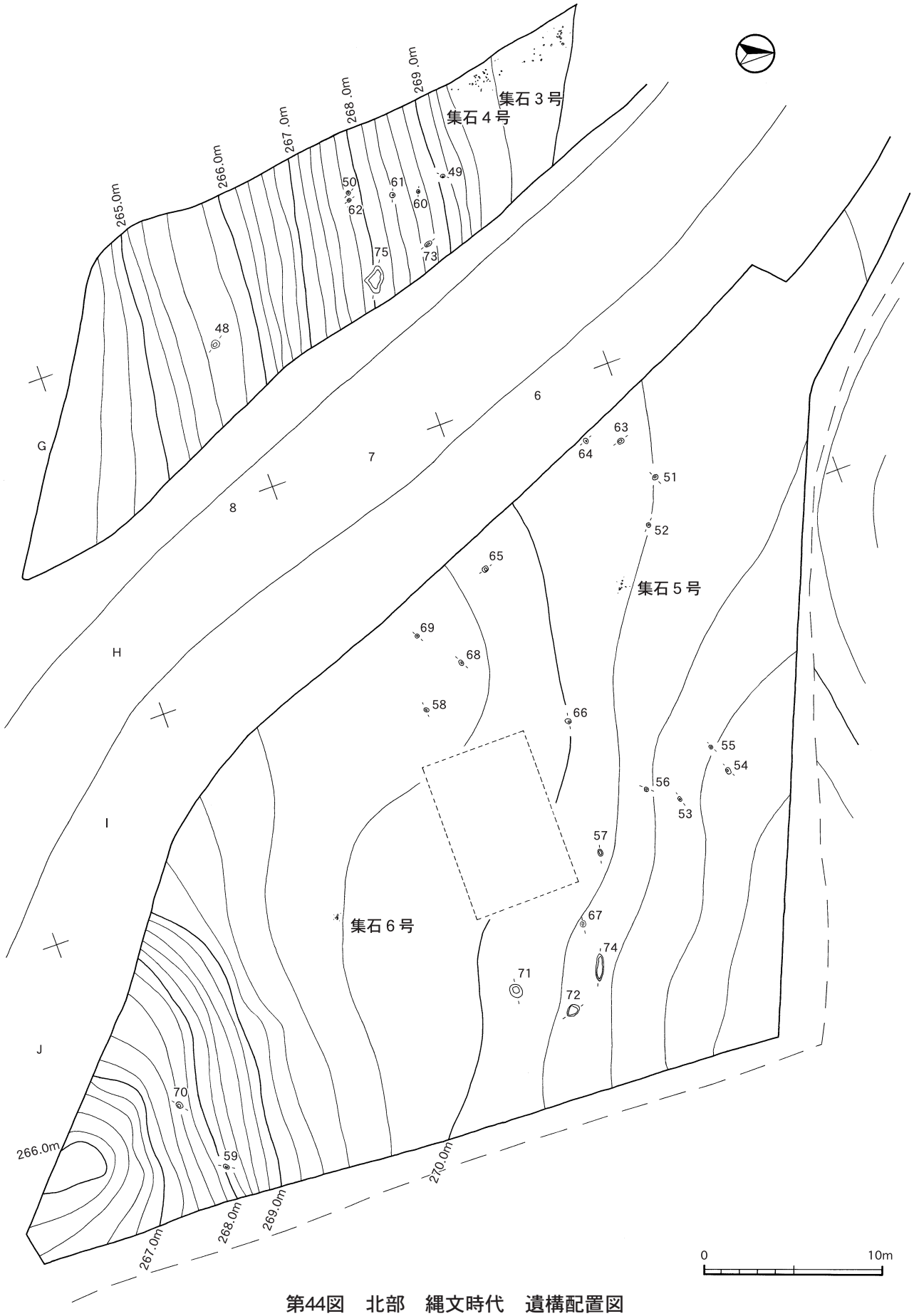
J－8区のⅣ層で検出された。検出された平面径は76×72㎝，深さは1.3mである。断面形状は検出面近くがやや広がる長方形を呈する。周辺に同形状の土坑は見られない。

土坑75（第43図）

F－7，8区，台地の縁辺部のⅣ層で検出された。平面径は不定形であり，深さは39㎝である。断面形状はレンズ状を呈し，下位はパミスを含む黄褐色土が強く，上位は黒褐色土が中心である。



第43図　北部　縄文時代　土坑



第44図　北部　縄文時代　遺構配置図

2　古代～中世（第45～49，56図）

古代～中世の遺構は，Ⅳ層上面で古道が８条，溝状遺構が２条，土坑18基が検出された。埋土はⅢａ層が主体であるが，遺構内遺物が少なく中世の可能性を残すことから，古代～中世の遺構として取り扱った。北部の西調査区では，斜面の一部を削りながら平坦地を確保して整備していた。東調査区では，現市道に沿って古道や溝状遺構が数条検出された。古代から人の往来する通路は，ほぼ同じで変わらないことが判明した。

⑴　古道（第45～48，56図）

古代～中世の古道を８条検出している。

古道１（第45図）

Ｇ－７，８区で，Ⅳ層上面で検出された。ほぼ東西方向に向かって直線的に延び，斜面を斜め方向に上がっていくように硬化面が残存していた。検出された硬化面の長さは4.4m，幅46～68㎝で，暗茶褐色土に黒色土が混在している。表面は硬く締まっているが，下位は砂質が強い。東側方向へは延びているが，市道により切られているため全体像は不明である。

古道２（第45図）

Ｆ－６，７区のⅣ層上面，古道１から西に約９ｍ離れた位置で，ほぼ東西方向に向かって緩く蛇行をしながら硬化面が検出された。東端は消失しているが，西側方向は調査区外へ延びている。検出された硬化面の長さは5.1m，幅38～60㎝で，暗茶褐色土に黒色土が混在し，表面は硬く締まっているが，下位は砂質が強い。古道１と同様に，斜面を斜め方向に上がっていくように硬化面が残存しており，特徴が類似する。また，方向も延長線方向にあり同じ古道の可能性も考えられるが，途中が消失しているので全体像は不明である。

古道３（第46図）

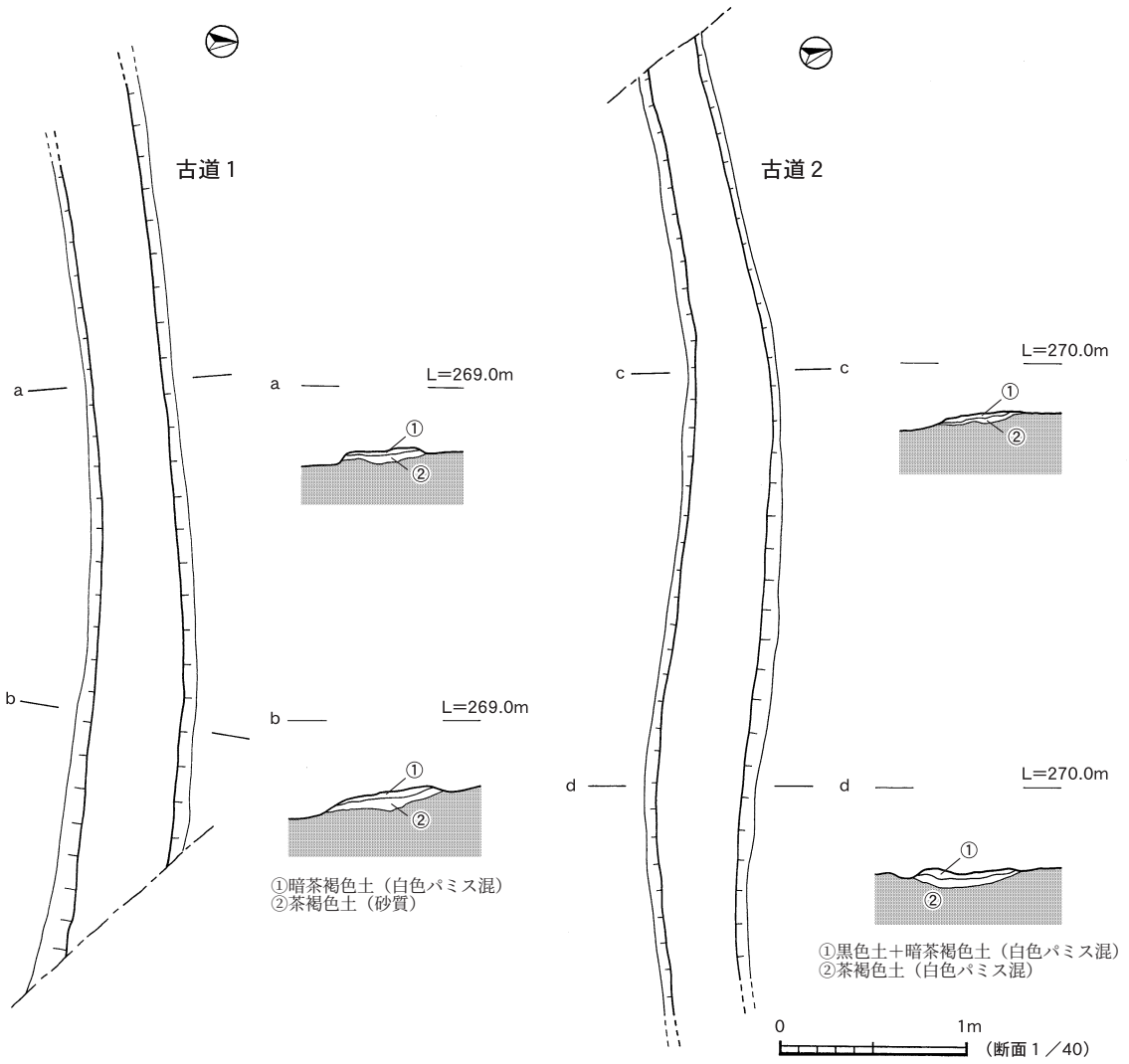
Ⅰ，Ｊ－８，９区で，Ⅳ層上面で検出された。やや緩やかに孤を描きながら延び，Ⅰ－８区からＪ－９区方向へ斜面を下るように硬化面が残存していた。西端は溝状遺構12に切られており，東端は調査区外へと延びている。検出された硬化面の長さは5.2m，幅45㎝程度で，黒褐色土が硬く締まっており，表面に黒色土が残っていた。

古道４（第46図）

Ⅰ，Ｊ－８，９区，古道３から北側へ約４ｍ離れて，ほぼ同一方向に向かって硬化面が検出された。やや緩やかに孤を描きながら延び，Ｊ－10区方向へ下るように続いている。古道３と同じように，西端は溝状遺構12に切られており，東端は調査区外へと延びている。検出された硬化面の長さ14.4m，幅30～60㎝である。硬化面除去後に底面から浅い皿状の凹みが連続して見られた。この小ピットは，平面径約44㎝，深さ約４㎝のほぼ円形を呈し，鉄分の沈着により赤褐色に変色した土が硬く締まっていた。

古道５（第46図）

Ⅰ，Ｊ－９区で，古道３，４とほぼ同じ方向であるが，少し東側に向かって硬化面が検出された。東端はＫ－９区方向へ直線的に下りながら消失している。西端は古道３，４と同じように溝状遺構12に切られているが，古道４の下位に重なり合っていることから古道４よりも古い。検出された硬化面の長さは11.8m，幅22～45㎝である。古道３～５は検出面がほぼ同じであり，方向も同じで重



第45図　北部　古代～中世　古道１，２

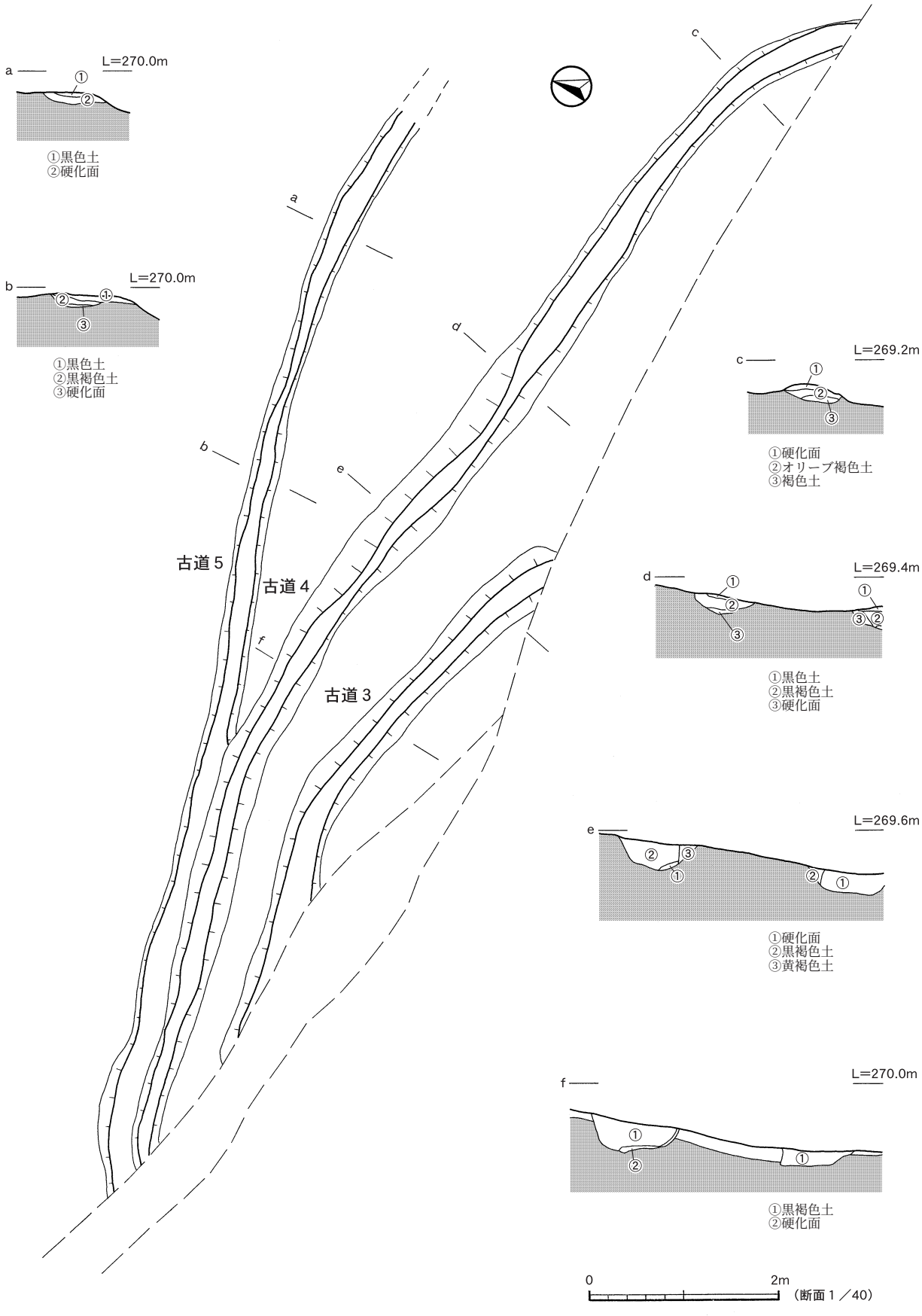
なり合うように見つかっていることから，時間差の少ない同時期の古道と思われる。

古道６（第47図）

Ｊ，Ｋ－９，10区で，古道４を延長するように検出された。Ｋ－１区方向へ直線的に延び，東端は消失している。検出された硬化面の長さは7.8m，幅44㎝程度で，黒褐色土が硬く締まっており，表面に細粒な黒色土や赤褐色の土が僅かに残る。西端は重なり合っており，古道４より古い古道であるが方向や特徴が似ており，台地上を直進する方向と谷へ向かって下っていく方向の分かれ道として一定期間使われていた可能性がある。

古道７（第47図）

Ｋ－10区，古道６から北側へ約４m離れて，ほぼ同一方向に向かって硬化面が検出された。直線的な硬化面が，Ｌ－11区方向へ続いている。古道８と交差しており，古道８により一部切られている。両端とも消失しており，全体像は不明であるが，古道６と同じように黒褐色土が硬く締まっており，方向も同じであるので，あまり時間差のない同時期の古道であると思われる。検出された硬



第46図　北部　古代～中世　古道３，４，５

化面の長さは3.5m，幅は約44㎝である。

古道８（第47図）

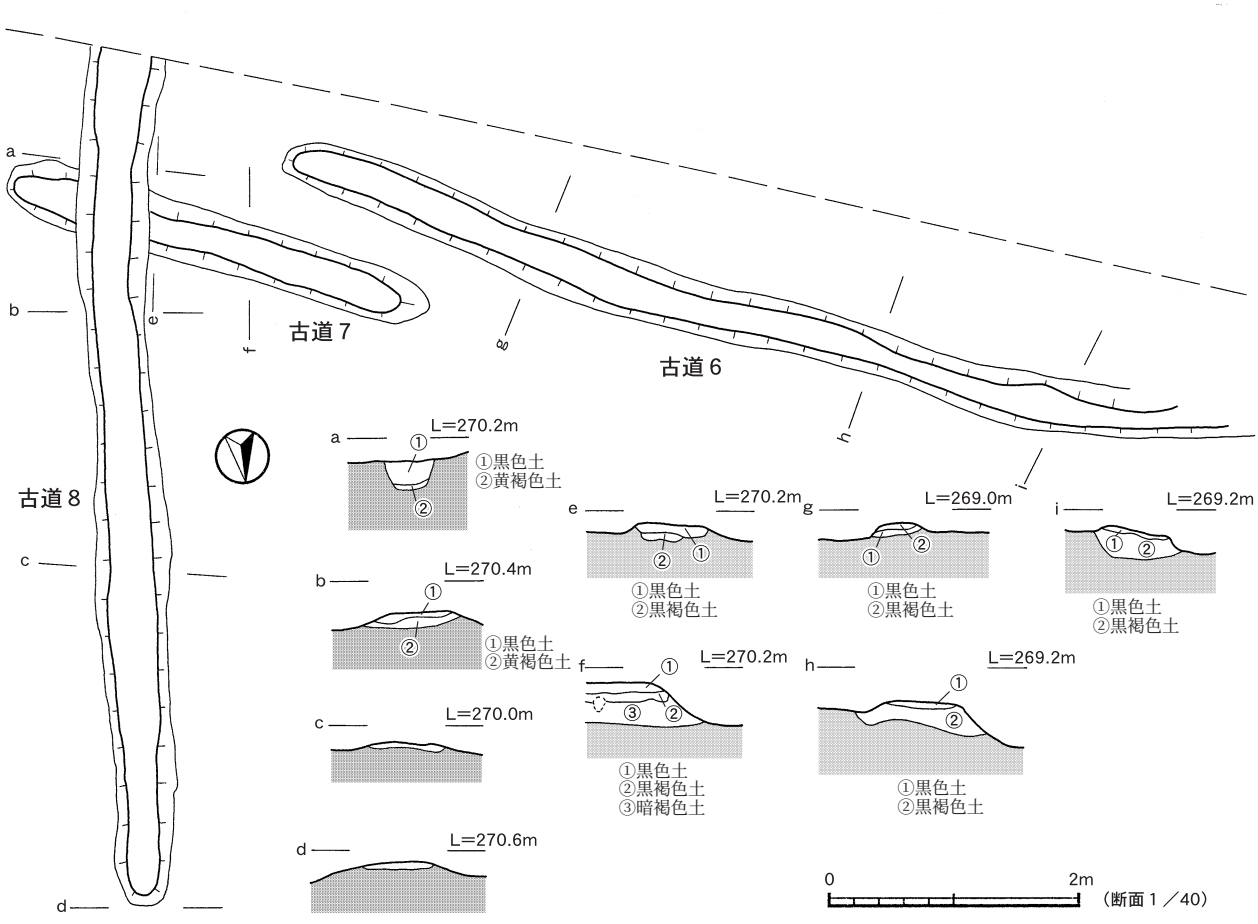
Ｋ－９，10区で，斜面を垂直に下るようにほぼ南北方向に検出された。北側は明確でないが，南側は調査区外へと延びている。これまでの古道３～７までが谷への斜面を廻るように緩やかに下っているのに対して，古道８はまっすぐに下っている。北端と南側のレベル差は，約40㎝である。検出された硬化面の長さは6.8m，幅は約52㎝であり非常に硬く締まっている。暗褐色土と黒色土が混ざる表面には，砂質のある黒色土が残っていた。古道７と交差しており，一部切っていることから，古道７よりも新しい古道であると位置づけられる。

⑵ **溝状遺構**（第48，56図）

古代～中世の溝状遺構を３条検出している。

溝状遺構８（第48図）

Ｉ－５，６区で略東西方向に検出された。埋土は暗黄色土が主体であり，黒褐色土や黄色パミスも見られた。検出された長さは14m，幅は54～120㎝，深さ約27㎝であり，やや蛇行しながら南西方向から北東方向へ緩やかに傾斜しながら延びている。北東側は途中で消失しているため全体像が明確ではないが，北側の谷へ向かって続いていたと推定される。断面形態は，南西側が浅い皿状，北東側がボウル状を呈し，底面付近に炭化物が見られた。底面に平坦面を持つが，凸凹が多く見ら



第47図　北部　古代～中世　古道６，７，８

れる。凹みに黄色パミスが堆積している部分も確認された。

埋土より土師器片が出土し図化した。（第65図144）

溝状遺構９（第48図）

Ｉ－５，６区，溝状遺構８に重なるように検出された。埋土は黒褐色土が主体であり，暗黄褐色土や炭化物も含んでいた。両端は消失しており全体形は不明であるが，方向は略南北方向であり，北側の谷へ向かって流れていたと推測される。溝の切り合い関係により，溝状遺構８より新しいものである。検出された長さは２m，幅は30～50㎝，深さ約28㎝であり，断面形状はレンズ状を呈している。

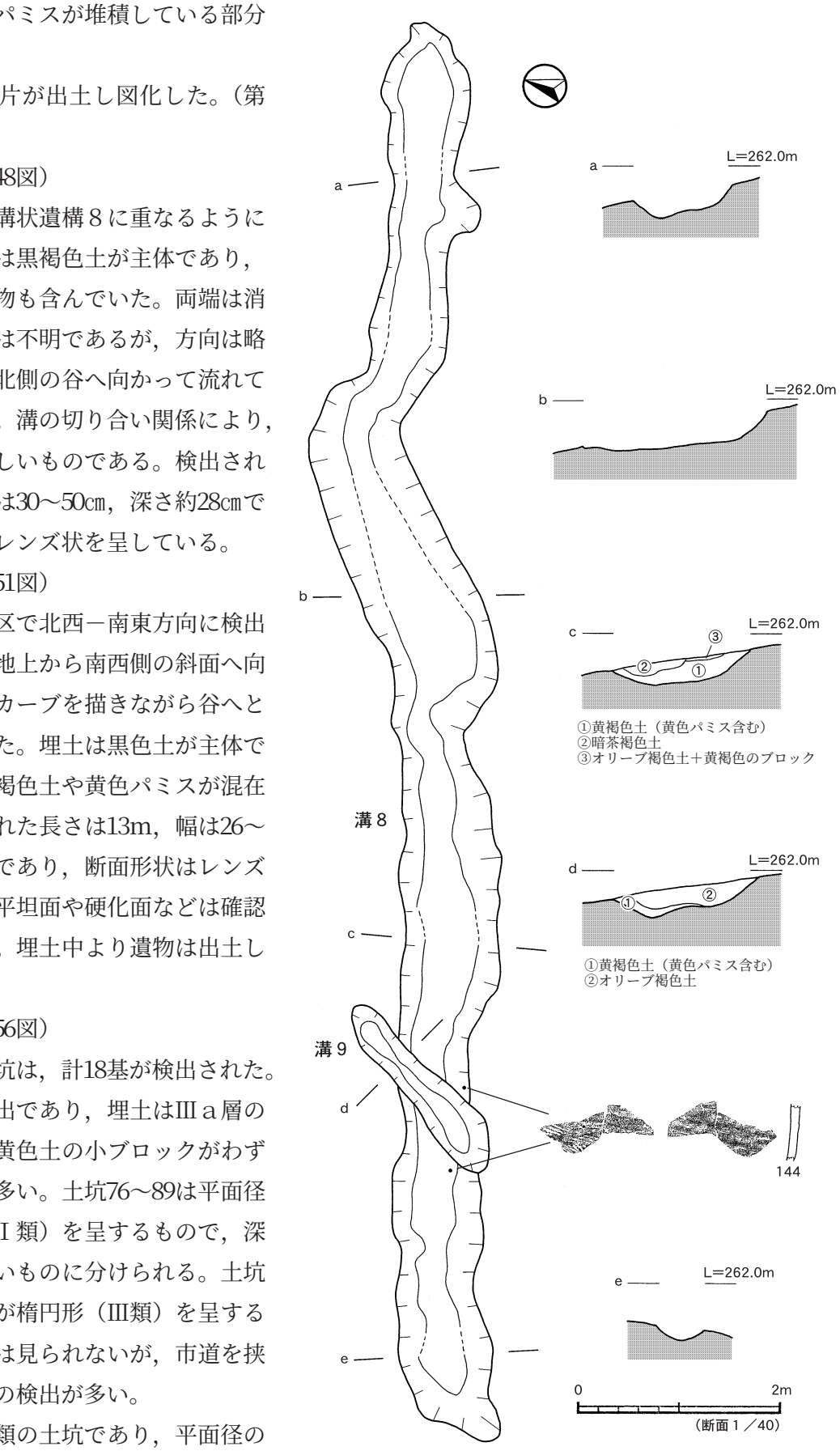
溝状遺構10（第51図）

Ｉ，Ｊ－８，９区で北西－南東方向に検出され，北西側の台地上から南西側の斜面へ向かって，緩やかにカーブを描きながら谷へと向かって延びていた。埋土は黒色土が主体であり，わずかに黄褐色土や黄色パミスが混在していた。検出された長さは13m，幅は26～42㎝，深さ約４㎝であり，断面形状はレンズ状を呈し，底面に平坦面や硬化面などは確認されず凸凹が多い。埋土中より遺物は出土しなかった。

⑶　**土坑**（第49，56図）

古代～中世の土坑は，計18基が検出された。すべてⅣ層での検出であり，埋土はⅢａ層の黒色土の単一層に黄色土の小ブロックがわずかに混じるものが多い。土坑76～89は平面径30㎝前後の円形（Ⅰ類）を呈するもので，深さが浅いものと深いものに分けられる。土坑90～93は，平面形が楕円形（Ⅲ類）を呈するものである。集中は見られないが，市道を挟んで西側調査区での検出が多い。

土坑76～89はⅠ類の土坑であり，平面径の平均は28×24.5㎝で，ほぼ円形を呈する。Ⅰ



第48図　北部　古代～中世　溝状遺構８，９

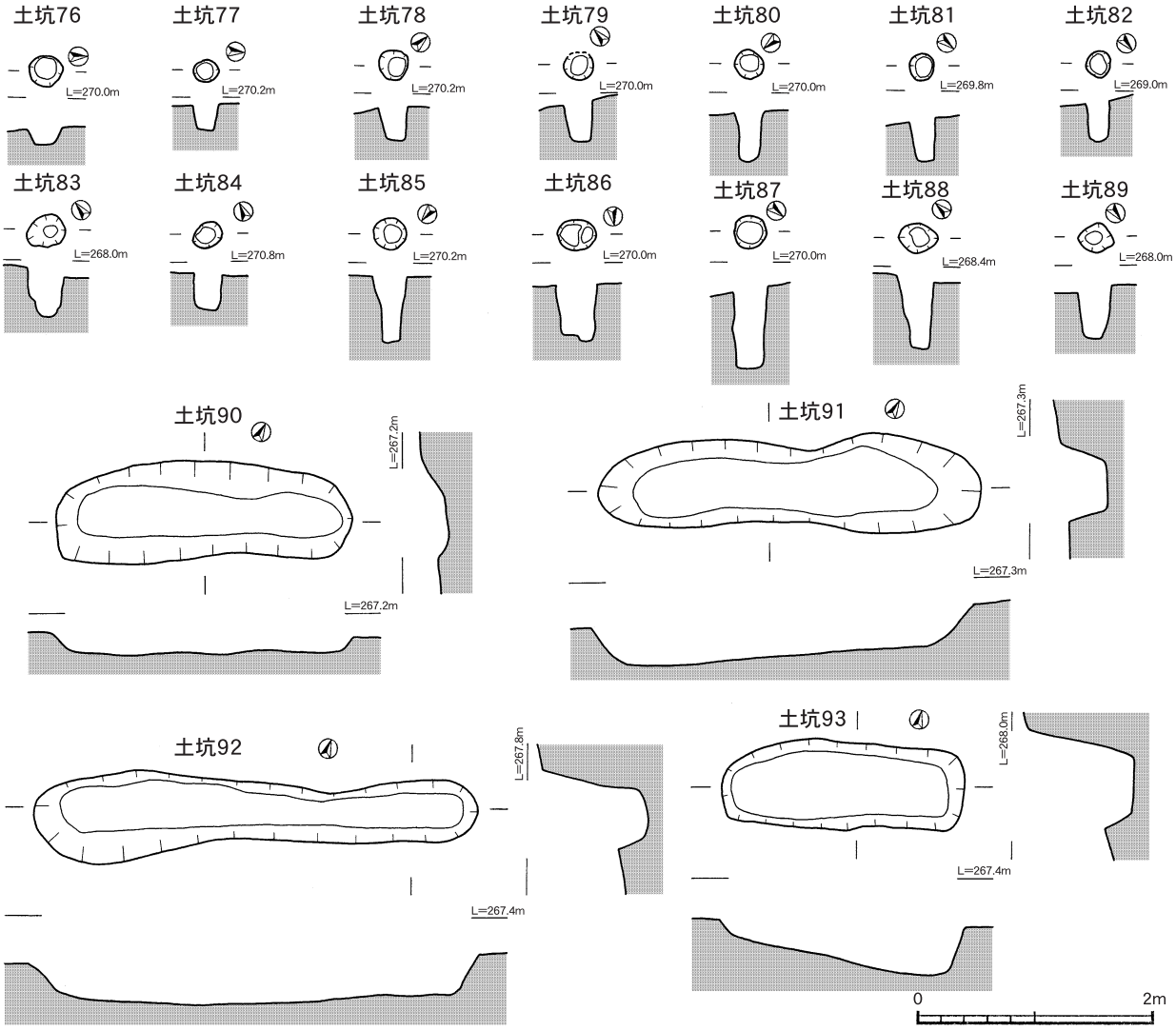
類の中でも土坑76～84は浅めのものであり，深さ14～42㎝，土坑85～89はやや深めのもので深さ42～58㎝である。土坑76の断面形状は逆台形を呈すが，その他はU字型を呈するものが大部分を占める。土坑83，85は途中に段を持つ。

土坑90～93（第49図）

Ｆ，Ｇ－８区のⅣ層で近接して検出された。いずれも楕円形を呈した土坑であり，埋土は，掘り込まれた際に混入したと思われる黄褐色土の小ブロックがわずかに見られるが，ほぼ黒色土の単一層である。

土坑90の平面径は245×79㎝，深さは16㎝，土坑91の平面径は319×65㎝，深さは33㎝で，どちらも断面形状は皿状を呈し，古道10の下位から検出されている。

土坑92，93は段差に沿うように配置されている。土坑92の平面径は371×48㎝，深さは37㎝で，断面形状は深皿状を呈すが底面は地形に合わせて東側が下がっている。土坑93の平面径は203×70㎝，深さは41㎝で，断面形状は皿状を呈す。どちらも段差を延長するように掘られているため斜面の縁辺部から底面までの深さは約80㎝である。溝状遺構11，古道10の下位から検出されている。遺構の前後関係，埋土状況などから，古代の貯蔵穴であると判断した。



第49図　北部　古代～中世　土坑

3　中世～近世（第50～57図）

中世～近世の遺構は，Ⅲ～Ⅳ層上面で古道が２条，溝状遺構が３条，土坑33基が検出された。埋土は安永ボラや文明ボラを含む黒色土が主体であるが，遺構内遺物が少なく明確にできないものも含まれることから，中世～近世の遺構として取り扱った。

北部の西調査区では，斜面の一部を削りながら谷底へ向けての道を整備していた。東調査区では，現市道に沿って，古代の溝状遺構に平行した中世の溝状遺構が並んで検出された。この溝状遺構は古道としても使われ，斜面へ下るように延びていた。

⑴　古道（第50，57図）

中世～近世の古道は，西側調査区にて２条検出している。

古道９（第50図）

Ｆ，Ｇ－８区で，南側へ向かって下る斜面の一部を削平し，平坦面を造成した後のⅣ層上面にて検出された。南西－北東方向に向かって直線的に延び，斜面を横切るようにして硬化面が残存していた。削平後のためレベル差は少なく，ほぼ平坦な古道である。検出された硬化面の長さは7.9m，幅38～70㎝で，表面は黄色ブロックの混じった黒褐色土に白色パミスが混在していた。２～４㎝の硬化面の下位には砂質の強い黒褐色土が存在していた。東端は消失し西側は調査区外へ延びる。

古道10（第50図）

Ｅ～Ｇ－８，９区，古道９北側に約１～1.5m離れ，ほぼ平行するように並んで検出された。検出された硬化面は，西側調査区境から北西へ向かって，削平によってできた段差に沿ってやや北側へ膨らみながら直線的に延びている。Ａ－８区付近で南東方向へ約50°屈曲し，南側の谷へ向かって下っていく。Ｇ－８区部分は高低差約30㎝以上の下り道となっている。検出された長さは17.6m，幅38～70㎝で古道９よりやや幅広である。表面は白色パミスや黄褐色土混じりの黒褐色土が主体であり，硬く締まっているが下位は砂質が強い。古道９との前後関係は不明であるがほぼ同時期のものと推定され，Ｆ－８区では溝状遺構11と平行しているが，Ｇ－８区に入ると上位に硬化面が位置しているので，溝状遺構11より新しい古道である。

⑵　溝状遺構（第50～52，57図）

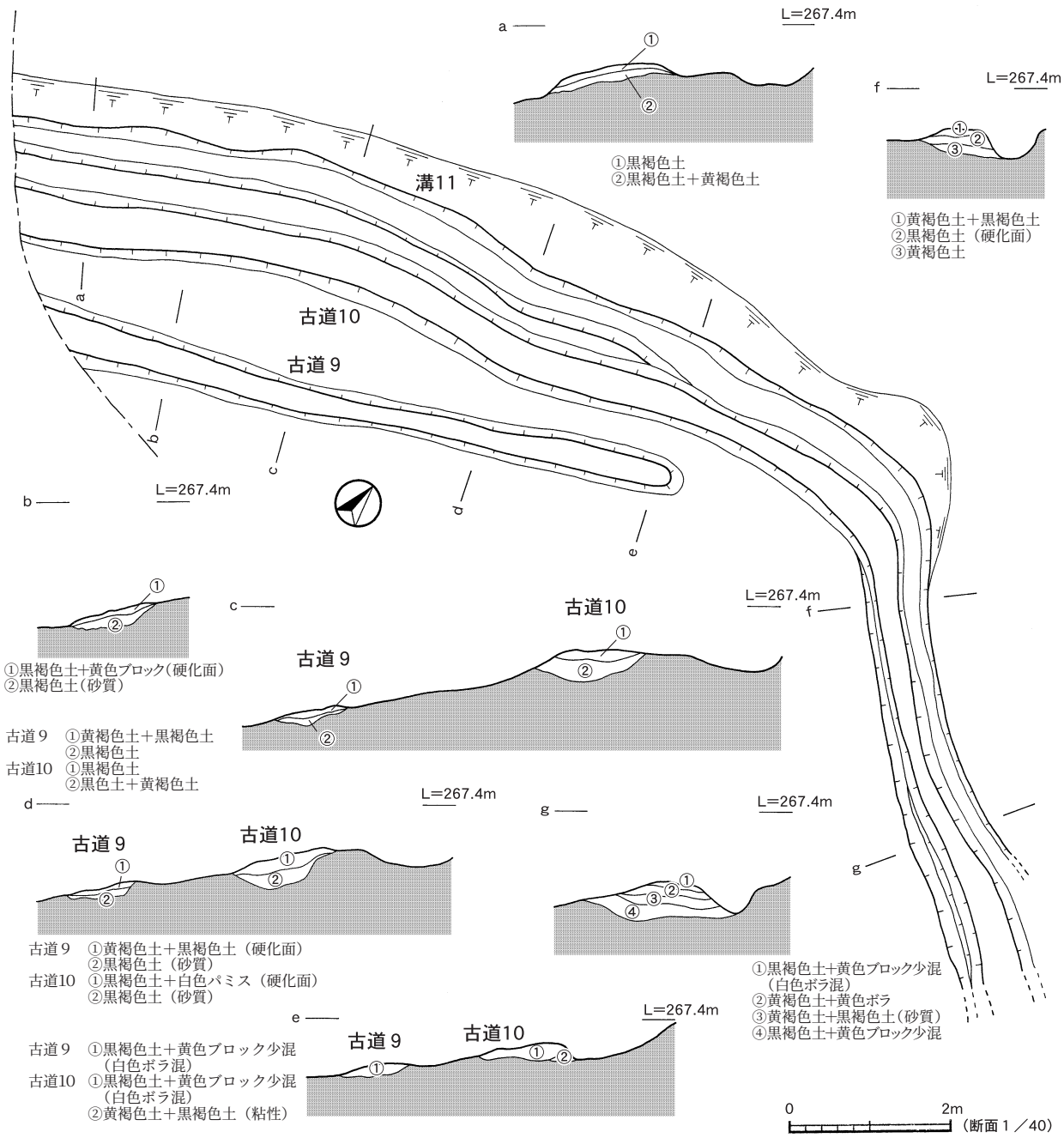
中世～近世の溝状遺構は，西側調査区で１条，東側調査区で２条の計３条検出している。

溝状遺構11（第50図）

Ｅ～Ｇ－８，９区，古道10の北側にほぼ平行するように並んで検出された。削平によってできた段差に沿って南側の谷へ向かって下っていくが，古道10と重なりが見られ，硬化面の下位を流れ下っていくように検出された。検出された長さは17.5m，幅32～70㎝で斜面部分が幅広である。深さと断面形状は，直線部分が約16㎝の浅い皿状を呈し，斜面部分が約38㎝の逆台形である。埋土は黄色土ブロック混じりの砂質の強い黒色土で，埋土中より遺物は確認されなかった。Ｆ，Ｇ－８区で検出された古代の土坑90～93の上位に掘られており，斜面の削平によって作られた平坦面は，当初は畠作目的であったと思われるが，その後道路としての役割が大きくなったと推測される。

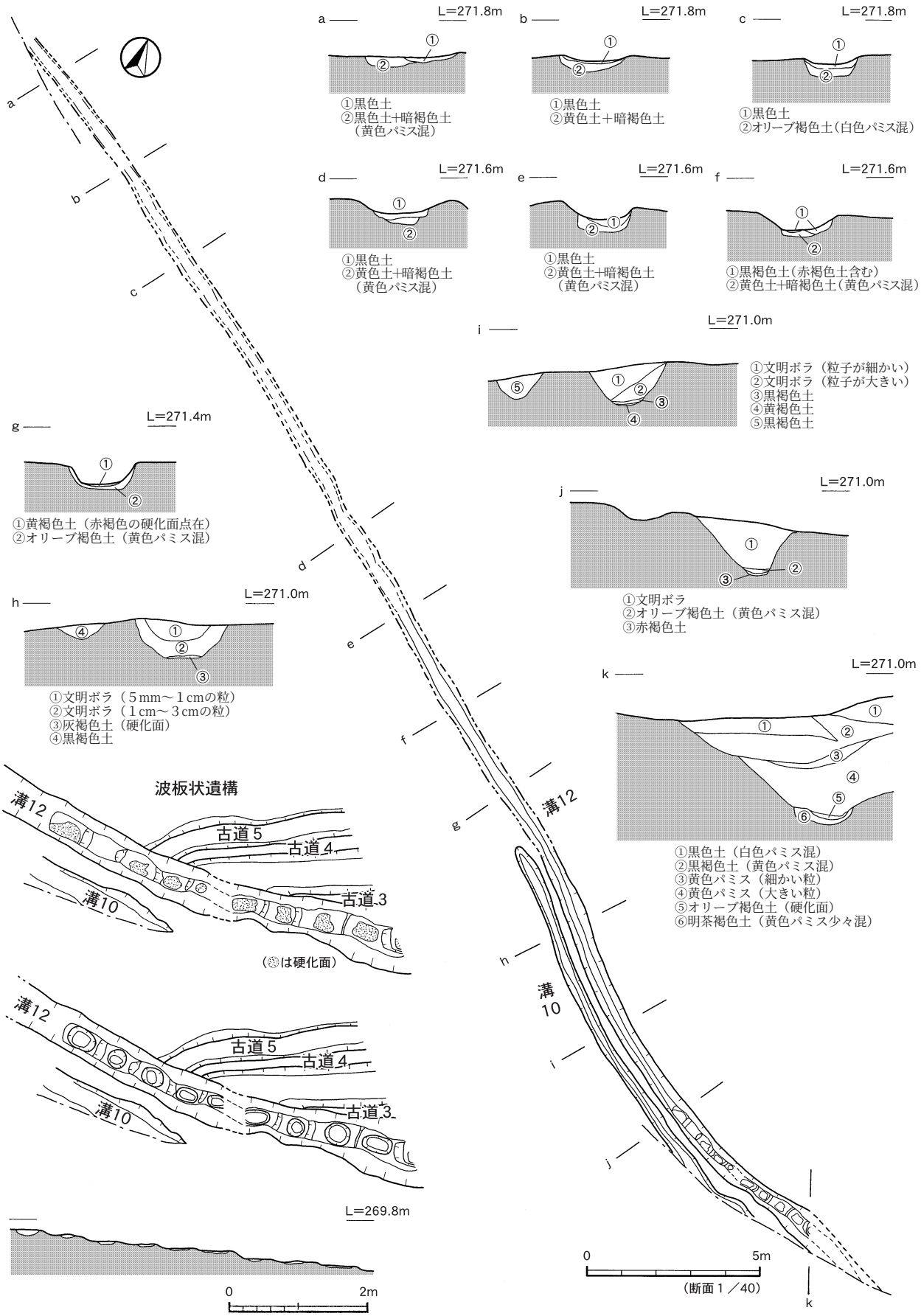
溝状遺構12（第51図）

Ｇ～Ｊ－５～９区，溝状遺構10の東側にほぼ平行するように並んで検出された。Ｇ～Ｉ－５～７区付近は，北西から南東方向へ緩やかに下りながらほぼ直線的に延びており，Ｊ－８，９区付近か



第50図　北部　古代～近世　古道９，10　溝状遺構11

らは溝状遺構10と同じように，曲りながら急斜面の谷へと下っていくように検出された。検出された長さは43m，幅40㎝～１mで斜面へ向かって幅広になる。埋土のほとんどは黄色パミス（文明ボラ）が主体であり，黒色土も部分的に混じっているが，大量のボラによって埋め尽くされていた。表面には粒子の細かい黄色パミスと黒色土が確認されたが，埋土中はボラの粒子が細かい部分と大きい部分が混在し，黒色土も混じり方にムラがあることから，流れ込んだ後に激しく動いていると思われる。その後の削平や畝状遺構４により切られた部分も多く，東端から約20mは上位が削平され，畝状遺構４の畝間部分によって底面下まで切られ消失していた。わずかに文明ボラを埋土とする溝の底面付近が残されていた。そこから約10mは，上位は切られている部分が多いが，底面付近は全て残されていた。深さと断面形状は，台地上の直線部分は検出面からの深さが約24㎝の浅い皿状を呈し，斜面部分が約98㎝の逆台形である。斜面を下るに従って深くなる傾向にある。



第51図　北部　古代～近世　溝状遺構10，12

古道としても使われていたと思われ，埋土下面の平坦部に硬化面を確認した。特に斜面部では硬化面が階段状に検出され，段ごとに赤褐色をした波板状の凹みがあり，谷へ下る通路として利用されていたと推測される。波板状の凹みは34×26㎝の円形を呈し，深さ約５㎝の浅いレンズ状である。

溝状遺構13（第52図）

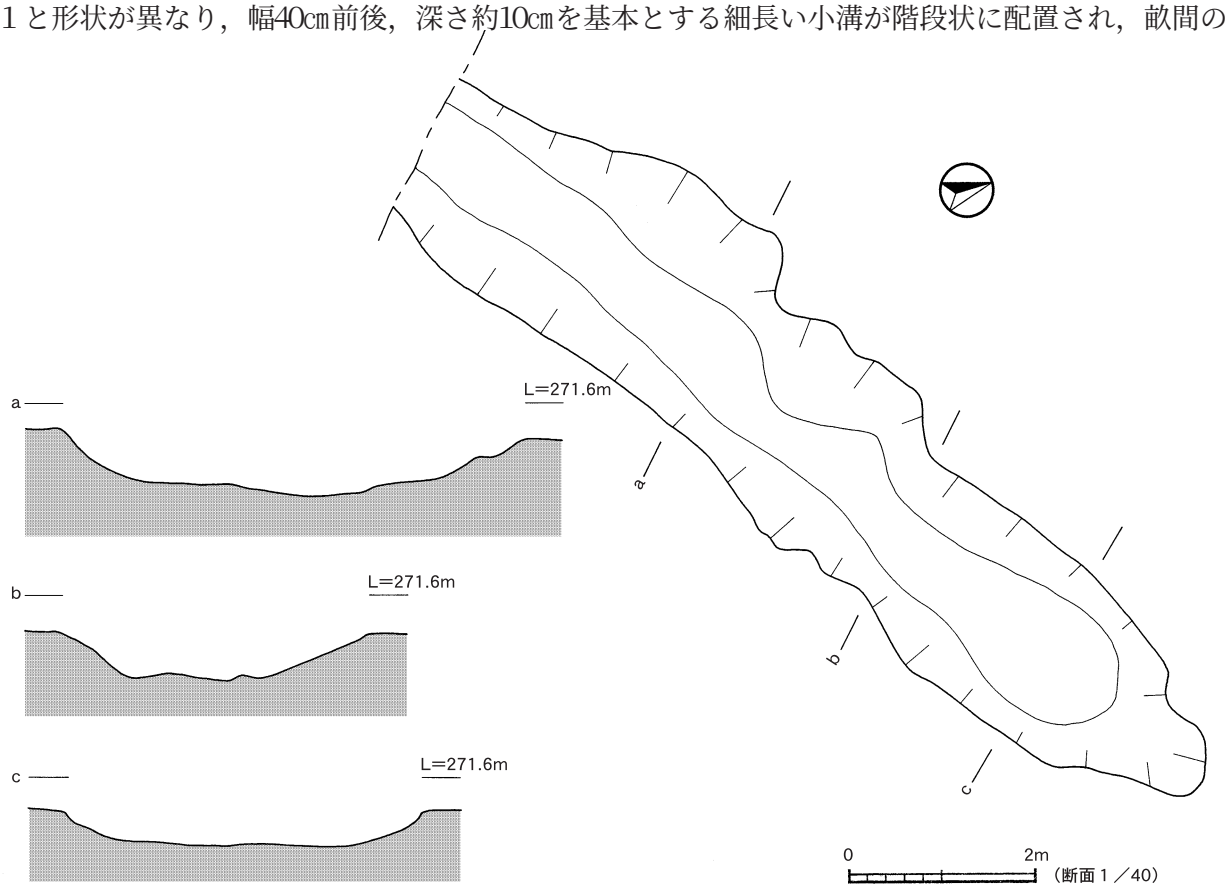
Ｈ，Ｉ－６区で，略東西方向に溝状遺構12や畝状遺構４の一部を切るように検出された。市道側からほぼ直線状にＪ－６区方向へ延びている。検出された長さは10.4m，幅1.6～2.3mで，狩俣遺跡では最も広い溝状遺構である。深さは約25㎝と幅の割に深さは無く，薄いレンズ状を呈している。埋土は白色パミスを多く含む黒褐色土で，底面付近には，造成の際生じたと思われる黄色土の小ブロックが混じり，一部にマンガンの鉄分の沈着による赤褐色の変色が見られた。中世の包含層がやや下り始めるＪ－６区より東側では検出されなかったことから，近世以降のものと推測される。

⑶　畝状遺構（第53，54，57図）

中世～近世の畝状遺構は，西側調査区で１群，東側調査区で１群の計２群検出している。

畝状遺構３（第53図）

Ｆ，Ｇ－６～８区のⅢａ層上面にて，畝状遺構が検出された。北部の市道を挟んで西側に当たる斜面において，北東－南西方向を基調とした畝間の列が，黒色土または暗褐色土を掘り込む形で残存し，斜面を下る階段状に規則的に並ぶ。掘り込み面は自然地形を一部削平しながら作った平坦面であり，上面にはⅡ層混じりの黒褐色土が覆い，明確なⅡ層は確認されなかった。畝については凸部が見あたらず，上位からの堆積物に押し流されたと思われ確認されなかった。西側の尾根をひとつ越えたＡ，Ｂ－５，６区の斜面において畝状遺構１の存在が確認されているが，畝間は畝状遺構１と形状が異なり，幅40㎝前後，深さ約10㎝を基本とする細長い小溝が階段状に配置され，畝間の

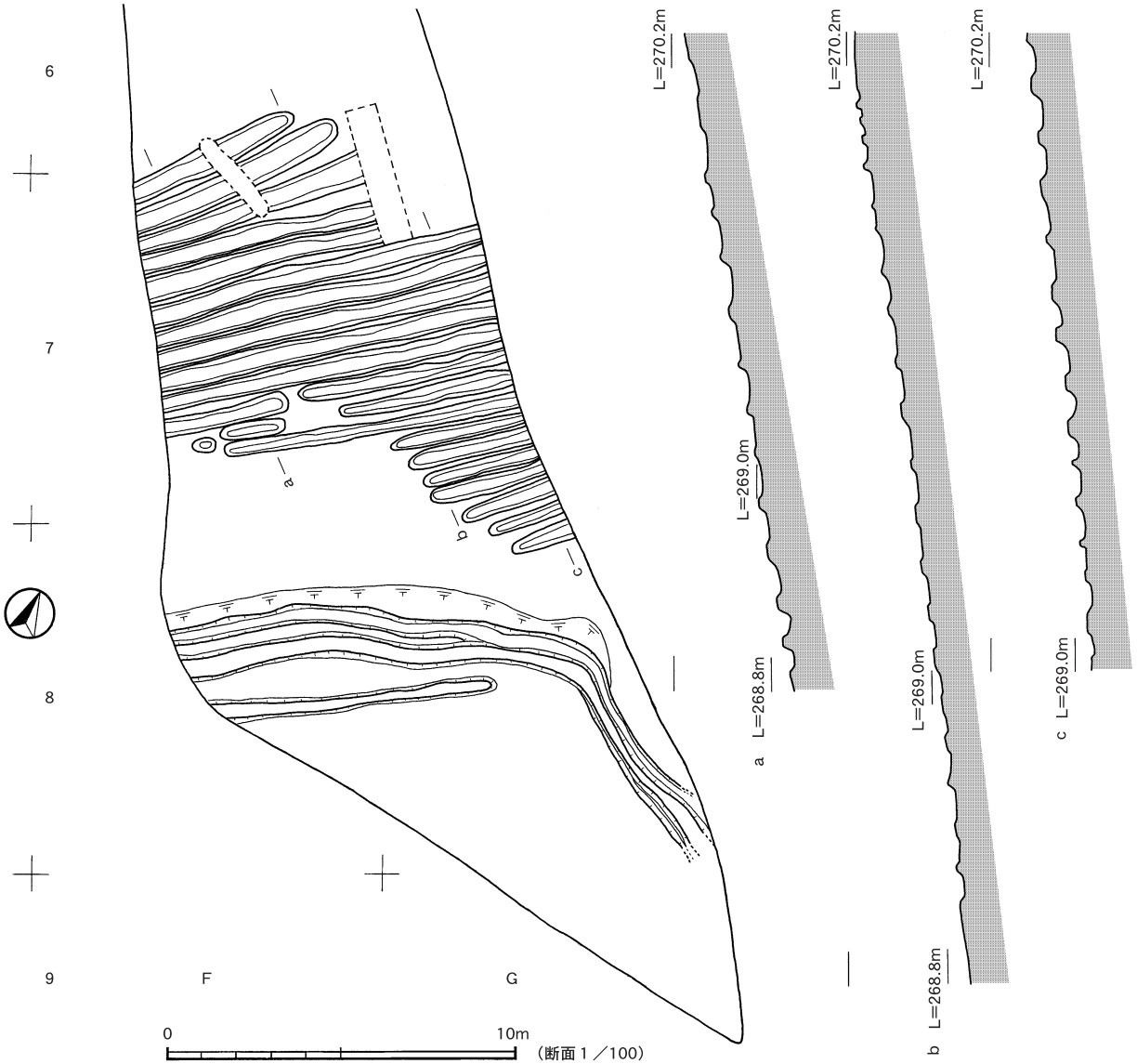


第52図　北部　中世～近世　溝状遺構13

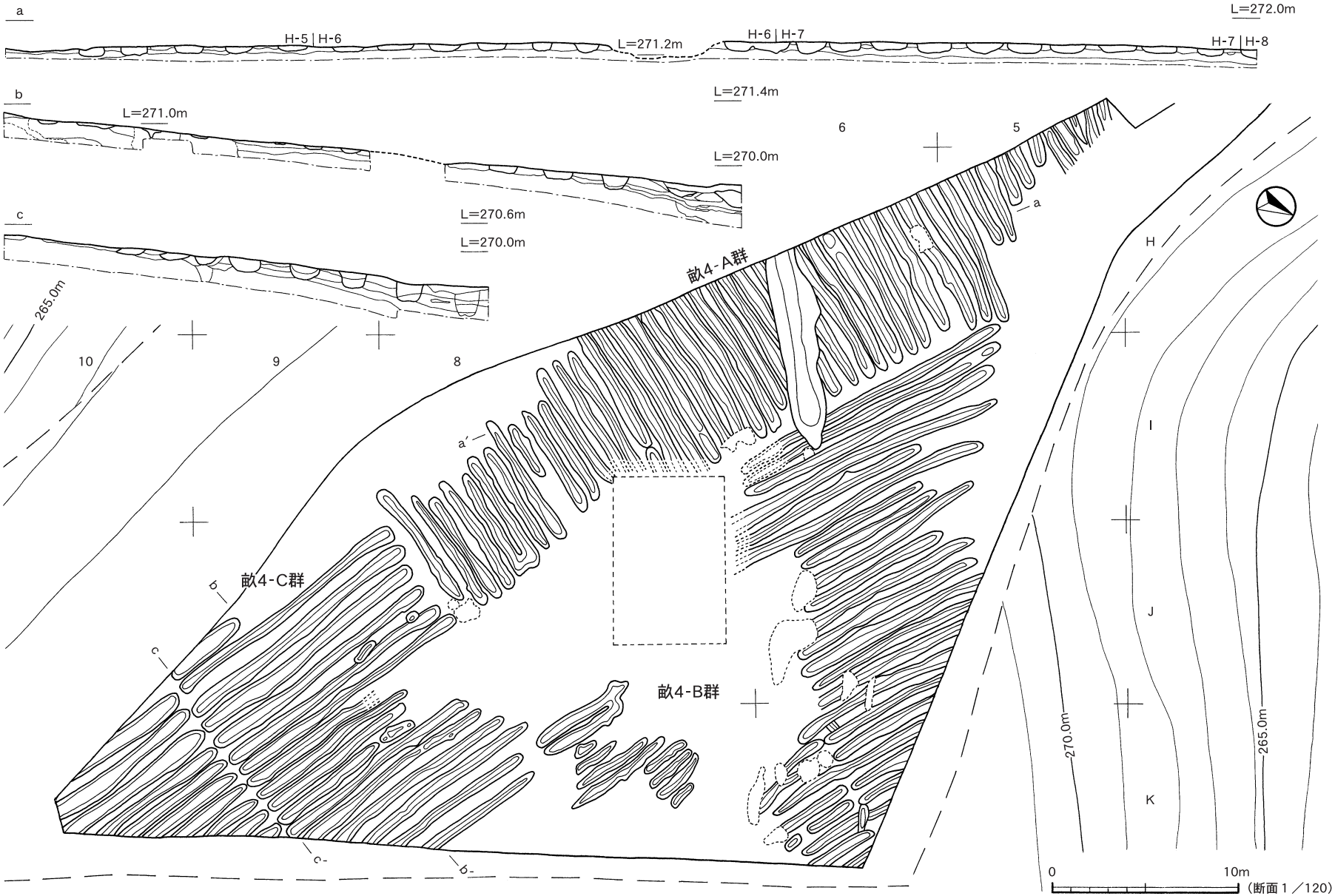
端は南北方向に残る消失部分にのみ見られ，それ意外には確認されなかった。埋土はやや粘質のある黒色土が主体であり，文明ボラが全体的に混在している。断面は底面に凸凹を持つ皿型のものが多い。畝状遺構１，２とは時期が異なり，大規模なボラ抜後に作られたものと推定される。

畝状遺構４（第54図）

Ｇ～Ｋ－５～10区のⅡ～Ⅳ層上面，北部の市道を挟んで東側で畝状遺構が検出された。Ⅱ層堆積後にある程度の平坦面を造成して作られ，その後の削平により検出面は削平部分ではⅢ～Ⅳ層上面，盛り土部分ではⅡ層上面と安定しない。それに伴い，埋土も黒色土が主体であるが，暗褐色土や黄色土が部分的に混在し，文明ボラの混入割合も大きく異なる。Ｄ，Ｅ－７，８区は，現代の畑地造成のため削平され消失しているが，それ以前は存在していたと思われる。畝間の規模は幅40㎝前後，深さ約25㎝の断面形状がＵ字型を基本とし，底面に凸凹が多い。畝間の配列方向に違いが見られ概ね３群に分かれるが，区割り溝や畦などは確認されなかった。４－Ａ群は，略南北方向の畝間列が台地から東側へ緩やかに下るように並び，北端の掘り込みは略東西方向に揃っている。４－Ｂ群は，略東西方向の畝間列が北側へ緩やかに下るように並んでいるが，削平による消失部分が多く全体像は不明である。４－Ｃ群は，略東西方向の畝間列が台地から南側へ緩やかに下るように並んでいる。



第53図　北部　中世　畝状遺構３



第54図　北部　中世　畝状遺構４

西端，東端ともに残存状況が良好で，全長9.8mを基本とする畝間が整然と並んでいる。

⑷　**土坑**（第55，56図）

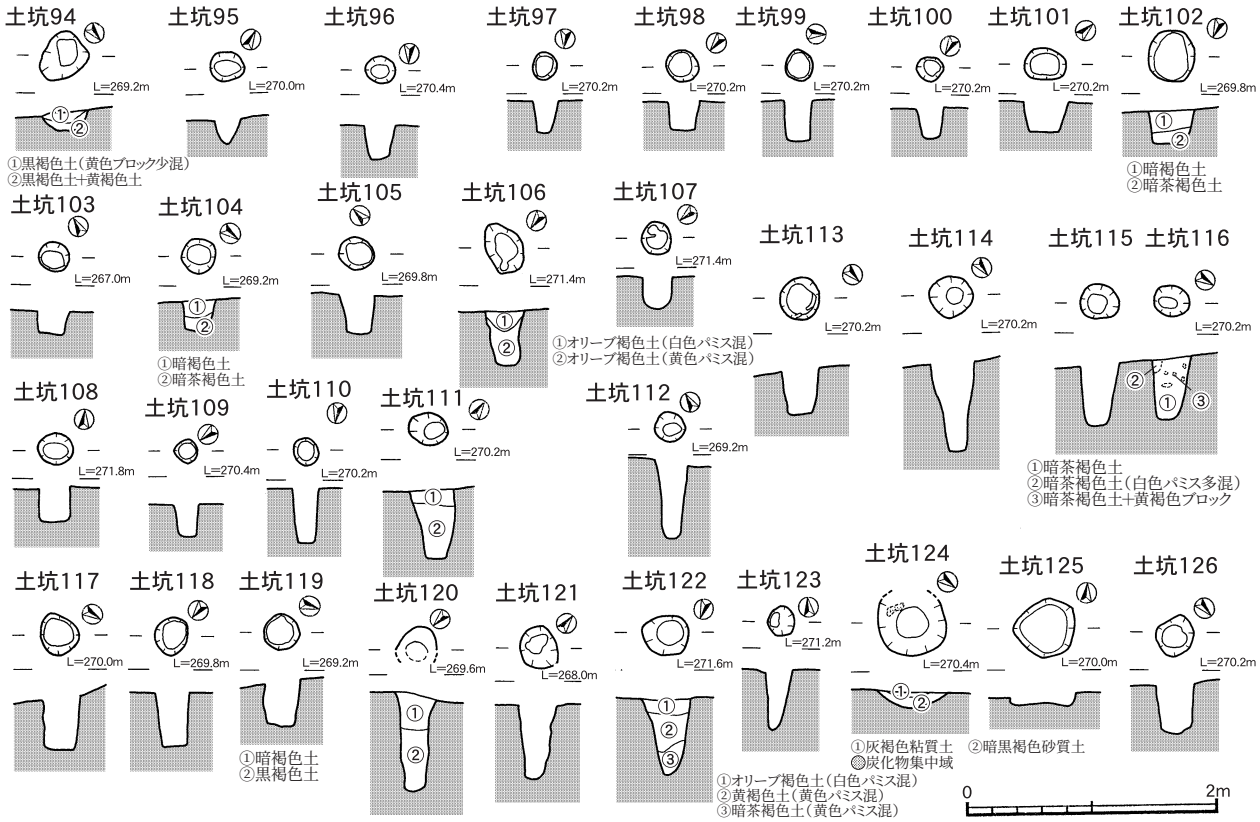
中世～近世の土坑は，計33基が検出された。Ⅲ～Ⅳ層での検出であり，30㎝程度の土坑が９割以上であり，１mを越える大型のものや楕円形のものは確認されなかった。埋土は白色パミスを含む黒色土または褐色土が中心である。また，黒色土や黄褐色土などがブロック状に混在しているものも見られた。また，土坑の集中する地域は見られず，調査区全体から検出された。

土坑94～124はＩ類の土坑で，平面径30㎝前後の円形を呈する。土坑94～109は平面形の平均が29.1×25.5㎝で，深さが17～41㎝と比較的浅い。土坑110～124は平面形の平均が32.6×27.8㎝で，深さが12～61㎝とやや深いものである。ともに埋土は白色パミスを含む黒色土が主体であるが，下位に黄色パミス，上位に白色パミスと分かれるものも見られた。炭化物を含むものも数基確認された。断面形態は，土坑94以外はすべてU字型または上位が開き気味の長方形を呈する。

土坑125，126はⅡ類の土坑であり，平面形の平均42.5×38.5㎝で，ほぼ円形を呈する。深さ10～38㎝で，125はレンズ型，126は浅い皿型を呈する。土坑125の底面付近は砂質のある黒褐色土であり，その中心付近が粘質のある灰橙色土に変化し，炭化物も見られた。

土坑94（第55図）

Ｇ－７区の台地の縁辺部から南側の斜面へ下る，Ⅳ層で検出された。平面径は45×38㎝の歪みのある円形を呈し，深さは17㎝である。断面形状はボウル型を呈し，埋土は底面付近がやや粘性を持つ暗黄褐色土，上位が黒褐色土主体に黄褐色土が部分的に混在している。全体に黄白色パミスと炭化物が少量混ざる。埋土中より種子と思われる炭化物が３点出土し，分析の結果１点は桃の種子と



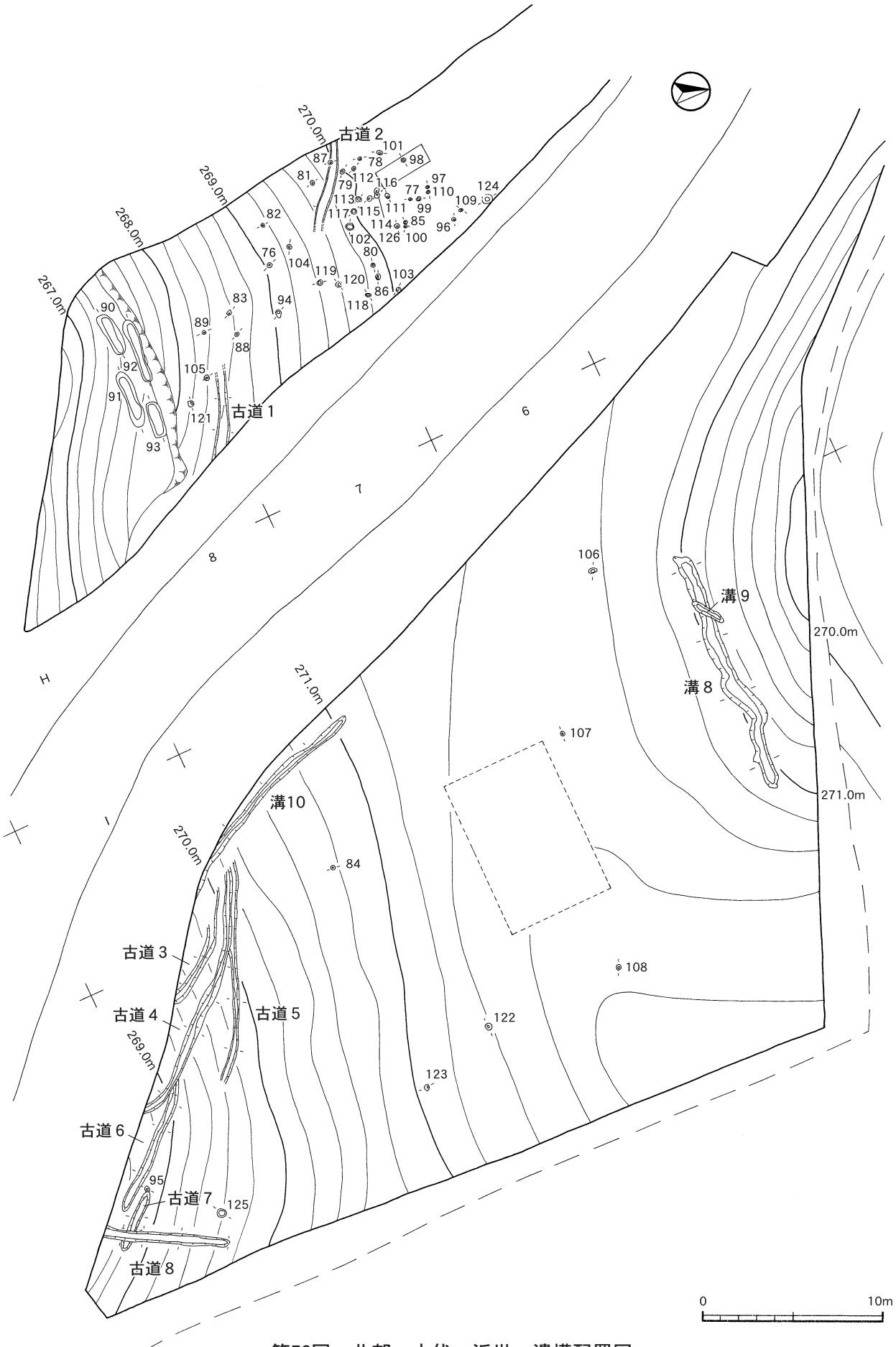
第55図　北部　中世～近世　土坑

同定される。桃の種子は，全長約２㎝，全面に短い溝が並び片方の先端部が尖った楕円形をしている。他の２個についてもほぼ同じと思われる。

第６表　北部　土坑計測表

土坑番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
48	45	38	39
49	23	21	28
50	25	21	21
51	32	24	30
52	25	25	25
53	20	18	21
54	32	26	30
55	20	18	14
56	25	22	19
57	36	28	22
58	22	20	22
59	32	22	16
60	24	20	36
61	30	27	41
62	23	21	29
63	35	27	44
64	25	20	42
65	33	30	57
66	28	25	55
67	30	26	36
68	28	25	52
69	24	20	37
70	40	26	54
71	76	72	129
72	85	61	17
73	48	24	19
74	148	34	18
75	146	84	39
76	39	37	14
77	20	19	23
78	26	22	33
79	26	23	32
80	26	24	42
81	23	20	35
82	24	20	33
83	34	28	37
84	25	20	30
85	28	27	56
86	34	26	52
87	29	27	57

土坑番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
88	34	26	58
89	26	24	42
90	245	79	16
91	319	65	33
92	371	48	37
93	203	70	41
94	45	38	17
95	28	24	17
96	25	22	28
97	23	22	28
98	26	25	23
99	25	21	34
100	21	20	25
101	34	26	25
102	41	37	27
103	25	24	20
104	29	27	27
105	29	27	32
106	42	29	41
107	25	22	24
108	28	25	28
109	20	19	26
110	23	20	45
111	32	22	60
112	26	24	61
113	33	30	32
114	35	32	71
115	31	27	50
116	29	24	50
117	33	31	43
118	31	29	45
119	30	27	36
120	33	20	79
121	35	30	59
122	38	32	58
123	23	21	46
124	57	48	12
125	49	46	10
126	36	31	38



第56図　北部　古代～近世　遺構配置図

第57図　北部　中世～近世　遺構配置図

第４節　出土土器

北部の出土遺物点数は合計190個であり，遺跡総点数の約３％に相当する。しかも，190点中約半数は本調査区外となった平成13年度の確認トレンチからの出土である。北部調査区一帯は，近年の畑地整備事業や個人による土壌改良のための工事が行われており，上位に当たる縄文時代後～晩期の一部と古代～近世の遺物包含層は削平されていた。したがって，この地区で取り扱う遺物は，縄文時代早期が中心となる。

縄文時代早期の遺物包含層であるⅦ，Ⅷ層は良好に残されている部分もあり，その部分は現位置を保った遺構・遺物が捉えられている。

１　縄文時代（第58～64図47～139，71図）

狩俣遺跡の縄文時代の土器は，早期から晩期まで，Ⅰ類からⅩⅦ類までの17類に分類される。

この分類は全ての調査区に共通であり，Ⅰ，Ⅸ，ⅩⅦ類については，同類の中でも形態の違いからさらに細分した。なお，Ⅰ～ⅩⅡ類は縄文時代早期に該当する。

Ⅰ-a類……貝殻条痕文を主とする円筒土器で，口唇部が鋭角で，貝殻条痕が斜行するもの
Ⅰ-b類……Ⅰ類の中で，口唇部が平坦で，貝殻条痕が横位に施されるもの
Ⅱ類……貝殻条痕文の上に沈線文等を施文する二重施文土器
Ⅲ類……貝殻刺突文を施す円筒土器
Ⅳ類……横位の貝殻押引文が施文される円筒土器
Ⅴ類……口縁部に貝殻刺突文を施し，胴部には貝殻条痕文横位・綾杉状等に施文するもの
Ⅵ類……貝殻刺突文を主体とするもの
Ⅶ類……口縁部に横位の貝殻条痕文を施すもの
Ⅷ類……ヘラ状工具による斜格子状の文様が施されるもの
Ⅸ-a類……押型文土器で，山形押型文及び楕円押型文を施すもの
Ⅸ-b類……口縁部から胴部中位に山形押型文，胴部中位から底部に貝殻押型文を施すもの
Ⅹ類……完形土器　口縁部が大きく外反するもので全体に特殊な回転施文のあるもの
Ⅺ類……外反する口縁部で，連続刺突と沈線文が施されるもの
ⅩⅡ類……微隆起突帯を廻らす壺型土器
ⅩⅢ類……縄文時代前期の土器で，みみず腫れ突帯を廻らし，胴部は貝殻条痕が施されるもの
ⅩⅣ類……縄文時代前期の土器で，短沈線文を主とするもの
ⅩⅤ類……縄文時代後期の土器で，胴部に貝殻復縁によると思われる連点文が施されるもの
ⅩⅥ類……縄文時代後期の土器で，胴部に沈線文を施すもの
ⅩⅦA-a類……縄文時代晩期の深鉢形土器で，刻目突帯を有しないもの
ⅩⅦA-b類……縄文時代晩期の鉢形土器で，刻目突帯を有するもの
ⅩⅦB類……縄文時代晩期の浅鉢形土器
ⅩⅦC-a類……縄文時代晩期の鉢形土器で，底部に組織痕が認められないもの
ⅩⅦC-b類……縄文時代晩期の鉢形土器で，底部に蓆目状の組織痕が認められるもの
ⅩⅦC-c類……縄文時代晩期の鉢形土器で，底部に網目状の組織痕が認められるもの

⑴ **縄文時代早期**（第58～62図47～105）

Ⅰ類土器（第58図47，48）

47，48はⅠ類土器でⅠａ類とⅠｂ類に細分される。47はⅠａ類で斜位の貝殻条痕文を浅く施している。48はⅠｂ類の土器で横位に施した貝殻条痕文の上に縦位の貝殻条痕文を重ねている。

Ⅱ類土器（第58図49）

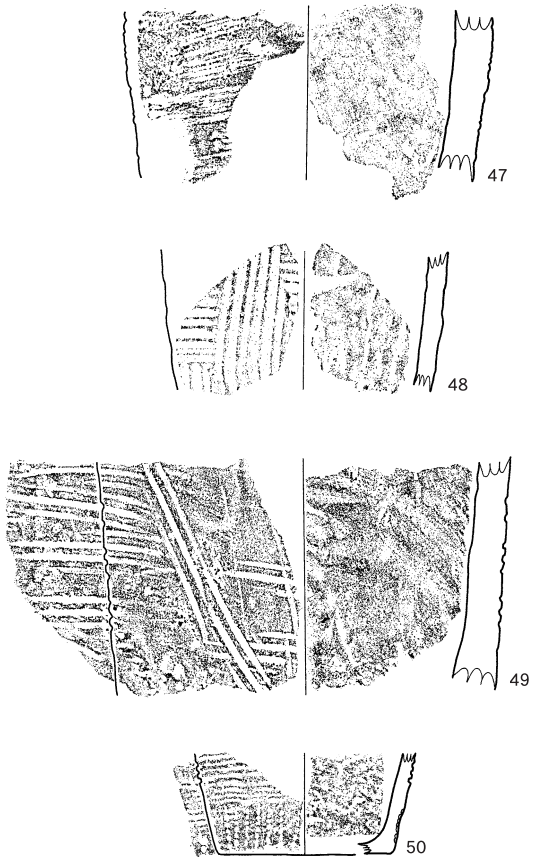
49はⅡ類土器の胴部である。胴部に横位の貝殻条痕文を施した後斜位の貝殻条痕文を施すものである。

Ⅳ類土器（第58図50）

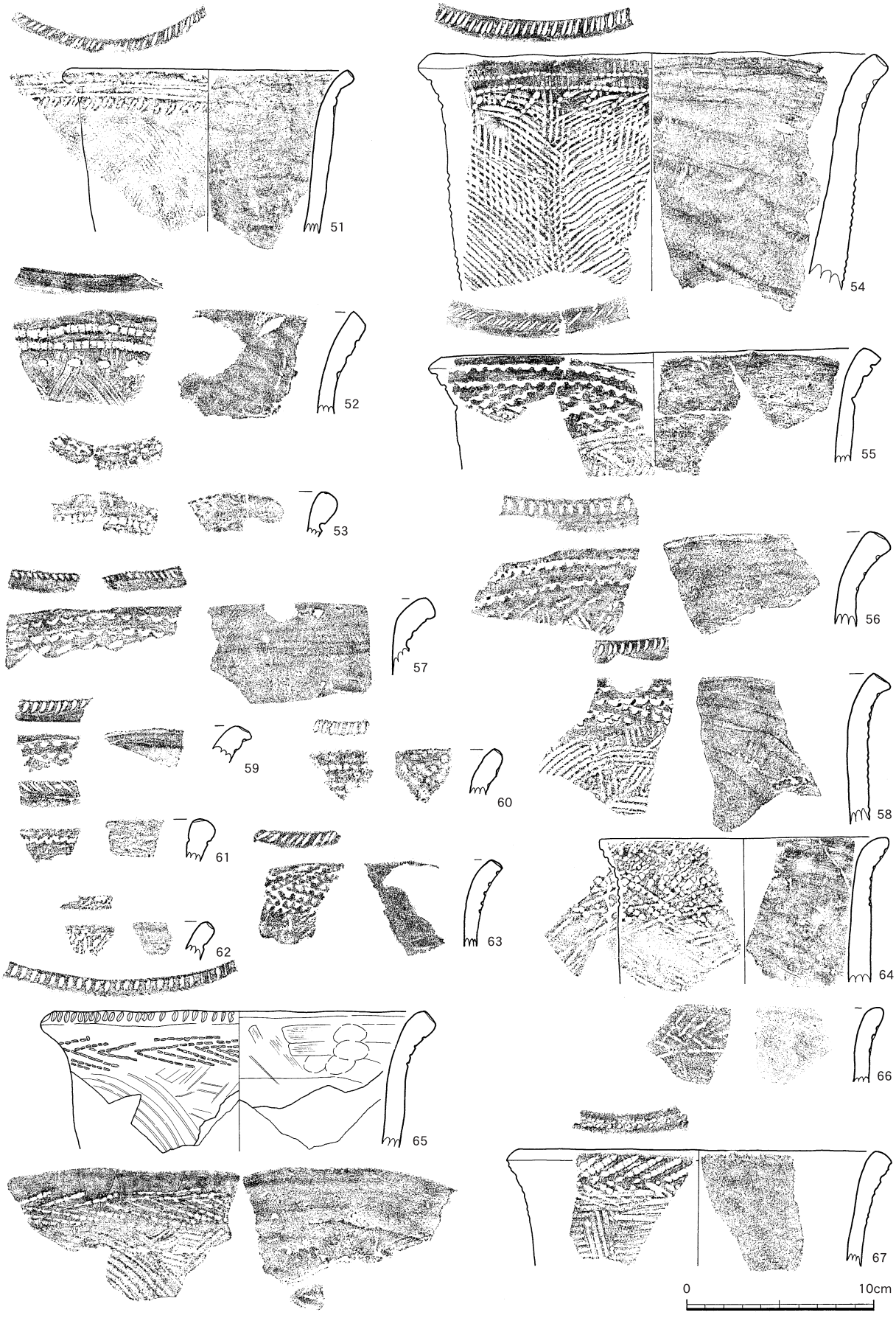
50はⅣ類土器の底部である。胴部には貝殻腹縁による押引文を施し，下位に縦位の貝殻刺突文を施すものである。

Ⅴ類土器（第59～61図51～98）

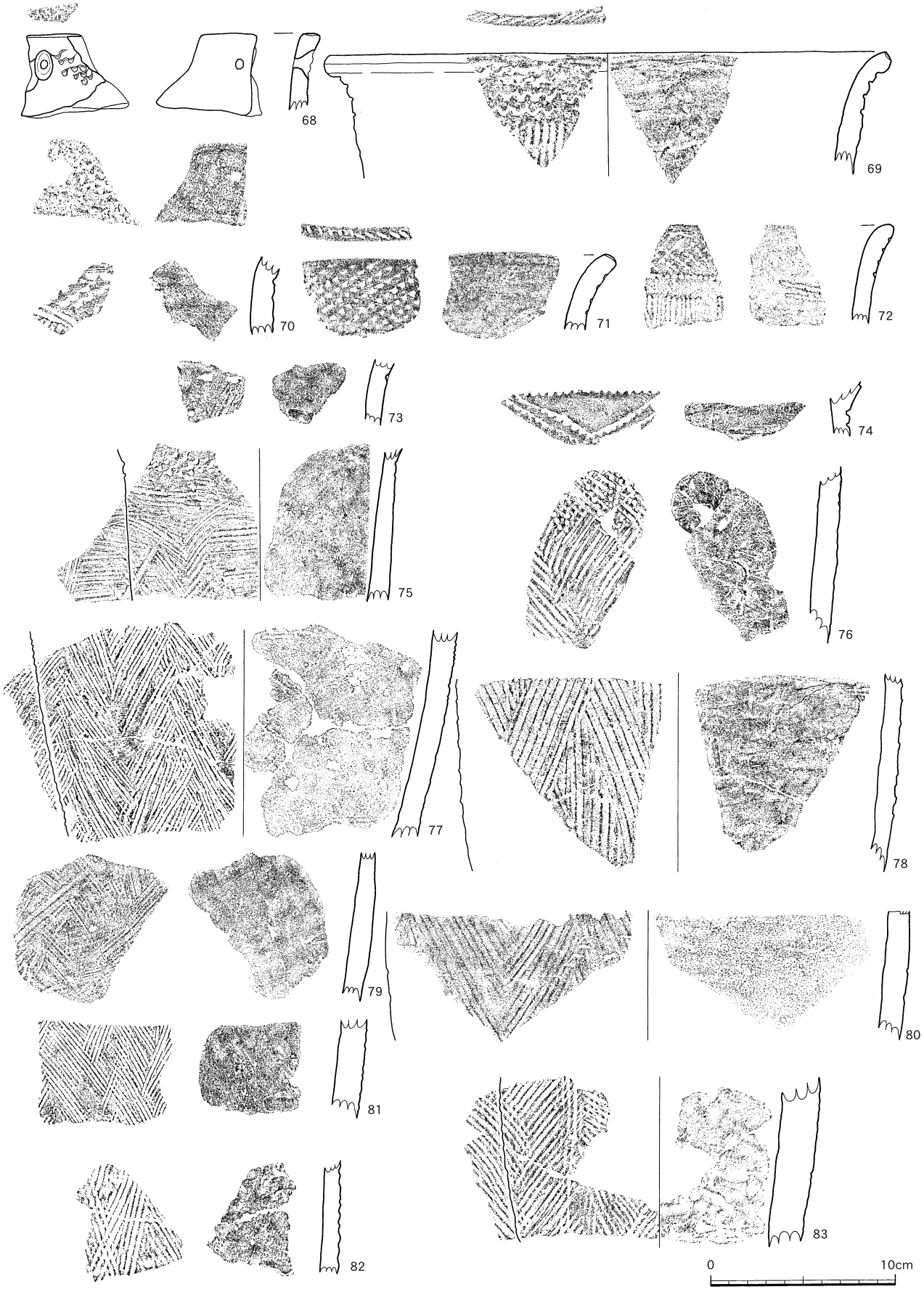
51～98はⅤ類土器で，口縁部が外反し頸部でやや締まり胴部でわずかに膨らみつつ底部に至るタイプと，口縁部が直行し直線的な胴部を経て平底の底部に至るタイプがある。文様は貝殻条痕文であるが綾杉状に施すものが多く見られる。51～53，56～61，65は口縁部に横位の貝殻刺突文を二条施し52と56は貝殻刺突文の下に刻みが施されている。53は二条目から欠損している。51，57～61は貝殻刺突文の下に斜位の貝殻刺突文が施されている。54は横位の貝殻刺突文を一条施し，55は斜位の貝殻刺突文を施している。62～64，66，67は口縁部に斜位の貝殻刺突文を組み合わせて，くの字状或いは羽状に施している。68は口縁部に斜位の貝殻刺突文が二条施されており，補修孔が見られる。69は口縁部に横位の貝殻刺突文を四条施しており胴部に縦位の貝殻条痕文を施している。70は口縁部に浅い貝殻条痕が二条斜位に施され，その直下に貝殻刺突文が逆方向に斜位に施されている。71は口縁部に斜位の貝殻刺突文を施しており，口唇部に刻みが見られる。72は口縁部に斜位の貝殻刺突文を重ねて施しており，その直下に米粒状の連点文を施している。73は口縁部に連点文が施されており，浅い貝殻条痕文が施されている。74は口縁部に横位の貝殻刺突文を施しており，その直下に斜位の貝殻刺突文を左右に施している。口唇部は欠損している。75は口縁部に斜位の貝殻刺突文を施し，胴部は貝殻条痕文を横位に施した上から綾杉状の貝殻条痕文を重ねて施している。76～94は胴部にあたる。76～78，81，83，87，88，92，93は綾杉状の貝殻条痕文を施している。76は貝殻条痕文の上に斜位の貝殻刺突文を左右に施している。83は



第58図　北部　縄文時代早期の土器⑴



第59図　北部　縄文時代早期の土器(2)



第60図　北部　縄文時代早期の土器(3)

上部の割れ口が磨耗している。92は綾杉状に施した貝殻条痕文の上に縦位の貝殻条痕文を施している。79は波紋状の貝殻条痕文を重ねて施している。80は縦位の貝殻条痕文を浅めに施し，その上から斜位の貝殻条痕文を浅めに施している。82は浅い条痕文を斜位に重ねるように施している。84は貝殻条痕文をランダムに重ねて施している。85は条痕文を縦位に施し，その上から斜位の条痕文を重ねて施している。86は条痕文を縦位に施し，その上から斜位の条痕文を左右に重ねて施している。89は条痕文を斜位に施している。90，91は底部に近い部分で，90は綾杉状に施した貝殻条痕文の上から横位の貝殻条痕文を底部付近に施している。91は貝殻条痕文を縦位に施しその上から斜位の貝殻条痕文を交差するように重ねて施している。84は貝殻条痕文を縦位に施し，その上から斜位の貝殻条痕文を施している。95～98は底部にあたる。93は底部付近に縦位の貝殻条痕文を施している。96は綾杉条痕文を底部付近まで施し，その上から横位の条痕文を重ねて施している。立ち上がりの部分には米粒状の刻みが見られ，底部内面は凹凸が見られる。97は胴部の立ち上がり部分に米粒状の刻みを施している。底の部分には炭化物が付着している。98は胴部に貝殻条痕文を縦横に施し，底部付近に横位の条痕文を施している。底部外面にも条痕文が見られる。

Ⅸａ類土器（第62図99，100）

99，100はⅨａ類土器である。99は口縁部が外反し山形押型文を縦位に施している。内面は同じく山形押型文を横位に施している。100は胴部にあたり，文様は松の木等のような突起物を持つ枝を回転施文したものと考えられ「イチゴ」と呼ばれる押型文土器と思われる。

Ⅹ類土器（第62図101，102）

101，102はⅩ類土器の底部である。101は山形押型文を縦位に施すもので，102は沈線文を施すものである。

Ⅻ類土器（第62図103～105）

103，104はⅫ類土器の壺形土器である。内傾する口縁部に微粒突帯を廻らすものである。105はⅫ類土器の底部である。

⑵　縄文時代前期（第62図106～116）

ⅩⅢ類土器（第62図106）

106はⅩⅢ類の土器の底部にあたる。底部付近に斜位の条痕文を施し，その上から横位の条痕文を重ねて施している。

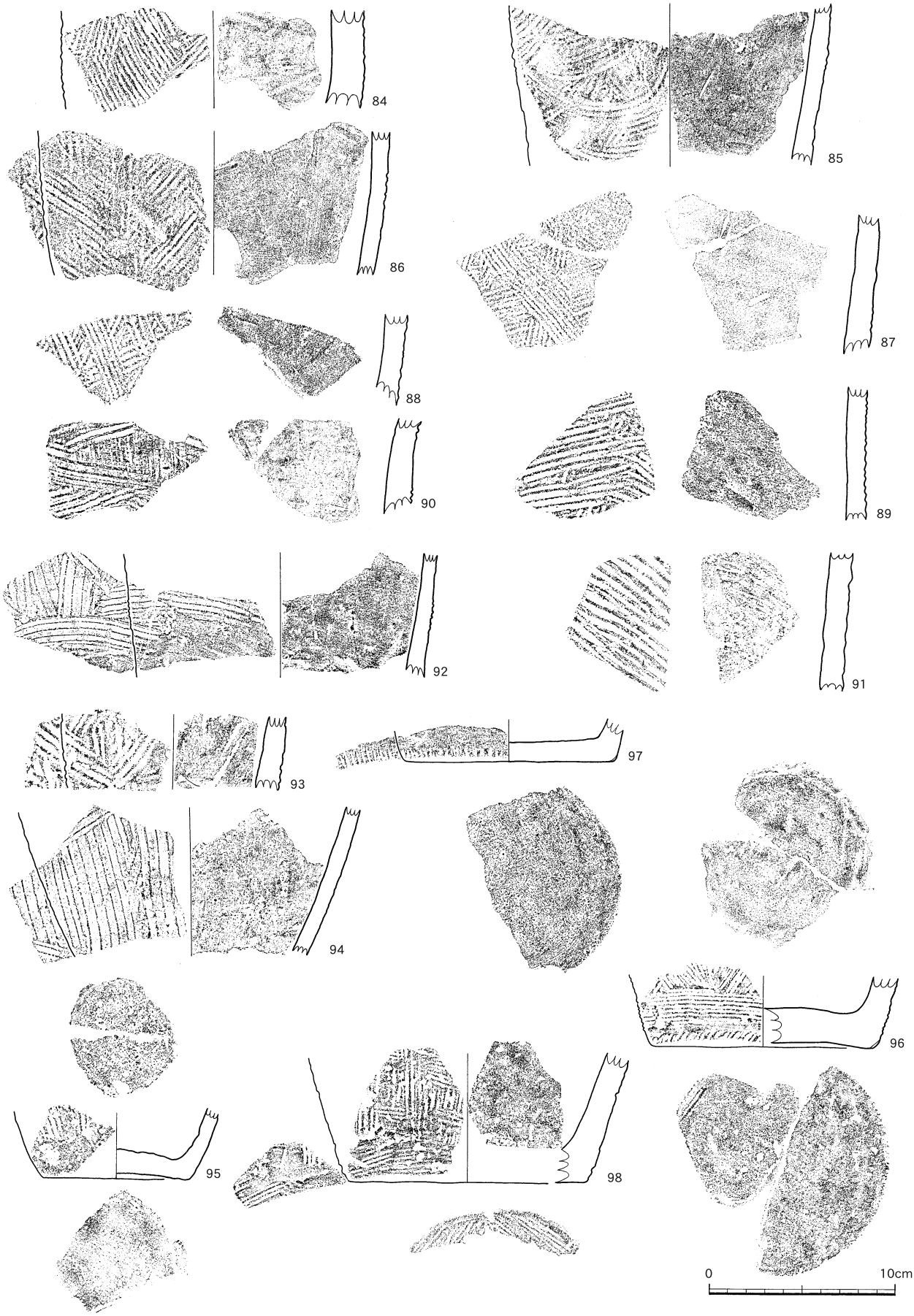
ⅩⅣ類土器（第62図107～116）

107～116はⅩⅣ類土器で，107～115は胴部にあたる。107は斜位の沈線文を左右に施している。108～110は沈線文を縦横に施している。111～114は沈線文を横位に施している。115は浅い斜位の沈線文を左右に施している。116は底部で浅い沈線文を横位に施している。

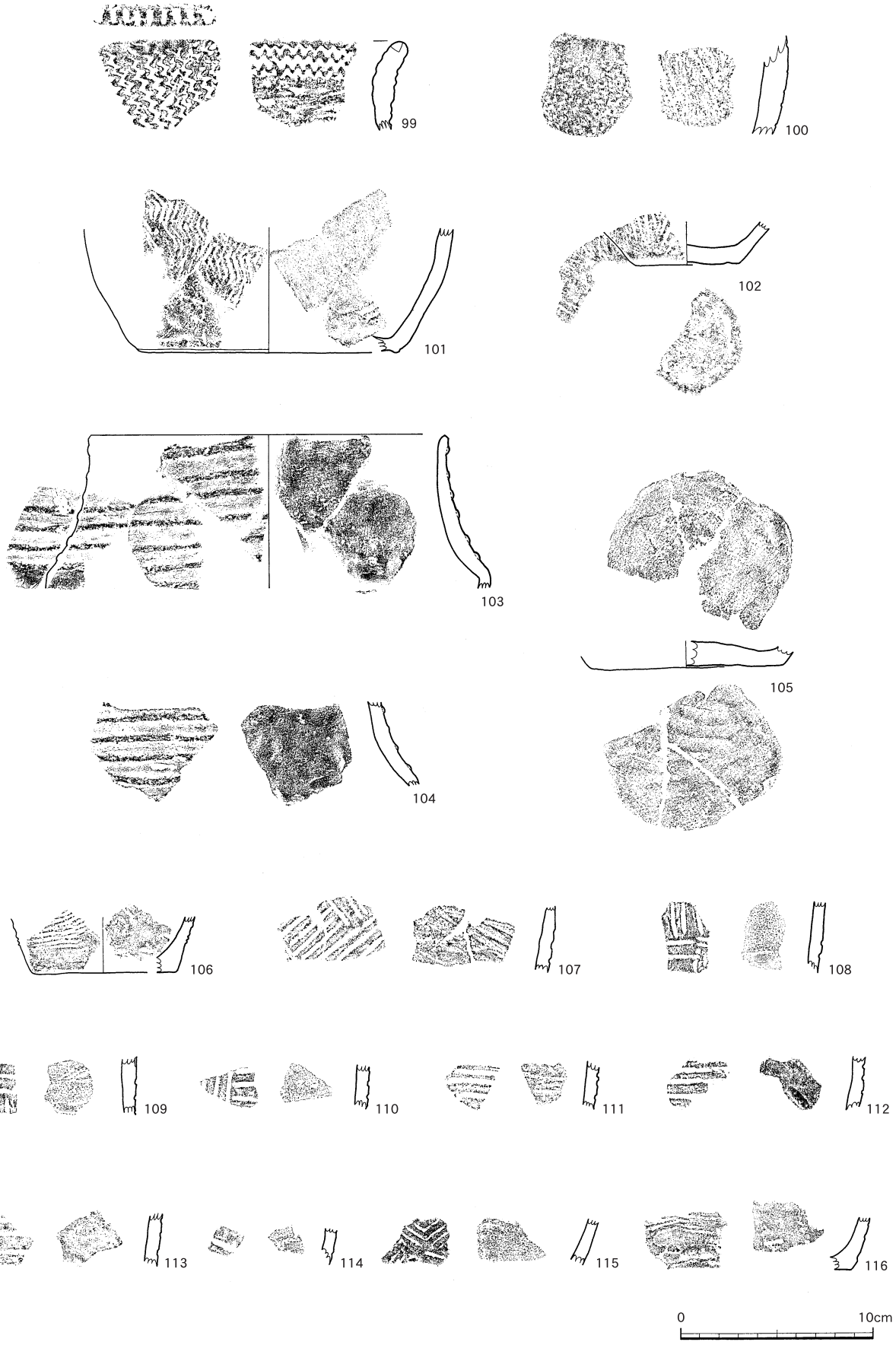
⑶　縄文時代後期（第63図117～126）

ⅩⅥ類土器（第63図117～126）

117～126はⅩⅥ類土器にあたる。117，118は波状の口縁部で，117は口縁部にやや太めの沈線文を二条横位に施しその下に同じ太さの沈線文をＳ字状に施している。内面の口縁部に一部突起が施されている。118は浅めの沈線文を波状に二条施している。119は口縁部に横位の沈線文を一条施し120，121は胴部で沈線文を二条施している。122は胴部から底部にあたり，外面はナデによる調整



第61図　北部　縄文時代早期の土器(4)



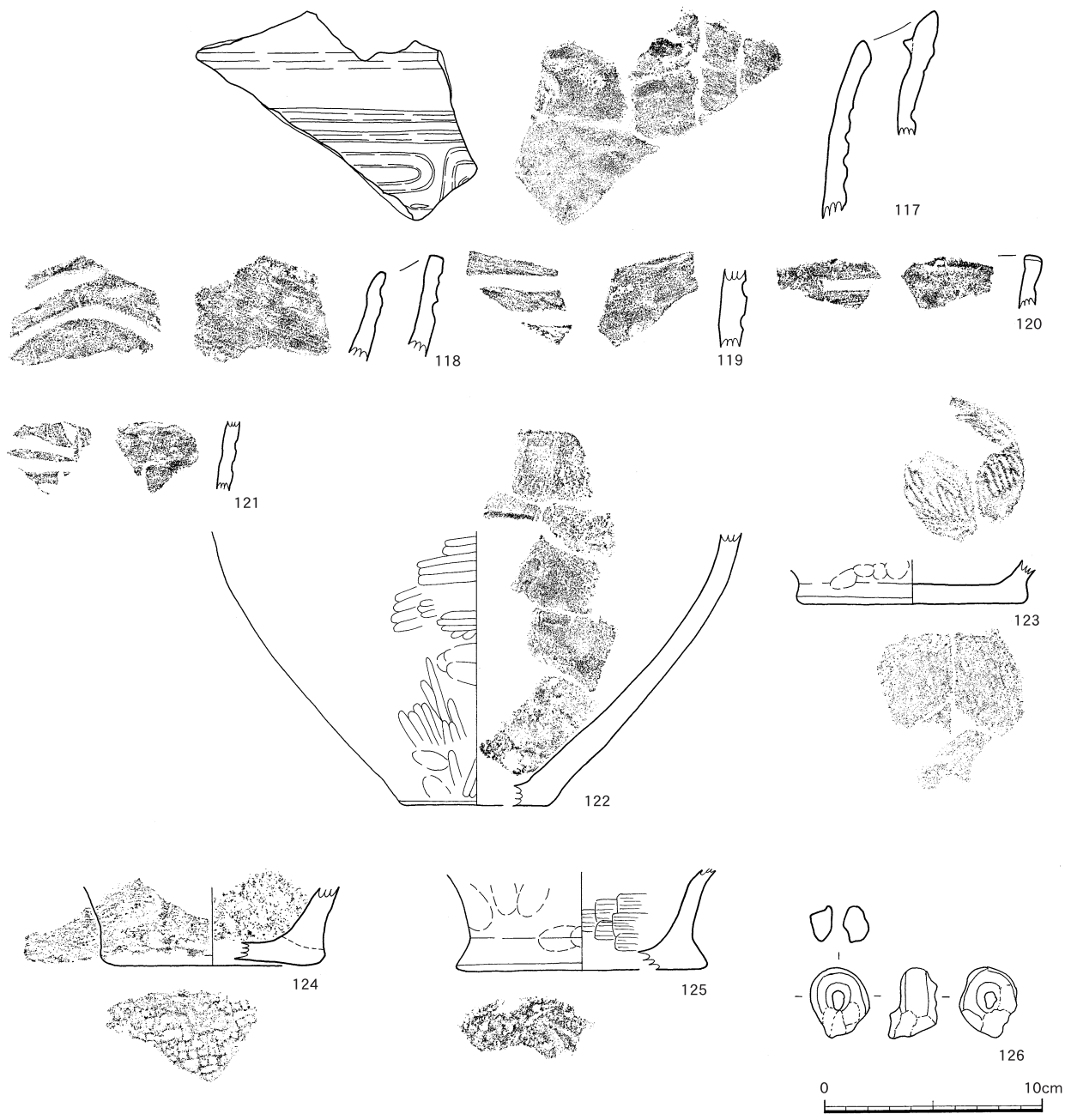
第62図　北部　縄文時代早期の土器⑸・前期の土器

を受けている。123～125はⅥ類土器の底部にあたる。124は網代底である。125は内底面に貝殻条痕が残る。126は口縁部上端に施される装飾と思われる。円形で中心に穿孔が穿たれており，欠損部分が見られる。

⑷ **縄文時代晩期**（第64図127～139）

Ⅶ類Ａ土器（第64図127～129）

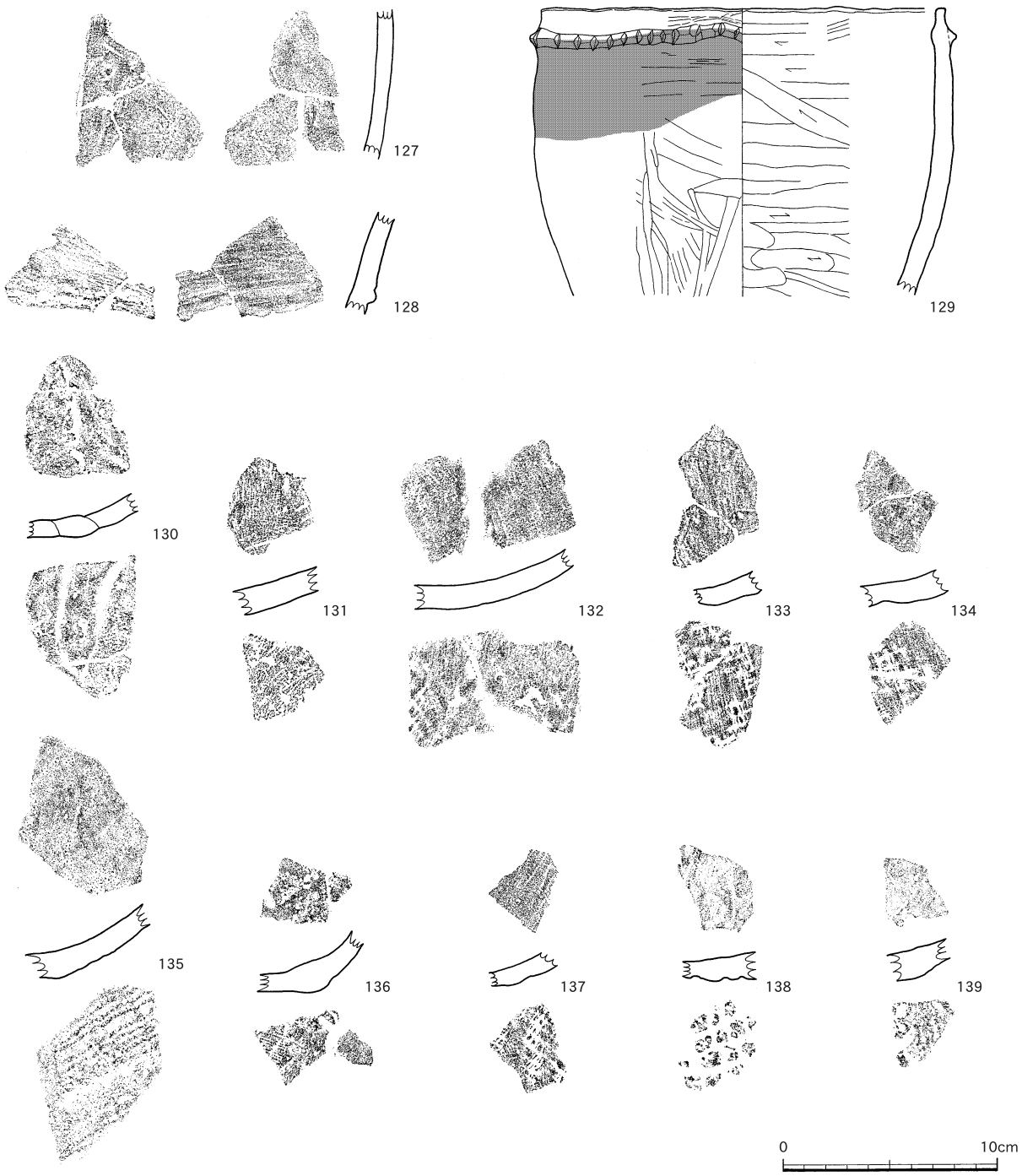
127～129はⅦ類Ａ土器で深鉢型土器である。127，128はⅦ類Ａ－ａ土器にあたり129はⅦ類Ａ－ｂ土器にあたる。127，128は胴部で129は胴部に突帯を廻らしている。129は口縁部直下に刻目突帯を廻らし，口縁部から胴部にかけて一部炭化物が付着している。放射性炭素年代測定の結果，2480±30yrBPという数値が確認できた。



第63図　北部　縄文時代後期の土器

Ⅻ類Ｃ土器（第64図130～139）

130～139はⅫ類Ｃ土器で鉢型土器である。130，131はＣ－ａ土器でボウル状を呈し組織痕が無い若しくは消されているタイプである。132～137はＣ－ｂ土器で底部に蓆目状の組織痕が見られるタイプである。138，139はＣ－ｃ土器で底部に網目状の組織痕が見られるタイプである。



第64図　北部　縄文時代晩期の土器

2　古代　（第65図140～144）

140～144は古代の土器である。

140は甕の口縁部から胴部にあたる。口縁部は外反しており，色調はにぶい橙色を呈する。外面は丁寧なハケ目調整で，内面は胴部上位まで工具によるヘラ削りが見られる。胎土は細砂粒を含み土師質である。

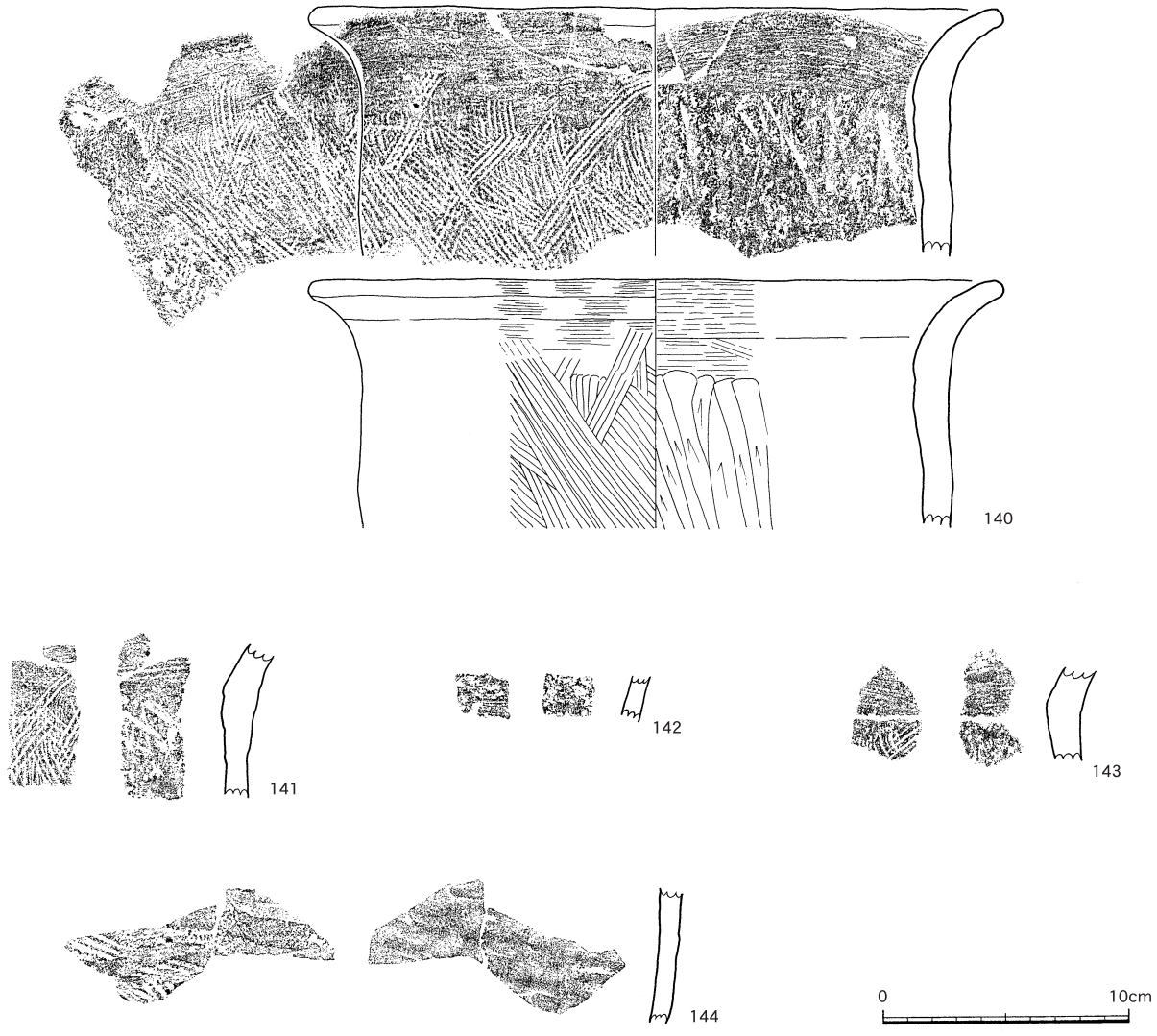
141～144は甕の胴部にあたる。141はにぶい黄橙色を呈し，外面は140と同じくハケ目調整で内面は工具によるヘラ削りが見られる。胎土は細砂粒を含み土師質である。

142は褐色を呈し，外面はハケ目による調整が見られ内面はナデによる調整をうけている。胎土は細砂粒を含み土師質である。

143はにぶい褐色を呈し，外面はハケ目調整で，内面は工具による削りが見られる。胎土は細砂粒を含み土師質である。

144は黒褐色を呈し，外面は工具痕がスジ状に残る。内面はナデによる調整が施されている。

140，141，143は同一個体ないし同種類の土器と思われる。



第65図　北部　古代の土器

第７表　北部　土器観察表(1)

挿図番号	ﾚｲｱｳﾄ番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整		色調		胎土						分類	備考
										外面	内面	外面	内面	長石	石英	角閃	雲母	砂粒	その他		
58	47	2T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	－	－	－	貝殻条痕文	ナデ	明赤褐色	橙	○	○	○				Ⅰa	
	48	2T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	－	－	－	貝殻条痕文	ナデ	橙	にぶい橙	○	○	○				Ⅰb	
	49	2T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	－	－	－	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	黒褐				○	○	赤色粒・小石 チタン鉄鉱	Ⅱ	
	50	2T	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	底部～胴部	－	6.8	－	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄	にぶい黄		○			○	磁鉄鉱 小石	Ⅳ	
59	51	B-2	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	15.0	－	－	貝殻条痕文	ナデ	橙	にぶい黄橙	○	○	○				Ⅴ	
	52	F-4	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	－	－	－	条痕，刺突文 工具ナデ	ナデ	にぶい褐	橙		○			○	小石	Ⅴ	
	53	2T	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	－	－	－	貝殻条痕文 口唇部連点	ナデ	橙	にぶい褐			○		○	小石	Ⅴ	
	54	2T	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	24.0	－	－	口唇部連点 条痕，ヨコキザミ	ナデ ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			○	小石	Ⅴ	
	55	B-2	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	22.6	－	－	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○				Ⅴ	
	56	2T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	－	－	－	貝殻条痕文 口唇部連点	ナデ	暗褐	褐	○	○			○	赤色粒 小石	Ⅴ	
	57	F-8	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	－	－	－	沈線	ナデ	明褐	橙		○			○	チタン鉄鉱 小石	Ⅴ	
	58	K-7	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	－	－	－	沈線，撚糸 口唇部連点	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙		○		○	○	金雲母 小石	Ⅴ	
	59	K-7	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	－	－	－	撚糸 口唇部連点	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○		○	小石	Ⅴ	
	60	F-5	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	－	－	－	条痕 口唇部連点	ナデ	にぶい褐	橙					○	赤色粒 小石	Ⅴ	
	61	2T	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	－	－	－	貝殻条痕文 口唇部連点	ナデ	にぶい橙	にぶい橙		○	○		○	小石	Ⅴ	
	62	2T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	－	－	－	貝殻条痕文 口唇部連点	ナデ	橙	にぶい橙		○			○	赤色粒 小石	Ⅴ	
	63	F-4	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	－	－	－	刺突連続文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙					○	赤色粒・小石 チタン鉄鉱	Ⅴ	
	64	H-6 I-6	Ⅶ Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	15.4	－	－	沈線，ナデ ス状付着	ナデ	にぶい褐	褐	○	○			○	赤色粒 小石	Ⅴ	
	65	F-4 I-6	Ⅶ Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	20.0	－	－	沈線 口唇部連点	指圧痕 ヘラケズリ	黒褐	にぶい赤橙		○			○	赤色粒	Ⅴ	
	66	K-7	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	－	－	－	貝殻刺突連続文	ナデ	明黄褐	橙		○			○	赤色粒・小石 チタン鉄鉱	Ⅴ	
	67	B-2	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	19.0	－	－	貝殻条痕文	ナデ	橙	明赤褐色	○	○	○				Ⅴ	
60	68	2T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	－	－	－	貝殻条痕文 口唇部連点	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			○	小石	Ⅴ	補修孔
	69	B-2	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	30.4	－	－	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○				Ⅴ	
	70	2T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	－	－	－	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙		○			○	赤色粒 小石	Ⅴ	
	71	J-8	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	－	－	－	連続押し引き文	ナデ	橙	橙		○			○	赤色粒 小石	Ⅴ	
	72	K-6	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	－	－	－	沈線 連続押し引き文	ナデ	褐	にぶい褐	○				○	赤色粒 小石	Ⅴ	
	73	F-4	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	－	－	－	工具ナデ 刺突文	ナデ	橙	にぶい褐		○			○	小石	Ⅴ	
	74	B-2	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	－	－	－	貝殻条痕文	ナデ	橙	橙	○	○	○				Ⅴ	
	75	F-4	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	－	－	－	沈線 撚糸	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○			○	赤色粒・小石 チタン鉄鉱	Ⅴ	
	76	F-4	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	－	－	－	沈線 連続押し引き文	ナデ	にぶい褐	にぶい赤褐	○	○	○		○	チタン鉄鉱 小石	Ⅴ	
	77	K-8	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	－	－	－	貝殻条痕文	ナデ	にぶい赤褐	赤褐					○	磁鉄鉱 小石	Ⅴ	
	78	2T	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	－	－	－	貝殻条痕文	ナデ	明褐	にぶい褐		○		○	○	赤色粒 小石	Ⅴ	
	79	F-4	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	－	－	－	条痕	ナデ	橙	橙		○			○	赤色粒 小石	Ⅴ	
	80	K-10	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	－	－	－	貝殻条痕文	ナデ	橙	橙	○	○			○	チタン鉄鉱 小石	Ⅴ	
	81	K-6	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	－	－	－	条痕	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐					○	チタン鉄鉱・小石 シソ輝石・赤色粒	Ⅴ	
	82	I-7	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	－	－	－	沈線 連続押し引き文	ナデ	にぶい褐	褐		○			○	小石	Ⅴ	
	83	2T	Ⅶ Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	－	－	－	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	黒褐				○	○	小石	Ⅴ	
61	84	2T	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	－	－	－	貝殻条痕文（綾杉文）	ナデ	にぶい黄橙	褐灰		○			○	小石	Ⅴ	
	85	2T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	－	－	－	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙		○			○	赤色粒・小石 チタン鉄鉱	Ⅴ	
	86	2T	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	－	－	－	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			○	赤色粒 小石	Ⅴ	
	87	I-6	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	－	－	－	条痕	ナデ	橙	橙		○			○	小石	Ⅴ	
	88	2T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	－	－	－	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○	赤色粒・小石 チタン鉄鉱	Ⅴ	
	89	I-7	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	－	－	－	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○	赤色粒 小石	Ⅴ	
	90	2T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	－	－	－	ヘラ状条痕文	ナデ	黒褐	にぶい赤褐		○		○	○	小石	Ⅴ	
	91	F-4	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	－	－	－	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙					○	赤色粒 小石	Ⅴ	
	92	2T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	－	－	－	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐		○			○	赤色粒 小石	Ⅴ	

第８表　北部　土器観察表(2)

挿図番号	ﾚｲｱｳﾄ番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整		色調		胎土					分類	備考
										外面	内面	外面	内面	長石	石英	角閃	雲母	砂粒	その他		
61	93	2T	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	－	－	－	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	黒褐		○			○	チタン鉄鉱小石	Ⅴ	
	94	2T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	－	－	－	貝殻条痕文	ナデ	にぶい明黄褐	にぶい黄橙		○			○	磁鉄鉱小石	Ⅴ	
	95	2T	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	底部	－	7.8	－	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙			○		○	赤色粒・小石チタン鉄鉱	Ⅴ	
	96	J-8 K-6	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	底部	－	12.0	－	条痕	ナデ	明褐	赤褐		○			○	赤色粒・小石	Ⅴ	
	97	2T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	底部	－	11.0	－	キザミ目条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			○	赤色粒・小石チタン鉄鉱	Ⅴ	
	98	2T	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	底部～胴部	－	12.6	－	貝殻条痕文条痕	ナデ	橙	橙					○	赤色粒・小石チタン鉄鉱	Ⅴ	
62	99	J-9	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	－	－	－	押型文口唇部連点	押型文	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			○	小石	Ⅸ	
	100	21T	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	－	－	－	押型文	ナデ	にぶい橙	にぶい褐		○		○	○	小石	Ⅸ	
	101	I-7	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	底部～胴部	－	13.2	－	押型文	ナデ	浅黄	灰黄		○			○	小石	Ⅹ	
	102	2T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	底部	－	5.4	－	沈線	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙					○	磁鉄鉱赤色粒・小石	Ⅹ	
	103	I-7	Ⅶ	縄文土器（早期）	壺	口縁部～胴部	20.2	－	－	沈線条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			○	小石	Ⅻ	
	104	I-7	Ⅶ	縄文土器（早期）	壺	胴部	－	－	－	沈線条痕	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	○	○			○	小石	Ⅻ	
	105	2T	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	底部	－	9.8	－	ナデ	ナデ	にぶい褐	褐				○	○	赤色粒小石	Ⅻ	
	106	－	－	縄文土器（前期）	深鉢	底部～胴部	－	7.8	－	条痕	ナデ	橙	橙		○			○	チタン鉄鉱小石	ⅩⅢ	
	107	K-10	Ⅳ	縄文土器（前期）	深鉢	胴部	－	－	－	沈線	ナデ	黄橙	にぶい黄橙					○	小石	ⅩⅣ	
	108	K-10	Ⅳ	縄文土器（前期）	深鉢	胴部	－	－	－	沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙				○	○	小石	ⅩⅣ	
	109	K-10	Ⅳ	縄文土器（前期）	深鉢	胴部	－	－	－	沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙				○	○	小石	ⅩⅣ	
	110	K-10	Ⅳ	縄文土器（前期）	深鉢	胴部	－	－	－	沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙				○	○	赤色粒小石	ⅩⅣ	
	111	K-10	Ⅳ	縄文土器（前期）	深鉢	胴部	－	－	－	沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙			○	○	○	小石	ⅩⅣ	
	112	K-10	Ⅳ	縄文土器（前期）	深鉢	胴部	－	－	－	沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙				○	○	小石	ⅩⅣ	
	113	K-10	Ⅳ	縄文土器（前期）	深鉢	胴部	－	－	－	沈線	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙			○	○	○	小石	ⅩⅣ	
	114	K-10	Ⅳ	縄文土器（前期）	深鉢	胴部	－	－	－	沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙					○	小石	ⅩⅣ	
	115	J-7	Ⅶ	縄文土器（前期）	深鉢	胴部	－	－	－	沈線	ナデ	にぶい黄橙	にぶい褐		○		○	○	小石	ⅩⅣ	
	116	2T	Ⅶ	縄文土器（前期）	深鉢	底部～胴部	－	－	－	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙			○		○	赤色粒・小石チタン鉄鉱	ⅩⅣ	
63	117	F-8 G-8	ⅢbⅣ	縄文土器（後期）	深鉢	口縁部	－	－	－	沈線	ナデ口縁に突帯	橙	橙		○			○	小石	ⅩⅥ	
	118	J-9	Ⅳ	縄文土器（後期）	深鉢	口縁部	－	－	－	沈線	ナデ	橙	橙		○			○	小石	ⅩⅥ	
	119	K-10	Ⅳ	縄文土器（後期）	深鉢	口縁部	－	－	－	沈線	ナデ	褐	黒褐		○			密		ⅩⅥ	
	120	J-9	Ⅳ	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	－	－	－	沈線	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			○	小石	ⅩⅥ	
	121	K-10	Ⅳ	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	－	－	－	沈線	ナデ	褐	にぶい褐		○	○		○		ⅩⅥ	
	122	K-9 J･K-10	Ⅳ	縄文土器（後期）	深鉢	底部～胴部	－	6.6	－	ナデ	ナデ	橙	にぶい褐	○	○	○		○	赤色粒小石	ⅩⅥ	
	123	K-8	Ⅳ	縄文土器（後期）	深鉢	底部	－	10.0	－	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙		○			○	チタン鉄鉱	ⅩⅥ	
	124	K-9	Ⅳ	縄文土器（後期）	深鉢	底部	－	8.8	－	条痕	ナデ	にぶい黄橙	橙		○	○		○	チタン鉄鉱	ⅩⅥ	網代底
	125	K-7	Ⅳ	縄文土器（後期）	深鉢	底部	－	11.0	－	ナデ	ナデ	灰黄褐	灰黄褐					○	チタン鉄鉱小石	ⅩⅥ	
	126	F-7	Ⅳa	縄文土器（後期）	－	－	－	－	－	ナデ	ナデ	橙	橙		○			○		ⅩⅥ	
64	127	F-8 G-8	ⅢbⅣ	縄文土器（晩期）	深鉢	胴部	－	－	－	ナデ	ナデ	橙	にぶい褐			○		○		ⅩⅦA	
	128	F-7 G-7	Ⅳa	縄文土器（晩期）	深鉢	胴部	－	－	－	ナデ刻目突帯	ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙		○			○	赤色粒小石	ⅩⅦA	
	129	8T	－	縄文土器（晩期）	深鉢	口縁部～胴部	19.0	－	－	ナデミガキ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙		○			○		ⅩⅦA	スス付着
	130	G-4	横転	縄文土器（晩期）	深鉢	底部	－	－	－	圧痕	ナデ	にぶい褐	にぶい褐		○			○	小石	ⅩⅦC	
	131	G-8	Ⅲb	縄文土器（晩期）	深鉢	底部	－	－	－	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐		○	○		○	赤色粒小石	ⅩⅦC	
	132	F-8 G-7	Ⅲb	縄文土器（晩期）	深鉢	底部	－	－	－	圧痕	ナデ	明黄橙	にぶい黄橙		○			○	小石	ⅩⅦC	
	133	F-8	Ⅲb	縄文土器（晩期）	深鉢	底部	－	－	－	圧痕	ナデ	橙	にぶい黄橙		○			○	赤色粒小石	ⅩⅦC	
	134	G-7	ⅢbⅣa	縄文土器（晩期）	深鉢	底部	－	－	－	圧痕	ナデ	橙	にぶい黄橙					○	赤色粒小石	ⅩⅦC	
	135	H-7	Ⅲb	縄文土器（晩期）	深鉢	底部	－	－	－	圧痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙			○		○	小石	ⅩⅦC	
	136	J-7 K-10	ⅧⅣ	縄文土器（晩期）	深鉢	底部～胴部	－	－	－	圧痕	ナデ	黒褐	にぶい黄橙					○	赤色粒・小石チタン鉄鉱	ⅩⅦC	
	137	G-8	Ⅳ	縄文土器（晩期）	深鉢	底部	－	－	－	圧痕	ナデ	橙	にぶい黄橙			○		○	赤色粒小石	ⅩⅦC	
	138	F-7	Ⅳa	縄文土器（晩期）	深鉢	底部	－	－	－	圧痕	ナデ	黒褐	黒褐		○			○	赤色粒小石	ⅩⅦC	
	139	F-8	Ⅲb	縄文土器（晩期）	深鉢	底部	－	－	－	圧痕	ナデ	黒褐	黒褐		○			○	小石	ⅩⅦC	
65	140	J-6	Ⅲ	古代土器	甕	口縁部～胴部	28.6	－	－	ハケメ	ヘラケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			○	チタン鉄鉱小石		
	141	J-6	Ⅲ	古代土器	甕	胴部	－	－	－	ハケメ	ケズリ	褐	にぶい褐		○			○	小石		
	142	F-8	－	古代土器	甕	胴部	－	－	－	ハケメ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	○	○						
	143	J-6	Ⅲa	古代土器	甕	頸部	－	－	－	ハケメ	ケズリ	にぶい褐	にぶい褐		○			○	赤色粒小石		
	144	I-5	Ⅲ	古代土器	甕	胴部	－	－	－	工具ナデ	ナデ	黒褐	にぶい褐				○	○	小石		溝8

第５節　出土石器

狩俣遺跡の北部では，縄文時代早期と晩期の遺物包含層から石器が出土している。

早期では石鏃・石匙・スクレイパー・微細剥離痕剥片・磨製石斧・打製石斧・礫器・磨石・敲石・凹み石・石皿が，晩期では石鏃・磨石が確認できる。なお，黒曜石・安山岩・玉髄・チャート・砂岩・泥岩等が主要石材として使用されている。

１　縄文時代早期（第66～69図145～176）

早期の石器は，石鏃８点，スクレイパー５点，微細剥離痕剥片４点，磨製石斧２点，打製石斧２点，礫器１点，磨石５点，凹石１点，石皿４点の計32点である。

⑴　石鏃（第66図145～152）

８点の石鏃が確認できる。

145～147はいわゆる正三角形鏃で，145，146の基部の抉りは浅く，145は右脚部，146は先端部を欠損するが，先端部を含む突出する３ヶ所は鋭く作り出されている。147の裏面には素材剥片の剥離面が多く残され，表面と基部では平坦剥離が多用され，整形は微細な剥離を重ねることで仕上げている。147は基部の抉りを深くし，左側縁部にも意図的な抉りの痕跡が見られる。145，146は安山岩，147はチャートを用いている。148～151はいわゆる長身鏃で，内151は二等辺三角形鏃に該当する。148の基部は直線的で，全体が鋭利な仕上がりを見せる。149，150は脚部の長さが異なる特徴を持つ相似形で，成形状況から判断し，意図的に作り出した形状と見られる。151はやや厚手の剥片を素材とし，表面では平坦剥離を多用している。裏面では周辺のみに成形剥離をとどめ，素材剥離面を多く残している。

148，149は安山岩，150の黒耀石は桑ノ木津留産，151は玉髄を使用している。

152は帰属が明確でないが，未製品，両側縁の抉りからは抉入状石器等が想定される。

⑵　スクレイパー（第66図153～157）

153はチャート製で，左側縁下位を除く縁辺に刃部加工と見られる剥離が認められる。頭部付近の加工が著しく，裏面では打瘤を除去し，表面では平坦剥離が施される。おそらく，掻器として使用したと見られる。154からは，打点移動を繰り返す剥片剥離技術の存在が読み取れる。155は礫他面の石核から取り出された横長剥片の先端部に，両面方向からの刃部加工が認められる。156は剥片の右側縁部に細かい刃部加工が認められるが，本体は破損している。157も不定型な横長剥片の周辺に刃部加工が認められる。なお，以上５点はいずれも削器的機能を備えている。

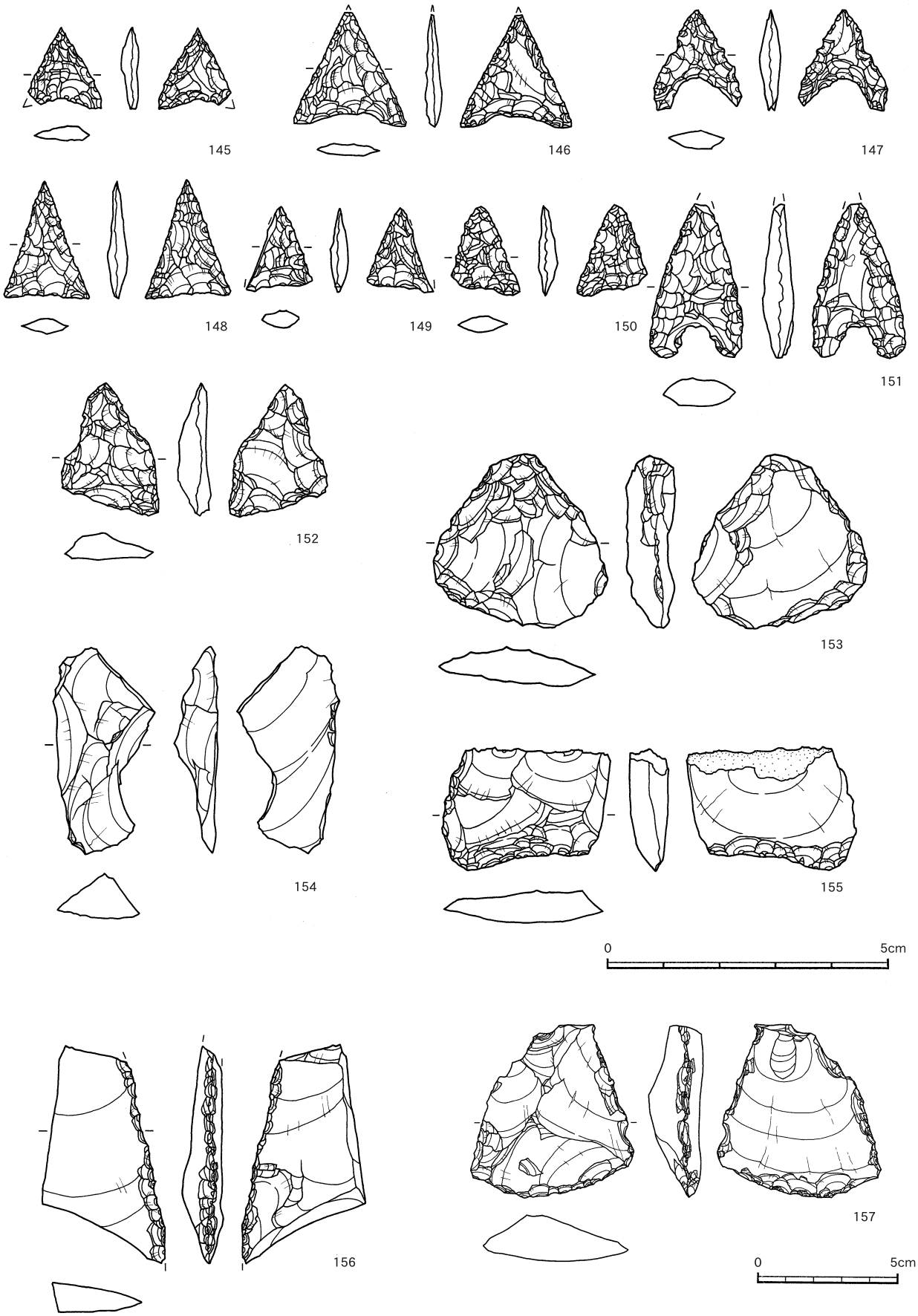
153と154はチャート，155と156は安山岩，157は玉髄を使用している。

⑶　微細剥離痕剥片（第67図158～161）

158～161は微細な剥離痕が見られる剥片である。

158右側縁部の両面と下端部に，159は左側縁部に，160は不定型な横長剥片の下端部に微細剥離が見られ，161は打面周辺に微細剥離が，左側縁部と下縁部には使用痕と見られる刃潰れが残る。なお，これに用いた剥片はいずれも打面転移を繰り返す剥離技術から剥ぎ出された不定形剥片を使用している。したがって，用途（機能）を目的として剥ぎ取った目的剥片では無く，使用用途に緊急に選択したものと解される。

石材は，158と161が玉髄，159はチャート，160は黒耀石である。



第66図　北部　縄文時代早期の石器(1)

⑷　**磨製石斧**（第67図162，163）

162は横断形の分厚いレンズ状を呈する全磨製石斧で，敲打成形後，全身の研磨仕上げを行っている。刃部の残存状況は良好といえる。163も丁寧な仕上げが見られ，刃部の作り出しすなわち，切っ先は鋭い。

⑸　**打製石斧**（第68図164，165）

いわゆる扁平打製石斧で，164が短冊形，165が分銅形に区分できる。

164は表裏逆に掲示しており，主要剥離面からは横長剥片を選択したことが読み取れる。周辺部は鋭角な小剥離で成形し，背面には各方向からの平坦剥離を加え，扁平化に努めたと読み取れる。

165も扁平な剥片を選択し，刃部はリダクションを繰り返したと見られる。いずれも安山岩を選択している。

⑹　**礫器**（第68図166）

166はローリング作用による摩耗面で形成する扁平礫を素材とし，側縁の一角に裏面方向からの刃部形成が認められる。石材は安山岩を使用している。

⑺　**磨石**（第68，69図167～171）

磨石と区分したが，敲打痕もあり，磨面との両機能を備えたものもある。

167は凝灰岩を使用していることから，摩耗が激しい。168は砂岩を使用し，側縁部や頂部，端部に敲打痕が明瞭に残る。169は凝灰岩，170は安山岩を使用し，170の磨石としての使用頻度は極めて高いと言える。表裏両面は平坦化を成すほどに使用され，右側縁部，頂部，端部は敲打具としての機能も備えている。171は砂岩を用い，両面に摩擦面が残る。

⑻　**凹石**（第69図172）

172は安山岩製の凹石である。正面に凹石としての使用痕が見られ，裏面に磨り面が見られる。

⑼　**石皿**（第69図173～176）

173～176は石皿である。いずれも安山岩を使用しており，破損した石皿の一部が採取されている。174，175も石皿の一部であるが，特に横断面の観察では，弯曲した使用面が観察できる。

2　縄文時代晩期（第70図177～182）

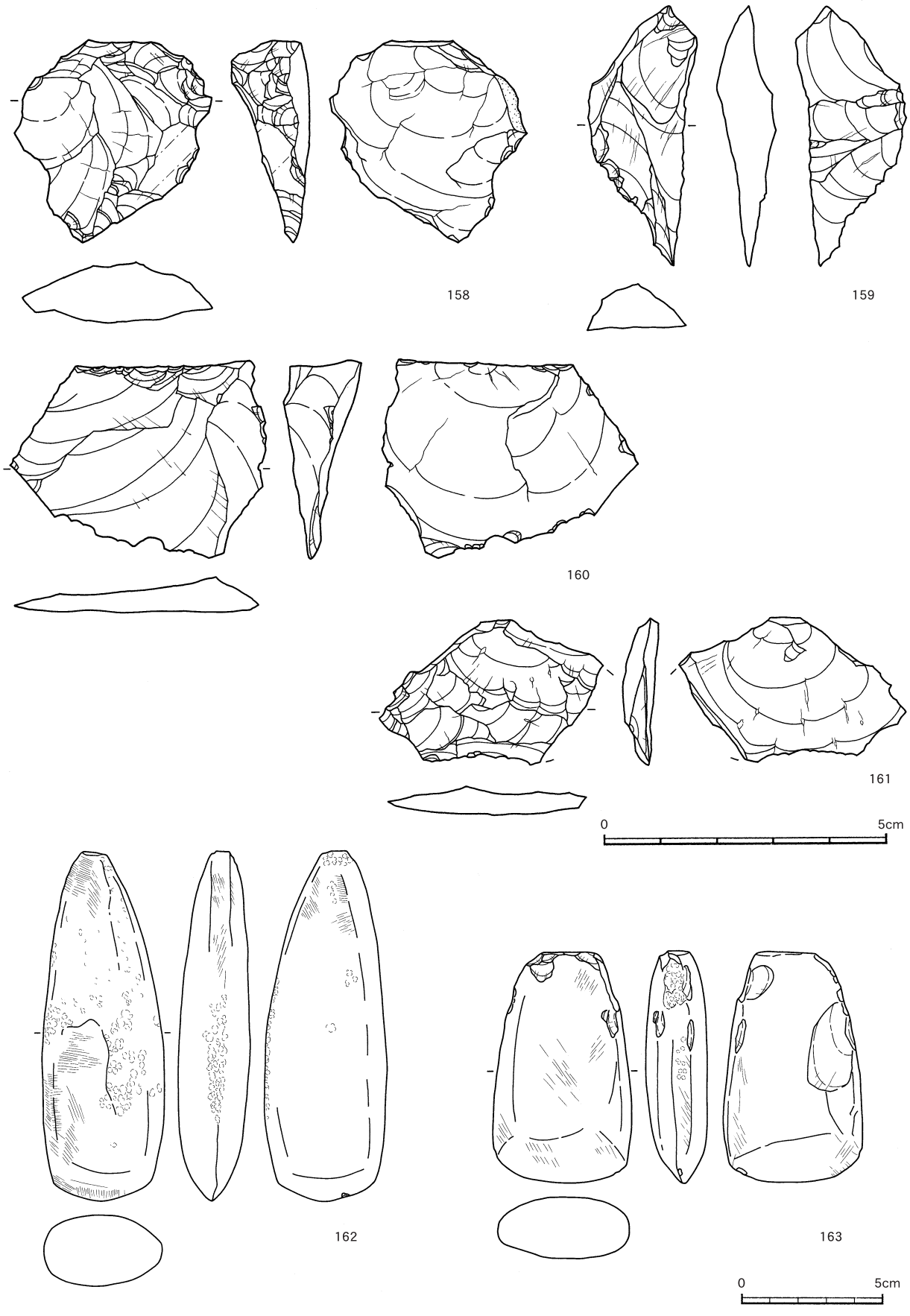
晩期の石器は，石鏃５点，磨石１点の計６点である。

⑴　**石鏃**（第70図177～181）

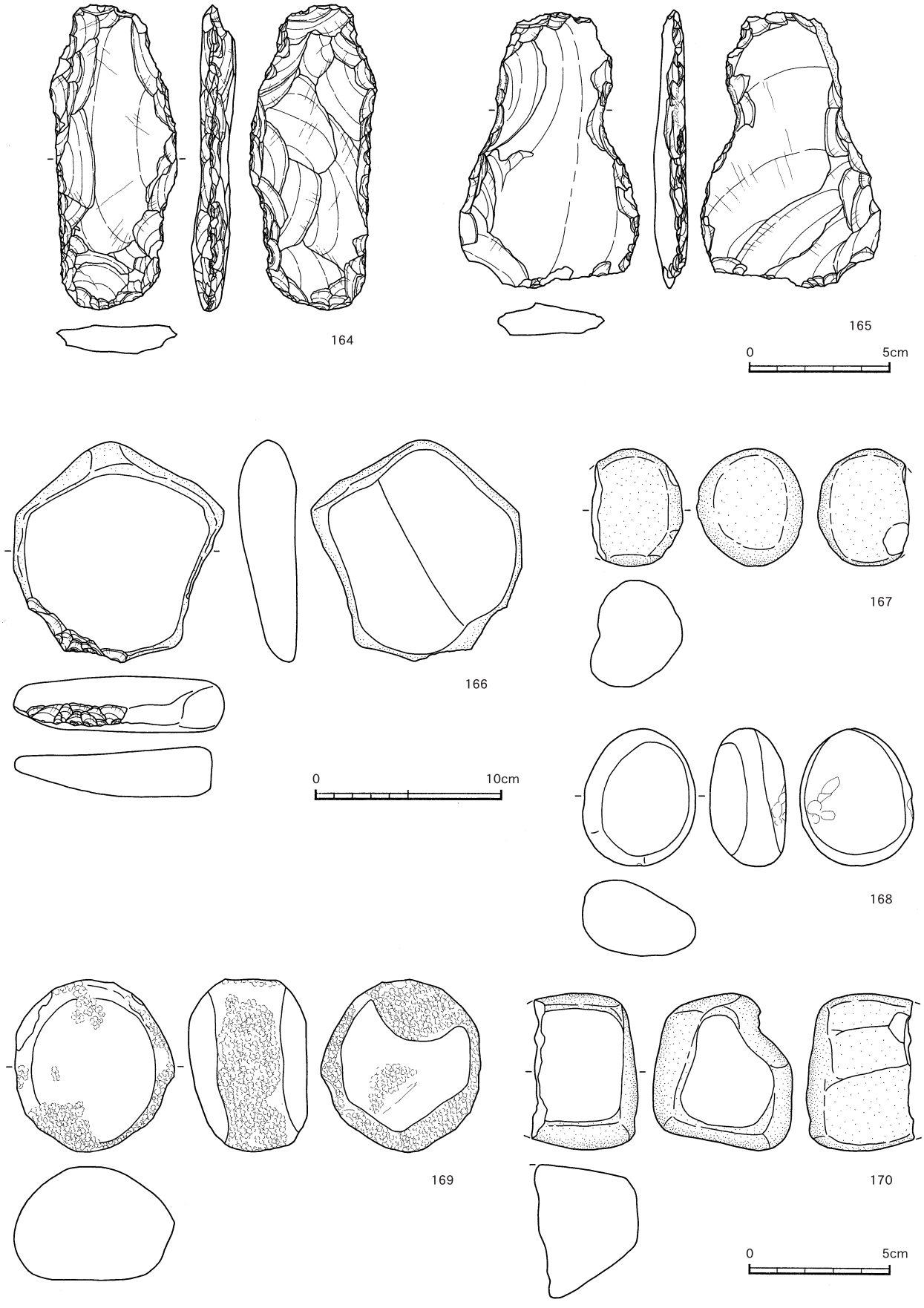
177は側縁部上位で鋭角に屈曲するいわゆる五角形鏃で，先端部は欠損する。なお，成形状況から未製品の可能性もある。178は両側縁部がドーム状に弯曲する小型鏃で，薄く仕上げている。179は長身鏃で，欠損する先端部を推定復元すると1.5：1.0程の長幅比が求められる。180は178と同じくドーム状の形状で，基部が深く抉られたものである。181は脚部の作り出しに特徴が見られる。177はチャート，178，179は安山岩，180は黒耀石で，その特徴から腰岳産の可能性を指摘できる。

⑵　**磨石**（第70図182）

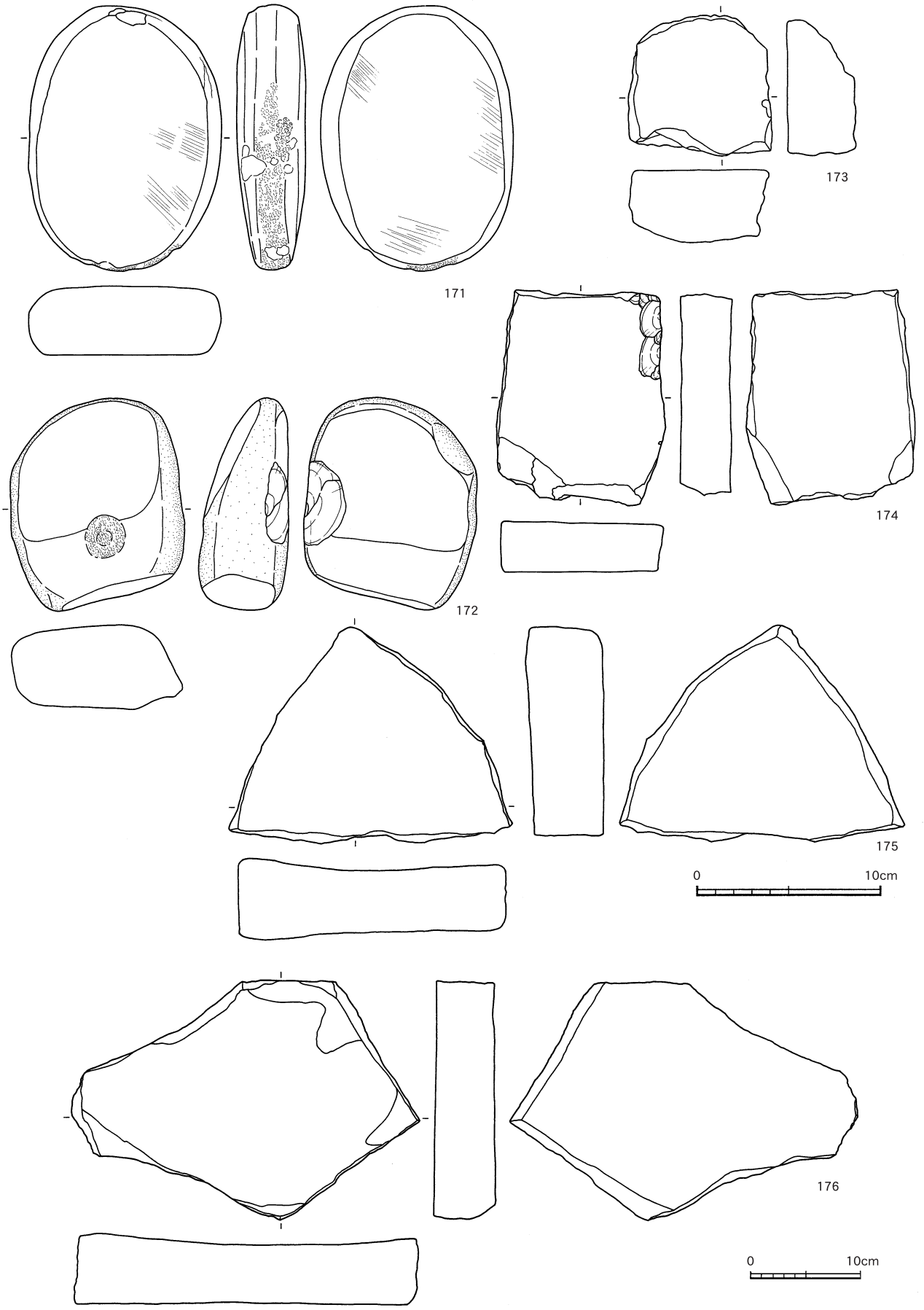
182は円形の磨石で，正面中央部，右側縁部及び裏面上部に敲打痕を持つことから，両機能を備えていると判断できる。摩耗面の最も著しいのは裏面中央部付近で，安山岩を使用している。



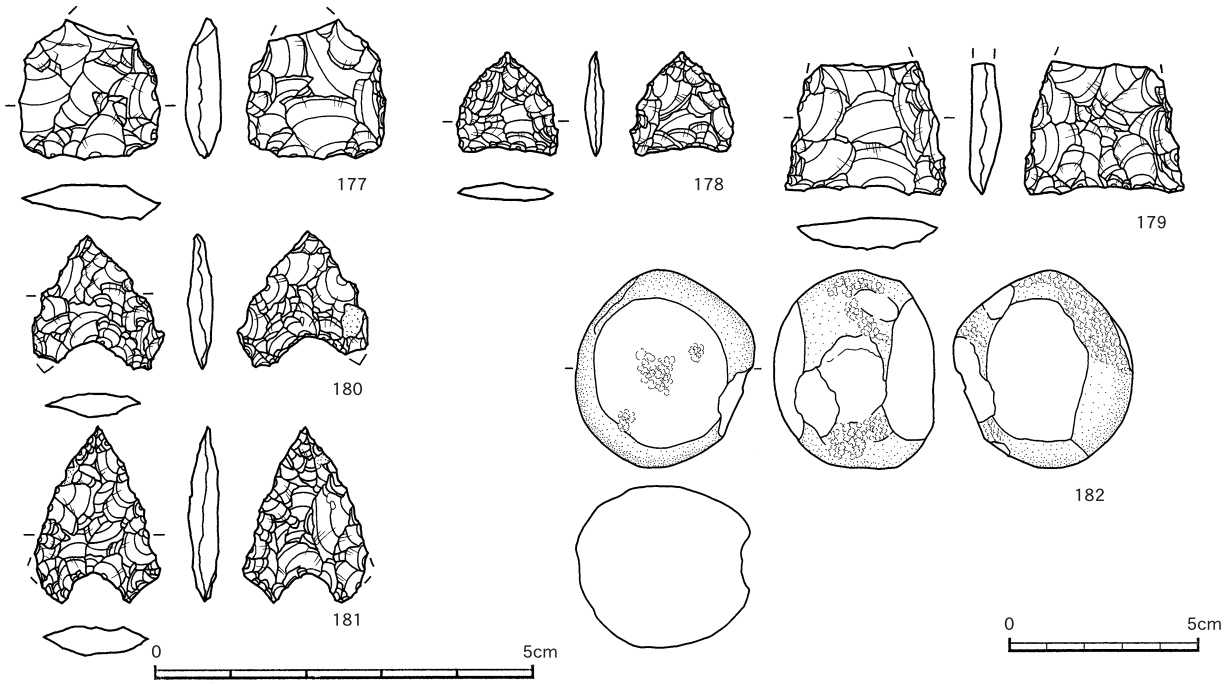
第67図　北部　縄文時代早期の石器(2)



第68図　北部　縄文時代早期の石器(3)



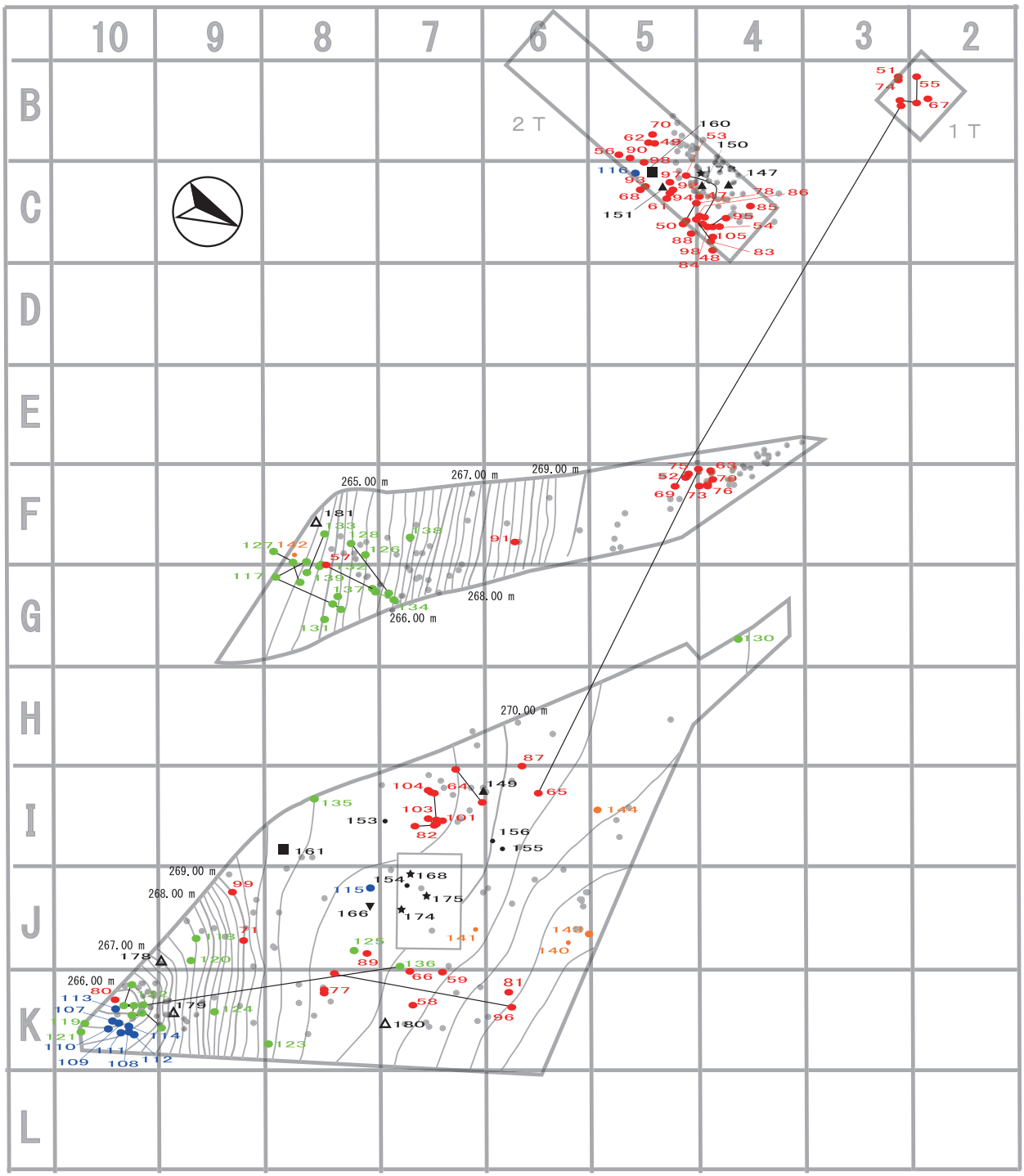
第69図　北部　縄文時代早期の石器(4)



第70図　北部　縄文時代晩期の石器

第９表　北部　石器観察表

挿図番号	レイアウト番号	器　種	出土区・層		石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
66	145	石鏃	試掘	表採	安山岩	1.5	1.3	0.3	0.33	一括
	146	石鏃	試掘	表採	安山岩	2	2	0.2	0.83	一括
	147	石鏃	2T	Ⅷ	黒曜石	1.8	1.6	0.3	0.62	
	148	石鏃	21T	Ⅸ	安山岩	2.1	1.5	0.3	0.68	一括
	149	石鏃	I-6	Ⅶ	安山岩	1.5	1.2	0.3	0.38	
	150	石鏃	2T	Ⅶ	黒曜石	1.6	1.2	0.3	0.41	
	151	石鏃	2T	Ⅶ	玉髄	2.8	1.6	0.4	2.03	
	152	石鏃	試掘	表採	安山岩	2.3	1.7	0.4	1.70	一括
	153	スクレイパー	I-7	Ⅶ	チャート	3	3.1	0.8	7.29	
	154	スクレイパー	8T	Ⅶ	チャート	3.7	1.8	0.8	3.51	
	155	スクレイパー	I-6	Ⅶ	安山岩	2.2	3	0.6	4.86	
	156	スクレイパー	I-6	Ⅶ	安山岩	3.8	2.2	0.6	4.99	
	157	スクレイパー	試掘	－	玉髄	6.2	5.9	1.5	56.51	
67	158	微細剥離痕剥片	－	表採	チャート	3.6	3.5	1.1	13.69	
	159	微細剥離痕剥片	－	Ⅷ	チャート	4.6	1.9	0.9	4.97	一括
	160	微細剥離痕剥片	I-8	Ⅶ	チャート	3.5	4.5	0.6	14.78	
	161	微細剥離痕剥片	2T	Ⅷ	黒曜石	2.6	4	0.5	4.94	
	162	磨製石斧	試掘	－	砂岩	12.4	4.3	2.5	203.21	
	163	磨製石斧	試掘	－	砂岩	8.2	5	2.2	141.21	
68	164	打製石斧	試掘	－	安山岩	10.9	4.5	1	81.20	
	165	刃部磨製石斧	試掘	－	安山岩	9.8	6.4	1.1	83.03	
	166	礫器	J-8	Ⅶ	安山岩	11.8	11.2	2.7	471.49	
	167	磨石	－	表採	凝灰岩	4.2	3.3	3.8	53.21	
	168	磨石	8T	Ⅶ	砂岩	4.9	4	2.7	74.47	
	169	磨石	－	表採	凝灰岩	6.2	5.7	4	215.83	
	170	磨石	－	－	安山岩	5.6	3.8	4.8	157.54	
69	171	磨石	試掘	－	砂岩	14.4	10.4	3.8	893.32	
	172	くぼみ石	2T	Ⅷ	安山岩	11.5	9.4	4.5	774.84	
	173	石皿	I-6, 7	Ⅶ	安山岩	7.7	7.8	3.7	350.00	一括
	174	石皿	8T	Ⅶ	安山岩	11.6	9.2	2.8	629.17	
	175	石皿	8T	Ⅶ	安山岩	11.3	14.4	4.5	1070.00	
	176	石皿	－	－	安山岩	30.3	21.4	7	6000.00	
70	177	石鏃	－	表採	チャート	1.9	1.8	0.4	1.93	
	178	石鏃	J-9	Ⅲb	安山岩	1.3	1.3	0.3	0.45	
	179	石鏃	K-9	Ⅳ	安山岩	1.7	2.1	0.4	1.68	
	180	石鏃	K-7	Ⅳ	黒曜石	1.8	1.7	0.3	0.71	
	181	石鏃	F-8	Ⅲb	黒曜石	2.4	1.7	0.4	1.20	
	182	磨石	－	Ⅲa	安山岩	5.2	4.75	4.3	148.48	



- 縄文土器（早期）
- 縄文土器（前期）
- 縄文土器（後・晩期）
- 古代土器

- スクレイパー（縄文早期）
- 微細剥離痕剥片（縄文早期）
- 礫器（縄文早期）
- 磨石・石皿（縄文早期）
- 石鏃（縄文晩期）

第71図　北部　遺物出土状況図

第Ⅴ章　中央部の調査

第１節　調査の概要（第72，73図）

中央部の本調査は，K，L－16～22区を平成18年２～３月，K～L－23～27区を平成18年５～７月，G～L－28～52区を平成18年７月～19年３月に調査を行った。

本遺跡の主体となる部分が中央部調査区であり，265m前後の台地で北部調査区より若干低く，西側に谷部調査区を見下ろす位置となる。東側は平坦面で，台地の東端までは140mほど離れる。

平成13年度の確認調査により，台地東端の縁辺部には縄文時代早期の竪穴住居跡，土坑などの遺構，遺物が出土し，早期の集落が存在する可能性が指摘されている地域である。南側へ向かって行くと緩やかに標高が下がり，尾根状に伸びる南部調査区へと続く。調査区の面積は12,660㎡で，南北約380m，東西の最大幅が約70m，北側が鋭角に尖り，南側がややすぼまる細長い調査区である。調査前は畑地として利用されていた。

平成17年度の調査では，谷部調査区と並行して北側のK～L－16～22区部分について３ヶ所トレンチを設定し調査を行った。調査区外となった台地東端の縁辺部のトレンチから縄文時代早期の遺構・遺物が発見されていたので遺構の広がりを期待しながら調査を進めたが，関連するような成果は認められなかった。

平成18年度の調査では，中央部調査区に計17ヶ所の確認トレンチを設定し，遺構や遺物包含層の残存状況を確認しながら調査を行った。北側調査区と並行してK～L－23～27区部分の調査を行い，G～L－28～37区，G～L－38～44区，G～Ⅰ－45～52区と順次南側へ向けて調査区を広げていった。大規模な天地返しを受けているところ以外は，ほぼ全面で畝状遺構が検出されたことから，全体像の把握を主眼に置き調査を進めた。

平成19年１～３月は，縄文時代早期の調査を中心に行った。旧石器時代についての確認調査も行ったが，認められなかった。

中央部の検出遺構は，縄文時代早期の集石や土坑，縄文時代中～後期の落とし穴，古代の掘立柱建物跡柱，土坑，中世の畝状遺構などである。

出土遺物は，縄文時代早期の包含層から前平式土器や下剥峯式土器，押型文土器，石坂式土器などの土器や石鏃，石斧，磨石，石皿などの石器が多数出土した。また，縄文時代前期，後期，晩期の遺物も出土した。古代については，土師器，須恵器，焼塩土器，紡錘車などが出土した。

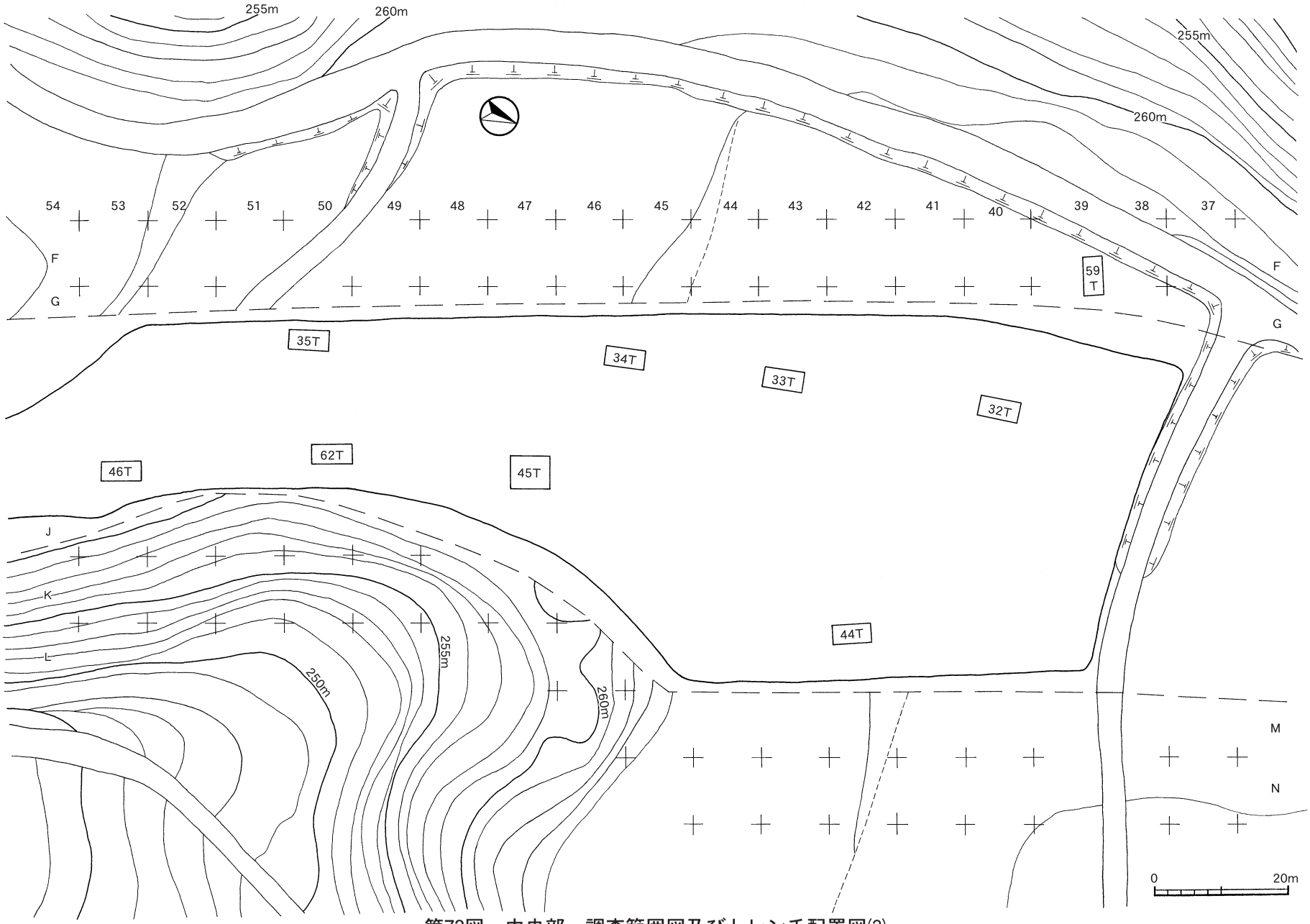
第２節　中央部の層位（第74～78図）

K～L－16～27区，G～L－38～44区では，大規模な天地返しが行われ，概ねⅤ層までが撹乱を受けていた。しかし，縄文時代早期の包含層であるⅦ，Ⅷ層は良好に残されていた。

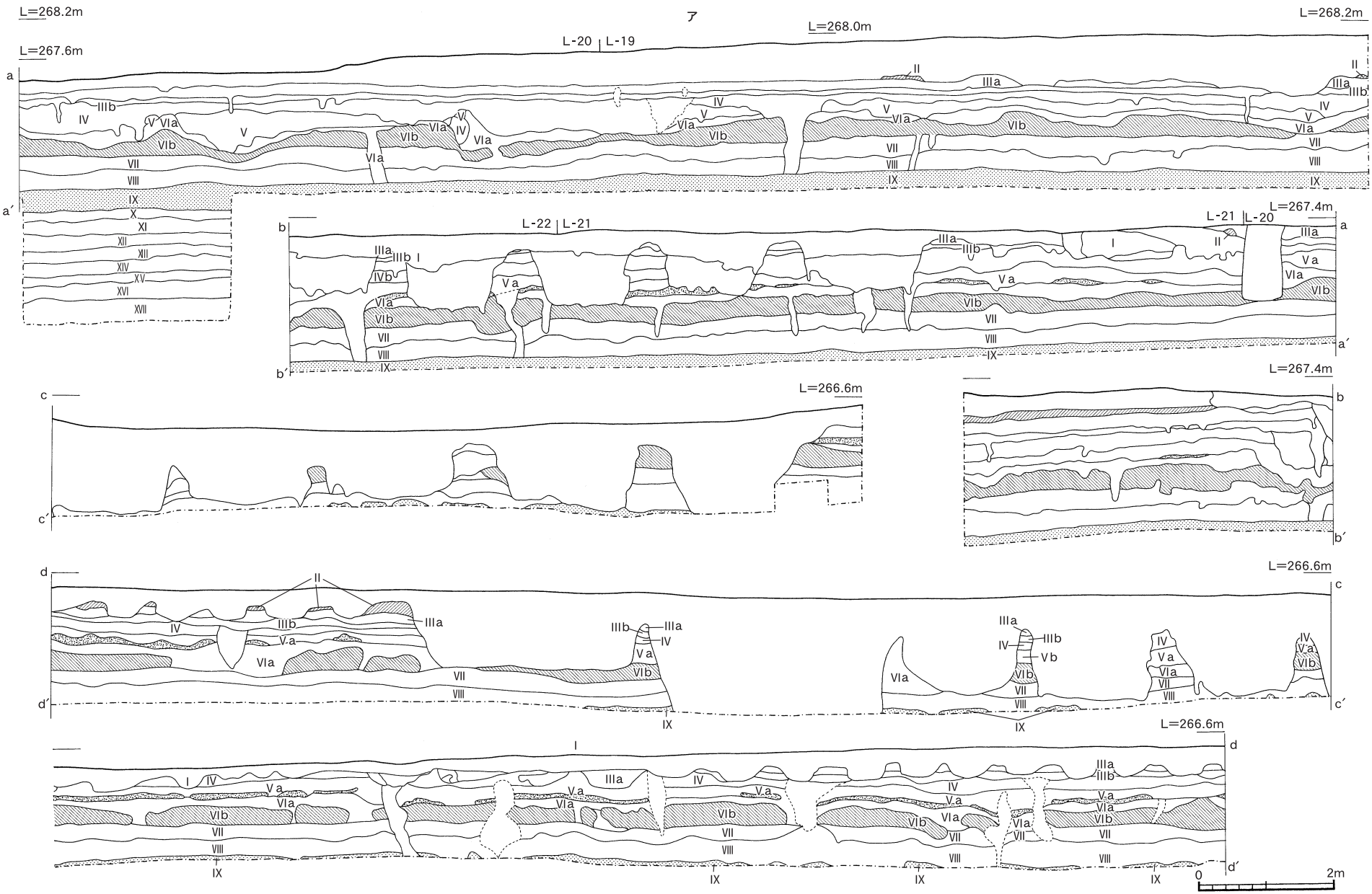
また，Ⅰ～K－33～36区で上層の削平により表土下はⅣ層であった。

Ⅱ層については，畑作の障害となるためボラ抜きが行われたと見られ，東西の谷へ下る台地の縁辺部など部分的にしか残っていなかった。その他では，包含層が良好に残されており，横転などもあまり見られなかった。

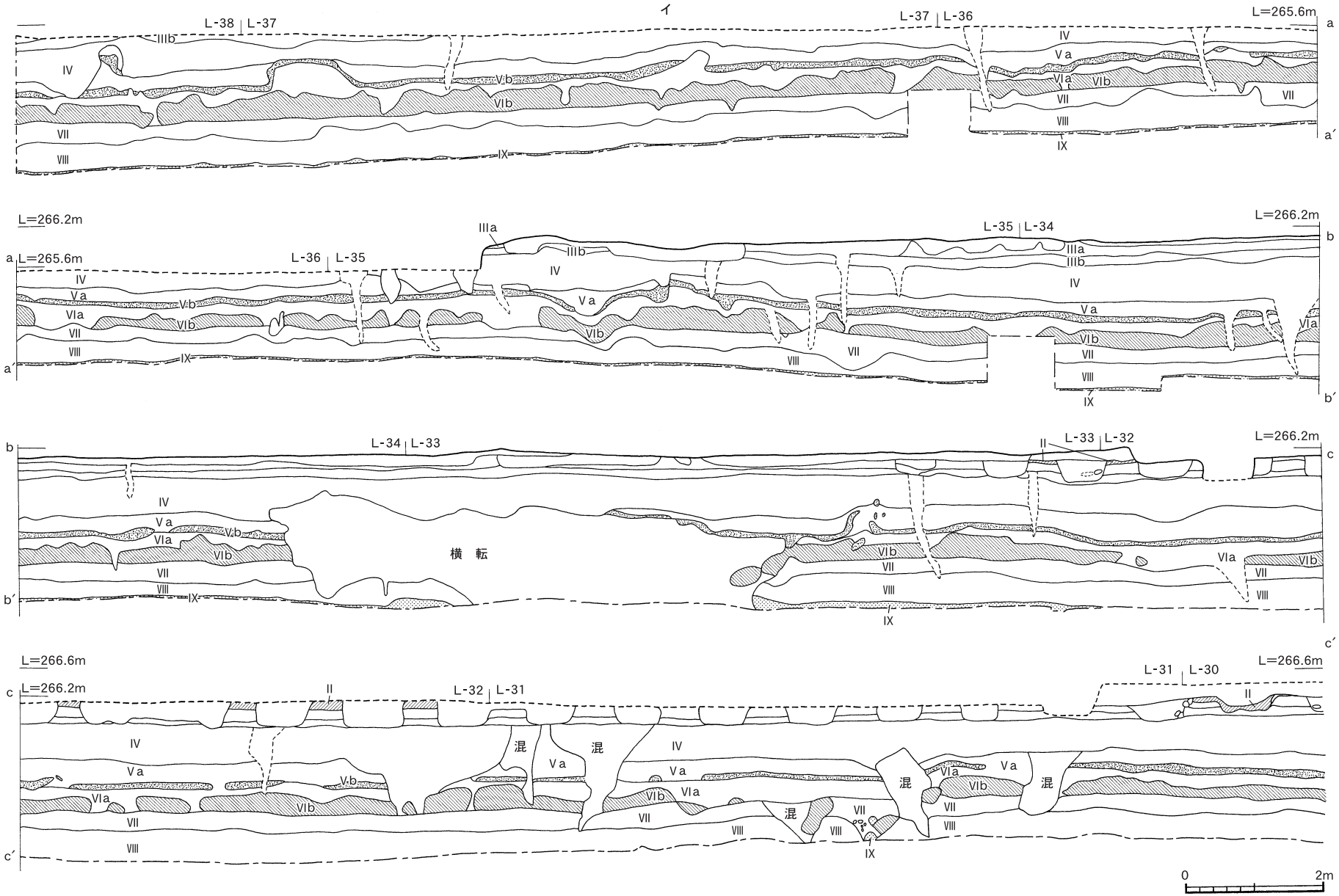
第72図　中央部　調査範囲図及びトレンチ配置図(1)



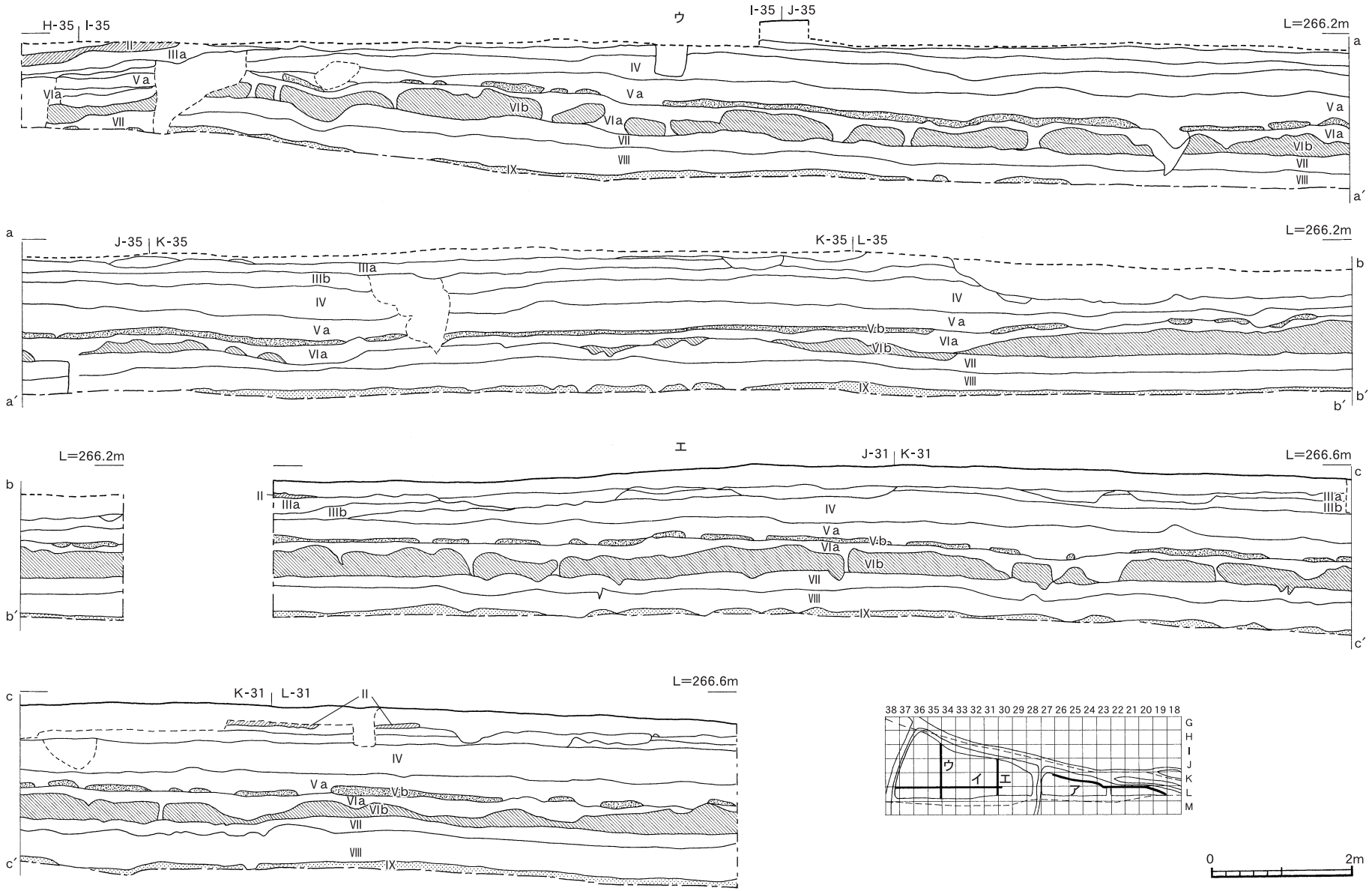
第73図　中央部　調査範囲図及びトレンチ配置図(2)



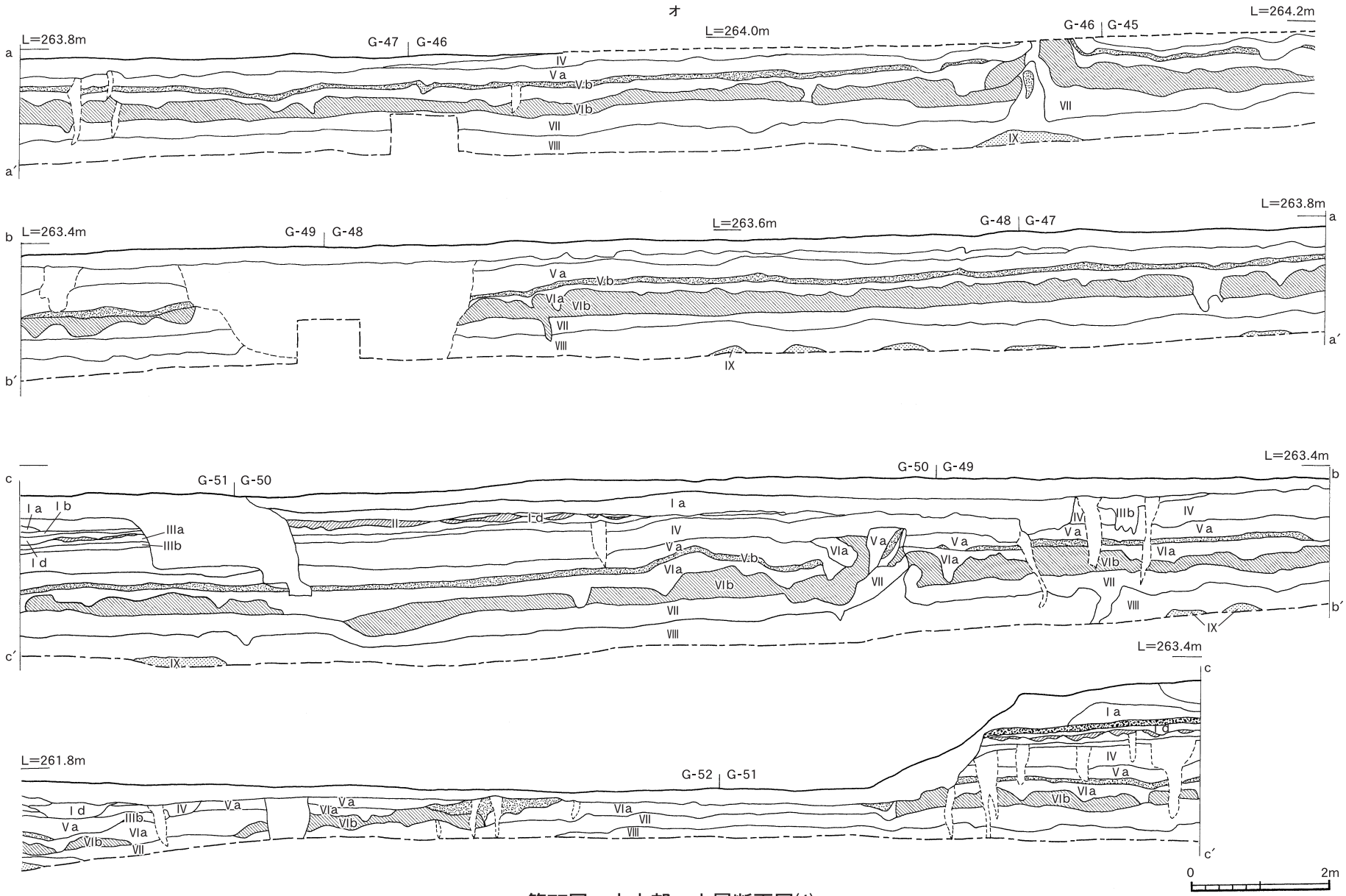
第74図　中央部　土層断面図(1)



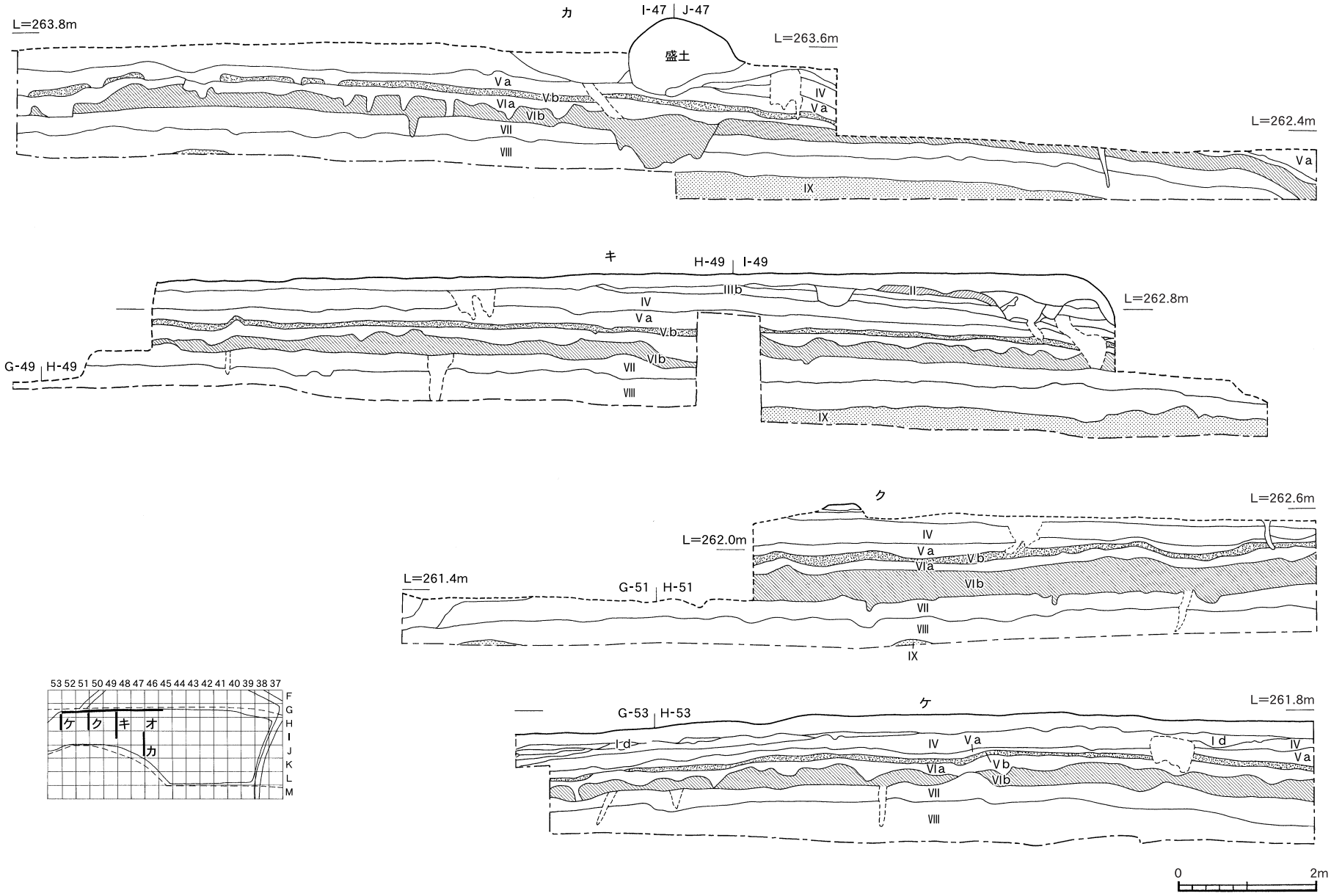
第75図　中央部　土層断面図(2)



第76図　中央部　土層断面図(3)



第77図　中央部　土層断面図(4)



第78図　中央部　土層断面図(5)

第３節　検出遺構

中央部の検出遺構は以下の通りである。

縄文時代の遺構は，早期が集石遺構19基，石器集積遺構１，土坑10基，前～晩期が落とし穴２基，焼土跡２，土坑13基が検出された。集石遺構全体の７～８割は，中央部より検出されている。

古代～中世の遺構は，掘立柱建物跡が３棟，溝状遺構13群，土坑11基が検出された。

中世～近世の遺構は，古道１条，埋土に文明ボラを含む畝状遺構７群，安永ボラを含む畝状遺構１群，土坑が38基検出された。

１　縄文時代早期（第79～95，100，101図）

縄文時代早期の遺構は集石遺構19基，石器集積遺構1，土坑10基である。

集石遺構は，北部調査区と同様に，Ⅵ層下面からⅦ層上面，Ⅷ層中のものに分けられる。また，形態も狭い範囲に集中するものと，広い範囲に散在するものに大きく分けられる。中央部全域で確認されているが，中央部から南部へ分布する傾向が見てとれる。

石器集積遺構は，Ｘ類土器の集中域に隣接して磨石・敲石２個と石皿が集中して出土した。

土坑は，Ⅸ層上面で検出され，埋土はⅧ層の黒色土が主体である。

⑴　集石遺構（第79～94，100，101図）

縄文時代早期の集石遺構は19基検出された。掘り込みを持つものは19基中３基である。

集石７号（第79図）

Ｌ－23区，Ⅷ層上面で検出された。73×63㎝の範囲内に，大きさ径10㎝前後の角礫の集中が認められた。礫数は10個で，石材は安山岩主体となる。顕著な赤化した礫はみられないが，加熱による破損に起因すると思われるものは数点認められる。検出された集石の範囲内に炭化物や掘り込みは認められなかった。

周辺に集石遺構は検出されていないが，縄文時代早期の主体部に当たる台地東側の集石１，２号までの間に数多く存在すると予想されるが，未調査のため全体像は不明である。

礫の中には石器の転用が１点含まれており，遺構内遺物として取り扱った。（第166図660）

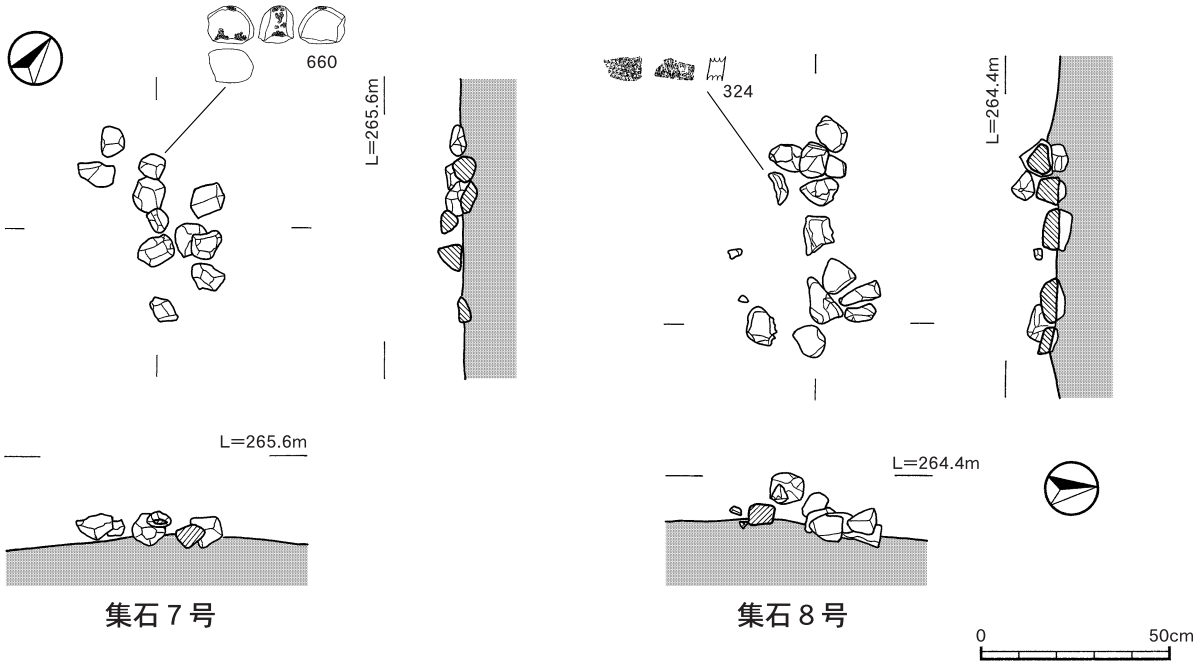
集石８号（第79図）

Ｌ－30区，Ⅷ層で検出された。礫数は14個と少ないがほぼ同規模の拳大であり，径が10㎝強，重量500ｇ以上とやや大きめの礫が半数を占める。90×60㎝の範囲内に楕円状にまとまりが見られた。石材は大部分が安山岩であり，花崗岩も含まれる。全てが火熱を受けたと思われる破砕礫であり，一部赤化が見られた。下部に炭化物や掘り込みは認められなかった。

集石内に縄文早期土器が１点出土しており，遺構内遺物として取り上げた。（第130図324）

集石９号（第80図）

Ｌ－31，32区，8号の南東側約15mのⅧ層で検出された。２×２ｍの範囲内に，礫が集中した部分と散在した部分が認められた。礫数70個中30個ほどに集中が見られ，隙間無く密集していた。下位に掘り込みは確認されなかったが，74×67㎝の範囲で炭化物の集中が認められた。礫は火熱を受け赤化した破砕礫と角の取れた角礫が混在しており，石材はほとんどが安山岩であるが砂岩や花崗岩も一部含まれる。大きさ径が20㎝近いやや大型の礫も含まれるが，10㎝未満の小礫も多く，重量が100ｇ前後から１㎏を越えるものまでいろいろな大きさの礫で構成されている。集中部と散在し



第79図　中央部　縄文時代早期　集石７，８号

た部分の礫の特徴が類似することから，同一の集石と判断した。

集石10号（第80，83図）

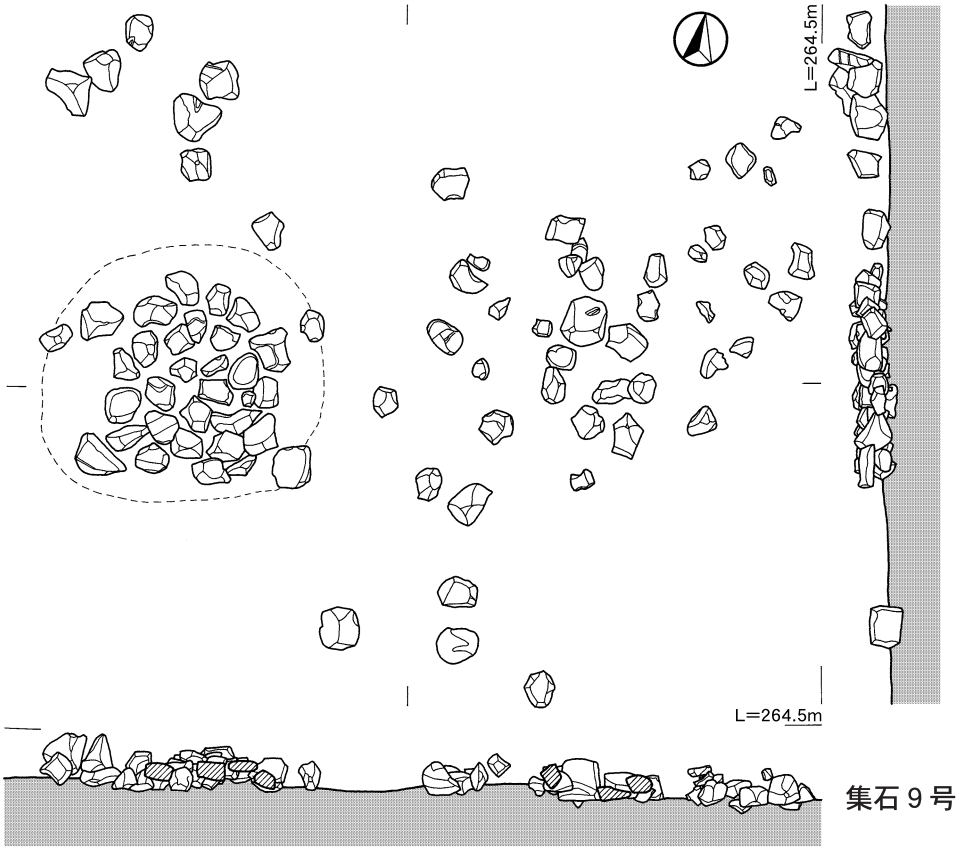
Ｊ－35区，Ⅷ層で検出され，掘り込みを伴うもので，礫は281×195㎝の範囲で確認される。掘り込み内に礫が集中し，その周辺に散在した礫で構成される。掘り込みの大きさは，70×65㎝のほぼ円形を呈し，深さは約40㎝である。Ⅷ層の黒色土に掘り込まれ，掘り込みの底面には炭化物を多く含んでいた。礫数は68個で，石材は10㎝前後の拳大をした安山岩で大部分を占めるが砂岩や頁岩も含まれる。掘り込みのある中央部分を中心として，火熱を受け赤化した破砕礫が半数以上を占め，周辺を含めた上面に５㎝前後の小振りなものが多く，底面に近づくにつれて拳大になる傾向がある。

集石11号（第81，83図）

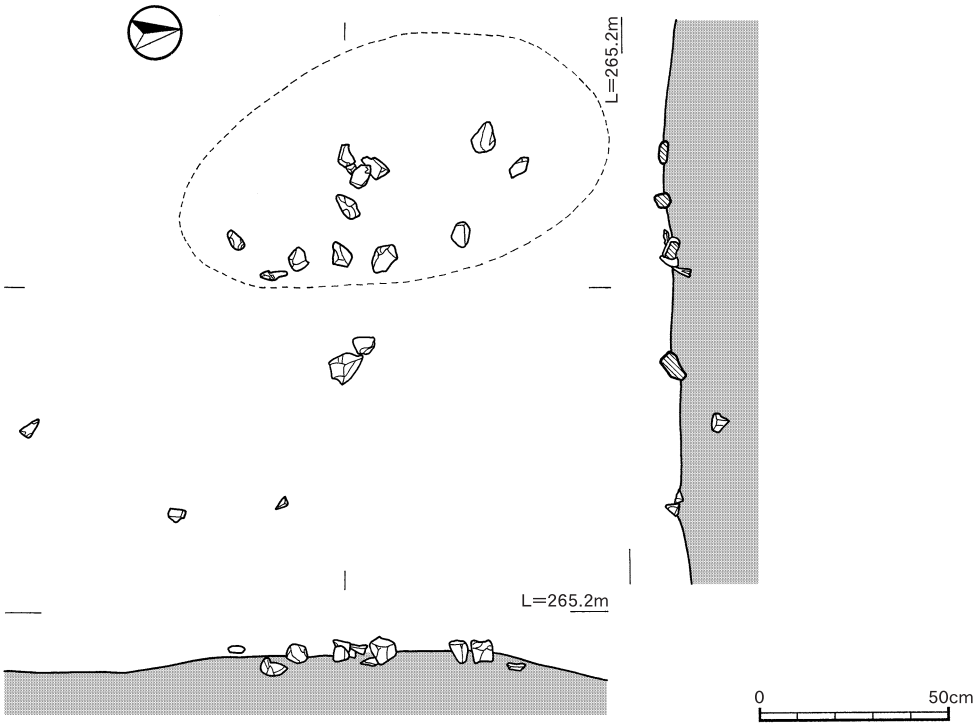
Ｊ－36区，10号の南側約８ｍのⅦ層上面で検出された。160×120㎝の範囲内に，礫がやや集中した部分と散在した部分で構成する。礫総数は19個と少なく，石材はほとんどが安山岩であり，赤化したものも多い。礫のほとんどが火熱を受けたと思われる大きさ径10㎝以下，重量200ｇ以下の破砕礫で，全体の半数以上を占める。集中部分にⅥ層の黄色パミスが多く含まれる部分が116×65㎝の範囲で認められたが，集石との関連は不明である。検出された集石の範囲内に炭化物や掘り込みは認められなかった。

集石12号（第82，83図）

Ｋ－36区，10号の南東側約12m，11号の東側11m離れたⅧ層上面で検出された。２×1.2mの範囲内に，礫が集中した部分と散在した部分が認められる。礫数は68個で，礫の大部分は火熱を受けたと思われる径10㎝前後の破砕礫で，赤化も認められる。石材はほとんどが安山岩であり，頁岩，凝灰岩，砂岩なども含まれている。検出された集石の範囲内に，炭化物や掘り込みは認められなかった。



第80図　中央部　縄文時代早期　集石９，10号



第81図　中央部　縄文時代早期　集石11号

集石10～12号は近接しており，いずれも尾根状の縁辺部に位置している。

集石13号（第84図）

Ｈ－39，40区，12号の南側約40mのⅧ層上面で検出された。142×116㎝の範囲内に，破砕礫の集中が認められた。礫数29個で，径約15㎝，800ｇ程の角礫もわずかに含まれるが，本体は径10㎝以下，重量300ｇ以下のもので占められている。石材は頁岩と花崗岩の割合が多い。検出された集石の範囲内に炭化物や掘り込みは認められなかった。

礫間出土炭化物の放射性炭素年代測定の結果は，8,230±50yrBPである。

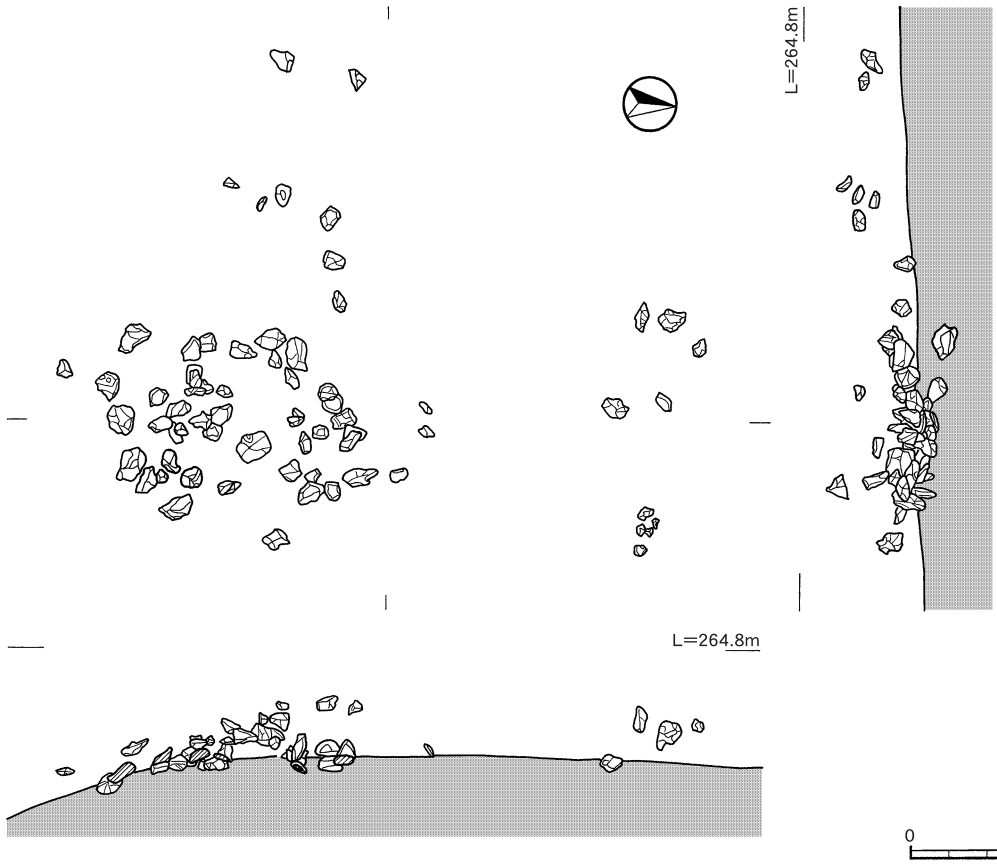
集石14号（第84図）

Ｉ－42区，13号の南東側約20mのⅦ層上面で検出された。154×116㎝の範囲内に，中央に礫が集中した部分がわずかに見られるが，全体的に散在した状態で検出された。礫数は36個で，全てが加熱を受けたと思われる径10㎝以下，重量200ｇ以下の破砕礫である。赤化したものも多く，径５㎝以下の破片も10個以上含まれる。石材は半数が安山岩であり，周辺に炭化物や掘り込みは認められなかった。

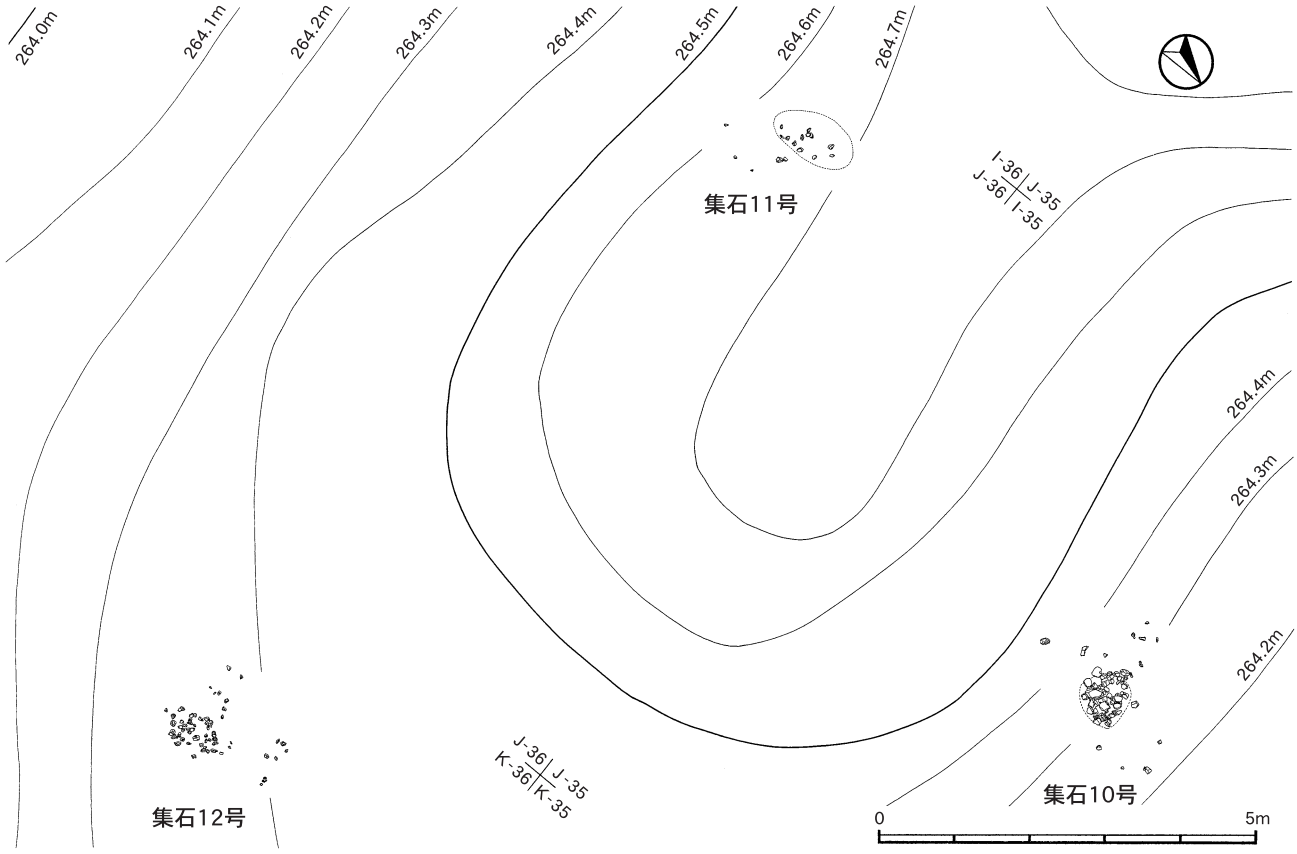
礫間で出土した炭化物の放射性炭素年代測定の結果は，7，260±40yrBPである。

集石15号（第84，87図）

Ｉ－44区，14号の南側約25mのⅧ層で検出したもので，下位に掘り込みを伴う。礫は254×204㎝の範囲内に分布し，掘り込み内の礫と周辺の散在部分からなる。掘り込みの大きさは70×65㎝，深さ39㎝のほぼ円形を呈しており，底面付近には多くの炭化物を含んでいた。礫数67個で，大きさ径約10㎝の拳大のものが大部分を占めるが，重量１㎏近い角礫も存在する。散在した礫も含め火熱を受けた破砕礫や，赤化しているもので構成する。石材は安山岩が大部分をしめるが，頁岩や花崗岩，



第82図　中央部　縄文時代早期　集石12号



第83図　中央部　縄文時代早期　集石10～12号配置図

砂岩なども含まれる。

集石16号（第85，87図）

Ｈ－45区，15号の南西側約10mのⅧ層上面で検出された。2.3×2.3mの範囲内に礫が散在している。礫数は24個でほとんどが径10㎝以下，重量300ｇ以下の小礫で構成されていた。石材は安山岩を主体に凝灰岩や砂岩なども含まれる。礫は火熱を受けた痕跡は見あたらず，炭化物や掘り込みも確認されなかった。

集石17号（第85，87図）

Ｊ－45区，15号の南東側約13m，16号の東側約15mのⅧ層で検出された。208×141㎝の範囲内に，礫が散在した状態で検出されまとまりは見られない。礫数は27個で，火熱を受けたと思われる径10㎝以下，重量150ｇ以下の破砕礫で構成する。石材は安山岩が中心で，検出された集石の周辺に炭化物や掘り込みは認められなかった。

集石18号（第86，87図）

Ｊ－46区，17号の南東側約３mに隣接して検出された。検出面はⅧ層上面で，2.6×1.6mの範囲内に礫が散在して検出され，礫の集中は見られない。礫数は46個で，径10㎝前後の破砕礫で構成されている。石材は半数が安山岩であり，頁岩，玄武岩，花崗岩，砂岩なども含まれている。検出された集石の範囲内に炭化物の飛散が見られ，掘り込みは認められなかったが，西側に火熱を受けた痕跡と思われる60×52㎝の円状を呈した茶褐色の変色域が見られ，遺構の中心部と推定される。

集石15，16号は尾根状の台地にあり，集石17，18号は緩やかな斜面上に位置している。いずれの集石も南側の斜面方向に礫が散在する傾向にある。

集石19号（第92図）

Ｌ－44区，18号の北東側約20mのⅧ層で検出された。1.5×1.5mの範囲内に礫の集中が認められたが，集中部分は見られない。礫総数44個で，径10㎝前後，重量200ｇ程度のものが大部分であるが，50ｇ～１㎏までのものまで幅が広い。石材は半数以上が安山岩であるが，花崗岩，頁岩なども含まれる。全てに火熱を受けたと思われる破砕が見られ，赤化や破砕が激しいものがある。検出された集石の範囲内に炭化物や掘り込みは認められなかった。

集石を構成する礫中に遺物の転用品が１点含まれていたので図化した。（第167図670）

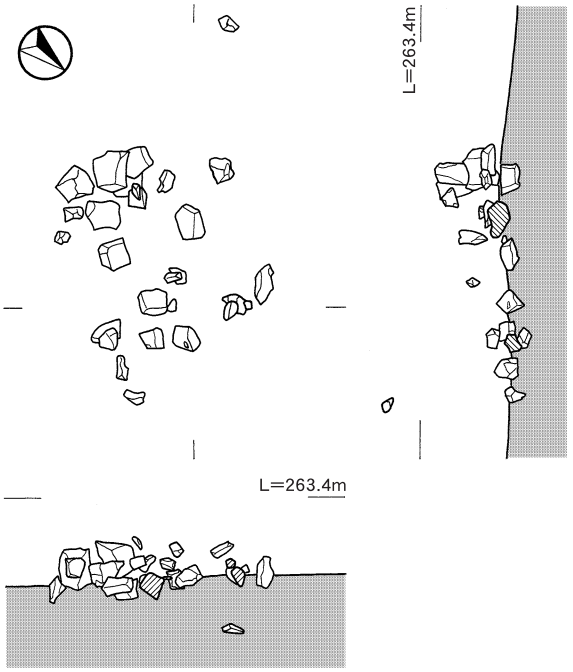
集石20号（第88，90図）

Ｇ－48区，Ⅷ層上面で検出された。258×220㎝の範囲内に，礫が集中した部分と散在した部分が認められた。礫数は94個であるが，約７割の礫が75×60㎝の範囲に集中して隙間無く積み重なっており，残りの約30個が東側に広く散在していた。集中部の下位に明確な掘り込み遺構は確認できていないが，掘り込み遺構が存在した可能性は高い。また，炭化物の集中も確認していない。石材は半数以上が10㎝前後の安山岩の火熱を受けた破砕礫であり，赤化したものも多い。炭化物の集中は無いが，少量が全体的に広がって見られた。

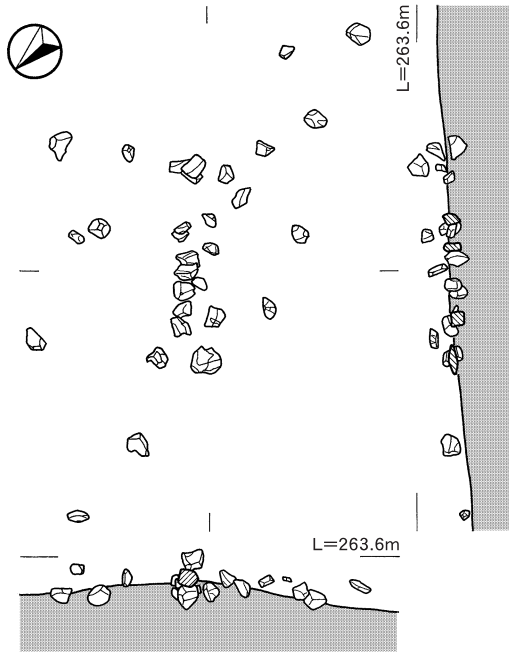
集石内に縄文早期土器が２点出土しており図化した。（第167図294，298）

集石21号（第88，90図）

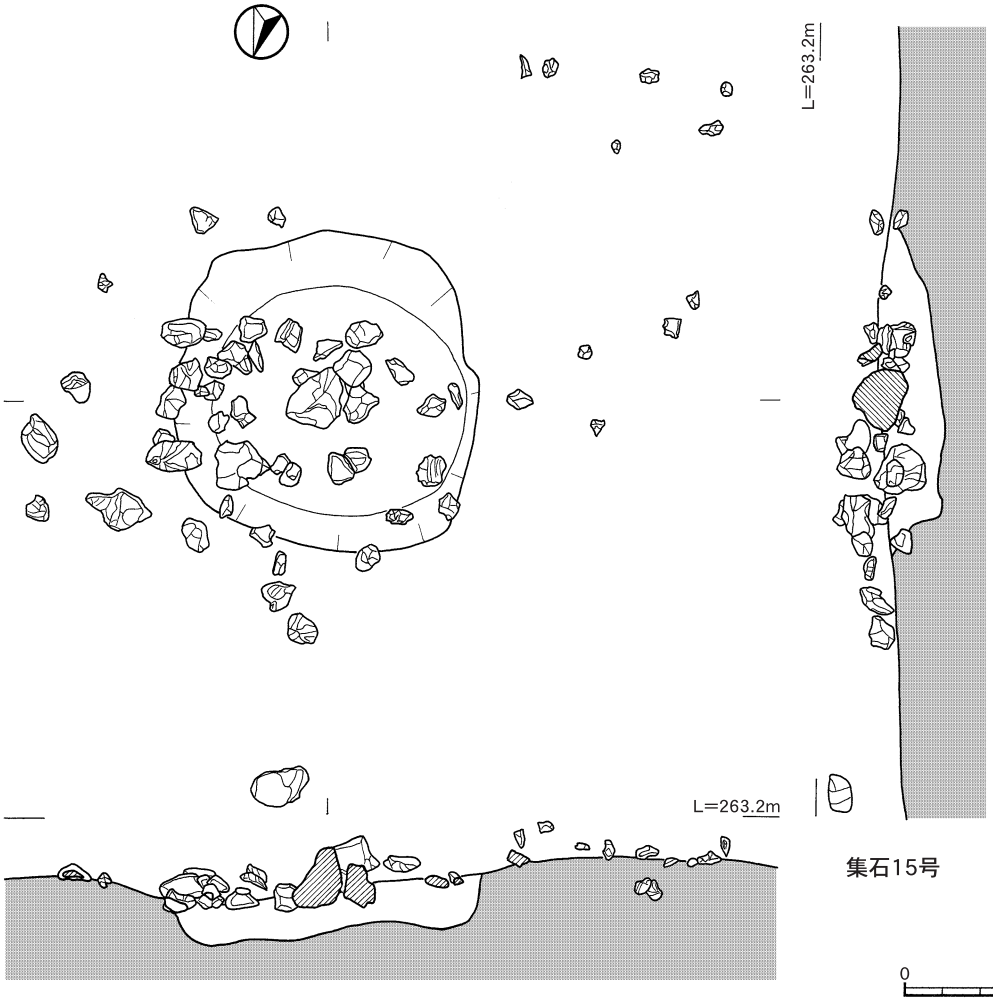
Ｇ－48区，集石20号の北東側に隣接して検出された。検出面はⅧ層上面である。243×185㎝の範囲内に，礫のまとまった部分と散在した部分が認められ，北側方向へ散在している。礫数は50個で



集石13号



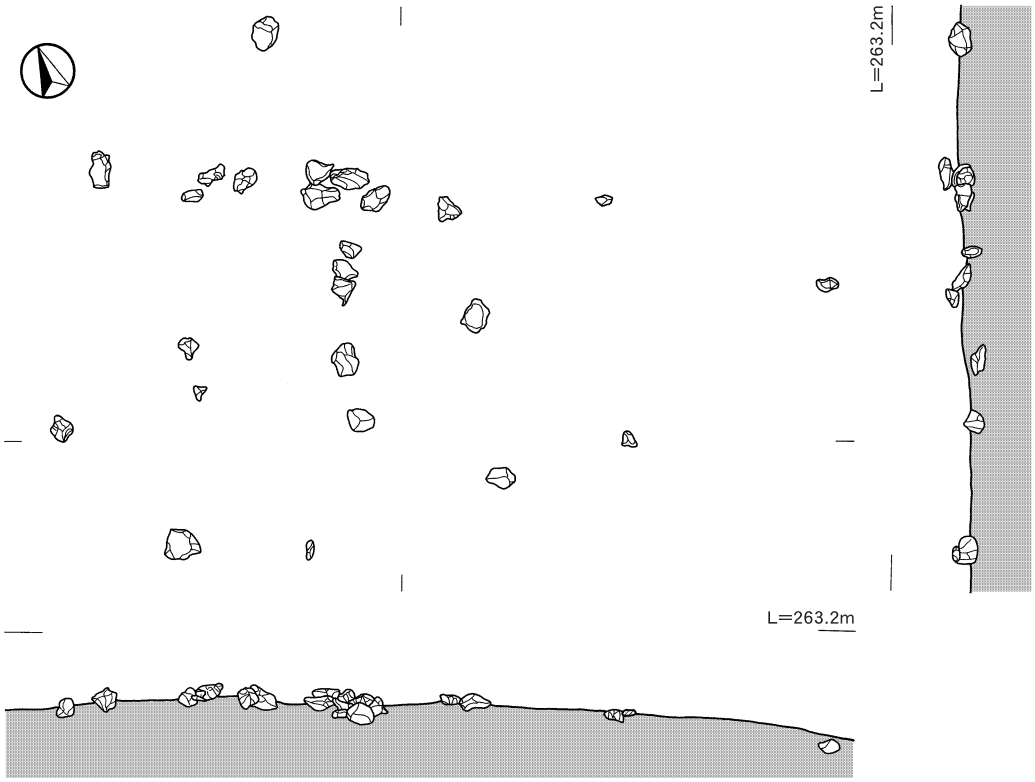
集石14号



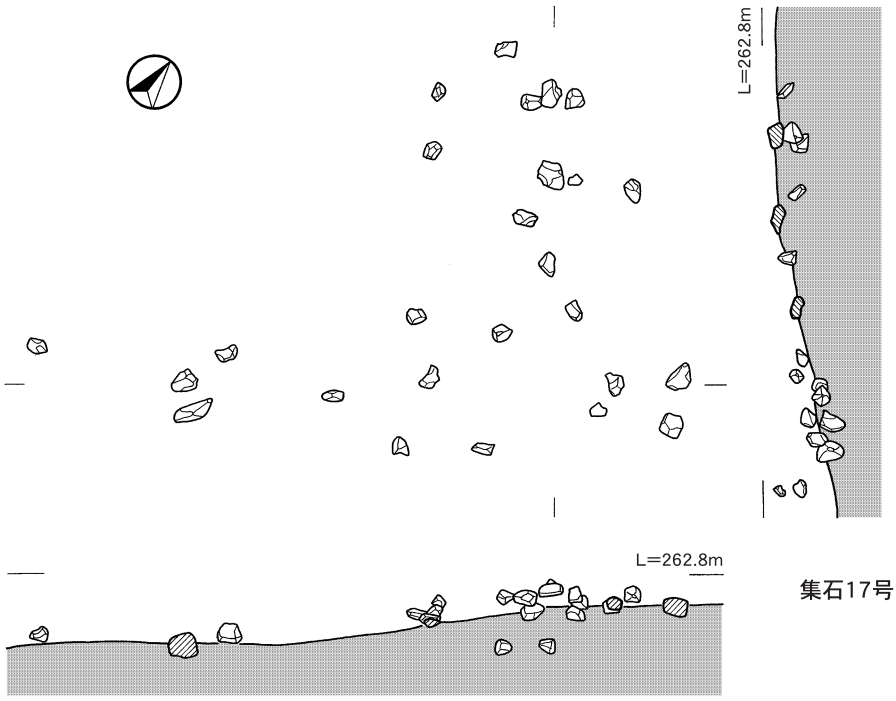
集石15号

0 50cm

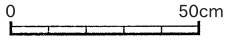
第84図　中央部　縄文時代早期　集石13，14，15号



集石16号



集石17号



第85図　中央部　縄文時代早期　集石16，17号

第86図　中央部　縄文時代早期　集石18号

あり，全てが径10㎝前後の礫であり，火熱を受けた破砕礫が大部分を占めている。石材は安山岩，花崗岩が中心であり，砂岩も含まれる。集中部分の礫はあまり多くないが，下位の65×53㎝の範囲に強く赤化した跡が確認された。集石の中心部と思われるが，北東側にある集石20号と隣接していることから，21号を本体とする同一の集石であり，廃棄の際に礫が散在したものが集石21号の可能性がある。

礫の中には石器の転用品が２点含まれており，遺構内遺物として取り扱った。（第164図644，第166図659）

集石22号（第89，90図）

Ｈ－49区，Ⅷ層上面で検出された。248×221㎝の範囲内に，礫のまとまった部分と散在した部分，その他に横転の影響で大きく動き，本体下部30㎝のところまで移動した部分が認められた。Ⅷ層上面で散在した礫は，本体部分から東側方向へ広がっている。Ⅷ層上面にとどまり集中して検出されたものは，35個であり礫総数の約半分であり，東側に散在している礫は12個である。本体の下位にⅧ層が大きく入り込み，そこで礫の集中が２ヶ所に見られた。横転の影響を受けた部分がそのまま本体下部に潜り込んでいたと思われる。地層の横転により大きく撹乱を受けている礫は29個であり，集石22号全体の礫数は111個である。散在した礫も転がるように出土しているので，横転の影響と考えられる。石材はほとんどが安山岩であり，拳大の破砕礫が多い。

集石23号（第89，90図）

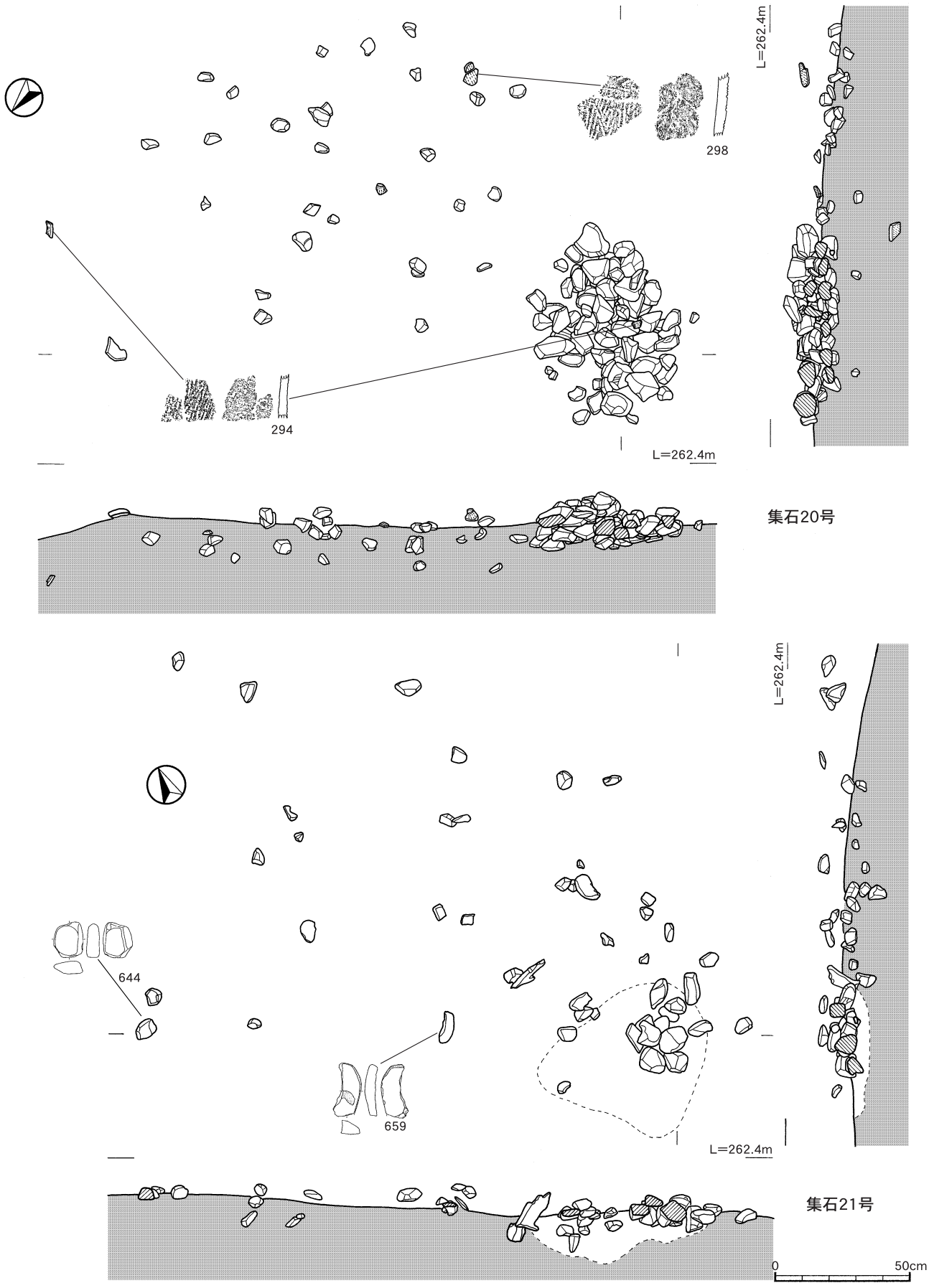
Ｉ－49区，22号の東側約10m離れたⅧ層上面で検出された。214×165㎝の範囲内に，礫が散在し

ていた。礫数は33個で，まとまりは見られないが火熱を受けた５～10㎝の破砕礫である。検出された集石の範囲内に炭化物や掘り込みは認められなかった。

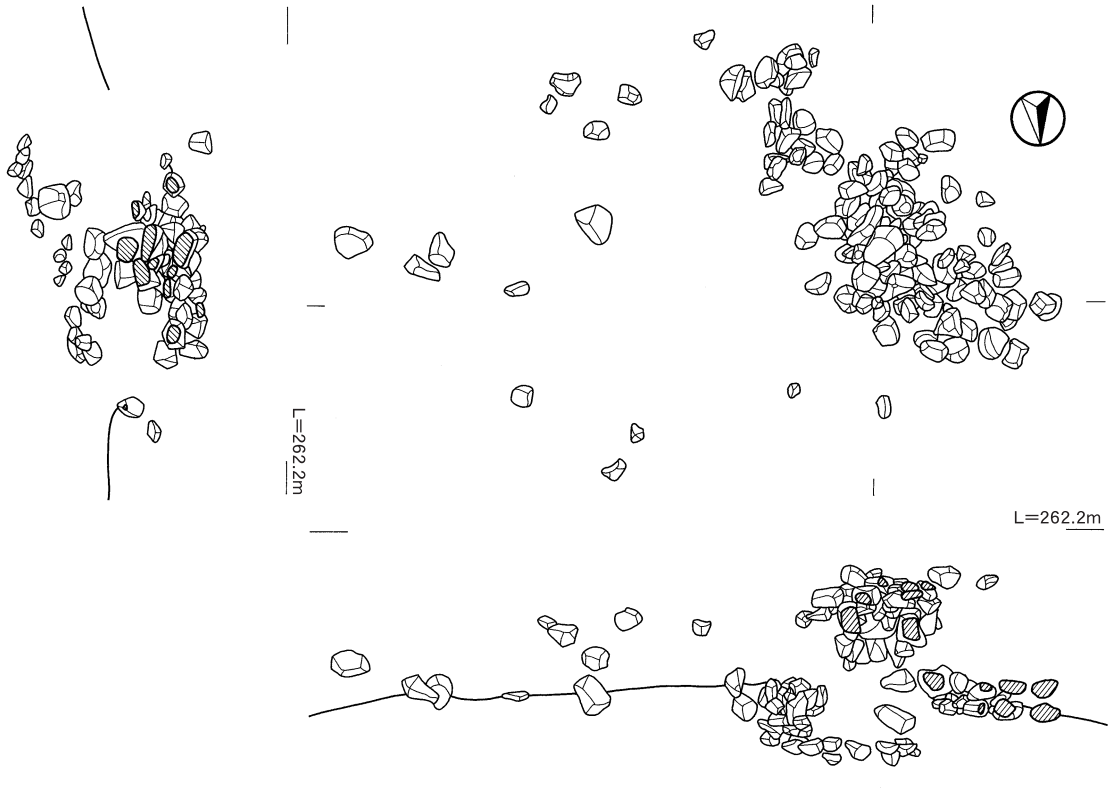
集石24号（第91，93図）

Ｈ－51区，Ⅷ層で検出された。163×128㎝の円形をした範囲内に，中心が凹むような形で礫が隙間無く敷き詰められていた。下部には深さ約40㎝，断面形がボウル状をした掘り込みが認められ，底面近くに多くの炭化物を含む黒色土が堆積していた。礫数は203個で，大きさ径10～15㎝，重量500ｇ～１㎏の角礫が中心である。石材は安山岩が半数以上を占め，火熱を受けた痕跡が全てに見

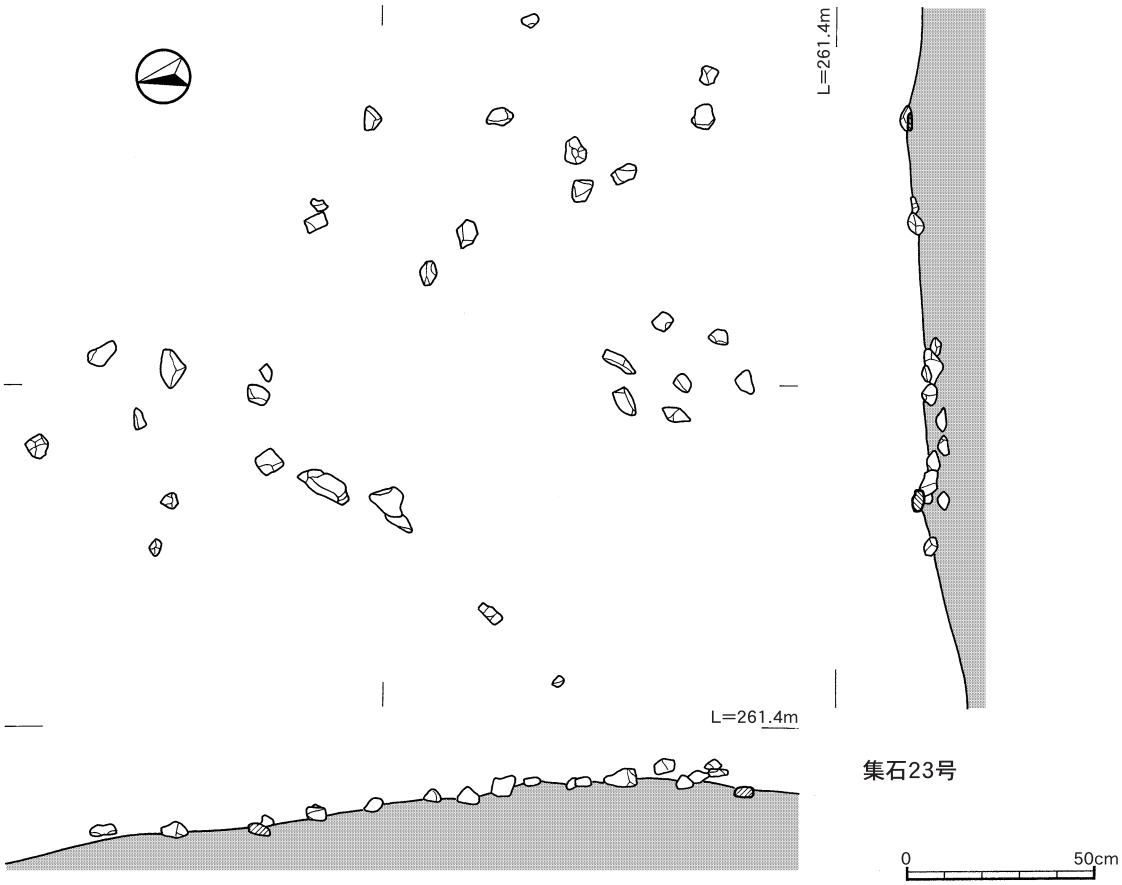
第87図　中央部　縄文時代早期　集石15～18号配置図



第88図　中央部　縄文時代早期　集石20，21号

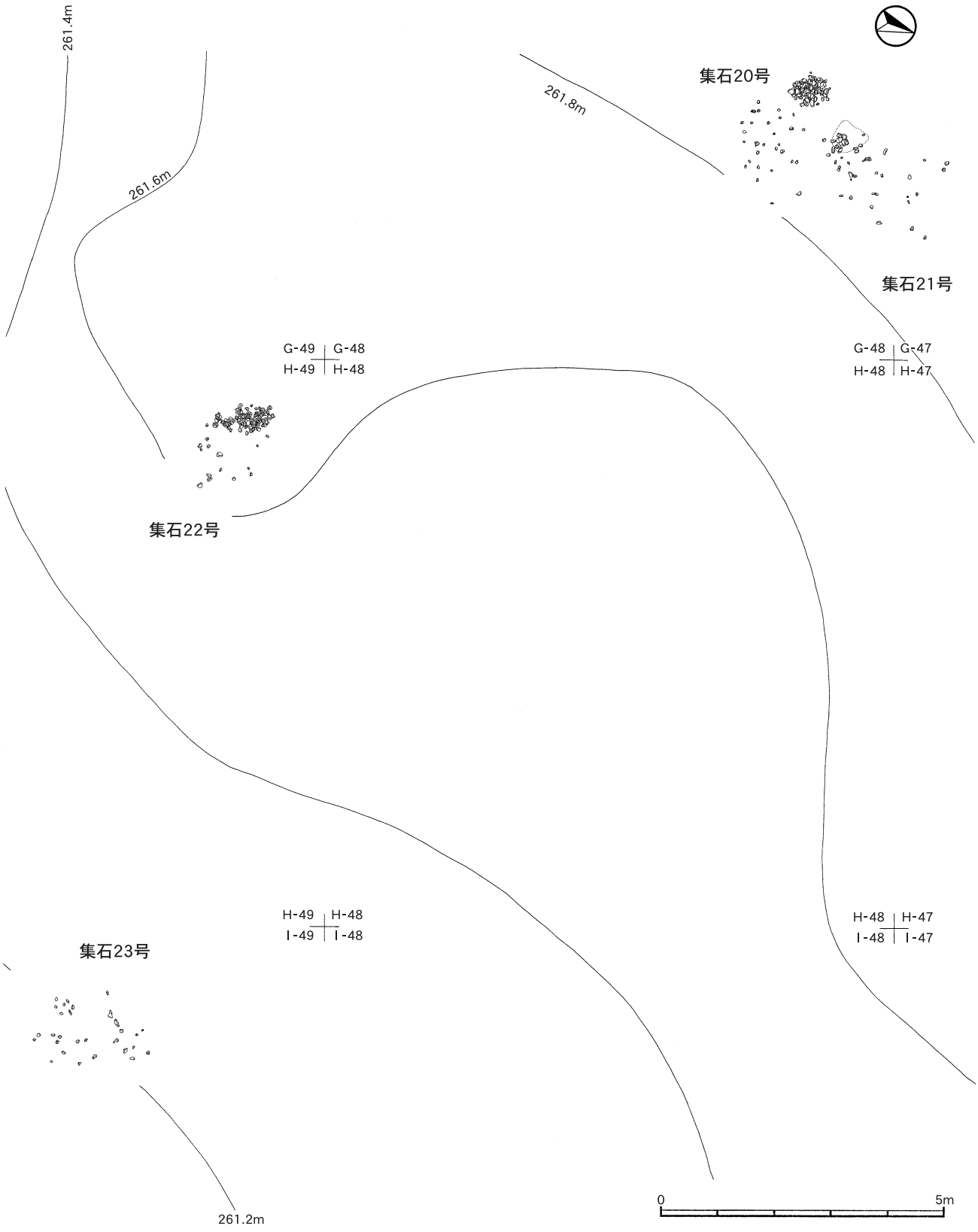


集石22号



集石23号

第89図　中央部　縄文時代早期　集石22，23号



第90図　中央部　縄文時代早期　集石20～23号配置図

られ赤化したものも多い。下位に進むにつれてやや小礫が多くなり，火熱や赤化が激しい。敷き詰められた礫は厚さ25～30㎝ほどに及ぶが，掘り込みの底面付近には見られず，集石として使用される前に掘られた火に関係する土坑で，上部の集石と時間差があるのではないかと想像される。

掘り込み内炭化物の放射性炭素年代測定を行い，8,745±35yrBPという測定結果が出ている。

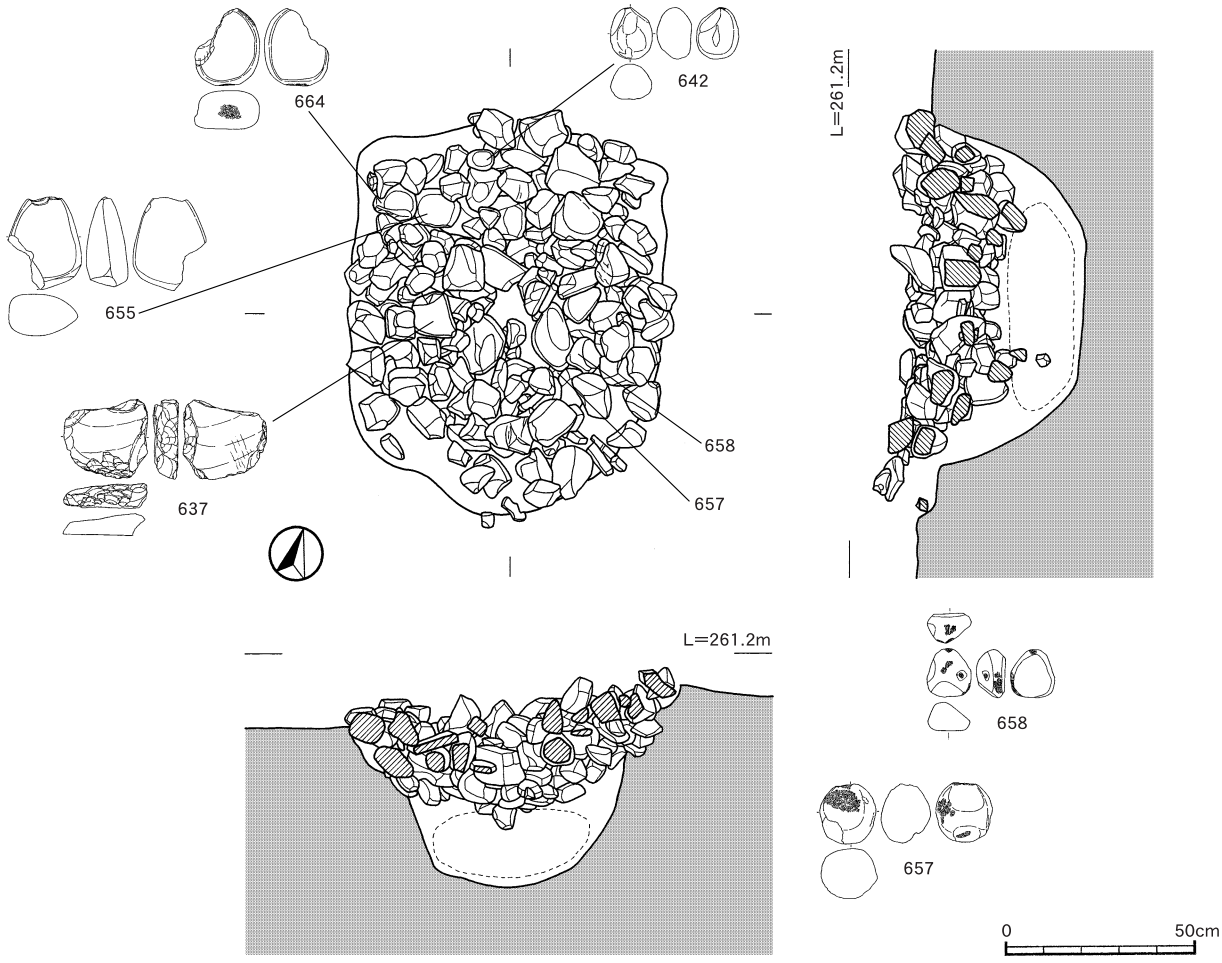
集石を構成する礫には，石器の転用品が16点と多く含まれていた。16点中６点について図化した。（第163図637，第164図642，第165図655，第166図657，658，664）

集石25号（第92，93図）

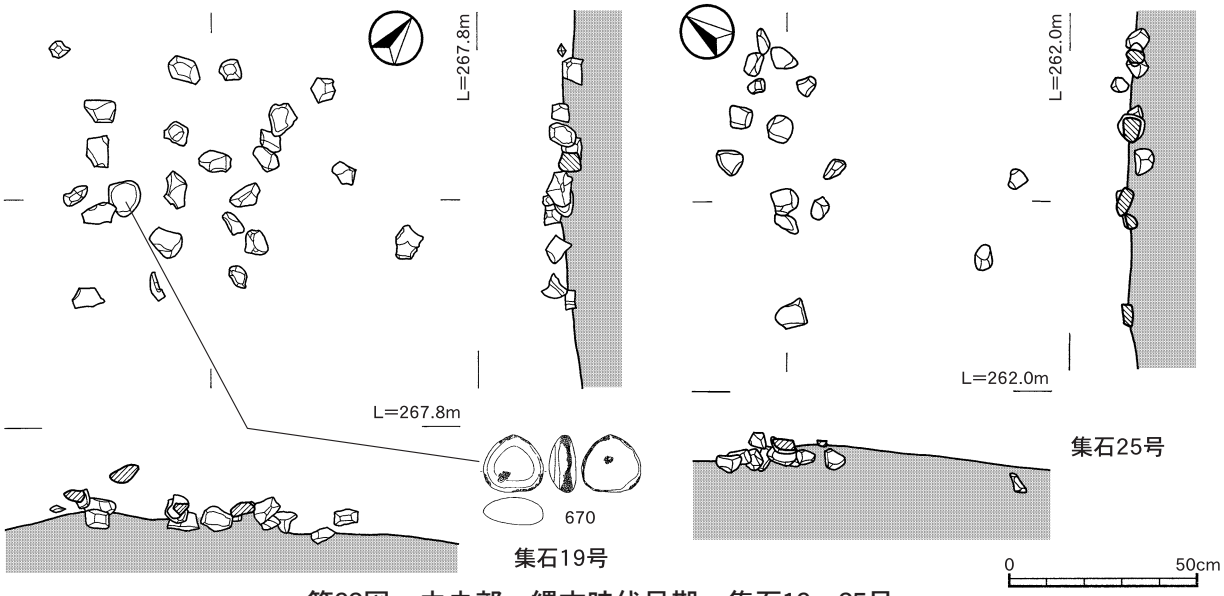
Ｈ－52区，24号の南東側約10mのⅧ層上面で検出された。110×105㎝の範囲内に，細長い礫のあつまりが見られた。礫総数は18個と少なく，石材はほとんどが大きさ径10㎝前後，重量200ｇ程度の安山岩である。炭化物や掘り込みは認められないが，火熱を受けたと見られる破砕がある。

石器集積遺構（第95図）

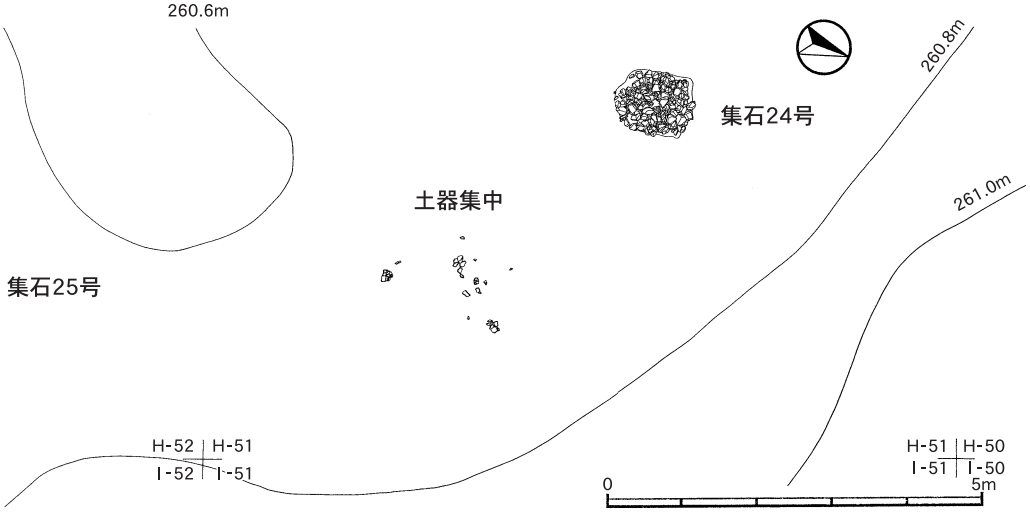
Ｈ－52区のⅧ層上面で砂岩質の磨石・敲石が２個，花崗岩の石皿１個が隣接して出土した。下位に明確な掘り込みは見られなかったが，周辺からの遺物や礫等の出土は少なく，出土状況から人為的に置かれたものではないかと考えられる。（遺物については「第５節出土石器」第167図671，672，第169図683参照）



第91図　中央部　縄文時代早期　集石24号



第92図　中央部　縄文時代早期　集石19，25号



第93図　中央部　縄文時代早期　集石24，25号配置図

第94図　狩俣遺跡　縄文時代早期　集石配置図

第10表　狩俣遺跡　集石集計表

名前	検出地点（グリッド）	集石範囲（cm）（長径×短径）	炭化物範囲（cm）（長径×短径）	掘込規模（cm）（長径×短径×深さ）	礫総数（個）	石材（個）							
						砂岩	頁岩	泥岩	花崗岩	安山岩	玄武岩	凝灰岩	その他
1号	23T	92×42	—	—	9	—	—	—	—	—	—	—	—
2号	23T	35×26	—	—	15	—	—	—	—	—	—	—	—
3号	F-5区	300×98	—	—	24	—	—	—	1	13	7	3	—
4号	F-6区	300×134	—	—	14	1	—	—	2	8	3	—	—
5号	I-6区	100×80	—	—	8	—	—	—	2	6	—	—	—
6号	J-8区	49×49	—	—	5	—	—	—	2	3	—	—	—
7号	L-23区	73×63	—	—	10	1	—	—	1	8	—	—	—
8号	L-30区	90×60	—	—	14	—	—	—	4	10	—	—	—
9号	L-31，32区	200×200	74×67	—	70	3	—	—	11	53	1	—	2
10号	J-35区	281×195	—	70×65×40	68	7	5	1	12	36	4	3	—
11号	J-36区	160×120	116×65	—	19	1	5	—	2	6	4	1	—
12号	K-36区	200×120	—	—	68	2	4	2	13	36	5	6	—
13号	H-39，40区	142×116	—	—	29	—	9	—	10	5	5	—	—
14号	I-42区	154×116	—	—	36	5	6	—	2	18	3	2	—
15号	I-44区	254×204	86×80	70×65×39	67	4	3	—	9	41	5	5	—
16号	H-45区	230×230	—	—	24	4	—	—	—	10	2	8	—
17号	J-45区	208×141	—	—	27	1	2	—	5	19	—	—	—
18号	J-46区	260×160	60×52	—	46	2	7	—	5	26	5	—	1
19号	L-44区	150×150	—	—	44	2	2	—	16	23	1	—	—
20号	G-48区	258×220	—	—	94	7	3	4	16	58	6	—	—
21号	G-48区	243×185	65×53	—	50	5	1	—	8	35	—	—	1
22号	H-49区	248×221	—	—	111	4	5	1	11	75	9	6	—
23号	I-49区	214×165	—	—	33	3	1	—	2	20	6	1	—
24号	H-51区	163×128	105×86	85×60×40	203	3	26	1	22	143	5	3	—
25号	H-52区	110×105	—	—	18	2	—	—	—	10	4	2	—

第11表　狩俣遺跡　集石重量組成表

（単位：g）

名前	～50	～100	～150	～200	～250	～300	～350	～400	～500	～700	～1000	1001～	合計
1号	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2号	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3号	7	4	8	3	1	—	1	—	—	—	—	—	24
4号	—	1	6	2	3	—	1	1	—	—	—	—	14
5号	1	—	1	—	—	1	1	1	3	—	—	—	8
6号	—	—	—	—	—	2	2	—	1	—	—	—	5
7号	—	—	—	1	1	—	2	—	3	2	1	—	10
8号	1	—	1	1	—	—	1	1	2	7	—	—	14
9号	—	—	3	3	2	2	7	5	14	19	5	10	70
10号	4	2	2	3	6	3	1	1	5	13	14	14	68
11号	5	5	2	2	2	2	—	—	1	—	—	—	19
12号	10	11	16	5	14	2	1	5	2	2	—	—	68
13号	7	8	1	2	2	3	—	—	4	—	2	—	29
14号	11	15	5	5	—	—	—	—	—	—	—	—	36
15号	4	12	12	2	10	6	2	3	4	4	8	—	67
16号	3	3	4	4	4	3	2	—	—	1	—	—	24
17号	2	9	11	1	2	1	—	—	1	—	—	—	27
18号	7	13	11	9	3	2	—	—	1	—	—	—	46
19号	2	2	5	9	8	2	4	3	5	1	2	1	44
20号	9	12	17	12	10	9	7	3	4	7	3	1	94
21号	6	10	12	2	8	4	1	—	3	2	2	—	50
22号	1	4	21	11	17	8	13	10	10	10	5	1	111
23号	1	7	11	8	1	—	3	2	—	—	—	—	33
24号	19	4	11	12	18	14	7	12	24	31	24	27	203
25号	5	1	2	3	3	1	1	1	1	—	—	—	18

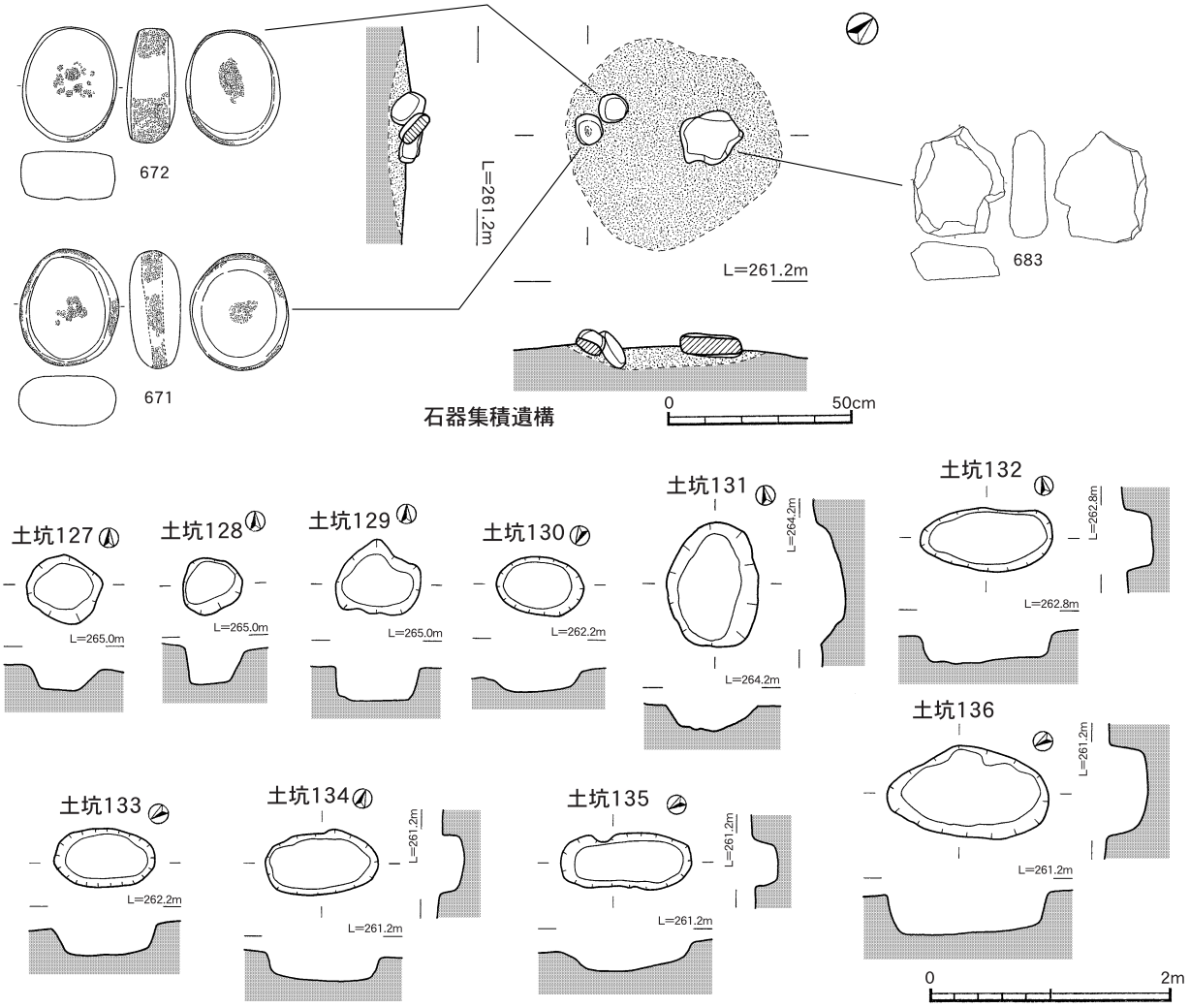
⑵　**土坑**（第95，100，101図）

縄文時代早期の土坑は，土坑127～136の10基検出された。いずれもⅨ層上面で検出され，埋土はⅧ層の黒色土である。土坑127～129は平面径50㎝前後の円形（Ⅰ類），土坑130～136は平面形が楕円形（Ⅲ類）を呈するものに分けられる。検出された土坑は，２，３基単位で台地の縁辺部に位置する傾向がある。

土坑127～129はⅠ類の土坑であり，平面径の平均が73×65㎝のほぼ円形を呈する。検出面からの深さは比較的浅く，深さ19～32㎝である。断面形状は，逆台形（土坑127），U字型（土坑128，129）を呈する。埋土中より遺物は出土しなかった。土坑130～136はⅢ類の土坑であり，平面径の平均が101×56㎝の楕円形を呈する。検出面からの深さは11～33㎝である。断面形状は，逆台形（土坑130，131），U字型（土坑132～134，136），皿形（土坑135），を呈する。埋土はⅧ層の黒色土であり，埋土中より遺物や炭化物は出土しなかった。

土坑133～135（第95，101図）

Ｈ－50区のⅨ層上面で検出された。３基の土坑は非常に近接しており，いずれも長径95㎝，短径49㎝程度の楕円形を呈する。検出面からの深さは約22㎝で底面に平坦面を持つ。底面より小ピットは確認されないが，台地の縁辺部に当たる場所に掘られていることから落とし穴の可能性もある。



第95図　中央部　縄文時代早期　石器集積遺構，土坑

2　縄文時代中～晩期（第96～101図）

縄文時代中～晩期の遺構は，落とし穴２基，焼土跡２，土坑13基である。

落とし穴はＫ－24～27区で２基検出されており，いずれも西側の谷へと向かう台地の縁辺部に当たる。２トレンチで検出された１～３号とは谷を挟んで約200mほど離れているが，同じ西側の谷へ向かう台地上にあり立地条件が似ている。

⑴　落とし穴（第96，97，100図）

縄文時代中～晩期の落とし穴は２基である。どちらも御池火山灰を多く含むものである。

落とし穴４号（第96，100図）

西側の谷へと向かう台地の縁辺部に当たるＫ－27区で検出された。Ⅳ層下面では御池火山灰の集中が一部見られたが，中央に大きな樹痕による撹乱があり明確な形状を確定することが出来なかった。Ⅶ層上面まで掘り下げ，平面形を明確にすることができた。平面形は，中央に撹乱があり不明な部分も残るが，略南北方向に主軸を持つ長方形を呈している。長径×短径は146×57㎝，深さは検出面から24㎝である。しかし，Ⅳ層下面から検出面まで80㎝近くあることから，深さは１m前後あったと推定される。壁面はほぼ垂直に立ち上がる形状で，床面には平坦面を有している。撹乱を受けていない床面から小ピットを13検出した。小ピットが集中しておらず，10～20㎝間隔で床面全体に配置されていた。小ピットの形状は，平均して5.9×4.9㎝の円形を呈し，深さ約22㎝で垂直にすぼまる形状であることから，逆茂木痕であると思われる。落とし穴の埋土は，御池火山灰を多く含む黄褐色土が主体であり，壁面の崩落と思われるⅤ～Ⅶ層が混じり込んでいる。なお，底面の小ピット長径，短径，深さについては，第12表にまとめた。

落とし穴５号（第97，100図）

落とし穴４号から北側方向に約25mのⅧ層上面で検出された。平面形は，略東西方向に主軸を持つ方形に近い楕円形を呈している。長径×短径は125×52㎝，深さは検出面から65㎝である。４号と同様にⅣ層下面から検出面まで１m近いことから，実際の深さは１m70㎝を越えると推定される。壁面はほぼ垂直に立ち上がる形状で，床面には広めの平坦面を持つ。床面に小ピットは確認されなかった。埋土は御池火山灰を多く含む黄褐色土が主体であり，わずかに赤褐色土が部分的に混ざる。床面付近には，黒色土が黄褐色土と混ざり合った状態が見られた。

⑵　焼土跡（第98，101図）

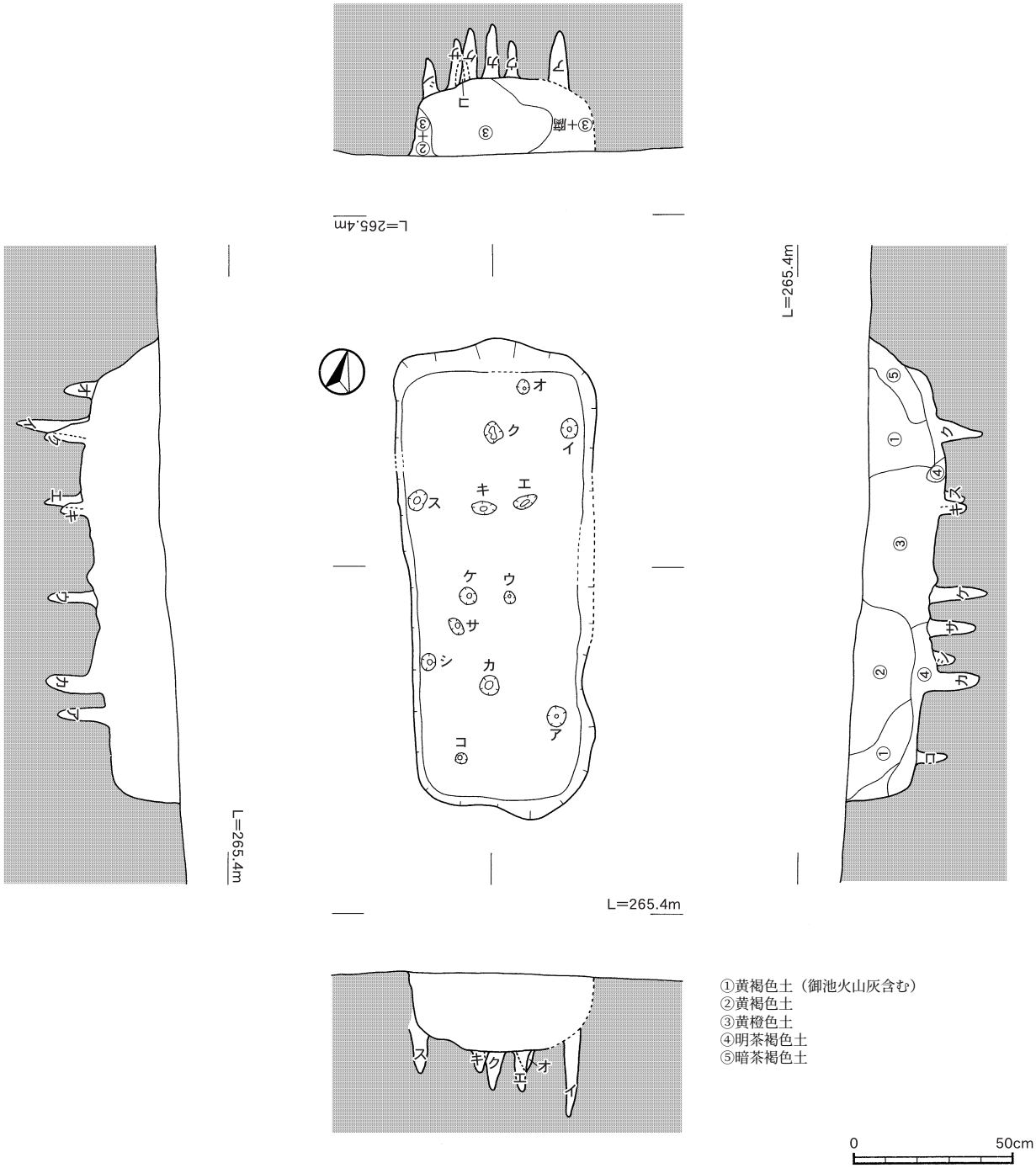
縄文時代中～晩期の焼土跡は２基である。２基は近接しており，どちらも赤橙色を呈している。

焼土１（第98図）

Ｉ－46区，Ⅳ層で検出された。浅い掘り込みの平面形は，長径×短径が156×78㎝の楕円形を呈し，検出面からの深さは約10㎝である。床面に平坦面は見られず，緩やかな曲線を描きながら立ち上がっている。埋土に炭化物は確認されず，Ⅲｂ層が火熱を受け赤化したと思われる明赤褐色土が主体であり，１㎝前後の赤橙色ブロックも含まれていた。底面の南半分には床面が火熱により変色したと思われる赤化が見られるため，廃棄後の凹地に捨てられた可能性がある。土器片（146図485）が出土しているが，廃棄後捨てられた可能性があるため縄文時代中～晩期の遺構として取り扱った。

焼土２（第98図）

Ｉ－46区，焼土１の南側に隣接して検出された。浅い掘り込みの平面形は，長径×短径が78×64

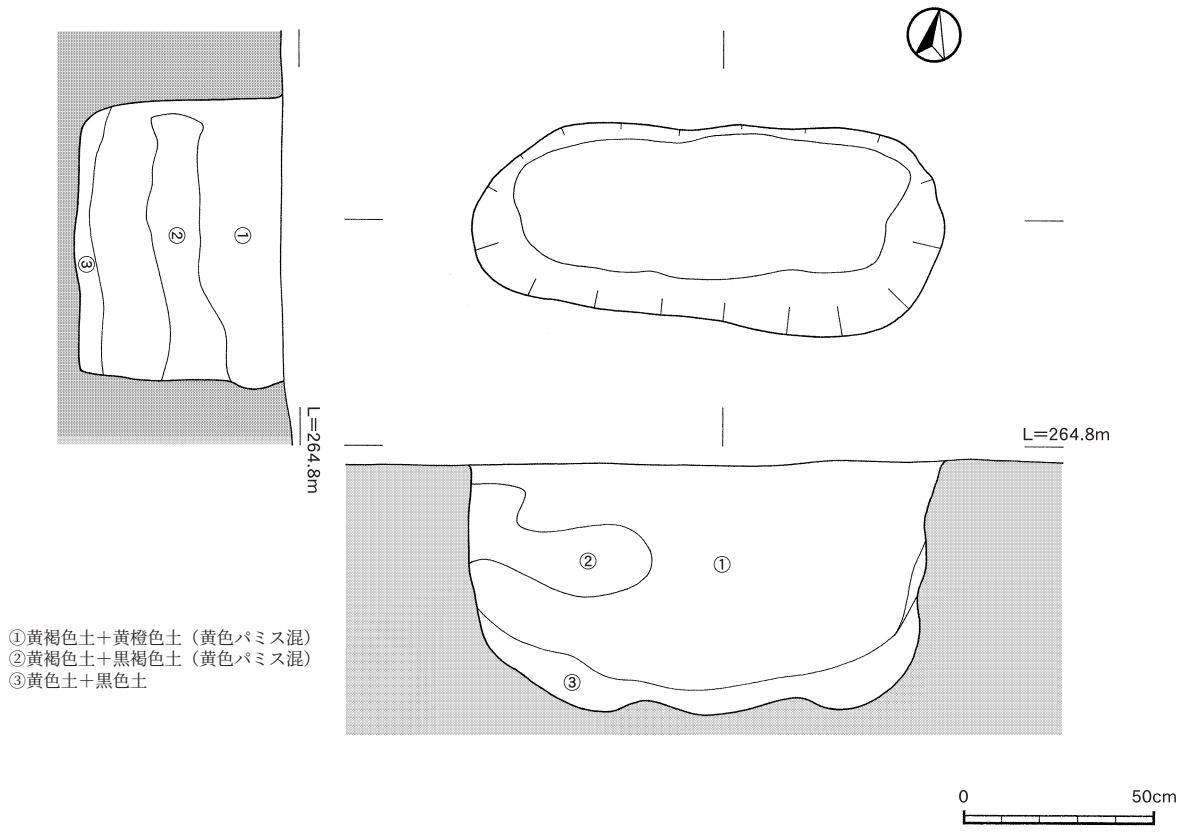


第96図　中央部　縄文時代中期　落とし穴４号

第12表　中央部　落とし穴４号小ピット計測表

小ピット	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
ア	6.8	6.0	16.0
イ	6.9	5.0	25.0
ウ	4.0	3.8	16.0
エ	7.9	4.0	24.5
オ	5.0	4.9	21.0
カ	6.2	6.0	22.5
キ	8.0	4.2	24.5

小ピット	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
ク	7.0	5.7	25.0
ケ	5.9	5.0	25.5
コ	4.2	4.0	21.0
サ	5.9	5.0	25.0
シ	6.2	5.0	21.0
ス	7.0	5.2	20.0



第97図　中央部　縄文時代中期　落とし穴５号

㎝のほぼ円形を呈し，検出面からの深さは約５㎝である。床面に平坦面を持ち，断面が皿状を呈している。埋土はⅢｂ層が火熱を受け赤化したと思われる明赤褐色土であり硬化していた。底面には火熱により変色が見られる。焼土内より遺物は出土していないが，焼土跡１との距離が近く特徴も類似することから，ほぼ同時期のものと判断した。なお，焼土跡１，２の下位より住居跡は検出されていないので，屋外炉として使用された可能性も考えられる。

⑶　**土坑**（第99～101図）

縄文時代中～晩期の土坑は，土坑137～149の13基である。いずれもⅣ～Ⅴ層上面で検出され，埋土はⅣ層の御池火山灰を含む黄褐色土または暗褐色土である。土坑内に遺物は見られなかったが，黄色パミスを多く含むものが多い。Ｋ，Ｌ－25～27区にやや集中が見られ，東側へ落ち込んでいく斜面へと続く台地の縁辺部を，取り囲むように検出された。落とし穴4，5号の近くに集中していることから，何らかの関連も推定される。土坑137～147は，平面径が小さいほぼ円形を呈するもの（Ⅰ類）であり，さらに50㎝以下（土坑137～143）と50㎝～１ｍ（土坑144～146），深さの深いもの（土坑147）に分けられる。平均は34×31㎝，深さ25㎝である。土坑148は１ｍ前後の円形を呈するもの（Ⅱ類），土坑149は楕円形を呈するもの（Ⅲ類）に分けられる。それぞれの形状は，土坑148が平面径107×91㎝，深さ26㎝，土坑149が140×45㎝，深さ22㎝である。断面形状は，土坑141がレンズ状である以外はＵ字型をしたものが多く見られる。

土坑141（第99図）

Ｋ－25区，Ⅳ層上面で検出された。平面形は35×29㎝のほぼ円形を呈し，検出面からの深さは11㎝である。断面形状はレンズ状を呈しており，砂質が強く柔らかい暗褐色土の上に硬化した黄色パ

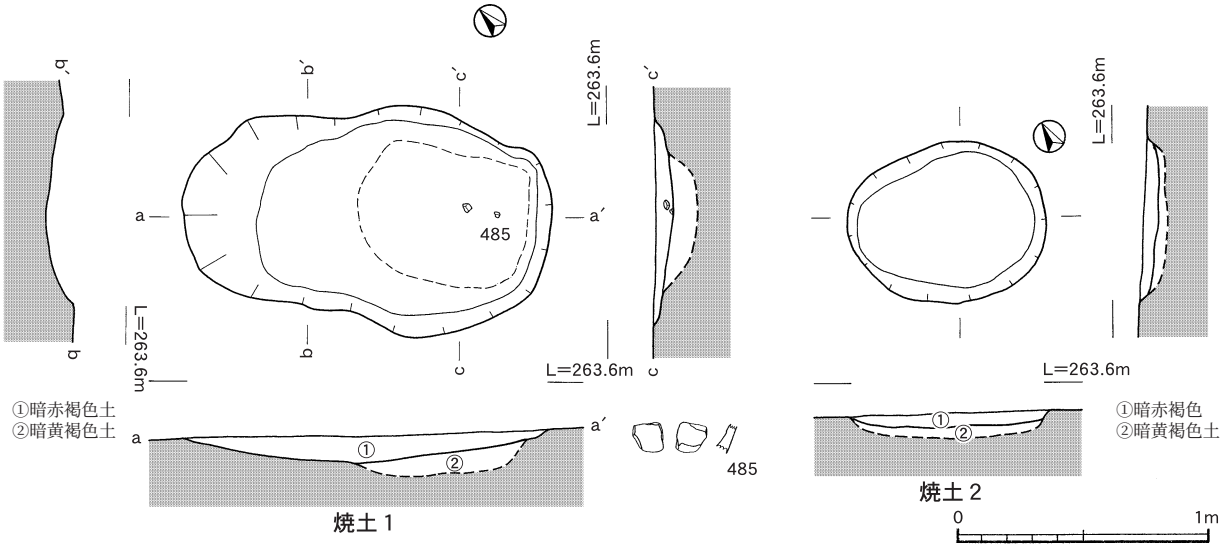
ミスを含む黄色土が見られた。検出面はまだ上位にあったと推定されるが，火熱を受けた痕跡が認められないため，黄色パミスが硬化した理由については不明である。

土坑146（第99図）

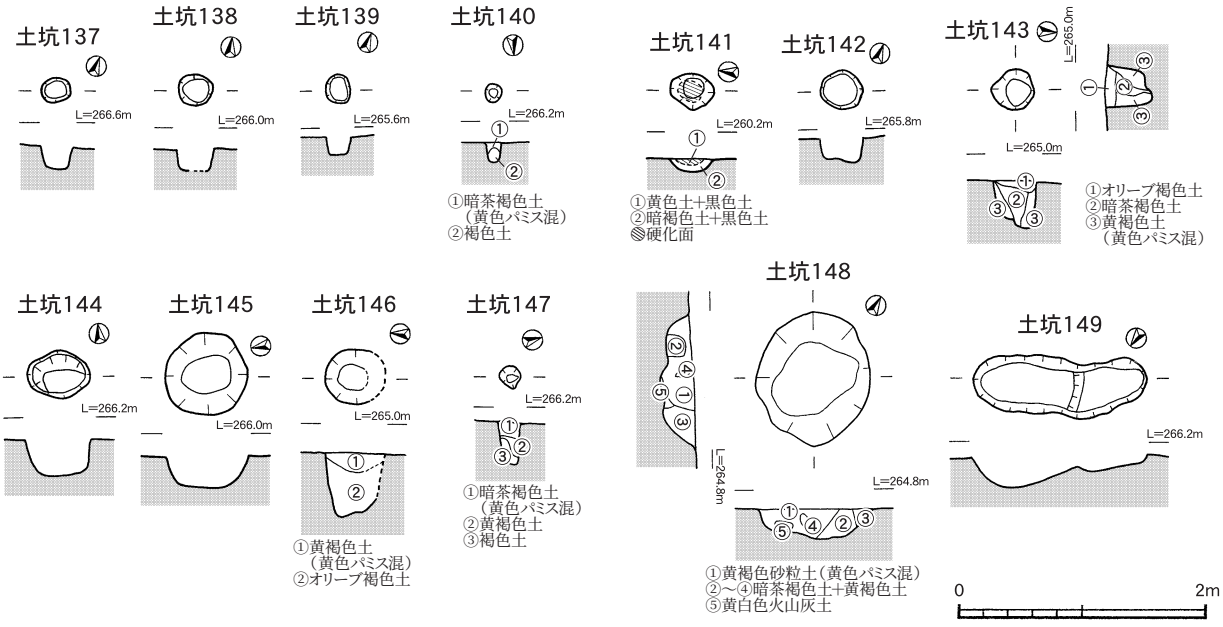
Ｋ－31区で検出された。平面形は48×44㎝のほぼ円形を呈していると思われるが，掘立柱建物跡２号のＰ９によって断ち切られており，南側半分の形状は不明である。深さは50㎝である。

土坑148（第99図）

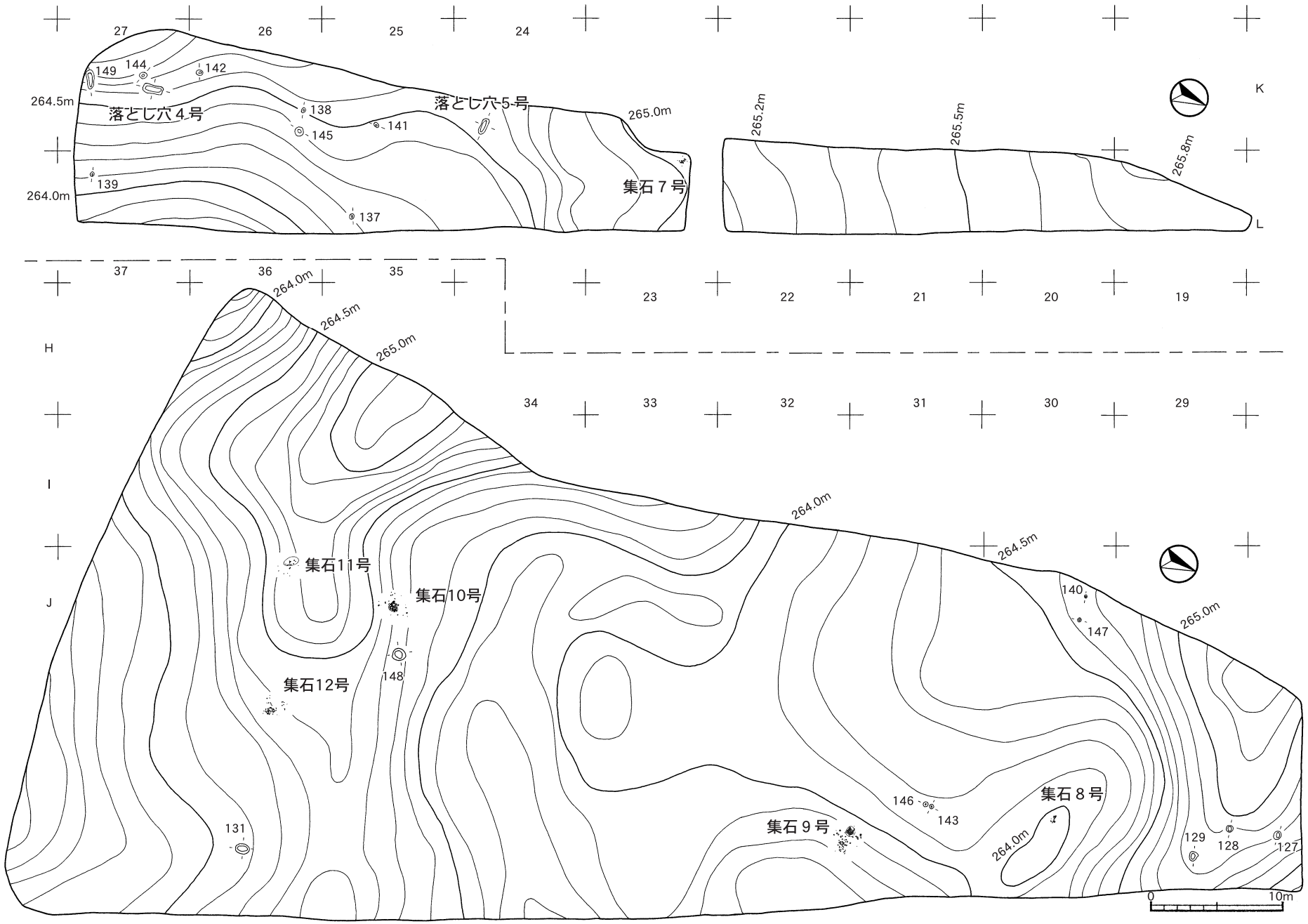
Ｊ－35区，Ⅷ層上面で検出された。平面形は107×91㎝のほぼ円形を呈し，検出面からの深さは26㎝である。断面形状は逆台形を呈しており，底面に平坦面を有する。埋土は，黄褐色砂粒土にやや大粒な黄色パミスが混じり，炭化物もわずかに確認された。御池火山灰が埋土の主体であるため掘り込み面はかなり上位と考えられる。薩摩火山灰層上面まで掘られていることから，少なくとも１m前後の深さがあったと想定される。



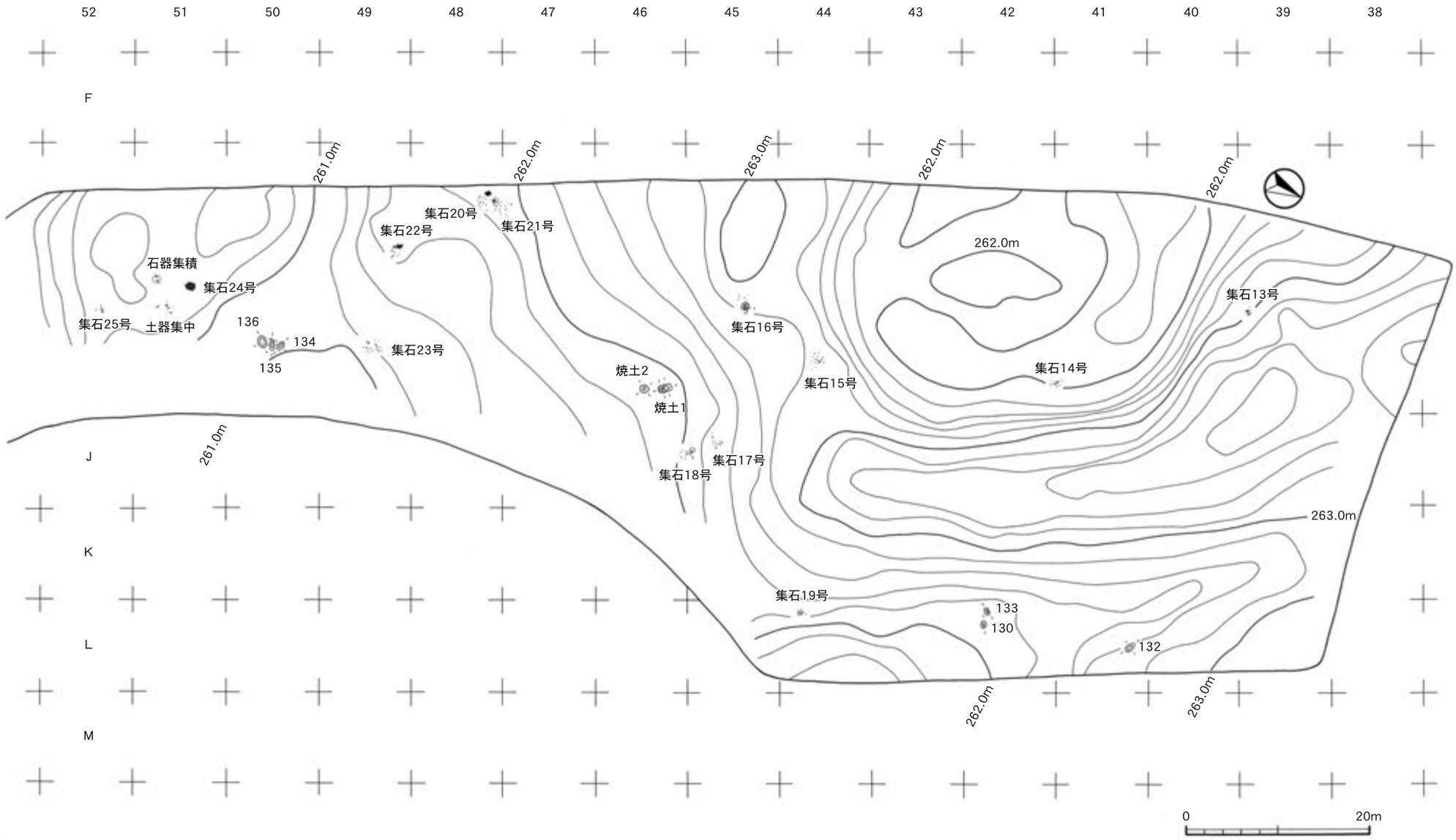
第98図　中央部　縄文時代中～晩期　焼土1，2



第99図　中央部　縄文時代中～晩期　土坑



第100図　中央部　縄文時代　遺構配置図(1)



第101図　中央部　縄文時代　遺構配置図(2)

3　古代～中世（第102～107，121，122図）

古代～中世の遺構は，Ⅳ層上面で掘立柱建物跡が３棟，溝状遺構が４条，土坑11基が検出された。埋土はⅢａ層が主体であるが，遺構内遺物が少なく中世末の可能性を残すことから，古代～中世の遺構として取り扱った。

17～25区，37～44区については，現代の大規模な天地返しにより地表からⅥｂ層（桜島火山灰Ｐ11）までの遺物包含層は概ね撹乱を受けていたので，古代～中世の遺構は検出されなかった。なお，遺構の全体配置については，第121，122図に示した。

⑴　掘立柱建物跡（第102～104，121図）

古代～中世の掘立柱建物跡は，Ｊ，Ｋ－30，31区Ⅳ層上面で３棟検出された。

掘立柱建物跡１号（第102，121図）

Ｋ－31区，Ⅳ層上面にて検出された。建物の規模はほぼ２間×３間で，11個の柱状ピットからなる。西側のＰ８，９の間が極端に狭いが，建物の構造上必要な柱であったと思われる。主軸は略南北方向である。桁行の平均は約6.1m，梁行の平均は約4.3mであり，やや北東側が広がった長方形を呈しており，床面積はおよそ29.4㎡である。柱間寸法の平均は桁行柱間が1.8m，梁行柱間が2.1mであるが，1.5～3.1mまでとばらつきが見られる。周辺に散在した炭化物の粒が見られたが，建物とも関係は検証できていない。

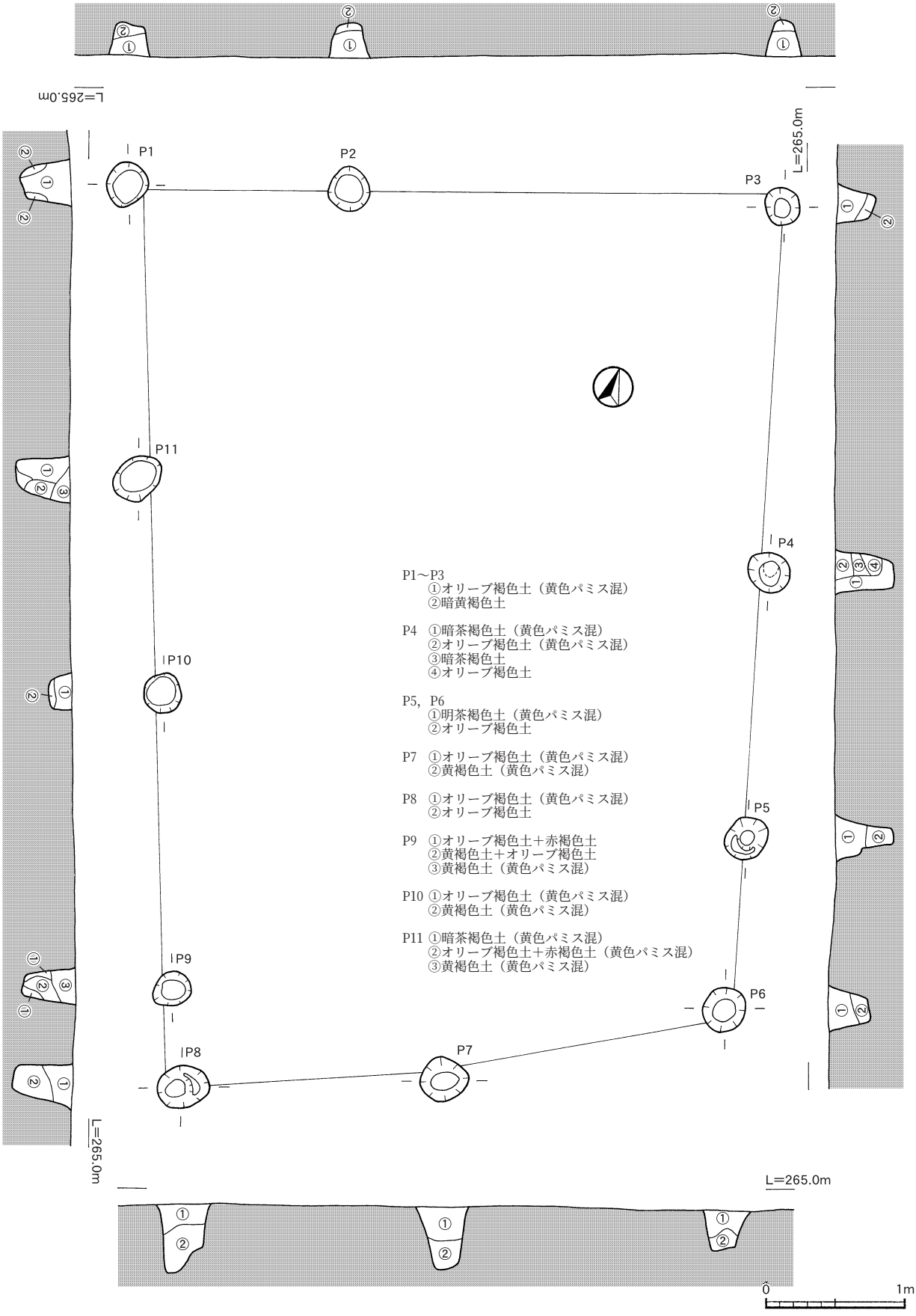
ピットはほぼ円形を呈し，平均して径32.4×26.4㎝，深さ35.5㎝であり，ほぼ同規模であるが，Ｐ10が比較的浅い。ピット中の埋土は，古代の遺物包含層であるⅢｂ層の暗褐色土であり，上位に黄色パミスや炭化物がわずかに混ざるものがあり，下位には黄褐色土及び壁面の崩落で混ざったと思われる赤褐色土の小ブロックを含むものが多い。埋土中より出土遺物は確認されていない。

柱の径については，柱の規格を推測すると柱穴ピットの底径から，やや小さめのＰ５～７のピット底径が15～20㎝であり，柱は底径より小さいと判断すると10㎝前後のものではないかと推測される。

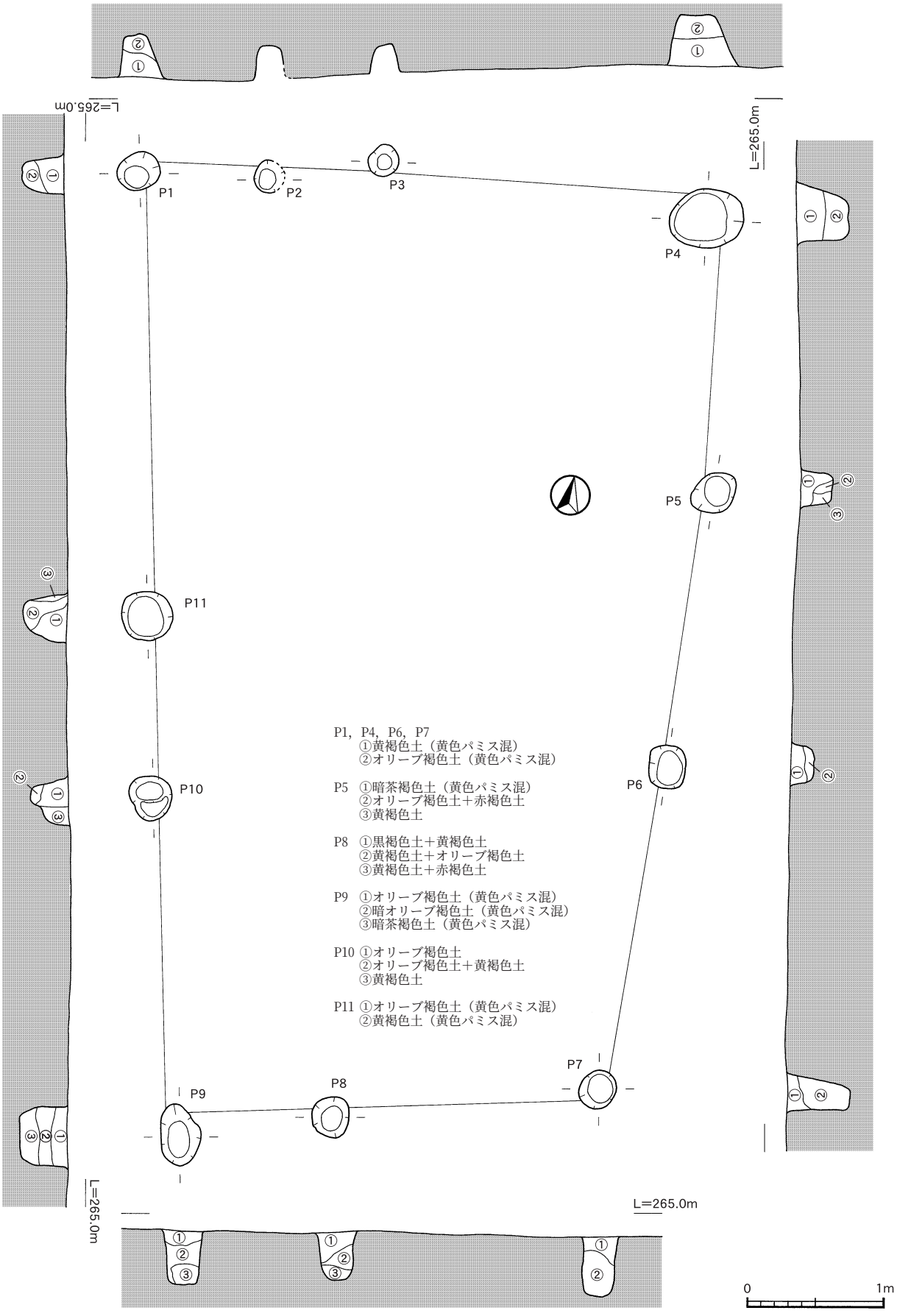
掘立柱建物跡２号（第103，121図）

Ｋ－31区で，掘立柱建物跡１号と重なるようにして検出された。検出面は同じくⅣ層上面である。建物の規模は概ね２間×３間であり11個の球状ピットからなる。主軸は略南北方向である。桁行の平均は約6.7m，梁行の平均は約3.7mであり，やや北側の広がった長方形を呈し，床面積はおよそ28.5㎡である。柱間寸法の平均は桁行柱間が2.2m，梁行柱間が1.4mであり，一定間隔ではない。特に北側のＰ１～３の間隔が89㎝と狭く，Ｐ３－４の間隔は極端に広い。また，ピット径もＰ１の26㎝に比べてＰ２，３は約22㎝と小さい。建物内に焼土跡，炭化物は見られなかった。

ピットは２種類に分けられ，四隅がやや大きめのものと小さめのものに分けられる。大きめのものは深く，平均して径39×31㎝，深さ37㎝であり，その他が小さめで平均して径26.9×27㎝，深さ26.9㎝である。平面形はほぼ円形を呈しており，上部構造に合わせた大きさや深さではないかと考えられる。ピット中の埋土は，Ⅲｂ層の暗褐色土が主体であり，全体に黄色パミスや炭化物がわずかに混ざるものがあり，下位には壁面の崩落で混ざったと思われる赤褐色土の小ブロックを含むものも見られた。埋土中より遺物は確認されなかった。



第102図　中央部　古代～中世　掘立柱建物跡１号



第103図　中央部　古代～中世　掘立柱建物跡２号

第13表　中央部　掘立柱建物跡１，２号計測表

掘立柱建物跡１号

主軸方向	桁行(m)	梁行(m)	桁行柱間(m)	梁行柱間(m)
南北	P1－P8	P1－P3	P1－P11	P1－P2
N-24°-W	6.40	4.60	2.08	1.54
	P2－P7	P4－P10	P10－P11	P2－P3
	6.04	4.28	1.54	3.06
	P3－P6	P6－P8	P9－P10	P7－P8
	5.72	3.92	2.10	1.92
			P8－P9	P6－P7
			0.72	2.02
			P3－P4	
			2.48	
			P4－P5	
			1.86	
			P5－P6	
			1.26	

ピットNo.	P１	P２	P３	P４	P５
長径(cm)	32	32	26	38	30
短径(cm)	30	30	24	28	28
深さ(cm)	34	26	26	42	40

ピットNo.	P6	P7	P8	P9	P10
長径(cm)	32	34	38	28	28
短径(cm)	28	28	16	24	26
深さ(cm)	40	40	48	38	18

ピットNo.	P11
長径(cm)	38
短径(cm)	28
深さ(cm)	38

掘立柱建物跡２号

主軸方向	桁行(m)	梁行(m)	桁行柱間(m)	梁行柱間(m)
南北	P1－P9	P1－P4	P1－P11	P1－P2
N-19°-W	6.96	4.10	3.14	92
	P3－P8	P5－P11	P10－P11	P2－P3
	6.78	3.82	1.30	86
	P4－P7	P7－P9	P9－P10	P3－P4
	6.34	3.06	2.44	2.36
			P4－P5	P8－P9
			1.96	1.12
			P5－P6	P7－P8
			2.04	1.96
			P6－P7	
			2.38	

ピットNo.	P１	P２	P３	P４	P５
長径(cm)	32	34	24	52	36
短径(cm)	26	22	22	42	28
深さ(cm)	30	24	20	36	24

ピットNo.	P6	P7	P8	P9	P10
長径(cm)	32	28	30	44	32
短径(cm)	26	26	26	30	28
深さ(cm)	16	44	46	38	28

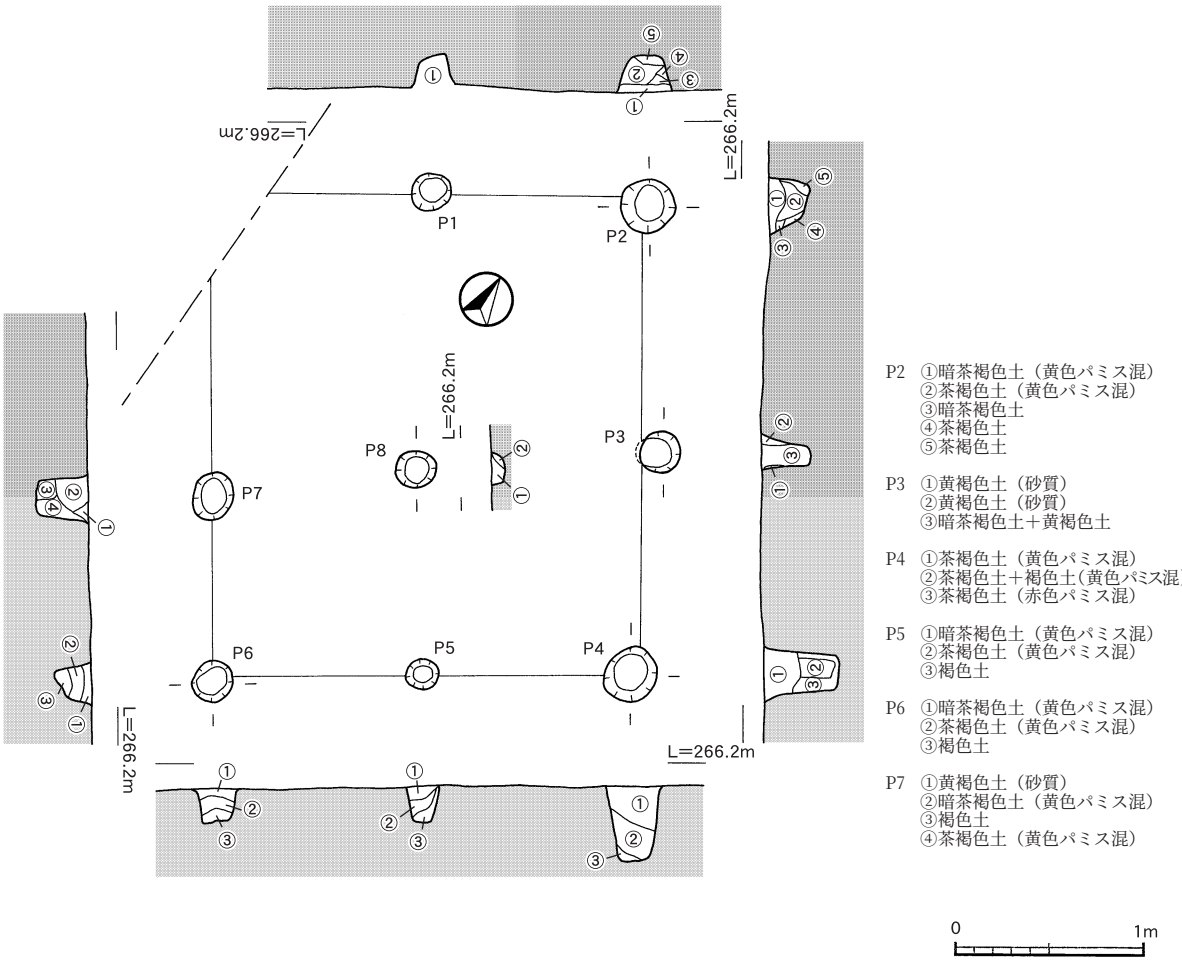
ピットNo.	P11
長径(cm)	38
短径(cm)	36
深さ(cm)	30

掘立柱建物跡１号と２号は建物規模や主軸方向，ピット内埋土が類似しており立地場所もほぼ重なるなど共通点が多いことから，建て替えられたものと想定される。しかし，建て替えによる時間差及びその前後関係は明らかでない。

掘立柱建物跡３号（第104，121図）

Ｊ－30区，Ⅳ層上面にて検出された。建物の規模は２間×２間であり，8個のピットからなる。主軸は略北西－南東方向であると思われるが，桁行平均は約2.5m，梁行の平均は約2.3mとほぼ正方形を呈した，床面積はおよそ28.5㎡の建物であり，略北東－南西方向の可能性もある。柱間寸法の平均は，桁行柱間が2.2m，梁行柱間が3.7mとほぼ等間隔であるが，わずかに北西側が広い。建物の中心にも柱があり，ほぼ等間隔で規則的に柱が配置された総柱の建物であることから，東側の調査区外にもう１個のピットが存在すると思われる。建物内に焼土跡は見られなかった。しかし，わずかではあるが，周辺に散在した炭化物の粒が見られた。

ピットはほぼ円形を呈し，平均して径34.7×28.4㎝，深さ30.5㎝であり，ほぼ同規模である。削



第104図　中央部　古代～中世　掘立柱建物跡３号

第14表　中央部　掘立柱建物跡３号計測表

主軸方向	桁行(m)	梁行(m)	桁行柱間(m)	梁行柱間(m)
南北	P0－P6	P0－P2	P0－P7	P0－P1
N-34.5°-W	2.56	2.32	1.56	1.18
	P1－P5	P3－P7	P6－P7	P1－P2
	2.52	2.28	1.00	1.16
	P2－P4	P4－P6	P1－P8	P7－P8
	2.50	2.24	1.48	1.10
			P5－P8	P3－P8
			1.10	1.28
			P2－P3	P5－P6
			1.36	1.14
			P3－P4	P4－P5
			1.18	1.12

ピットNo.	P１	P２	P３	P４	P５
長径(cm)	22	30	24	30	18
短径(cm)	20	28	22	28	16
深さ(cm)	16	22	26	40	18

ピットNo.	P６	P７	P８
長径(cm)	24	24	22
短径(cm)	22	20	18
深さ(cm)	20	26	6

平率が高い北側のピットがやや浅めである。柱の径は，残存部分がなく不明であるが，10㎝前後ではないかと推測される。ピット中の埋土は，Ⅲｂ層の暗褐色土が主体であり，下位に黄褐色土と褐色土が混ざり，炭化物がわずかに混ざるものが多い。

⑵　**溝状遺構**（第105，106，121，122図）

古代～中世の溝状遺構は４条検出された。部分的に上位削平による消失も見られる。

溝状遺構14（第105，121図）

Ｋ－25，26区で略南北方向に検出された。埋土は黒褐色土が主体であり，黄色パミスもわずかに見られた。検出された長さは6.8mであり，わずかに蛇行しながら天地返しによる撹乱を受けたＫ－24区方向へ続いている。検出された幅は18～100㎝，深さ約20㎝であり，断面形態は南側がＶ字状，北側が逆台形を呈している。Ｋ－26区側から北側へ向かって緩やかに傾斜している。

溝状遺構15（第105，121図）

Ｋ－26，27区，溝状遺構14の南側で略南北方向に検出された。埋土は暗黄色土が主体である。検出された長さは4.6m，幅は20～70㎝，深さ約13㎝であり，北側が幅広である。断面形態は南側が方形，北側が皿状を呈しており，Ｋ－27区側から北側へ向かって緩やかに傾斜している。

溝状遺構14と約5.3m離れているが，傾斜方向から同じものであった可能性がある。

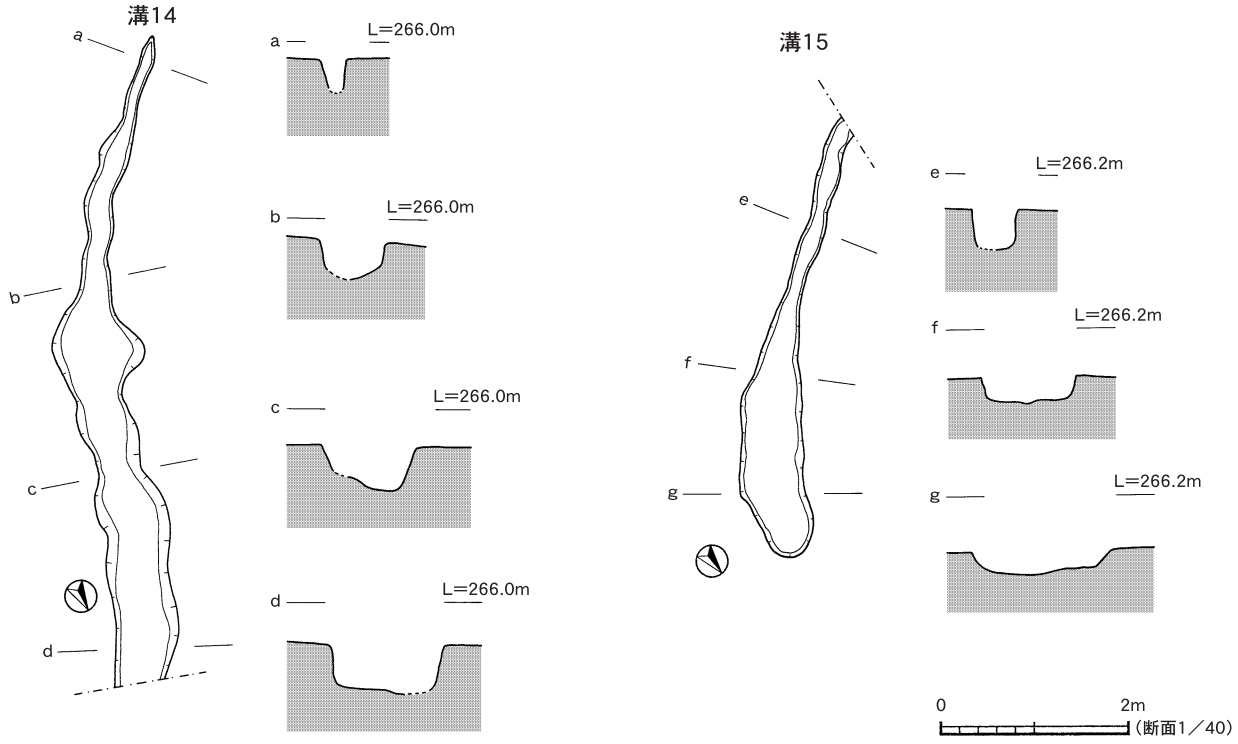
溝状遺構16（第106，122図）

Ｉ－48区で，北西－南東方向に検出された。途中2.2mは撹乱を受け消失しているが，検出された長さは5.2m，幅は20～35㎝，深さ約7.6㎝であり，地形に沿ってＨ－47区側から東側へ向かって傾斜している。埋土は暗褐色土が主体であり，暗黄色土や炭化物も混ざる。断面形態は西側が皿状，東側が逆台形を呈しており，下流側は傾斜が急になっている。

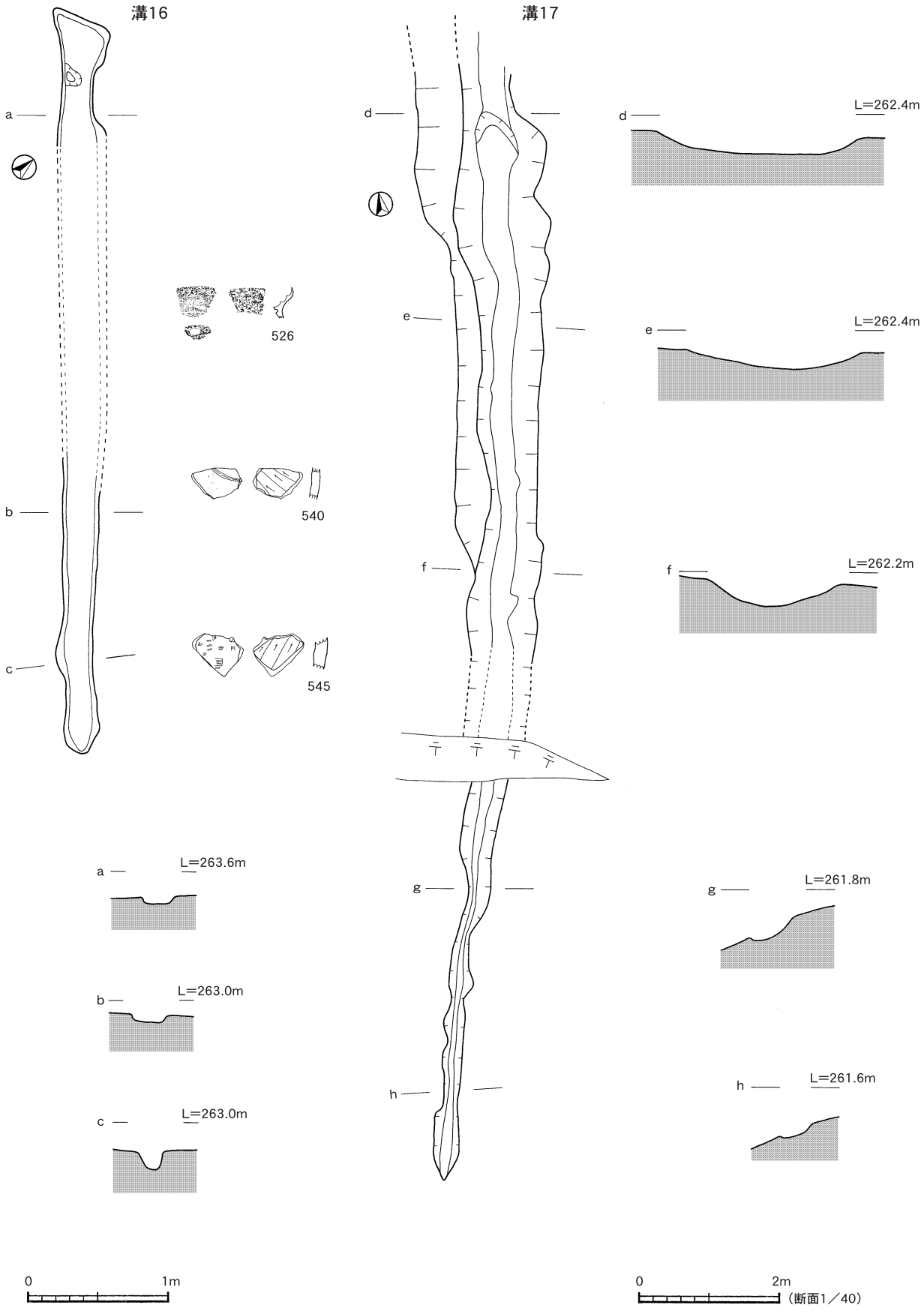
埋土中より土器片が３点出土しており，いずれも土師器の甕の一部であり図化した。（第148図526，540，545）

溝状遺構17（第106，122図）

Ｇ～Ｉ－50～52区で略南北方向に検出された。埋土は暗褐色土が主体である。途中２mは削平を受け消失しているが，検出された長さは15.7m，幅は20～180㎝，深さ約11.2㎝であるが，Ｇ－52区側は上位が削平により消失し底面付近のみである。断面形態はレンズ状を呈しており，南側へ向



第105図　中央部　古代～中世　溝状遺構14，15



第106図　中央部　古代～中世　溝状遺構16，17

かうに従い，やや狭く深くなる。Ⅰ－50区側から南側へ向かって緩やかに傾斜している。

⑶ **土坑**（第107，121，122図）

古代～中世の土坑は，土坑150～160の11基である。いずれもⅢｂ～Ⅳ層上面で検出され，埋土はⅢａ層の黒色土または暗褐色土である。

土坑150～155は，平面形が円形に近い小型のもの（Ⅰ類）で，浅めのもの（土坑150～154）と深めのもの（土坑155）に分かれる。土坑156，157は平面形がやや大型を呈するもの（Ⅱ類）である。土坑158，159は平面形が細長い楕円形を呈するもの（Ⅲ類）で，深さは約10㎝と浅く，埋土は黒色土の単一層である。土坑160は平面形が不定型なもの（Ⅴ類）である。底面に小ピットが１個確認された。

土坑150（第107図）

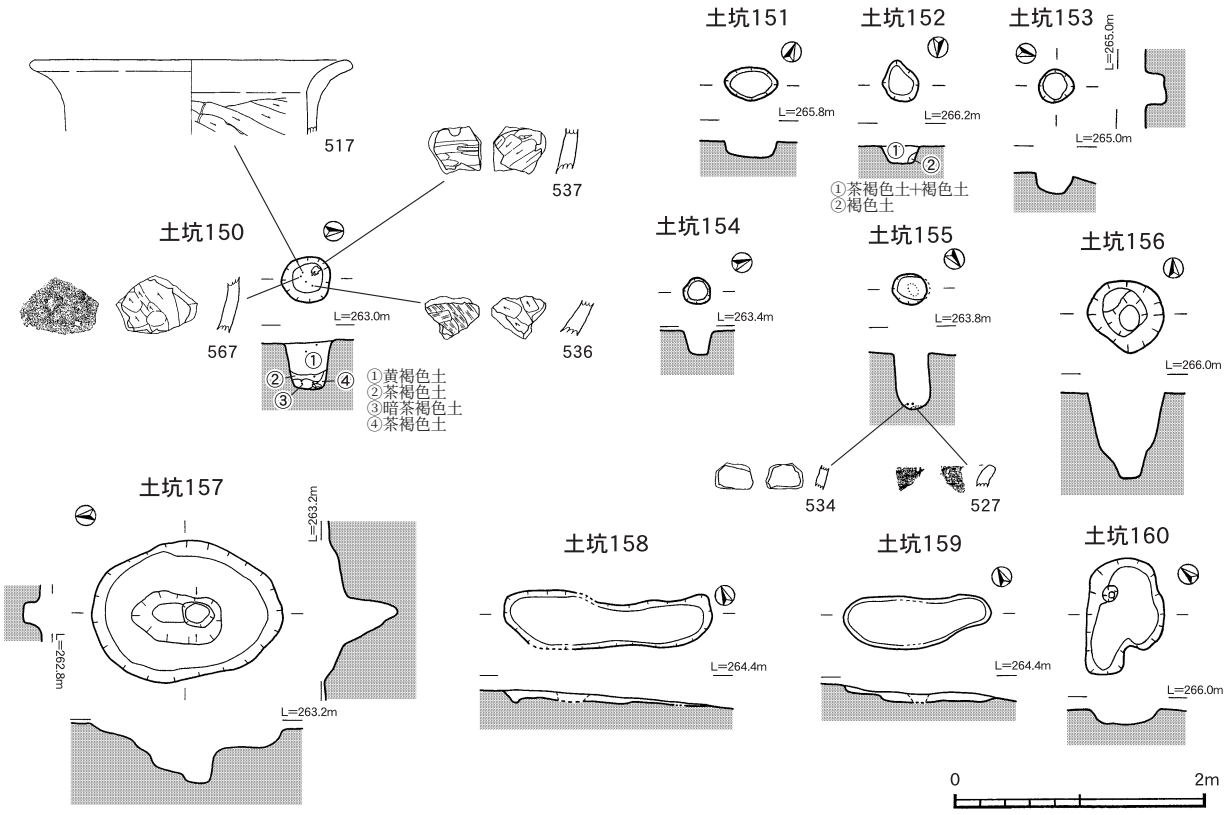
Ⅰ－47区，Ⅳ層上面で検出され，平面形は40×37㎝，深さは38㎝のほぼ円形を呈す。炭化物を含む暗黄色土の埋土中より土器片が４点出土した。（第147図517，第148図536，537，第150図567）

土坑155（第107図）

Ⅰ－48区，Ⅳ層上面で検出され，平面形は28×26㎝のほぼ円形を呈し，深さは45㎝のU字形である。暗褐色土に黄褐色土が混ざる埋土中より土器片が２点出土した。（第148図527，534）

土坑157（第107図）

Ｈ－48区Ⅳ層上面で検出された。平面形は153×113㎝の楕円形を呈し，検出面からの深さは約59㎝であるが，中央部に小ピットが確認された。小ピットは平面形24×20㎝，底面からの深さは約43㎝である。北側が崩れていることから，柱の抜き取り痕の可能性がある。



第107図　中央部　古代～中世　土坑

4　中世～近世（第108～123図）

中世～近世の遺構は，Ⅲ～Ⅳ層で古道が１条，溝状遺構９条，畝状遺構が８群，土坑52基が検出された。埋土はⅡ～Ⅲａ層が主体であるが，遺構内遺物が少なく，部分的に文明ボラと安永ボラが混在するなど明確に分けられない遺構もあることから，中世～近世の遺構として取り扱った。

17～25区，37～44区については，現代の大規模な天地返しにより地表からⅥｂ層（桜島火山灰Ｐ11）までの遺物包含層は概ね撹乱を受けていたので，中世～近世の遺構は検出されなかった。

⑴　古道（第108，122図）

中世～近世の古道は，台地東端の天地返しの影響を受けなかった部分で１条検出された。

古道11（第108，122図）

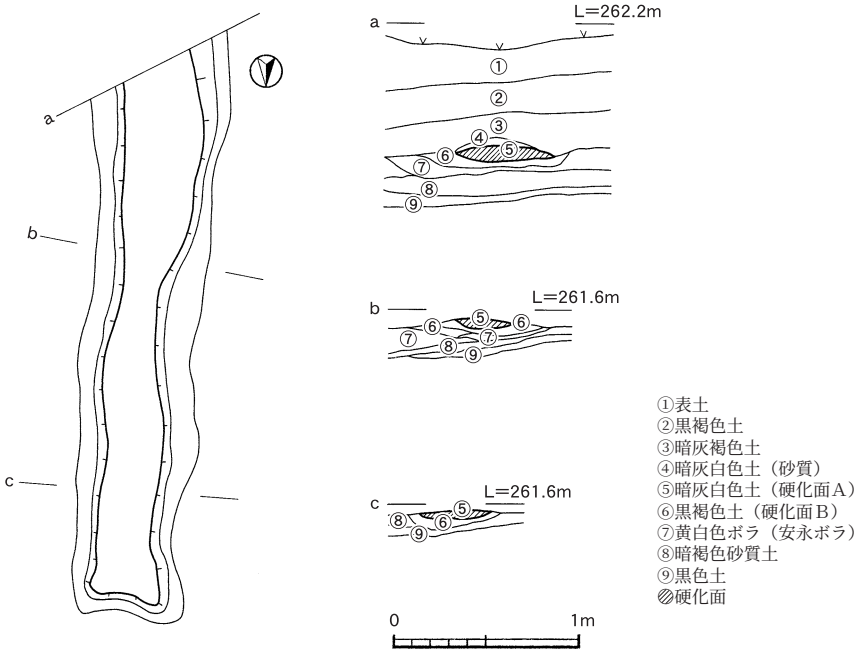
Ｌ－45区，Ｉｂ層に当たる暗灰褐色土下面にて検出された。幅30㎝弱の硬化面が略南北方向へ直線的に延びており，北側は削平されているが，南側は調査区外の谷方向へと続いている。周辺は安永ボラが層となり良好に残っている場所であり，ボラ層が古道下へ潜り込むようにして存在することから，近世の古道であると推定される。幅は30～50㎝であり，硬化面の厚さは５～８㎝である。硬くしまった面の直上には，砂質の強い暗灰白色土が残っていた。また，硬化面の下にも硬質な褐色土があり，二時期に渡り古道として使用された可能性がある。

⑵　溝状遺構（第109～111，122，123図）

中世～近世の溝状遺構は９条検出された。畠地の境界を示すためのものも見られた。

溝状遺構18（第109，123図）

Ｃ～Ｅ－21，22区で，畝状遺構６と畝状遺構７に挟まれるようにして検出された。埋土は黒褐色砂質土が中心となるが，文明ボラの二次堆積と見られる黄色ボラも含まれる。方向は略東西方向，検出された長さは19.7mであり，Ｃ－32区方向へ直線状に延びている。検出された幅は30～70㎝，深さ約12㎝であり，断面形状は皿状を呈している。しかし，溝の先端部は緩やかに立ち上がり途中



第108図　中央部　中世～近世　古道11

で途切れる場所も確認された。溝としての機能は低く排水目的と言うよりも畝状遺構６と７の境界を示す区画溝の可能性が高く，溝状遺構として区分したが溝以外の機能も考えられる。

溝状遺構19（第109，123図）

Ｈ，Ｉ－36，37区，溝状遺構18の南側約40mで検出された。方向は溝状遺構18と同じ略東西方向である。検出された長さは18.5m，幅22～80㎝，深さ約30.8㎝であり，直線的に延びている。断面形状はU字状を呈し，埋土は底面近くに細粒な黒色土が堆積している以外は，文明ボラの二次堆積と黒褐色土が主体である。溝の端部は緩やかに立ち上がり水の出口がないので，溝状遺構18と同じように排水目的と言うよりも，畝状遺構９と通路の境界を示す溝の可能性が高い。

溝状遺構20（第110，123図）

Ｌ－31区から35区へ向かって略南北方向に直線的に延び，Ｌ字状に屈曲してＭ－35区方向へ続くように検出された。検出された長さは38.6m，幅は58～144㎝，東側が大きく削平されているが，深さ約49.5㎝である。ある程度の時期差を持って２段階に掘られており，当初は畝状遺構６，７と畝状遺構８の境界を分ける，深さ20㎝程度の溝であったと思われるが，その後，高低差を無くし平坦面を広げるため畝状遺構８区域を大幅に削平し，溝部分も新たに掘り込まれ再利用されたと推定される。埋土は黒色土が主体であり，白色ボラや黄褐色土の小ブロックが混じる。

溝状遺構21（第110，123図）

Ｋ，Ｌ－35区で，溝状遺構20の屈曲部に合流するようにして検出された。検出された長さは3.7m，幅は約90㎝，溝状遺構20と同じように東側が大きく削平されているが，深さ約20㎝である。溝状遺構20の初期と同時期の溝と推定されるが，全体像は不明である。

溝状遺構22～24（第110，122図）

Ｌ－40～42区で，３条の溝状遺構が集中して略南北方向に検出された。３条とも形態が似ており，検出された長さは溝状遺構22が4.3m，溝状遺構23が７m，溝状遺構24が2.7mと異なるが，平均して幅は10～40㎝，深さ約5.2㎝である。埋土は黒褐色土が主体で文明ボラの二次堆積が混ざる。畝状遺構10の端部に沿って位置していることから，境界を示す溝の可能性が高い。

溝状遺構25（第111，122図）

Ｉ，Ｊ－45～49区で略南北方向に畝状遺構11を一部切るようにして検出された。検出された長さは36m，幅は35～70㎝，深さ約16㎝であり，やや東側に寄りながら直線状に延びている。断面形態はボウル状を呈し，埋土は褐色土が主体で，黄色ボラや白色ボラが混在している。

埋土中より２点の遺物が出土し図化した。（第147図518，第151図587）

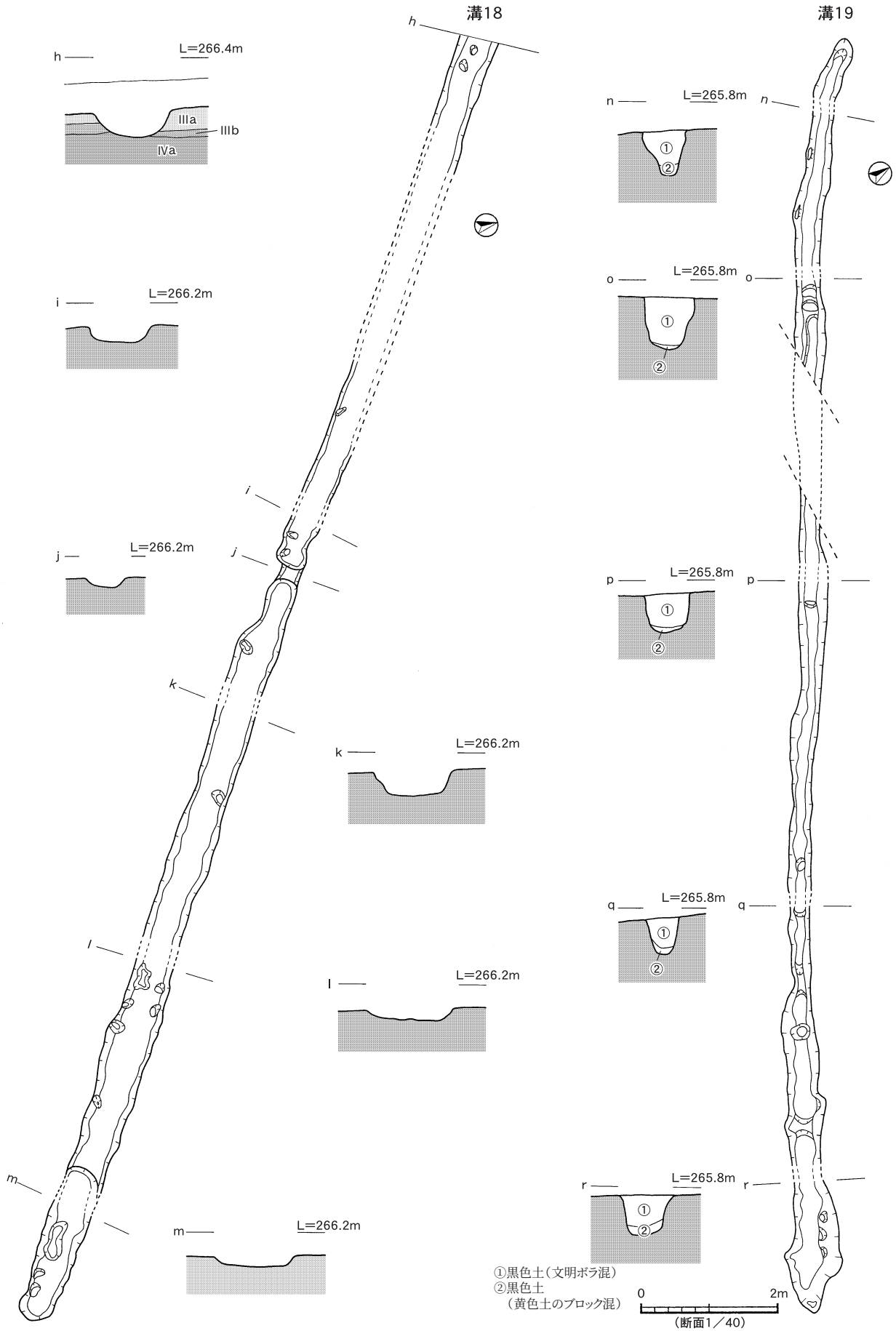
溝状遺構26（第111，122図）

Ｉ，Ｊ－45～49区で，溝状遺構25の東側に平行して検出され，一部切りながら南北方向に延びている。検出された長さは37.2m，幅は42～140㎝，深さ約18㎝であり，東側の谷へ向かって崩れる部分も見られる。埋土は砂質の強いボラを多く含んだ褐色土である。溝状遺構25，26とも，前年度の調査では確認できなかった。

埋土中より土器片が出土し，図化した。（第148図524）

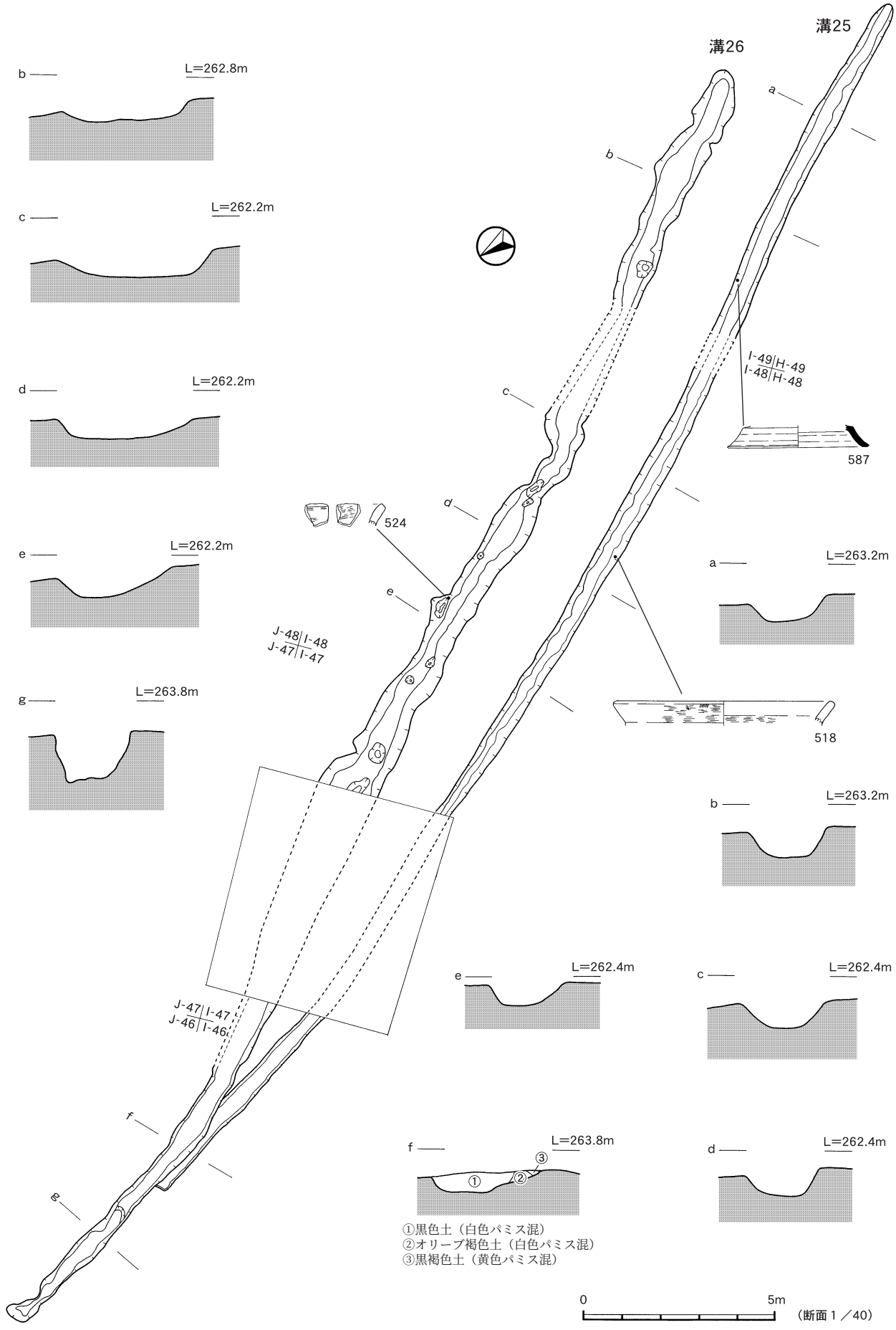
⑶　畝状遺構（第112～118，123図）

中世～近世の畝状遺構は，中央部のほぼ全域で８群検出された。



第109図　中央部　中世～近世　溝状遺構18，19

第110図　中央部　中世～近世　溝状遺構20～24



第111図　中央部　中世～近世　溝状遺構25，26

畝状遺構５（第112，123図）

Ｋ，Ｌ－25～27区のⅢ～Ⅳ層上面に，畝状遺構の一群が検出された。Ⅱ層堆積後に作られたと思われるが，その後の削平状況で検出面は異なり，やや微高地となるＥ－27区側は削平の度合いが大きく，Ⅳ層の黄褐色土面，標高が低くなるＦ－26，27区側はⅢａの黒色土面，その中間はⅢｂ層面となっている。下部のみの検出であり，畝部分については確認されなかった。検出された畝間の規模は，幅35㎝前後，深さは残存状況により10～20㎝であり断面形状がＵ字型を基本とする。底面に平坦面を持つが凸凹が多い。東北東－西南西の方向に直線的に延びた畝間は規則的に配列され，畝間の中心間の距離は50㎝弱とほぼ同じである。畝間の端は消失部分以外に確認されず，東西方向は調査区外へともに続き全体像は不明である。24区より北側は，大規模な天地返しにより確認されず，28区側は進入路により切られている。埋土は黒色土が主体で，底面に砂質の強い黄色パミスを大量に含んだ黒色土が多く，上位は黄色土やパミスの混在した黒褐色土が中心であり，黒色土や黄色土のブロックも全体的に混じる。掘り込まれた場所により黄色土，黒色土，パミスの割合は異なる。

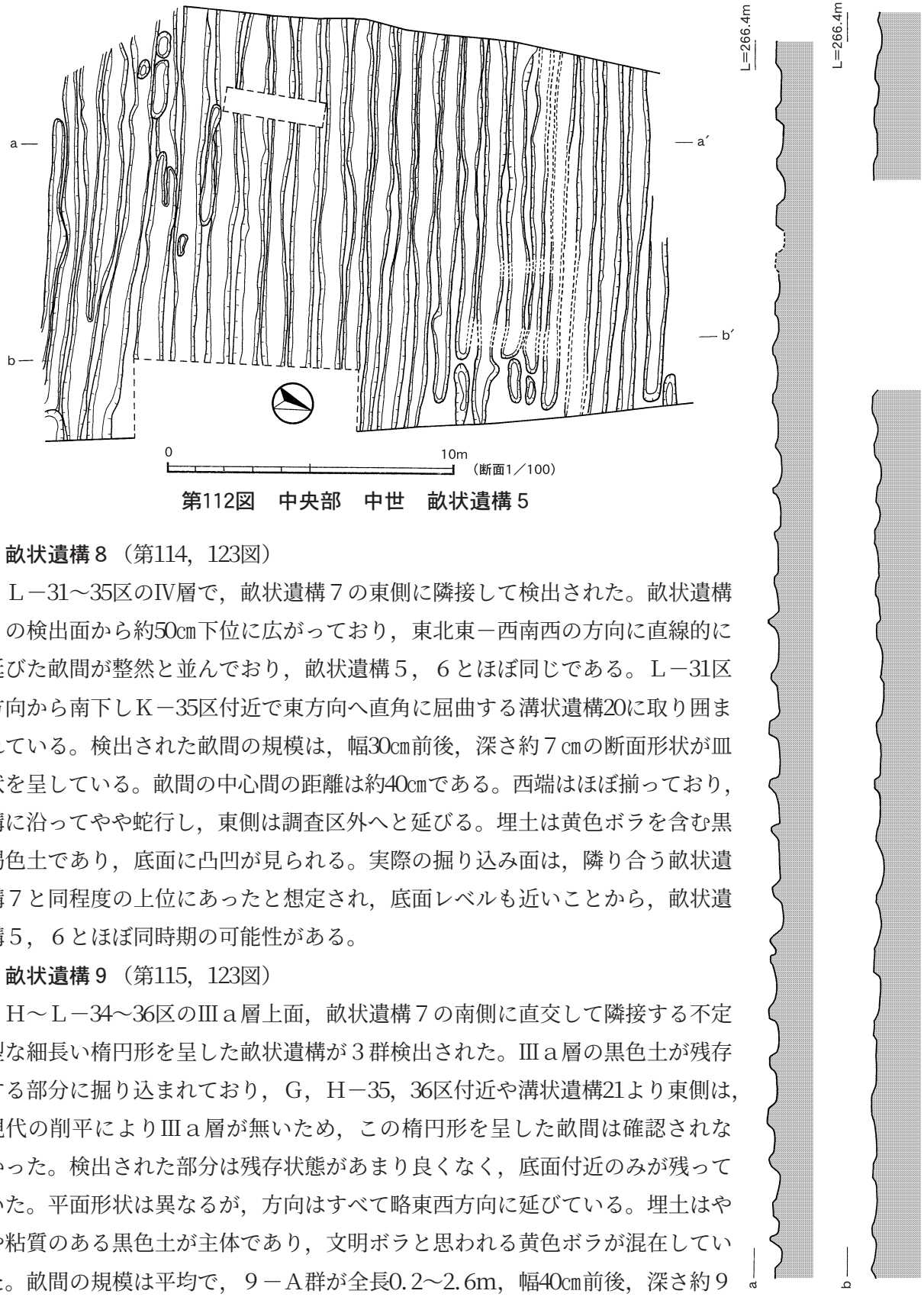
畝状遺構６（第113，123図）

Ｉ～Ｌ－28～33区のⅢ～Ⅳ層上面，畝状遺構５の南側約7.2m離れて畝状遺構の１群が検出された。東北東－西南西の方向に直線的に延びた畝間が，約960㎡の広さに規則的に配列されている。検出面は，やや微高地となるＫ－28区側は削平が大きくⅣ層の黄褐色土面，やや低くなる南側の32，33区側はⅢａの黒色土面となっている。Ｌ－32，33区ではⅡ層が良好に残っており，Ⅱ層を切るようにして検出されている。検出された畝間の規模は，幅80㎝前後，深さは残存状況により３～５㎝であり，断面形状がＵ字型を基本とする。底面の平坦面は凸凹が著しい。Ｋ，Ｌ－31，32区では，畝間の東端，西端ともに良好に残存しており，全長約14mの小溝状の畝間が規則的に並んでおり，畝間の中心間は約1.1mとほぼ同じであり，全て同規模のものと思われる。検出面がⅣ層の部分では下部のみの検出であり，消失部分が大きい。埋土は黒色土が主体で，底面付近に砂質の強い黄色パミスを大量に含んだ黒色土が多く，上位は黄色土やパミスの混在した黒褐色土が中心である。場所により黒色土や黄色土のブロック，黄色パミスの混じり方に差がある。

畝状遺構５とは進入路で断ち切られているが，畝間の方向や形状，埋土等が共通することから，同一の畝状遺構である可能性が高い。また，南側に溝状遺構18，東側に溝状遺構20が位置し，これらの溝が他の畝状遺構との区割りとなっている可能性もある。西側については調査区外へ広がることから，その詳細は明らかでない。29～32区では，上面に安永ボラを埋土とする畝状遺構12との重なりが認められ，18世紀以前に作られたものである。

畝状遺構７（第114，123図）

Ｉ～Ｋ－33～34区のⅢａ～Ⅲｂ層にて，溝状遺構18を挟んだ溝状遺構６の南側で畝状遺構の１群が検出された。また，東側は溝状遺構20を挟んで畝状遺構９とレベル差を持って隣り合う。方向は略南北方向へ規則的に配列され，溝状遺構20と平行に位置している。畝間の規模は幅30㎝前後，深さ約25㎝であり，底面に凸凹が多い平坦面を持つ。畝間の断面形状はＵ字型を基本とするが，片方が真っ直ぐに立ち上がり，もう片方は膨らみを持ちながら緩やかに立ち上がるものが多く見られる。上位は削平され底面付近のみの検出で，南北端ははっきりしないものが多い。埋土は砂質のある黒灰色土が主体で，黄色パミスや白色パミスを多く含む単一層である。



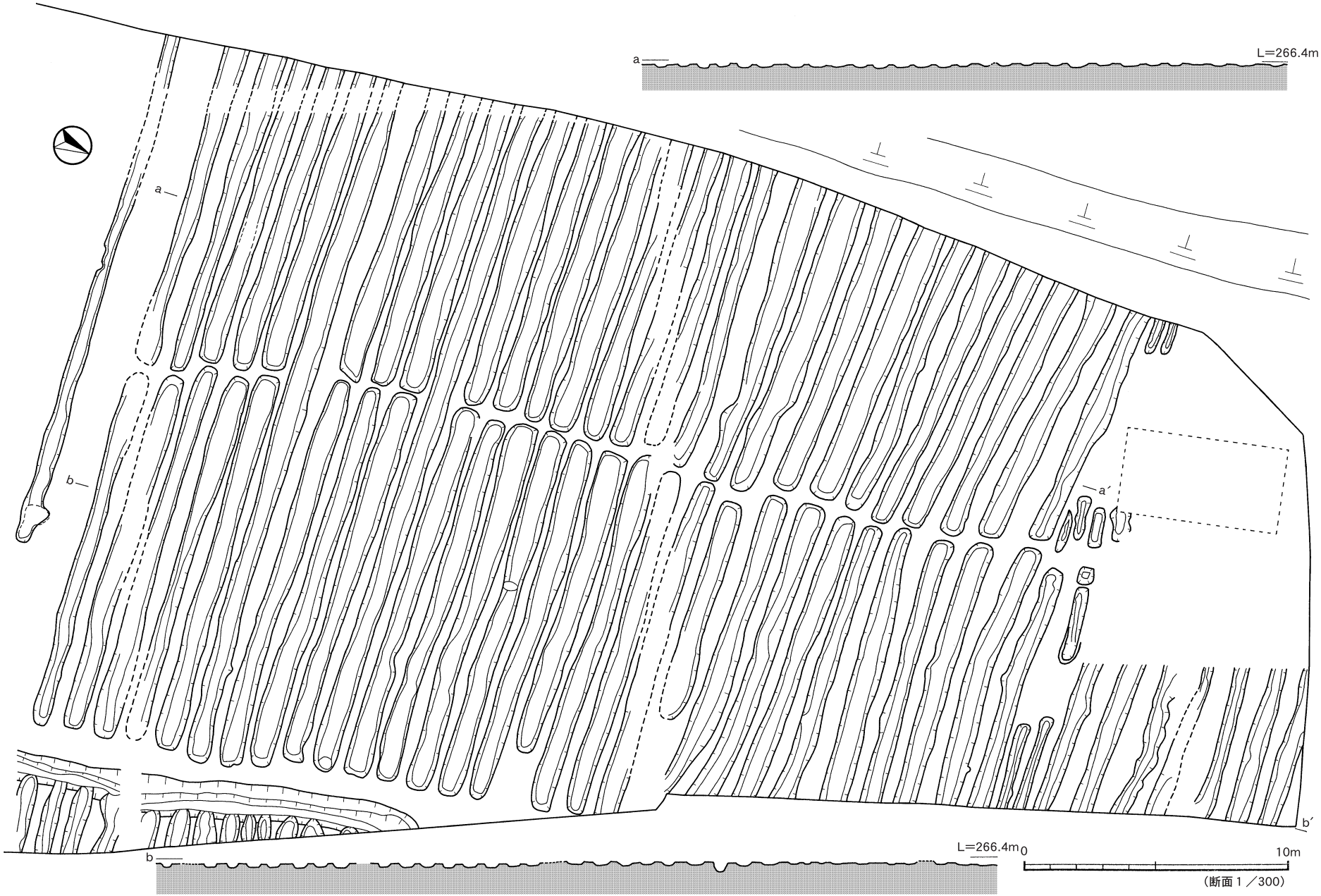
第112図　中央部　中世　畝状遺構５

畝状遺構８（第114，123図）

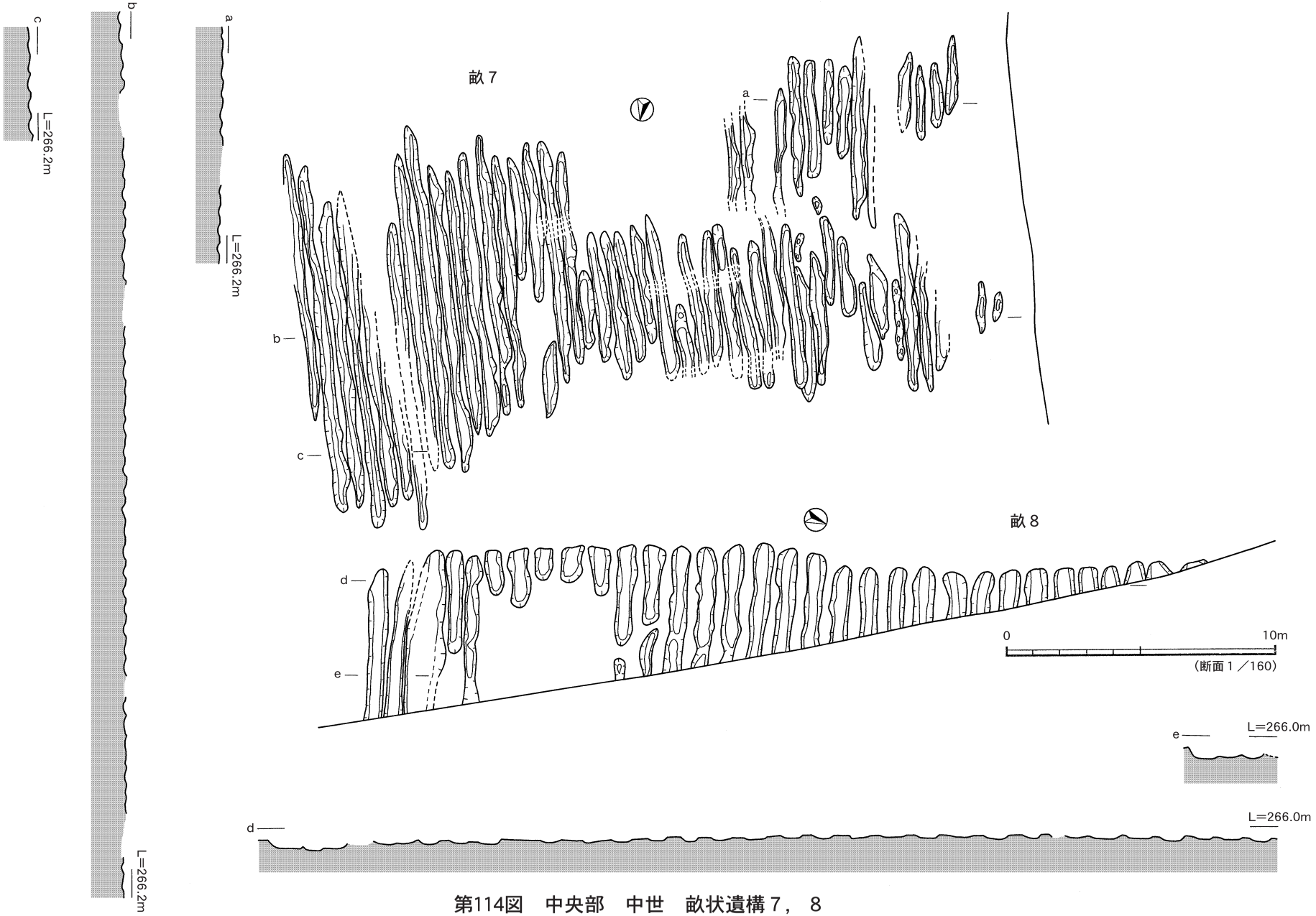
Ｌ－31～35区のⅣ層で，畝状遺構７の東側に隣接して検出された。畝状遺構７の検出面から約50㎝下位に広がっており，東北東－西南西の方向に直線的に延びた畝間が整然と並んでおり，畝状遺構５，６とほぼ同じである。Ｌ－31区方向から南下しＫ－35区付近で東方向へ直角に屈曲する溝状遺構20に取り囲まれている。検出された畝間の規模は，幅30㎝前後，深さ約７㎝の断面形状が皿状を呈している。畝間の中心間の距離は約40㎝である。西端はほぼ揃っており，溝に沿ってやや蛇行し，東側は調査区外へと延びる。埋土は黄色ボラを含む黒褐色土であり，底面に凸凹が見られる。実際の掘り込み面は，隣り合う畝状遺構７と同程度の上位にあったと想定され，底面レベルも近いことから，畝状遺構５，６とほぼ同時期の可能性がある。

畝状遺構９（第115，123図）

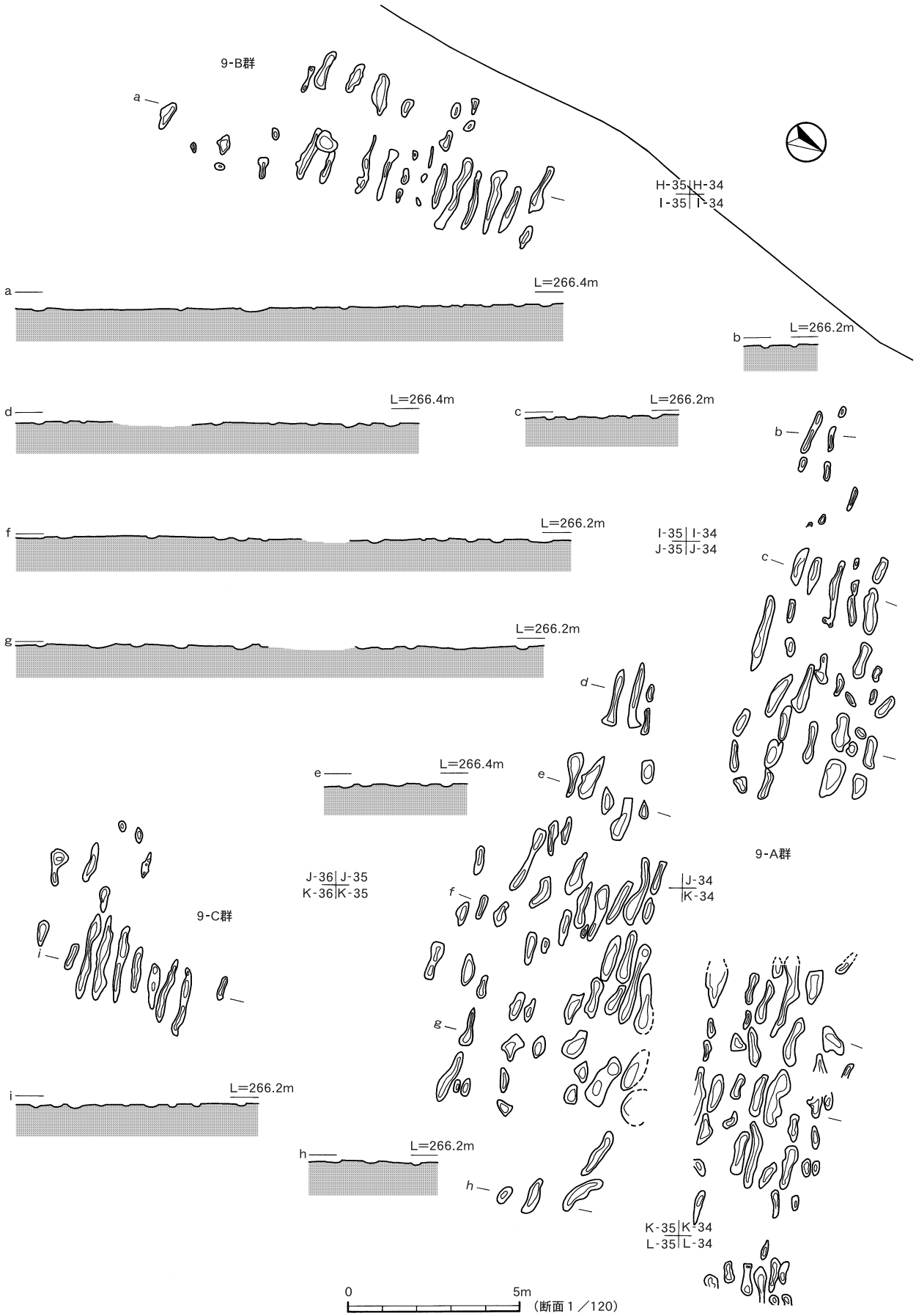
Ｈ～Ｌ－34～36区のⅢａ層上面，畝状遺構７の南側に直交して隣接する不定型な細長い楕円形を呈した畝状遺構が３群検出された。Ⅲａ層の黒色土が残存する部分に掘り込まれており，Ｇ，Ｈ－35，36区付近や溝状遺構21より東側は，現代の削平によりⅢａ層が無いため，この楕円形を呈した畝間は確認されなかった。検出された部分は残存状態があまり良くなく，底面付近のみが残っていた。平面形状は異なるが，方向はすべて略東西方向に延びている。埋土はやや粘質のある黒色土が主体であり，文明ボラと思われる黄色ボラが混在していた。畝間の規模は平均で，９－Ａ群が全長0.2～2.6m，幅40㎝前後，深さ約９㎝，畝間中心間の距離が約50㎝，９－Ｂ群が全長30～240㎝，幅40㎝前後，深さ約10㎝，畝間中心間の距離が15㎝，９－Ｃ群が全長28～244㎝，幅30㎝前後，深さ約6.8㎝，畝間中心間の距離が約60㎝である。断面形状はボウル型を呈している。ここでは直線的な畝間は確認されず，同形状の畝間がＨ～Ｌ－34～36区全域に存在したと推定される。



第113図　中央部　中世　畝状遺構６



第114図　中央部　中世　畝状遺構７，８



第115図　中央部　中世　畝状遺構９

畝状遺構10（第116，122図）

Ｌ－40～44区のⅢ層上面にて，畝状遺構が検出された。38～44区にかけては，大規模な天地返しによって撹乱を受けたエリアであったが，Ｌ－40～43区の畦道部分にのみ包含層が良好に残されていた。幅24m，長さ36mの狭小な部分であるが，調査を続けたところⅢ層上面にて畝状遺構の東端を確認することができた。畝状遺構は方向や場所により３群に分けることができる。これより各群ごとに述べる。10－Ａ群はＬ－43，44区で検出され，畝間の規模は幅60㎝前後，深さ約50㎝，断面形状が逆台形またはＵ字型を呈する。方向は略東西方向であり，直線的な細長い小溝状を呈すると思われる。東端は５～６条単位で揃っており，畝間の中心間は約１ｍである。埋土は黄色ボラ混じりの黒色土を主体とするが，上位は不安定で灰黄色砂質土や黒褐色土，黄色土ブロックなどが流れ込んでいる。10－Ｂ群はＬ－40～42区で検出され，畝間の規模は幅50㎝前後，深さ約12㎝，断面形状が浅い皿状を呈する。方向，形状，埋土は10－Ａ群と同じである。東端は溝状遺構22～24の手前で揃っており，畝間の中心間は約55㎝である。10－Ｃ群はＬ－42区で10－Ｂ群を切るようにして検出された。畝間は長さ3.2～9.4m，幅40㎝前後，深さ約40㎝の楕円形をした小溝の集まりである。埋土は白色ボラ混じりの黒色土を主体とし，黄色土ブロックやボラなどが混ざる。これらの残存状況から，以前は中世～近世の畝状遺構が38～44区にも広がっていたと推測される。

畝状遺構11（第117，122図）

Ｇ～Ｉ－49～52区のⅢａ層上面に，Ⅱ層（文明ボラ）を埋土の主体とする楕円状を呈した畝状遺構が検出された。Ｈ－50区側は削平により消失しているが，畝間の列が南側と東側の斜面を下る階段状に規則的に並んでいる。畝については凸部が見られなかった。埋土は文明ボラが主体であり，一次堆積物と，二次堆積物や細粒な黒色土がブロック状に混在しており，小規模な堆積を繰り返している。断面形状は浅い皿状を呈するものが大部分であり，底面に凸凹を持つ不定型なものが多い。畝状遺構は方向や場所により３群に分けることができ，各群ごとに記述する。

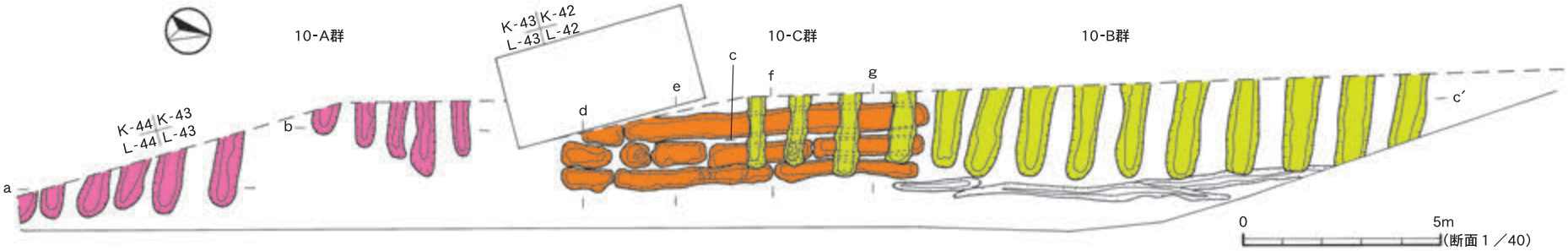
11－Ａ群は東側の谷へ向かって畝間の列が下っている。北西－南東方向に延びる畝間の規模は，全長約2.5m，幅40㎝前後，深さ約25㎝である。両端や配列は不安定である。11－Ｂ群は，南東側へ向かって下るように配置されている。畝間の規模は全長約２ｍ，幅約45㎝前後，深さ約20㎝で北東－南西方向に延びる小溝状を呈している。11－Ｃ群は，畝間の列が南側の谷へ向かって下るように配置され，３群の中で最も広範囲に検出された。検出された畝間の規模は全長約1.5m，幅35㎝，深さ約15㎝で北東－南西方向に延びる小溝状を呈している。52区以南は，削平により消失していた。

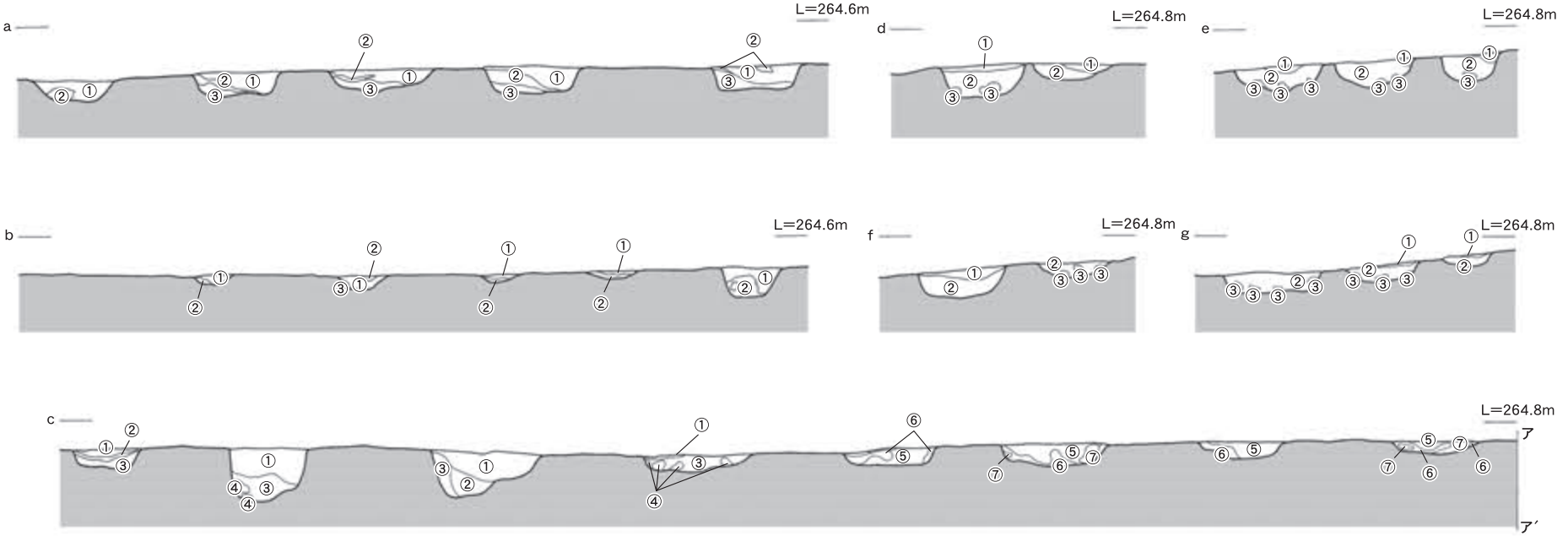
それぞれの群に切り合いが見られ概ねＣ群→Ｂ群→Ａ群の順に時間差が認められる。埋土などからほぼ同時期のものと考えられるがわずかに時間差を認めることができる。

畝状遺構12（第118，123図）

Ｉ～Ｌ－28～32区の畝状遺構６直上にて，Ｉ－ｂ層（安永ボラ）を埋土の主体とする畝状遺構が検出された。現代の耕作面直下に検出され良好な残存状況ではないが，略南北方向へ直線的に延びる畝間が筋状に確認される。畝の凸部は見られず，畝間の底面付近のみの検出である。検出された畝間の平均値は，全長約４ｍ，幅20㎝前後，深さ約25㎝である。全長は不確定であるが，畝間の南端が揃っているところもある。埋土は安永ボラを主体としている。

⑷　**土坑**（第119～123図）



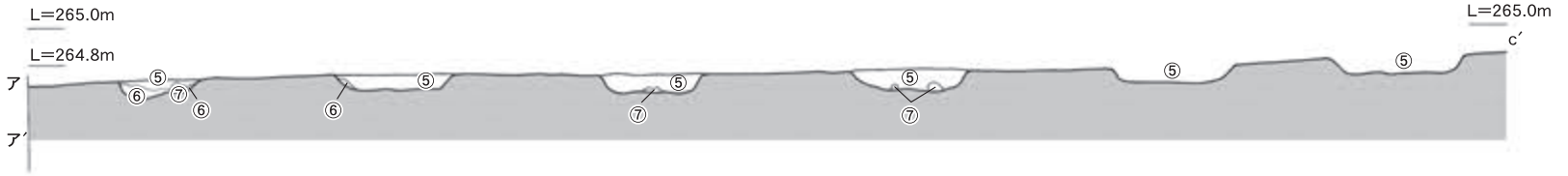


a ①黒灰色土+黄白色土(黄色ボラ混)
②灰黄色
③黒色土(黄色ボラ混)

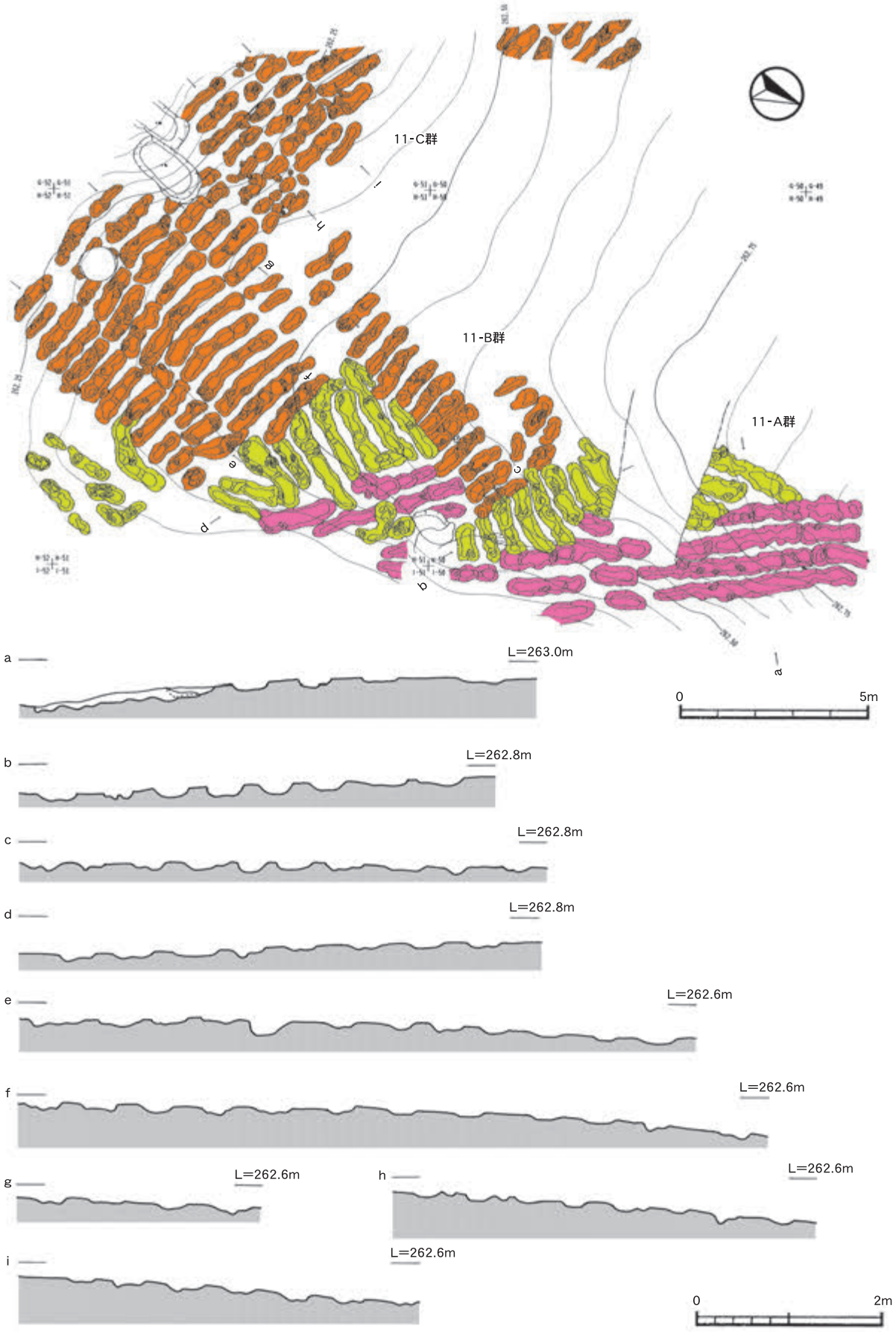
b ①黒色土(黄白色ボラ混)
②黄色ボラ(黒色土ブロック混)

c ①黒褐色土
②暗褐色土
③黒色土(黄白色ボラ混)
④黒色土
⑤黒色土(白色パミス混)
⑥黄色パミス
⑦黒色土

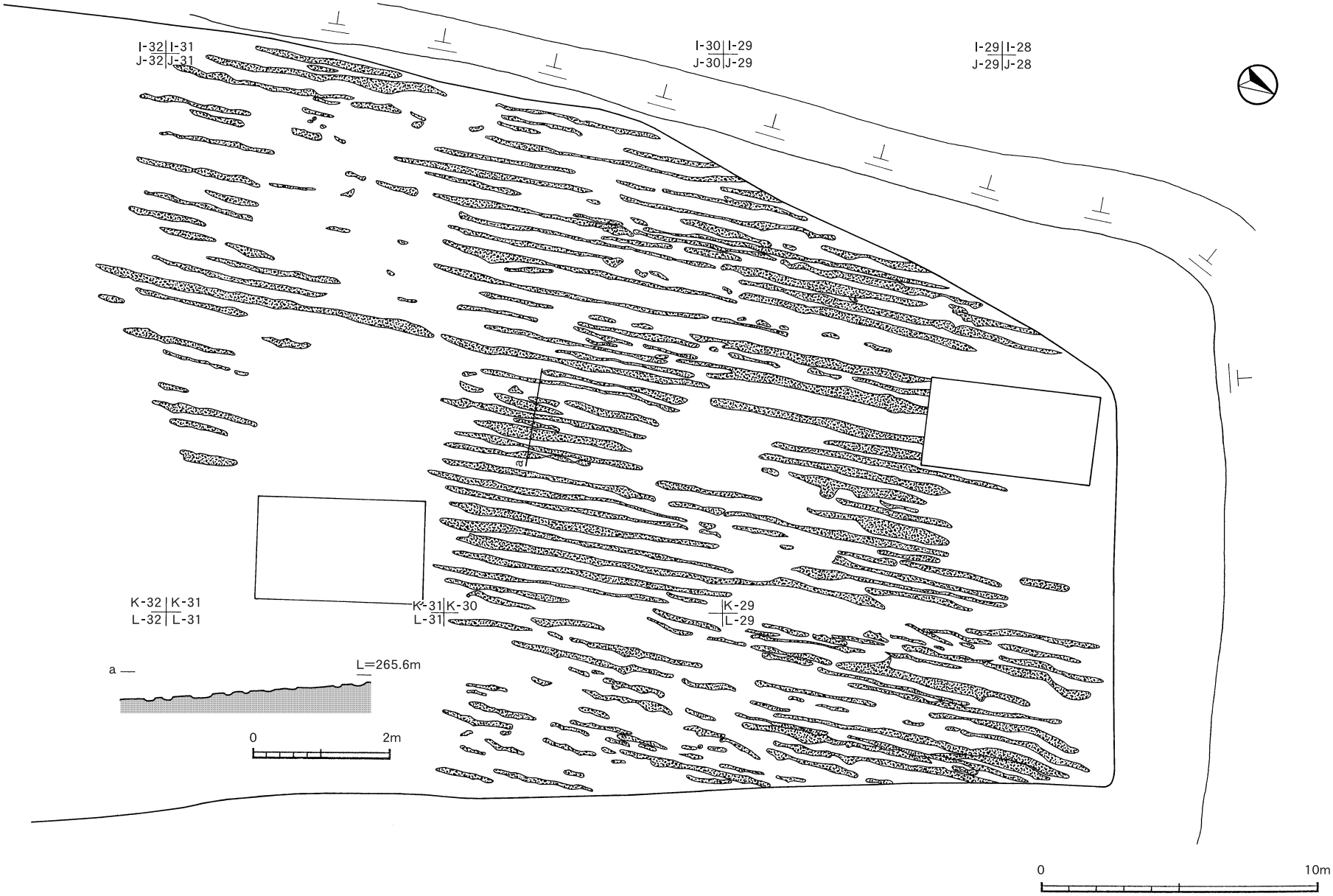
d～f
①黒灰色土 (砂質)
②黒色土(黄白色ボラ混)
③黒色土



第116図　中央部　中世　畝状遺構10



第117図　中央部　中世　畝状遺構11



第118図　中央部　近世　畝状遺構12

中世～近世の土坑は，計52基が検出された。いずれもⅢ層での検出であり，埋土は白色パミスを含む黒色土または褐色土が中心である。また，黒色土や黄褐色土などがブロック状に混在しているものも見られた。K，L－25～27区に小型の土坑の集中が見られ，J，K－29～36区に細長い楕円形を呈した土坑が集中している。大規模な天地返しによる撹乱が無ければ，調査区全域から検出されたと推測される。

土坑161～179は，平面径50㎝以下の円形（Ⅰ類）を呈する。土坑161～175は平面径の平均が30.9×25.6㎝で，深さが７～25㎝と比較的浅いものであり，土坑176～179は平面径の平均が25×24.5㎝で，深さが31～32㎝とやや深いものである。ともに埋土は白色パミスを含む黒色土が主体であるが，白色パミスの混ざり方は均一ではなく，上位と下位で異なるものもある。土坑163以外は，断面形態が逆台形またはU字型を呈する。

土坑180～183は，平面径が１m前後のやや大型のもの（Ⅱ類）であり，平面径の平均は97.2×84.2㎝で，ほぼ円形を呈する。深さ18～33㎝で，土坑183以外は浅めである。

土坑184～209は，楕円形を呈するもの（Ⅲ類）である。その中で，短めのものと細長いものに分けることができる。土坑184～195は，平面径の平均が151.5×67.1㎝で，深さが８～40㎝と長径が１～２m前後のものである。断面形状は床面から緩やかに立ち上がる皿状またはレンズ状を呈するものが大半を占め，土坑195は不定型なボウル状を呈す。土坑191，192は一部消失しており，全体像は不明である。土坑196～209は，平面径の平均が277.3×62.5㎝で，深さが10～38㎝と長径が３～４m前後もある細長い楕円形を呈するものであり，土坑202，204のように長方形に近いものも含まれる。底面に平坦面を持つ断面形状が皿状を呈するものが多く，貯蔵目的の土坑である可能性が高い。

土坑210～212は不定型なもので，平均は248.3×47㎝で，深さが40～116㎝である。土坑210は底面に小ピットを持ち，径が10㎝程度の柱を抜き取った可能性がある。土坑211，212は当初溝状遺構として取り扱っていたが，つながっておらず隣接した土坑として掲載した。

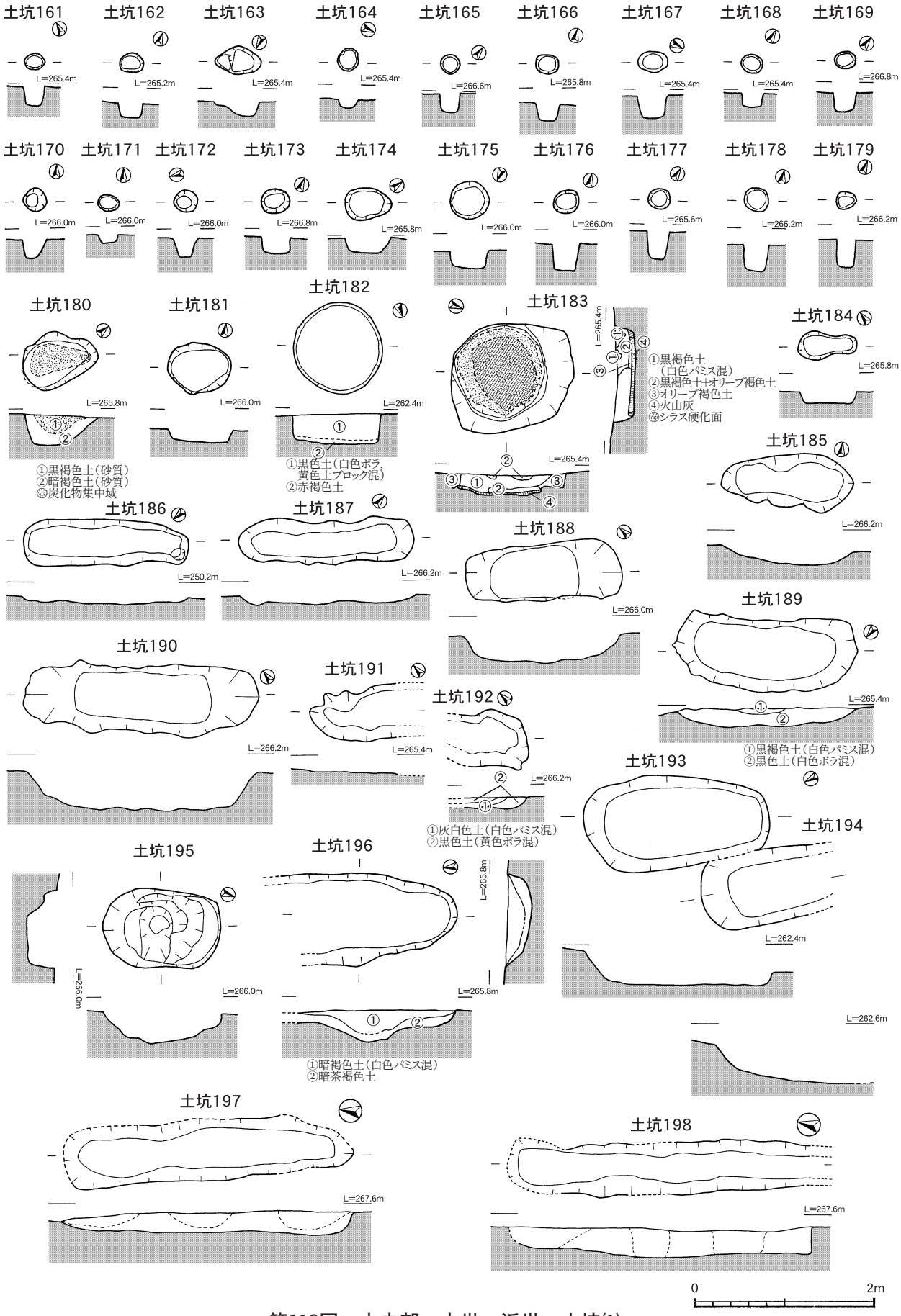
安永ボラを含む埋土から時期的な前後関係を特定することは困難であるが，遺構の切り合い状況から時期差を特定することができるものもある。すべて現代の畑面の下部から検出されており，大規模な文明ボラのボラ抜き後に作られた畝状遺構を切るもの，逆に畝状遺構に切られているものもある。このことから同じ中世～近世の土坑群として取り扱ったが，多少の時間差がある。

土坑182（第119図）

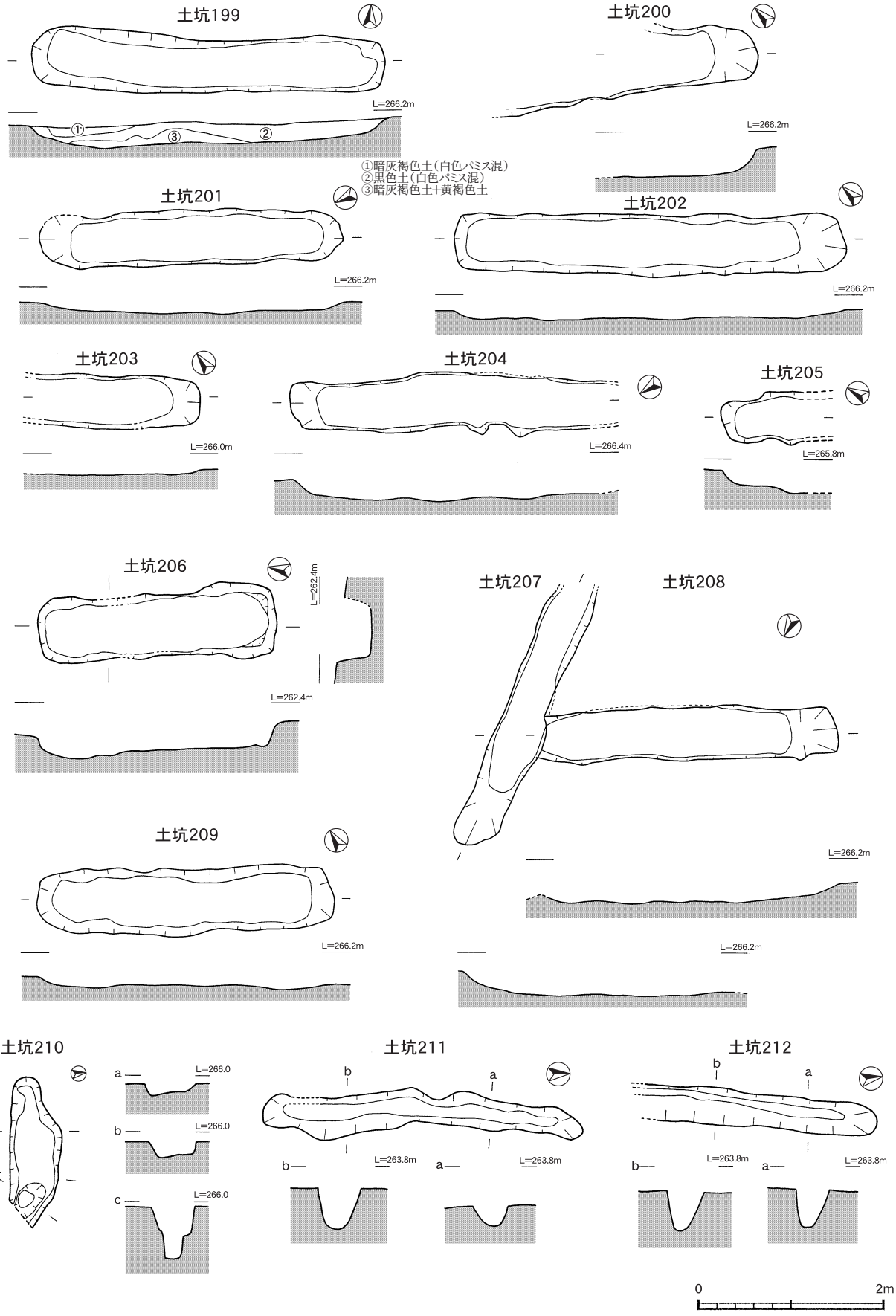
Ⅰ－51区のⅢａ層上面で検出された。平面形は100×96㎝の円形を呈し，検出面からの深さは32㎝である。埋土は白色ボラ混じりの黒褐色土であり，底面に赤橙色をした変色が見られた。

土坑183（第119図）

K－38区のⅣ層上面で検出された。平面形は137×119㎝のほぼ円形を呈し，検出面からの深さは19㎝である。断面形状は長方形を呈し，底面に平坦面を持つ。埋土は黒褐色土が主体であり，底面付近に円盤状の硬化面が確認された。硬化面の平面形85×70㎝，厚さ２～４㎝であり，土坑の底面全体にシラスが敷き詰められたものと思われる。硬化面の表面はピンク色に変色しており，粒子が細かく粘性を持つため，焼成を受けた可能性がある。



第119図　中央部　中世～近世　土坑(1)

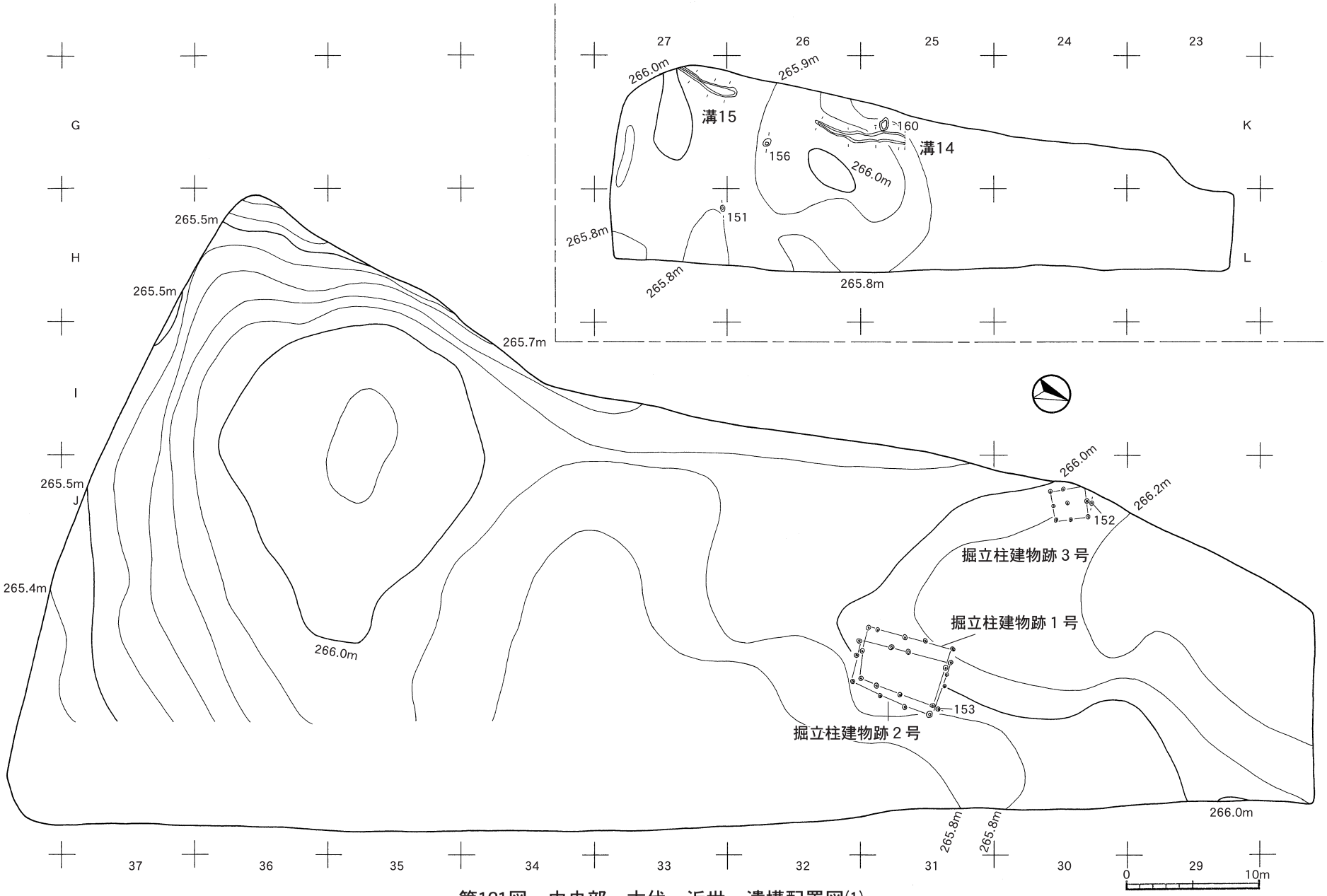


第120図　中央部　中世～近世　土坑(2)

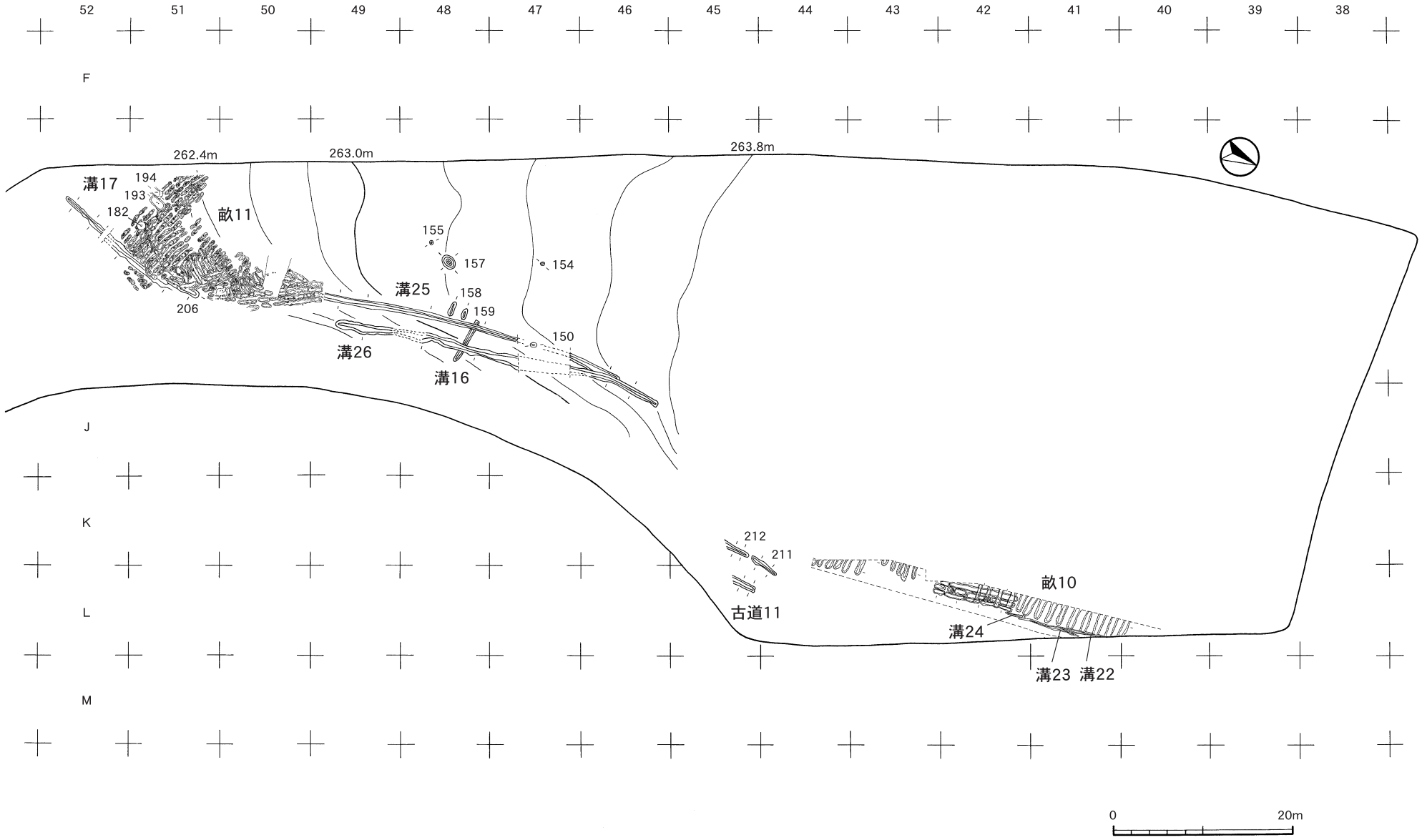
第15表　中央部　土坑計測表

土坑番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
127	63	57	19
128	50	47	32
129	70	61	28
130	72	46	11
131	103	76	21
132	109	51	24
133	83	48	25
134	94	53	21
135	109	46	19
136	134	72	33
137	25	20	17
138	29	28	18
139	23	19	14
140	14	13	15
141	35	29	11
142	35	32	21
143	34	33	38
144	50	38	30
145	66	65	25
146	48	44	50
147	18	18	34
148	107	91	26
149	140	45	22
150	40	37	38
151	43	22	16
152	34	39	13
153	29	23	14
154	22	22	20
155	28	26	45
156	61	56	69
157	153	113	59
158	167	46	30
159	117	41	20
160	82	62	13
161	24	18	21
162	26	22	17
163	52	32	17
164	26	26	7
165	22	22	21
166	26	22	20
167	34	24	25
168	25	21	15
169	25	20	21

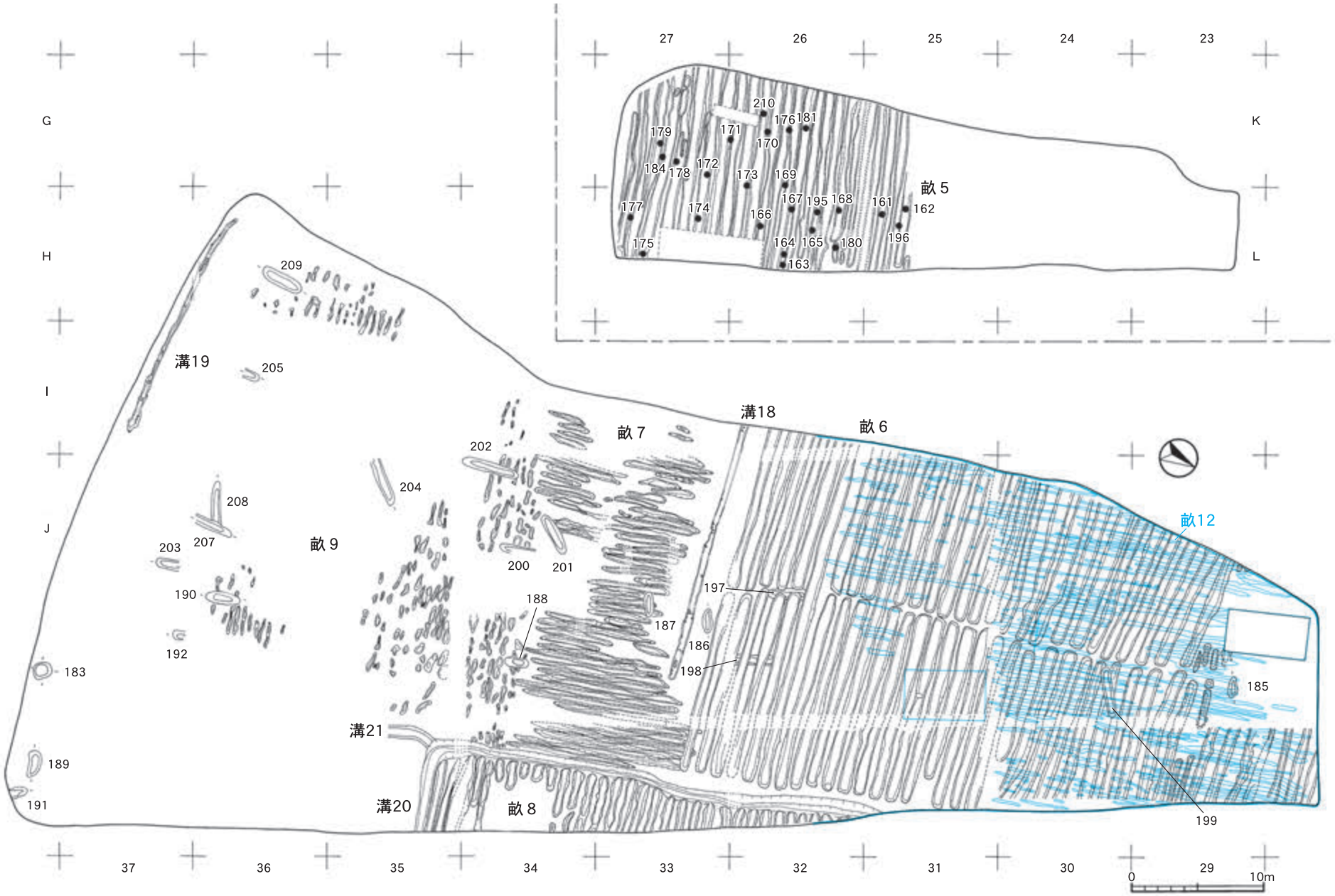
土坑番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
170	28	27	21
171	23	18	9
172	27	25	23
173	31	29	19
174	51	36	16
175	44	42	20
176	30	28	32
177	24	23	32
178	28	28	31
179	20	20	32
180	81	64	33
181	71	58	18
182	100	96	32
183	137	119	19
184	64	32	14
185	144	64	18
186	182	51	13
187	195	48	10
188	171	64	30
189	250	80	20
190	255	75	40
191	100	60	8
192	69	60	12
193	204	103	28
194	127	84	25
195	130	85	33
196	176	103	35
197	316	69	25
198	334	55	28
199	375	54	19
200	155	55	38
201	322	55	13
202	415	64	10
203	170	55	10
204	305	65	28
205	88	44	25
206	256	83	25
207	295	54	20
208	358	54	20
209	317	65	12
210	162	55	116
211	333	46	40
212	250	40	40



第121図　中央部　古代～近世　遺構配置図(1)



第122図　中央部　古代～近世　遺構配置図(2)



第123図　中央部　古代～近世　遺構配置図(3)

第４節　出土土器

中央部の出土遺物点数は，狩俣遺跡全体の約３割にあたる1,878個であり，南部調査区の次に多い。しかし，南部には縄文時代の出土遺物がほとんどなく，古代遺物の小破片が含まれることから，縄文時代に関しては本遺跡の中心となっている。

全域が現在畑地として使われていたことから，上部の削平やボラ抜き，大規模な天地返しなどの耕地整理が行われ，大部分が表土（耕作土）直下にⅣ層が堆積している状態であった。大規模な天地返しは概ねⅥｂ層まで達し，縄文時代前期までの遺物包含層は消失している状態であった。縄文時代早期の遺物包含層であるⅦ，Ⅷ層は良好に残されており，土器や石器が中央部調査区のほぼ全域で出土している。

出土遺物は，縄文時代早期と晩期が主体で前期・後期の土器もわずかにみられた。中央部の南側では，削平を受けずにⅠ～Ⅲ層が残っている部分も多く，古代の遺物も多く出土した。

その他に古墳時代，中世，近世の遺物も少量であるが出土している。

１　縄文時代（第124～144図183～475）

縄文時代の土器は，本遺跡で分類した17類中16類が出土している。

⑴　縄文時代早期（第124～134図183～353）

縄文時代早期の土器は，Ⅰ～Ⅻ類が出土した。

Ⅰ類土器（第124～127図183～263）

183～263はⅠ類土器で，全て円筒形を呈している。Ⅰａ類（183～227）とⅠｂ類（228～252）に細分できる。

Ⅰａ類は総じて，口縁部外面を貝腹縁あるいはヘラ状工具で連続して刻み，端部は波状を呈しながら尖り気味に立ち上がり，189のように押圧する例もある。

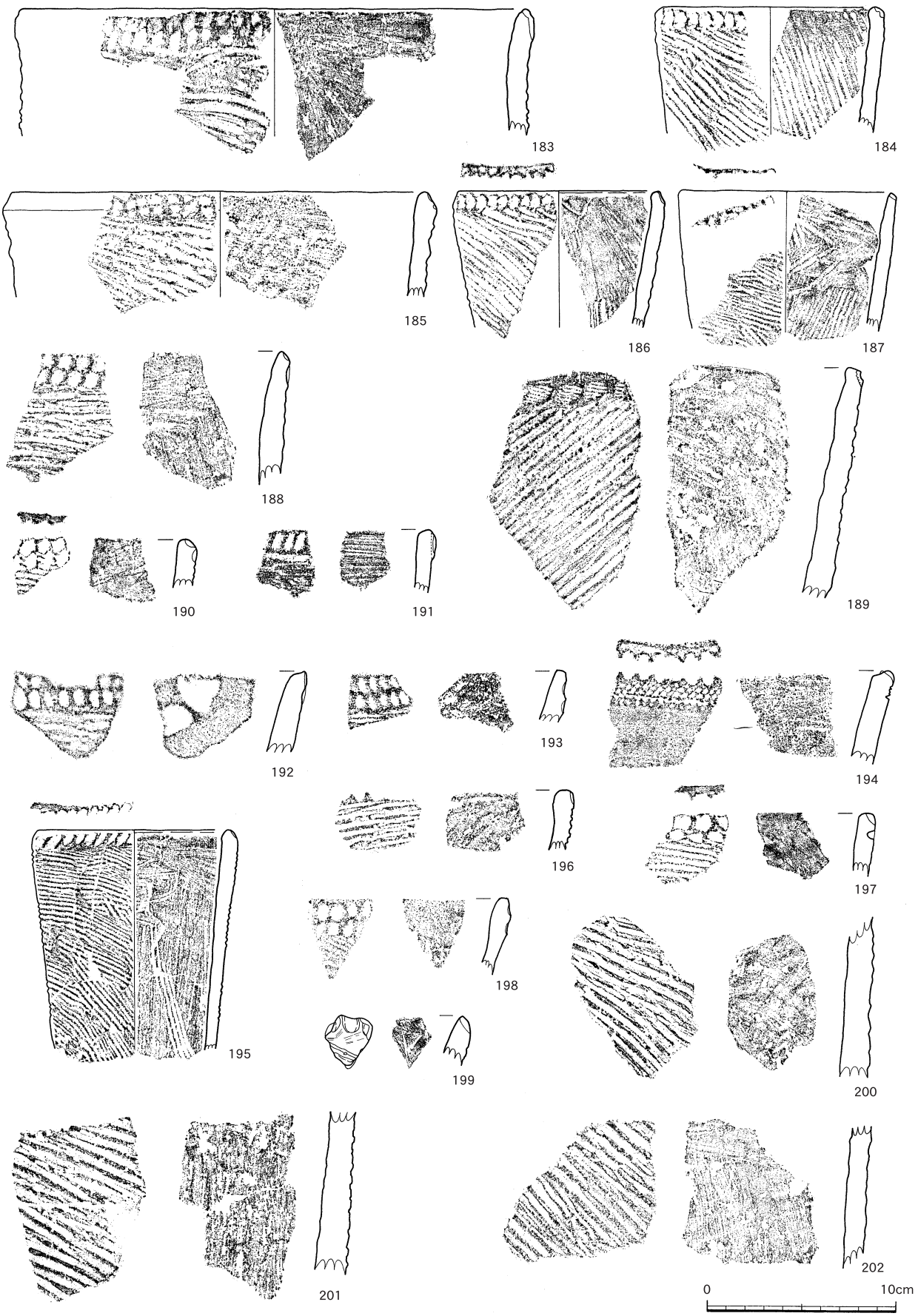
183の復元口径は27.0㎝で，口縁端部はヘラ状工具で上下２段に刻まれ，胴部は粗い条痕に仕上げている。なお188も同様な特徴が認められる。

184～187は貝殻腹縁で刻まれ，184で11.4㎝，185で22.0㎝，186で10.8㎝，187で11.2㎝の口径が復元できる。189は二枚貝の殻頂部を浅く連続して押圧している。なお，他の土器の器面調整が右下がりの条痕仕上げであるのに対し，本例は左下がり仕上げの個性が抽出できる。

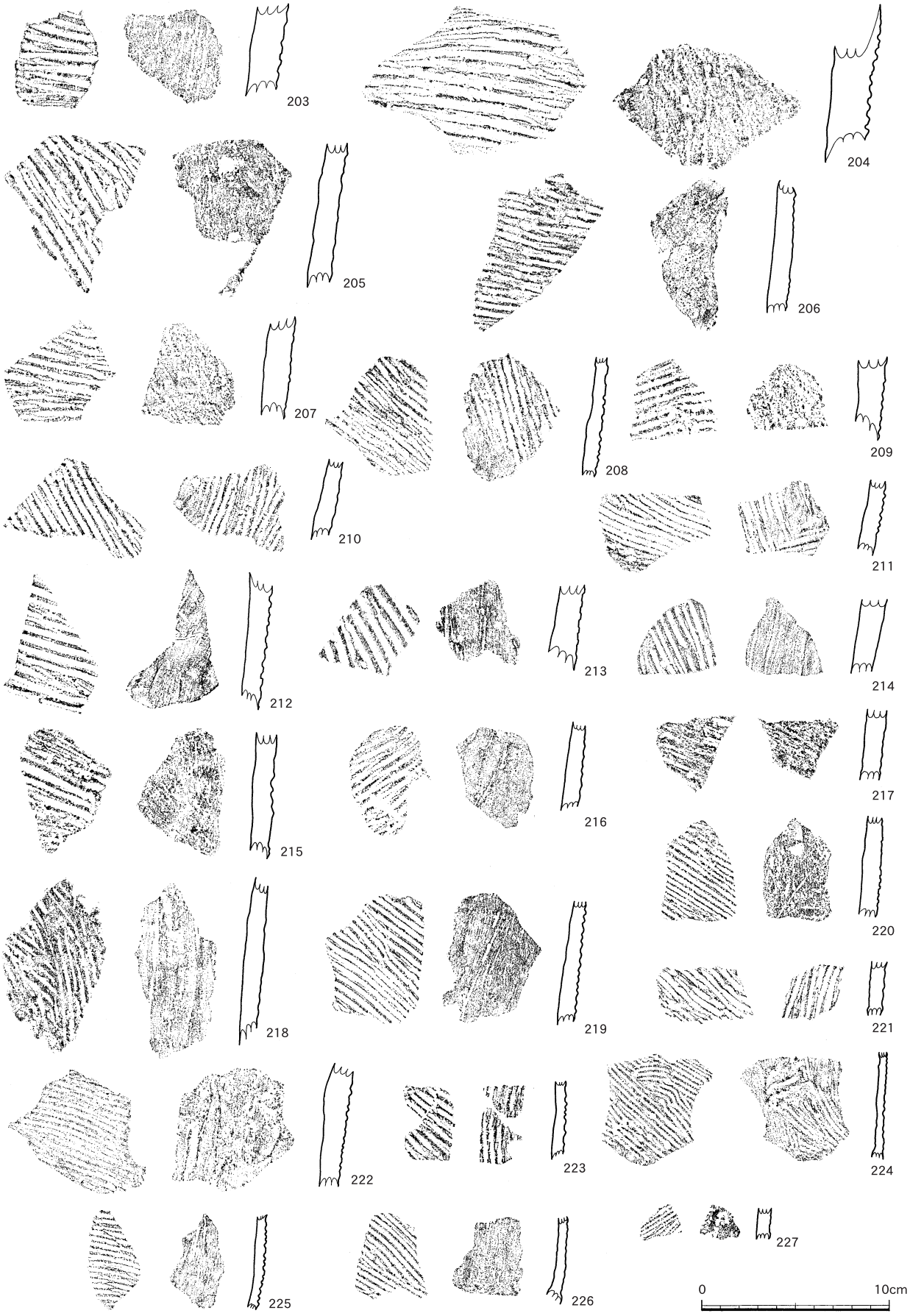
190は貝殻腹縁による二段の刺突文を平行に交互に面しながら，191～193，195，196ではヘラ状工具を用いている。194は口縁端部（口唇部外面）をヘラ状工具で深く刻み，その直下に横位の貝殻腹縁刺突文を３列施し，器面は丁寧にナデて仕上げている。195の復元口径は10.2㎝で，器面は筋間の小さい貝殻による条痕仕上げが見られる。胴部200～227は条痕仕上げで，内面は条痕仕上げとヘラ削りが拮抗する。

Ⅰｂ類は，口縁部外面をヘラ状工具で連続して刻み（刺突文），基本的に口唇部は平坦を形成し，228，231等ではその平坦面が浅く刻まれる。また，器面は横位の条痕仕上げが一般的となる。復元口縁は228で径17.0㎝，229で12.6㎝，230で11.6㎝，231で10.4㎝。228では特徴的な沈線文が見られる。なお，229，230，232では，刺突文の下位に平行する貝殻腹縁刺突文が施される。233～252の胴部はいずれも横位の貝殻条痕で仕上げている。

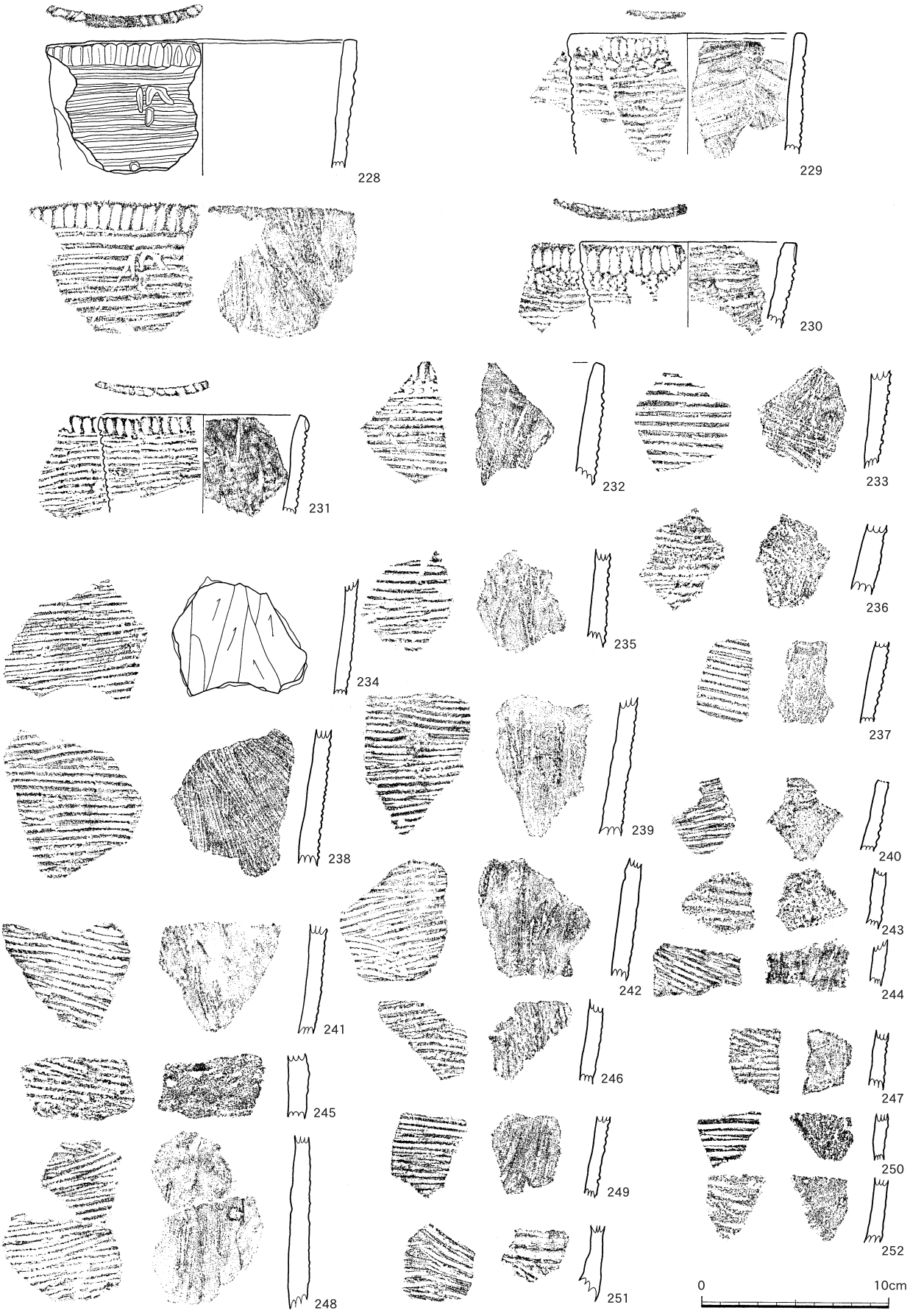
255～263はⅠ類土器の底部であるが，ａ類とｂ類の区分は困難である。255，259の接地面は薄く，



第124図　中央部　縄文時代早期の土器（Ⅰａ類①）



第125図　中央部　縄文時代早期の土器（Ⅰａ類②）



第126図　中央部　縄文時代早期の土器（Ⅰｂ類）

257，258では厚い。258では内外面全てを条痕で仕上げ，259では内面はナデ，外面は条痕で仕上げている。

256，257の内面は指頭ナデで仕上げ，256には穿孔が施される。

Ⅱ類土器（第128図264～271）

264～271がⅡ類土器で，角筒形土器を一括している。

264，265は山形を呈する角筒の頂部で，口縁部外面に縦位の貝殻腹縁刺突文を規則的に施し，胴部は横位の条痕地文上に斜位の沈線文及び貝殻刺突文が施される。

267は角筒形土器の接合部の頂部に貝殻刺突文，268，269は波状沈線文が界線状に施文される。

Ⅲ類土器（第128図272）

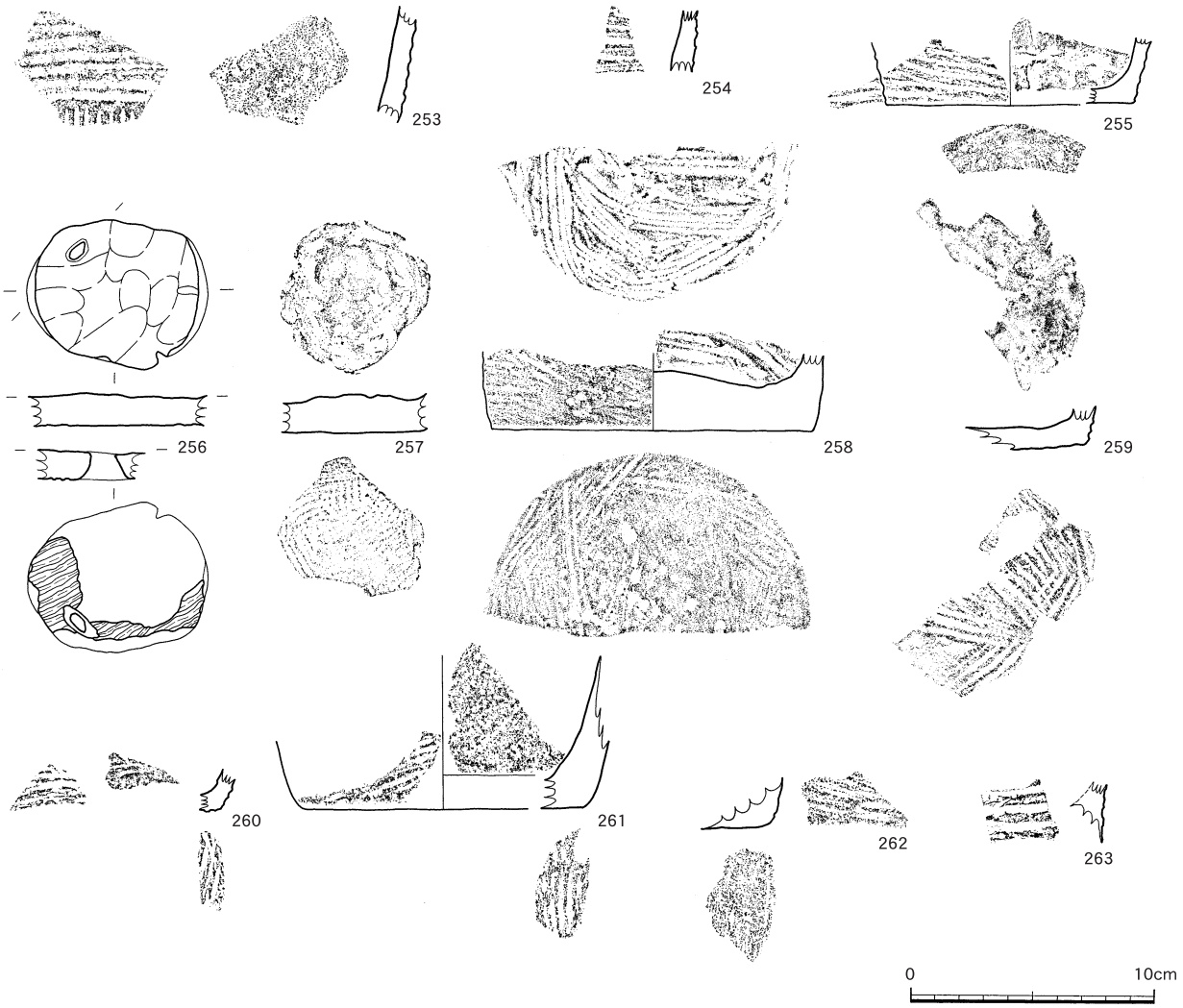
272の１点だけである。胴部に連続する貝殻刺突文を施すものである。

Ⅳ類土器（第128図273，274）

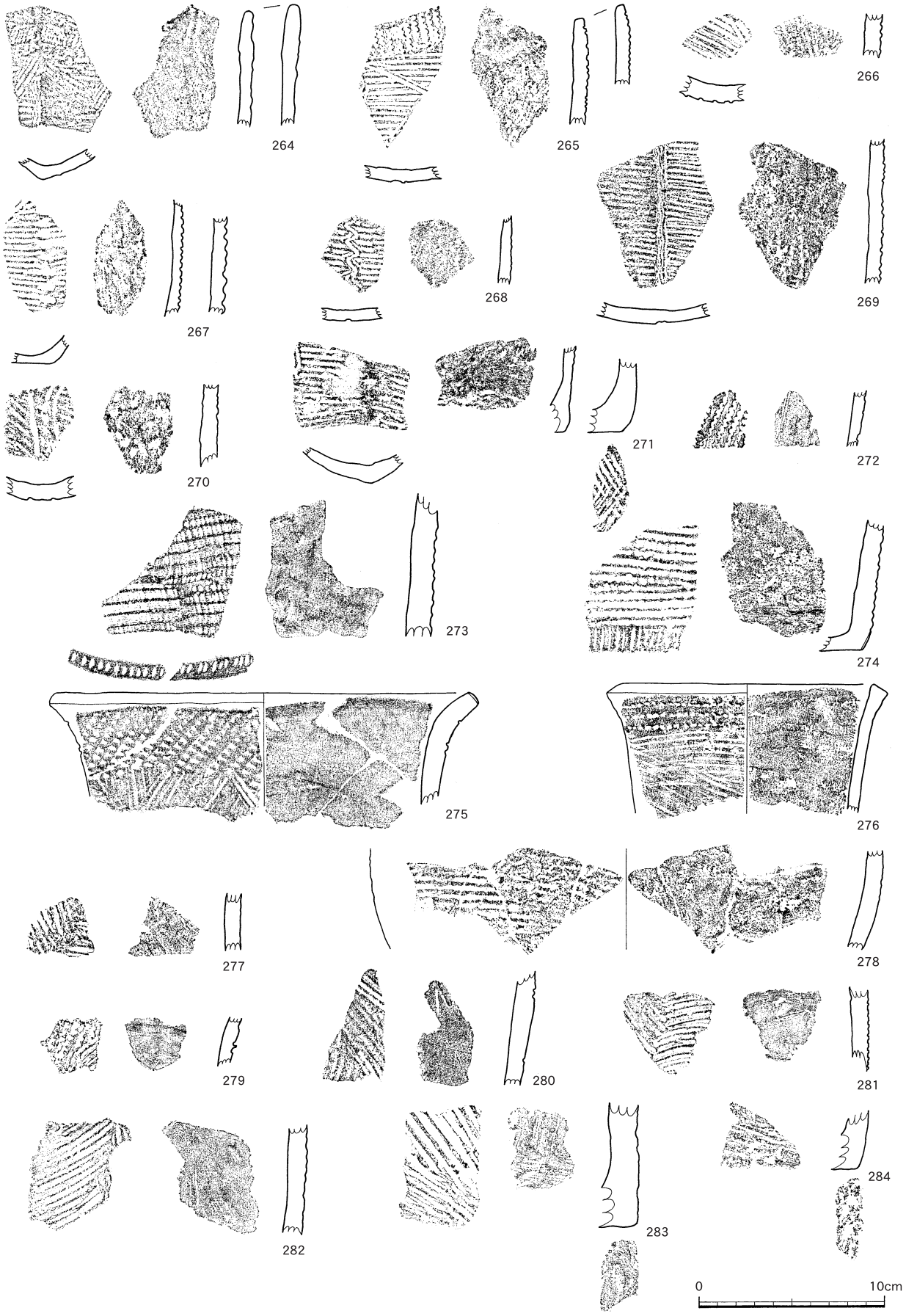
273と274の２点である。いずれも胴部に横位の貝殻押引文を施す。274は底部で下位に縦位の沈線文を施す。

Ⅴ類土器（第128図275～284）

275～284はⅤ類土器である。275は復元口縁径23.2㎝を測る。口縁部は外反し口唇部には刻目が



第127図　中央部　縄文時代早期の土器（Ⅰ類）



第128図　中央部　縄文時代早期の土期（Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ類）

見られる。口縁部には斜位の貝殻刺突文，胴部には綾杉状の貝殻条痕文を施す。

276は口縁部の外反が弱いものである。口縁部には横位の貝殻刺突文，胴部には上位は横位，その下は斜位の貝殻条痕文を施す。

277は口縁部に近い部位で斜位の貝殻刺突文を施す。278は横位の貝殻条痕文，279～282は綾杉状の貝殻条痕文を施す。

283，284は底部で，いずれも斜位の貝殻条痕文を施すものである。

Ⅵ類土器（第129図285～302）

285～302が該当する。Ⅵ類土器の最大の特徴は器壁が厚く，口縁部上位が内弯する形状で且つ，口唇部が平坦面を形成し，底部も分厚く頑丈に作られていることである。口縁部形状の特徴は285，286で，口唇部の特徴は285，287で，底部は302等で見ることができる。

285の復元口径は22.2㎝で，口縁部下位から胴部上位に３列の貝殻刺突文を，それらの下位には縦位の貝殻腹縁刺突文を横方向に連続して施し，押し引き文様に施文される。

286の胴部には，貝殻腹縁刺突文を横位に移動しながら鋸歯状の刺突文を構成している。

287は鋸歯状を重ね綾杉文を，298もそれに類している。292～300の胴部には横及び斜位の貝殻腹縁刺突文が直線的に施される。

Ⅶ類土器（第129図303～305）

303～305はⅦ類土器である。

303は口縁部で横位の貝殻条痕文が施されている。305は横位及び縦位の貝殻条痕文が施される。

Ⅷ類土器（第129図306）

306の１点のみである。細かいヘラ状工具による斜格子状の文様が施される。底部近くであるが，型式の判明しないものである。

Ⅸ類土器（第130，131図307～338）

307～338はⅨ類土器である。

307～326の押型文を施すⅨａ類と，327～338の押型文と貝殻条痕文の２種類の文様を施すⅨｂ類に分けられる。

307は内弯する口縁部で山形押型文を施す。308，309は口縁部が外反するもので，内面に山形押型文を施すが，外面はナデ調整である。

310～314は外面に山形押型文を施す。315～323は外面に楕円押型文を施すものであるが，315，316，320は細い楕円押型文で，317～319，321，323は大きめの楕円押型文である。

324～326はいわゆる「イチゴ」と呼ばれる押型文土器である，松の木等のような突起物を持つ枝を回転施文したものと考えられている。

327～338は同一個体と思われるものである。口縁部はあまり外反せず，胴部も膨らまない器形で，底部は平底である。口縁部から胴部中位までは貝殻条痕文，中位から底部までは山形押型文と２種類の文様を施す特異なものである。底部は網代底である。

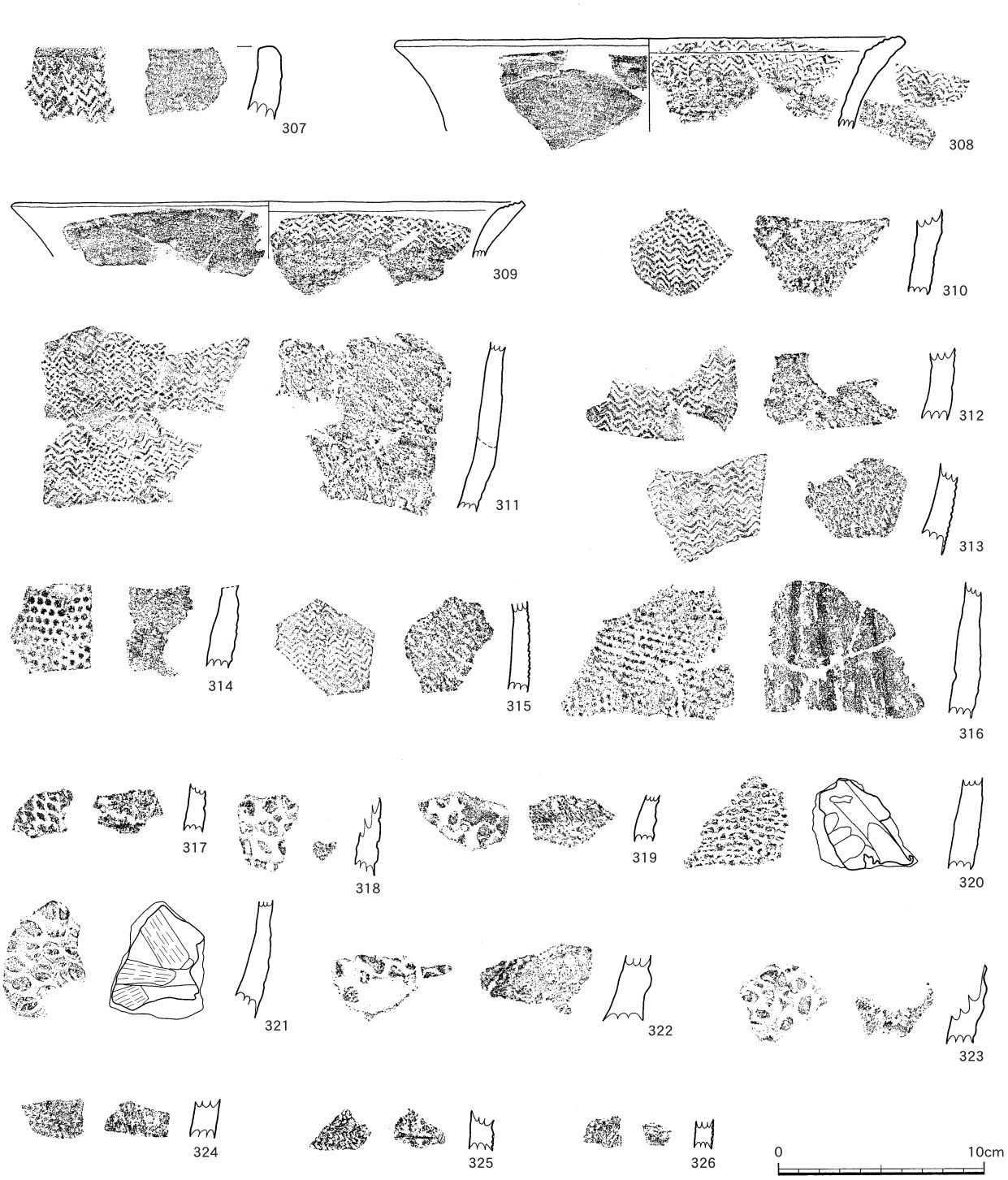
Ⅹ類土器（第132～134図339，340）

339はⅩ類土器である。底部径4.8㎝，口縁部径22.6㎝，器高21.0㎝を測る。底部はやや小さく，わずかに上げ底を呈する。胴部は膨らみ頸部でしまり，口縁部は大きく外反する。外面には縄文が

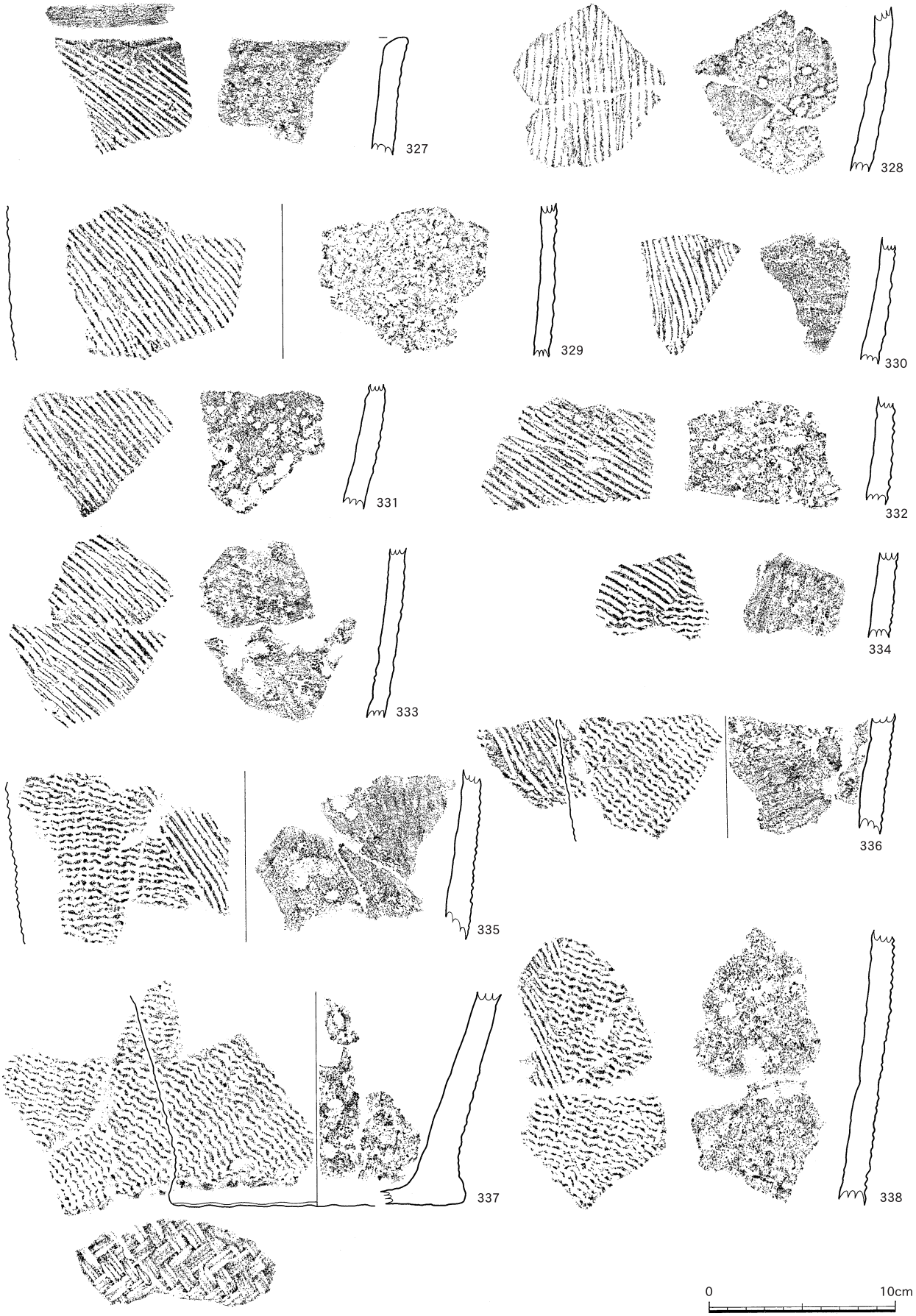
第129図　中央部　縄文時代早期の土器（Ⅵ，Ⅶ，Ⅷ類）

施文され，縄文はＲＬの原体を棒に巻きつけてから，回転施文したものと考えられる。
頸部から口縁部にかけては縦位の縄文を施した後，幅１㎝の磨消を1.6㎝間隔に施してある。胴部は横位，下部は縦位に施文した後ナデ調整が行われているが，明瞭ではない。また，口唇部にも縄文が施され，上面観は楕円形を呈する。

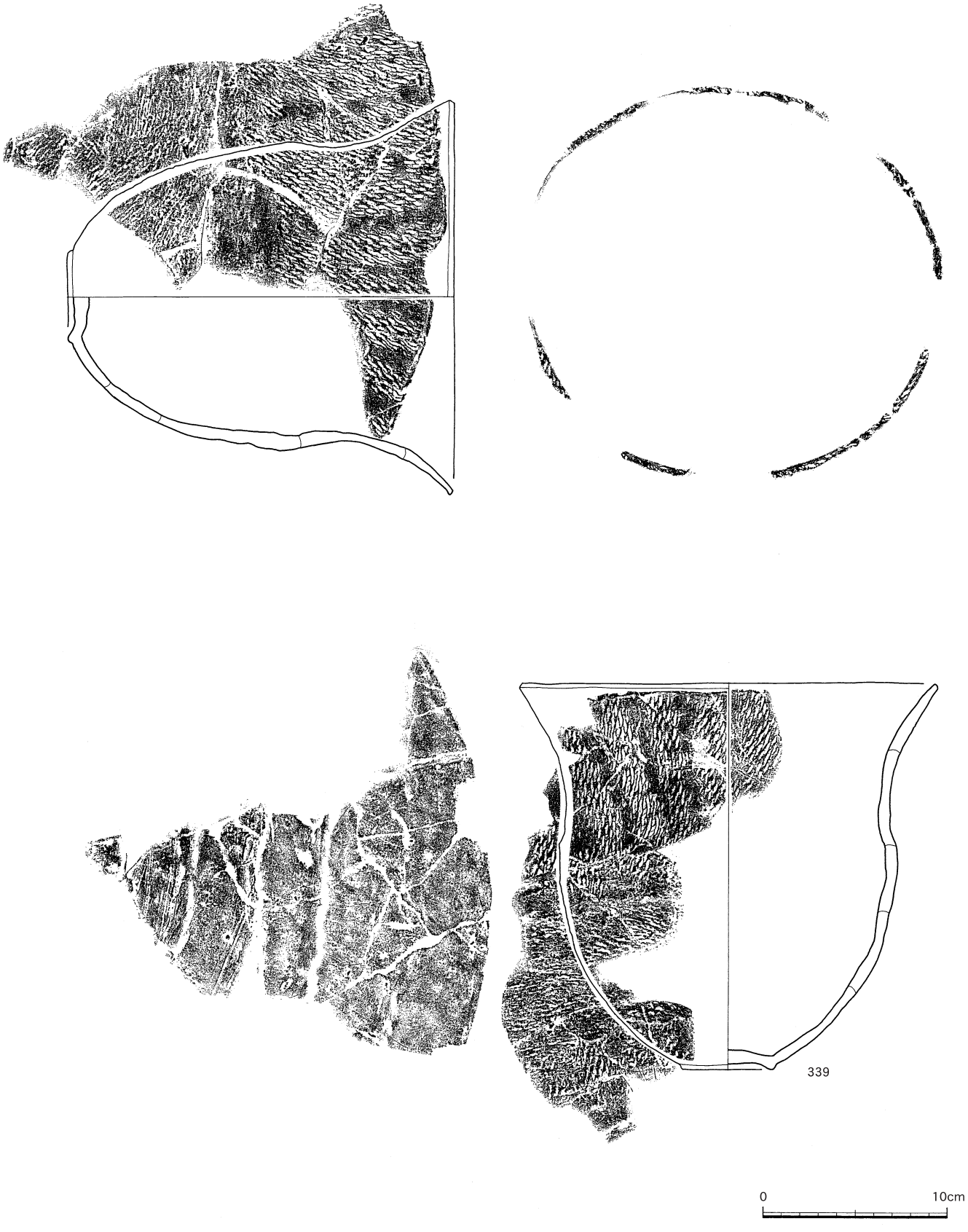
340はわずかに外反する口縁部で，外面には縦位，内面には横位の貝殻条痕文が施される。



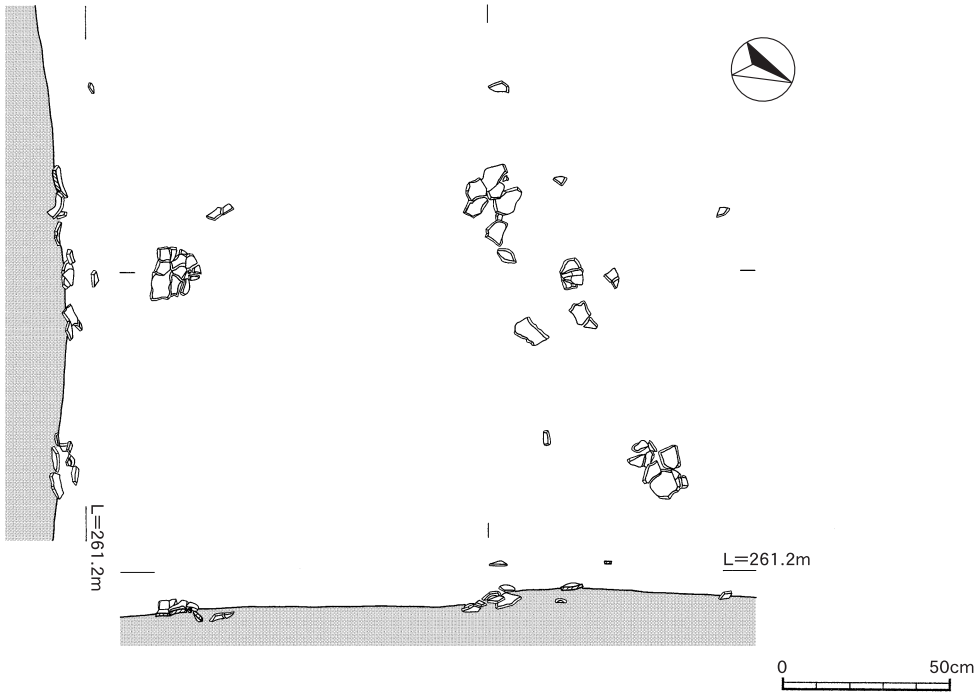
第130図　中央部　縄文時代早期の土器（Ⅸａ類）



第131図　中央部　縄文時代早期の土器（Ⅸｂ類）



第132図　中央部　縄文時代早期の土器（X類）



第133図　中央部　縄文土器出土状況図（X類，№339）

XI類土器（第134図341，342）

341，342の２点が該当する。

341は頸部屈曲部から口縁部へかけての資料で，外反しながらそのまま口縁部へ直線的に続くと思われる。屈曲部に断面三角形の刻目突帯を１条巡らし上位には短沈線文と連点刺突文が見られる。

342はいわゆる口縁部片で，341の上位に相当すると思われる。器面は内外面共に丁寧にナデた後に，施文が認められる。

XII類土器（第134図343～348）

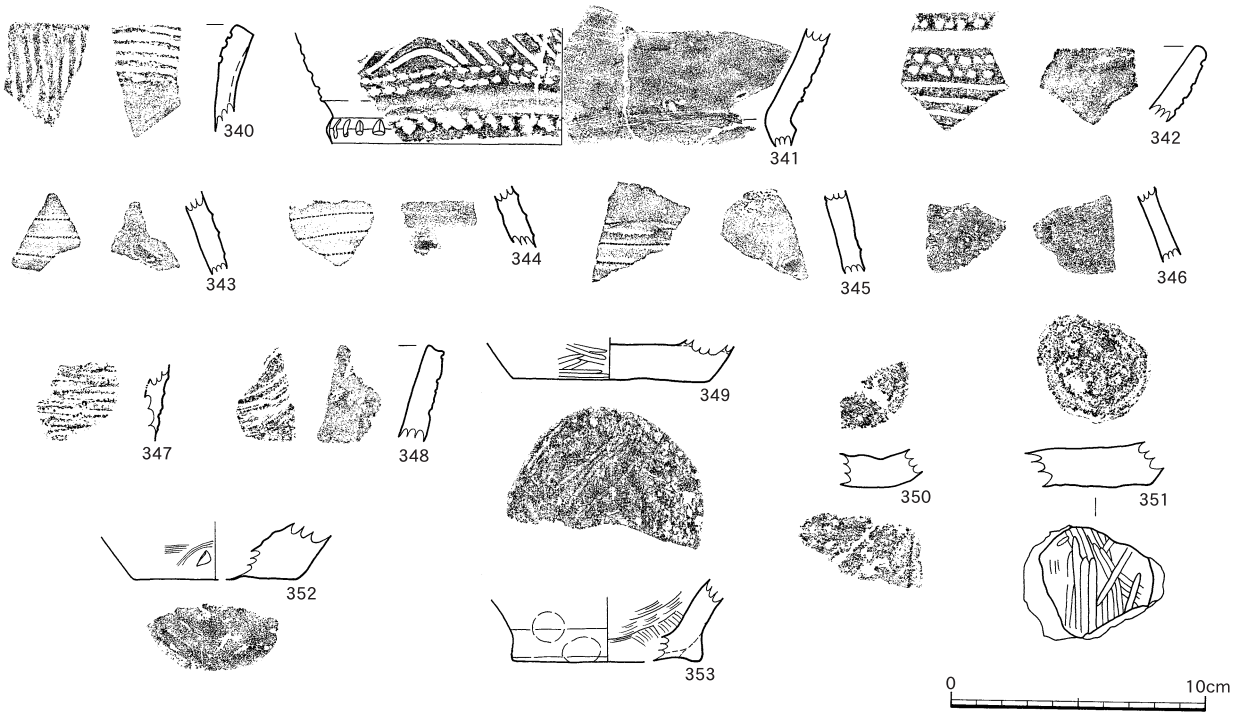
343～348を一括したが，347と348については疑問も残す。

343～346は壺型土器の可能性が高く，特に343と344の２点は直線的に内傾する頸部と思われ，刻目を有する微隆起線文が確認できる。なお，347では浅い貝殻条痕，348の口縁部資料には撚糸文が確認できる。

349～353はXI類ないしはXII類土器の底部と思われる。

⑵　**縄文時代前期**（第135図354，355）

縄文時代前期の土器はXIII類が出土し，XIV類は確認されなかった。



第134図　中央部　縄文時代早期の土器（X，XI，XII類）

XIII類土器（第135図354，355）

354，355の２点がXIII類土器である。

354は胴部にみみず腫状の突帯を巡らし胴部内外面は貝殻条痕による調整が施される。

355は内外面にも貝殻条痕が施されるもので，口唇部に刻目が見られる。

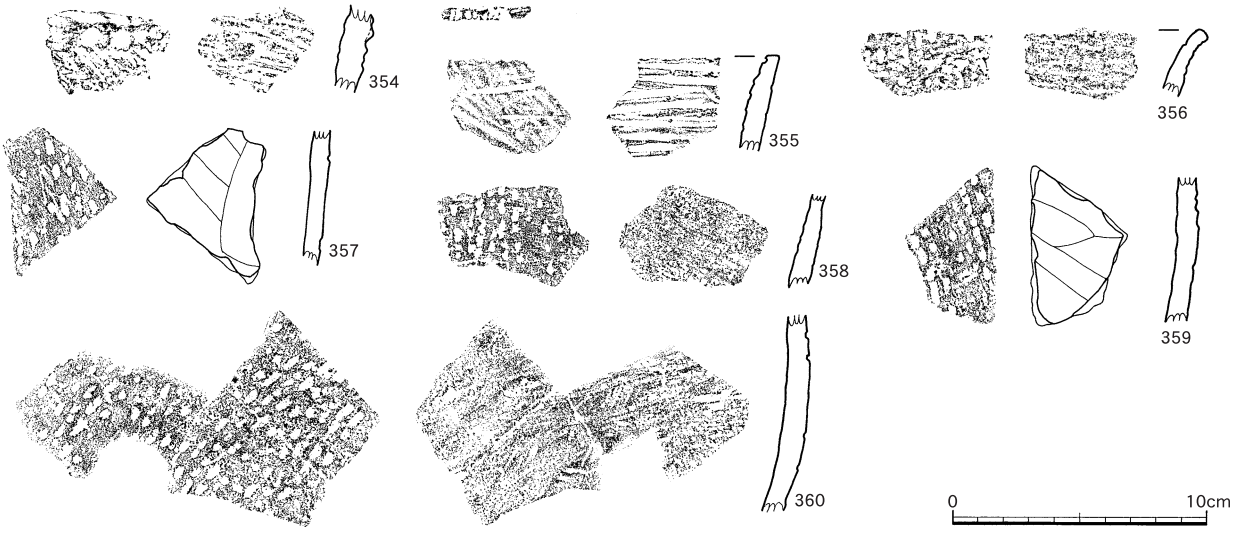
⑶　**縄文時代後期**（第135，136図356～375）

縄文時代後期の土器は，XV，XVI類が出土した。

XV類土器（第135図356～360）

356～360はXV類土器で，胴部に貝殻復縁によるものと思われる連点文が施されるものである。

356，360は縦位，357～359は斜位に施される。



第135図　中央部　縄文時代前期，後期の土器（XIII，XV類）

Ⅻ類土器（第136図361～375）

361～375はⅫ類土器である。沈線文を主体とするもので，やや太めの沈線文を施すもの（361～364）と細目の沈線文を施すもの（365～373）に分けられる。365は山形を呈する口縁部であるが内面にも沈線文が施される。374，375は胴部で貝殻条痕のみ観察される。

⑷　縄文時代晩期（第137～144図376～475）

縄文時代晩期の土器は，376～475を一括してⅫ類である。

このⅫ類土器は深鉢形土器（Ⅻ類Ａ），浅鉢形土器（Ⅻ類Ｂ），鉢形土器（Ⅻ類Ｃ）の３器種に区分できる。また，深鉢形土器は口縁部の刻目突帯の有無によりⅫ類Ａ－ａ（刻目突帯無し），Ⅻ類Ａ－ｂ（刻目突帯有り）に細分している。鉢形土器も底部（接地面）の違いからⅫ類Ｃ－ａ（ヘラ削りないしはナデ仕上げ），Ⅻ類Ｃ－ｂ（編布を圧痕する），Ⅻ類Ｃ－ｃ（網目を圧痕する）に細分して表示した。

Ⅻ類Ａ－ａ土器（第137図376～395）

376～395が該当し，器面調整は条痕仕上げが一般的となる。

口縁部資料が少ないことから細分には課題も残るが，376は無刻目突帯を口縁部直下に１条巡らしている。

378は口唇部に径１㎜程度の刺突文と同一施文具によると思われる沈線文を施すものである。

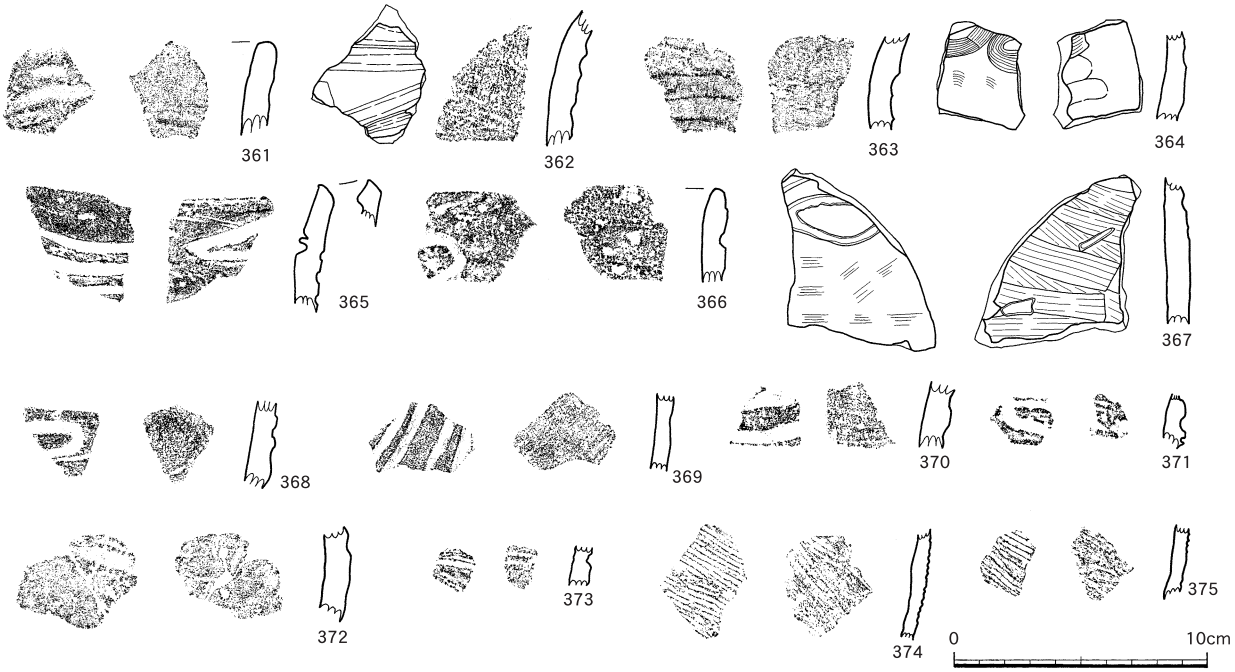
379は屈曲の状況から肩部，380～392は胴部で，382，385，387～392は胴部の屈曲部に相当する。

底部は393～395で，395の径は11.2㎝でいわゆる円盤貼り付け手法が認められる。388，391の２点については，最考の必要もある。

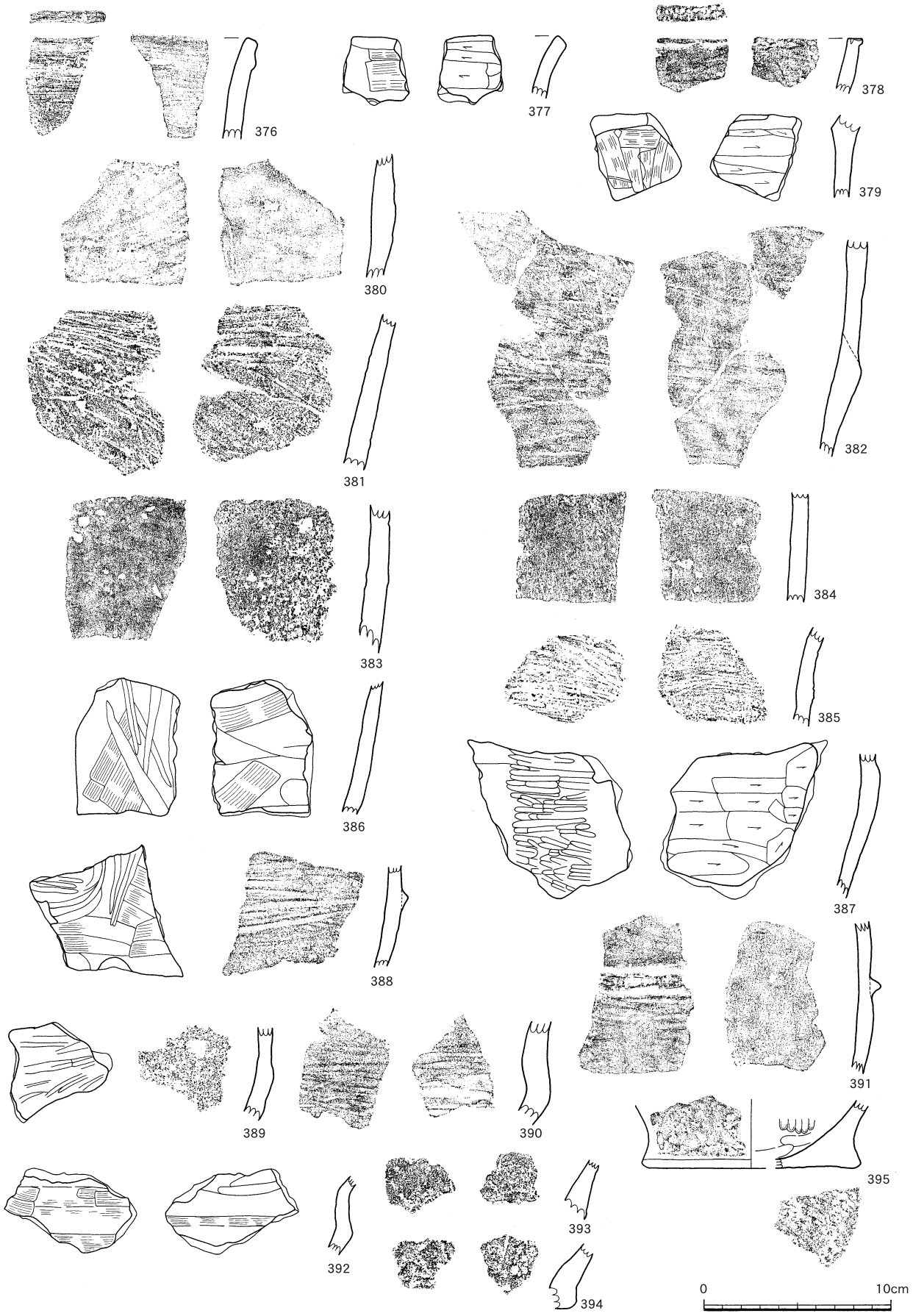
Ⅻ類Ａ－ｂ土器（第138図396～407）

396～407を一括して取り扱った。

396の復元口径は21.6㎝で，口縁部直下と胴部上位に断面三角形の突帯を１条貼り付けている。



第136図　中央部　縄文時代後期の土器（Ⅻ類）



第137図　中央部　縄文時代晩期の土器（ⅩⅢＡ－ａ類）

口縁部突帯の直下に両面方向から穿孔を試みているが，貫通していない。

398の復元口縁は31.2㎝で，内外面の条痕仕上げは顕著である。口唇部外面，突帯ともにヘラ状工具で刻まれる。

399～405は口縁部もしくは口縁部直下に刻目突帯を廻らすものである。402は口縁部に刻目を施すものである。

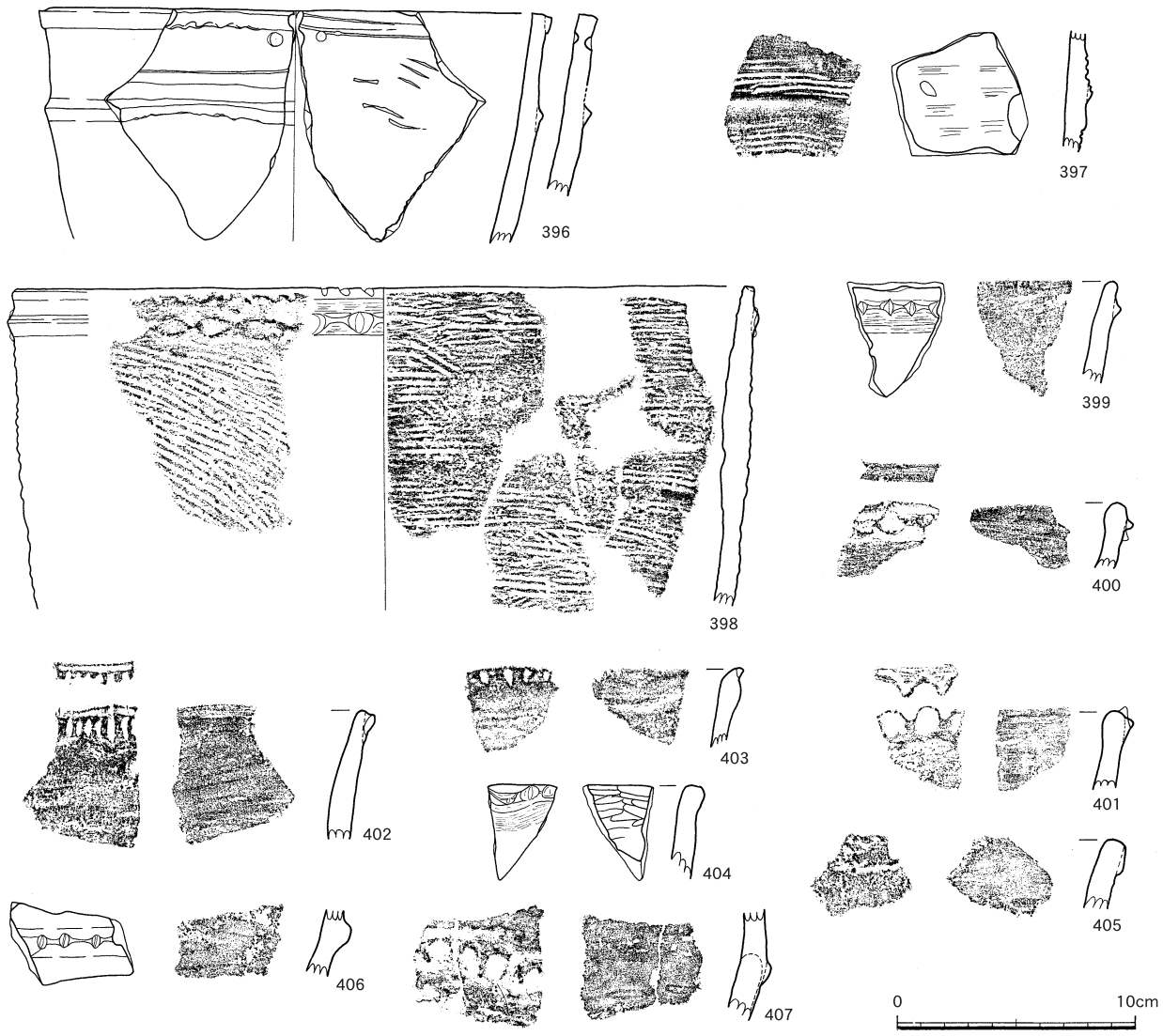
405は刻目を有しない突帯である。406，407は胴部の屈曲部に刻目突帯を廻らすものである。

Ⅻ類Ｂ土器（第139図408～410）

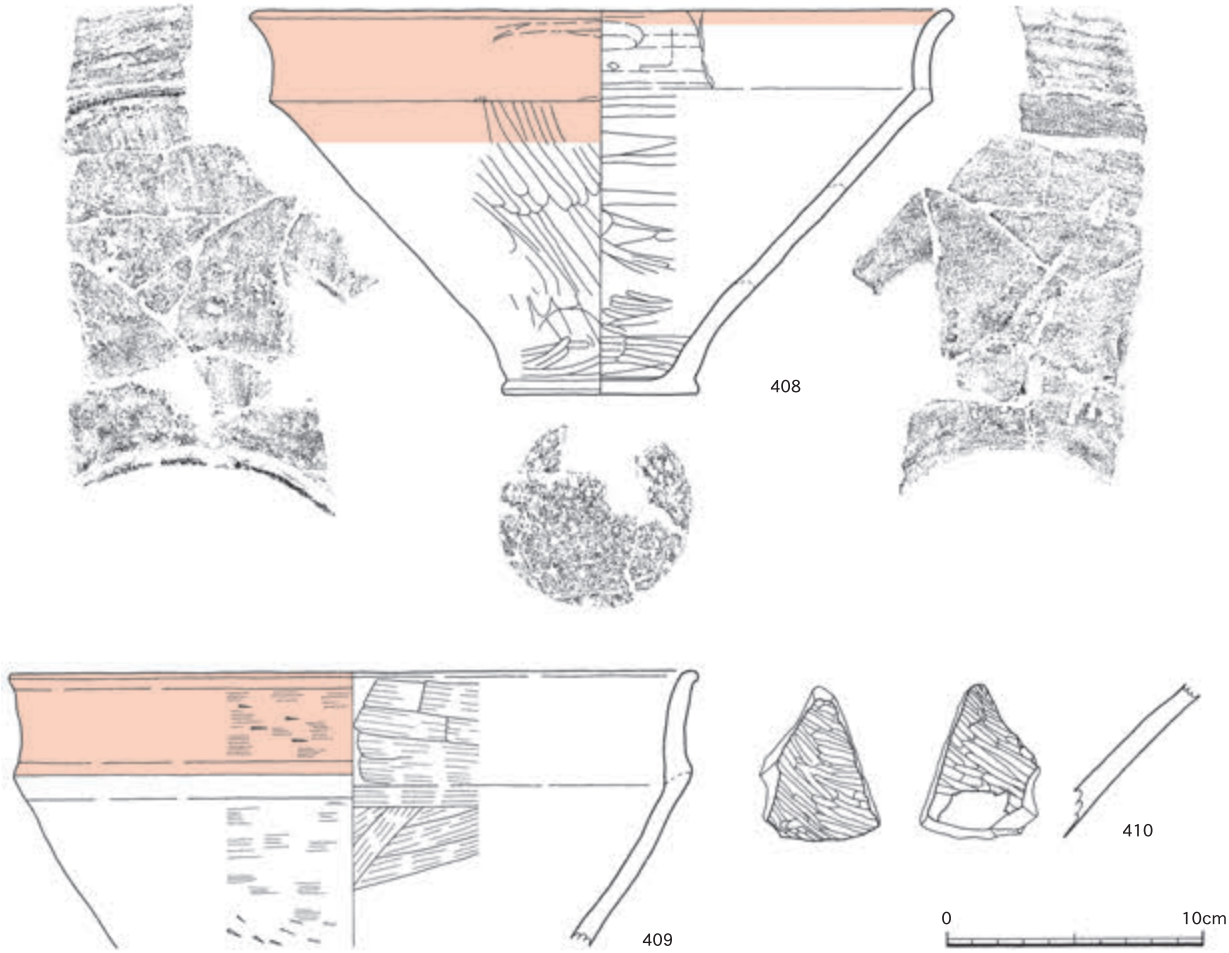
408～410の３点が該当する。

408の復元口径は28.0㎝，底部径7.6㎝，器高15.2㎝である。底部は安定した円盤状の貼り付け手法が見られ，底部から頸部の屈曲面までは外に開きながら直線的に立ち上がり，くの字状に明瞭に屈曲し口縁部に至る。器面は丁寧にヘラで磨かれ，口縁部の一部には赤色顔料の塗布された痕跡が残る。

409の復元口径は27.4㎝で，内外面の調整はヘラや工具によるナデ調整と408とは異なるが，全体



第138図　中央部　縄文時代晩期の土器（ⅫＡ－ｂ類）



第139図　中央部　縄文時代晩期の土器（ⅩⅦＢ類）

的形状は類似するといえる。また，口縁部付近には赤色顔料の塗布の痕跡も確認できる。

ⅩⅦ類Ｃ－ａ土器（第140～142図411～450）

411～450が該当する。Ｃ－ｂ類が編布，Ｃ－ｃ類が網目を圧痕するのに対し，圧痕の痕跡が認められないものを一括して取り扱っている。

411は44.2㎝の口径が復元できる大型の鉢で，洗面器状の形状を呈している。底部（接地面）は平底と見られる。外面はヘラや工具でナデて仕上げているが，内面は工具等でナデた後ナデ調整を重ね，水漏れ防止を図っている。

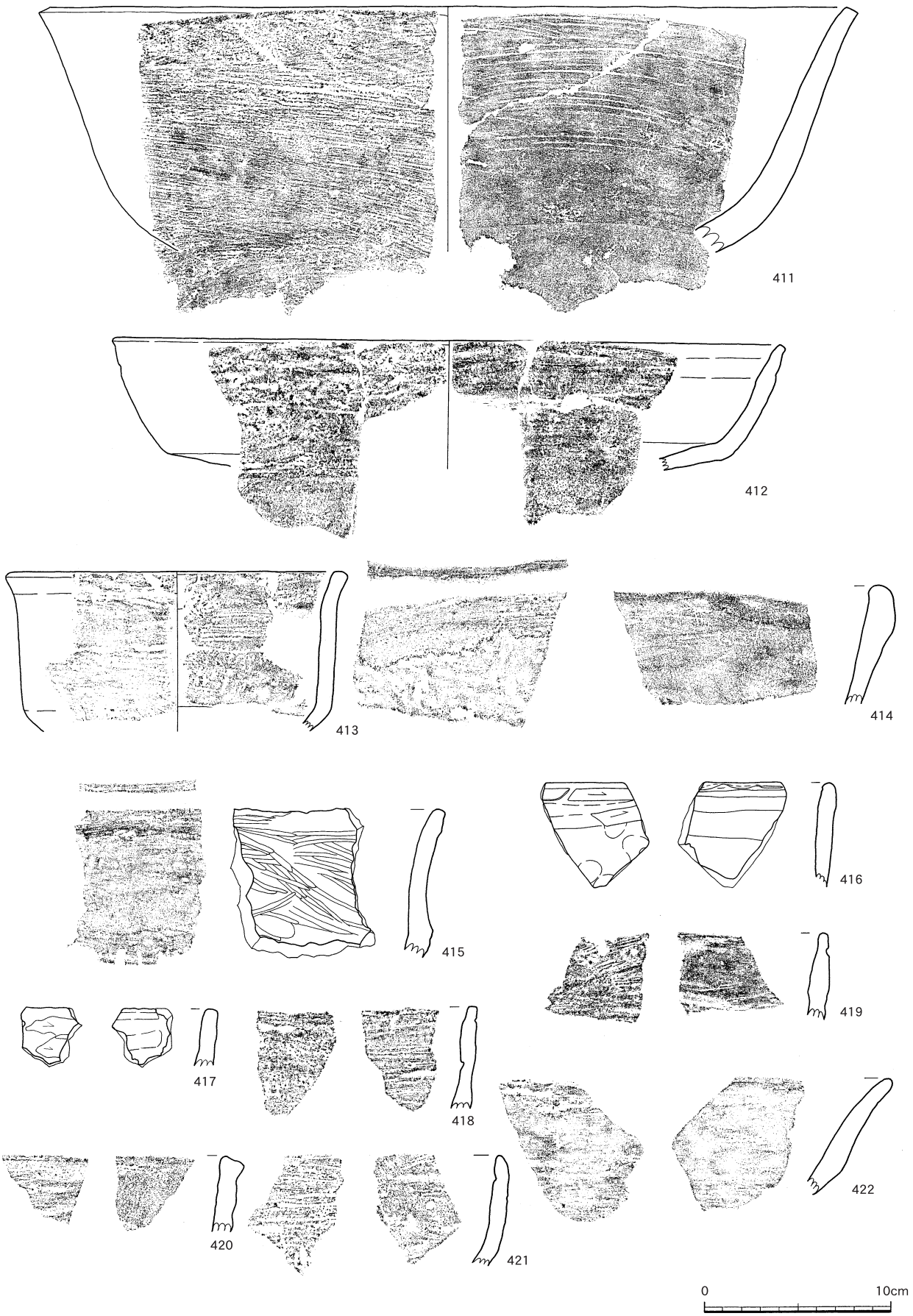
412の復元口径は36.2㎝で，器高は浅く，底部はヘラ削りで仕上げている。内面の仕上げは，411と同一である。

413の復元口径は18.4㎝で，底部上位からほぼ垂直に立ち上がる。

414は口縁部が肥厚する。415は口縁部が外反する。416～420は口縁部が直行するものである。421は口縁部がわずかに内弯する。422は口縁部が外反する。

4233～450は胴部及び底部である。

442～450は底部である。底部がやや丸みを帯びるもの（444～446）と平坦なもの（442，443，447，450）に分けられる。444の底部にはわずかではあるが組織痕の痕跡が認められる。



第140図　中央部　縄文時代晩期の土器（ⅩⅢC－a類①）

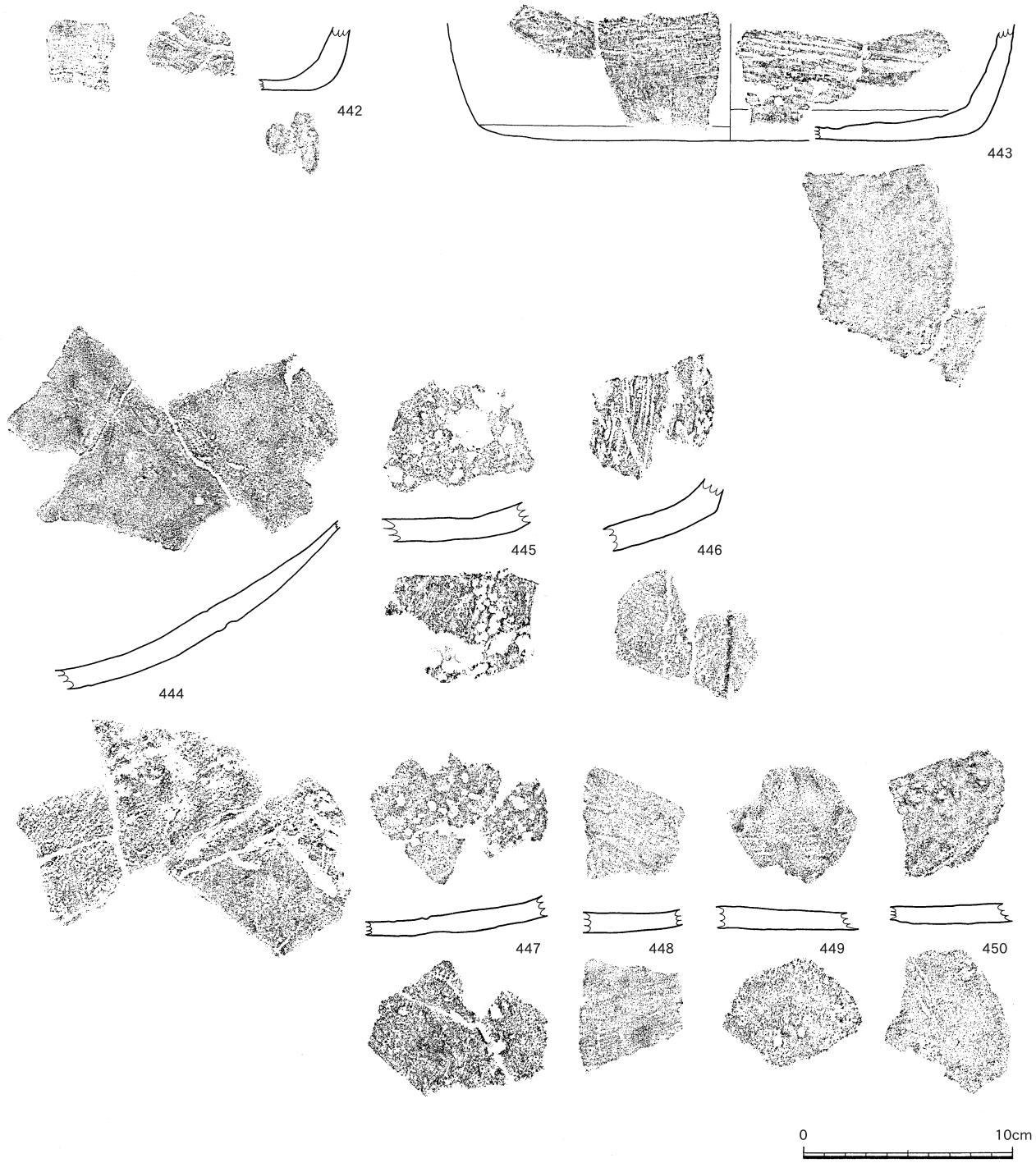
第141図　中央部　縄文時代晩期の土器（ⅩⅦC－a類②）

Ⅻ類Ｃ－ｂ土器（第143図451～467）

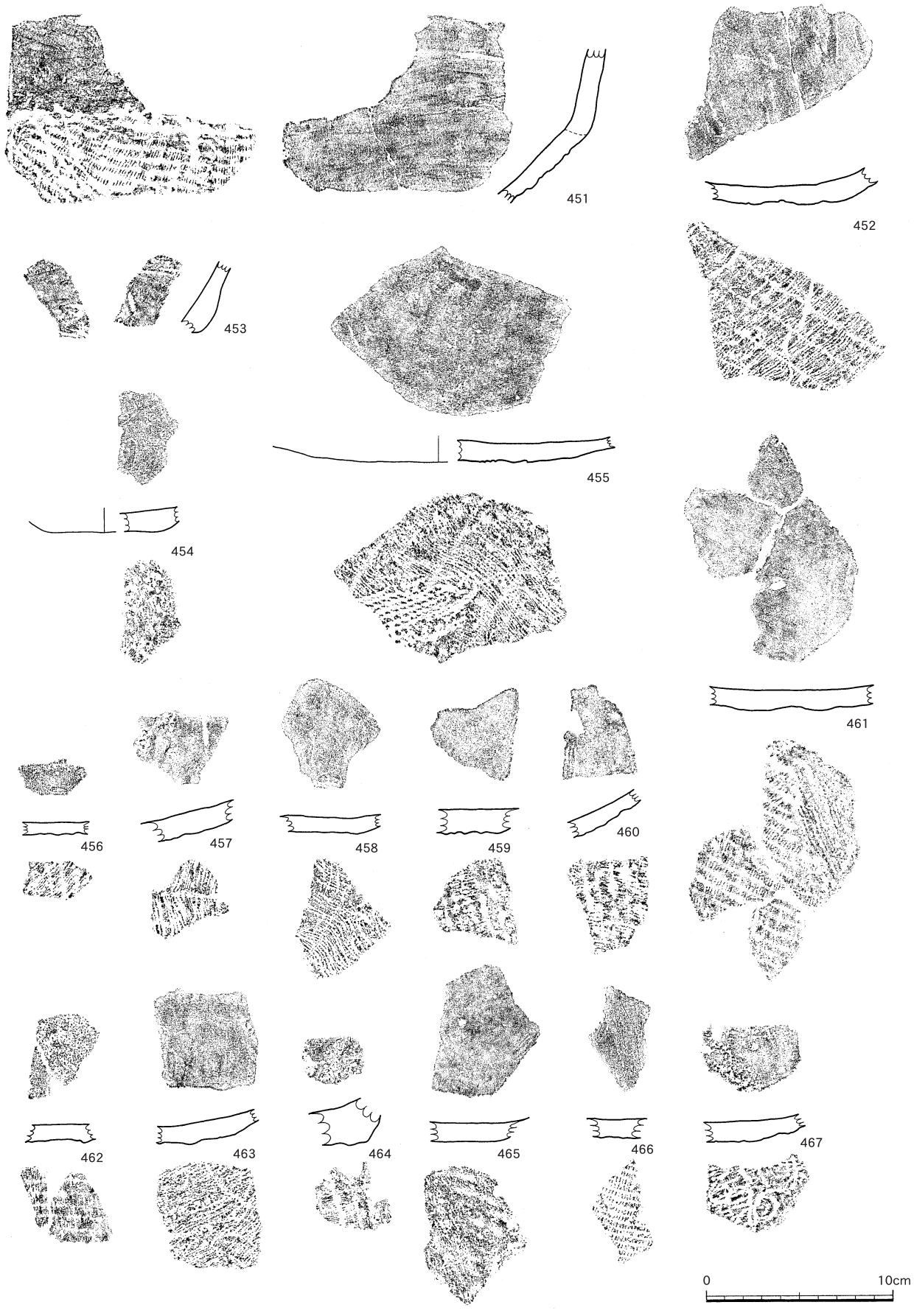
接地面に編布を圧痕した底部片，451～467を一括して取り扱っている。なお，口縁部まで観察できる資料が残されていないことから，先のⅫ類Ｃ－ａ土器が本類の上部形状に該当すると判断する。

451は胴部下位の屈曲部から接地面に，経糸間隔0.5㎝，緯糸は１㎝幅に７本で構成する編布が残される。

452は経糸間隔1.5㎝，緯糸は１㎝幅に７本，273は経糸間隔3.7㎝，緯糸は１㎝に７本の編布に網



第142図　中央部　縄文時代晩期の土器（ⅫＣ－ａ類③）



第143図　中央部　縄文時代晩期の土器（ⅩⅢC－b類）

目圧痕が重なる。

456は経糸間隔0.7㎝，緯糸は１㎝幅に８本，457，458は経糸間隔は不明，緯糸は１㎝幅に７本，459は経糸間隔0.6㎝，緯糸は１㎝に７本，460は経糸間隔が0.7㎝，緯糸は１㎝幅に７本，462は不明瞭であるが経糸間隔が0.7㎝，緯糸は１㎝幅に８本，463は経糸間隔４㎝，緯糸は１㎝幅に８本，464は経糸間隔が0.9㎝，緯糸は１㎝幅に９本，466は経糸間隔0.3㎝，緯糸は１㎝幅に７本，467は経糸間隔１㎝，緯糸は１㎝幅に４本と太い。一方，内面調整は入念に行われている。

Ⅻ類Ｃ－ｃ土器（第144図468～474）

接地面に網目を圧痕した底部片468～474を一括して取り扱っている。なお，Ｃ－ｂ類同様先のⅫ類Ｃ－ａ土器が本類の上部形状に該当すると判断する。

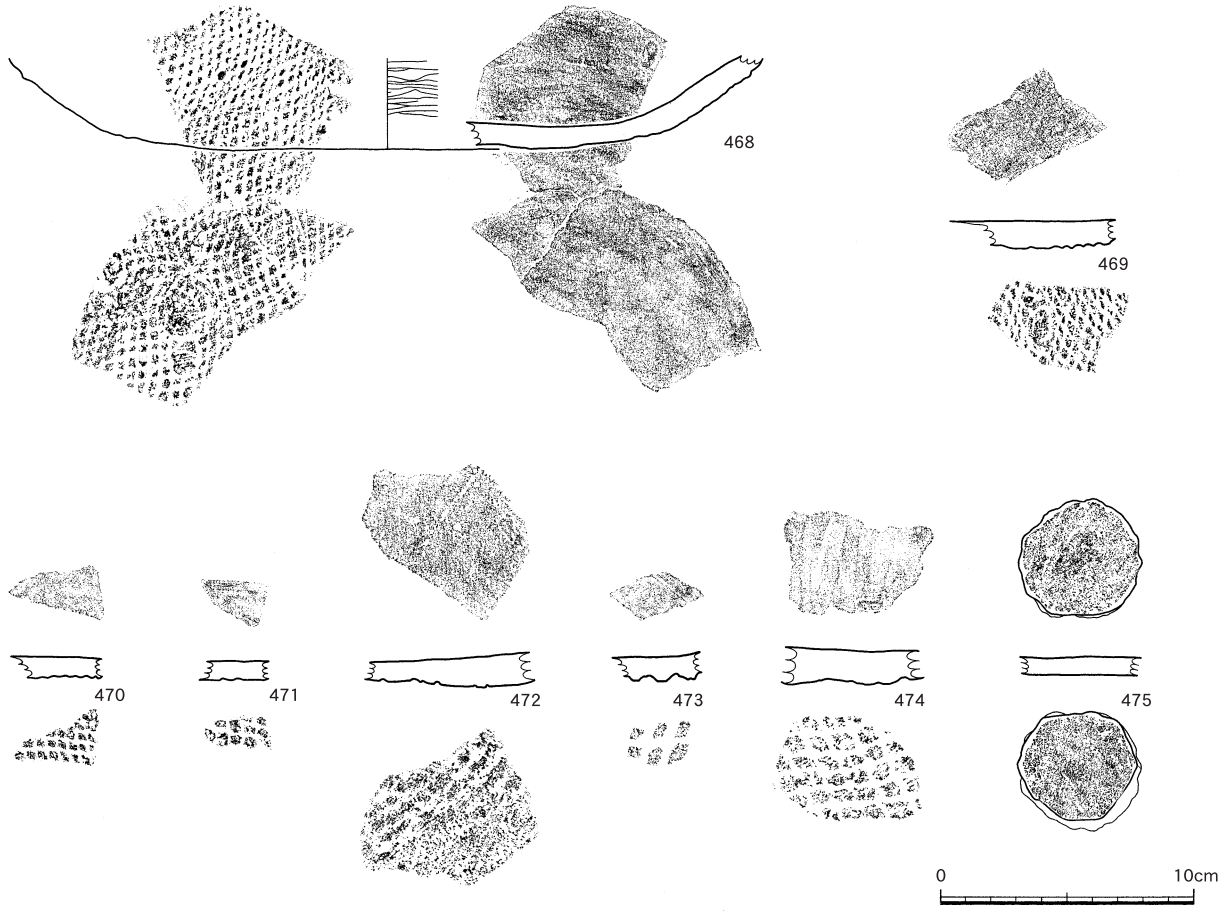
468～470は同一個体の可能性が高いもので，長さ0.7㎝，幅0.3㎝の網目圧痕が残される。

472は長さ１㎝，幅0.5㎝，291は長さ1.1㎝，幅0.8㎝の明瞭な圧痕が観察できる。

474は長さ１㎝，幅0.8㎝で，いずれの資料も内面はヘラ状工具で入念に磨かれ，いわゆる半粗半精製土器である。

円盤形土製加工品（第144図475）

475は土器片を円盤状に打ち欠いたもので，メンコ形土製品とも呼称されるものである。径4.7㎝のほぼ円形を呈しているが周縁部の打ち欠きは荒いものである。文様等が無く時期の判定に迷うものであるが，胎土・焼成から縄文時代晩期と捉えられよう。



第144図　中央部　縄文時代晩期の土器（ⅫＣ－ｃ類）

2　古墳時代（第145図476～484）

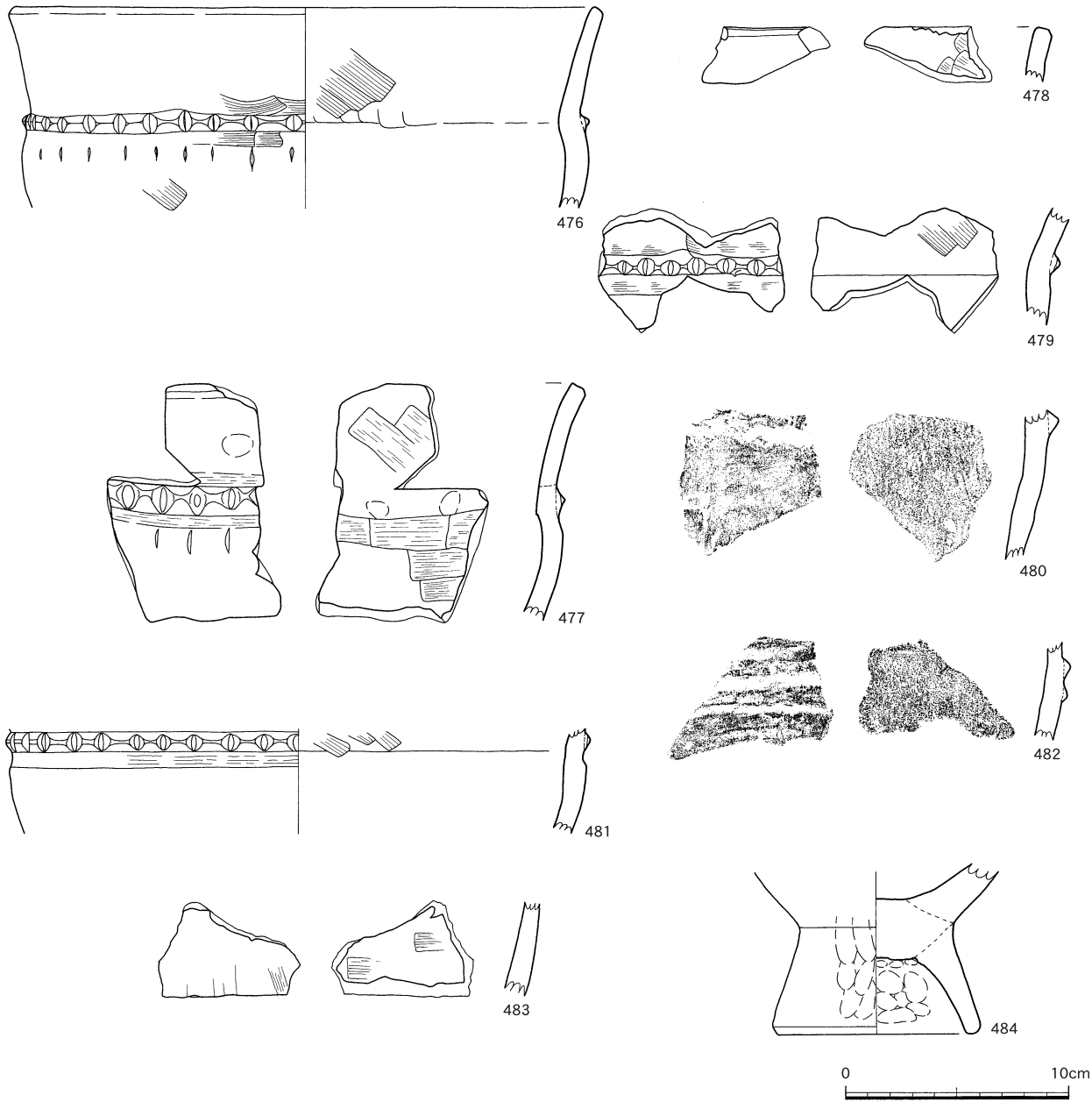
476～484は古墳時代の土器で，いずれも甕傾土器である。

476は，復元口縁径26.8㎝を測る。胴部はわずかに張り口縁部は外反するものである。頸部には刻目突帯を巡らし，内外面共にハケ目が認められる。

477も476と同様の器形である。刻目突帯の刻目が胴部に及んでいるが突帯直下は横ナデにより消されている。内面は工具ナデである。

479～482は，刻目突帯を巡らす胴部である。481は，復元頸部径13.0㎝を測る。482は，２条の突帯を巡らす。

484は底部である。底部径9.0㎝を測るもので中空の脚台である。指頭圧痕が認められる。



第145図　中央部　古墳時代の土器

3　古代

古代の遺物は遺物包含層であるⅢ層から主に出土しており，一部のものは下部のⅣ層においても認められた。出土した遺物は土師器，須恵器，焼塩土器，土製品として紡錘車があげられる。

⑴　土師器（第146～150図485～574）

坏（第146図485～499）出土した坏は，口縁部や体部の形状により以下のように分類できる。

Ⅰ類…体部が底部から直線的に開くもので，口縁部が直線的なものと外反するものに分かれる。

Ⅱ類…体部が底部からやや丸みを持ちながら立ち上がるもので，口縁部が直線的なものと外反するものに分かれる。

Ⅰ類（第146図485～489）

485～489は体部が直線的に開くものである。489はやや上げ底気味の底部をもつ。

Ⅱ類（第146図490～499）

490～499は体部がやや丸みを持ちながら立ち上がるものである。490は体部外面にロクロ目が凹凸となって残るが，内面はきれいにナデ消されている。493は底部から立ち上がる外面にロクロ目が筋状に残る。497は上げ底気味の底部をもち，ヘラ切りによる切り離し痕が残る。

皿（第146図500）

500は小皿である。口径は7.3㎝で，器高は２㎝に満たない。体部は底部から直線的に立ち上がり，口縁部の断面は鋭角な三角形を呈する。

埦（第146図501，502）出土した埦は，以下のように分類できる。

Ⅰ類…直線的に開く体部をもち，底面径が約10㎝程度の大きめのもので，短い高台が直立するもの（Ⅰ－ａ類），高台が外側へ開くもの（Ⅰ－ｂ類），高台欠損後再利用しているもの（Ⅰ－ｃ類）に分けられる。

Ⅱ類…直線的に開く体部をもち，底面径が約７㎝程度のもので，短い高台が直立するもの（Ⅱ－ａ類），高台が外側へ開くもの（Ⅱ－ｂ類），高台欠損後再利用しているもの（Ⅱ－ｃ類）に分けられる。

Ⅲ類…体部が底部からやや丸みを持ちながら立ち上がるもの。

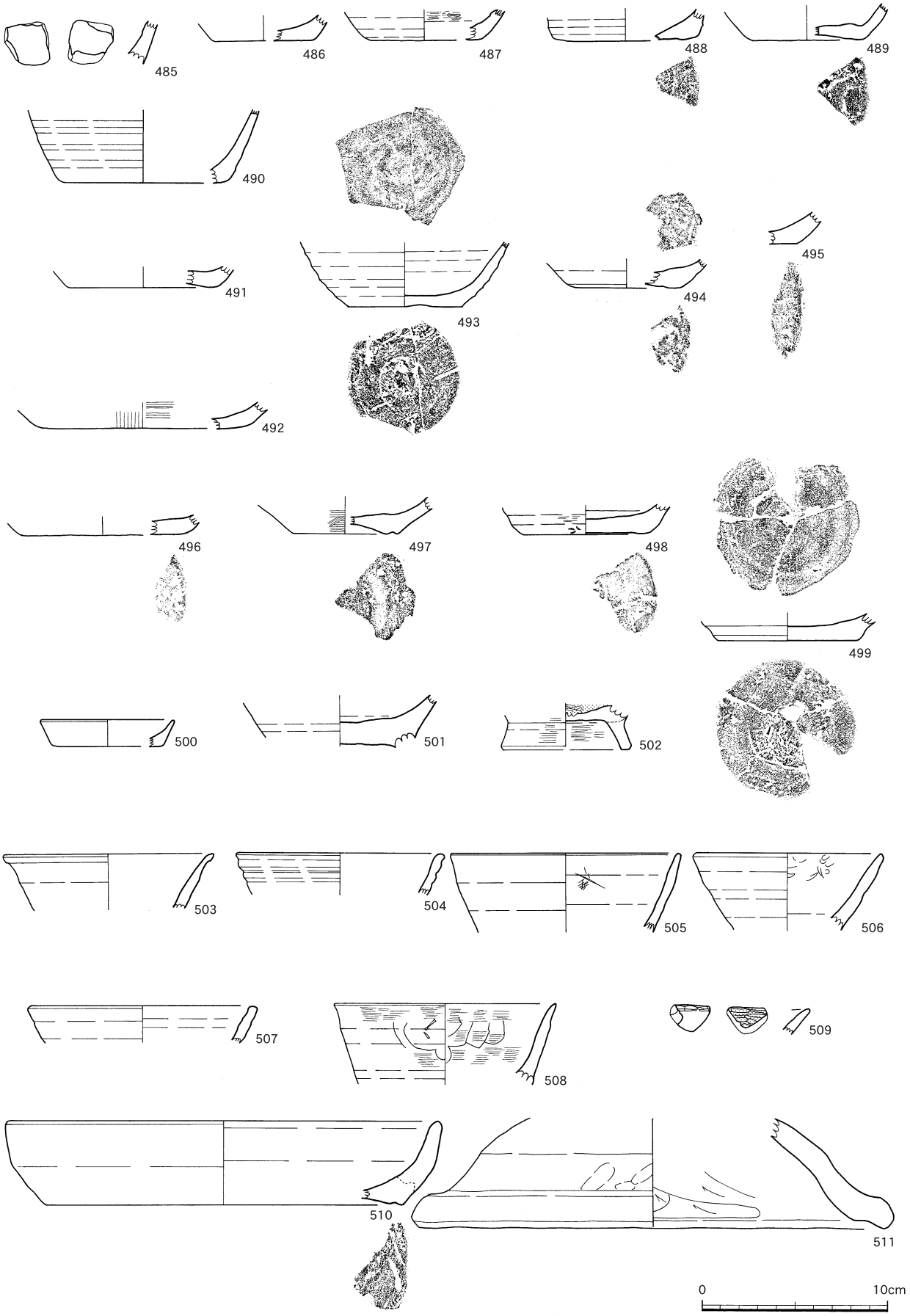
501はⅡ－ｃ類で，高台欠損後，砥石等の道具を用いて欠損部分を粗く研磨調整を施し再利用したものである。502は，内黒土師器の埦である。上位が欠損のため全体形は不明である。ややハの字状に広がる高台をもち，接地面に平坦面をもつ。

坏～埦（第146図503～509）

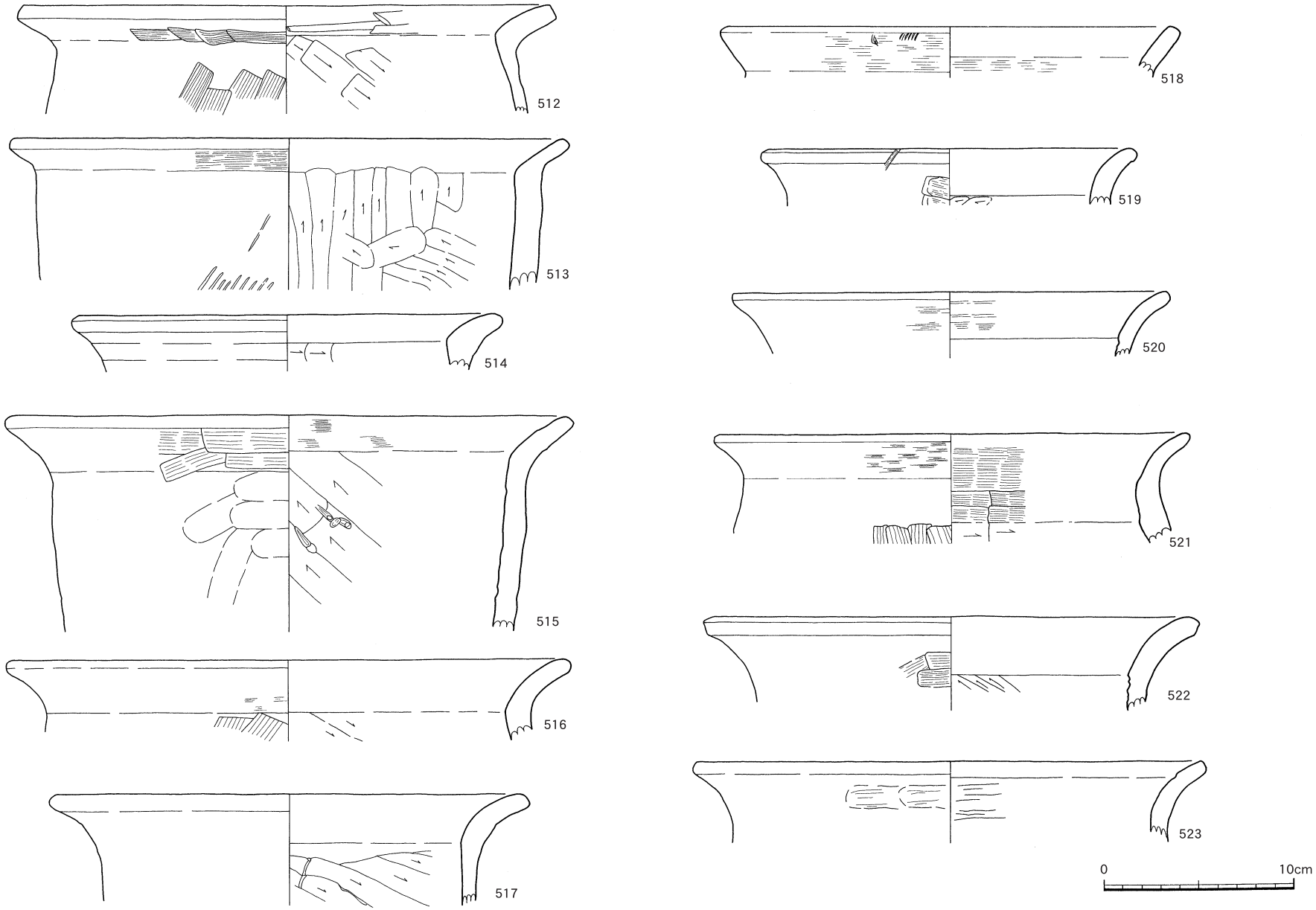
503～509は坏または埦の口縁部である。胴部より下位が欠損しているため，全体形が不明であり土師器の坏または埦の口縁部～胴部としてまとめて掲載する。503は口縁部がやや外反するもので，口縁部に段をもつ。504は外面にロクロ目が凹凸として残る。505・506は内面に爪のようなものでつけたような跡がみられる。509は内黒土師器である。内面には丁寧なミガキ調整痕が残る。

盤（第146図510）

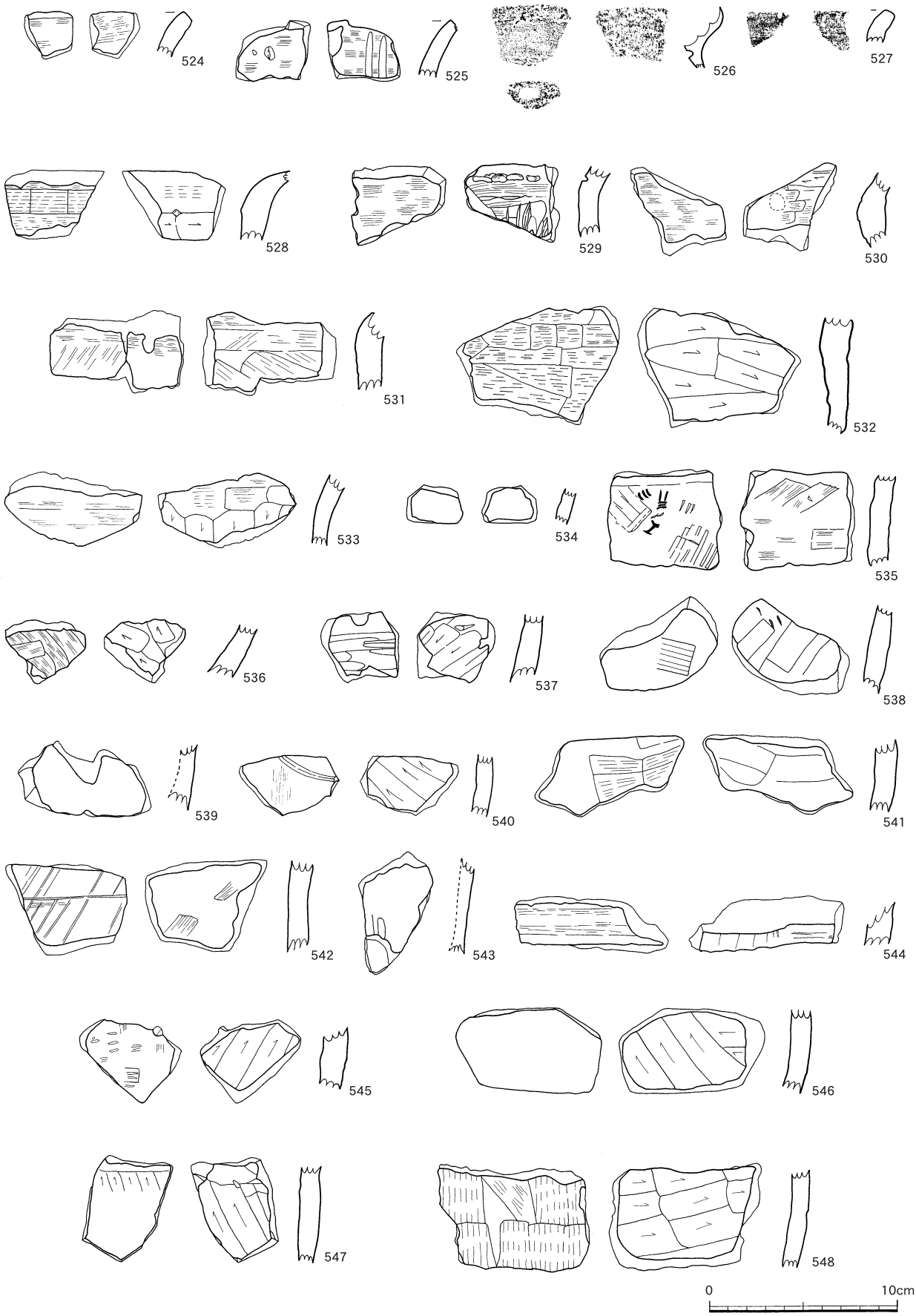
510は底径が19.4㎝の盤である。底部はやや上げ底気味で，ヘラ切りによる切り離し痕が残る。体部は底部との境目からやや屈曲し，そこから直線的に立ち上がる。口縁部は丸く仕上げている。



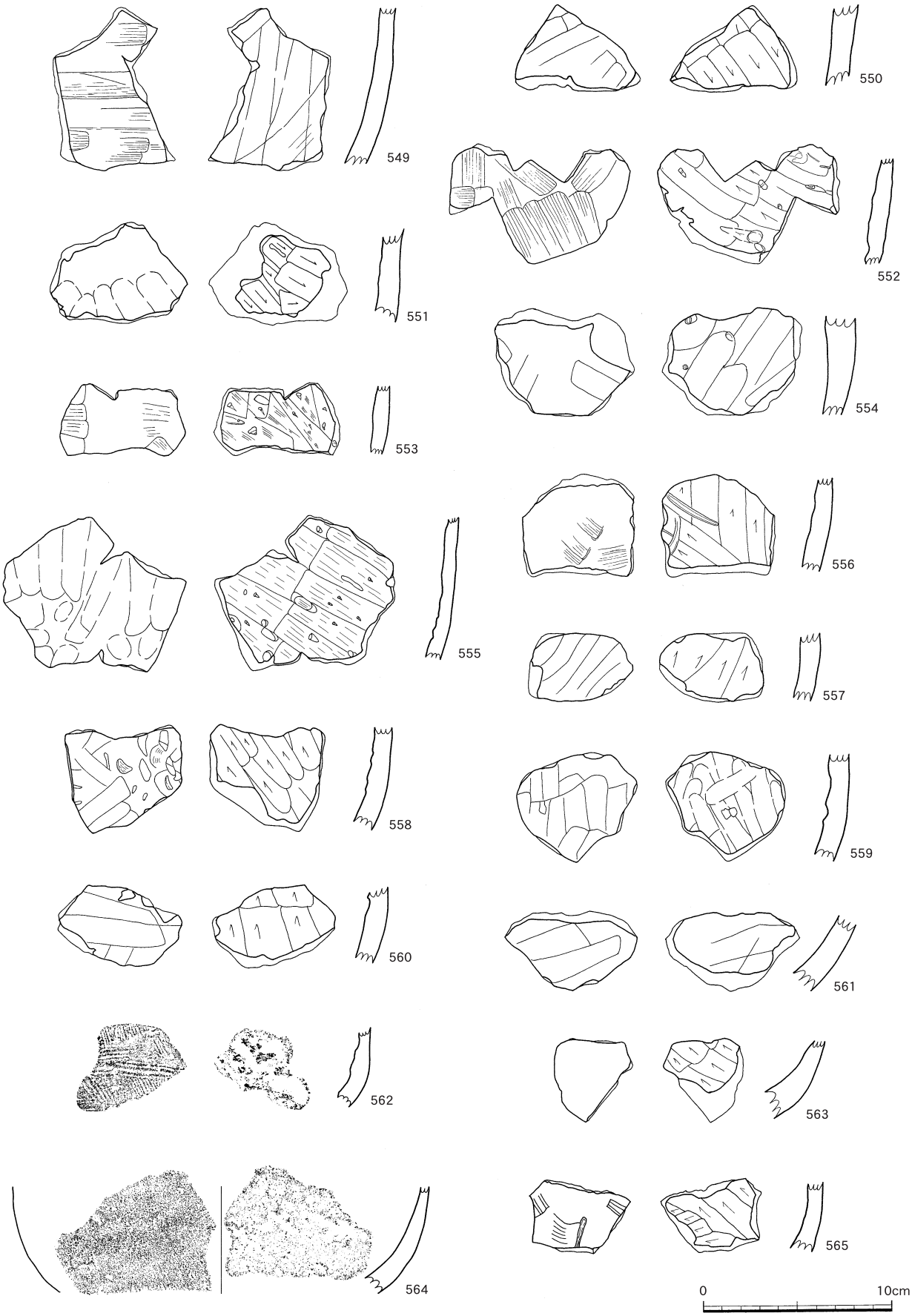
第146図　中央部　古代の土器(1)



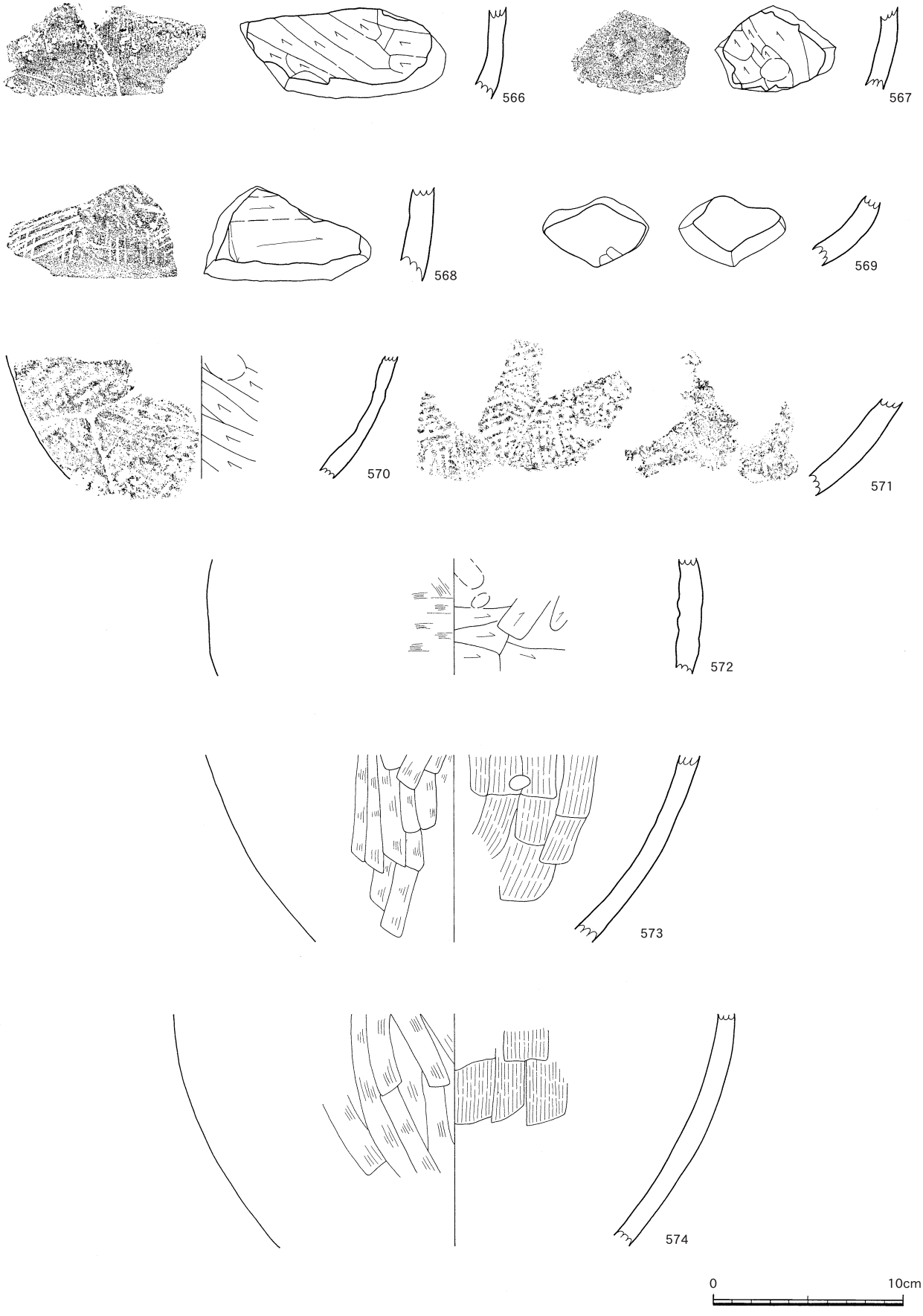
第147図　中央部　古代の土器(2)



第148図　中央部　古代の土器(3)



第149図　中央部　古代の土器(4)



第150図　中央部　古代の土器(5)

蓋（第146図511）

511は口径約26㎝の土師器の蓋である。天井部欠損のため全体形は不明であるが，体部下位は厚く仕上げ，天井部に向かって器壁が若干薄くなるように仕上げている。くの字状に外反する境目の外面にはナデ仕上げ時の指頭圧痕が明瞭に残る。

甕（第147図512～574）出土した甕は，口縁部の形態によって以下のように分類できる。

Ⅰ類…口縁部が逆「L」字状に大きく外反するもの。

Ⅱ類…口縁部がくの字状に外反するもの。

Ⅰ類（第147図512）

512は口縁部が逆「L」字状に外反するⅠ類の甕である。330は頸部に比べ口唇部が厚くなっており，口縁部には丁寧な調整の跡がみられる。内面はケズリ調整である。

Ⅱ類（第147図513～523）

513～523は口縁部がくの字状に外反するⅡ類の甕である。513～516は口縁部と頸部に明瞭な稜をもつものである。513は口縁部のハケ目調整痕が明瞭に残り，内面のケズリ調整も丁寧である。515は外面に指頭圧痕が残り，口縁部の内面にはハケ目調整痕が残る。517から523は口縁部が緩やかに外反し，頸部との間に稜をもたないものである。518は口縁部を内面外面ともに丁寧なハケ目調整が残る。521は頸部が厚くしっかりした作りである。522は厚めの口唇部を丸く仕上げている。

その他（第148～150図524～574）

小破片であったり，口縁部が残存していないためⅠ類・Ⅱ類に分類できなかったものをその他としてまとめて掲載する。524～534は口縁部から頸部にかけての小破片である。535～574は胴部から底部付近にかけての小破片だと思われる。

⑵ **須恵器**（第151図575～587）

坏（第151図575）

575は体部が底部からやや丸みを持ちながら立ち上がるものである。底部にはヘラ切りによる切り離し痕が明瞭に残っている。

埦（第151図576）

576は体部が直線的に開くものである。上位が欠損のため全体形は不明である。ややハの字状に広がる高台をもち，接地面に平坦面をもつ。底部の内側には工具痕と思われるものが残る。

高坏（第151図577）

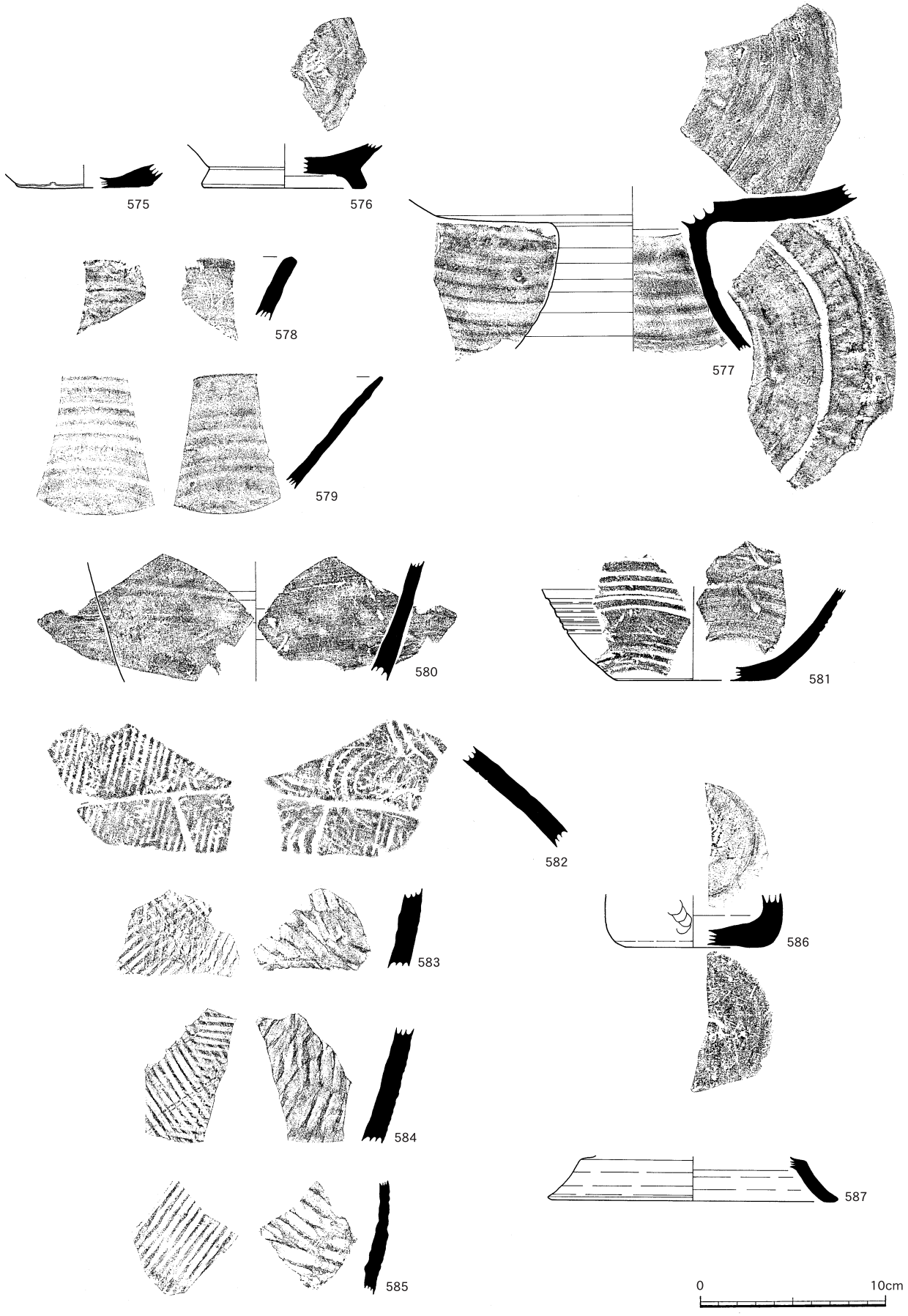
577は高坏の脚部と坏部を接合したものである。脚部も坏部も欠損しているため全体形は不明である。脚部はハの字状に外反しており，外面は丁寧なナデ調整がみられる。坏部は平坦面があり，口縁部は欠損しているが，大型の高坏として取り扱った。

坏～埦（第151図578）

578は埦または坏の口縁部である。胴部より下位が欠損しているため，全体形は不明である。口縁部がやや外反しているが，ほぼ直線的に外傾する。口唇部は丸く仕上げている。

鉢（第151図579～581）

579は鉢の口縁部で，口縁部はほぼ直線的に開いている。内面・外面とも丁寧なナデ調整が施されている。580は鉢の胴部である。胎土がやや粗く，内面には指頭圧痕が観察される。581は鉢の胴



第151図　中央部　古代の土器(6)

部から底部にかけての破片である。表面には櫛掻文がみられる。器形は，底部からやや膨らみながら立ち上がる形をしている。

甕（第151図582～585）

582～585は甕の破片である。582は，頸部から肩部にかけての破片である。外面は平行線状のタタキが施され，内面は青海波文の当て具痕がみられる。また，全体に磨滅が見られるので，二次利用された可能性もある。583～585は胴部中央から下胴部にかけての破片である。外面には平行線状のタタキが施され，内面には平行線状の当て具痕がみられる。

壺（第151図586）

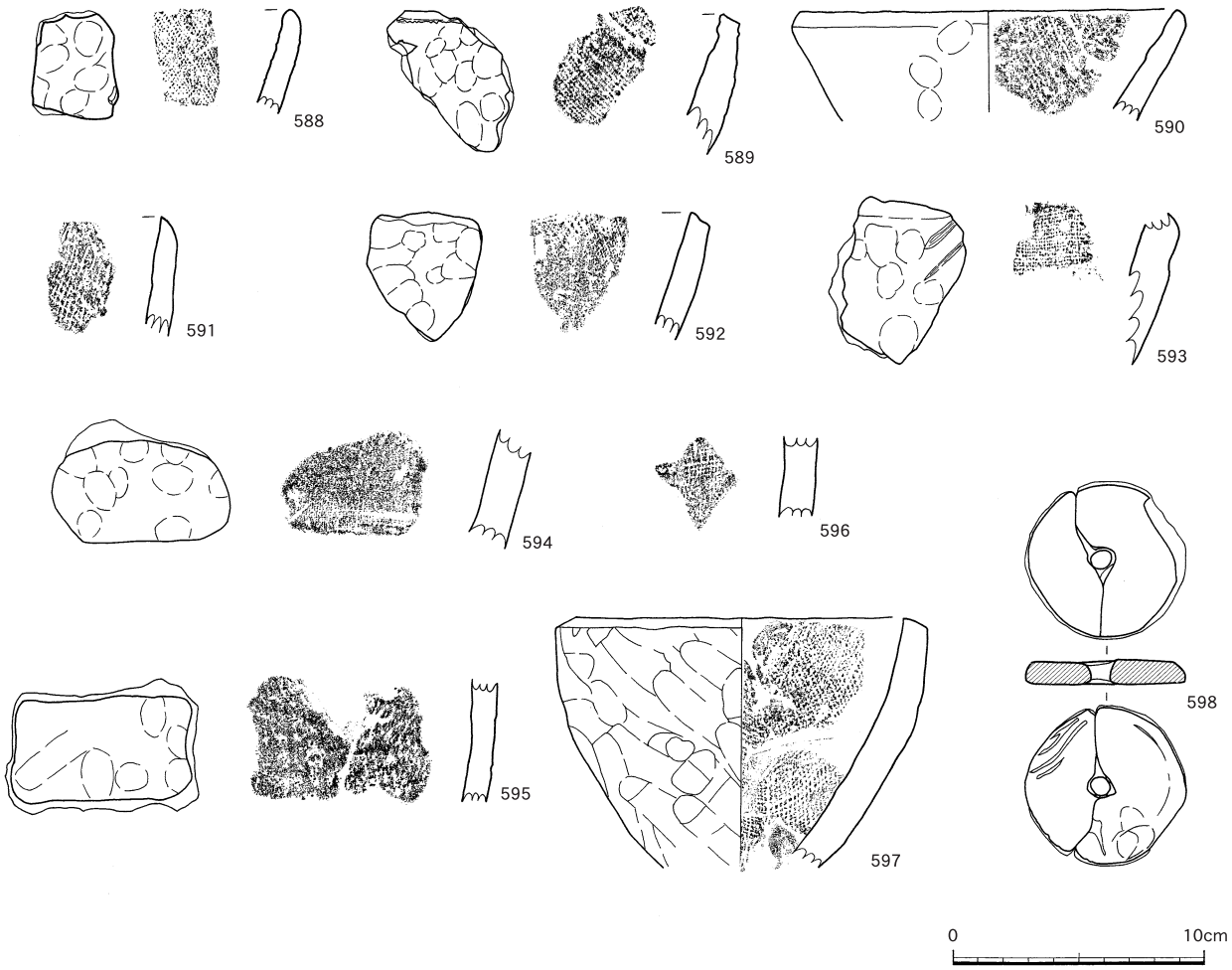
586は底部の形からしか判断できないが，おそらくは体部が砲弾形を呈し，頸部にかけてすぼまる壺ではないかと思われる。ただし，瓶の可能性もある。

蓋（第151図587）

587は蓋で，天井部は欠損しているため全体形は不明である。器形としては，端部にかけてゆるやかに外反している。外面にはロクロ目が筋状に残るが，非常に丁寧な作りである。

⑶ **焼塩土器**（第152図588～597）

588～597は焼塩土器である。出土区はⅠ－46～48区を中心としている。いずれも，胎土中に小石を含む砂粒が多量に混ざり，外面に指圧痕の多いナデ調整が施し表面が凸凹しているなど粗雑な作



第152図　中央部　古代の土器⑺

りである。焼成が弱く軟質であり，色調は赤橙色である。内面全体に細かい目を持つ布圧痕が明瞭に残る。器壁が厚く，先細りの口縁部を呈し，口縁部のみのため全体形は不明であるが，やや開き気味の直線的な口縁部を持つ鉢型を呈すると考えられる。

⑷ **紡錘車**（第152図598）

598は紡錘車で，Ⅰ－48区で出土した。土師器の胴部を取り除き，平たい円盤状をした底面の中心に孔を穿っている。底部に回転ヘラ切りによる切り離し痕が認められる。縁部をていねいに削り取り，円盤状に作り上げている。平坦面を磨り潰しながら調整し，表面の凸凹をある程度消している。

4　中世～近世

狩俣遺跡では，天地返し等で包含層が削平されている所が多かったため，中世～近世の遺物量は少なかった。しかも小破片が多く，図化するのが難しかった。計９点を図化した。

⑴ **龍泉窯系青磁**（第153図599～601）

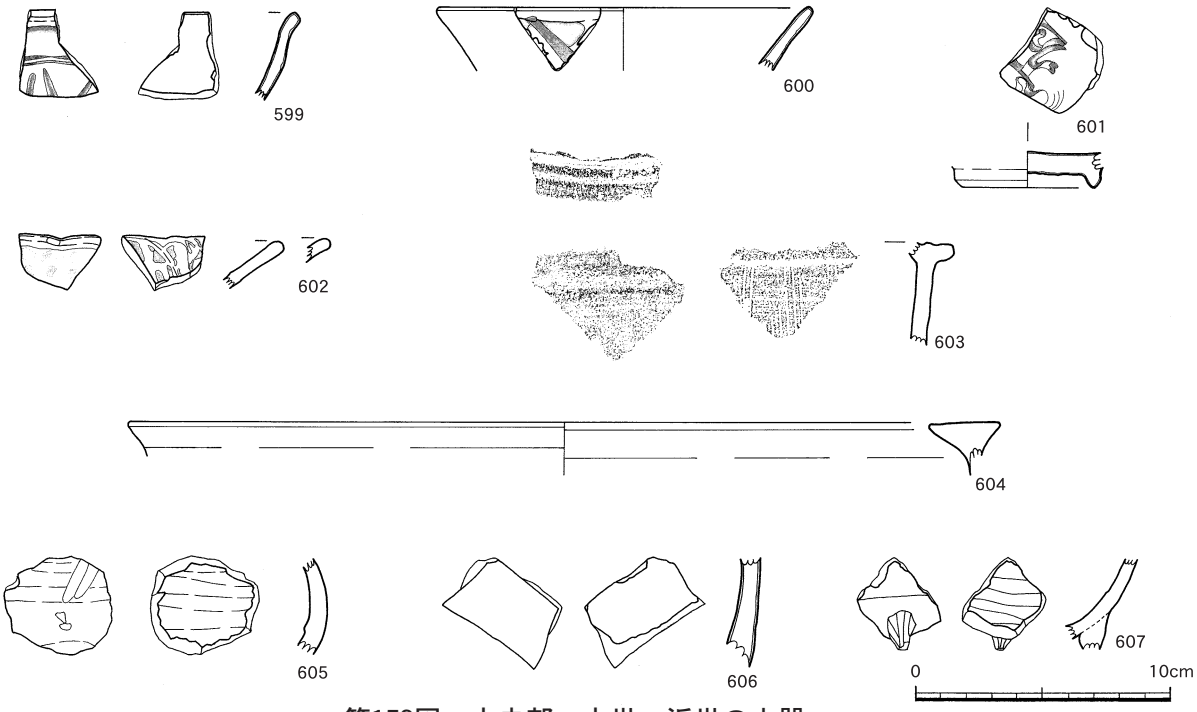
599～601は龍泉窯系の青磁である。599は碗の口縁部の破片である。口縁端部は丸く，緩やかに外反し，外面には連弁文がみられる。600は碗の口縁部の破片である。口縁部は直線的に立ち上がり，外面には鎬連弁文がみられる。601は碗の底部で，高台外面まで施釉を行い，高台内は無釉である。

⑵ **陶器**（第153図602）

602は稜花皿である。口縁部は直線的に開いている。北部九州系のものと思われる。

⑶ **薩摩焼**（第153図603～607）

603は擂り鉢の口縁部である。口唇部の釉はふきとられている。604は甕の口縁部で，口唇部の釉はふきとられ，貝目が残る。605は甕の胴部である。その形状から，メンコとして転用した可能性がある。606は甕の胴部である。607は土瓶の底部である。外底面は露胎する。脚部には煤が付着しており，使用されたものであることが確認できる。



第153図　中央部　中世～近世の土器

第16表　中央部　土器観察表(1)

挿図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整		色調		胎土						分類	備考
										外面	内面	外面	内面	長石	石英	角閃	雲母	砂粒	その他		
124	183	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	27.0	—	—	貝殻条痕文 口唇部刻目	ナデ	灰褐	褐		○				赤色粒	Ⅰa	
	184	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	11.4	—	—	貝殻条痕文 口唇部刻目	貝殻条痕文	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○			赤色粒	Ⅰa	
	185	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	22.0	—	—	貝殻条痕文 口唇部刻目	ナデ	灰黄褐	にぶい黄褐	○	○	○			赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅰa	
	186	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	10.8	—	—	貝殻条痕文 口唇部刻目	条痕	灰黄褐	にぶい黄橙		○				赤色粒 カンラン石	Ⅰa	
	187	22T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	11.2	—	—	口唇部刻目 条痕	ナデ	にぶい赤褐	橙	○	○					Ⅰa	
	188	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	—	—	—	貝殻条痕文 口唇部刻目	ナデ	灰黄褐	にぶい黄褐		○	○			赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅰa	
	189	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	—	—	—	貝殻条痕文 口唇部刻目	ナデ	褐	にぶい褐	○	○				赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅰa	
	190	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	—	—	—	貝殻条痕文 口唇部刻目	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙			○			赤色粒	Ⅰa	
	191	—	表採	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	—	—	—	貝殻条痕文	条痕	にぶい褐	にぶい褐		○					Ⅰa	
	192	23T	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	—	—	—	貝殻条痕文 口唇部刻目	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○				赤色粒	Ⅰa	
	193	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	橙	褐灰			○			赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅰa	
	194	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	—	—	—	貝殻条痕文 口唇部刻目	ナデ	にぶい黄褐	灰黄褐		○	○				Ⅰa	
	195	22T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	10.2	—	—	口唇部刻目 条痕	ナデ	橙	橙			○			チタン鉄鉱	Ⅰa	
	196	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	—	—	—	貝殻条痕文 口唇部刻目	ナデ	黒褐	にぶい黄橙	○	○				赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅰa	
	197	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	—	—	—	貝殻条痕文 口唇部刻目	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙				○			Ⅰa	
	198	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○	○			赤色粒 カンラン石	Ⅰa	
	199	23T	—	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	—	—	—	条痕	ナデ	褐灰	橙	○		○	○	○	赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅰa	住居跡
	200	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい赤褐	橙	○	○	○			赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅰa	
	201	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐			○			赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅰa	
	202	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	褐	にぶい褐						チタン鉄鉱	Ⅰa	
125	203	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	橙	灰褐	○	○	○			赤色粒	Ⅰa	住居跡
	204	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	橙	にぶい橙	○	○	○			赤色粒 カンラン石	Ⅰa	住居跡
	205	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	橙	橙	○	○	○			赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅰa	
	206	I-35	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐		○		○	○		Ⅰa	
	207	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい褐			○	○		赤色粒	Ⅰa	
	208	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	にぶい橙	にぶい褐		○				赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅰa	
	209	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい赤褐	○	○				赤色粒	Ⅰa	
	210	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	貝殻条痕文	橙	にぶい橙			○			赤色粒	Ⅰa	
	211	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	条痕	褐	にぶい褐				○			Ⅰa	
	212	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐		○				赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅰa	
	213	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	褐	灰褐	○	○				赤色粒	Ⅰa	
	214	23T	—	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい褐	にぶい橙			○			赤色粒	Ⅰa	住居跡
	215	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	褐	褐	○	○	○			赤色粒	Ⅰa	
	216	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○		○			赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅰa	
	217	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	貝殻条痕文	にぶい褐	にぶい橙		○				赤色粒	Ⅰa	
	218	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい黄褐			○				Ⅰa	
	219	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙			○			チタン鉄鉱	Ⅰa	
	220	G-42	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕文	ナデ	にぶい橙	灰黄褐		○			○	赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅰa	
	221	23T	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	条痕	灰褐	にぶい褐	○	○					Ⅰa	
	222	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	褐灰	にぶい褐				○		赤色粒	Ⅰa	
	223	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	条痕	にぶい黄橙	にぶい褐			○			赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅰa	
	224	22T	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	条痕	にぶい橙	灰褐			○			チタン鉄鉱	Ⅰa	
	225	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい褐	褐		○					Ⅰa	
	226	23T	—	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい褐	褐灰	○	○	○			赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅰa	住居跡
	227	23T	—	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	灰褐	にぶい灰褐	○			○	○		Ⅰa	土坑2
126	228	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	17.0	—	—	口唇部刻目 条痕	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐						チタン鉄鉱	Ⅰb	
	229	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	12.6	—	—	横刻	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○	○			赤色粒	Ⅰb	
	230	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	11.6	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○				赤色粒 カンラン石	Ⅰb	
	231	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	10.4	—	—	貝殻条痕文	ナデ	黄褐	暗褐	○	○	○				Ⅰb	
	232	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	—	—	—	条痕	ナデ	にぶい橙	にぶい橙		○					Ⅰb	
	233	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○			赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅰb	
	234	K-41	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙		○			○		Ⅰb	
	235	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	にぶい橙	にぶい褐	○	○				赤色粒 カンラン石	Ⅰb	
	236	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	褐		○	○			赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅰb	
	237	23T	—	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐		○					Ⅰb	住居跡
	238	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	橙	にぶい褐	○	○				赤色粒	Ⅰb	
	239	23T	—	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	にぶい褐	にぶい褐			○			赤色粒	Ⅰb	
	240	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	褐灰			○				Ⅰb	
	241	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○				チタン鉄鉱	Ⅰb	
	242	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	橙	灰褐		○					Ⅰb	

第17表　中央部　土器観察表(2)

挿図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整		色調		胎土						分類	備考
										外面	内面	外面	内面	長石	石英	角閃	雲母	砂粒	その他		
126	243	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	橙	褐			○				Ⅰb	
	244	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	灰黄褐	にぶい褐	○					赤色粒	Ⅰb	
	245	L-35	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐		○			○	小石	Ⅰb	
	246	23T	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	灰褐	○	○				赤色粒	Ⅰb	
	247	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	灰褐	灰褐		○				赤色粒	Ⅰb	
	248	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	橙	にぶい橙		○					Ⅰb	
	249	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐		○					Ⅰb	
	250	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	橙		○				カンラン石	Ⅰb	
	251	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○					Ⅰb	
	252	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	褐	褐	○	○	○			カンラン石	Ⅰb	
127	253	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙		○				赤色粒	Ⅰ	
	254	23T	—	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	橙	褐灰	○			○	○	赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅰ	住居跡
	255	23T	—	縄文土器（早期）	深鉢	底部	—	10.0	—	条痕	ナデ	にぶい褐	橙		○					Ⅰ	
	256	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	底部	—	—	—	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○					Ⅰ	底部に穿孔
	257	22T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	底部	—	—	—	条痕	ナデ	にぶい赤褐	橙			○			赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅰ	
	258	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	底部	—	13.2	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○			チタン鉄鉱	Ⅰ	
	259	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	底部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	橙			○			赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅰ	
	260	23T	—	縄文土器（早期）	深鉢	底部	—	—	—	条痕	ナデ	にぶい褐	にぶい褐		○			○	チタン	Ⅰ	住居跡
	261	23T	—	縄文土器（早期）	深鉢	底部	—	11.6	—	条痕	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○	○		赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅰ	土坑3
	262	23T	—	縄文土器（早期）	深鉢	底部	—	—	—	条痕	ナデ	にぶい橙	にぶい褐		○					Ⅰ	住居跡
	263	23T	—	縄文土器（早期）	深鉢	底部	—	—	—	条痕	ナデ	にぶい橙	灰褐	○		○	○	○	赤色粒	Ⅰ	土坑5
128	264	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○				Ⅱ	
	265	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	灰褐	にぶい橙	○	○	○			赤色粒	Ⅱ	
	266	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐		○					Ⅱ	
	267	23T	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	橙	橙	○	○				赤色粒	Ⅱ	
	268	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	橙	橙		○	○			赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅱ	
	269	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	橙	橙	○	○	○			赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅱ	
	270	23T	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	橙	暗褐			○			赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅱ	
	271	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部～底部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○		Ⅱ	
	272	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕 沈線	条痕	にぶい橙	にぶい橙		○					Ⅲ	
	273	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	橙	にぶい褐						赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅳ	
	274	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部～底部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○		○		赤色粒	Ⅳ	
	275	23T	Ⅶ,Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	23.2	—	—	貝殻条痕文 口唇部刻目	ナデ	橙	にぶい橙			○		○	赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅴ	
	276	23T	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	15.2	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄	にぶい黄橙				○			Ⅴ	
	277	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙						赤色粒	Ⅴ	
	278	L-35	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			○	小石	Ⅴ	
	279	23T	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙			○			赤色粒	Ⅴ	
	280	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○				赤色粒	Ⅴ	
	281	23T	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						チタン鉄鉱	Ⅴ	
	282	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	条痕	灰黄褐	にぶい褐			○			赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅴ	
	283	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部～底部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	橙	橙	○	○	○			赤色粒	Ⅴ	
	284	23T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	底部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	橙	橙			○			赤色粒 チタン鉄鉱	Ⅴ	
129	285	J-31	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	22.2	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○		○	○		Ⅵ	
	286	K-43	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	—	—	—	刺突文	ナデ	橙	にぶい黄橙				○	○		Ⅵ	
	287	H-39	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	—	—	—	刺突文	ナデ	灰黄	灰黄		○			○	赤色粒	Ⅵ	
	288	J-31	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○		○		小石	Ⅵ	
	289	J-31	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙				○		赤色粒 小石	Ⅵ	
	290	I-38	Ⅶb	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	—	—	—	貝殻押型文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐				○	○	赤色粒 小石	Ⅵ	
	291	K-43	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙					密		Ⅵ	
	292	K-43	Ⅶ Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	刺突文	ナデ	橙	にぶい赤褐				○	○		Ⅵ	
	293	J-31	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	刺突文	ナデ	にぶい橙	黒褐				○	○	赤色粒	Ⅵ	
	294	G-48	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○		○	カンラン石	Ⅵ	集石20号
	295	K-43	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	刺突文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙				○	○		Ⅵ	
	296	J-31	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	刺突文	条痕	にぶい橙	黒褐		○		○	○		Ⅵ	
	297	J-31	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	キザミ目 条痕	ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙			○		○		Ⅵ	
	298	G-48	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	橙	橙		○			○		Ⅵ	集石20号
	299	L-31	Ⅳ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	刺突文	ナデ	にぶい橙	にぶい褐					○	チタン鉄鉱 小石	Ⅵ	
	300	L-31	Ⅲb	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	刺突文	ナデ	にぶい橙	にぶい褐			○		○	小石	Ⅵ	
	301	J・K-31	Ⅶ Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	底部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐				○	○	小石	Ⅵ	
	302	K-31	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部～底部	—	15.4	—	条痕	ナデ	明褐	にぶい褐				○	○	赤色粒 小石	Ⅵ	

第18表　中央部　土器観察表(3)

挿図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整		色調		胎土						分類	備考
										外面	内面	外面	内面	長石	石英	角閃	雲母	砂粒	その他		
129	303	I-35	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	—	—	—	条痕	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐				○		小石	Ⅶ	
	304	H-45	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	沈線	ナデ	にぶい褐	黒褐				○	○		Ⅶ	
	305	I-35	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ケズリ→ナデ	明赤褐	にぶい赤褐				○	○	赤色粒 小石	Ⅶ	
	306	H-46	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	橙	灰褐		○	○	○	密	チタン鉄鉱	Ⅷ	
130	307	I-35	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	—	—	—	押型文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙		○		○	○		IXa	
	308	K-37,38	Ⅶ Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	24.9	—	—	ナデ	押型文	にぶい黄褐	にぶい黄橙				○	○	赤色粒 小石	IXa	
	309	K-37,38	Ⅶ Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	25.0	—	—	ナデ	押型文	にぶい黄褐	にぶい黄橙		○		○	○		IXa	
	310	K-38	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	山形押型文	ナデ	にぶい褐	灰黄褐		○		○	○	赤色粒	IXa	
	311	K-37,38	Ⅶ Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	山形押型文	ナデ	褐	にぶい黄橙				○	○	赤色粒・小石 チタン鉄鉱	IXa	
	312	K-38	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	山形押型文	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐				○	○		IXa	
	313	K-37	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	山形押型文	ナデ	にぶい褐	褐				○	○	赤色粒 小石	IXa	
	314	J-32	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	押型文	ナデ	にぶい褐	灰黄褐				○	○	赤色粒	IXa	
	315	K-38	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	山形押型文	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙				○	○	小石	IXa	
	316	H-39	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	押型文	ナデ	にぶい黄橙	黒褐		○			○		IXa	
	317	J-37	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	押型文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐		○		○	○	赤色粒 小石	IXa	
	318	H-39	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	押型文	ナデ	黒褐	褐				○	○	赤色粒 小石	IXa	
	319	H-39	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	押型文	ケズリ	にぶい褐	にぶい褐				○	○	赤色粒	IXa	
	320	J-45	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	押型文	ナデ	にぶい褐	褐				○	○		IXa	
	321	I-39 J-34	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	押型文	ナデ	にぶい褐	褐灰				○	○	赤色粒	IXa	
	322	I-39	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	押型文	ナデ	褐灰	にぶい褐				○	○	赤色粒 小石	IXa	
	323	H-39	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	押型文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐				○	○	赤色粒 小石	IXa	
	324	L-35	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐				○	○		IXa	集石8号
	325	L-35	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文→ナデ	ナデ	褐	黒褐				○	○		IXa	
	326	I-39	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	ナデ	灰黄褐	黒褐				○	○		IXa	
131	327	J-33	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～胴部	—	—	—	条痕	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○	赤色粒・小石 チタン鉄鉱	IXb	
	328	J-32	Ⅶ Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			○	赤色粒 小石	IXb	
	329	J-31	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○		○	赤色粒 小石	IXb	
	330	J-32	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			○	赤色粒 小石	IXb	
	331	J-32	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙					○	赤色粒・小石 チタン鉄鉱	IXb	
	332	J-33	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙			○		○	赤色粒・小石 チタン鉄鉱	IXb	
	333	J-30 J-33	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			○	小石	IXb	
	334	J-32	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙			○		○	小石	IXb	
	335	J-32	Ⅶ Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕 押型文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙			○		○	小石	IXb	
	336	J-31,32	ⅦⅧ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	山形押型文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙			○		○	赤色粒 小石	IXb	
	337	J-32	Ⅶ Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部～底部	—	15.8	—	山形押型文	条痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙			○		○	小石	IXb	網代底
	338	J-32,33	Ⅶ,Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕 押型文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○		○	チタン鉄鉱 小石	IXb	
132	339	H-51	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部～底部	22.6	4.8	21.0	撚糸文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○	○		赤色粒	X	
134	340	K-33	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	—	—	—	条痕	条痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙					○	チタン鉄鉱	X	
	341	G-44	Ⅵa	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文 押型文，沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい橙			○		○		XI	
	342	H-43	Ⅵa	縄文土器（早期）	深鉢	口縁部	—	—	—	押型連点文 沈線	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐		○			○		XI	
	343	24T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	ナデ ミミズバレ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐		○		○	○	小石	XII	
	344	24T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	ナデ ミミズバレ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐		○		○	○	小石	XII	一括
	345	24T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	ナデ ミミズバレ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐		○		○	○	小石	XII	一括
	346	24T	Ⅷ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	ナデ ミミズバレ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐		○		○	○	小石	XII	一括
	347	12T	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻条痕文	剥離	明赤橙	—	○	○			○		XII	住居跡
	348	L-42	Ⅳ	縄文土器（早期）	浅鉢	口縁部	—	—	—	圧痕	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐		○			○		XII	
	349	K-42	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	底部	—	7.8	—	押型文 ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐		○		○	○		XI～XII	
	350	J-45	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	底部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙				○	○		XI～XII	
	351	L-26	IIIb	縄文土器（早期）	浅鉢	底部	—	—	—	工具ナデ	ミガキ	にぶい褐	褐灰		○			○	赤色粒 チタン鉄鉱	XI～XII	
	352	I-42	Ⅶ	縄文土器（早期）	深鉢	底部	—	6.4	—	ナデ	ナデ	橙	黒褐		○			○		XI～XII	
	353	I-35	Ⅳ	縄文土器（早期）	浅鉢	底部	—	7.4	—	ナデ	工具ナデ	にぶい褐	明褐					○	チタン鉄鉱	XI～XII	
135	354	J-31	IIIb	縄文土器（前期）	深鉢	胴部	—	—	—	張付突帯 条痕→ナデ	条痕	褐	褐		○				小石	XIII	
	355	—	表採	縄文土器（前期）	深鉢	口縁部	—	—	—	条痕 口唇部刻目	工具ナデ	黒褐	黒褐	○	○	○				XIII	
	356	I-49	Ⅳ	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	—	—	—	押型文	ナデ	黒褐	にぶい黄橙		○	○		○		XV	
	357	I-49	IIIb	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	—	—	—	押型文	ナデ	黄橙	黒褐		○			○		XV	
	358	I-49	IIIb	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	—	—	—	押型文	ナデ	にぶい黄橙	黒褐		○			○	チタン鉄鉱	XV	
	359	H-49	Ⅳ	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	—	—	—	押型文	工具ナデ	黒褐	灰黄褐					○	チタン鉄鉱	XV	
	360	H-49 I-49	Ⅳ	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	—	—	—	押型文	工具ナデ	にぶい黄橙	黒褐		○			○		XV	
136	361	K-31	Ⅳ	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	—	—	—	ナデ 沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい橙			○		○	赤色粒 小石	XVI	
	362	H-52	IIIa	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	—	—	—	ナデ 沈線	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐				○	○	赤色粒	XVI	

第19表　中央部　土器観察表(4)

挿図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整		色調		胎土						分類	備考
										外面	内面	外面	内面	長石	石英	角閃	雲母	砂粒	その他		
136	363	J-46	IIIb	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	—	—	—	ナデ 沈線	ナデ	明赤褐	にぶい赤褐		○			○	赤色粒 小石	XVI	
	364	K-31	IV	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	—	—	—	ナデ 沈線	ナデ	にぶい黄褐	橙		○			○	赤色粒	XVI	
	365	K-26	IIIb	縄文土器（後期）	深鉢	口縁部	—	—	—	ナデ 沈線	ナデ 沈線	橙	にぶい橙			○		○	赤色粒	XVI	
	366	H-36	IIIb	縄文土器（後期）	深鉢	口縁部	—	—	—	ナデ 沈線	ナデ	褐	にぶい褐		○				細砂少混	XVI	
	367	H-36	IIIb	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	—	—	—	ナデ 沈線	ナデ	橙	にぶい黄橙			○		○		XVI	
	368	K-35	IIIb	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	—	—	—	ナデ 沈線	ナデ	橙	橙				○	○	赤色粒 小石	XVI	
	369	K-35	IIIb	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	—	—	—	ナデ 沈線	ナデ	にぶい褐	にぶい褐				○	○	赤色粒 小石	XVI	
	370	K-31	IIIb	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	—	—	—	ナデ 沈線	ナデ	橙	橙		○			○	赤色粒 小石	XVI	
	371	L-33	IIIb	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	—	—	—	ナデ 沈線	ナデ	明赤褐	明赤褐				○	○	赤色粒	XVI	
	372	K-31	IV	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	—	—	—	ナデ 沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい橙		○			○	赤色粒 小石	XVI	
	373	K-32	IV	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	—	—	—	ナデ 沈線	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐				○	○		XVI	
	374	H-38	VIb	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ケズリ	黒褐	にぶい褐				○	○		XVI	
	375	I-38	VII	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ケズリ	黒褐	褐				○	○	赤色粒 小石	XVI	
137	376	—	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	口縁部～胴部	—	—	—	ヘラ状ナデ	ヘラ状ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙	○	○					XVIIA-a	
	377	H-43	表採	縄文土器（晩期）	鉢	口縁部	—	—	—	ナデ	工具ナデ	暗褐	褐		○			○	赤色粒	XVIIA-a	一括
	378	—	表採	縄文土器（晩期）	深鉢	口縁部	—	—	—	ナデ 口唇部連点文	ナデ	黒褐	黒褐	○	○	○			チタン鉄鉱	XVIIA-a	
	379	H-43	表採	縄文土器（晩期）	鉢	胴部	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	灰褐	にぶい褐					○	赤色粒 チタン鉄鉱	XVIIA-a	一括
	380	—	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	工具ナデ	ナデ→ミガキ	橙	にぶい黄橙	○	○				赤色粒 チタン鉄鉱	XVIIA-a	
	381	J-32	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐		○			○		XVIIA-a	
	382	—	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒 チタン鉄鉱	XVIIA-a	
	383	24T	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	丁寧なナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐		○			○	赤色粒・小石 チタン鉄鉱	XVIIA-a	
	384	K-30	IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○		○		XVIIA-a	スス付着
	385	—	表採	縄文土器（晩期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	にぶい黄褐	黒褐	○	○					XVIIA-a	
	386	24T	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	ハケメ→ミガキ	ケズリ→ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙		○	○		○	赤色粒 小石	XVIIA-a	
	387	23T	—	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	ナデ ミガキ	ナデ	褐	褐		○				赤色粒	XVIIA-a	表土一括
	388	—	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	張付突帯 ナデ→ミガキ	条痕，ナデ ミガキ	にぶい黄橙	黄褐		○		○			XVIIA-a	
	389	23T	—	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	ナデ ミガキ	ナデ	明赤褐	明赤褐		○			○	チタン鉄鉱	XVIIA-a	表土一括
	390	23T	—	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	明赤褐		○					XVIIA-a	表土一括
	391	—	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	張付突帯 ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		○			XVIIA-a	
	392	L-34	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙		○			○		XVIIA-a	
	393	L-26	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	赤褐	黒褐		○			○	小石	XVIIA-a	
	394	K-26	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部～底部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい橙		○			○	チタン鉄鉱	XVIIA-a	
	395	23T	IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部～底部	—	11.2	—	ナデ 指圧痕	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐			○				XVIIA-a	表土一括
138	396	24T	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	口縁部～胴部	21.6	—	—	張付突帯2条 板ナデ→ナデ	ナデ	にぶい黄橙	黒褐		○	○		○	チタン鉄鉱 小石	XVIIA-b	補修孔
	397	L-19	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	工具ナデ 張付突帯	板ナデ→ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○		○	○	赤色粒 小石	XVIIA-b	
	398	I-33 I-35	IIIb IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	口縁部～胴部	31.2	—	—	条痕	口唇部→貝殻条痕文 口縁→張付突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙			○		○	小石	XVIIA-b	
	399	—	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	口縁部	—	—	—	ナデ 張付突帯	ナデ	黒褐	にぶい黄褐	○	○		○			XVIIA-b	
	400	—	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	口縁部～胴部	—	—	—	張付突帯 ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○					XVIIA-b	
	401	—	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	口縁部	—	—	—	ナデ 張付刻目突帯	ハケメ→ナデ	黒褐	灰黄褐			○		○	赤色粒	XVIIA-b	
	402	—	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	ナデ 口唇部刻目	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒	XVIIA-b	
	403	—	表採	縄文土器（晩期）	深鉢	口縁部	—	—	—	口唇部刻目 ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙					密		XVIIA-b	
	404	—	表採	縄文土器（晩期）	深鉢	口縁部	—	—	—	張付突帯 ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	褐灰	○	○					XVIIA-b	
	405	—	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	口縁部	—	—	—	張付突帯 ナデ	ナデ	黒褐	褐		○	○				XVIIA-b	
	406	—	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	ナデ 張付突帯	ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙			○				XVIIA-b	
	407	—	表採	縄文土器（晩期）	甕	胴部	—	—	—	張付突帯 ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙		○				チタン鉄鉱	XVIIA-b	
139	408	J-31	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	口縁部～底部	28.0	7.6	15.2	工具ナデ	丁寧なナデ ミガキ	浅黄橙	浅黄橙		○			○	赤色粒	XVIIB	赤色顔料
	409	J-31	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	口縁部～胴部	27.4	—	—	ナデ	ナデ	にぶい褐	褐		○	○		○	赤色粒	XVIIB	赤色顔料
	410	K-30	IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	ミガキ	ミガキ	褐灰	にぶい黄橙					○	カンラン石	XVIIB	
140	411	J-37	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	口縁部～胴部	44.2	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○		○		XVIIC-a	
	412	J-31	IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	口縁部～胴部	36.2	—	—	工具ナデ	ナデ 指圧痕	灰黄	浅黄	○	○	○		○		XVIIC-a	スス付着
	413	K･L-30	IIIb IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	口縁部～胴部	18.4	—	—	工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙			○		○		XVIIC-a	スス付着
	414	J-30	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	口縁部	—	—	—	工具ナデ	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○		○	チタン鉄鉱	XVIIC-a	
	415	K-32	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	口縁部～胴部	—	—	—	工具ナデ	ミガキ	黒褐	褐		○	○		○		XVIIC-a	
	416	K-36	IIIa	縄文土器（晩期）	深鉢	口縁部	—	—	—	指圧痕 板ナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○		○	赤色粒 チタン鉄鉱	XVIIC-a	
	417	H-36	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	口縁部	—	—	—	ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい赤褐	褐灰				○	○	赤色粒	XVIIC-a	
	418	L-30	IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	口縁部	—	—	—	工具ナデ→ナデ	ナデ	黒褐	にぶい黄橙	○	○	○	○	○		XVIIC-a	
	419	J-2	IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	口縁部	—	—	—	工具ナデ→ナデ	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙		○	○		○		XVIIC-a	
	420	24T	—	縄文土器（晩期）	浅鉢	口縁部	—	—	—	張付突帯 ヨコナデ	ナデ	褐灰	にぶい黄橙		○			○	赤色粒 小石	XVIIC-a	
	421	K-32	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	口縁部	—	—	—	工具ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙			○		○		XVIIC-a	スス付着
	422	—	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	口縁部～胴部	—	—	—	ヘラ状ナデ	ヘラ状ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	○	○					XVIIC-a	

第20表　中央部　土器観察表(5)

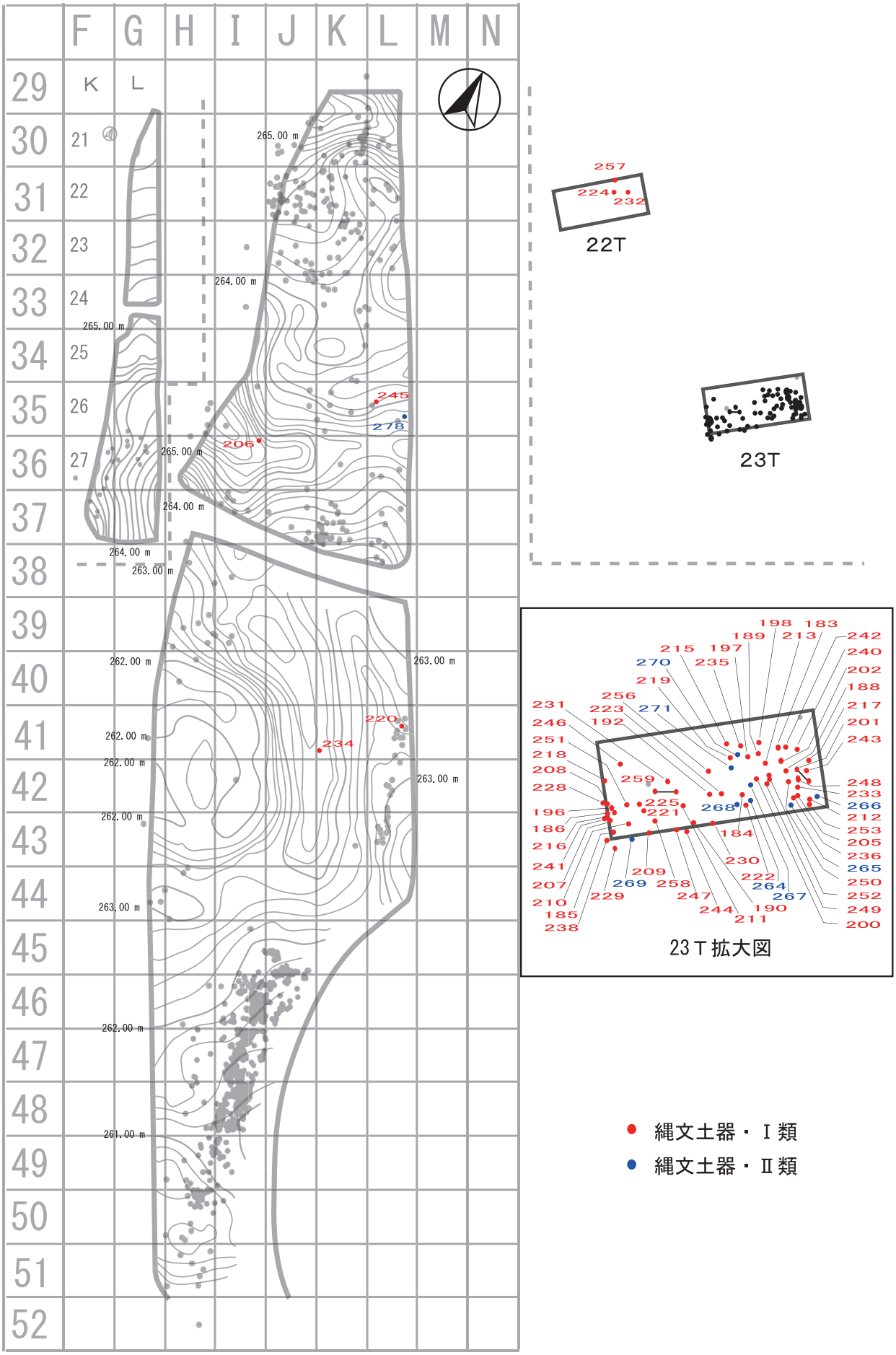
挿図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整		色調		胎土						分類	備考
										外面	内面	外面	内面	長石	石英	角閃	雲母	砂粒	その他		
	423	24T	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	明褐	黒褐		○		○	○		XVIIC-a	
	424	L-26	IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	ミガキ	ナデ	明赤褐	橙	○	○			○		XVIIC-a	
	425	L-31	IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	ナデ	工具ナデ 指圧痕	にぶい黄橙	灰黄褐	○	○	○		○	チタン鉄鉱	XVIIC-a	
	426	L-26	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			○	小石	XVIIC-a	
	427	L-26	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	ナデ 指圧痕	ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			○	赤色粒・小石 チタン鉄鉱	XVIIC-a	
	428	—	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	工具ナデ	ナデ→ミガキ	にぶい黄褐	にぶい黄橙			○			赤色粒 チタン鉄鉱	XVIIC-a	
	429	L-26	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	板ナデ→ナデ	ナデ	にぶい赤褐	黒褐		○			○	赤色粒	XVIIC-a	
	430	L-26	IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	ナデ→ミガキ	ナデ	赤褐	黒褐		○			○		XVIIC-a	
	431	K-31	IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	黒褐	にぶい黄褐	○				○		XVIIC-a	
141	432	22T	IV	縄文土器（晩期）	深鉢	胴部	—	—	—	条痕	ナデ	褐	にぶい赤褐		○		○			XVIIC-a	一括
	433	K-30	IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	工具ナデ	丁寧なナデ	にぶい褐	にぶい褐			○		○	赤色粒 チタン鉄鉱	XVIIC-a	
	434	L-26	IIIb IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	赤褐	にぶい赤褐		○			○		XVIIC-a	スス付着
	435	H-36	IIIa	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	ナデ	工具ナデ	明赤褐	褐灰		○			○		XVIIC-a	
	436	K-34	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○		○		XVIIC-a	
	437	J-32	IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	工具ナデ→ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	○	○			○	チタン鉄鉱	XVIIC-a	
	438	K-30	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	工具ナデ	ナデ→ミガキ	にぶい黄橙	黒褐		○			○		XVIIC-a	スス付着
	439	J-31	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	工具ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙		○	○		○		XVIIC-a	スス付着
	440	K-30	IIIb IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐		○	○		○		XVIIC-a	スス付着
	441	K-32	IIIb IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	灰黄褐		○			○	赤色粒 チタン鉄鉱	XVIIC-a	
	442	K-30	IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	工具ナデ	ナデ ミガキ	にぶい黄橙	黒褐		○		○	○		XVIIC-a	スス付着
	443	J•K-31 L-32	IIIb IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部～底部	—	24.0	—	工具ナデ→ナデ	工具ナデ→ナデ	浅黄	浅黄	○	○	○		○		XVIIC-a	スス付着
	444	J•K-31 K-30	IIIb IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	圧痕	丁寧なナデ ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄		○	○		○		XVIIC-a	
	445	J-31	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	浅黄橙		○			○	赤色粒	XVIIC-a	
142	446	L-31 J-34	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	ナデ	工具ナデ→ナデ	にぶい黄	にぶい黄		○			○		XVIIC-a	
	447	L-31	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	○	○			○		XVIIC-a	
	448	K-32	IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐		○	○		○		XVIIC-a	
	449	J-31	IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○		○		XVIIC-a	
	450	J-32	IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	ナデ	ナデ	浅黄	浅黄	○	○			○		XVIIC-a	
	451	—	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	布圧痕 ナデ	ナデ ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○		○			XVIIC-b	
	452	K-30	IIIb IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	圧痕	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐		○			○		XVIIC-b	
	453	L-43	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部	—	—	—	工具ナデ	ヨコナデ	黒褐	明褐		○			○		XVIIC-b	
	454	J-31	IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	6.6	—	圧痕	丁寧なナデ	にぶい黄橙	浅黄橙		○			○	シソ輝石	XVIIC-b	
	455	K-32	IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	組織痕	ミガキ	にぶい黄褐	黒褐	○				○		XVIIC-b	
	456	24T	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	圧痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙					○	チタン鉄鉱	XVIIC-b	
	457	—	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	ナデ 布圧痕	ミガキ	橙	黒褐			○			チタン鉄鉱	XVIIC-b	
	458	J-31	III	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	圧痕	ミガキ	にぶい褐	黒褐		○			○		XVIIC-b	
143	459	J-30	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	圧痕	丁寧なナデ	浅黄橙	淡黄		○			○	チタン鉄鉱	XVIIC-b	
	460	—	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	布圧痕	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐	○	○					XVIIC-b	
	461	K-31	IIIb IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	圧痕	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐		○	○		○	チタン鉄鉱	XVIIC-b	
	462	J-30	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	圧痕	丁寧なナデ	褐灰	浅黄橙		○			○	チタン鉄鉱	XVIIC-b	
	463	J-31	IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	圧痕	ミガキ	にぶい褐	黒褐		○			○		XVIIC-b	
	464	—	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	布圧痕	ナデ	橙	褐灰						赤色粒 チタン鉄鉱	XVIIC-b	
	465	K-30	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	圧痕	ミガキ	浅黄橙	浅黄橙					○	カンラン石	XVIIC-b	
	466	—	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	布圧痕	ナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	○	○					XVIIC-b	
	467	—	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	布圧痕	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○					XVIIC-b	
	468	J•K-31	IIIb IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部～底部	—	18.6	—	組織痕	ミガキ	明褐	黒褐		○	○		○		XVIIC-c	
	469	J-32	III	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	組織痕	ミガキ	褐	黒褐		○			○		XVIIC-c	
	470	K-31	IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	組織痕	ミガキ	にぶい褐	黒褐	○	○			○		XVIIC-c	
144	471	J-31	IV	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	組織痕	ミガキ	にぶい黄褐	黒褐	○	○			○		XVIIC-c	
	472	J-30	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	圧痕	ミガキ	にぶい黄橙	灰黄	○	○	○		○		XVIIC-c	
	473	L-37	IVa	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	組織痕	ミガキ	にぶい橙	黒褐		○			○		XVIIC-c	
	474	—	表採	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	布圧痕	ナデ	橙	にぶい褐				○		赤色粒	XVIIC-c	
	475	L-30	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	○		○		○			円盤形土製品
	476	J•K-37	IIIb	古墳土器	甕	口縁部～胴部	26.8	—	—	ハケメ，ナデ 刻目突帯	ハケメ→ナデ	にぶい橙	橙		○			○	赤色粒 カンラン石		スス付着
	477	J-37	IIIb	古墳土器	甕	口縁部～胴部	—	—	—	ハケメ→ナデ 刻目突帯	ハケメ→ナデ	にぶい橙	橙		○			○	輝石 赤色粒		
	478	J-37	IIIb	古墳土器	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ハケメ→ナデ	橙	橙	○	○			○	カンラン石		
145	479	J-37,38	IIIb	古墳土器	甕	胴部	—	—	—	ハケメ，ナデ 刻目突帯	ハケメ→ナデ	橙	橙		○			○			
	480	—	表採	古墳土器	甕	胴部	—	—	—	張付突帯	ナデ	にぶい黄橙	褐灰						チタン鉄鉱		
	481	J-31 K-38	IIIb	古墳土器	甕	胴部	—	—	—	ハケメ，ナデ 刻目突帯	ハケメ→ナデ	にぶい赤褐	橙		○			○	赤色粒		
	482	-	表採	古墳土器	甕	胴部	—	—	—	張付突帯	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						スス付着

第21表　中央部　土器観察表(6)

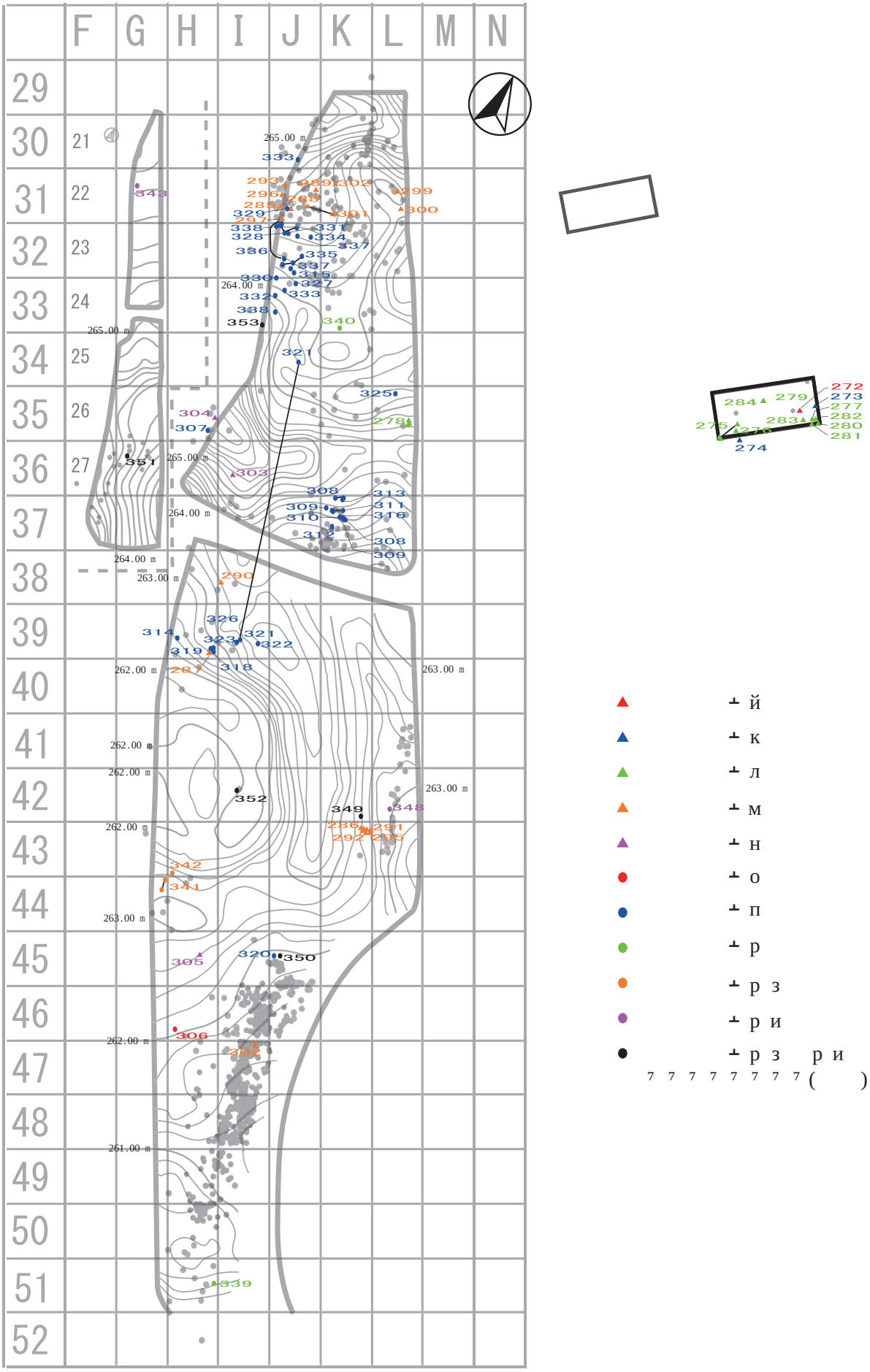
挿図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整		色調		胎土						分類	備考
										外面	内面	外面	内面	長石	石英	角閃	雲母	砂粒	その他		
145	483	K-37	IIIb	古墳土器	甕	胴部	－	－	－	ハケメ→ナデ	ハケメ→ナデ	にぶい赤褐	橙				○	○	赤色粒		スス付着
	484	K-38 J･K-37	IIIa IIIb	古墳土器	甕	底部	－	9.0	－	高台→指圧痕 ナデ	ナデ	橙	橙		○	○		○	赤色粒		
146	485	I-46	IV	土師器	坏	胴部	－	－	－	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙					密			焼土1
	486	I-37	IIIb	土師器	坏	胴部～底部	－	5.4	－	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙					密			
	487	L-41	IIIa	土師器	坏	胴部～底部	－	6.0	－	ナデ	ナデ	橙	橙					密	赤色粒		
	488	J-46	IIIa	土師器	坏	胴部～底部	－	7.8	－	ヨコナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙					密			
	489	I-48	I	土師器	坏	胴部～底部	－	6.2	－	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	○				密	赤色粒		
	490	H-50	IIIb	土師器	坏	胴部～底部	－	9.0	－	ヨコナデ	ナデ	橙	橙					密			
	491	I-49	表採	土師器	坏	胴部～底部	－	8.2	－	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙					密			
	492	I-48	IIIb	土師器	坏	胴部～底部	－	11.6	－	ハケメ→ナデ	ナデ	橙	橙			○		○	赤色粒 チタン鉄鉱		
	493	I-48	IIIb	土師器	坏	胴部～底部	－	6.2	－	ヨコナデ	ハケメ→ナデ	にぶい橙	にぶい橙				○	密	赤色粒		
	494	I-49	－	土師器	坏	底部	－	6.4	－	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙					密			
	495	I-49	IIIb	土師器	坏	底部	－	－	－	ナデ	ケズリ→ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙		○			○	赤色粒		
	496	L-41	IIIa	土師器	坏	底部	－	9.0	－	ナデ	ナデ	橙	橙					密	赤色粒		
	497	I-40	IIIb	土師器	坏	胴部～底部	－	5.8	－	ナデ	ナデ	橙	にぶい橙					密			一括
	498	L-43	IIIb	土師器	坏	底部	－	7.0	－	ナデ	摩滅	浅黄橙	浅黄橙					密			
	499	I･J-46	表採 IIIa IIIb	土師器	坏	底部	－	7.4	－	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			密			
	500	K-34	IIIa	土師器	皿	口縁部～底部	7.3	5.9	1.5	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙					密			
	501	I-48	IIIb	土師器	埦	胴部～底部	－	－	－	ナデ	丁寧なナデ	橙	橙					密	赤色粒		
	502	I-48	IIIb	土師器	埦 (内黒)	底部	－	7.0	－	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	橙	黒褐				○	密			
	503	H-43	表採	土師器	坏～埦	口縁部～胴部	11.3	－	－	ヨコナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙					密	赤色粒 カンラン石		表土一括
	504	I-50	IIIb	土師器	坏～埦	口縁部～胴部	11.2	－	－	ヨコナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○				密	赤色粒		
	505	L-43	IIIa	土師器	坏～埦	口縁部～胴部	12.4	－	－	ヨコナデ	ナデ 工具痕	浅黄橙	浅黄橙		○				赤色粒		
	506	L-43	IIIb	土師器	坏～埦	口縁部～胴部	10.3	－	－	ヨコナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙		○			密	赤色粒		
	507	L-43	IIIb	土師器	坏～埦	口縁部	12.4	－	－	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙					密	赤色粒		
	508	L-43	IIIb	土師器	坏～埦	口縁部～胴部	12.0	－	－	ヨコナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙					密	赤色粒		
	509	I-32	IIIb	土師器	坏～埦 (内黒)	口縁部～胴部	－	－	－	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐					密			
	510	H-52	IIIa	土師器	盤	口縁部～底部	23.6	19.4	4.5	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙					密	赤色粒		
	511	I-47	IIIa IIIb	土師器	蓋	胴部～口縁部	26.0	－	－	指圧痕→ナデ	ナデ ケズリ	橙	橙		○			○			
147	512	I-48	IIIb	土師器	甕	口縁部～胴部	28.0	－	－	ナデ	工具ナデ ケズリ	明赤褐	にぶい赤褐		○			○			
	513	I-48	IIIb	土師器	甕	口縁部～胴部	29.0	－	－	ハケメ→ナデ 板ナデ	ケズリ 指圧痕	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○			○	赤色粒 チタン鉄鉱		
	514	I-47	IIIb	土師器	甕	口縁部	23.0	－	－	ヨコナデ	ナデ ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			○	赤色粒 カンラン石		
	515	I-47	IIIb	土師器	甕	口縁部～胴部	30.4	－	－	ハケメ→ナデ 指圧痕	工具ナデ ケズリ	橙	橙		○			○	赤色粒		
	516	L-44	IIIb	土師器	甕	口縁部	30.0	－	－	ヨコナデ	ヘラケズリ ナデ	橙	にぶい橙		○	○		○	赤色粒		
	517	I-47	IIIb	土師器	甕	口縁部～胴部	25.6	－	－	ヨコナデ→ナデ	ヨコナデ→ナデ ケズリ	灰褐	にぶい褐				○	○	赤色粒		土坑150
	518	I-48	－	土師器	甕	口縁部	24.4	－	－	ヨコナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙		○	○		○	赤色粒		溝25
	519	J-46	IIIb	土師器	甕	口縁部	20.0	－	－	ヨコナデ	工具ナデ→ナデ	にぶい橙	にぶい橙					○	輝石		
	520	I-48	IIIb	土師器	甕	口縁部	23.0	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	橙	橙					○	赤色粒 チタン鉄鉱		
	521	J-46	IIIa IIIb	土師器	甕	口縁部	25.3	－	－	板ナデ ハケメ→ナデ	ヨコナデ ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙					○	輝石		
	522	I-48	IIIb	土師器	甕	口縁部	26.4	－	－	ヨコナデ	ヘラケズリ	にぶい褐	にぶい褐		○	○		○	赤色粒 カンラン石		
	523	I-48	IIIb	土師器	甕	口縁部	27.4	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	橙	橙		○	○		○	赤色粒		
148	524	I-48	－	土師器	甕	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	橙	橙					○	赤色粒 カンラン石		溝26
	525	I-47	－	土師器	甕	口縁部	－	－	－	ハケメ→ナデ	ハケメ→ナデ	橙	橙				○	○	赤色粒		一括
	526	I-47,48	IIIb	土師器	甕	口縁部	－	－	－	ナデ	剥離	橙	橙		○			○			溝16
	527	H-48	IIIb	土師器	甕	口縁部	－	－	－	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐		○			○			土坑155
	528	I-47	IIIb	土師器	甕	頸部	－	－	－	ヨコナデ	ハケメ→ナデ ケズリ	橙	橙			○		○	赤色粒		
	529	I-47	IIIa	土師器	甕	頸部	－	－	－	ヨコナデ	ハケメ 工具ナデ	橙	橙					○	赤色粒 チタン鉄鉱		
	530	H-49	Va	土師器	甕	頸部	－	－	－	ハケメ→ナデ	ヨコナデ ケズリ	橙	橙		○			○	赤色粒		
	531	J-46	IIIa IIIb	土師器	甕	頸部	－	－	－	ハケメ→ナデ	ナデ ケズリ	にぶい黄褐	にぶい黄褐		○			○	チタン鉄鉱 カンラン石		
	532	J-46	IIIb	土師器	甕	胴部	－	－	－	ハケメ→ナデ	ケズリ	にぶい褐	明褐	○	○			○			
	533	J-46	IIIa	土師器	甕	頸部	－	－	－	ハケメ→ナデ	ヨコナデ ケズリ	橙	赤褐					○	赤色粒 カンラン石		
	534	H-48	IIIb	土師器	甕	胴部	－	－	－	丁寧なナデ	ケズリ→ナデ	黒褐	にぶい赤褐		○		○	○	チタン鉄鉱		土坑155
	535	I-48	IIIb	土師器	甕	胴部	－	－	－	タタキ	ヘラケズリ	橙	橙		○			○	赤色粒		
	536	I-47	IIIb	土師器	甕	胴部	－	－	－	ハケメ→ナデ	ケズリ→ナデ	にぶい褐	灰黄褐	○	○			○	赤色粒		土坑150
	537	I-47	IIIb	土師器	甕	胴部	－	－	－	ハケメ→ナデ	ケズリ→ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐		○			○	赤色粒		土坑150
	538	I-48	IIIb	土師器	甕	胴部	－	－	－	板ナデ→ナデ	ケズリ→ナデ	浅黄橙	浅黄橙		○			○	赤色粒		
	539	L-33,34	－	土師器	甕	胴部	－	－	－	ナデ	磨耗	橙	橙				○	○	赤色粒		畝間一括
	540	I-47,48	IIIb	土師器	甕	胴部	－	－	－	ナデ	ナデ	明赤褐	にぶい褐		○			○			溝16
	541	I-48	IIIb	土師器	甕	胴部	－	－	－	ハケメ→ナデ	ケズリ→ナデ	橙	橙		○			○	赤色粒		
	542	I-48	IIIb	土師器	甕	胴部	－	－	－	タタキ→ナデ	ケズリ→ナデ	浅黄橙	浅黄橙			○		○	赤色粒 チタン鉄鉱		
	543	L-33,34	－	土師器	甕	胴部	－	－	－	工具ナデ	ナデ	橙	橙				○	○	赤色粒		畝間一括
	544	I-48	IIIb	土師器	甕	頸部	－	－	－	ナデ	ナデ ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○			

第22表　中央部　土器観察表(7)

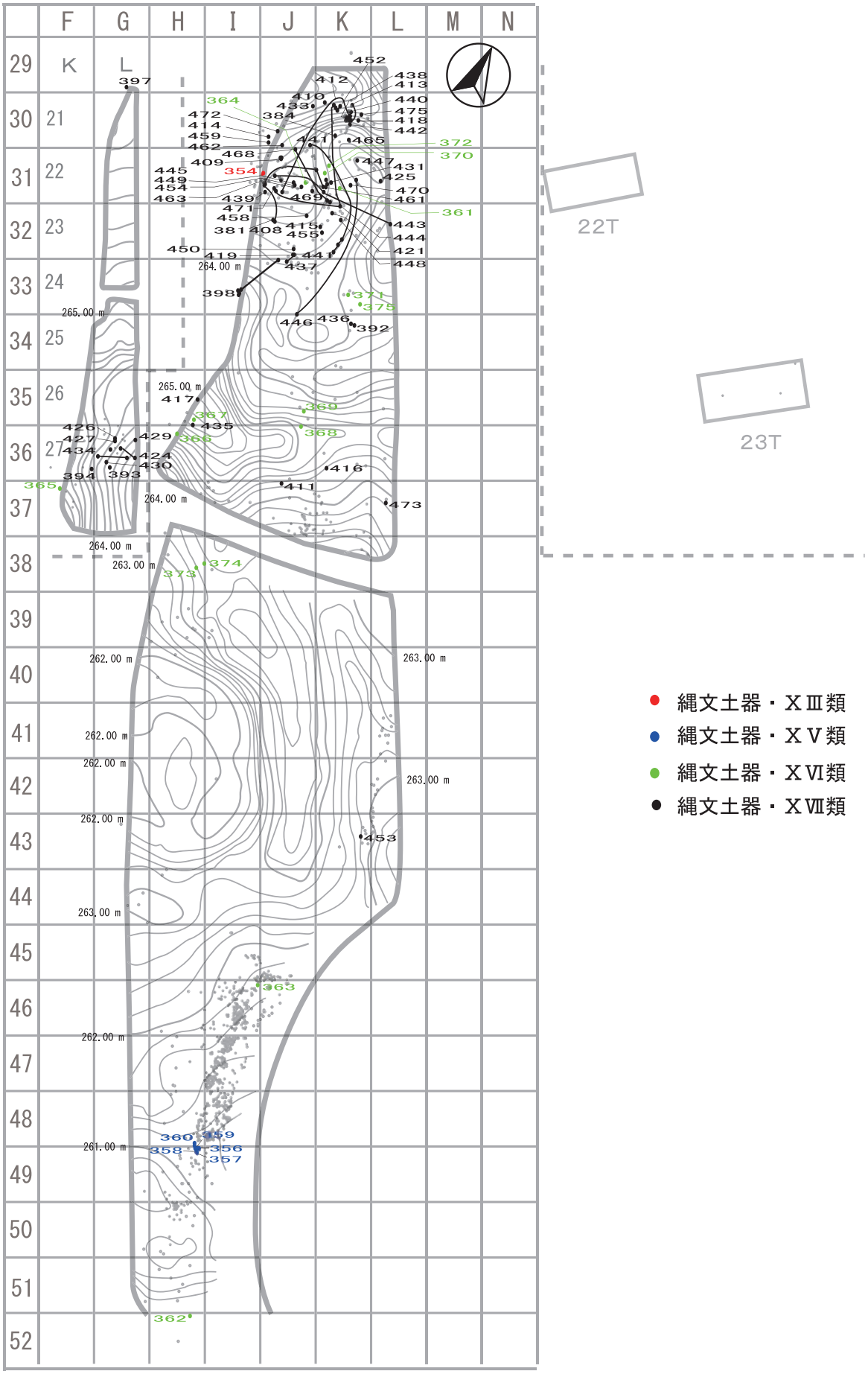
挿図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整		色調		胎土						分類	備考
										外面	内面	外面	内面	長石	石英	角閃	雲母	砂粒	その他		
148	545	I-47,48	IIIb	土師器	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	○				○			溝16
	546	I-47	IIIb	土師器	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ケズリ→ナデ	明赤褐	明赤褐		○		○	○	赤色粒 チタン鉄鉱		
	547	H-36	IIIb	土師器	甕	胴部	—	—	—	工具ナデ→ナデ	ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			○	赤色粒		
	548	I-47	IIIa	土師器	甕	胴部	—	—	—	ハケメ→ナデ	ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙					○	赤色粒		
149	549	J-46	IIIa	土師器	甕	胴部	—	—	—	ハケメ→ナデ	ケズリ	橙	橙		○			○	赤色粒 チタン鉄鉱		
	550	J-46	IIIa	土師器	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐		○			○			
	551	I-48	IIIb	土師器	甕	胴部	—	—	—	ナデ 指圧痕	ケズリ ナデ	暗赤褐	にぶい赤褐		○			○	カンラン石		
	552	I-48	VII IIIb	土師器	甕	胴部	—	—	—	ハケメ→ナデ	ケズリ	にぶい褐	にぶい褐		○			○	赤色粒		
	553	I-48	IIIb	土師器	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ケズリ→ナデ	にぶい赤褐	橙					○	赤色粒		
	554	J-46	I	土師器	甕	胴部	—	—	—	ハケメ→ナデ	ナデ，指圧痕 ケズリ	橙	橙	○	○			○	赤色粒		
	555	I-48	IIIb	土師器	甕	胴部	—	—	—	ハケメ→ナデ 指圧痕	ケズリ	明赤褐	明赤褐		○			○	カンラン石 輝石		
	556	I-48	I	土師器	甕	胴部	—	—	—	ハケメ→ナデ	ケズリ→ヘラケズリ	橙	にぶい黄橙	○				○	赤色粒 チタン鉄鉱		
	557	I-48	IIIb	土師器	甕	胴部	—	—	—	丁寧なナデ	ケズリ→ヨコナデ	にぶい褐	にぶい橙	○				○	赤色粒		
	558	H-43	表採	土師器	甕	胴部	—	—	—	ハケメ→ナデ	ケズリ→ヘラケズリ	明赤褐	橙		○			○	赤色粒		一括
	559	H-43	表採	土師器	甕	胴部	—	—	—	ハケメ→ナデ	ケズリ→ナデ	褐	明赤褐		○			○			一括
	560	I-46	表採	土師器	甕	胴部	—	—	—	ハケメ→ナデ	ケズリ→ナデ	橙	橙		○			○			
	561	I-48	IIIb	土師器	甕	胴部	—	—	—	ハケメ→ナデ	ケズリ→ナデ	褐	橙		○			○	赤色粒		
	562	I-48	IIIb	土師器	甕	胴部	—	—	—	工具ナデ→ナデ	ケズリ	にぶい褐	褐			○	○	○	赤色粒 チタン鉄鉱		
	563	I-48	IIIb	土師器	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ケズリ	にぶい黄褐	にぶい黄褐		○			○	赤色粒		
	564	I-48	IIIb	土師器	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ケズリ→ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐					○	赤色粒 チタン鉄鉱		
	565	I-47	IIIb	土師器	鉢	胴部	—	—	—	ナデ	工具ナデ	にぶい褐	にぶい褐				○	○	赤色粒		
150	566	I-47	IIIb	土師器	甕	胴部	—	—	—	ハケメ→ナデ	ケズリ	橙	にぶい褐	○	○			○	赤色粒 カンラン石		
	567	I-47	IIIb	土師器	甕	胴部	—	—	—	ハケメ→ナデ	ケズリ，ナデ 指圧痕	にぶい黄褐	にぶい褐		○			○	チタン鉄鉱		土坑150
	568	I-46	IIIb	土師器	甕	胴部	—	—	—	ハケメ→ナデ 櫛目	ヨコナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	○			○	○	赤色粒 チタン鉄鉱		
	569	H-43	表採	土師器	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	橙	橙	○				○	赤色粒		一括
	570	I-49	IIIb	土師器	甕	胴部	—	—	—	タタキ	ヘラケズリ ナデ	浅黄橙	浅黄橙		○			○	赤色粒		
	571	J-46	IIIb	土師器	甕	胴部～底部	—	—	—	タタキ	ケズリ→ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○				○			
	572	I-47,48	IIIa IIIb	土師器	甕	胴部	—	—	—	ハケメ→ナデ	ケズリ	橙	橙		○			○	赤色粒		
	573	K-38 J-37	IIIb	土師器	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ケズリ	橙	橙		○	○		○	赤色粒		
	574	J･K-37 K-38	IIIb	土師器	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ケズリ	橙	赤褐		○	○		○	赤色粒		
151	575	I-48	表採	須恵器	坏	底部	—	7.2	—	ナデ	ナデ	灰黄	灰黄					密			表採
	576	I-48	I	須恵器	埦	胴部～底部	—	8.9	—	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ	灰黄	灰黄					密			工具痕あり
	577	H-50	IIIb	須恵器	高坏	坏～脚柱部	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰	黄灰	○	○	○		密			
	578	I-46	表採	須恵器	坏～埦	口縁部～胴部	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙					密			
	579	I-48	IIIb	須恵器	鉢	口縁部～胴部	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄	暗灰黄					密			
	580	J-46	IIIb	須恵器	鉢	胴部	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ，指圧痕	灰黄	灰黄					密			
	581	I-47	IIIa	須恵器	鉢	胴部～底部	—	8.8	—	ヨコナデ 櫛目	ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙					○			一括
	582	I-47	IIIb	須恵器	甕	胴部	—	—	—	平行文 タタキ	同心円 当て具痕	浅黄	浅黄					密	赤色粒		
	583	H-49	IIIb	須恵器	甕	胴部	—	—	—	格子目 タタキ	平行文 当て具痕	灰黄	灰黄					密			
	584	J-46	IIIb	須恵器	甕	胴部	—	—	—	平行文 当て具痕	平行文 当て具痕	暗褐	灰黄					密			
	585	H-49	IIIb	須恵器	甕	胴部	—	—	—	平行文 当て具痕	平行文 当て具痕	にぶい褐	灰黄					密			
	586	I-48	表採	須恵器	壺	底部	—	8.0	—	ナデ 指圧痕	ヨコナデ	褐	褐		○			密			
	587	I-49	—	須恵器	蓋	口縁部	15.6	—	—	ヨコナデ	磨耗	にぶい褐	灰黄					密			溝25
152	588	I-48	IIIb	土師器	焼塩土器	口縁部～胴部	—	—	—	ナデ 指圧痕	圧痕	橙	橙					○	チタン鉄鉱		
	589	I-46	IIIb	土師器	焼塩土器	口縁部～胴部	—	—	—	ナデ 指圧痕	押型文	黄橙	黄橙					○			
	590	I-47	IIIa	土師器	焼塩土器	口縁部～胴部	15.0	—	—	ナデ 指圧痕	圧痕	橙	橙					○			
	591	I-47	IIIa	土師器	焼塩土器	口縁部～胴部	—	—	—	ナデ 指圧痕	圧痕	橙	橙					○			
	592	I-46	IIIb	土師器	焼塩土器	口縁部～胴部	—	—	—	ナデ 指圧痕	圧痕	橙	橙					○	赤色粒		
	593	J-46	IIIa	土師器	焼塩土器	口縁部～胴部	—	—	—	ナデ，指圧痕文 モミ？	圧痕	橙	橙					○	赤色粒		
	594	I-47	IIIa	土師器	焼塩土器	胴部	—	—	—	ナデ 指圧痕	圧痕	浅黄橙	浅黄橙					○	赤色粒		
	595	I-47	IIIa	土師器	焼塩土器	胴部	—	—	—	ナデ 指圧痕	ナデ	黄橙	黄橙					○			
	596	I-50	表採	土師器	焼塩土器	胴部	—	—	—	磨滅	布圧痕	橙	橙	○	○						
	597	H･I-50	IIIb	土師器	焼塩土器	口縁部～胴部	13.0	—	—	ナデ 指圧痕	圧痕	橙	橙		○			○			
	598	I-48	IIIb	土師器	紡錘車	—	—	—	—	ナデ 指圧痕	ナデ 指圧痕	浅黄橙	浅黄橙					○	赤色粒		紡錘車
153	599	I･J-64,65	—	龍泉窯系青磁	埦	口縁部～胴部	—	—	—	明緑灰釉	明緑灰釉	灰オリーブ	灰オリーブ					密			横沈線 片彫連花文
	600	I-48	IIIb	龍泉窯系青磁	埦	口縁部～胴部	15.0	—	—	明緑灰釉	明緑灰釉	灰オリーブ	灰オリーブ					密			連弁文
	601	I-49	IIIb	龍泉窯系青磁	埦	底部	—	5.2	—	青釉	草花文	灰オリーブ	灰オリーブ					密			高台内中央釉剥ぎ
	602	H-52	IIIa	陶器	稜花皿	口縁部	—	—	—	鉄釉	鉄釉	暗褐	暗褐					密			
	603	J-46	IIIa	陶器	擂鉢	口縁部～胴部	—	—	—	ヨコナデ 釉タレ	ヨコナデ 鉄釉，櫛目	暗褐	暗褐	○				○			口縁部釉剥ぎ
	604	K･L-26,27	—	陶器	甕	口縁部	34.4	—	—	鉄釉	鉄釉	灰褐	黒褐					密			口縁部釉剥ぎ
	605	K･L-25～27	—	陶器	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ヨコナデ	黒褐	黒褐					密	赤色粒		
	606	H-51	表採	陶器	甕	胴部	—	—	—	鉄釉	鉄釉	暗緑灰	灰オリーブ	○				○			
	607	H-51	表採	陶器	土瓶	脚	—	—	—	鉄釉	鉄釉 ナデ	暗褐	暗褐	○				○			スス付着



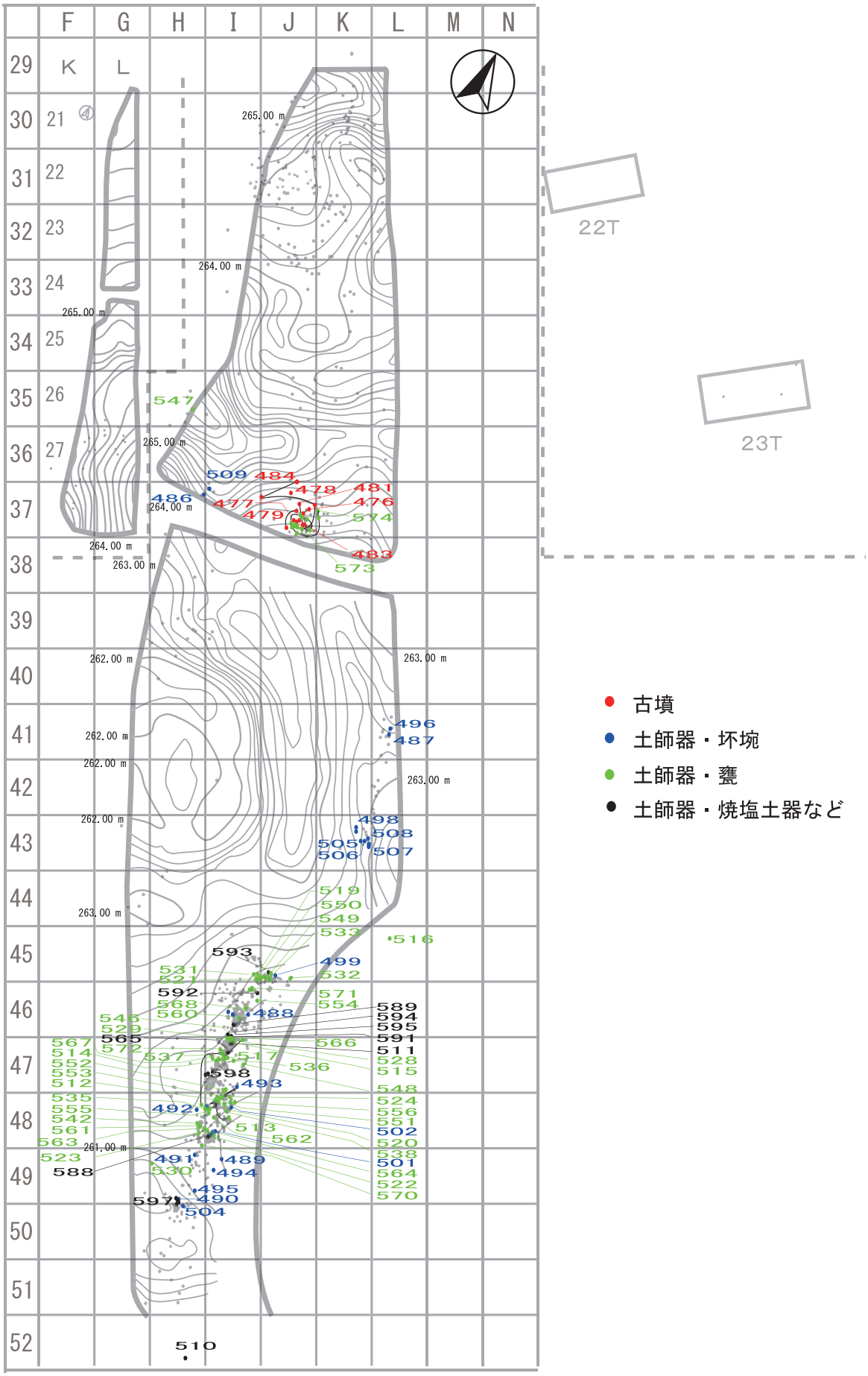
第154図　中央部　遺物出土状況図(1)



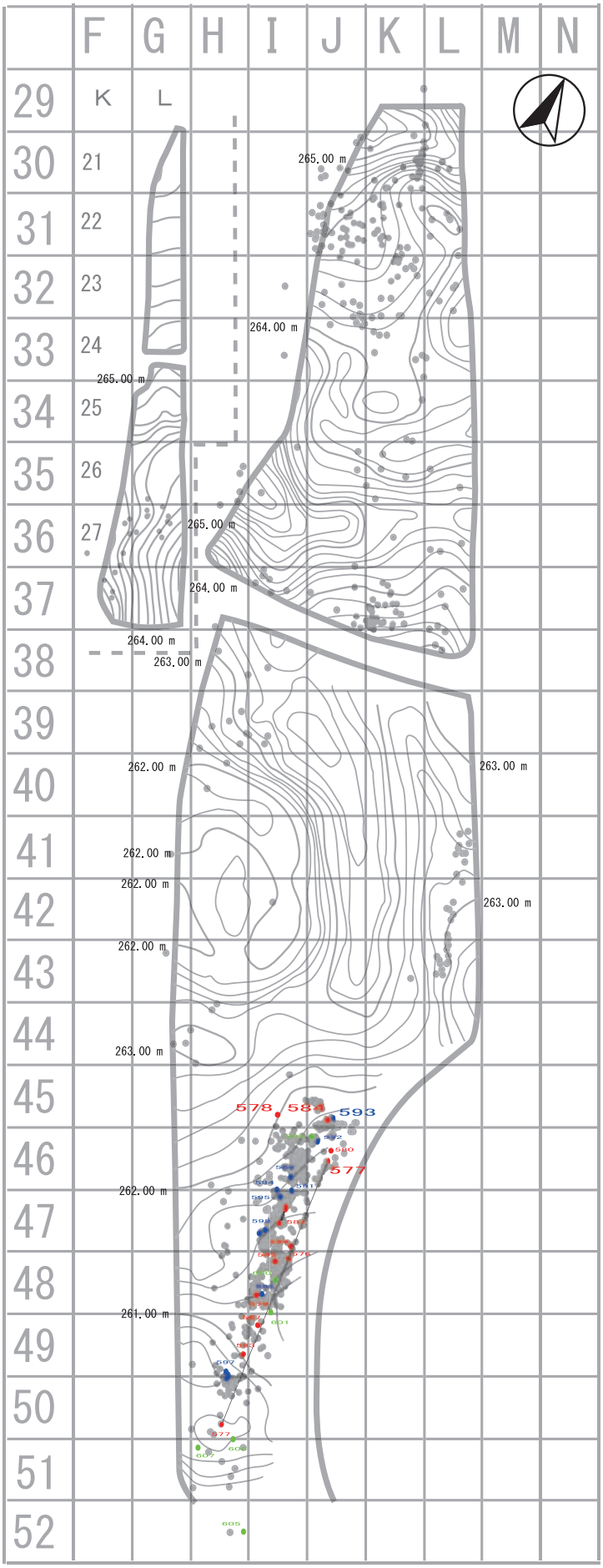
第155図　中央部　遺物出土状況図(2)

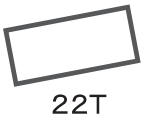


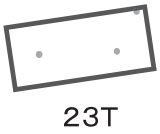
第156図　中央部　遺物出土状況図(3)



第157図　中央部　遺物出土状況図(4)







● 須恵器
● 焼塩土器
● 陶器

第158図　中央部　遺物出土状況図(5)

第５節　出土石器

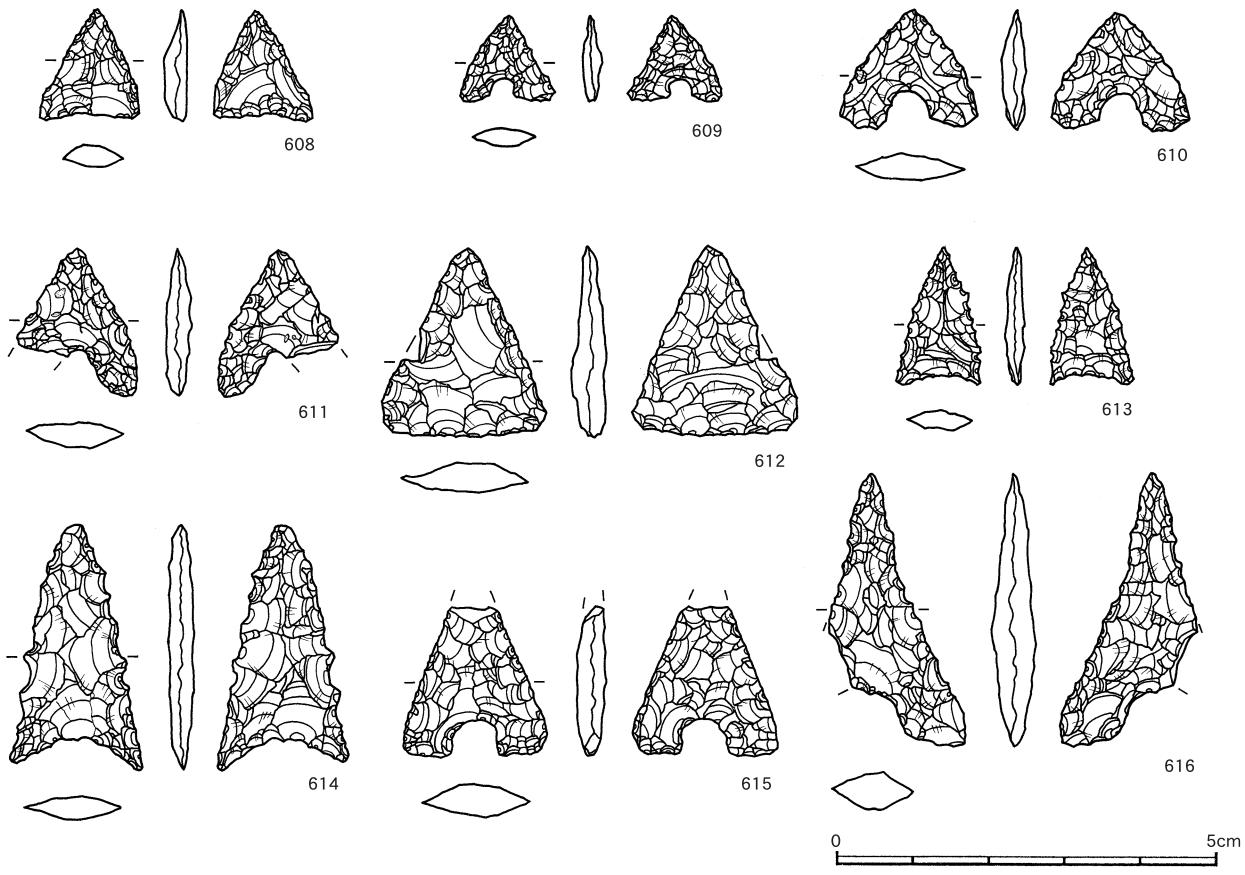
１　縄文時代早期

縄文時代早期の石器は，打製石鏃，スクレイパー，剥片，磨製石斧，打製石斧，礫器，磨石，石皿などが出土した。いずれも縄文時代早期の包含層であるⅥ，Ⅶ，Ⅷ層から出土したものである。石材としては，黒曜石，安山岩，チャート，玉髄，頁岩，砂岩，泥岩，凝灰岩，花崗岩，流紋岩などがみられた。80点を図化している。

⑴　打製石鏃（第159図608～616）

608～612は全体の形状が正三角形状（長幅比＝1.3：１未満とした）を呈するものである。608は基部に抉りがわずかに見られるが，612は抉りが見られない。609～611は基部に抉りの見られるもので，明確に脚部が作出されている。608は，裏面に素材剥離面を多く残す。

613～616は全体の形状が二等辺三角形（長幅比1.3：１以上とした）を呈するものである。613，614は基部に抉りが見られるもので，側縁部は鋸歯状に仕上げられている。615は基部に深い抉りがあり，明確に脚部が作出されるものである。616は一部に欠損があるが，基部に深い抉りが見られると判断できる。また，側縁部は内弯しており，鋸歯状に仕上げられている。



第159図　中央部　縄文時代早期の石器⑴

⑵ **スクレイパー**（第160図617～624，第161図625～629）

中央部のスクレイパーは，22トレンチと23トレンチからのみ出土している。石材は安山岩が多く，頁岩，チャートもみられる。スクレイパーと判断した13点全てを図化した。

617～625は安山岩製のスクレイパーである。いずれも，扁平な安山岩素材に刃部形成と判断する小剥離痕がみられる。

626は頁岩製のスクレイパーである。下部に裏面からの剥離痕が多くみられる。

627～629はチャート製のスクレイパーで，安山岩製のものに比べると小型である。627は灰色に黒い斑紋が入るチャートを用いており，縁辺の一部に簡単な刃部形成を施している。628は下部に両面から刃部形成をしている。左側の部分は欠損したとみられる。629は縁辺の一部に微細な剥離をほどこしている。

⑶ **微細剥離痕剥片**（第162図630）

630はチャートの微細剥離痕剥片である。下部に片側からの剥離痕がみられる。

⑷ **磨製石斧**（第162図631）

631は安山岩製の磨製石斧である。剥落した部分が多いが，製作時には全体を丁寧に研磨し，形を整えていたものと思われる。刃部だけが完全に残存していることから，刃部だけは研磨を繰り返していた可能性もある。

⑸ **刃部磨製石斧**（第162図632～634）

632～634は刃部磨製石斧である。632は頁岩製で，周辺を打ちかいて形を整え，刃部周辺のみを磨いている。633はホルンフェルス製で，その大部分を欠損しているが，刃部は丁寧に研磨されている。また，刃部には使用痕と考えられる微細な刃こぼれが観察される。634は，頁岩製で破損が激しい。刃部及び上部に丁寧な研磨がみられる。

⑹ **打製石斧**（第163図635）

635は，頁岩製の打製石斧である。あまり装着部の抉りがはっきりせず，いわゆる短冊形状をしている。側縁部には表面からの剥離が施されており，表裏とも自然面を若干残している。

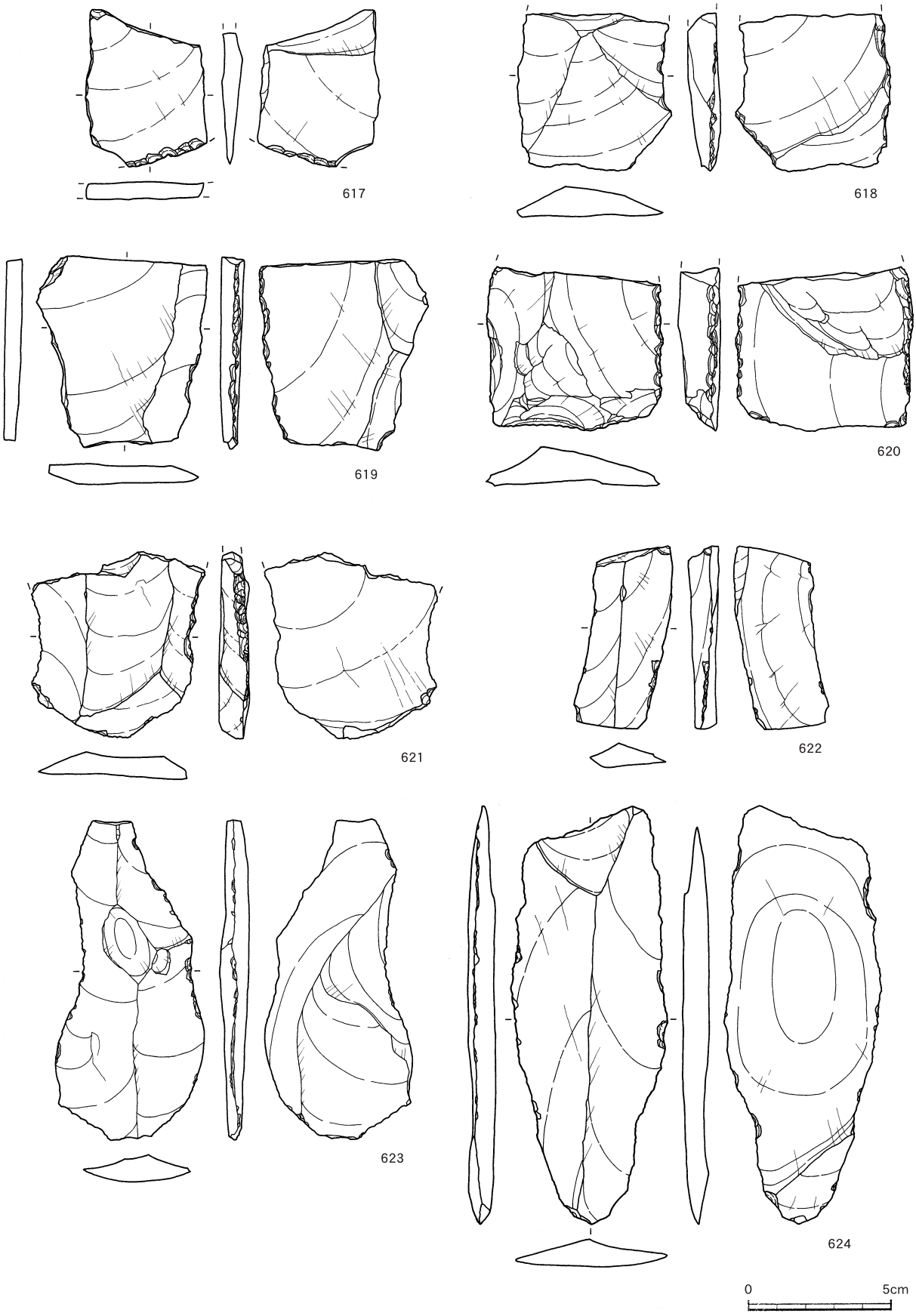
⑺ **礫器**（第163図636，637）

636，637はいずれも安山岩製の礫器である。636は扁平な礫を用いて周囲に加工を施している。刃部は両面からの剥離によって作出されている。左側は欠損しているが，右側には若干の抉りが認められるので，棒状のものに装着して使用されたことも推定される。

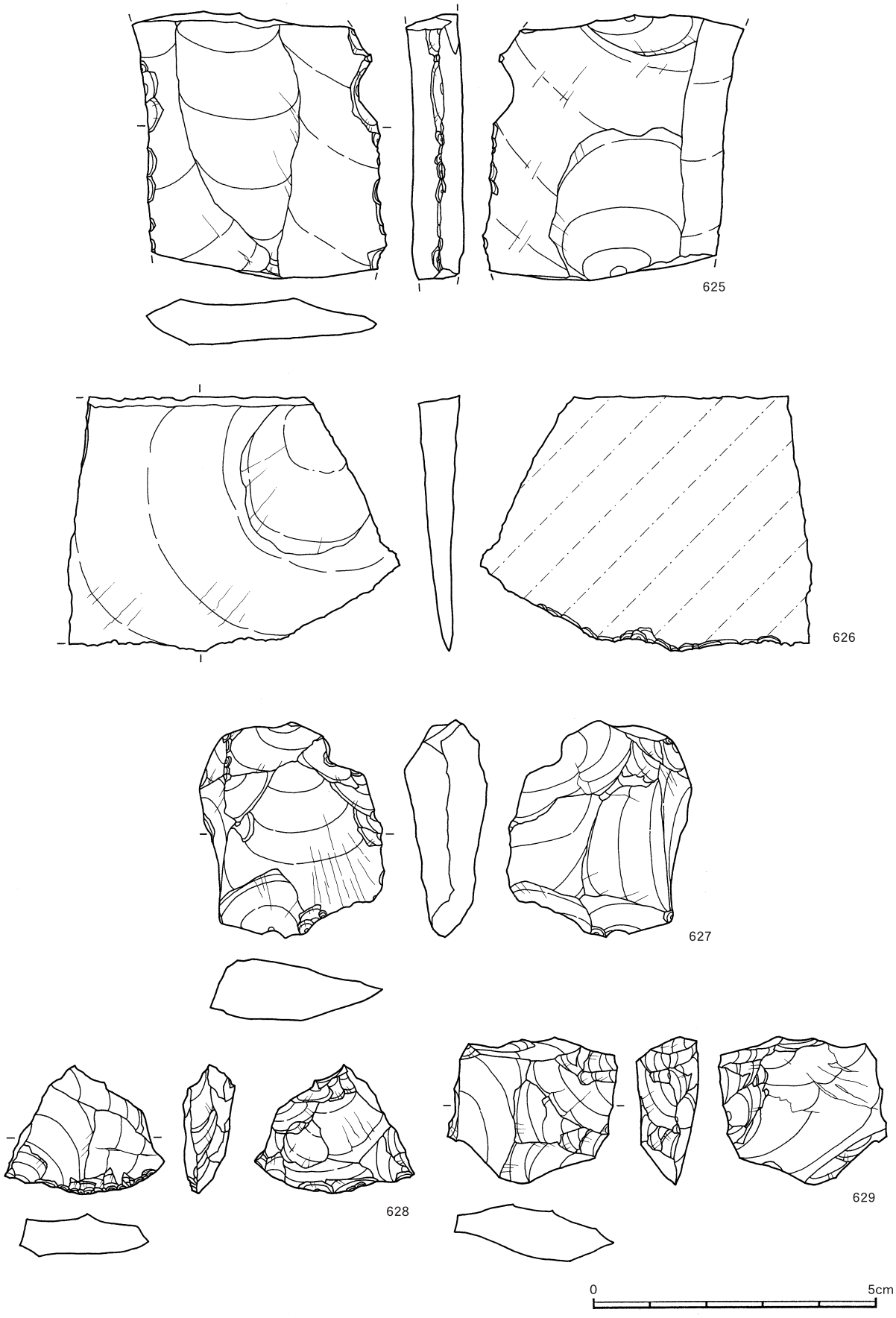
637は，やや厚みのある礫の下部に，表面から剥離によって刃部を作出している。集石17号の中から出土しており，何らかの理由で欠損したのち，集石を構成する礫として再利用されたものと思われる。

⑻ **磨石・敲石**（第164～167図638～672）

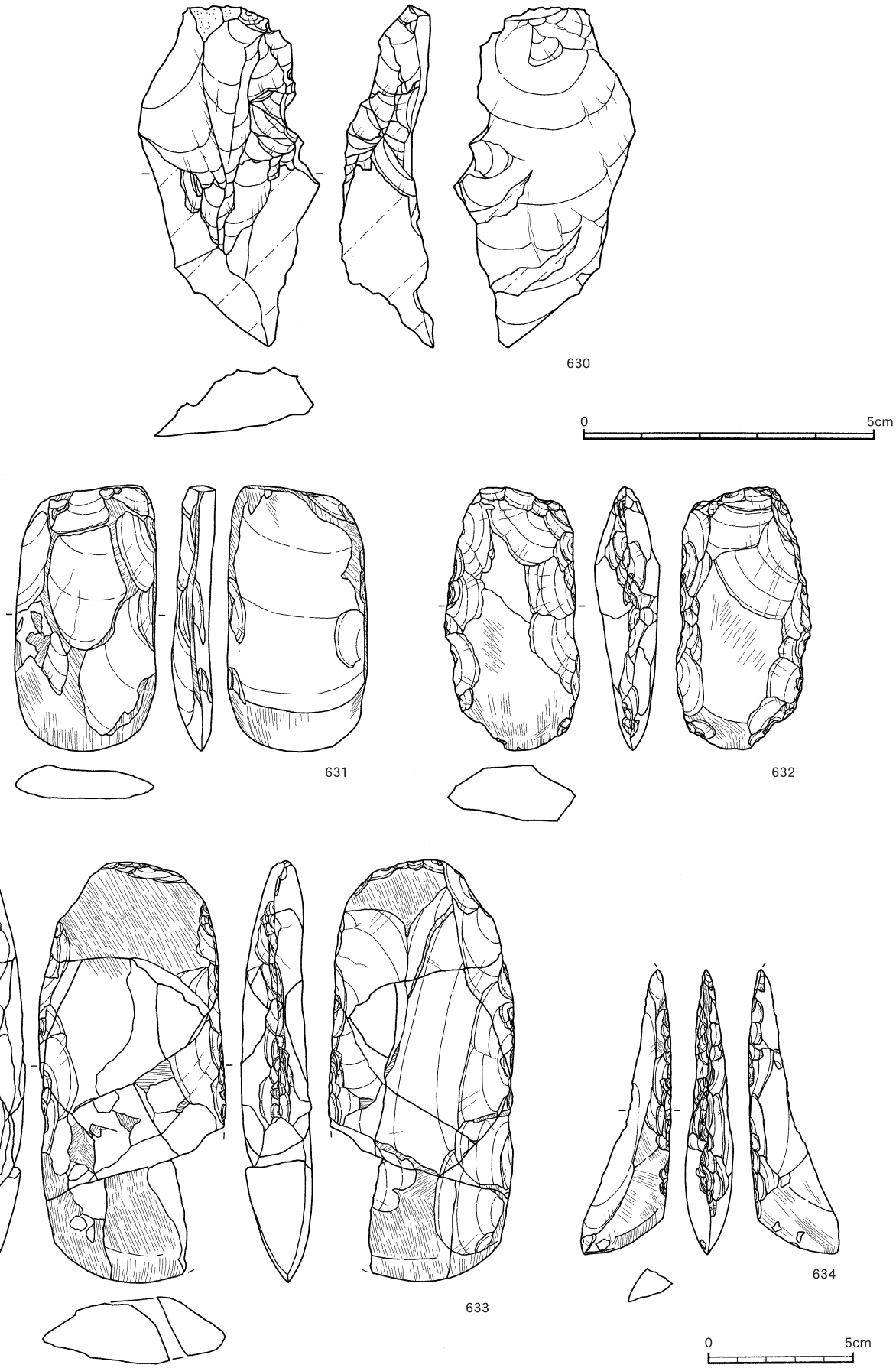
磨面や敲石痕が認められるものを，磨石・敲石として一括して取り扱い，形態等から３類に大別した。石材は安山岩が大部分を占めるが，凝灰岩，砂岩，花崗岩，泥岩，流紋岩もみられる。35点図化した。



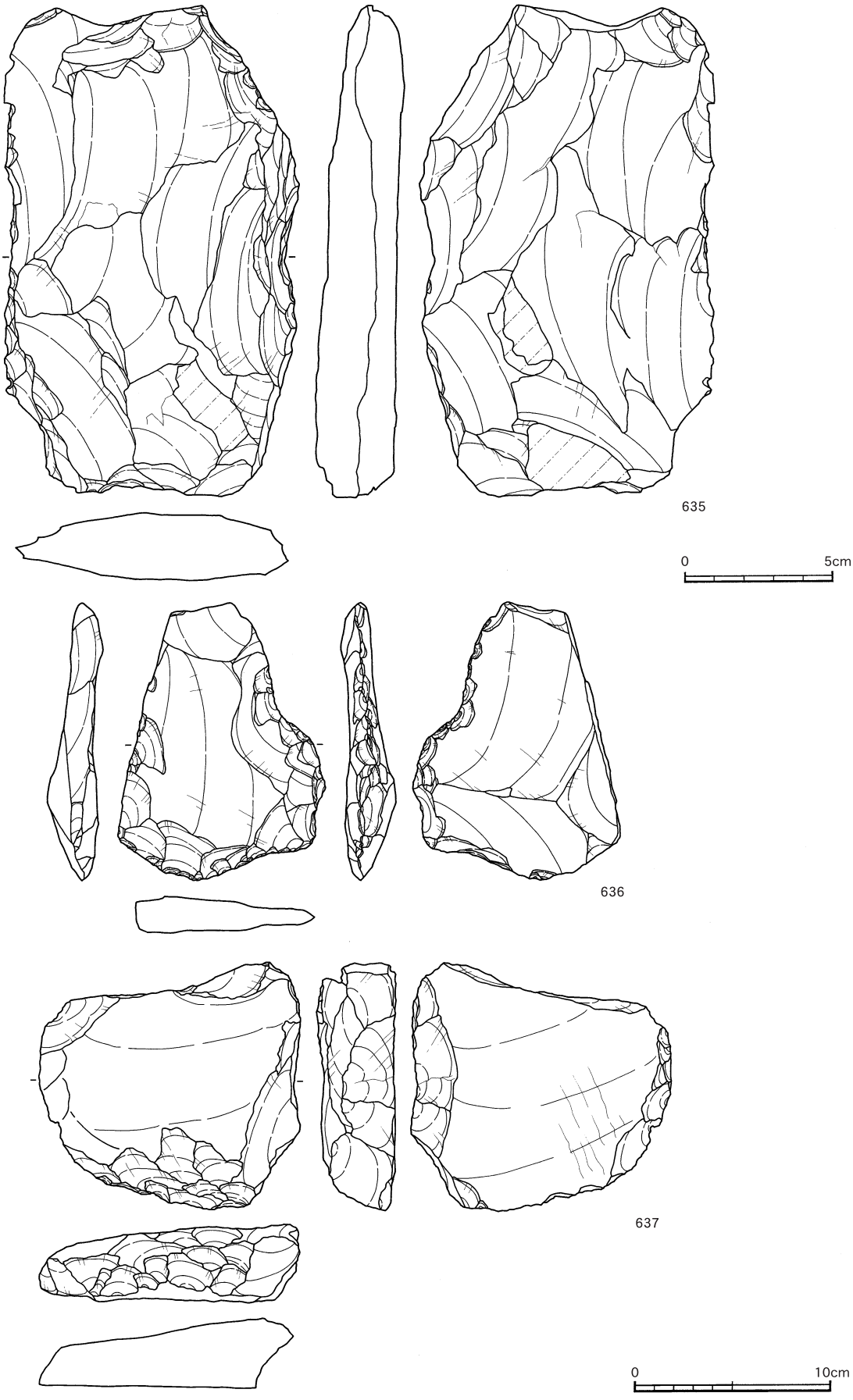
第160図　中央部　縄文時代早期の石器(2)



第161図　中央部　縄文時代早期の石器(3)



第162図　中央部　縄文時代早期の石器(4)



第163図　中央部　縄文時代早期の石器(5)

Ⅰ類（第164，165図638～655）

表・裏面に磨面がみられ，敲打痕があまりみられない。

638～641は最大長が５㎝程度あるいは，それに満たない小型の磨石である。647と649の磨面には，わずかに敲打痕と思われるものもある。650と651の周縁部には，わずかに敲打痕がみられる。652～655は大型の磨石の破片と思われる。653や655は，表裏両面ともに磨面が認められる。

Ⅱ類（第166，167図656～670）

表・裏面に磨面のほかに，敲打痕がみられるもの。

656～661は，表・裏面にも端部・周縁部にも敲打痕がみられる。656は表裏両面に敲打痕がみられる。660，661は，表・裏面の敲打痕も周縁部の敲打痕も顕著である。

662～670は，敲打痕が主に端部・周縁部に集中しているものである。663は，裏表両面ともに磨面が顕著で，周縁部のすべてに敲打痕がみられる。664は大型の磨石で，集石の礫を構成していた。裏面の磨面が顕著で，端部には敲打痕がみられる。666～670は裏面に磨面がみられ，周縁部の敲打痕が顕著である。

Ⅲ類（第167図671，672）

表・裏面に，敲打による凹みがみられるもの。

671，672は，敲打痕が集中して凹石となったものである。671は表裏両面に敲打による凹みがみられる。672は裏面の凹みが顕著である。また表面は磨面として利用され，使用により球面が平面に変形している。

⑼　**石皿**（第168～170図673～685）

673～685は石皿である。長径が30㎝を超えるものから10㎝程度のものまで，大小あわせて13点ある。石材は安山岩が多いが，砂岩・泥岩・花崗岩もみられる。

673は両面を使用しており，裏面には敲打痕が集中してみられる。

674～676は片面に磨面がみられる。

677は表の磨面が顕著で，裏面には多数の敲打痕がみられる。

678は花崗岩製の石皿で風化が激しいが，わずかに磨面が残っている部分もある。

680は両面を使用しており，磨面が顕著である。

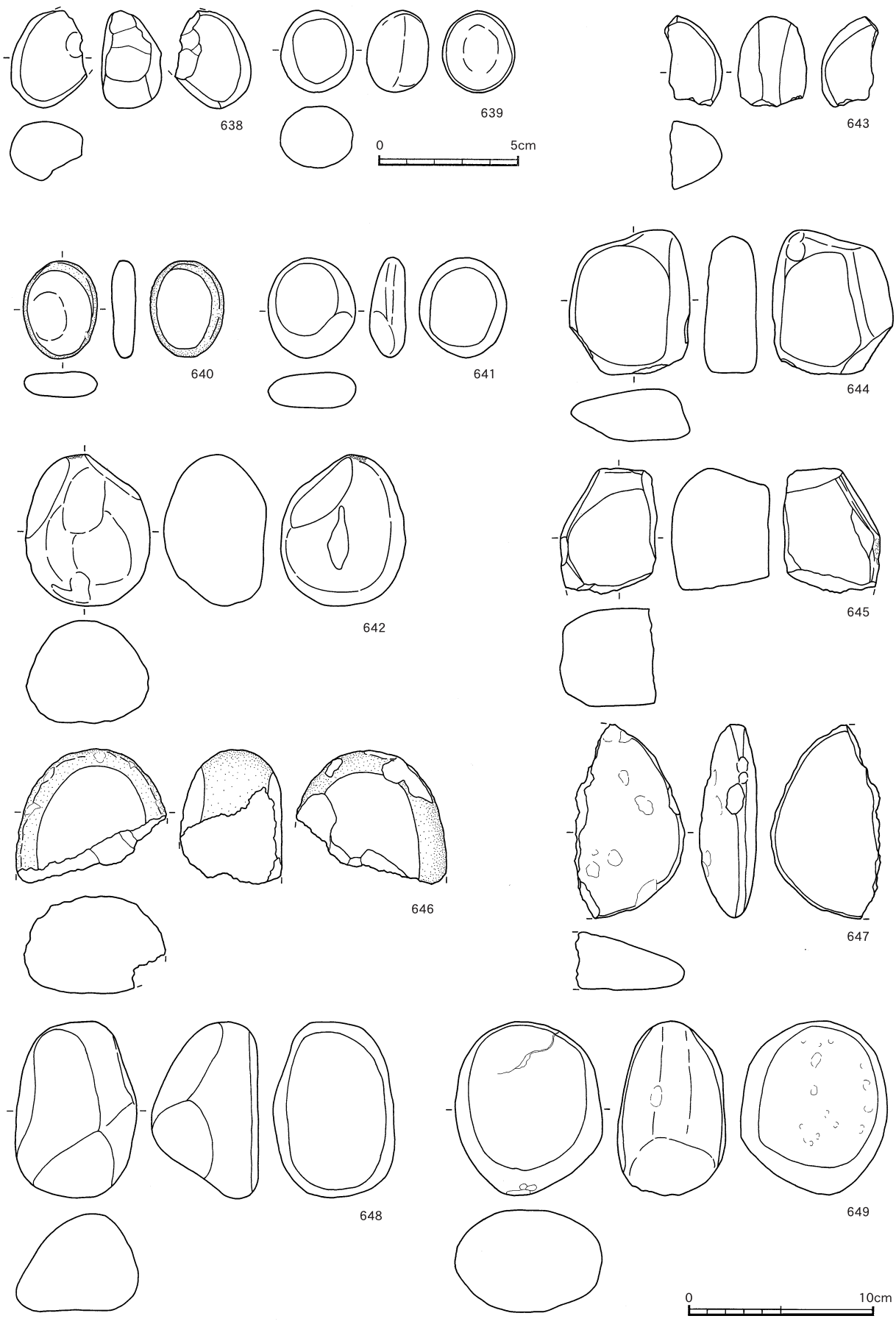
681は表面に敲打によってできた凹みがみられる。

683は風化により一部欠損しているが，使用頻度が高かったためにレンズ状に凹んだものと思われる。

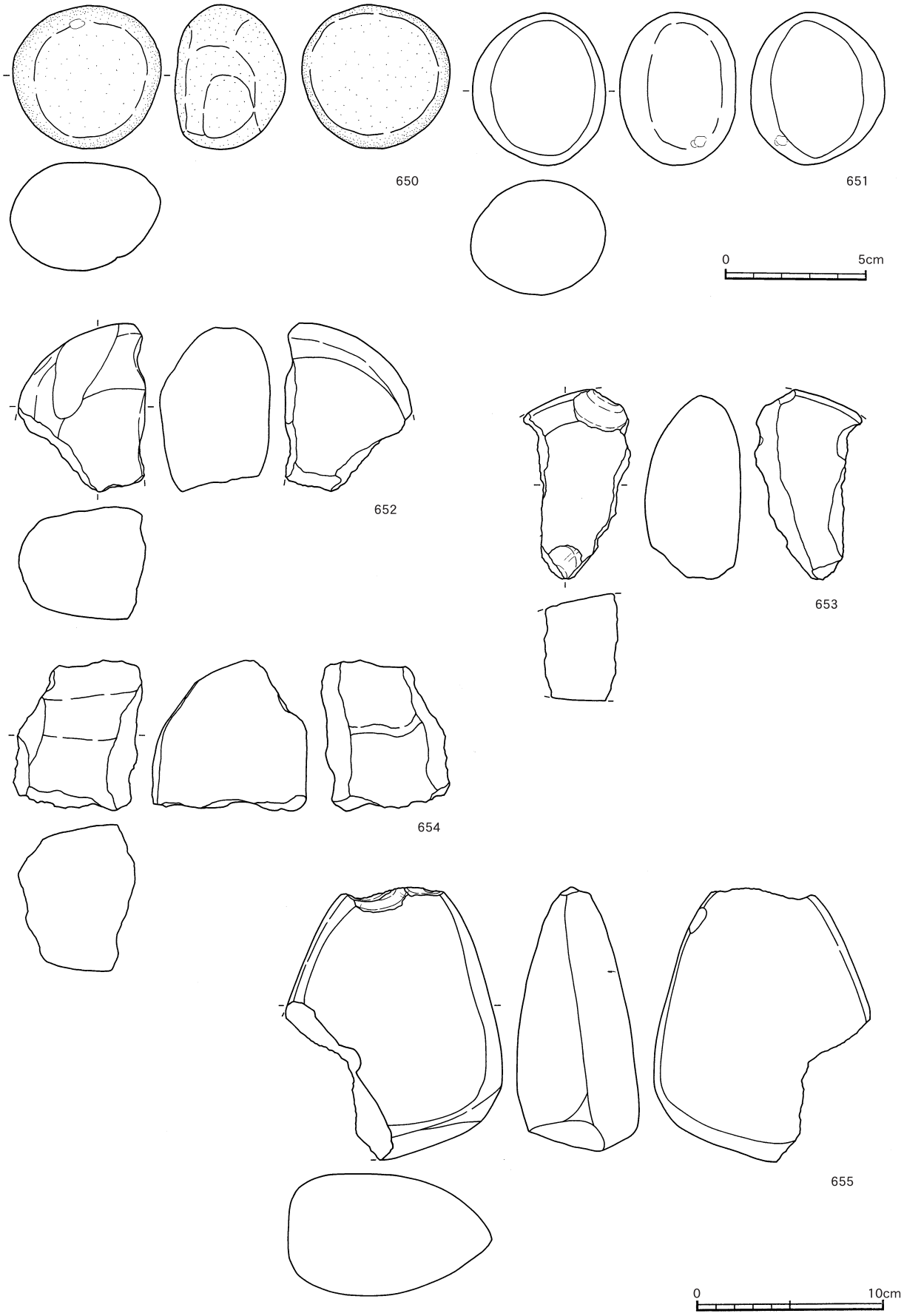
684と685は最大長が25㎝を超える大型の石皿である。684は表裏両面に，磨面と敲打痕がみられる。また，敲打による凹みもみられる。685は表面に磨面がみられ，敲打によるわずかな凹みが表裏両面にみられた。

⑽　**軽石製品**（第170図686，687）

686，687は，いずれも23トレンチの縄文時代早期の包含層から出土している。用途については不明だが，しっかりと面取りがしてあることから，意図的に加工したものと判断した。

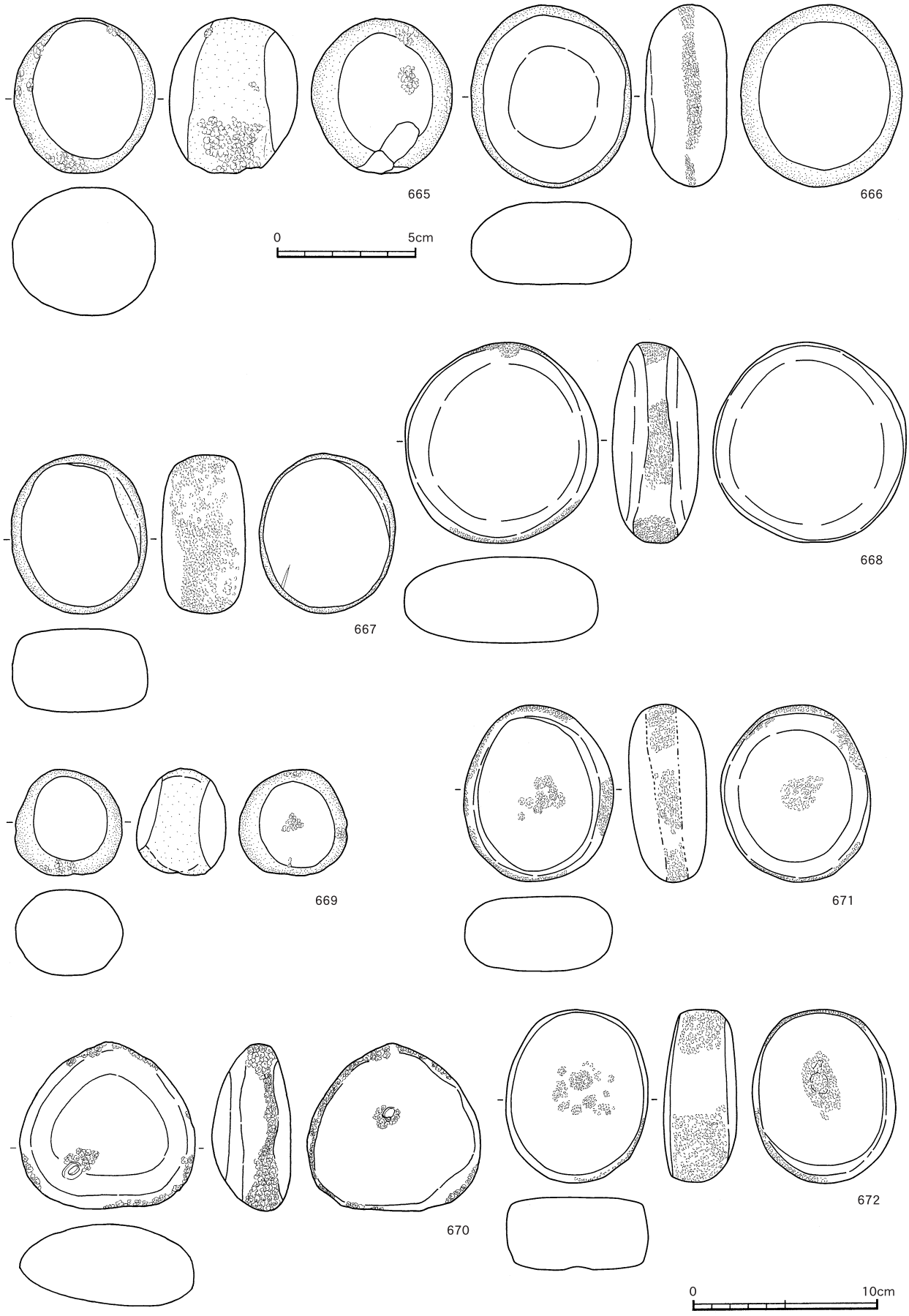


第164図　中央部　縄文時代早期の石器(6)

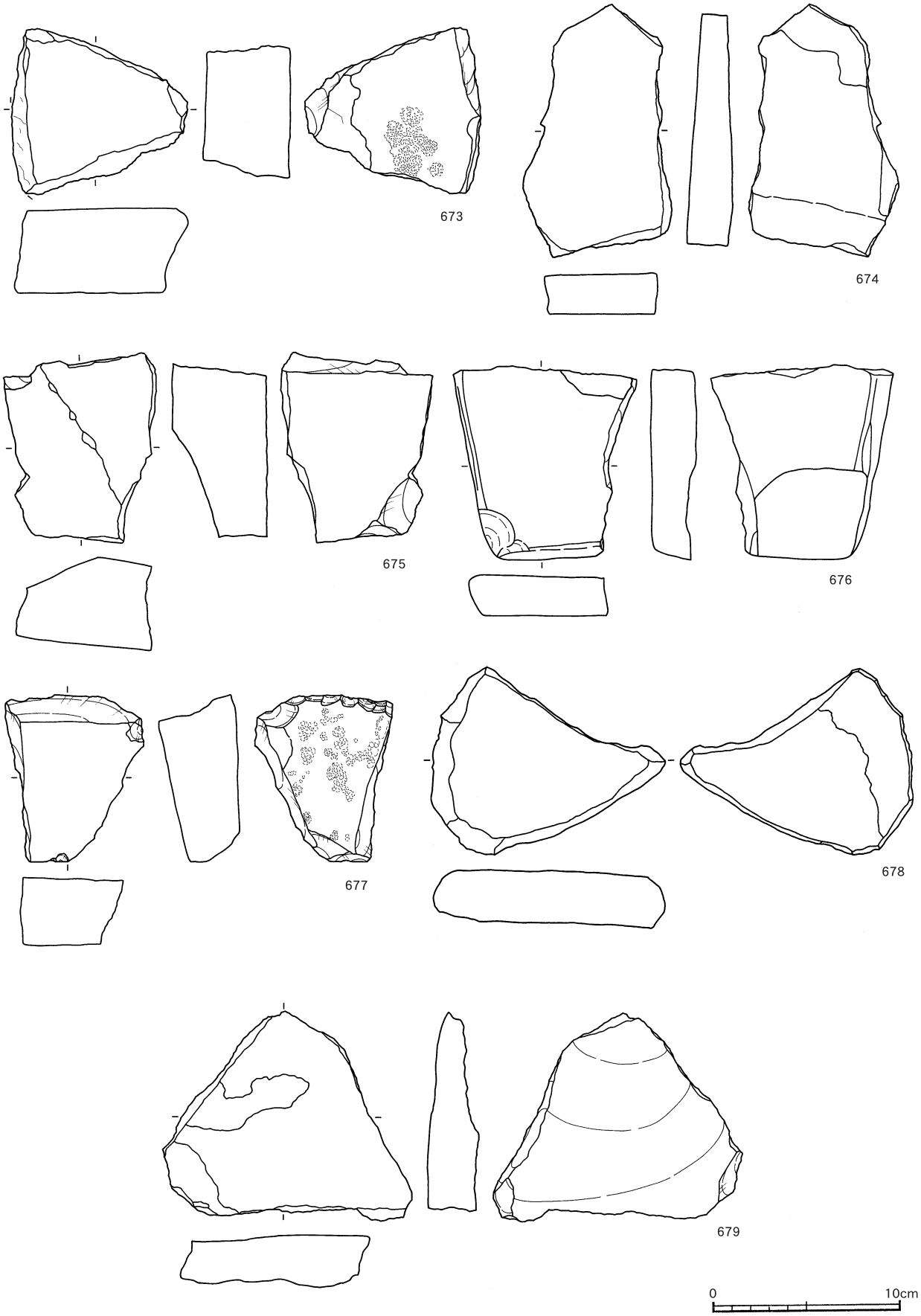


第165図　中央部　縄文時代早期の石器(7)

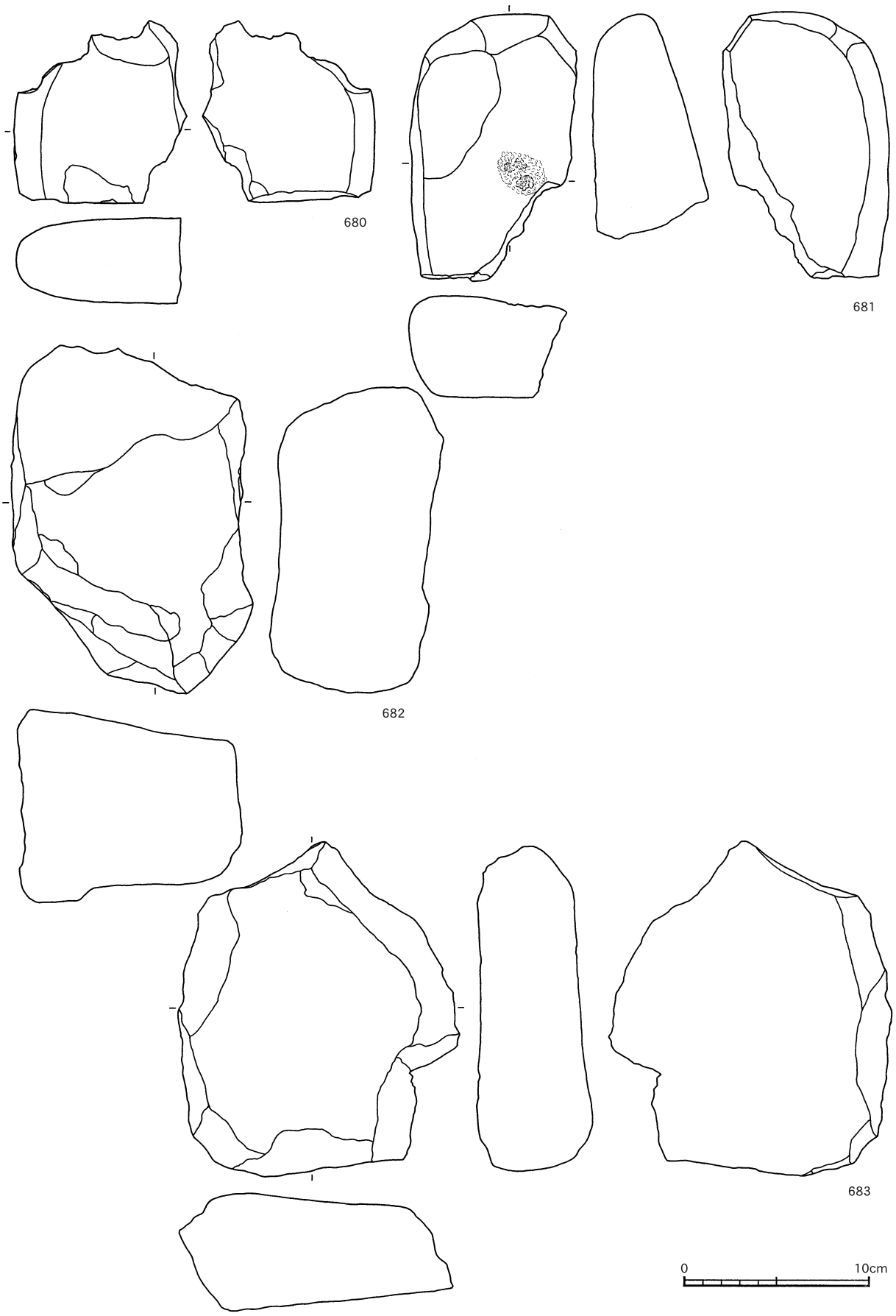
第166図　中央部　縄文時代早期の石器(8)



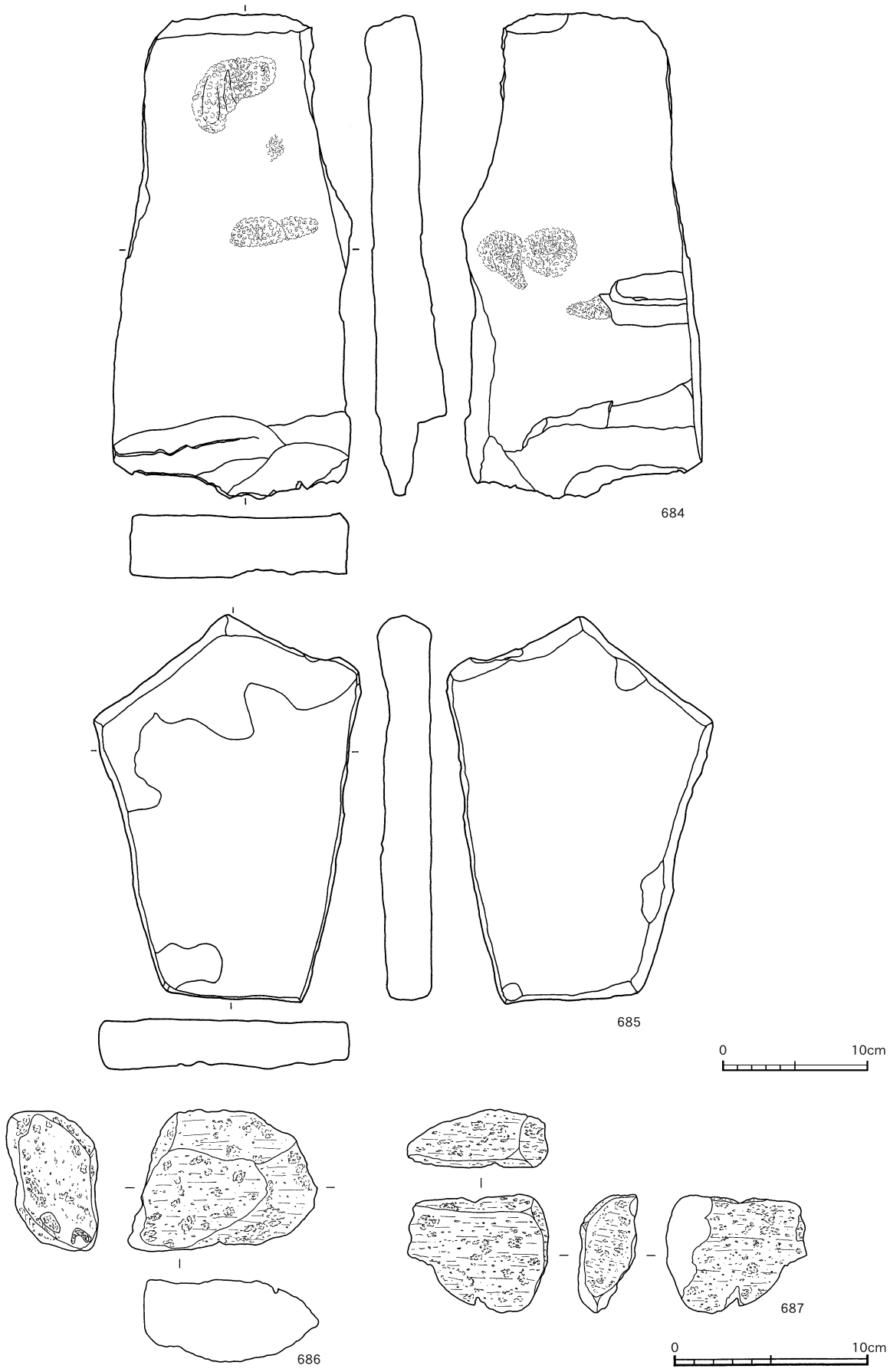
第167図　中央部　縄文時代早期の石器(9)



第168図　中央部　縄文時代早期の石器⑽



第169図　中央部　縄文時代早期の石器(11)



第170図　中央部　縄文時代早期の石器⑿

2　縄文時代晩期

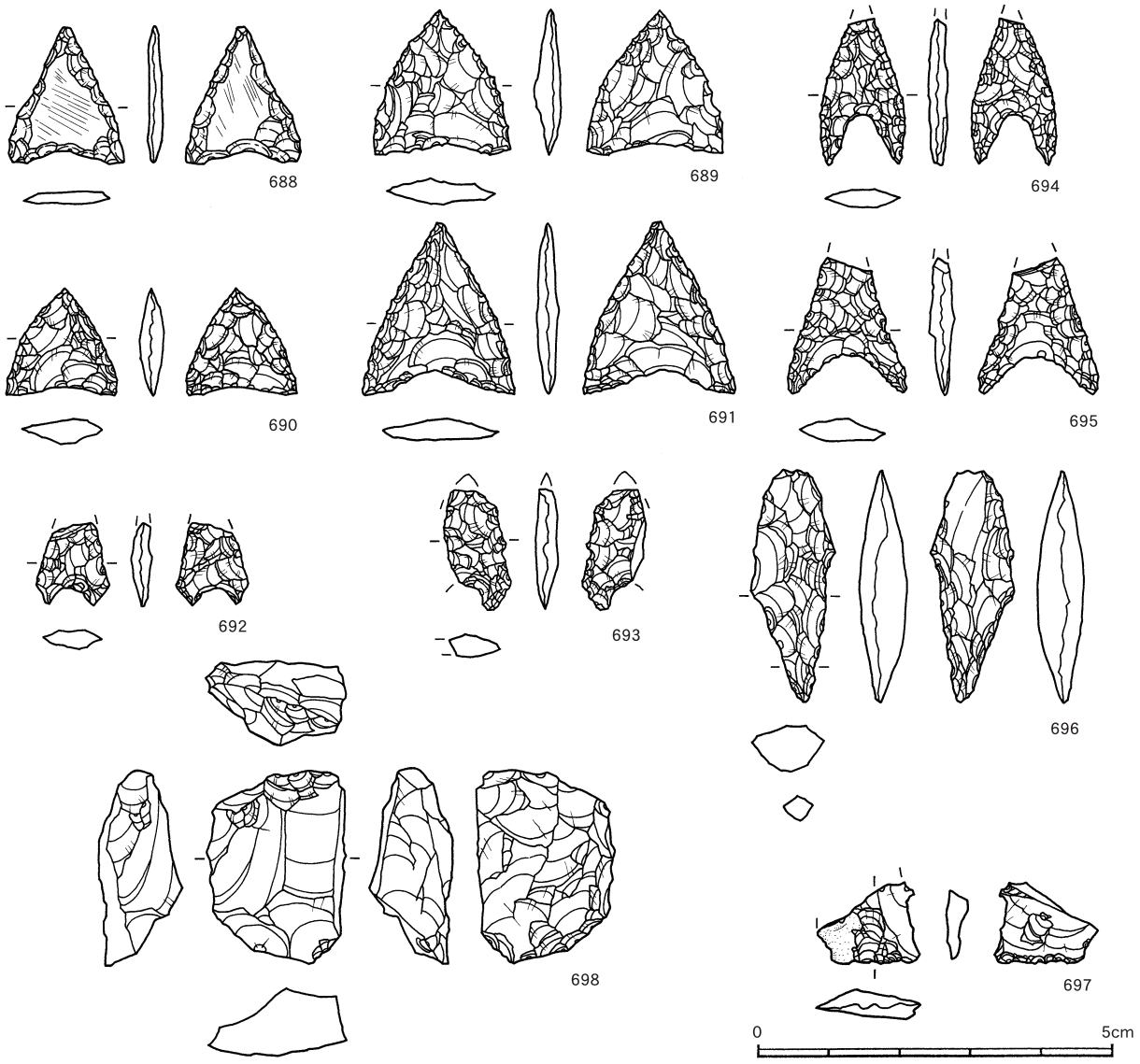
縄文時代晩期の石器は，打製石鏃，石錐，楔形石器，磨製石斧，礫器，磨石が出土した。いずれも縄文時代晩期の包含層であるⅢ～Ⅳ層から出土したものである。一部，表採の遺物もあるが，出土した場所の，周辺の包含層の撹乱の状況から縄文時代晩期の遺物と判断した。石材としては，黒曜石，安山岩，チャート，玉髄，頁岩，砂岩，泥岩，凝灰岩，花崗岩，流紋岩などがみられた。

⑴　打製石鏃（第171図688～695）

688～691は全体の形状が正三角形状（長幅比＝1.3：１未満とした）を呈するものである。いずれも基部の抉りは小さい。692～695は全体の形状が二等辺三角形（長幅比1.3：１以上とした）を呈するものである。692は上部が欠損しているが，両面から丁寧な剥離で整形してある。693は左側が欠損しているが，抉りを入れ脚部を作出していることがわかる。694，695はいずれも，先端部が欠損しているが，基部に深い抉りがあり，明確に脚部が作出されているものである。

⑵　石錐（第171図696）

696は頁岩製の石錐である。表裏両面に両側縁から丁寧に整形している。はっきりとした摩滅は



第171図　中央部　縄文時代晩期の石器⑴

みることができない。

⑶ **楔形石器**（第171図697，698）

697は黒曜石製で，薄い剥片素材を利用している。上部は欠損しているが，下端には使用痕がみられることから楔形石器と判断した。698はチャート製で，厚手の剥片を使用し上端と下端に使用痕が認められ，楔形石器特有の剥離痕がみられる。

⑷ **磨製石斧**（第172図699）

699は小型の磨製石斧である。刃部と表裏面を丁寧な研磨で仕上げている。石材は安山岩で，最大長９㎝，最大幅4.9㎝という小型のものである。基部にわずかながら抉りがみられることから，棒状のものに装着して使用されたことも推定される。

⑸ **礫器**（第172図700）

700は扁平な礫を用いて周囲に加工を施し，刃部は両側からの剥離によって作出されている。石材は安山岩である。

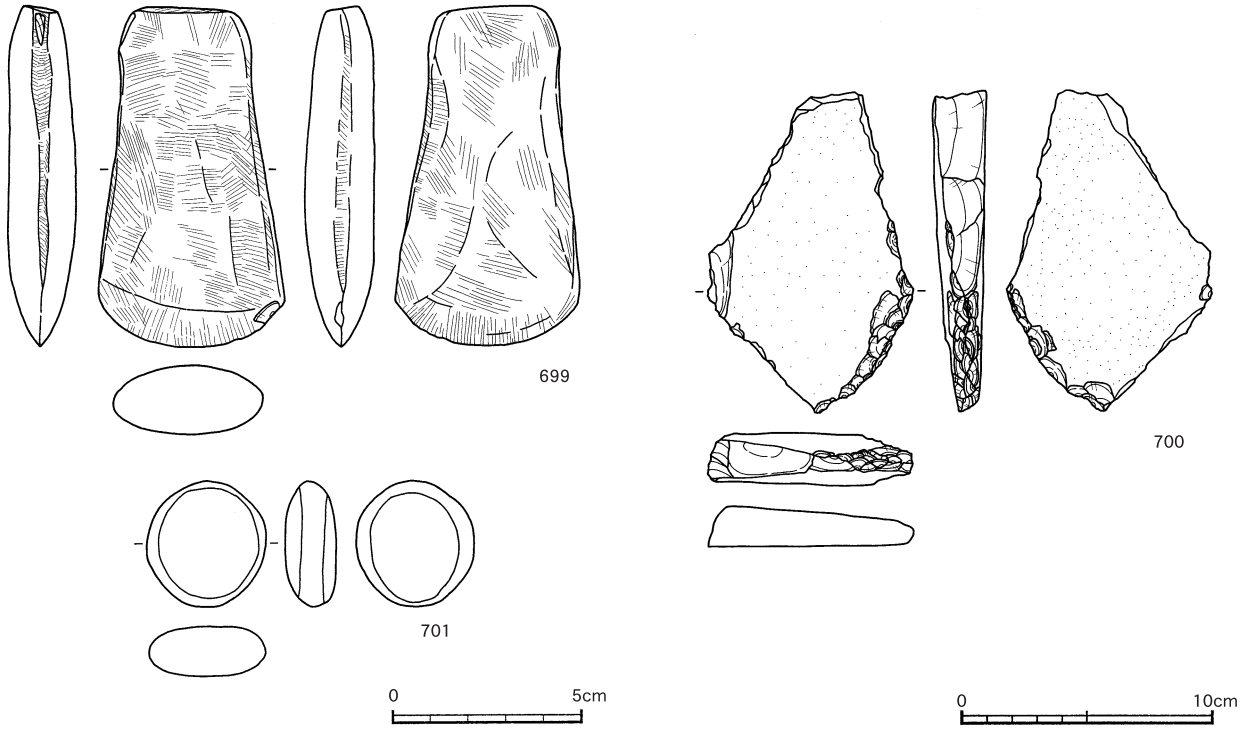
⑹ **磨石**（第172図701）

701は泥岩製で，最大長が3.3㎝の小型の磨石である。裏面に磨面がみられる。

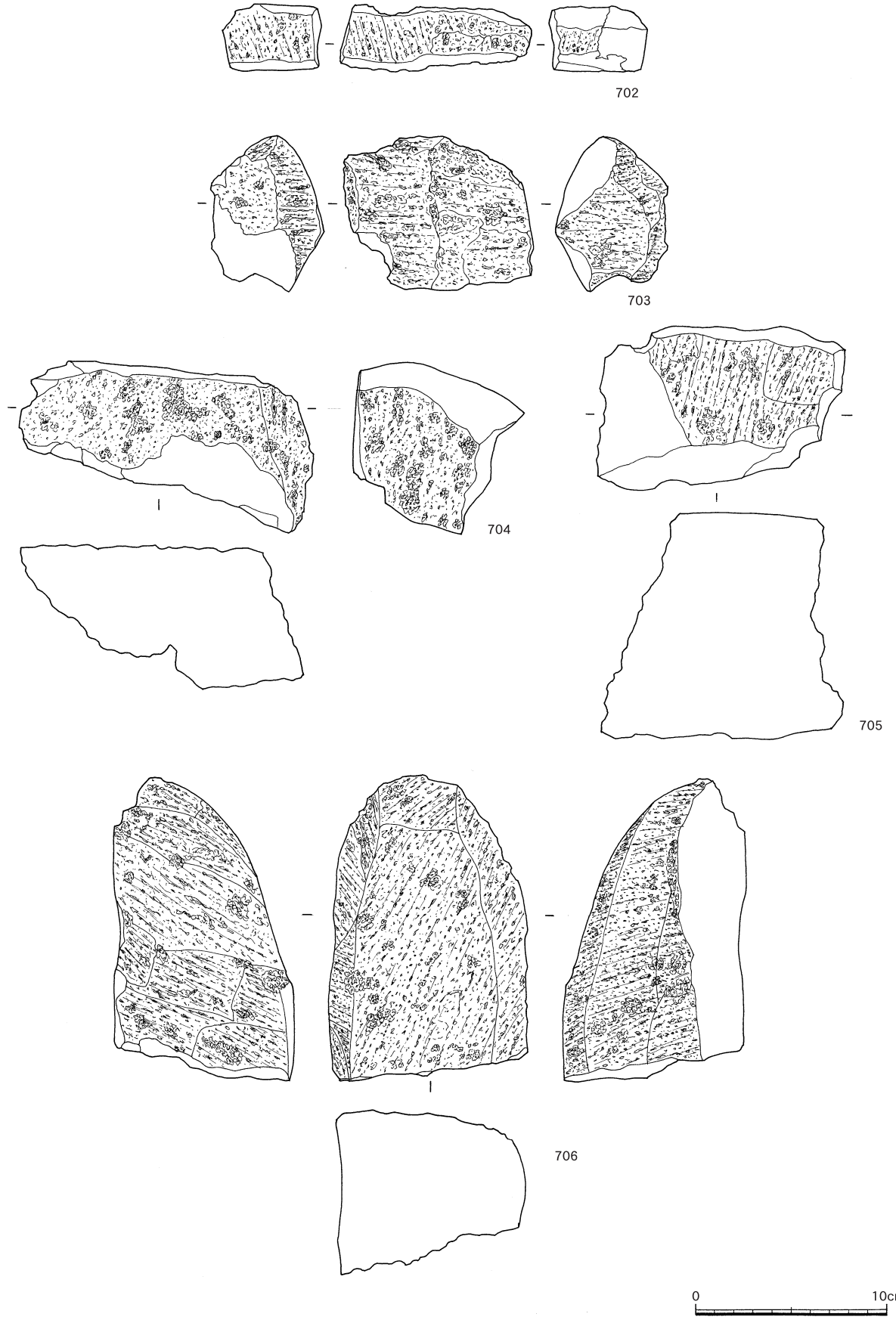
3　古代

⑴ **軽石製品**（第172，173図702～707）

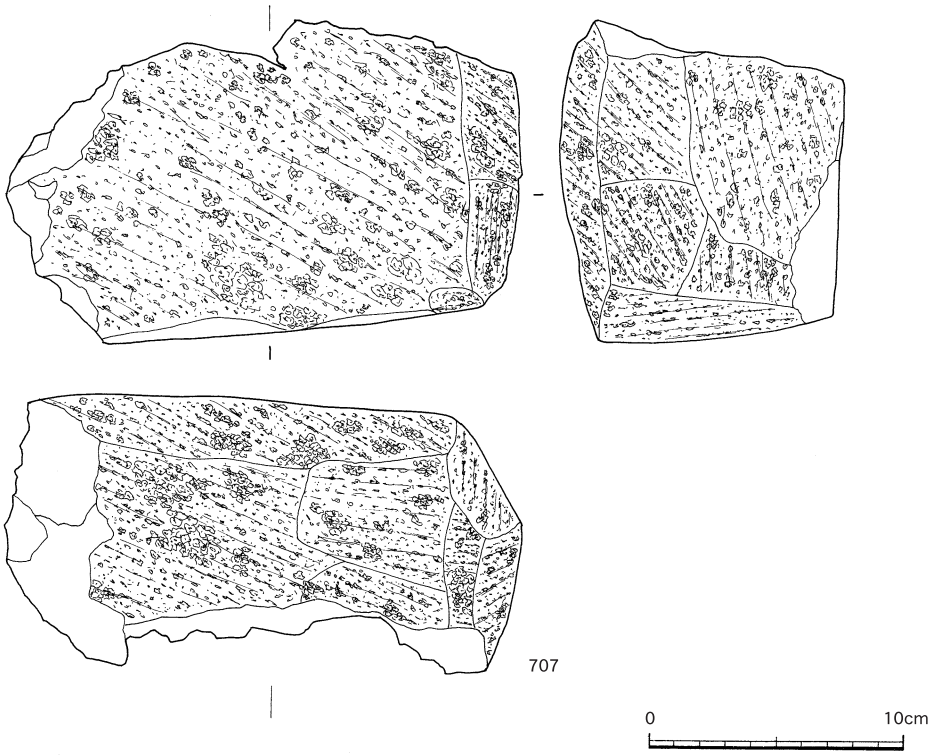
古代の石器は軽石製品のみが出土した。はっきりと用途が分かるものはないが，いずれも丁寧に面取りがしてあることから，軽石製品と判断した。熱を受けていると思われるものもあり，炉などを組む石材として利用された可能性も指摘できる。



第172図　中央部　縄文時代晩期の石器⑵



第173図　中央部　古代の石器(1)



第174図　中央部　古代の石器(2)

第23表　中央部　石器観察表(1)

挿図番号	レイアウト番号	器　種	出土区・層		石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
159	608	石鏃	K-27	Ⅶ	黒曜石	1.5	1.3	0.3	0.43	
	609	石鏃	K-35	Ⅷ	黒曜石	1.1	1.2	0.25	0.17	
	610	石鏃	H-52	Ⅶ	チャート	1.5	1.8	0.3	0.77	
	611	石鏃	G-44	Ⅶ	黒曜石	1.9	1.6	0.3	0.70	
	612	石鏃	H-39	Ⅶ	玉髄	2.5	2.2	0.3	1.83	一括
	613	石鏃	H-41	Ⅷ	チャート	1.8	1.1	0.2	0.39	
	614	石鏃	H-40	Ⅷ	チャート	3.2	1.8	0.3	1.63	
	615	石鏃	L-42	Ⅶ	チャート	2	1.9	0.4	1.49	
	616	石鏃	I-35	Ⅶ	チャート	3.6	1.7	0.4	2.03	
160	617	スクレイパー	23T	Ⅶ	安山岩	5.5	4.2	0.5	20.45	
	618	スクレイパー	23T	Ⅷ	安山岩	5.5	5.4	1	36.06	
	619	スクレイパー	23T	Ⅷ	安山岩	6.7	6	0.8	37.91	
	620	スクレイパー	23T	Ⅷ	安山岩	5.8	6	1.4	58.58	
	621	スクレイパー	23T	Ⅷ	安山岩	6.6	6	1.1	42.94	
	622	スクレイパー	23T	Ⅷ	安山岩	6.4	3.3	0.9	19.16	
	623	スクレイパー	23T	Ⅷ	安山岩	11.2	5.2	1	40.33	
	624	スクレイパー	23T	Ⅷ	安山岩	14.6	5.5	0.8	71.11	
161	625	スクレイパー	23T	Ⅷ	安山岩	4.7	4.5	0.7	22.07	
	626	スクレイパー	23T	Ⅷ	頁岩	4.5	5.9		21.17	
	627	スクレイパー	23T	Ⅷ	チャート	3.8	3.3	1.1	17.33	
	628	スクレイパー	22T	Ⅶ	チャート	2.2	2.8	0.7	5.03	
	629	スクレイパー	23T	Ⅶ	チャート	2.6	3	1	8.62	
162	630	微細剥離痕剥片	23T	Ⅷ	チャート	5.9	3.1	1.2	19.78	
	631	磨製石斧	23T	Ⅷ	安山岩	9.2	4.8	1.1	94.01	
	632	刃部磨製石斧	K-34	Ⅶ	頁岩	9.1	4.7	2	106.61	
	633	刃部磨製石斧	23T	Ⅷ	頁岩	14.5	6.4	2.2	250.67	
	634	刃部磨製石斧	23T	Ⅷ	ホルンフェルス	9.9	3.1	1.2	28.54	
163	635	打製石斧	I-42	Ⅶ	頁岩	16.55	9.95	3	518.18	
	636	礫器	K-45	Ⅶ	安山岩	14	10.5	1.9	316.88	
	637	礫器	H-51	－	安山岩	12.5	13.2	4	839.16	集石24号

第24表　中央部　石器観察表(2)

挿図番号	レイアウト番号	器　種	出土区・層		石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
164	638	磨石	23T	Ⅷ	安山岩	3.5	2.7	2.1	26.07	
	639	磨石	K-44	Ⅶ	砂岩	2.9	2.6	2.2	23.76	
	640	磨石	33T	表採	砂岩	5.2	3.9	1.4	28.00	一括
	641	磨石	J-41	Ⅷ	安山岩	5.85	4.65	1.8	70.30	
	642	磨石	H-51	－	凝灰岩	8.1	6.7	5.5	384.74	集石24号
	643	磨石	H-38	Ⅵb	花崗岩	4.8	3	3.7	58.00	
	644	磨石	G-48	Ⅷ上面	安山岩	7.7	6.4	2.8	224.46	集石21号
	645	磨石	L-38	Ⅷ	安山岩	6.7	5.15	5.2	319.24	
	646	磨石	H-38	Ⅶ	凝灰岩	7.2	8.05	5.2	323.00	
	647	磨石	J-36	Ⅷ	凝灰岩	10.4	5.85	3.1	211.56	
	648	磨石	K-32	Ⅶ	安山岩	9.4	6.5	5.2	484.80	
	649	磨石	H-52	Ⅶ	凝灰岩	9.3	7.9	5.5	483.48	
165	650	磨石	H-50	Ⅶ	安山岩	5.1	5.3	3.9	150.04	
	651	磨石	H-39	Ⅶ	安山岩	5.45	4.8	4.1	153.04	
	652	磨石	J-43	Ⅶ	安山岩	8.9	6.7	6	423.08	
	653	磨石	23T	Ⅷ	安山岩	10.5	5.6	5.7	365.99	
	654	磨石	L-24	Ⅷ	安山岩	8.9	7.5	7	522.56	
	655	磨石	H-51	Ⅶ	安山岩	14.5	11.6	6.4	1275.06	集石24号
166	656	磨石	I-35	Ⅶ	安山岩	7.6	6.6	3.3	231.00	
	657	磨石	H-51	－	凝灰岩	9.2	8.9	7.7	829.79	集石24号
	658	磨石	H-15	Ⅶ～Ⅷ	安山岩	7.5	7	4.5	305.00	集石24号
	659	磨石	G-48	Ⅷ上面	安山岩	11.8	6.1	3	241.06	集石21号
	660	磨石	L-23	Ⅷ	花崗岩	6	7.3	5.5	310.00	集石７号
	661	磨石	K-45	Ⅶ	安山岩	9.25	8.1	4.1	481.27	
	662	磨石	J-31	Ⅷ	安山岩	5.6	3.6	2.9	50.00	
	663	磨石	J-33	Ⅷ	流紋岩	3.5	7.1	3	100.80	
	664	磨石	H-51	－	安山岩	12.2	10.2	6	1071.53	集石24号
167	665	磨石	I-39	Ⅷ	安山岩	5.6	5.1	4.6	187.47	
	666	磨石	K-45	Ⅶ	安山岩	9.8	8.65	4.4	554.10	
	667	磨石	J-32	Ⅷ	安山岩	8.6	7.3	4.5	464.47	
	668	磨石	H-42	Ⅷ	泥岩	10.75	10.5	4.6	731.04	
	669	磨石	23T	Ⅷ	花崗岩	5.7	5.8	4.6	196.35	
	670	磨石	L-44	Ⅷ	安山岩	9	9.4	4.3	465.00	集石19号
	671	磨石	H-51	Ⅶ	砂岩	9.5	8.1	4.2	444.78	
	672	磨石	H-51	Ⅶ	泥岩	9.3	7.7	3.9	444.51	
168	673	石皿	23T	Ⅶ	安山岩	8.8	9.35	4.5	591.02	
	674	石皿	J-45	Ⅶ	安山岩	13.4	7.9	2.2	397.48	
	675	石皿	J-46	Ⅶ	安山岩	10.1	8.1	4.9	618.27	
	676	石皿	H-49	Ⅶ	泥岩	10.3	9.7	2.2	354.07	
	677	石皿	K-29	Ⅶ	安山岩	8.9	7.3	3.6	347.88	
	678	石皿	J，K-45	Ⅶ	花崗岩	12.2	9.9	2.8	423.50	礫一括
	679	石皿	I-35	Ⅶ	泥岩	11.1	13.2	2.8	499.12	
169	680	石皿	L-36	Ⅷ	砂岩	9.8	8.8	4.6	546.50	
	681	石皿	H-51	Ⅶ	安山岩	12	8.5	6.1	1041.00	
	682	石皿	G-46	Ⅵb	安山岩	16.3	12	11.4	3000.00	一括
	683	石皿	H-51	Ⅶ	花崗岩	17.3	14.7	6.2	2240.50	
170	684	石皿	I-42	Ⅶ	安山岩	33	15.1	4.3	4000.00	
	685	石皿	J-46	Ⅶ	安山岩	26.5	17.2	3.5	2000.00	
	686	軽石製品	23T	－	－	9.8	7.3	4.3	52.10	土坑２
	687	軽石製品	23T	－	－	7.3	6	3	22.79	土坑６
171	688	石鏃	L-27	Ⅳ	ホルンフェルス	2	1.6	0.2	0.71	
	689	石鏃	J-37	Ⅲa	頁岩	2.1	1.9	0.4	1.27	
	690	石鏃	J-31	表採	安山岩	1.5	1.6	0.3	0.64	一括
	691	石鏃	K-31	Ⅲb	安山岩	2.5	2.1	0.4	1.24	
	692	石鏃	22T	表採	黒曜石	1.2	1	0.3	0.26	一括
	693	石鏃	22T	表採	黒曜石	1.7	0.9	0.3	0.47	一括
	694	石鏃	L-31	Ⅳ	チャート	2.1	1.2	0.3	0.64	
	695	石鏃	L-44	Ⅲb	チャート	1.9	1.7	0.3	0.75	
	696	石錐	J-31	Ⅲb	頁岩	3.3	1.2	0.6	2.18	
	697	楔形石器	K-34	Ⅲb	黒曜石	1.4	1.1	0.3	0.36	
	698	楔形石器	22T	Ⅳ	チャート	2.8	1.9	1	6.94	落ち込み一括
172	699	磨製石斧	K-26	Ⅳ	安山岩	9	4.9	1.8	118.58	
	700	礫器	J-46	Ⅲb	安山岩	12.6	8.1	1.6	233.64	
	701	磨石	22T	表採	泥岩	3.3	3.1	1.3	20.72	
173	702	軽石製品	I-46	カクラン	－	10	3.5	5.1	56.40	
	703	軽石製品	J-46	Ⅲa	－	8	10	5.9	141.80	
	704	軽石製品	H，I-49	Ⅲb	－	14.7	9	7.4	259.00	
	705	軽石製品	J-16	Ⅲb	－	11.7	12.6	8.5	489.00	
	706	軽石製品	J-16	Ⅲa	－	15.9	10	8.5	565.50	
174	707	軽石製品	J-46	Ⅲb	－	20.4	12.6	11.2	992.00	

第６節　金属製品（第175図708～714）

708～714は金属製品である。708以外の709～714についてはⅢｂ層出土で，古墳時代～古代までの時期と想定することができる。K，L－26，27区に集中が見られ，周辺の包含層遺物の出土状況から古代の遺物の可能性が高い。これらを一括して金属製品として取り扱った。

煙管（第175図708）

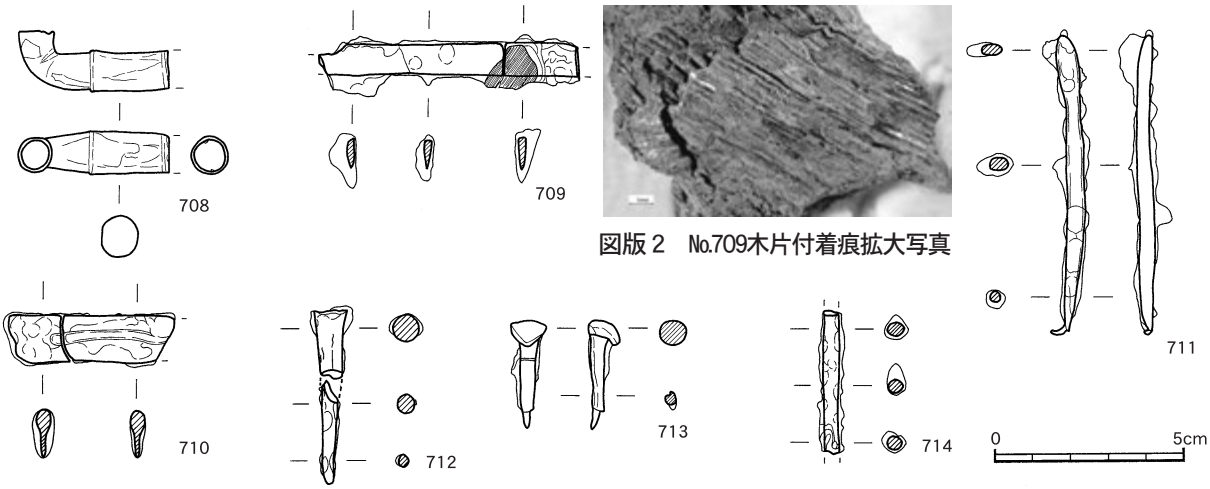
708は煙管の雁首部分である。円筒状に延びる胴部とややすぼまりながら締まる首部から垂直に上位へ開く火皿部分が鑞付けされている。青銅製で火皿口径は1.0㎝である。火皿と首部の間に補強帯が無く，首部の湾曲が弱く直線的であることから19世紀以降のものである。

刀子（第175図709，710）

709，710は鉄製の刀子であり，どちらも両端が欠損した身部のみの出土であり全長は不明である。709には一部木質が付着し錆と一体化している。鞘の可能性も考えられる。（図版２）

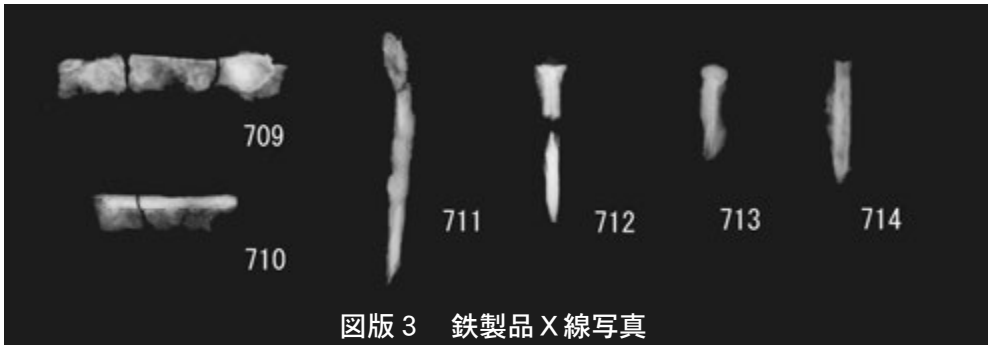
釘（第175図711～714）

711～714は鉄釘と思われるもので，直線的なものであるが欠損品が多く全体形は不明である。



図版２　№709木片付着痕拡大写真

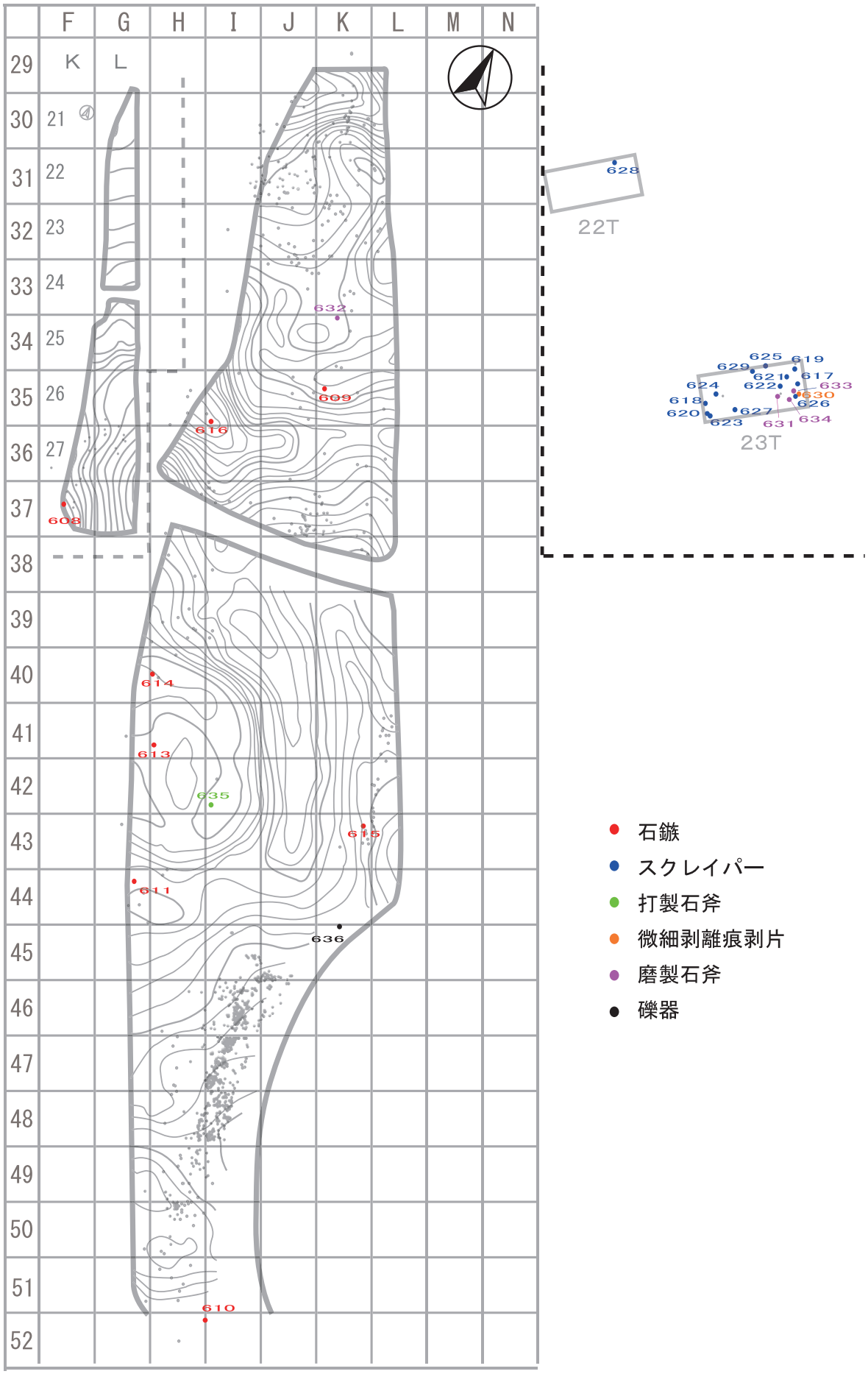
第175図　中央部　金属製品



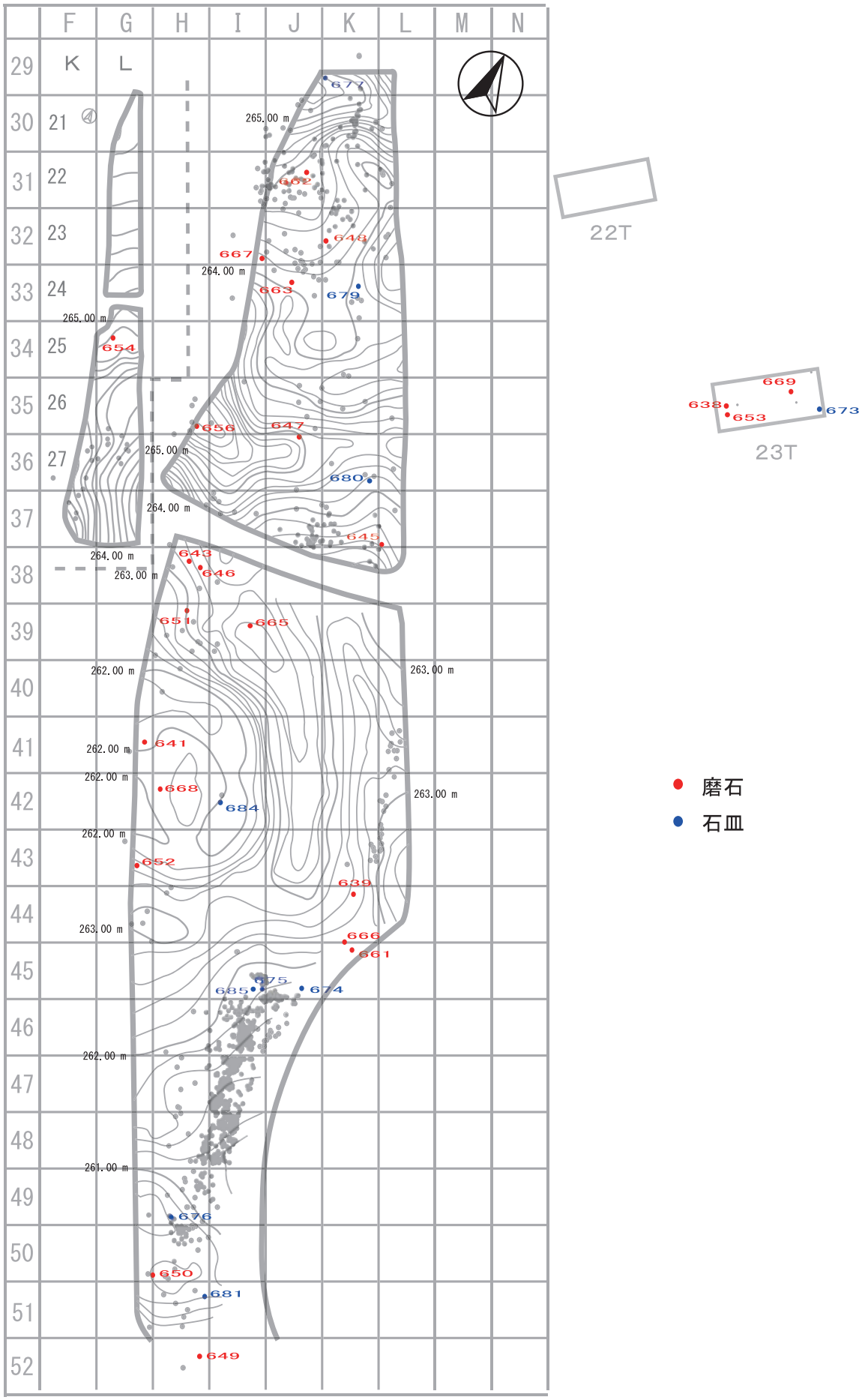
図版３　鉄製品Ｘ線写真

第25表　中央部　金属製品観察表

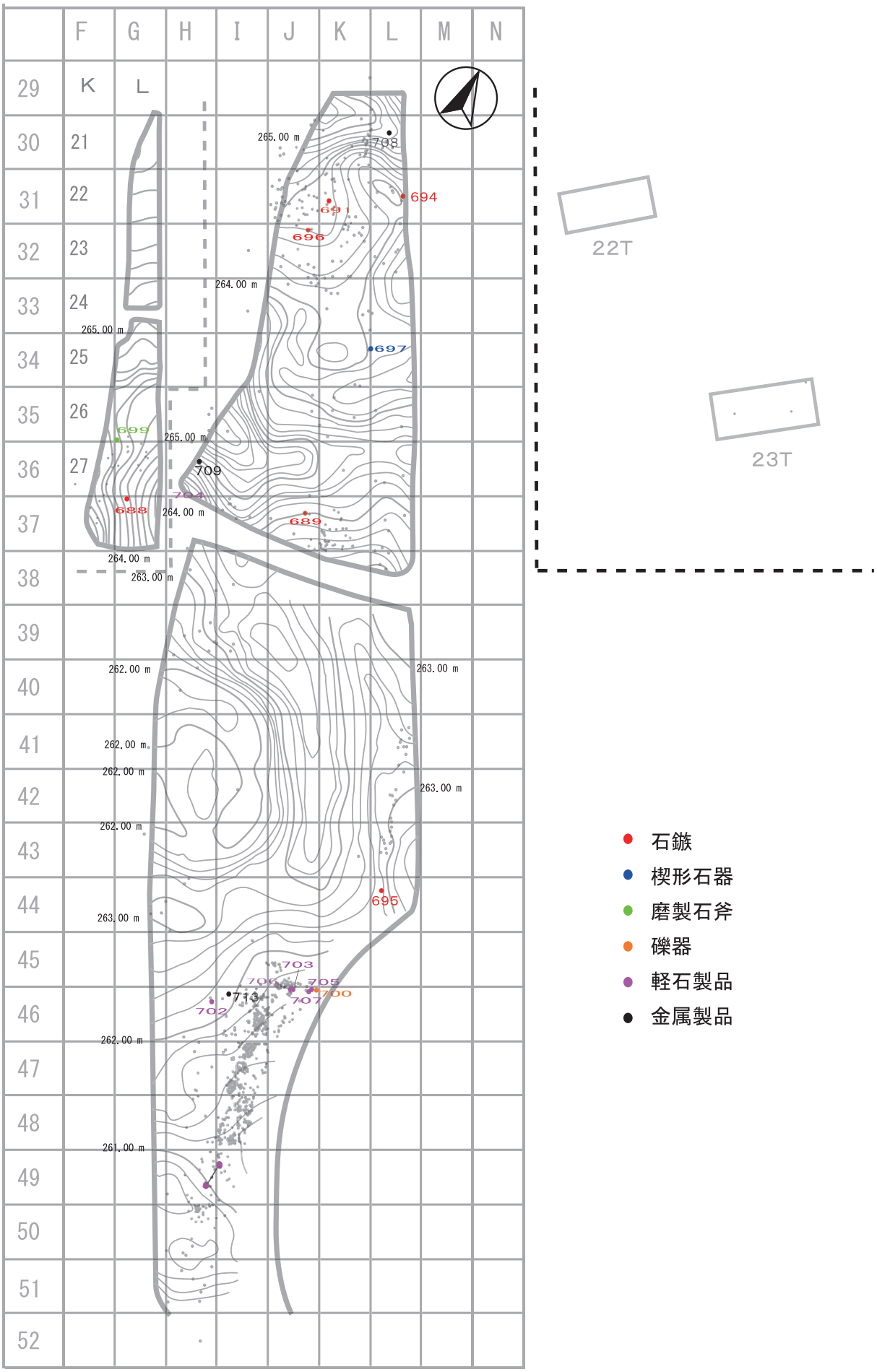
挿図番号	レイアウト番号	器　種	出土区	層	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備　考	注記番号
175	708	煙管	L-30	Ⅰ	4.0	1.1	1.1	7.0		1582
	709	刀子？	H-36	Ⅲb	（6.8）	1.5	0.8	7.0	接合	4975
	710	刀子？	K，L-26，27	－	（4.4）	（1.3）	（0.6）	（5.5）		－
	711	釘	K，L-26，27	－	（8.0）	1.0	1.0	7.5	接合	畝間
	712	釘	K，L-26，27	－	（4.6）	（0.9）	（0.7）	4.5	接合	畝間
	713	釘	I-46	－	（2.9）	0.9	0.8	2.0		表採
	714	釘？	K，L-26，27	－	（3.7）	0.7	0.6	3.0		－



第176図　中央部　石器出土状況図(1)



第177図　中央部　石器出土状況図(2)



第178図　中央部　石器出土状況図(3)，金属製品

第Ⅵ章　南部の調査

第１節　調査の概要（第179図）

南部の本調査は，Ｇ～Ｈ－53～66区を平成18年10月～平成19年３月に中央部調査区と並行しながら行った。

南部調査区は，中央部調査区の南側部分に相当する。この南側部分は，緩やかに傾斜しながら谷を形成し，特に谷の東側は深く切り込まれ，高低差は20mに達する。なお，谷を隔てた台地には，高古塚遺跡が立地している。

調査区の面積は4,600㎡で，南北約200m，東西の幅が約25mの細長い長方形を呈した調査区である。調査以前は，平坦地は畑地，傾斜地は杉の人工林であった。

平成17年度の調査では，南部調査区に計13ヶ所の確認トレンチを設定し，遺構や遺物包含層の残存状況を確認し，その結果，Ｇ～Ｈ－53～66区では，一部消滅している部分もあったが，ほぼ全面で畝状遺構が確認された。そこで，Ｇ～Ｈ－53～55区，Ｇ～Ｈ－56～59区，Ｇ～Ｈ－60～66区の順に本調査を実施し，畝状遺構の把握を目指し調査を進めた。畝状遺構の残存状況把握後，古代の遺構・遺物の調査を引き続き実施した。

なお，67区以南は耕地面積の拡大を目的とした開墾や，近年の畑地整備事業に伴う土地改良により大規模な削平が行われ，遺構・遺物は残されていなかった。

南部の検出遺構は，古代～中世の掘立柱建物跡，土坑，畝状遺構，中世の畝状遺構，土坑，近世の畝状遺構などである。

出土遺物は，縄文時代後～晩期の土器や石鏃，石匙などの石器が数点出土した。

古代では，土師器，須恵器が出土し，特に，内黒土師器，墨書土器，外朱土器，線刻土器，焼塩土器等の存在は注目される。

また，中～近世の陶磁器も出土している。

第２節　南部の層位（第180，181図）

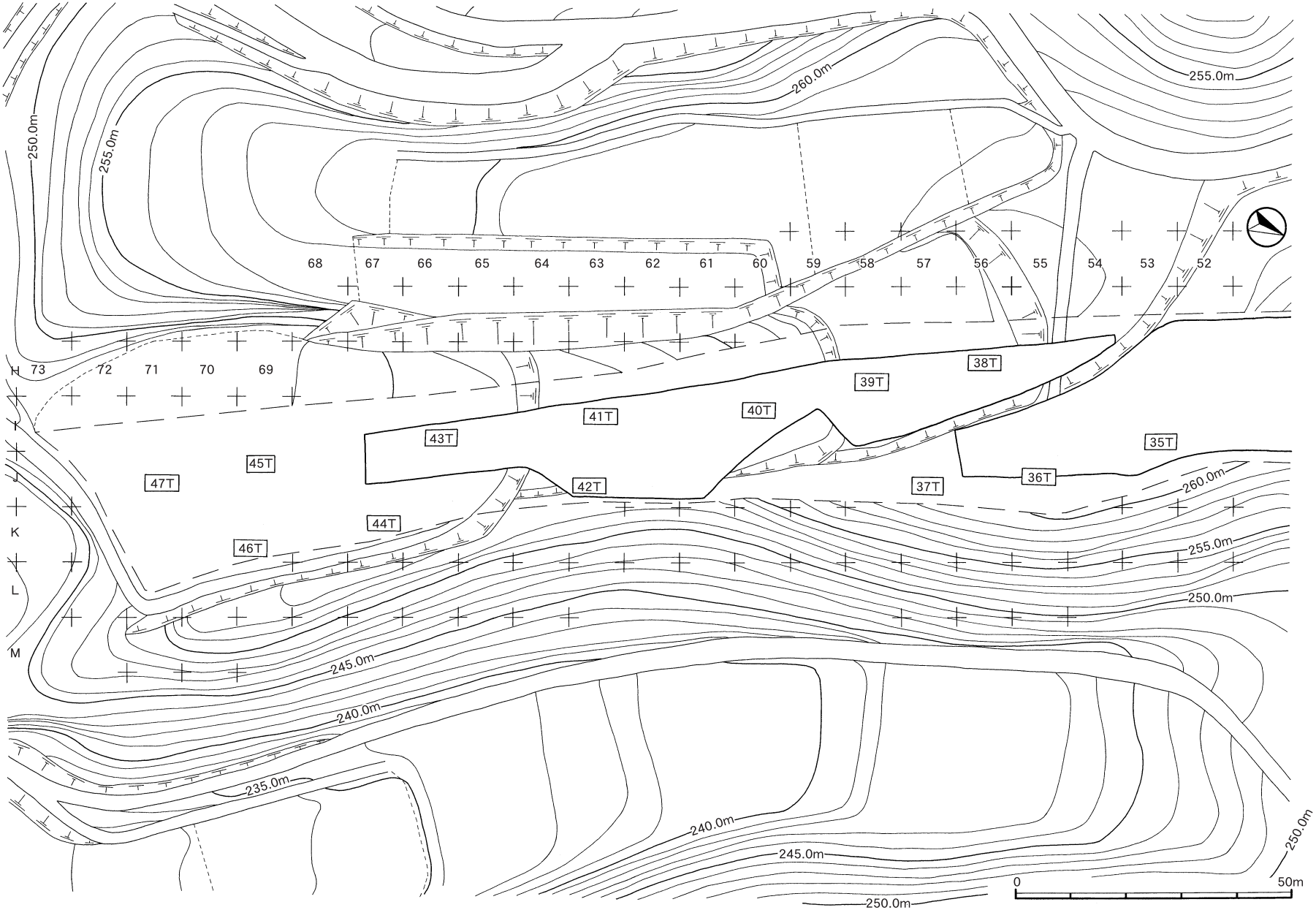
現地形は，流入土が自然に作られた堰により平坦面を段々に形成しているが，下層へ行くに従い全体的に谷に接する東側が高く，低い西側へ大きく傾斜していることが判明した。

53～55区では，表土層が削平され耕作土直下はⅤ～Ⅶ層となっていた。また，西側は遺物包含層が良好に残されていたが，東側は傾斜が厳しく上層が削平される傾向が見られた。

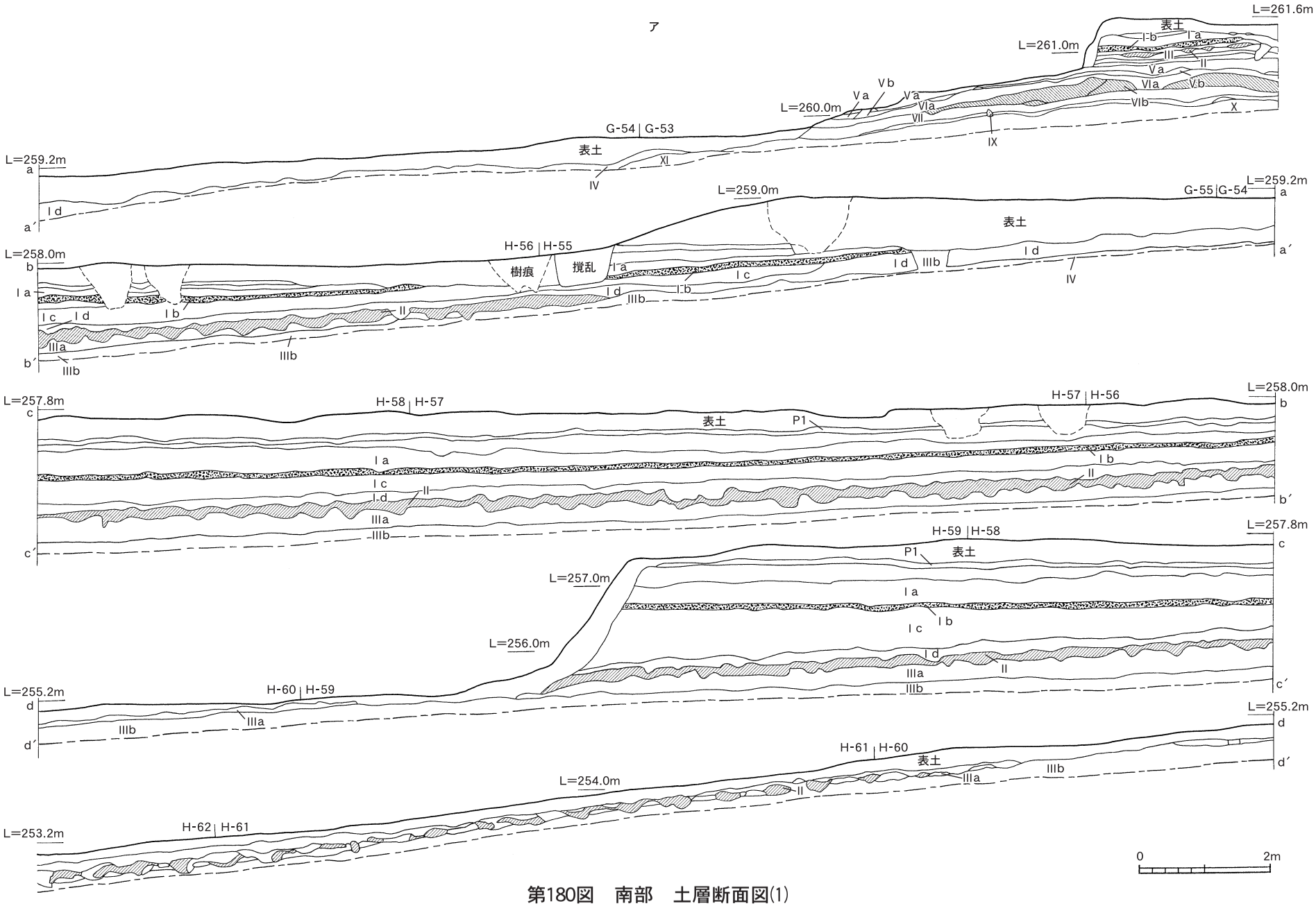
56～60区でも同じように，西側は遺物包含層が良好に残されていたが，東側は傾斜が厳しく上層が削平される傾向が見られた。西側にはⅡ層の文明ボラ層が良好に残されていたが，上位の安永ボラ層を含む自然堆積土が厚く堆積していた。耕作土直下には，桜島の大正火山灰（1914年）も確認され，Ｐ１～Ｐ３までが実見でき貴重な資料となった。

61～64区では，西側が基本層位を保ち厚く堆積しているのに対して，東側は切り立った崖状を呈し，シラスが露出していた。

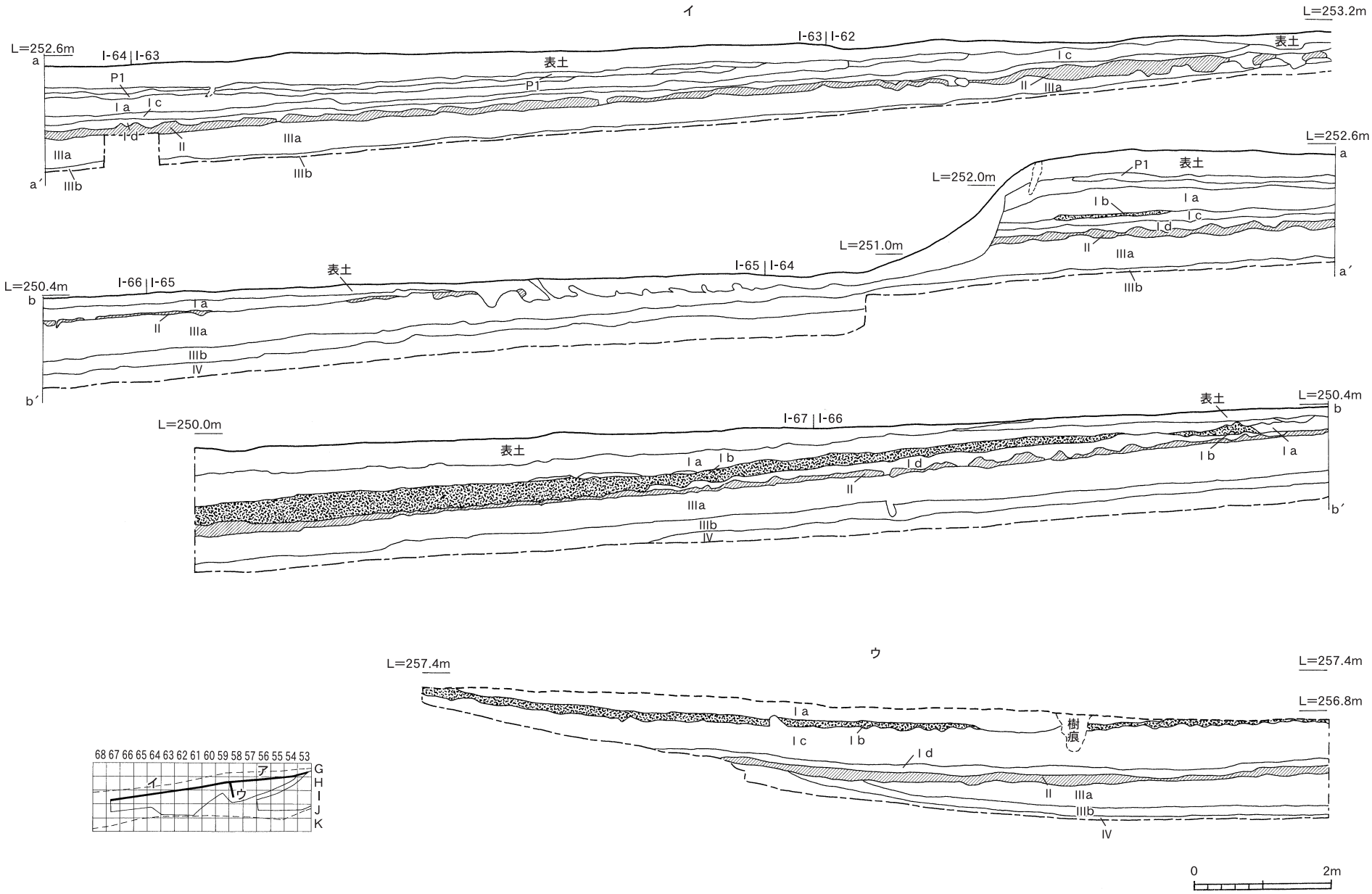
65区以南は，東西方向の傾斜に加えて南側への傾斜も大きくなり，谷へと落ち込んでいた。



第179図　南部　調査範囲図及びトレンチ配置図



第180図　南部　土層断面図(1)



第181図　南部　土層断面図(2)

第３節　検出遺構

南部の検出遺構は以下の通りである。

縄文時代の調査は，台地の縁辺部に当たる部分でのみ調査を行い，土坑が４基検出された。

古代～中世の遺構は，Ⅳ層上面で掘立柱建物跡２棟，畝状遺構１群，土坑12基が検出された。

中世～近世の遺構は，Ⅲａ層上面で畝状遺構６群，土坑14基が検出された。この中には，Ｉｃ層上面で検出された近世の畝状遺構１群も含んでいる。

斜面の多い中で，わずかな平坦面に掘立柱建物跡や畝状遺構，土坑等が設けられていた。

１　縄文時代（第182，196図）

縄文時代の遺構は土坑が４基検出された。

⑴　土坑（第182，196図）

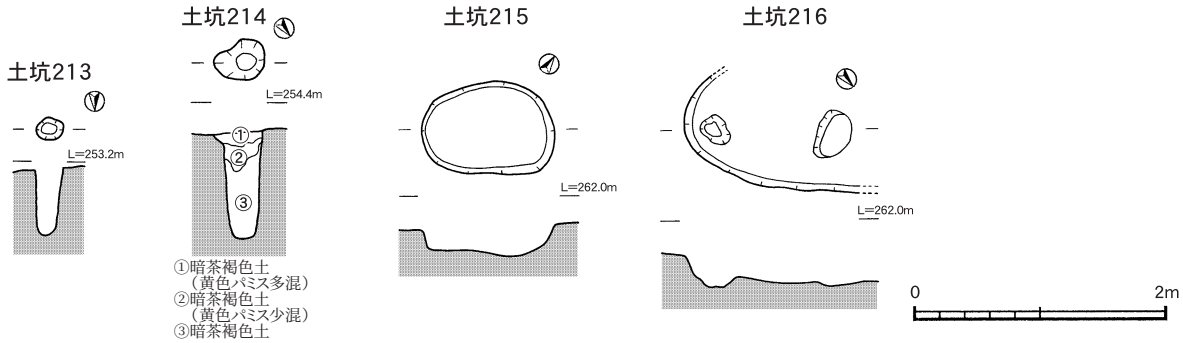
縄文時代の土坑は，Ⅳ層で検出された中～晩期のＩ類の土坑（土坑213，214）と，Ⅸ層上面で検出された早期のⅢ類の土坑（土坑215，216）に分けられる。

土坑214（第182図）

Ｉ－59区のⅣ層上面で，土坑213から約３m離れて検出された。平面形は一部凹んだ円形を呈し，長径40㎝，短径32㎝，検出面からの深さは84㎝である。底面は丸みを持ったU字状を呈している。埋土は御池火山灰を含む暗茶褐色土で砂質が強い。

土坑216（第182図）

Ｊ－55区のⅨ層上面で検出された。土坑215の北側約３mで土坑216が検出され，一部が調査区外へ延びる。検出された平面径は長径が154㎝，短径が70㎝であり，楕円形になるものと思われる。検出面からの深さは22㎝で，底面は不定形で内弯しながら立ち上がる。どちらからも埋土中から遺物は出土しなかった。



第182図　南部　縄文時代　土坑

２　古代～中世（第183～189図）

古代～中世の遺構は，Ⅳ層上面で掘立柱建物跡が２棟，土坑11基，畝状遺構１群が検出された。埋土はⅢｂ層が主体であり，遺構内遺物がほとんど見られないが，中世末の可能性を残すことから古代～中世の遺構として取り扱った。

⑵　掘立柱建物跡（第183，184，187図）

古代～中世の掘立柱建物跡は２棟検出された。建物規模は４号がやや大きく，主軸の方向が異なり重なるようにして検出された。

掘立柱建物跡４号（第183図）

Ｉ，Ｊ－61，62区で，Ⅳ層上面にて検出された。建物の規模は２間×３間，10個のピットからなり，主軸は略南北方向である。桁行の平均は約4.5m，梁行の平均は約2.4mであり，柱間寸法の平均は桁行柱間が1.9m，梁行柱間が1.6mでありほぼ等間隔である。北東側がやや張り出しているが，ほぼ長方形を呈しており，床面積はおよそ10.8㎡である。建物内に赤化するような焼土跡は見られなかったが，南側には炭化物の集中域が認められた。

ピットはほぼ円形を呈し，平均して径35×32.8㎝，深さ26㎝でありほぼ同規模であるが，Ｐ１が比較的深い。柱の径は，残存部分がなく，柱痕跡も見あたらないことから不明であるが，ピット底径よりわずかに小さくなるものと思われ，廃棄時に抜き取られた可能性も考えられる。ピット中の埋土は，古代の遺物包含層であるⅢｂ層の暗褐色土であり，上位に黄色パミスや炭化物が混ざるものがあった。埋土中より出土遺物は確認されなかった。

北側のピット底面のレベルが，南側よりやや高くなっている。遺構検出面も北側が高く南側に向かって緩やかに傾斜していることから，地形に合わせて建てられたと推測される。しかし，建てられた当時は平坦であり，南部調査区全体の地形が長い年月の間に変動したとも考えられるので，上部構造が残っていない現在では一概に断定は出来ない。

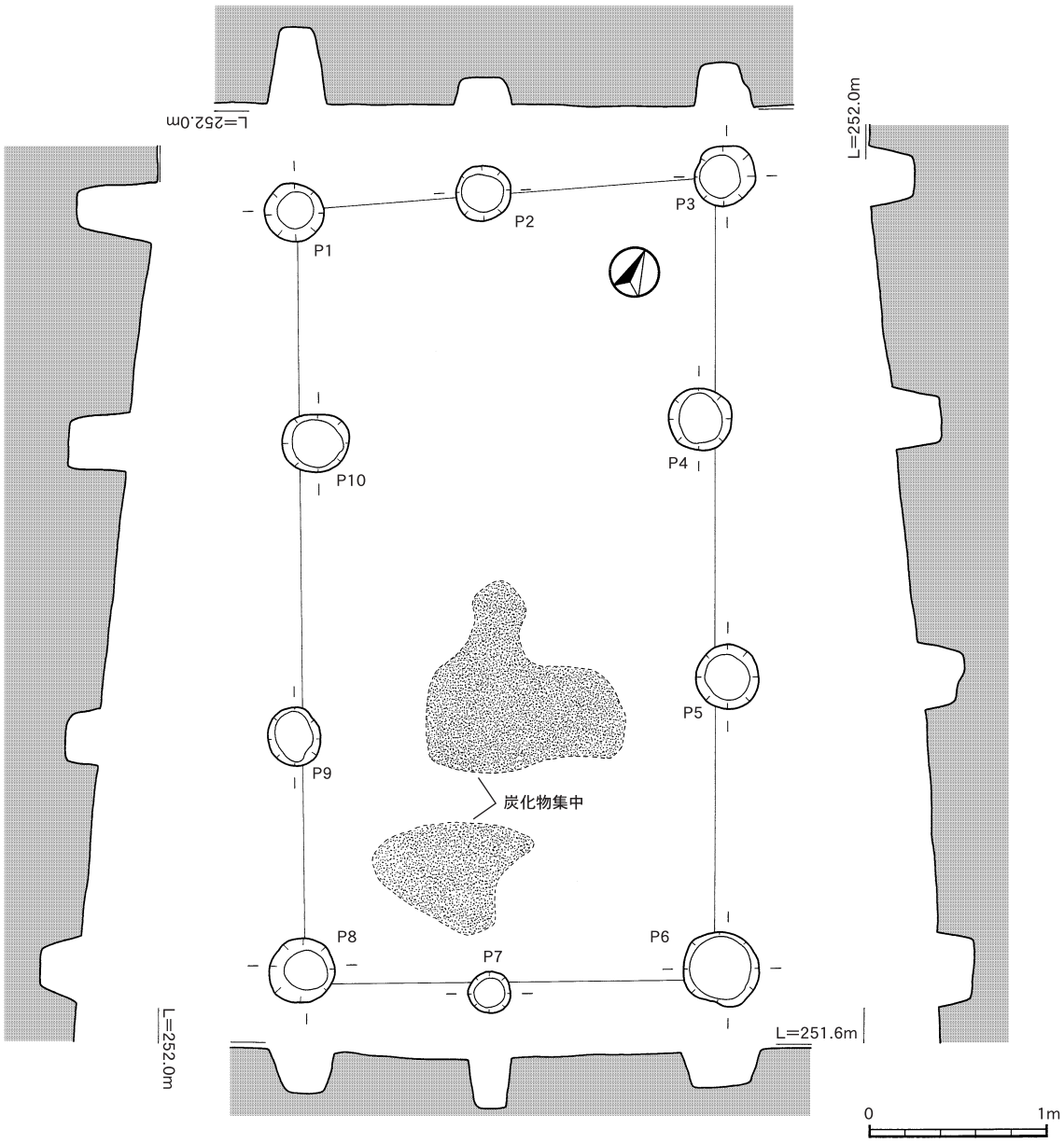
掘立柱建物跡５号（第184図）

Ｉ，Ｊ－61，62区で，掘立柱建物跡４号と重なるようにして検出された。検出面は同じくⅣ層上面である。建物の規模は２間×３間，10個のピットからなり，主軸は略東西方向である。桁行の平均は約2.3m，梁行の平均は約3.6mであり，柱間寸法の平均は桁行柱間が1.6m，梁行柱間が1.5mであるが，梁行柱間Ｐ１－Ｐ２，Ｐ６－Ｐ７間が約3.5mであり，その他の梁行柱間の平均1.4mと比べて広い。建物の上部構造は現在では分からないが，構造上必要な柱間であったと推測される。平面形は，Ｐ５がやや内に入り込んでいるが，ほぼ長方形を呈しており，床面積はおよそ6.1㎡である。建物内に焼土跡は見られなかったが，西側に炭化物の集中域が認められた。掘立柱建物跡４号と同様，地形に沿って検出されており，西側がやや高くなっている。

ピットは，平均して径38.4×35.2㎝，深さ29㎝のほぼ円形を呈しているが，長径32㎝と小さめのＰ８から，長径44㎝とやや大きめのＰ２，Ｐ９まであり一定ではない。深さも14～50㎝と幅があり，上部構造に合わせた深さではないかと考えられる。柱の径は，残存部分がなく不明であるが，Ｐ７の床面に柱痕跡ではないかと思われる凹みがあり，Ｐ７については柱径が12㎝前後ではないかと推定される。しかし，掘立柱建物跡４号と比べるとピットの並びや形状に規則性が薄く，簡易的な建物であったと思われるので，他の柱が同規模の大きさであったとは考えにくい。廃棄時に抜き取られた可能性も考えると，ピット底径よりわずかに小さくなるものと思われる。ピット中の埋土は，ほとんどが古代の遺物包含層であるⅢｂ層の暗褐色土の単一であり，上位に炭化物が混ざるものがいくつか見られた。埋土中より出土遺物は確認されなかった。

掘立柱建物跡４号と５号は，主軸の向きが異なる同規模の建物が重なるようにして検出されているので，前後関係は不明であるが，わずかな時間差により建て替えられた可能性がある。

なお，掘立柱建物跡４号の建物規模，ピット形状などは第26表に，掘立柱建物跡５号の建物規模，ピット形状などは第27表に示した。



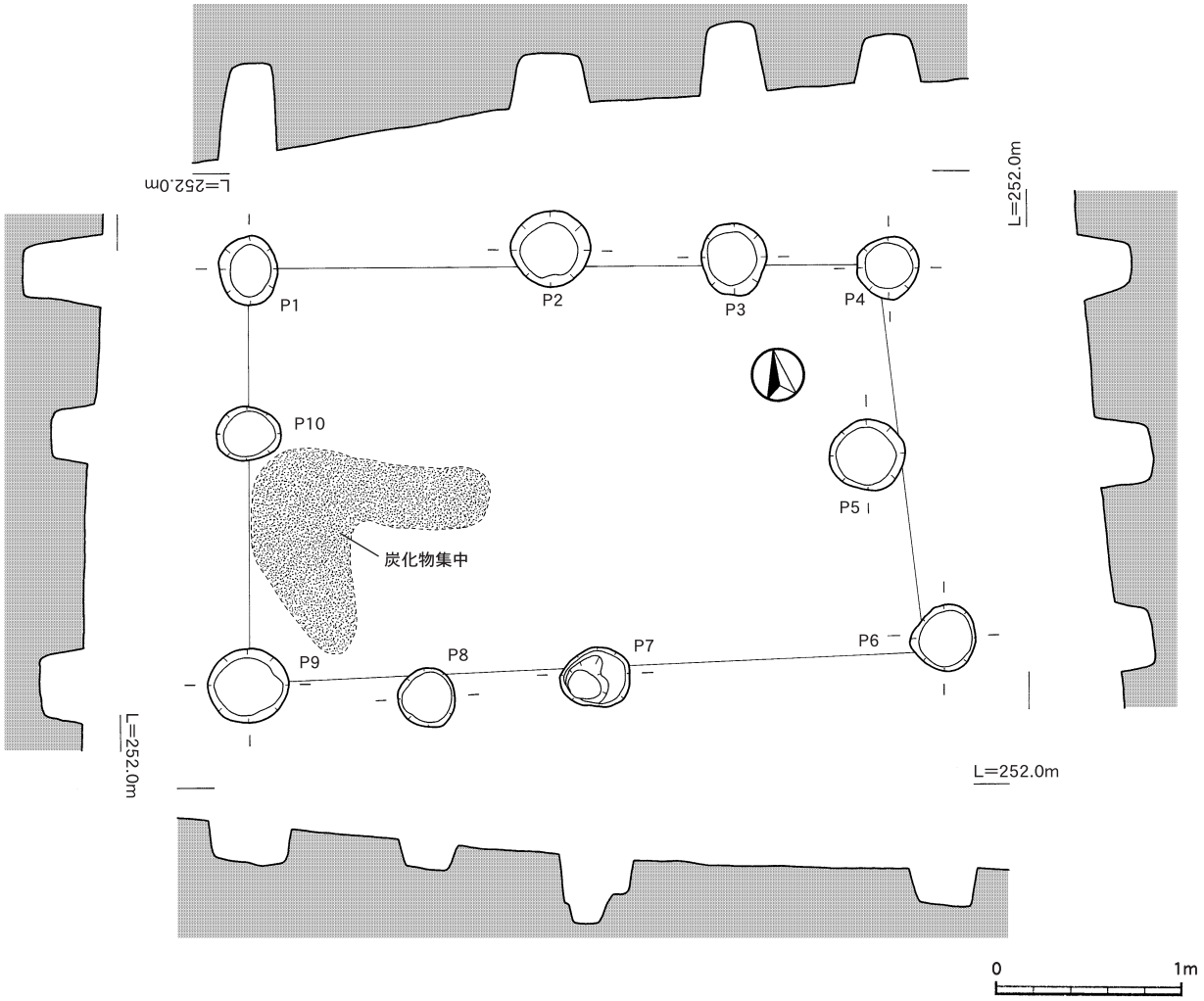
第183図　南部　古代～中世　掘立柱建物跡４号

第26表　南部　掘立柱建物跡４号計測表

主軸方向	桁行(m)	梁行(m)	桁行柱間(m)	梁行柱間(m)
南北 N-25°-W	P1－P8 4.34	P1－P3 2.42	P1－P10 1.34	P1－P2 1.08
	P2－P7 4.56	P4－P10 2.18	P9－P10 1.70	P2－P3 1.36
	P3－P6 4.52	P5－P9 2.50	P8－P9 1.34	P4－P10 2.18
		P6－P8 2.38	P2－P7 4.56	P5－P9 2.48
			P3－P4 1.38	P7－P8 1.08
			P4－P5 1.46	P6－P7 1.32
			P5－P6 1.68	

ピットNo.	P１	P２	P３	P４	P５
長径(cm)	34	32	34	36	36
短径(cm)	32	30	30	36	36
深さ(cm)	44	16	24	26	24

ピットNo.	P６	P７	P８	P９	P10
長径(cm)	44	24	38	34	38
短径(cm)	42	22	36	30	34
深さ(cm)	20	28	24	18	32



第184図　南部　古代～中世　掘立柱建物跡５号

第27表　南部　掘立柱建物跡５号計測表

主軸方向	桁行(m)	梁行(m)	桁行柱間(m)	梁行柱間(m)
南北 N-79°-E	P1－P9 2.26	P1－P4 3.48	P1－P10 0.90	P1－P2 1.64
	P2－P8 2.52	P5－P10 3.34	P9－P10 1.36	P2－P3 1.00
	P3－P7 2.40	P6－P9 3.78	P2－P8 2.52	P3－P4 0.84
	P4－P6 2.02		P3－P7 2.38	P5－P10 3.36
			P4－P5 1.04	P6－P7 1.88
			P5－P6 1.04	P7－P8 0.92
				P8－P9 0.98

ピットNo.	P１	P２	P３	P４	P５
長径(cm)	38	44	40	34	42
短径(cm)	32	42	36	34	40
深さ(cm)	50	28	38	28	28

ピットNo.	P６	P７	P８	P９	P10
長径(cm)	36	38	32	44	36
短径(cm)	34	32	32	40	30
深さ(cm)	20	36	14	24	22

⑶ 畝状遺構（第185，187図）

古代～中世の畝状遺構は，掘立柱建物跡に近接して１群検出された。

畝状遺構13（第185図）

Ⅰ－62～64区にかけて，畝状遺構の一群が検出された。Ⅳ層上面で検出され，黄褐色土を掘り込む形で畝間が残存し，略東西方向を基調とした畝間の列が並んでいる。畝間の列は西側の調査区境まで延びており，調査区外へと広がると見られ全体像は不明である。東側については，北側の数条がグリッドベルト付近まで達しているが，ベルトより東側（Ｊ－62区）では見られないことから，その付近で途絶えていると思われる。また，南側へ下るにしたがって掘り込み始める地点が西側へと寄っている。Ⅰ－63区付近から東側に急激な地層の隆起が見られるので，地形に合わせて耕作可能な平坦面を利用していたと考えられる。

畝間は，平均して幅50㎝前後，検出面からの深さが５㎝前後を基本とする小溝状を呈す。底面に平坦面を持ち，緩やかに立ち上がる。また，北側半分と南側半分ごとのまとまりが見られる。底面には多くの凹凸があり乱れているが，明確な土掘り具痕は判別できなかった。

北側の14条は，畝間の中心間の長さが70～80㎝前後のものが多いが，最小約60㎝，最大約130㎝とばらつきが見られる。途中から方向が北寄りに曲りながら蛇行している。

南側の16条は，畝間の中心間の長さが50～70㎝前後のものが多く，ほぼ等間隔で掘られている。方向は略東西方向で，直線的に並んでいるが東端はそろっていない。

畝部分は流されたと思われ，凸部が見あたらず，高さ，幅等は不明である。

埋土のほとんどはⅢｂ層の暗褐色土であるが，上位には細粒な黄色パミスがわずかに混在しており，黄褐色土の小ブロックも混じる部分も認められるので，畝の盛り土や北側の斜面から土砂の流れ込みが推測される。

⑷ 土坑（第186，187図）

古代～中世の土坑は，計12基がⅠ，Ｊ－61～64区のⅣ層上面で検出された。埋土は主にⅢｂ層の黒褐色土が中心である。形状の特徴から径30～40㎝，深さが30㎝前後の小型の円形を呈するもの（Ⅰ類，土坑217～220）と，径が約１ｍ，検出面からの深さが15㎝前後のもの（Ⅱ類，土坑221～228）の２つに大きく分かれる。

土坑217～220（第186図）

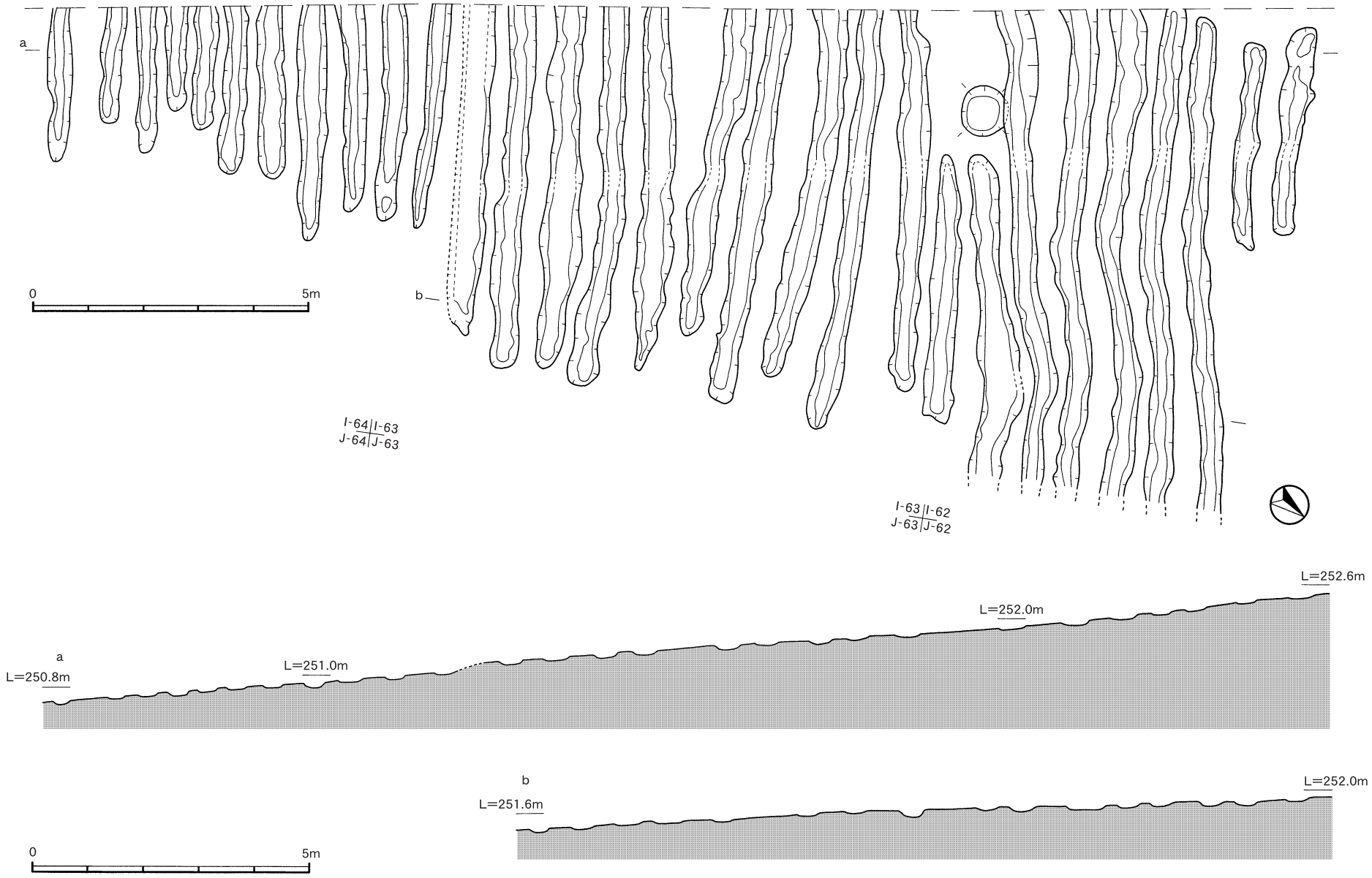
Ⅰ－62区で検出された。掘立柱建物跡に関連するピットであると考えられるが，使用目的が明確にできなかったため，ここでは土坑として取り上げた。平面形はほぼ円を呈し，４基の平均は長径33.5㎝，短径31㎝，検出面からの深さは29.5㎝である。埋土は，Ⅲｂ層が主体である。

土坑221（第186図）

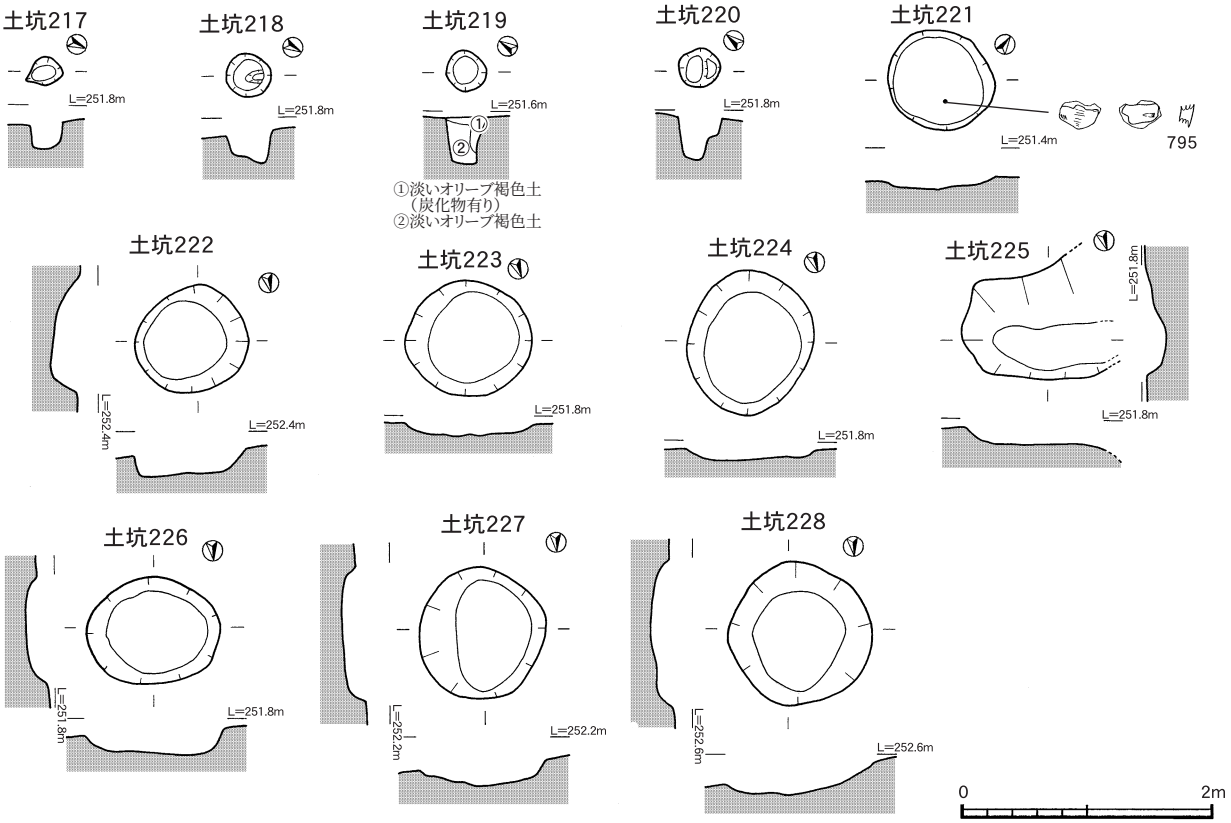
畝状遺構13の南側で畝間の東端に隣接するように検出された。断面形状は円形を呈し，断面形は薄いレンズ状を呈している。埋土中より土器片が１点出土し，図化した。（第201図795）

土坑222（第186図）

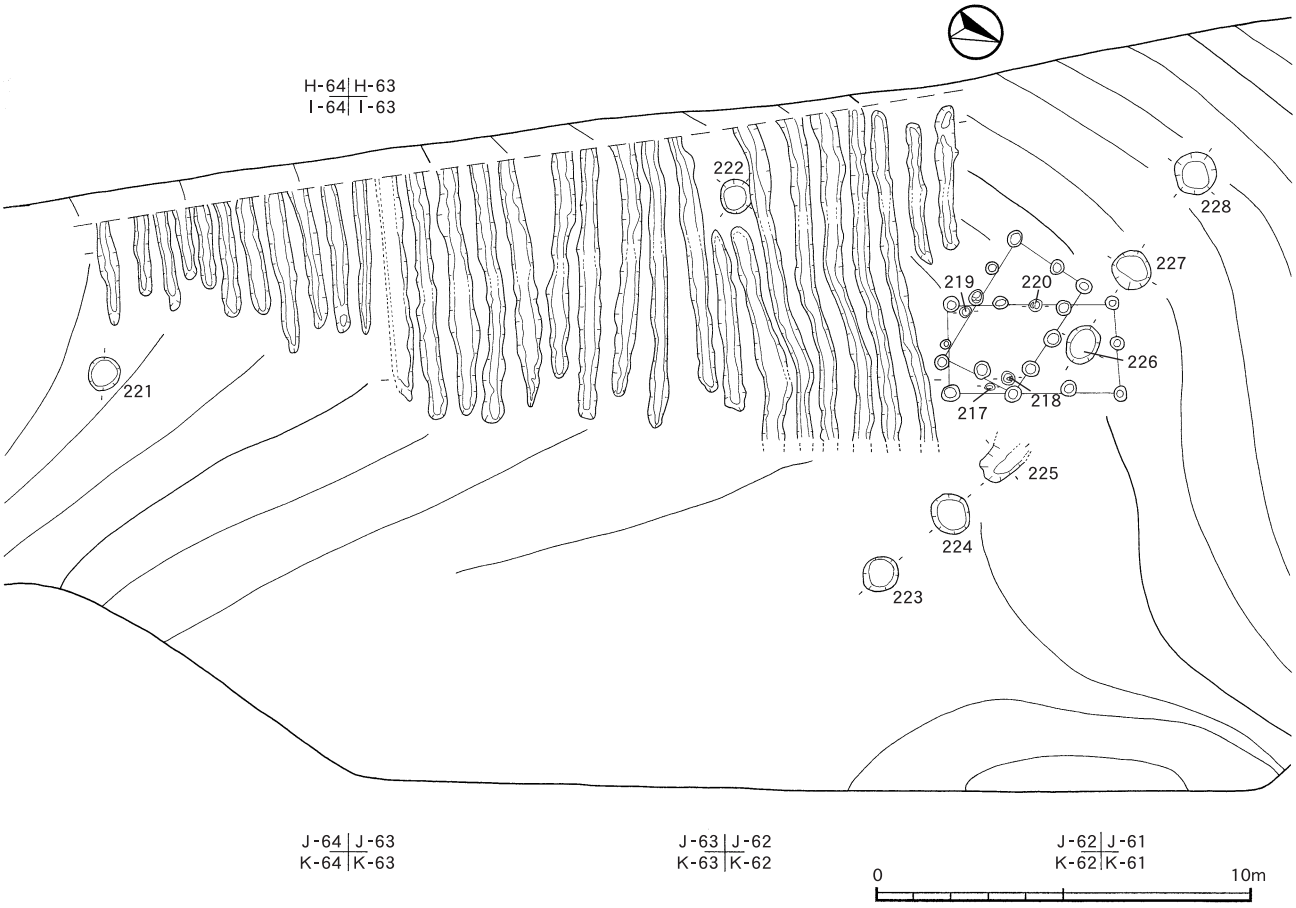
Ⅰ－63区Ⅳ層上面で検出された。畝状遺構13のやや北よりの遺構内から検出された。畝間との切り合いは見られず，土坑周辺のみ畝間が消失している。形状はほぼ円形を呈し，断面形状は薄い逆台形を呈している。土坑221，222ともに，畝状遺構13と近接し，ほぼ同時期で重なりも見られない



第185図　南部　古代～中世　畝状遺構13



第186図　南部　古代～中世　土坑



第187図　南部　古代～中世　遺構配置図

ことから，耕作に関連のある土坑の可能性が考えられる。

土坑223～228（第186図）

Ⅰ，Ｊ－61，62区から検出された。土坑は，Ｎ－69°－Ｗを軸とする直線上に，やや膨らみを持ちながら６基並んでおり，土坑間の距離が平均して約２ｍとほぼ等間隔であった。土坑225は，全体的に樹痕による撹乱を受けており，正確な形状を把握することができなかったが，平面形や深さ，底面の形状など他の５基とほぼ同規模の土坑であったと思われる。土坑223，224，226～228は，平面形が円形を呈し，平均して110×98㎝である。検出面からの深さは13㎝で，底面は薄いレンズ状を呈している。埋土は黒褐色土が主体であるが，黄褐色土や炭化物を含むものも見られた。

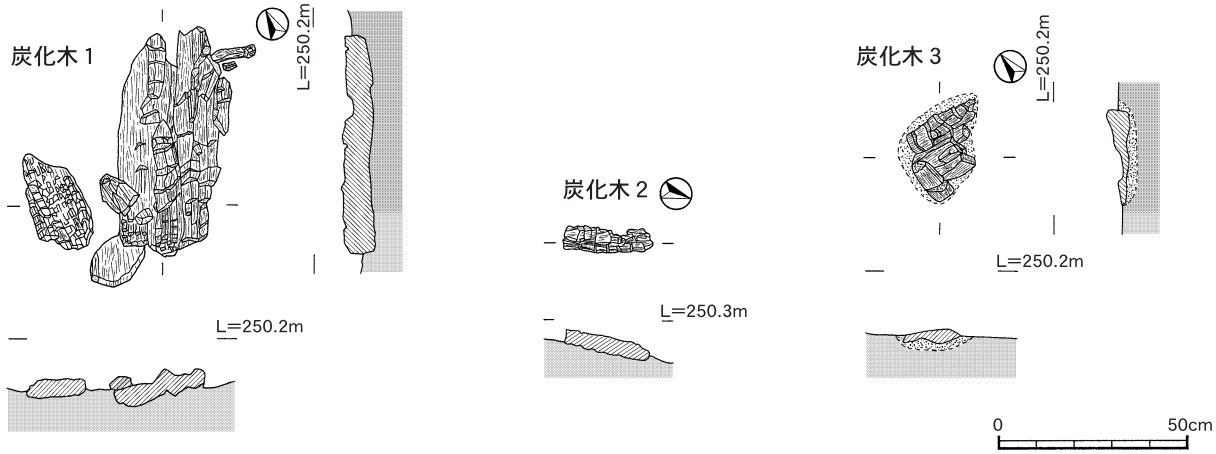
掘立柱建物跡と隣接して土坑や畝状遺構が検出されたことから，わずかな平坦地を利用して耕作地を確保し，建物を建て替えや土坑を掘り直しながらある一定期間生活を営んでいたと思われる。

⑸　炭化木（第188，189図）

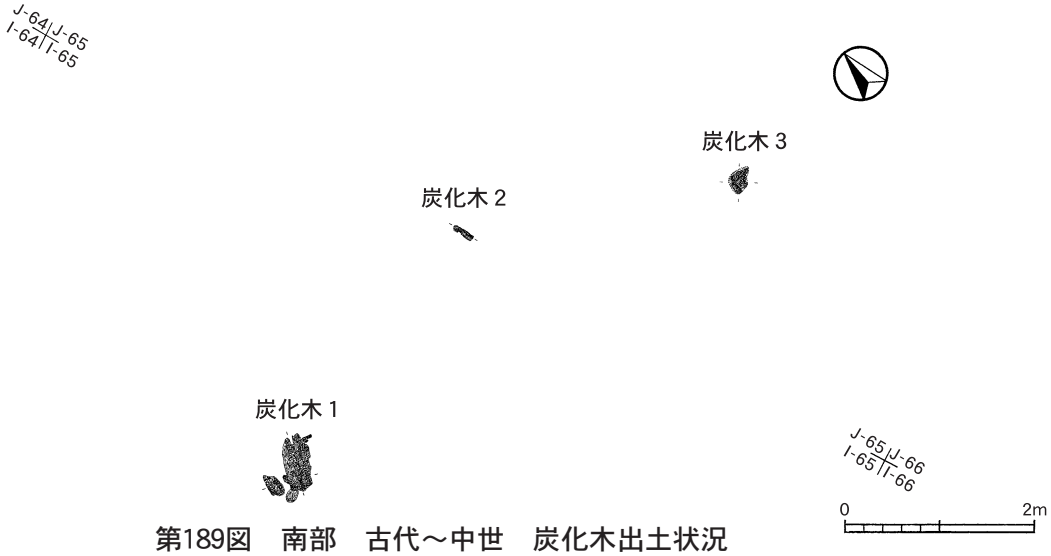
古代～中世のものと思われる炭化した木片が，近接して３ヶ所確認された。

炭化木１～３（第188図）

Ⅰ，Ｊ－65区のⅣ層上面で，炭化木の集中が見られた。概ね３ヶ所に分かれており，炭化した木片がしっかりと残っていた。緩やかに南へ下る斜面に，約３ｍ間隔で張付くようにして出土し，それぞれの出土レベルは250m弱とほぼ同じである。炭化木１の^{14}C年代測定を行ったところ，1,202±27（yrBP），歴年代で780～869ＡＤ，平安時代前期前半という結果が出ている。



第188図　南部　古代～中世　炭化木１～３



第189図　南部　古代～中世　炭化木出土状況

3　中世～近世（第190～196図）

中世～近世の遺構は，畝状遺構６群，土坑13基が検出された。ほとんどがⅢａ層の黒色土が掘り込まれたもので，埋土はⅡ層文明ボラが主体であり，黒褐色土に黄色パミスや白色パミスが混ざるものも見られる。土坑内より遺構内遺物が確認されたが，小破片のため判別が難しく流れ込みの可能性も考えられるので，中世～近世の遺構として取り扱った。また，安永ボラを埋土とする近世の畝状遺構も含まれる。

⑴　畝状遺構（第190～194図）

中世～近世の畝状遺構は，埋土が文明ボラを主体の５群と安永ボラを主体の１群の計６群である。

畝状遺構14（第190図）

Ｇ～Ｉ－53～55区のⅢａ層上面にて，Ⅱ層（文明ボラ）を埋土の主体とする細長い楕円状を呈した畝状遺構が検出された。中央部の台地上の縁辺部に位置する畝状遺構11の南側約10m離れて検出されている。北西－南東方向に延びる楕円形を呈した畝間が，南側へ下る地形に合わせて階段状に整然と並んでいる。検出面の勾配はやや急であり，検出面の幅はわずか５～10mであるのに対して高低差は約１ｍもある。北側の畝状遺構11との間は現代の畑面，南側は通路として使われ大きく削平されており，通路と畑の境目にある土手として残った部分のみ検出できたと考える。畝間の形状は平均して幅16.4㎝，深さ19㎝，断面形状は浅い皿状を呈するなど似ているが，長さは統一されておらず，0.7～2.9mと多種である。しかし，東西両端が揃っている部分も多く確認され，畝間の中心間が約50㎝とほぼ同じであることから，方向や間隔，幅や深さなどを考えて作られたと思われる。

畝状遺構11－Ｃ群と畝状遺構14は同一のもので，つながっていた可能性が高い。

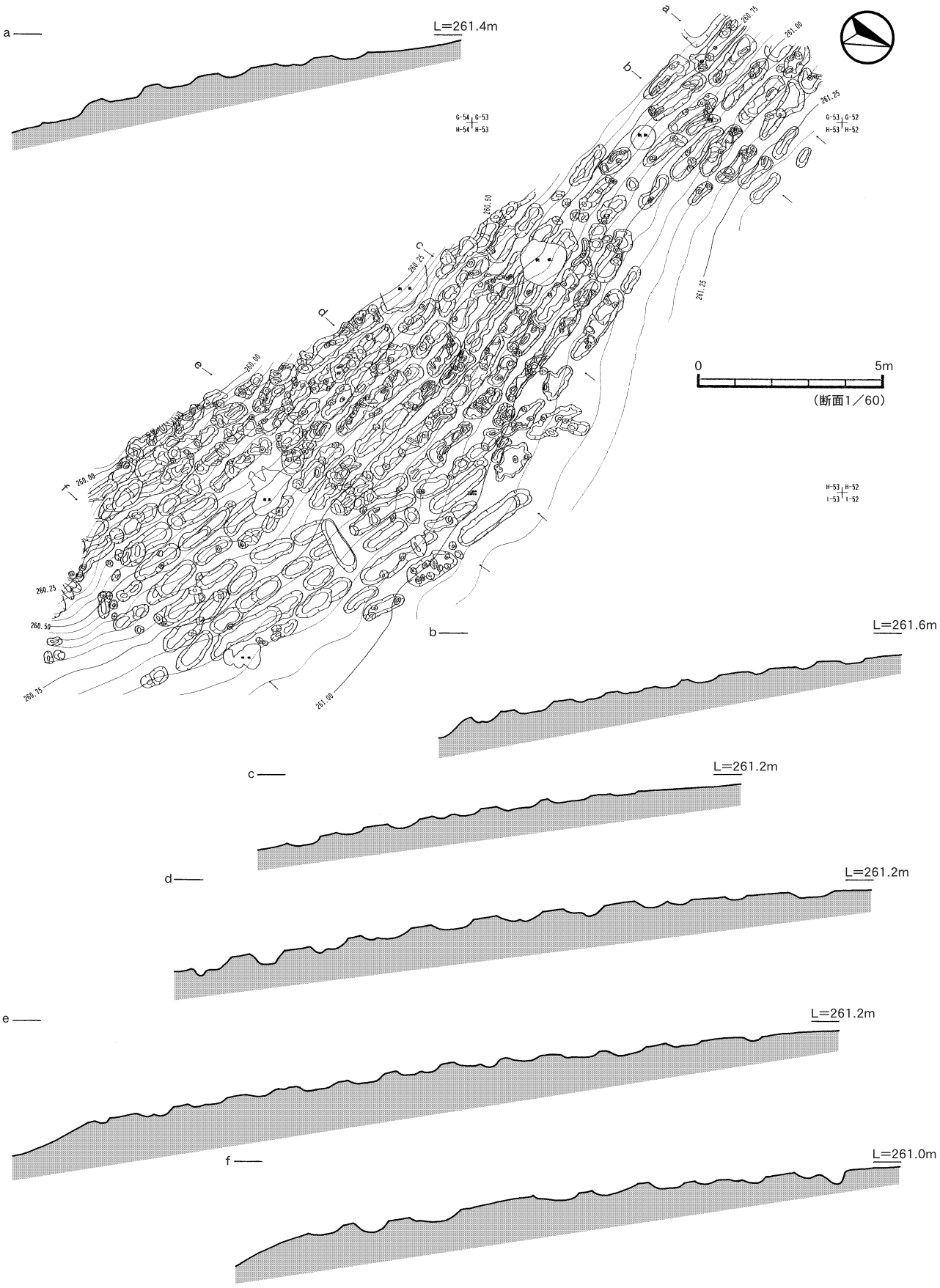
畝状遺構15（第191図）

Ａ～Ｅ－55～59区のⅢａ層上面，畝状遺構14から20mほど南へ下る斜面の西側から，調査区境の壁に沿ってほぼ全域に畝状遺構が検出された。Ⅲ層の黒色土を掘り込む形で畝間が残存し，東北東－西南西方向を基調とした楕円形を呈する畝間の列が，斜面を下る階段状に規則的に整然と並んでいた。畝間は谷部の斜面で検出された畝状遺構１と形状が似ており，長さ0.2～3.5m，幅20～30㎝，深さ約12㎝を基本とする楕円形である。断面形態は皿状を呈し，並びや畝間の規模などが乱れ気味であった畝状遺構１に比べて，同規模の畝間が両端を揃えて鱗状に南へ下るように配置されている。畝間の列は全部で10列確認され，東端の列の畝は下るに従ってやや中心部に向きを変えるなど微調整しながら作られている。

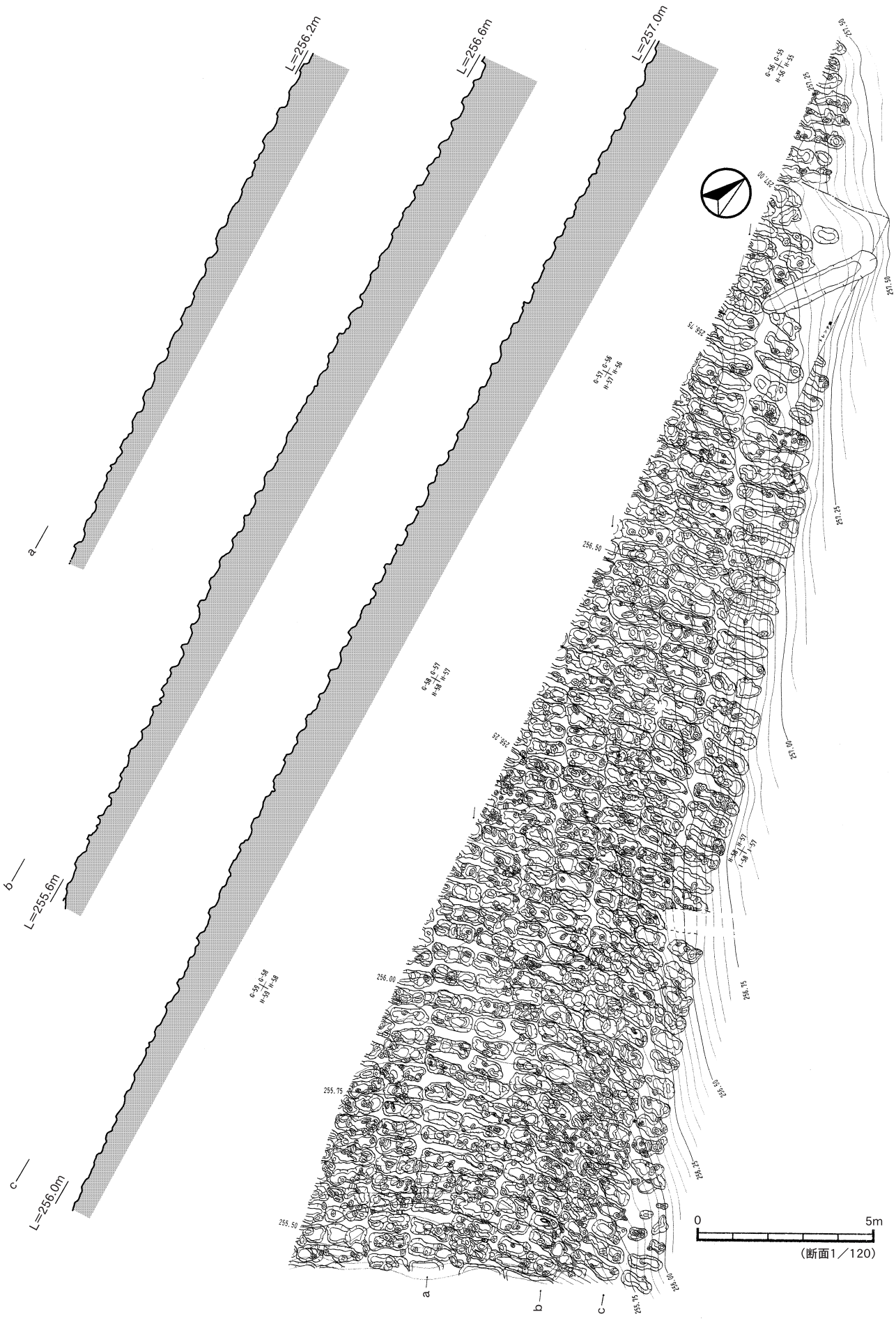
Ｊ区側は急勾配であり崖状に上がっているので検出されず，南側は削平により消失している。西側の調査区外にも広範囲に渡り広がっていると推定される。北側の畝状遺構14とはレベル差もあり形状も異なることから一連のものである可能性は薄い。埋土のほとんどは文明ボラであるが，一次堆積物と思われるものは少なく，二次堆積物や細粒な黒色土がブロック状に混在したり，小規模な堆積を繰り返し交互に堆積したりしている。底面に凸凹を持つものが多く，掘られた跡が残るものもあり農耕具痕を想定させるものも含まれる。

畝状遺構16（第192図）

Ｉ～Ｊ－61～62区の畝状遺構15から約10mほど南へ下る緩斜面のⅢａ層上面で，Ⅱ層を埋土の主体とする細長い楕円状を呈した畝状遺構が検出された。畝状遺構15と同様に，東北東－西南西方向



第190図　南部　中世　畝状遺構14



第191図　南部　中世　畝状遺構15

を基調とした楕円形を呈する畝間の列が，斜面を下る階段状に規則的に整然と並んでいた。しかし，斜面が緩やかになり始めると畝間の列ごとに基軸が動き始め，地形に合わせて下るように調整しながら作られている。列ごとの両端はしっかりと揃っており，整然と並んだ畝間の列が13列確認できた。畝間の中心間は約50㎝とほぼ同じであるが，畝間の形状については変化があり，傾斜の急な北側部分は長さ約1.2m，幅58㎝，深さ12㎝の楕円形を呈するのに対して，傾斜の緩やかな南側部分は，長さ約2.8m，幅50㎝，深さ23㎝の細長い小溝状の楕円形に変化していく。特に平坦面に近いⅠ－62区では，畝間の全長も長くなり，列の間隔も広くなる傾向にある。逆に東側の谷へと向かい傾斜が再び急になるＪ－62区当たりでは，畝間の長さも短くなり列の間隔も狭くなる。この傾向の顕著な形が，近接する畝状遺構17へと移行していくと推測される。

畝間の断面形状は浅い皿状であり底面に凸凹を持つ不定型なものが多い。埋土は文明ボラが主体であり，一次堆積物と，二次堆積物や細粒な黒色土がブロック状に混在している。微高地である北側では検出されず，東西の調査区外へ同形状の畝間が広がっていると思われる。

畝状遺構17（第193図）

Ⅰ～Ｊ－63～64区のⅢａ層上面に，畝状遺構16の南側に隣接して検出された。略東西方向に直線的に延びる小溝状の畝間が22条規則的に並んでいる。急激に上る東側では見られず，畝間の東端は地形に合わせてほぼ揃っている。西側は調査区外へと延びており，南側は削平され消失している。畝の凸部は見あたらず，文明ボラを含む堆積物により押し潰されたと思われる。畝間の形状は，長さ約10m，幅50㎝，深さ25㎝で断面形状は浅い皿状を呈する。畝間の中心間は50㎝でほぼ同じ間隔である。埋土は南部斜面の他の畝状遺構と同じで文明ボラが主体であり，小規模な堆積を繰り返し一次堆積物と二次堆積物や細粒な黒色土が混在している。畝状遺構16とは重なりは見られないが接しており，埋土も同じであることからほぼ同時期のものである。検出面がわずかに南側へ傾斜しているがほぼ平坦面であり，斜面と平地の耕作方法の違いを一度に実見できる貴重な資料である。

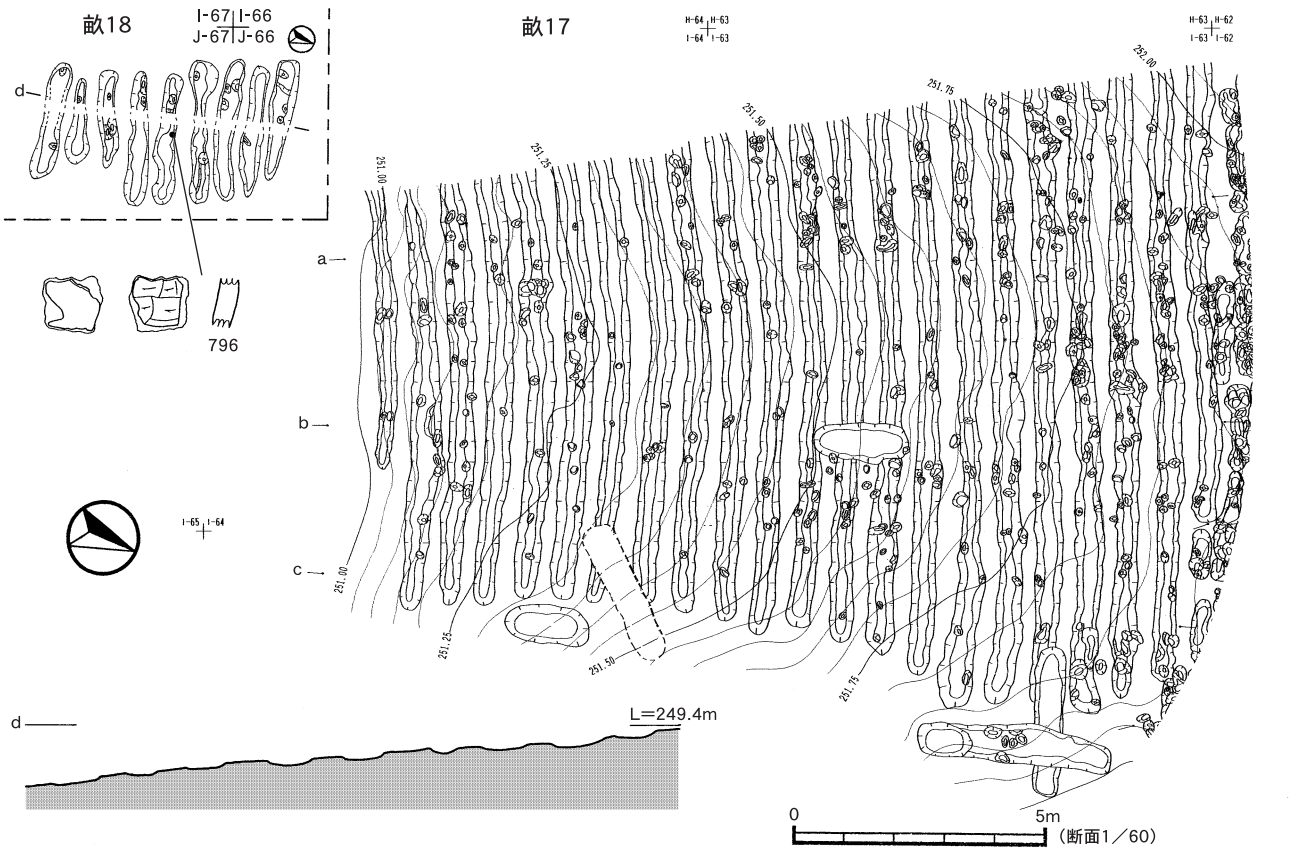
畝状遺構18（第193図）

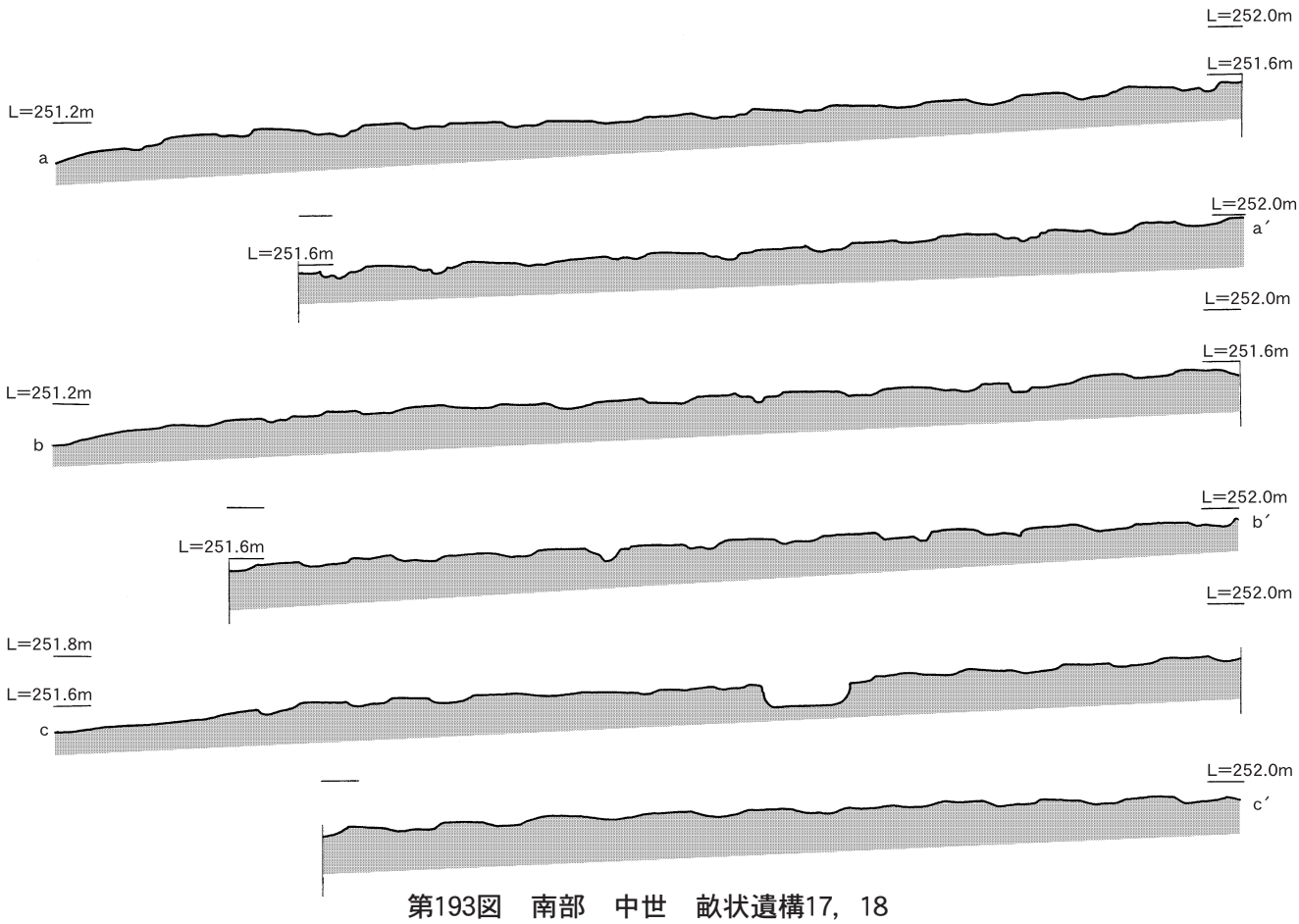
Ⅰ－66，67区のⅢａ層上面に，Ⅱ層（文明ボラ）を埋土の主体とする細長い楕円状を呈した畝状遺構の一群が検出された。ほとんどが消失しておりわずか９条であるが，略東西方向に延びる細長い楕円形を呈する畝間が，規則的に並んでいる。検出された畝間の平均値は，全長約2.7m，幅50㎝前後，深さ約7.2㎝である。底面のみの検出であるので全長は不確定である。埋土は文明ボラを多く含む黒色土であり，細粒な黒色土がブロック状に混在している。畝状遺構17から20m以上南側へ離れており，レベル的にも約25㎝下っているため関連性は不明であるが，ほぼ同時期である。

畝状遺構19（第194図）

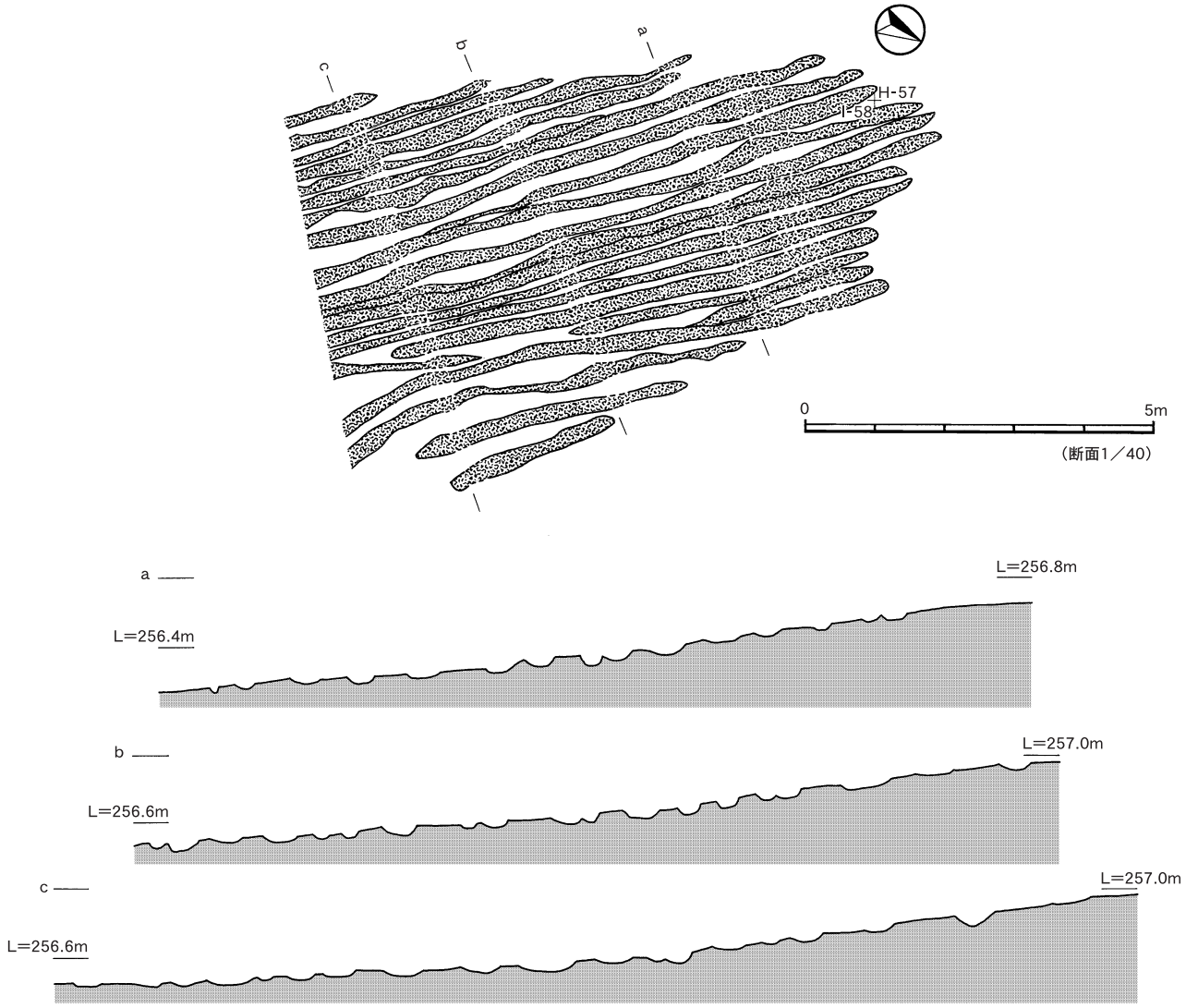
Ｈ～Ⅰ－58区の畝状遺構15の直上にて，安永ボラを埋土の主体とする細長い畝状遺構が検出された。畝状遺構15が大雨などで斜面を流れ下る堆積物により埋まり，自然堆積を繰り返した後で形成された平坦面に作られたもので，略南北方向へ直線的に延びる畝間が筋状に確認される。畝の凸部は見られず，畝間のみの検出である。検出された畝間の平均値は，長さ約５m，幅30㎝前後，深さ約25㎝である。畝間の中心間は不安定であり70～110㎝である。部分的な検出のため全体像は不明であるが，台地部でも同時期の畝状遺構が見つかっており，台地部だけでなく谷部全体でも生産活動が行われていたと推測される。埋土は安永ボラを主体としているため，近世の畝状遺構である。

第192図　南部　中世　畝状遺構16





第193図　南部　中世　畝状遺構17，18



第194図　南部　近世　畝状遺構19

⑵　**土坑**（第195，196図）

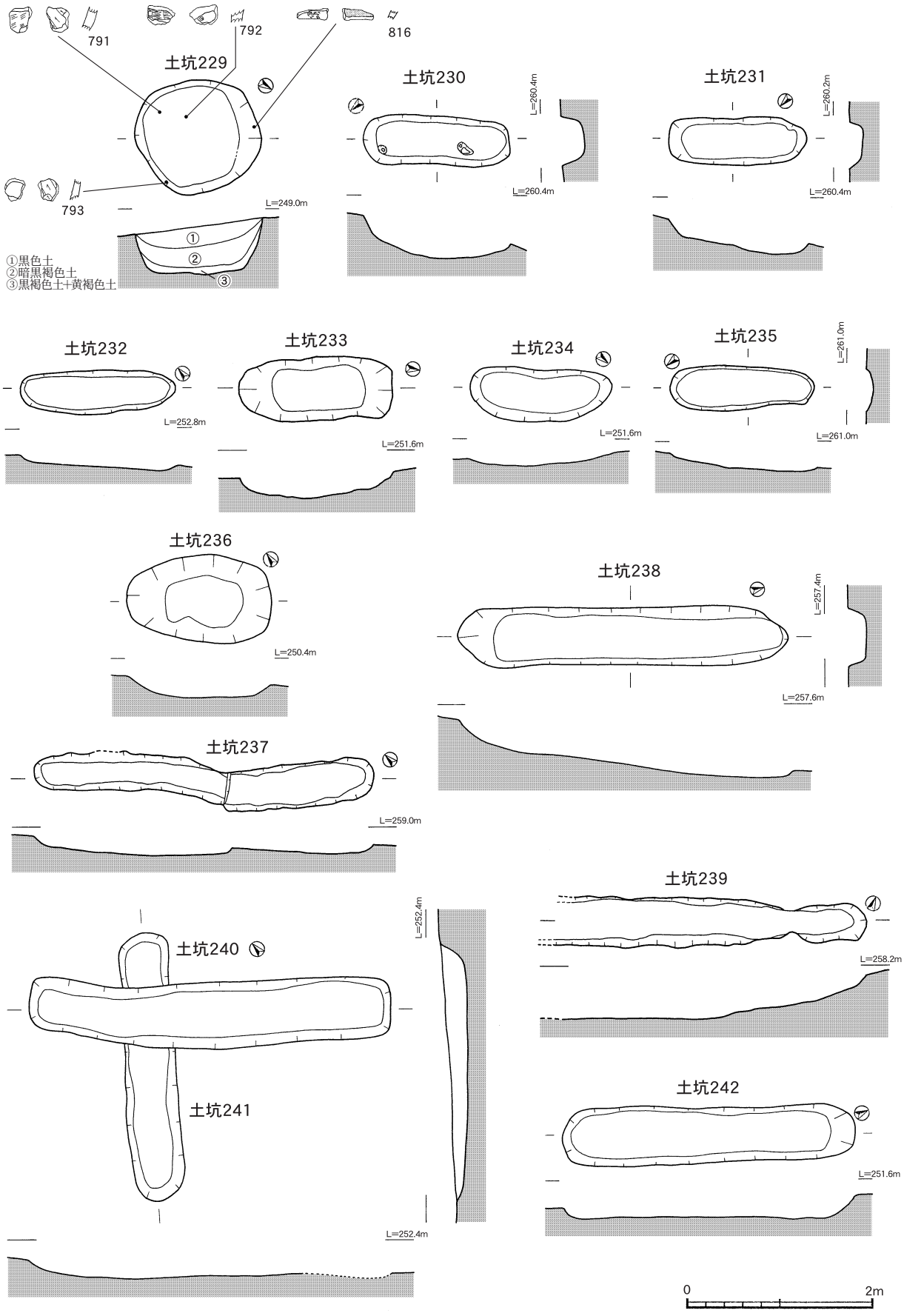
中世～近世の土坑は，Ⅲ層で検出された土坑229～242の14基である。１ｍを越える円形を呈するもの（Ⅱ類，土坑229），楕円形を呈するもの（Ⅲ類，土坑230～242）に分けられる。さらにⅢ類の土坑は，１m50㎝前後のもの（土坑230～236），全長が３ｍを越える大型のもの（土坑237～242）に分けることができる。Ⅲ類の規模は平均して土坑230～236が157×58㎝，深さ15㎝，土坑237～242が3.2×0.6m，深さ23㎝である。埋土は白色パミスを含む黒褐色土が主体である。

土坑229（第195図）

Ｊ－65区のⅣ層上面で検出された。白色パミスを含む黒褐色土が主体である。平面形状は径約1.3mの円形を呈し，深さは52㎝である。埋土中より土器片が４点出土したが，ローリングを受けたものが多く，流れ込みの可能性もある。（第201図791，792，793，第203図816）

土坑230，231（第195図）

Ｉ－56区のⅢ層上面で検出された。断面形状はレンズ状を呈し，埋土は多量の白色パミスである。台地の縁辺部に当たり，耕作のためボラ抜きを行った後で集めて埋めたと思われる。



第195図　南部　中世～近世　土坑

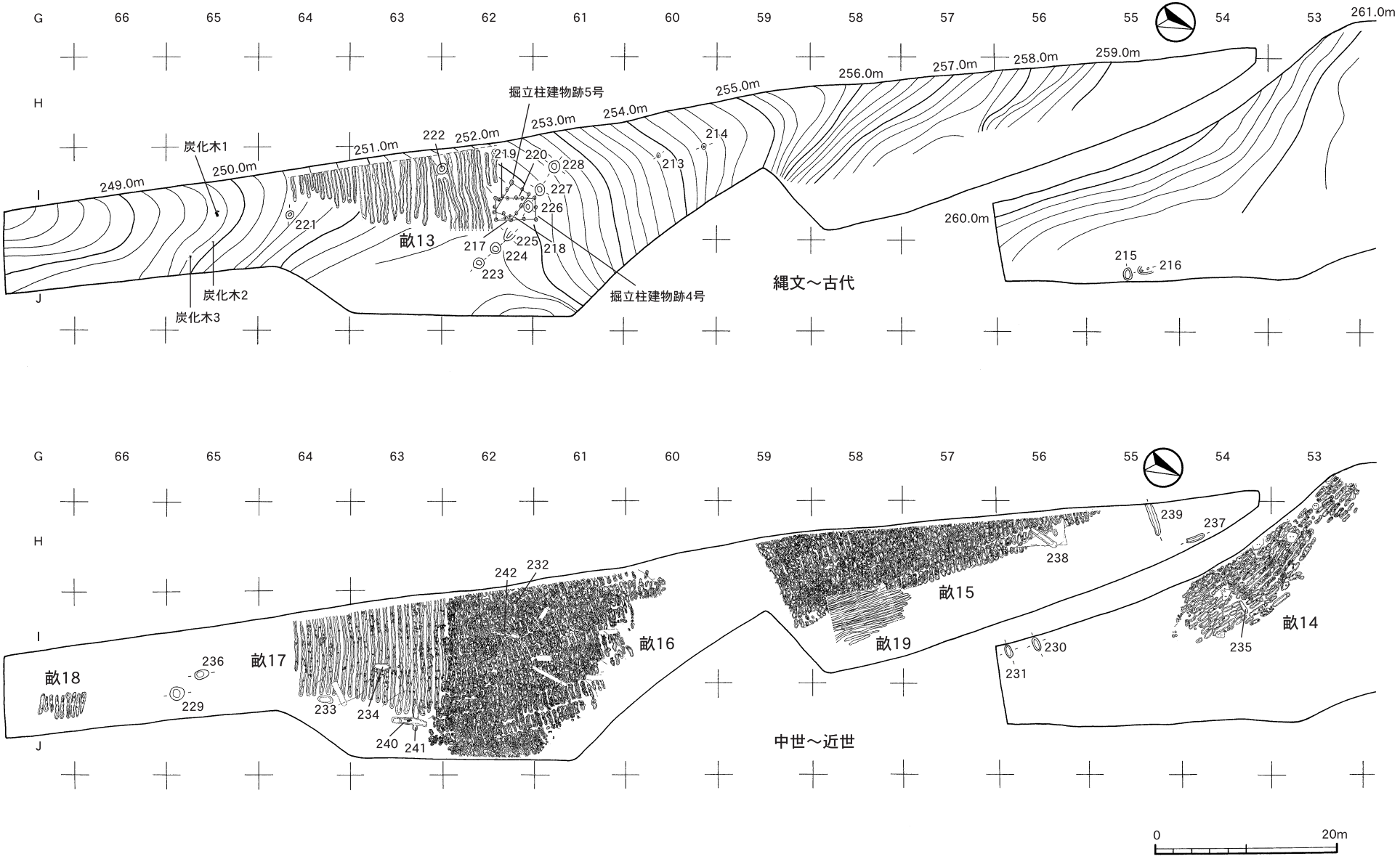
第28表　南部　土坑計測表

土坑番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
213	21	19	53
214	40	32	84
215	104	73	24
216	154	70	22
217	29	23	21
218	37	35	25
219	34	33	37
220	34	33	35
221	85	79	7
222	88	86	16
223	102	90	7
224	116	102	9
225	110	88	15
226	106	84	19
227	105	100	14

土坑番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
228	115	114	16
229	166	120	52
230	158	51	32
231	148	49	15
232	166	47	8
233	164	70	22
234	152	54	8
235	155	46	6
236	154	94	18
237	208	42	16
238	354	60	21
239	326	52	40
240	388	120	15
241	289	54	23
242	313	58	22

第29表　狩俣遺跡　畝状遺構計測表

遺構名		調査区	グリッド	検出面	地形	検出面積(㎡)	列方向	畝　間				
								方向	幅(cm)	長さ(m)	深さ(cm)	中心間(cm)
畝1		2T	A, B-5, 6	IIIa	斜面	50	N-17°-W	E-W	11～32	1～2.3	2～5	10～38
畝2		谷部	A～E-19～25	IIIa	斜面	800	N-S	N-82°-W	30～90	0.5～2.1	10～24	45～70
畝3		北部	F, G-6～8	IIIa	斜面	118	N-35°-W	N-51°-E	20～50	0.4～4.8	10～20	30～40
畝4	A	北部	G～J-5～8	II～IV	平地	400	N-55°-W	N-27°-E	10～60	1.0～9.5	10～50	10～20
	B	北部	H～K-5～7	II～IV	平地	350	N-46°-E	N-55°-W	20～90	2.0～5.5	10～70	10～50
	C	北部	I～K-8～10	II～IV	平地	250	N-23°-E	N-55°-W	10～70	0.6～14.0	10～16	40～70
畝5		中央部	K, L-25～27	IV	平地	300	N-16°-W	N-71°-E	20～50	0.5～7.0	10～20	40～50
畝6		中央部	I～L-28～33	III～IV	平地	960	N-10°-W	E-W	30～80	0.7～7.0	10～50	50～110
畝7		中央部	I～K-33～34	IIIa～IIIb	平地	300	N-76°-E	N-22°-W	20～40	0.6～6.4	4～12	20～75
畝8		中央部	K, L-31～35	IV	平地	130	N-53°-W	N-75°-E	20～40	0.6～2.1	4～10	30～50
畝9	A	中央部	I～L-34, 35	IIIa	平地	350	N-33°-W	N-71°-E	20～60	0.2～2.6	3～15	40～60
	B	中央部	H-35, 36	III～IV	平地	40	N-21°-W	N-69°-E	30～50	0.3～2.4	5～16	40～90
	C	中央部	K-36, 37	III～IV	平地	30	N-24°-W	N-69°-E	20～50	0.4～2.6	4～10	40～60
畝10	A	中央部	L-42～44	IIIa	平地	21	N-10°-W	N-84°-W	40～80	0.9～1.2	20～72	80～130
	B	中央部	L-40～42	III	平地	57	E-W	N-80°-W	20～84	0.4～3.3	5～18	80～130
	C	中央部	L-41, 42	IIIa	平地	25	N-88°-W	N-4°-E	20～64	3.2～9.4	16～80	48～72
畝11	A	中央部	H-49	IIIa	平地	48	N-70°-E	N-33°-W	30～50	0.3～5.4	10～40	50～60
	B	中央部	G, H-50, 51	IIIa	平地	42	N-50°-W	N-41°-E	40～50	0.3～3.4	10～30	50～70
	C	中央部	G, H-50～52	IIIa	斜面	130	N-24°-E	N-71°-W	20～50	0.2～3.2	10～20	40～80
畝12		中央部	I～L-28～32	Ⅰc	平地	100	N-59°-E	N-20°-W	10～30	0.1～8.2	10～30	10～40
畝13		南部	H, I-62～64	IIIa	平地	135	N-32°-W	N-53°-E	20～70	1.9～8.9	10～22	20～100
畝14		南部	H, I-53, 54	IIIa	斜面	160	N-36°-E	N-59°-W	13～63	0.1～1.2	13～25	20～50
畝15		南部	H, I-55～59	IIIa	斜面	228	N-45°-E	N-55°-W	20～30	0.2～3.5	10～20	20～40
畝16		南部	I, J-60～62	IIIa	斜面	380	N-43°-W	N-56°-E	30～80	0.3～2.2	10～30	40～70
畝17		南部	I, J-62～65	IIIa	平地	190	N-21°-W	N-72°-E	30～70	5.5～12.5	10～30	60～80
畝18		南部	I, J-66, 67	IIIa	斜面	18	N-13°-W	N-65°-E	30～60	1.7～2.9	10～20	40～60
畝19		南部	H, I-58	Ⅰc	斜面	52	N-38°-E	N-49°-W	20～40	1.4～9.1	10～40	70～110



第196図　南部　遺構配置図

第４節　出土土器

南部の出土遺物点数は合計4,004個であり，総点数の半数以上に当たる。53～63区までの出土遺物が143点であるのに対して，64～67区のわずか450㎡と狭い調査区から3,861点が出土している。遺物のほとんどは古代の包含層であるⅢ層出土の土器片であり，小破片が多く摩耗も見られることから，北側の台地から堆積物と同時に流れ込んできたものであると想定される。ほとんどが坏や埦，甕など日常生活に使用するものであることから，古代の中心地が台地上に存在したと思われる。古代以外の遺物は，縄文時代前期，後期，晩期，中世，近世の遺物が出土しているが，点数的には少量であり，小破片が多いので，流れ込んできた遺物の可能性が高い。

なお，図化したものについては，第210，211図に出土分布を示した。

１　縄文時代（第197図715～731）

南部の縄文土器は計17点であり，全て図化した。

715はⅣ類土器の胴部である。沈線文を横位に施している。716～720はⅥ類土器の胴部である。716は横位に，717は横位と縦位に，718，719は波状に平行する２条の凹線文を施し，その間に貝殻刺突が連点状に入る。同一個体の可能性もある。721～731はⅦ類の土器である。721～726は深鉢形土器で，ⅦA－ａタイプである。721，722は胴部中位より広がり，724は外反する。728～731は鉢形土器の底部であり728～730はⅦC－ｂタイプの編布が，731はⅦC－ｃタイプの編目状の組織痕が認められる。729，730は底部端のため組織痕が乱れている。731は幅0.4㎝の掘の深い編目圧痕文である。

２　古代（第198～206図732～899）

古代の土器は，土師器，須恵器，焼塩土器などが出土しており出土量の大部分を占める。しかし，小破片のものが多く，図化できたものはわずかである。内訳は土師器坏，埦類1,497点中102点，土師器甕類5,096点中25点，須恵器22点全て，焼塩土器304点中19点である。

⑴　土師器（第198～204図732～858）

土師器は坏，埦，皿などの食器類，甕などの煮炊具類が最も多く，墨書土器などの特殊な土器も数点出土した。これより各器種別に掲載するが，坏，埦，甕については第Ⅴ章第４節「中央部の出土土器」での分類に基づいた。また，内黒土師器についてはまとめて掲載した。

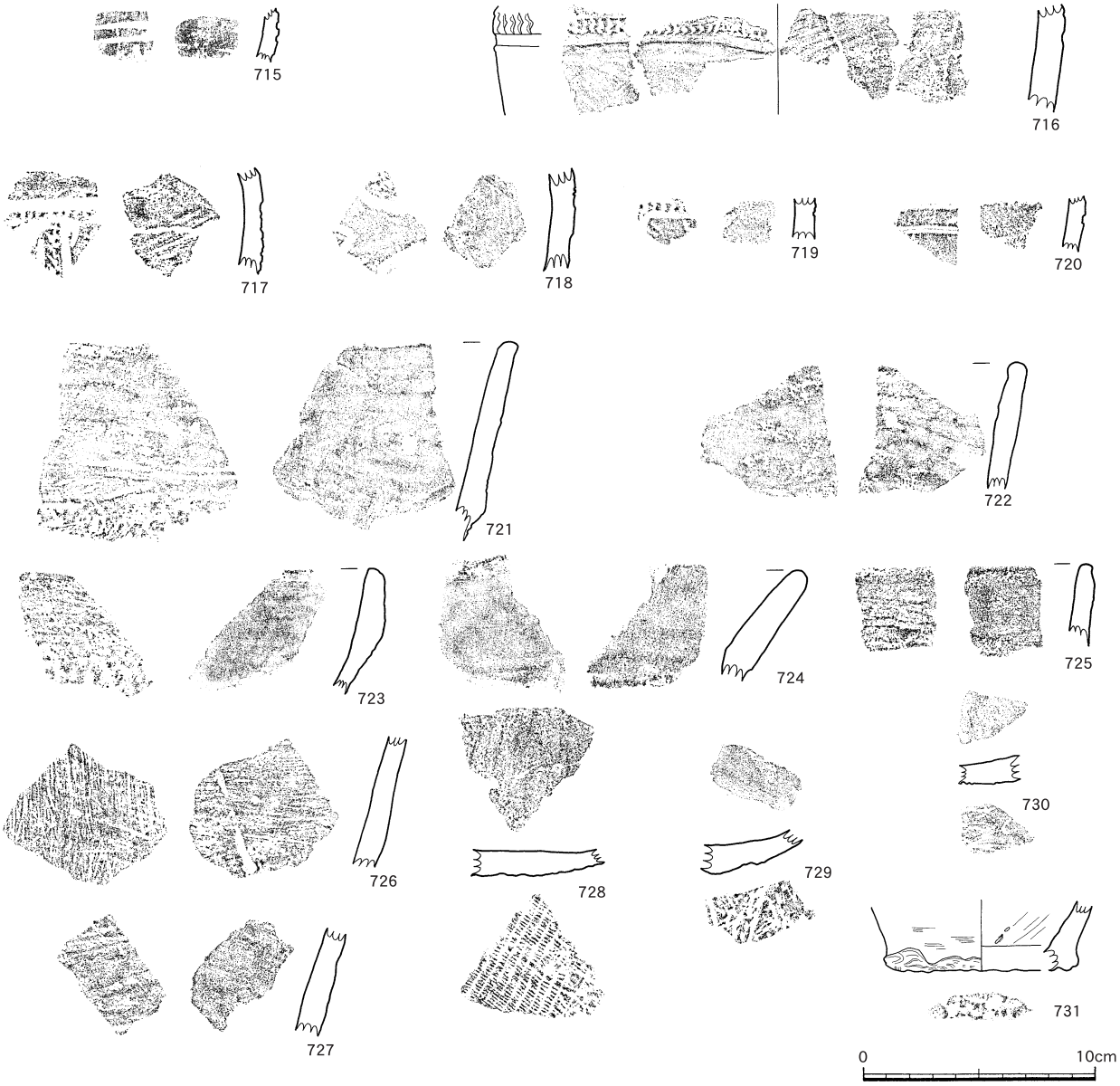
坏（第198図732～752）

Ⅰ類（第198図732～743）

732～734は体部が直線的に開くものである。732は体部外面にロクロ目が凸凹となって残るが，内面はハケメ調整後きれいにナデ消されている。丁寧な作りである。733は円盤状の厚い底部を持つもので，焼成が良く硬質である。734はやや上げ底気味の底部を持ち，底部の角を丸く仕上げている。

735～738は口縁部がやや外反するものである。735は体部の器壁のやや厚いがっしりした作りである。破損後土器片を転用されており一部黒色化している。736は底部と体部の境に段を持つ。737は底部外面にヘラ調整痕が残るもので，全体器形が歪んでいる。738は円盤状の底部から立ち上がる外面にロクロ目が筋状に残る。

739～743はⅠ類の底部であるが，上位が欠損のため全体形は不明である。全てヘラ切り離し後にナデ調整を施し丁寧に仕上げているが，740はヘラ切り離し痕が明瞭に残る。



第197図　南部　縄文時代の土器

Ⅱ類（第198図744～752）

744～752は，体部がやや丸みを持ちながら立ち上がるものである。744は底部からやや膨らみを持ちながら開き直線的な口縁部を持つもので，焼成も良く丁寧な仕上がりである。745，746は丸みの体部が開き，口縁部がわずかに外反するものである。745は焼成が良く赤橙色を呈している。747～752はⅡ類の底部であるが，上位が欠損のため全体形は不明である。747は底部と胴部の間がわずかに凹んでいる。全てヘラ切り離し後に丁寧なナデ調整を施し仕上げているが，750～752はナデ調整が不十分であり工具痕が残る。

埦（第199図753～765）

Ⅰ類（第199図753～756）

753～756は，大きめの円盤状を呈した底部を持つもので，Ⅰ－ａ～Ⅰ－ｃに分けられる。

Ⅰ－ａ類（第199図753）

753は，ほぼ直立した短めの断面三角形を呈した高台を持つ。底面にナデ調整痕が渦巻き状に残る。

Ⅰ－ｂ類（第199図754，755）

754，755は短めの高台が外側へ開くもので，体部との境目に凹みが巡る。胎土が粗く，浅黄橙色をした粘土の小塊や小石などが混ざる。上位欠損のため全体形は不明であるが，大型埦と思われる。

Ⅰ－ｃ類（第199図756）

756は高台欠損後，砥石等の道具を用いて欠損部分を粗く研磨調整を施し再利用したものである。底面にナデ調整による段が残り内外面ともにナデ調整を施す。精製された胎土は浅黄橙色を呈する。

Ⅱ類（第199図757～762）

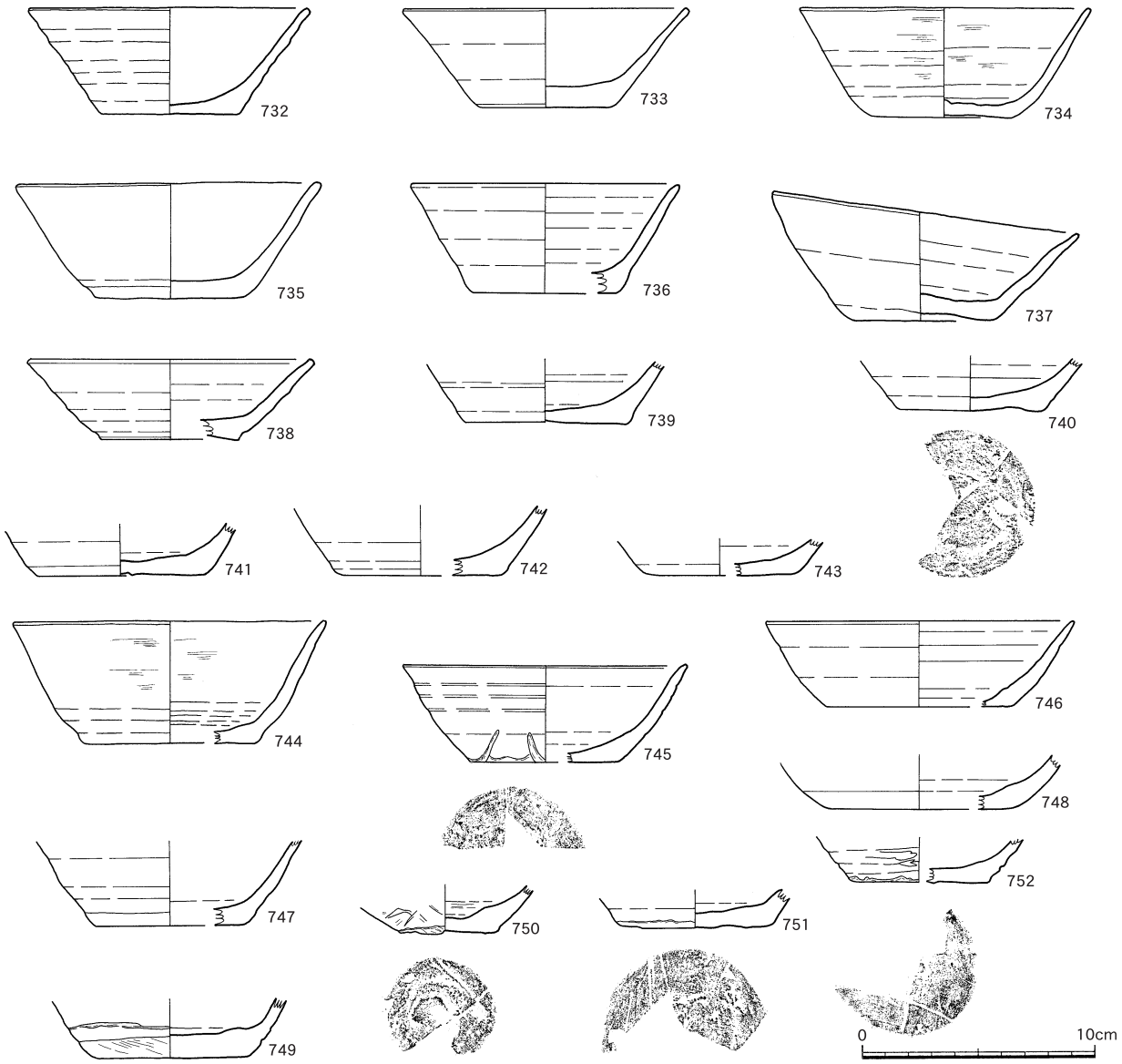
757～762は，やや小さめの底部を持ち直線状に開くもので，Ⅱ－ａ～Ⅱ－ｃに分けられる。

Ⅱ－ａ類（第199図757）

757は，ほぼ直立した短めの高台を持つもので高台断面は方形を呈し，接地面に平坦面を持つ。

Ⅱ－ｂ類（第199図758，759）

758，759は，短めの高台が外側へ開くもので，体部との境目に凹みが廻り段を持つ。胎土が粗く，



第198図　南部　古代の土器(1)

浅黄橙色をした粘土の小塊や小石などが混ざるが，ナデ調整が施されている。

Ⅱ－ｃ類（第199図760～762）

760～762は，高台欠損後再利用したものである。760は欠損部をケズリ調整後ナデ調整が施されている。焼成が良く外面は赤橙色を呈し硬質である。761は高台部分が剥離している部分が認められる。

Ⅲ類（第199図763～765）

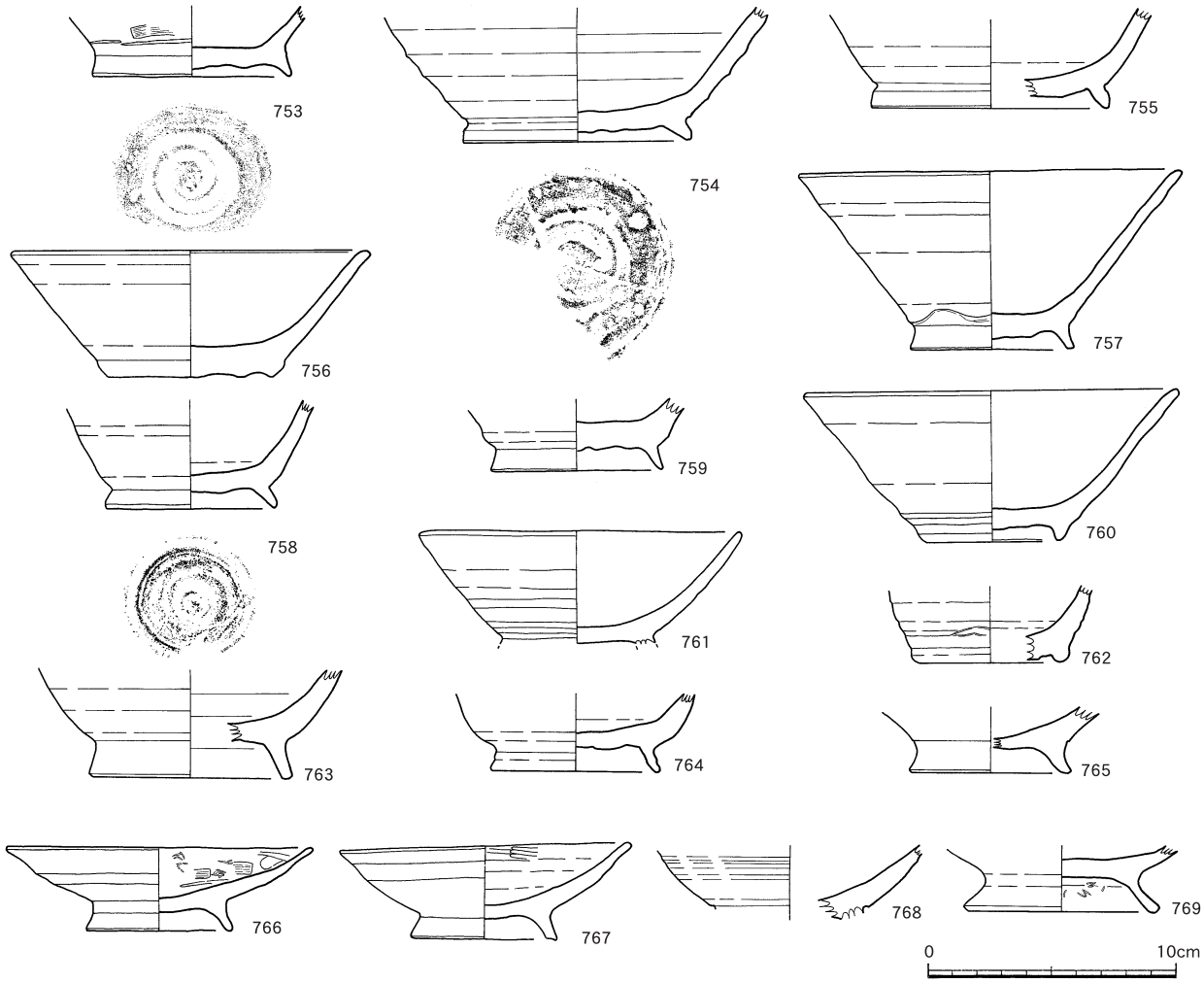
763～765は，底部からやや丸みを持ちながら立ち上がるもので，短めの高台は外側に開く。763の高台は，高さ1.4㎝，径約８㎝であるが，764,765は高さ0.9㎝，径が約７㎝とやや小さめである。

高台付皿（第199図766～769）

766～769は高台付皿である。皿部は比較的上方へ広がるため深さ２～３㎝程度と深くなる。高台部は高さ約１㎝と短いもので外側に開く。766の体部は丸みを持って広がり口縁部がわずかに反る。767は766とほぼ同じ体部形状で，高台接地面に平坦面を持つ。769は高台が「ハ」の字状に開く。

坏～埦（第200図770～790）

770～790は，坏または埦の口縁部である。胴部より下位が欠損しているため全体形が不明であり，土師器の坏または埦の口縁部～胴部としてまとめて掲載する。770～780は直線的に開く口縁部である。口縁部断面は鋭角な三角形を呈するものが多いが，779はやや丸みを持つ。内外面とも器面調



第199図　南部　古代の土器(2)

整は横ナデ調整であるが，外面に調整痕が残るものもある。781～784は，直線的に開き口縁部でわずかに反るものである。782，783は焼成が良好で硬い。785～788は，やや膨らみを持つ体部中位から端へ向かって外反するものである。胎土に砂や小石が多く混ざる。786は口縁部に一部歪みが認められる。口縁径が15㎝を越えるものが多いことから，大埦または鉢の可能性も考えられる。

甕（第201，202図791～815）

791～796は，遺構内より出土した甕の胴部片である。胴部片のためⅠ，Ⅱ類の判別はできなかった。小破片のため全体形は不明であるが，外面はハケ目後ナデ調整，内面はケズリ調整を施す。

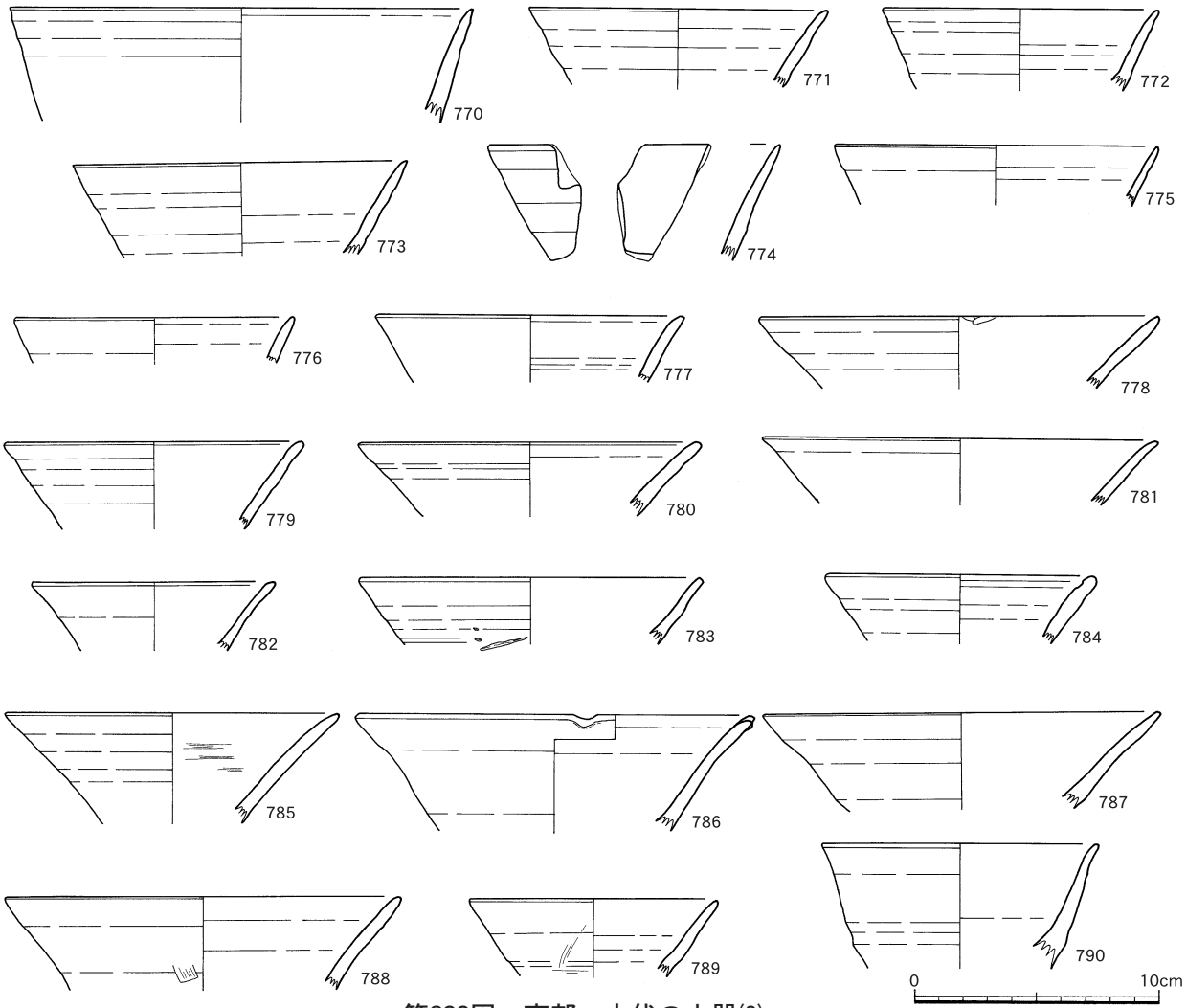
Ⅰ類（第201図797～799）

797～799は，口径30㎝前後と大型で，口縁部が逆「L」字状に大きく外反するⅠ類の甕である。

797は，Ⅰ，J－65～67区のⅢ層で集中して出土した。口径が約30㎝と大型のもので，胴部下位は球状に丸く，上部は直線的に立ち上がり，口縁部で大きく外反する。体部の外面中位に煤が広く付着している。図では推定ラインを用いているが，一部欠損のため器高は不明である。798，799は口縁部全体に横ナデ調整が施され，口唇部を丸く仕上げている。

Ⅱ類（第201，202図800～814）

800～814は口縁部がくの字状に外反するⅡ類の甕である。口径30㎝前後の大型のもの(800～809)



第200図　南部　古代の土器(3)

と，20㎝程度の小型のもの（810～814）がある。大部分が外面はハケ目，内面はケズリ調整である。

800は摩滅が激しく不明瞭である。801は口縁部のハケ目調整痕が明瞭に残る。802は頸部外面にナデ調整痕が凸凹状に残り稜線が乱れている。804は直線的な体部から斜め上方へ丸みを持ちながら外反するもので，外面に指頭圧痕が見られる。805は頸部が厚くしっかりした作りである。806，807は厚めの口唇部を丸く仕上げている。808，809はやや短めの口縁部を持ち，内面に工具による調整痕が残る。

810は短めの口縁部が直線的に開くもので，内面のケズリ調整痕が明瞭に残り境目に稜を持つ。811は表面にナデ調整による凸凹が見られる。812はやや膨らみのある体部が頸部で締まり，短めの口縁部が直線的に開くもので，口縁部の断面形は三角形を呈している。813，814は，やや膨らみのある体部上位が内傾し頸部で締まり，口縁部が反りながら開くものである。内面のケズリ痕はナデ消されている部分が多く，焼成が良く橙色を呈している。

蓋（第202図815）

815は口径約30㎝の土師器の蓋である。天井部欠損のため全体形は不明であるが，体部下位は厚く仕上げ，天井部へ向かって器壁が薄くなるように仕上げている。くの字状に外反する境目外面には指頭圧痕が明瞭に残る。体部との境目から口縁端部までの外面に煤が付着している。

内黒土師器（第203図816～843）

816は遺構内遺物であるが，小破片であるため器種は不明である。摩滅しているため明確ではないが，調整はナデ調整で外面に小さな傷が複数残る。

817，818は，底部から直線的に開くⅠ類の坏である。817は，復元口径19.2㎝，底径7.9㎝，器高6.8㎝の大型の坏で，底部からの立ち上がりに角を持ち直線的に開き中位から緩やかに反る。

819はやや小さめの高台から直線的に開くⅠ－ａ類の埦である。直立した短めの高台は接地面に平坦面を持つ。820～822は直線的に開く口縁部である。821の外面には炭素吸着による黒班が見られる。823～829は，直線的に開き口縁部でわずかに外反するものでる。823は内面のミガキ調整痕が明瞭に残る。825は口縁端部へ向かって器壁が先細る。下位欠損のため，器種は特定できない。

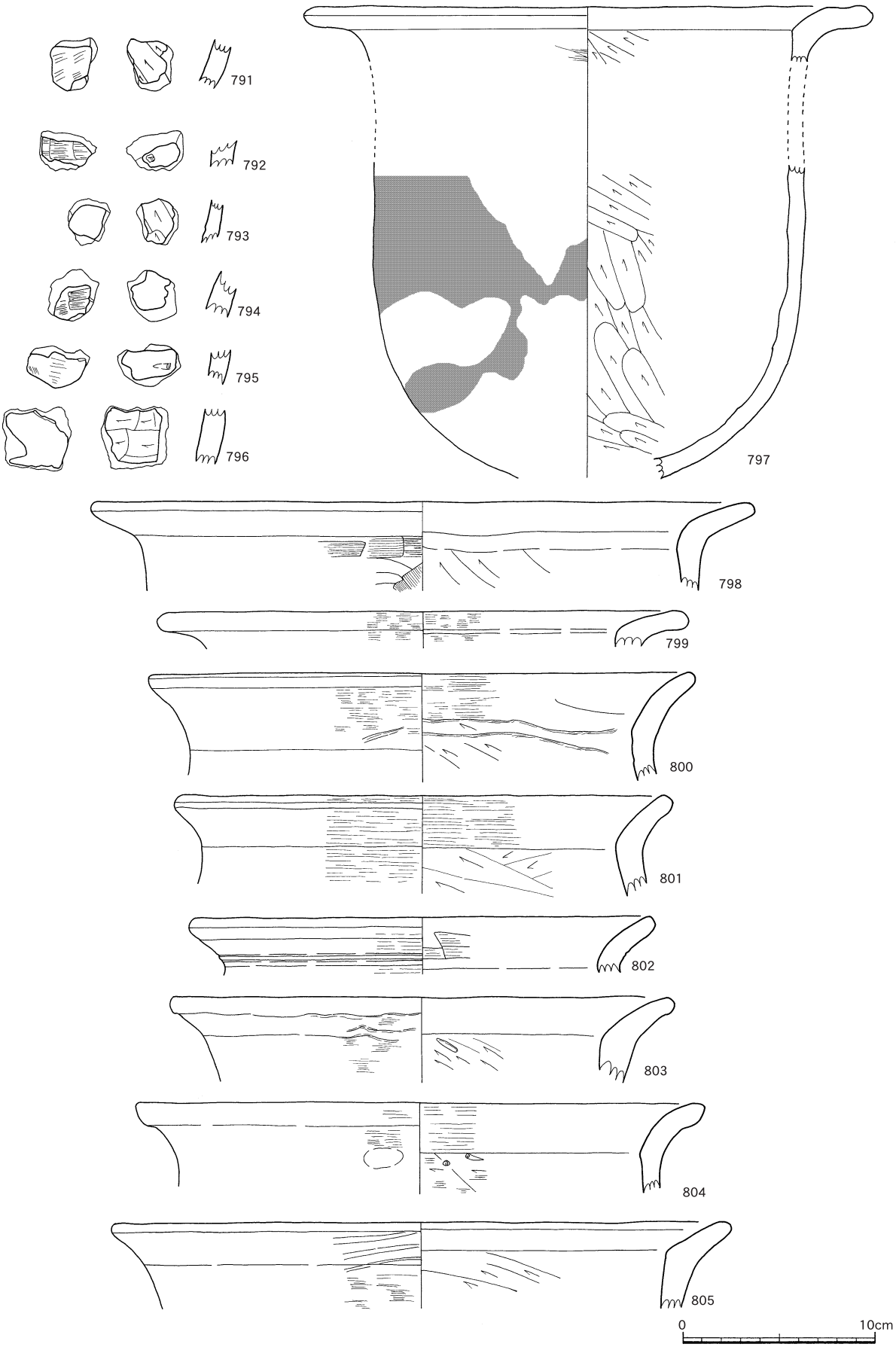
830，831は，短い高台が直立する底部である。831の底面に工具による調整痕が残る。832～836は高台が外側へ開く底部である。832は高台断面が方形を呈し接地面を持つ。833，834は摩耗しており内面が灰白色を呈す。835，836は膨らみを持つ体部で高台は「ハ」の字状に開く。837，838は高台欠損部にケズリ調整を行った再利用痕のある底部である。837は直線的に，838は丸みを持って立ち上がる。839～842は，高台が剥離し欠損している底部である。全てに高台と体部との接合痕が認められる。843は鉢型を呈したものであるが，破片が部分的であり別器種の可能性も考えられる。

外朱土器（第204図844～847）

844～847は，外面にのみ赤色顔料が施された土師器である。844～846は埦の体部外面に赤色顔料が施されたもので，844，845は顔料の剥落が著しい。845は高台内面に凹みが廻る。846は顔料が器面より一部剥離している。847は坏または皿の体部外面に赤色顔料が施されたもので底面では確認されない。844～846は，出土地点も隣接し器形も似ていることから同一個体の可能性もある。

内朱土器（第204図848）

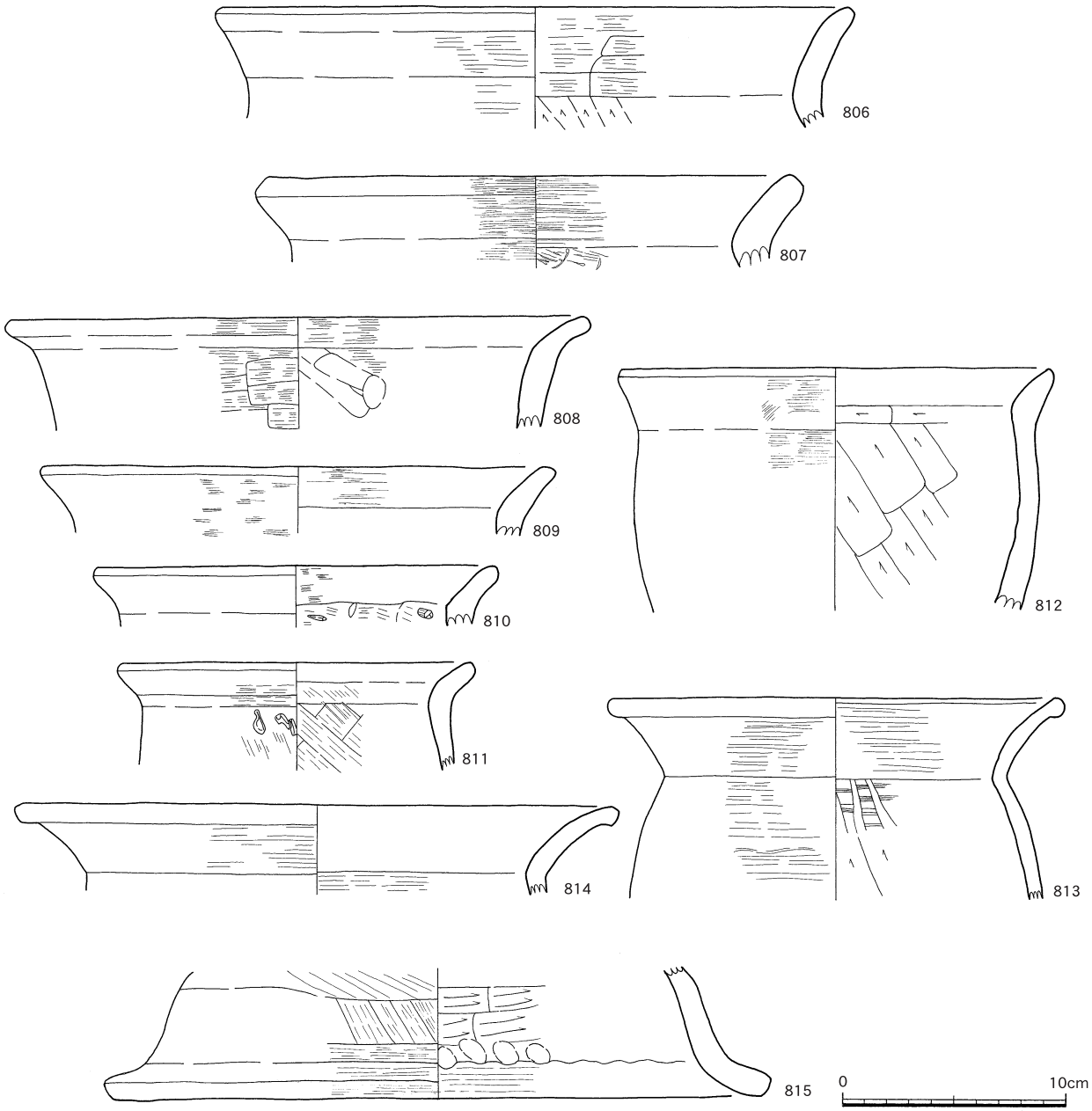
848は，坏または皿の内面に赤色顔料が施されたものであるが，顔料の剥落が著しい。



第201図　南部　古代の土器(4)

墨書土器（第204図849～855）

849～855は，墨書土器である。胴部片のため不明なものも多く，確実に判読できるのは849～851の３点である。849は，底径6.4㎝の平坦面を持つ坏の底面に二文字が墨書されていた。ヘラ切り離し痕が明瞭に残る底面に，一文字目は「福」，二文字目は判読が難しく敢えて読めば「笑」または「安」と読める。850は，短めの高台が外側に開き，膨らみを持つ体部が立ち上がる内黒土師器の埦の底部外面に「廣」と墨書されていた。「廣」の墨書は，霧島市溝辺町の山神遺跡などで出土例がある。851は，底面と体部の境をヘラ切り調整で丸く仕上げた坏の体部外面に，倒立で「山」と墨書されたものである。「山」の県内での出土例は，南さつま市金峰町の白樫野遺跡や鹿屋市輝北町の神殿遺跡など多数発見されている。852は土師器の体部外面にヘラ書の墨書が確認できるが，詳細は不明である。853～855も文字の一部の可能性もあるが，判別は困難である。



第202図　南部　古代の土器(5)

墨書土器の出土地点はⅠ－64～67区に集中しており，台地部からの流れ込みの可能性が高い地点である。また，本遺跡全体で８点中４点が内黒土師器に墨書されており，書かれる率が非常に高い。

線刻土器（第204図856，857）

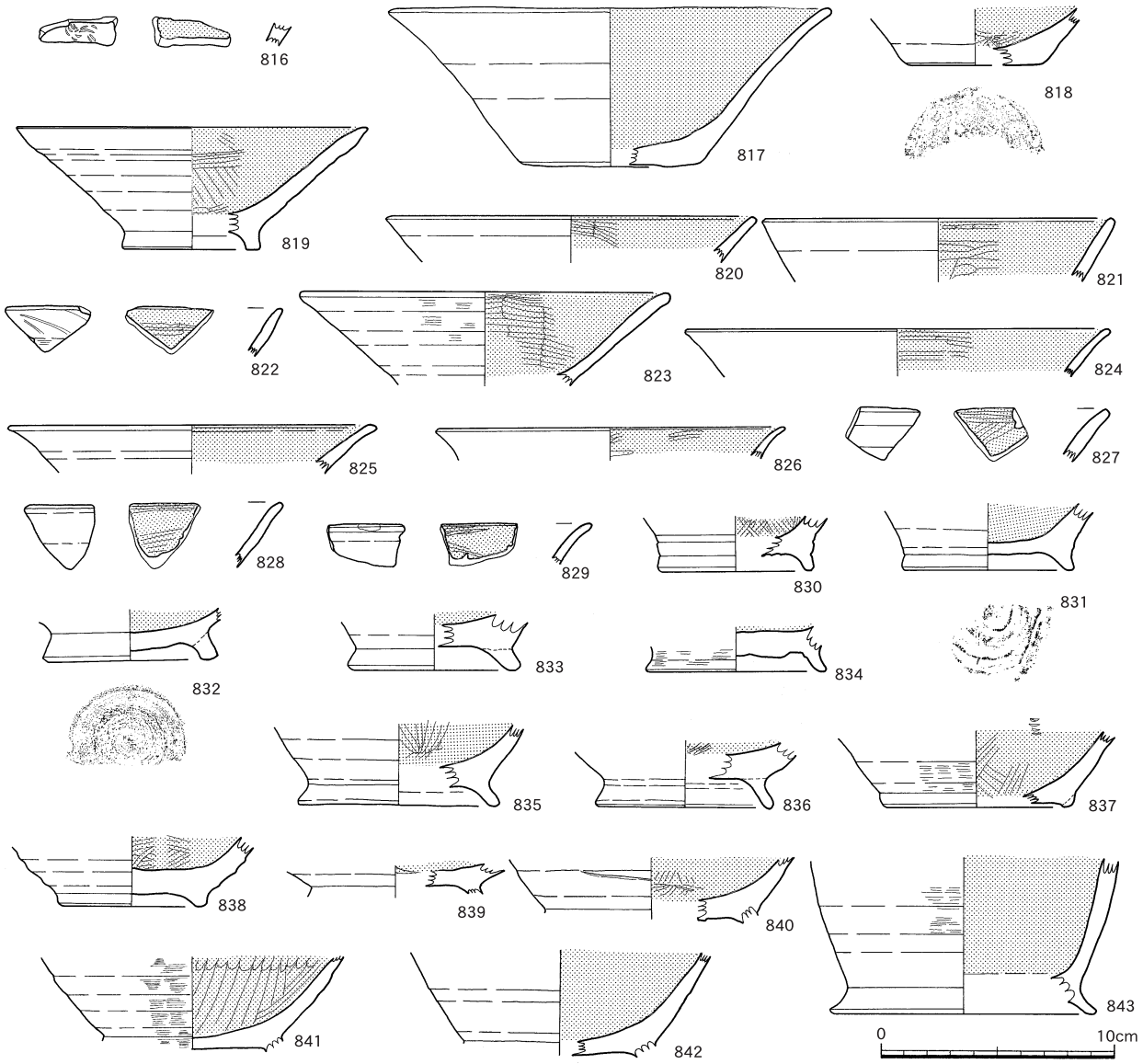
856は，横ナデ調整痕が明瞭に残る坏の体部外面に，鋭利な工具によって描かれた線刻土器である。857は体部外面にヘラ状工具による無数の線刻が確認できるが，詳細は不明である。

円盤型土師器（第204図858）

858は，円盤型を呈した内黒土師器の椀の底部の転用品である。内外側面ともに砥石で研磨調整され，きれいな円盤を作り上げている。使用目的は不明であるが，紡錘車の製作途中の可能性が高い。

⑵　**須恵器**（第205図859～880）

859～861は坏である。859，860は，ヘラ切り離しの底部から直線的に開くもので，底面と体部の境目に角を持つ。その後のヘラケズリ調整は見られない。859の口縁部は直線的で口縁端部を丸く仕上げている。体部外面下位にヘラ状工具痕が交差して「×」記号のように残る。861はヘラ切り離しの底部からやや膨らみを持って立ち上がるもので，底面と体部の境目を丸く仕上げている。底面にヘラ状工具痕が残る。



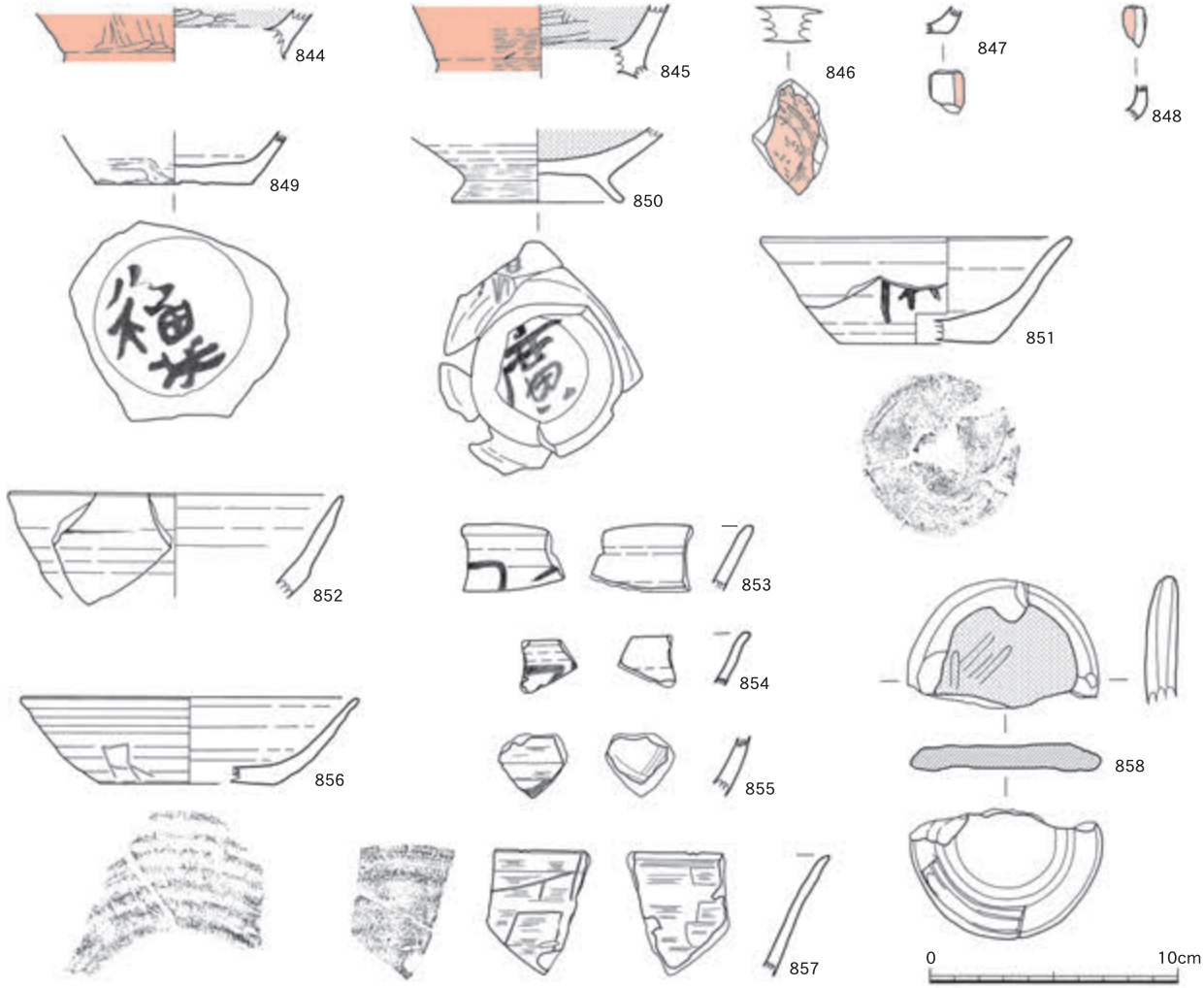
第203図　南部　古代の土器⑹

862は外側に広がる短い高台を持ち，直線的に立ち上がる埦の底部である。胎土がやや粗めで，砂粒が多く含まれる。外側に広がり断面方形を呈する高台の接地面は平坦面である。

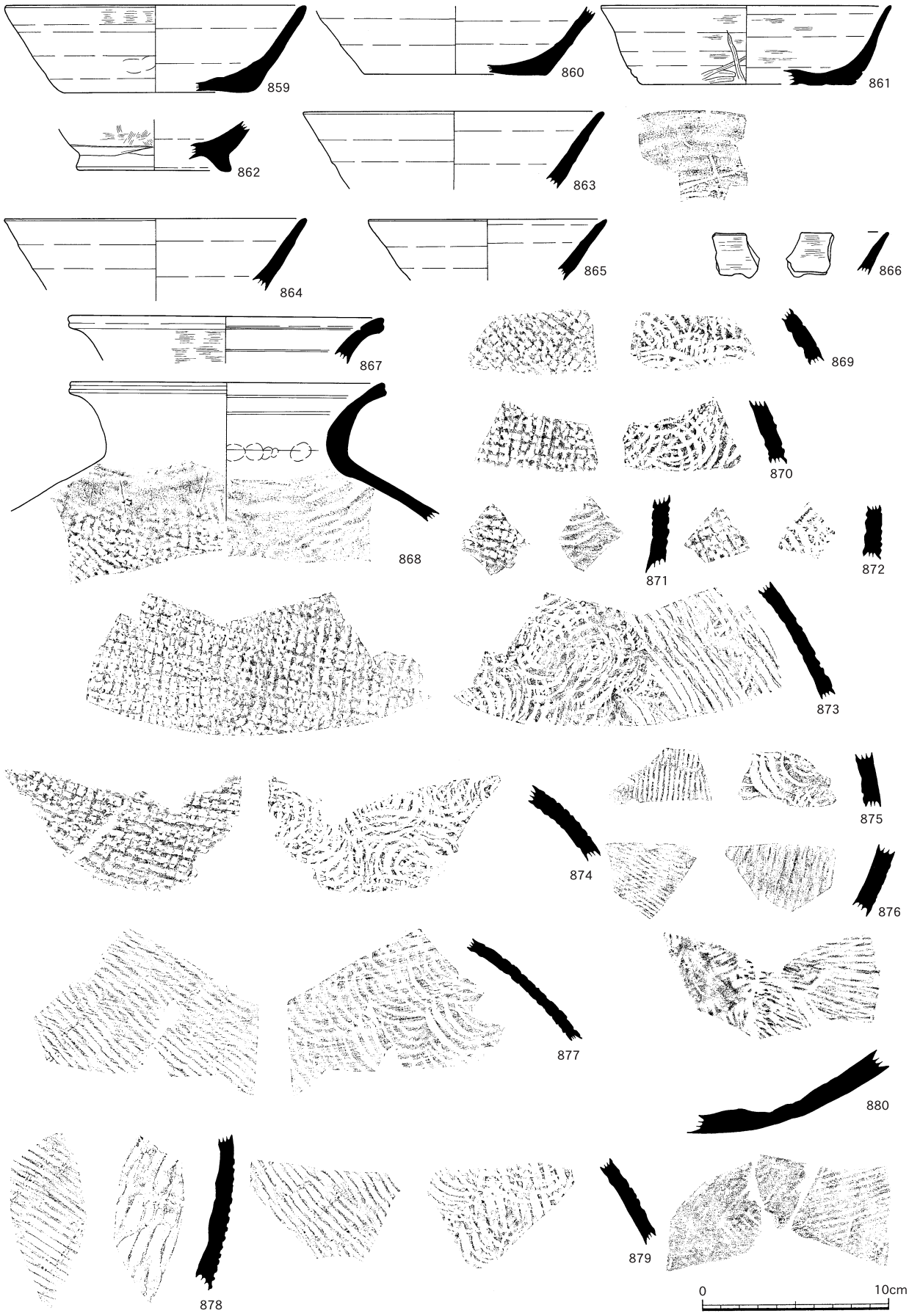
863～866は体部下位が欠損のため詳細は不明であるが，坏または埦の口縁部と思われる。863，864は，直線的に開く口縁部を持つものである。863は体部内面にハケメ調整痕が筋状に残るが，864は摩滅が著しく判別が難しい。865，866は，体部が直線的に開き口縁部付近でわずかに外反するものである。どちらも焼成が良好で灰黄色を呈し，口縁端部へ向かって器壁が先細りする。

甕（第205図867～880）

867～880は甕である。867，868は甕の口縁部である。膨らみのある胴部が内傾しながら頸部で締まり，わずかに外反するもので，平坦面のある口唇部はわずかに凹む。体部外面には格子目タタキ，内面には同心円当て具痕が見られる。869～879は甕の胴部片である。869～874は，体部外面には格子目タタキ，内面には同心円当て具痕が見られるもので，灰オリーブ色を呈し，膨らみのある胴部の肩部から胴部中位にかけての土器片である。867～874はⅠ－66，67区から集中して出土しており，焼成，胎土などから同一個体の可能性がある。875は外面に平行タタキ痕が残るもので，876～879は，赤褐色を呈する赤焼きの酸化炎焼成である。外面は平行タタキ，内面は同心円または平行当て具である。880は丸みのある底部であり，接地面に当たる部分は器壁が薄く外面が摩耗している。内面にワラ状の植物を束ねて調整を行ったと思われる筋状の調整痕が認められる。



第204図　南部　古代の土器(7)

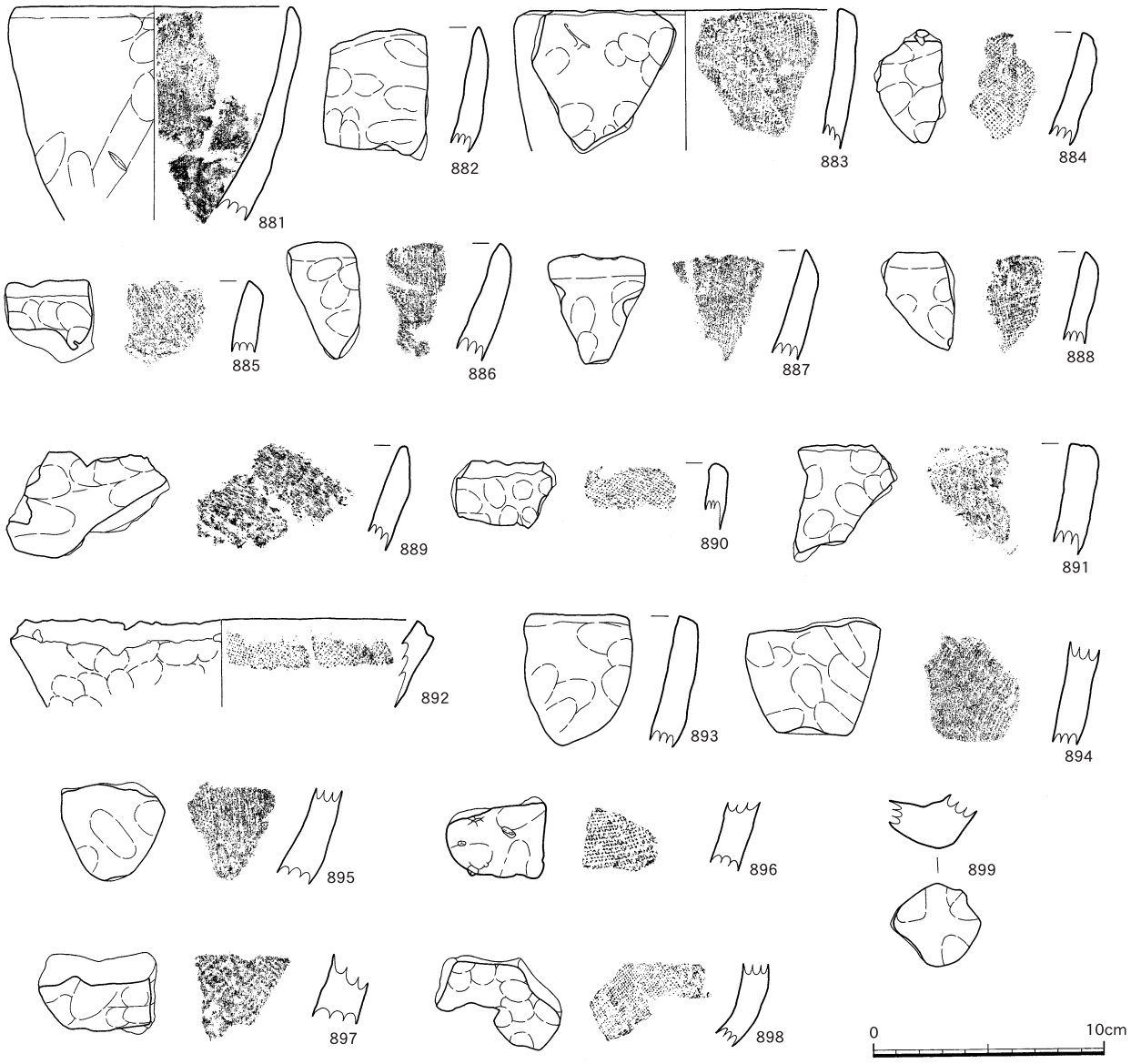


第205図　南部　古代の土器(8)

焼塩土器（第206図881～899）

881～899は南部調査区から出土した焼塩土器である。Ⅰ－65～67区を中心に小破片も含め計203個出土した。いずれも焼成が弱く軟質であり，色調は橙～赤橙色である。口縁部や体部のみの出土のため全体形状は不明であるが，丸みのある底部からやや開き気味に立ち上がり，直線的な口縁部を持つ鉢形を呈すると考えられる。口縁部は先細りであり，外面にはナデ調整による指頭圧痕が多数認められるなど粗雑な作りである。内面には，全体に目の細かい布圧痕が明瞭に残る。

881，882は内弯気味に伸びる口縁部の先端が先細り尖っているものである。881の胎土内に径1.4㎝の小石が含まれる。883～889は直線的な口縁部の外面が端部で内傾し尖っているものである。890～893は直線的な口縁部の断面が方形を呈するもので，口唇部に平坦面を有する。889は焼成が良好であり，火熱を受けた胴部が一部硬化し黒色に変色している。894～898は胴部片であり，口縁部形状は不明である。899は鉢形を呈する焼塩土器の丸みを帯びた底部である。



第206図　南部　古代の土器(9)

3　中世～近世（第207図900～920）

中世～近世の土器は，南部調査区全体から出土しているが，点数は多くない。小破片のものが多く図化できたものは，中世の青磁，瓦質土器，近世の陶質磁器，染付，陶器などわずかである。内訳は，磁器系のもの72点中３点，陶器系のもの47点中18点の計21点である。

⑴　青磁（第207図900）

900は体部中位で屈曲しわずかに外反する皿の口縁部である。口縁部の形状は花びら状の稜花口縁を呈すると思われる。暗オリーブ色の釉が全面に施される。

⑵　瓦質土器（第207図901，902）

901，902は瓦質土器である。901は胴部片であるが外面の摩滅が著しく，内面はヘラミガキである。902は底部であり，内外面とも丁寧なヘラミガキ調整が施される。灰白色の胎土中に砂が多く含まれる。底面近くの体部外面に，ヘラ書きによる沈線が２条巡る。

⑶　磁器（第207図903～905）

陶胎磁器（第207図903）

903は，青灰色を呈した胎土を持つ磁器碗の口縁部である。緩やかに膨らみを持つ体部外面に草花文と沈線が２条施される。透明釉が施された口縁端部は丸く仕上げられている。

染付（第207図904，905）

904は胴部上位が欠損しているため全体形状は不明であるが，口径が４～５㎝と思われる小碗の底部である。底面内部に平坦面を持ち，底部から胴部へかけて圏線が２条巡る。内側に狭まる短めの高台は断面三角形を呈し，尖った接地面は釉剥ぎ痕が残る。高台内面に砂粒が熔着している。905は圏線が１条巡る底部内面見込みに，草花文が描かれた皿である。碁笥底状に中央が凹む底面に断面三角形の短い高台が貼り付けられ，畳付は釉剥ぎを施す。上部形状は不明である。

⑷　陶器（第207図906～920）

906～920は陶器であり，ほとんどが薩摩焼であり苗代川窯で作られたもので，埦，皿などの食器，鉢，擂鉢，鍋などの調理具，甕，土瓶，瓶などの貯蔵具である。これより器種別に取り上げる。

埦（第207図906）

906は，底部見込みに蛇の目釉剥ぎを持つ埦の底部である。削り出しによって作られた短めの高台は直立し，断面が方形を呈す。全面に黄緑色の釉が施されているが，体部外面下位は無釉である。

皿（第207図907，908）

907は，鍵状に口縁端部が反る備前焼の皿である。精製された灰白色の胎土に透明釉を施す。908は，灯明皿として利用されたと考えられる坏皿である。体部外面下位は無釉である。

鉢（第207図909，910）

909，910は胎土が赤橙色を呈した鉢である。909は口唇部が内側に張り出し大きく外反するもので，口唇部上面に平坦面を持つ。910は底面であり，側面は施釉があるが底面は無釉である。

擂鉢（第207図911，912）

911，912は内面に櫛目が密に施された擂鉢である。911は口縁部が逆Ｌ字状に開くもので，口唇部上面に平坦面を持つ。912は胴部片であり，内面に櫛目，外面に釉垂れが認められる。

鍋（第207図913）

913は，中央部に碁笥底状の凹みを持つ鍋の底部である。火熱を受け表面が黒色化している。

甕（第207図914）

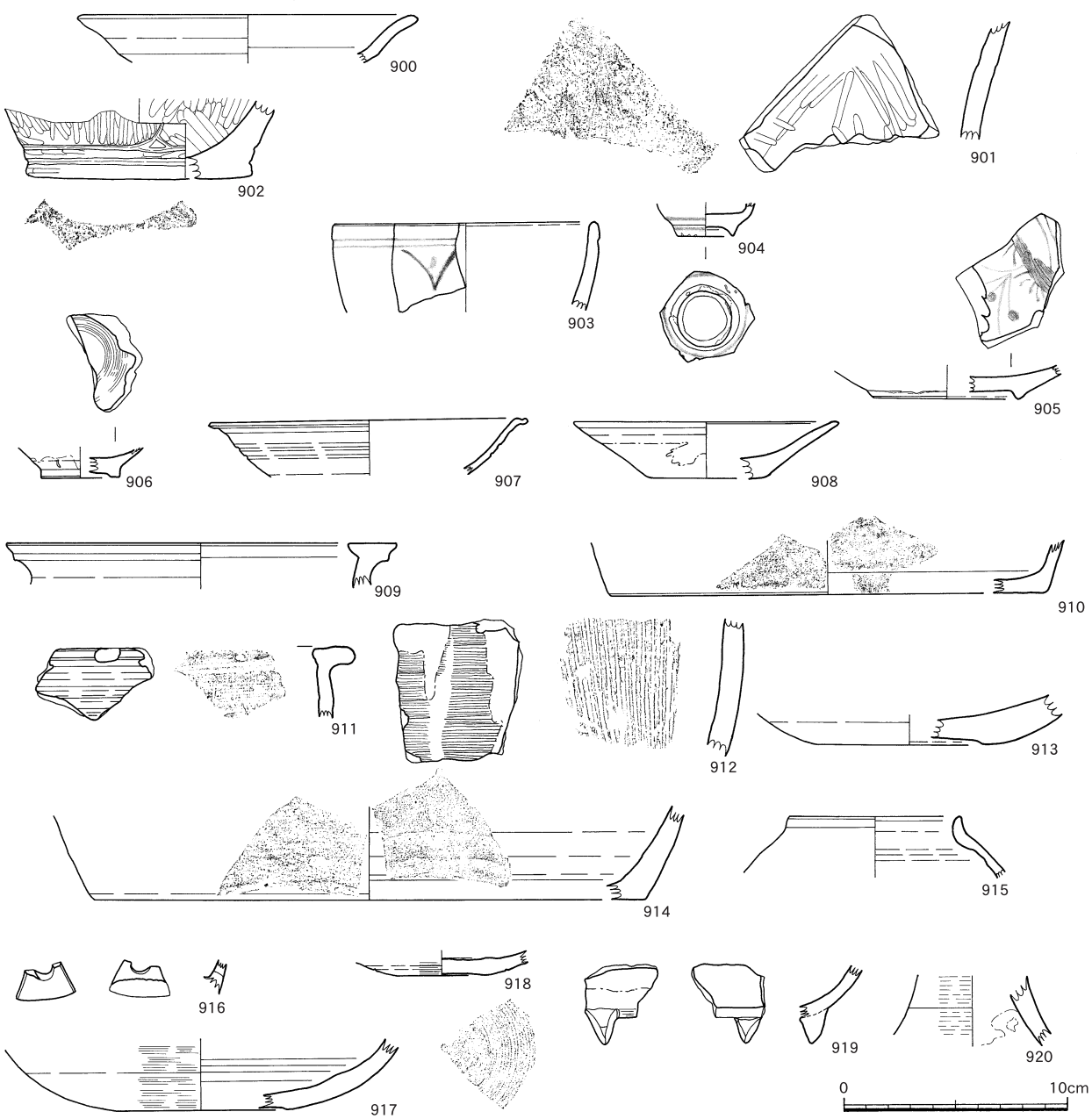
914は器壁の厚い甕の底部である。底径は24.8㎝で，部分的な出土のため上部形状は不明である。

土瓶（第207図915～919）

915～919は土瓶の土器片である。915は口縁部，916は土瓶の耳，917，918は底部，919は脚部であり，同一個体の可能性がある。915は全体に鉄釉を施した口縁部であり，口唇部は施釉後削り落としている。916は釉溜りが見られ，飴色状に発色している。917，918は，内面に鉄釉が施され，外面は無釉である。外面に無釉のロクロ目が筋状に残る。919は内面と外面下位は無釉であり，断面三角形を呈した短めの脚は，火熱を受け先端が黒色化している。

瓶（第207図920）

920は膨らみのある体部が緩やかにすぼまる瓶の頸部である。内面に釉垂れが認められる。



第207図　南部　中世～近世の土器

第30表　南部　土器観察表(1)

挿図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整		色調		胎土						分類	備考
										外面	内面	外面	内面	長石	石英	角閃	雲母	砂粒	その他		
	715	I-66	IIIa	縄文土器（晩期）	深鉢	胴部	—	—	—	ナデ 沈線	ナデ	にぶい橙	黒褐	○	○			○		XIV	
	716	I-60	IVa IVb	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻刺突文 沈線，ナデ	ナデ	明褐	明黄褐	○	○			○		XVI	
	717	I-60	IVb	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻刺突文 沈線，ナデ	ナデ	明褐	明黄褐	○	○			○		XVI	
	718	I-60	IVb	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻刺突文 沈線，ナデ	ナデ	明褐	にぶい褐	○	○			○		XVI	
	719	I-62	IIIb	縄文土器（後期）	深鉢	胴部	—	—	—	貝殻刺突文 沈線，ナデ	ナデ	明褐	にぶい褐	○	○			○		XVI	
	720	I-63	IIIb	縄文土器（晩期）	深鉢	胴部	—	—	—	ナデ 沈線	ナデ	にぶい褐	にぶい橙	○	○	○	○			XVI	
	721	I-56	IIIa	縄文土器（晩期）	深鉢	口縁部～胴部	—	—	—	布圧痕 ヘラ状条痕	ミガキ ヘラナデ	橙	褐灰	○	○	○		○	赤色粒 チタン鉄鉱	XVIIA-a	
	722	H-57	IIIb	縄文土器（晩期）	深鉢	口縁部～胴部	—	—	—	ヘラ状条痕	ミガキ ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○		○		XVIIA-a	
197	723	I-64	IIIb	縄文土器（晩期）	深鉢	口縁部～胴部	—	—	—	圧痕 ヘラ状条痕	ヘラナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		○	チタン鉄鉱	XVIIA-a	
	724	H-56	IIIb	縄文土器（晩期）	深鉢	口縁部～胴部	—	—	—	ナデ	ナデ ハケメ	橙	橙	○	○	○	○	○		XVIIA-a	
	725	J-57	IIIa	縄文土器（晩期）	深鉢	口縁部～胴部	—	—	—	ヘラ状条痕 ナデ	ナデ	にぶい橙	灰褐	○	○		○	○		XVIIA-a	
	726	H-53	—	縄文土器（晩期）	深鉢	胴部	—	—	—	ヘラ状条痕 沈線	ヘラナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○	赤色粒	XVIIA-a	
	727	H-57	IIIb	縄文土器（晩期）	深鉢	胴部	—	—	—	ヘラ状条痕 ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		○		XVII	
	728	I-53	VIa	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	布圧痕	ミガキ ヘラナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	○	○			○	赤色粒	XVIIC-b	
	729	H-57	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	布圧痕	ナデ	橙	褐灰	○	○	○		○		XVIIC-b	
	730	H-57	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	底部	—	—	—	布圧痕	ナデ	にぶい褐	灰褐	○	○			○		XVIIC-b	
	731	I-62	IIIb	縄文土器（晩期）	浅鉢	胴部～底部	—	7.4	—	ヨコナデ，圧痕 指圧痕	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○		○		XVIIC-c	
	732	I-65,66	IIIb	土師器	坏	口縁部～底部	12.0	6.0	4.6	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	橙	橙					密	赤色粒		
	733	I-64	IIIa IIIb	土師器	坏	口縁部～底部	12.5	5.0	4.3	ハケメ ナデ	ハケメ ナデ	橙	橙					密	赤色粒		
	734	I-64	IIIa IIIb	土師器	坏	口縁部～底部	12.6	6.0	4.7	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	浅黄橙	浅黄橙					密	赤色粒		
	735	I-62, 65, 66	IIIb	土師器	坏	口縁部～底部	13.2	6.0	5.0	工具痕，ナデ ハケメ	ハケメ ナデ	橙	浅黄橙				○	密	赤色粒		
	736	I-64	IIIb	土師器	坏	口縁部～底部	11.6	6.4	4.8	ヨコナデ	ハケメ ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○				赤色粒		
	737	I･J-67	IIIa IIIb	土師器	坏	口縁部～底部	13.3	6.0	5.7	ヨコナデ ヘラ切り	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙		○			密			
	738	I-47	—	土師器	坏	口縁部～底部	12.4	5.8	3.5	ヨコナデ	ナデ	橙	橙			○	○		赤色粒		一括
	739	J-66	IIIb	土師器	坏	胴部～底部	—	7.0	—	ナデ ヘラ切り	ナデ ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙					○	赤色粒		
	740	I-65,66	IIIa IIIb	土師器	坏	胴部～底部	—	6.4	—	回転ヘラ切り ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙					○			
	741	I-67	IIIb	土師器	坏	胴部～底部	—	7.4	—	ナデ ヘラ切り	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙					密			
198	742	I-65,66	IIIb	土師器	坏	胴部～底部	—	6.6	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙					密			
	743	J-67	IIIb	土師器	坏	底部	—	6.4	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙					密			
	744	I-67 J-65	IIIa IIIb	土師器	坏	口縁部～底部	13.6	7.4	5.3	ナデ ヘラ切り	ナデ	浅黄橙	黄橙					密	赤色粒		
	745	I-66,67	IIIb	土師器	坏	口縁部～底部	12.4	6.4	4.2	ヨコナデ	ナデ	赤橙色	赤橙色				○		赤色粒		
	746	I-67	IIIb	土師器	坏	口縁部～底部	13.4	8.0	3.8	ナデ	ナデ	浅黄	浅黄					密			
	747	I-65,67	IIIb	土師器	坏	胴部～底部	—	6.6	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙				○		赤色粒		
	748	I-66	IIIb	土師器	坏	胴部～底部	—	8.2	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙						赤色粒 カンラン石		
	749	I-63	IIIa IIIb	土師器	坏	胴部～底部	—	6.2	—	ヘラ切り，ナデ 工具痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙					○			
	750	H-58	IIIb	土師器	坏	胴部～底部	—	4.2	—	回転ヘラ切り ナデ，ハケメ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙				○				
	751	I-67	IIIb IV	土師器	坏	底部	—	6.8	—	ヘラ切り ナデ，工具痕	ナデ	にぶい橙	にぶい橙				○		赤色粒		
	752	I-67 J-64	IIIb	土師器	坏	胴部～底部	—	6.0	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	浅黄橙				○	密	赤色粒		
	753	I-64	IIIb	土師器	椀	胴部～底部	—	8.0	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	○	○				赤色粒		
	754	I-64,65	IIIa IIIb	土師器	椀	胴部～底部	—	9.2	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙				○		赤色粒		
	755	I-67	IIIb	土師器	椀	胴部～底部	—	9.6	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙		○		○		赤色粒		
	756	I-64 J-63	IIIb	土師器	椀（内朱）	口縁部～底部	14.6	6.6	5.2	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙				○		赤色粒		
	757	I-64,65	IIIa IIIb	土師器	椀	口縁部～底部	15.4	6.4	7.2	ヨコナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙		○			○	赤色粒		
	758	I-66 J-65	IIIb	土師器	椀	胴部～底部	—	6.8	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙			○	○		赤色粒		
	759	I-64,65	IIIa IIIb	土師器	椀	胴部～底部	—	7.0	—	ナデ ハケメ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙		○				赤色粒		
	760	I-65 J-64,65	IIIa IIIb	土師器	椀	口縁部～底部	15.2	5.2	6.1	ハケメ ヨコナデ	ナデ	赤橙色	赤橙色					密	赤色粒		
199	761	I-62,64	IIIa IIIb	土師器	椀	口縁部～底部	13.2	—	—	ヨコナデ	ナデ ミガキ	浅黄橙	浅黄橙					密	赤色粒		高台欠損
	762	I-67	IIIb	土師器	椀	胴部～底部	—	6.0	—	ヨコナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒 チタン鉄鉱		
	763	I-65	IIIa IIIb	土師器	椀	胴部～底部	—	8.0	—	ナデ	ナデ 摩滅	浅黄橙	浅黄橙					○			
	764	I･J-66	IIIb IVa	土師器	椀	胴部～底部	—	6.8	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙						赤色粒 チタン鉄鉱		
	765	I-67	IIIb	土師器	椀	胴部～底部	—	6.5	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙					○			
	766	I-67	VIb	土師器	高台付皿	口縁部～底部	12.5	5.8	3.4	ヨコナデ ミガキ	ヨコナデ ナデ	浅黄橙	浅黄橙					密	赤色粒		
	767	I･J-67	IIIb	土師器	高台付皿	口縁部～底部	12.0	5.9	4.0	ヨコナデ ナデ	ナデ	橙	浅黄橙					密	赤色粒		
	768	J-64～66	IIIb	土師器	高台付皿	胴部～底部	—	—	—	丁寧なナデ	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙					○			高台欠損
	769	I-66	IIIb	土師器	高台付皿	胴部～底部	—	7.6	—	丁寧なナデ	ナデ	橙	橙		○		○				

第31表　南部　土器観察表(2)

挿図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整		色調		胎土						分類	備考
										外面	内面	外面	内面	長石	石英	角閃	雲母	砂粒	その他		
200	770	I-64	IIIb	土師器	坏～埦	口縁部～胴部	19.0	—	—	ヨコナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙				○				
	771	I-66	IIIb	土師器	坏～埦	口縁部～胴部	12.4	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	橙	橙		○			密	赤色粒		
	772	J-66,67	IIIa IIIb	土師器	坏～埦	口縁部～胴部	11.2	—	—	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ	にぶい橙	にぶい橙					○			
	773	I-65	IIIb	土師器	坏～埦	口縁部～胴部	13.6	—	—	摩滅	ナデ	浅黄橙	浅黄橙		○				赤色粒		
	774	I-67	IIIb	土師器	坏～埦	口縁部～胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙						赤色粒 チタン鉄鉱		
	775	I-67	IIIb	土師器	坏～埦	口縁部	13.2	—	—	ナデ	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙						チタン鉄鉱		
	776	I-65	IIIb	土師器	坏～埦	口縁部	11.4	—	—	ヨコナデ	ハケメ ヨコナデ	にぶい橙	にぶい橙					密			
	777	I-64	IIIb	土師器	坏～埦	口縁部	12.6	—	—	ナデ	ヨコナデ	にぶい橙	にぶい橙		○				チタン鉄鉱		
	778	I-65	IIIb	土師器	坏～埦	口縁部～胴部	16.4	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙				○		赤色粒		
	779	I-64	IIIb	土師器	坏～埦	口縁部～胴部	12.4	—	—	ナデ ハケメ	ナデ ハケメ	にぶい橙	にぶい橙				○		赤色粒		
	780	I-66	IIIb	土師器	坏～埦	口縁部～胴部	14.0	—	—	丁寧なナデ	ナデ	橙	橙		○			密	赤色粒		
	781	I-64	IIIb	土師器	坏～埦	口縁部～胴部	16.4	—	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙					○	赤色粒		
	782	I-65	IIIb	土師器	坏～埦	口縁部	9.8	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ ハケメ	にぶい橙	にぶい橙					密			一括
	783	I-67	IIIb	土師器	坏～埦	口縁部～胴部	14.2	—	—	丁寧なナデ	ヨコナデ	にぶい橙	にぶい橙					○			
	784	I-67	IIIa	土師器	坏～埦	口縁部～胴部	11.2	—	—	ヨコナデ 工具痕	ヨコナデ	橙	橙		○				赤色粒		
	785	I-65	IIIb	土師器	坏～埦	口縁部～胴部	13.6	—	—	ナデ ハケメ	ヨコナデ ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙			○			赤色粒		
	786	I-64	IIIb	土師器	坏～埦	口縁部～胴部	16.6	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○		○			
	787	I-66,67	IIIb	土師器	坏～埦	口縁部～胴部	16.4	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙		○						
	788	I-65	IIIb	土師器	坏～埦	口縁部～胴部	16.2	—	—	ナデ ハケメ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○	○		赤色粒		
	789	I･J-67	IIIb	土師器	坏～埦	口縁部～胴部	10.2	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙		○						
	790	H-59	IIIb	土師器	坏～埦	口縁部～胴部	11.4	—	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙		○						
201	791	J-65	III	土師器	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ケズリ	にぶい褐	にぶい赤褐	○	○			○			土坑229
	792	J-65	III	土師器	甕	胴部	—	—	—	ナデ ハケメ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	○	○			○			土坑229
	793	J-65	III	土師器	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ケズリ	にぶい褐	明赤褐	○	○			○			土坑229
	794	J-65	III	土師器	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ケズリ ナデ	橙	橙	○	○			○	赤色粒		
	795	I-64	IIIb	土師器	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ケズリ	にぶい褐	黒褐	○	○		○	○			土坑221
	796	J-67	III	土師器	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ケズリ	褐灰	にぶい赤褐	○	○			○			畝18
	797	I-65,67 J-66,67	III IV	土師器	甕	口縁部～胴部	30.0	—	—	ナデ	ナデ ヘラケズリ	暗褐	橙	○	○						スス付着
	798	I-67	IIIb IV	土師器	甕	口縁部	35.0	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ ケズリ	にぶい褐	橙	○	○	○		○			
	799	I-64,65	IIIa IIIb	土師器	甕	口縁部	28.0	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙	にぶい橙		○			○	赤色粒 チタン鉄鉱		
	800	I-67	IIIb	土師器	甕	口縁部～胴部	28.8	—	—	ナデ	ヨコナデ ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○			
	801	I-64～66	IIIa IIIb	土師器	甕	口縁部	26.2	—	—	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ，ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○	赤色粒		
	802	I-67	IIIb	土師器	甕	口縁部	24.6	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	橙	橙					○			
	803	I-64	IIIb	土師器	甕	口縁部～胴部	26.6	—	—	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ケズリ	にぶい橙	にぶい橙		○		○	○			
	804	I-64	IIIa IIIb	土師器	甕	口縁部～胴部	30.0	—	—	ヨコナデ 指圧痕	ヨコナデ ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○	○			○	チタン鉄鉱		
	805	I-65	IIIb	土師器	甕	口縁部～胴部	32.6	—	—	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ケズリ	橙	橙	○	○			○			
202	806	J-67	IIIb	土師器	甕	口縁部～胴部	28.8	—	—	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ケズリ	にぶい橙	にぶい橙		○			○			
	807	I-65	IIIb	土師器	甕	口縁部	24.6	—	—	ハケメ ヨコナデ	ハケメ ヨコナデ	橙	橙	○	○			○	赤色粒 チタン鉄鉱		
	808	I-64	IIIa IIIb	土師器	甕	口縁部～胴部	26.4	—	—	ハケメ ナデ	ナデ 指圧痕	にぶい橙	橙		○			○			
	809	I-64	IIIb	土師器	甕	口縁部	23.2	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい赤褐	橙	○	○			○	赤色粒 チタン鉄鉱		
	810	I-64～66	IIIb	土師器	甕	口縁部	18.2	—	—	ヨコナデ	ナデ ケズリ	にぶい橙	にぶい橙		○	○	○	○			
	811	I-65	IIIb	土師器	甕	口縁部～胴部	16.2	—	—	ヨコナデ ナデ	ナデ ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○	○	○	カンラン石		
	812	H-60	IIIb	土師器	甕	口縁部～胴部	19.6	—	—	ヨコナデ→ナデ	ナデ ケズリ	橙	にぶい黄橙		○		○	○	赤色粒		
	813	I･J･L-67	IIIa IIIb	土師器	甕	口縁部～胴部	20.6	—	—	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ハケメ，ミガキ	橙	橙		○		○	○			
	814	I･J-64～67	IIIb	土師器	甕	口縁部	27.2	—	—	ハケメ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	橙	橙		○		○	○	赤色粒		一括
	815	I-65	IIIa IIIb	土師器	甕	口縁部～胴部	30.0	—	—	ハケメ ヨコナデ	指圧痕，ナデ ケズリ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○		○	チタン鉄鉱		スス付着
203	816	J-65	III	土師器	埦(内黒)	胴部	—	—	—	ナデ ハケメ	ナデ	にぶい黄橙	褐灰					密			土坑229
	817	I･J-62～67	IIIa IIIb	土師器	坏(内黒)	口縁部～底部	19.2	7.9	6.8	ヨコナデ ナデ	ミガキ	浅黄橙	黒褐					密			
	818	I-66,67	IIIb	土師器	坏(内黒)	胴部～底部	—	5.6	—	ナデ	ミガキ	にぶい橙	黒褐				○				
	819	I-65,66	IIIa IIIb	土師器	埦(内黒)	口縁部～底部	15.2	5.8	5.3	ヨコナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐	○		○			チタン鉄鉱		
	820	I-67	IV	土師器	埦(内黒)	口縁部	16.0	—	—	ヨコナデ	ミガキ	にぶい褐	黒褐				○				
	821	I-67	IIIb	土師器	埦(内黒)	口縁部	15.2	—	—	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐						チタン鉄鉱		黒斑あり
	822	I-64	IIIb	土師器	埦(内黒)	口縁部	—	—	—	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐				○				
	823	I-64,65	IIIb	土師器	埦(内黒)	口縁部～胴部	16.0	—	—	ヨコナデ	ミガキ	浅黄	黒褐				○				

第32表　南部　土器観察表(3)

挿図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整		色調		胎土						分類	備考
										外面	内面	外面	内面	長石	石英	角閃	雲母	砂粒	その他		
203	824	I-64	IIIa	土師器	椀(内黒)	口縁部	18.3	—	—	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐						チタン鉄鉱		
	825	I-67	IIIa	土師器	椀(内黒)	口縁部	16.0	—	—	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐		○						
	826	I-65	IIIb	土師器	椀(内黒)	口縁部	14.8	—	—	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐				○				
	827	I-64	IIIb	土師器	椀(内黒)	口縁部	—	—	—	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐				○				
	828	J-65	IIIb	土師器	椀(内黒)	口縁部	—	—	—	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐					密			
	829	I-67	IIIb	土師器	椀(内黒)	口縁部	—	—	—	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐				○				
	830	I-66	IIIb	土師器	椀(内黒)	底部	—	6.6	—	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	褐灰				○				
	831	I-65,66	IIIb	土師器	椀(内黒)	胴部～底部	—	7.2	—	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	褐灰						チタン鉄鉱		
	832	I-65	IIIb	土師器	椀(内黒)	底部	—	7.6	—	ナデ ハケメ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐				○				
	833	I-64	IIIb	土師器	椀(内黒)	底部	—	7.5	—	ナデ	ナデ	浅黄	浅黄				○				
	834	I-65	IIIb	土師器	椀(内黒)	底部	—	7.6	—	ナデ	ミガキ	にぶい橙	褐灰				○				
	835	I-62	IIIb	土師器	椀(内黒)	胴部～底部	—	8.8	—	ナデ 工具痕	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐				○				
	836	I-65～67	IIIb	土師器	椀(内黒)	底部	—	7.6	—	ナデ	ミガキ	にぶい橙	黒褐		○						
	837	I-67	IIIa	土師器	椀(内黒)	胴部～底部	—	8.0	—	ヨコナデ ヘラ切り	ミガキ	橙	黒褐					○			
	838	I-65,66	IIIb IV	土師器	椀(内黒)	胴部～底部	—	6.4	—	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	褐灰				○		赤色粒		
	839	J-65	IIIb	土師器	椀(内黒)	底部	—	—	—	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐		○						高台欠損
	840	I-67	IIIb	土師器	椀(内黒)	胴部～底部	—	—	—	ナデ	ミガキ	にぶい橙	黒褐						チタン鉄鉱		高台欠損
	841	I･J-67	IIIb	土師器	椀(内黒)	胴部～底部	—	—	—	ヨコナデ	ミガキ	にぶい橙	黒褐				○		赤色粒		高台欠損
	842	I-67	IIIb	土師器	椀(内黒)	胴部～底部	—	—	—	ヨコナデ	ミガキ	にぶい橙	黒褐				○				高台欠損
	843	J-65	IIIb	土師器	椀(内黒)	胴部～底部	—	11.6	—	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	褐灰					密			
204	844	I-65	IIIb	土師器	椀(内黒･外朱)	胴部	—	—	—	ナデ	ミガキ	にぶい橙	黒褐				○				
	845	I-64	IIIb	土師器	椀(内黒･外朱)	胴部	—	—	—	ナデ	ミガキ	にぶい褐	黒褐				○				
	846	I-65	IIIb	土師器	椀(内黒･外朱)	底部	—	—	—	ナデ	ミガキ	にぶい橙	黒褐				○				一括
	847	—	表採	土師器	坏(外朱)	底部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙						赤色粒		
	848	I-65	IIIb	土師器	坏(内朱)	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙				○				一括
	849	I-66	IIIb	土師器	坏(墨書)	口縁部～底部	—	6.4	—	ヨコナデ 回転ヘラ切り	ナデ ハケメ	橙	橙		○			○	赤色粒		「福笑？」
	850	I-64,65	IIIa IIIb	土師器	高台付皿(内黒,墨書)	胴部～底部	—	7.0	—	ヨコナデ	ミガキ	橙	黒褐	○		○	○	密			「廣」
	851	I-67 J-64-67	IIIb	土師器	坏(墨書)	口縁部～底部	12.6	6.2	4.3	回転ヘラ切り ヨコナデ, ハケメ	ナデ	橙	橙		○		○				「用？」
	852	I-65	IIIb	土師器	椀(墨書)	口縁部～胴部	13.6	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙				○				「一？」
	853	I-65	IIIb	土師器	椀(墨書)	口縁部～胴部	—	—	—	ヨコナデ	ナデ	橙	橙				○				「？」
	854	I-64	IIIb	土師器	椀(墨書)	口縁部～胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙				○		赤色粒		「？」
	855	I-64	IIIb	土師器	椀(内黒・墨書)	胴部	—	—	—	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	褐灰				○				「？」一括
	856	I-65	IIIb	土師器	坏(刻書)	口縁部～底部	13.6	7.2	—	ヨコナデ 刻書	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙					○			
	857	I-66	IIIb	土師器	椀	口縁部～胴部	—	—	—	ヨコナデ 工具痕	ナデ	にぶい橙	にぶい橙		○				赤色粒		
	858	I-65	IIIa IIIb	土師器	椀(内黒)	底部	—	8.0	—	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	褐灰				○				メンコ状
205	859	I-64	IIIa IIIb	須恵器	坏	口縁部～底部	16.0	9.8	4.7	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ	灰黄	灰黄		○						
	860	I-64	IIIb	須恵器	坏	胴部～底部	—	9.8	—	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄	灰黄	○	○			○			
	861	I-64～66	IIIa IIIb	須恵器	坏	口縁部～底部	15.6	11.2	4.2	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ	灰黄	灰黄						チタン鉄鉱		
	862	I-67	IIIb	須恵器	椀	胴部～底部	—	8.2	—	ヨコナデ	ナデ	黄灰	黄灰		○						
	863	J-67	IIIa	須恵器	坏～椀	口縁部～胴部	16.2	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄	灰黄	○	○						
	864	I-64	IIIa IIIb	須恵器	坏～椀	口縁部～胴部	16.0	—	—	摩滅	摩滅	灰黄	灰黄	○	○			○			
	865	I-64	IIIb	須恵器	坏～椀	口縁部～胴部	12.6	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄	灰黄					○			
	866	I-65	IIIa	須恵器	坏～椀	口縁部	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰	黄灰						チタン鉄鉱		
	867	I-67	IIIb	須恵器	甕	口縁部	16.8	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	灰	灰オリーブ					○			
	868	I-61, 63, 67	IIIb	須恵器	甕	口縁部～肩	16.8	—	—	ヨコナデ 格子目タタキ	ヨコナデ 同心円当て具痕	灰	灰		○				赤色粒		
	869	I-66	IIIb	須恵器	甕	胴部	—	—	—	格子目→ナデ	同心円 平行	灰オリーブ	灰		○						
	870	J-67	IIIb	須恵器	甕	胴部	—	—	—	格子目→ナデ	同心円 タタキ痕	灰オリーブ	灰					○	赤色粒		
	871	I-67	IIIb	須恵器	甕	胴部	—	—	—	格子目	同心円→ナデ	灰オリーブ	灰		○						
	872	I-67	IIIb	須恵器	甕	胴部	—	—	—	格子目	同心円	灰	灰		○						
	873	I･J-66, 67	IIIb	須恵器	甕	胴部	—	—	—	格子目	同心円 平行当て具痕	灰	灰		○				赤色粒		
	874	I･J-67	IIIb	須恵器	甕	胴部	—	—	—	格子目	同心円	灰オリーブ	灰		○				赤色粒		
	875	I-66	IIIb	須恵器	甕	胴部	—	—	—	平行タタキ	同心円	灰	灰		○						
	876	I-63	IIIb	須恵器	甕	胴部	—	—	—	平行→ナデ	平行→ナデ	にぶい黄褐	にぶい褐					○			
	877	I-64～66	IIIa IIIb	須恵器	甕	胴部	—	—	—	平行→ナデ	同心円	にぶい黄褐	にぶい黄褐					密			
	878	I-64,65	IIIa	須恵器	甕	胴部	—	—	—	平行	平行	褐	暗灰黄					密			
	879	I-64	IIIb	須恵器	甕	胴部	—	—	—	平行	同心円	褐	暗灰黄					密			
	880	I-67	IIIb	須恵器	甕	底部	—	—	—	平行タタキ →ナデ	櫛状工具痕	灰黄	灰黄					密	赤色粒 チタン鉄鉱		焼成不良

第33表　南部　土器観察表(4)

挿図番号	レイアウト番号	出土区	層	種類	器種	部位	口径	底径	器高	文様・調整		色調		胎土						分類	備考
										外面	内面	外面	内面	長石	石英	角閃	雲母	砂粒	その他		
206	881	I-67	IIIa IIIb	土師器	焼塩土器	口縁部	12.0	—	—	指圧痕	ナデ	橙	橙				○	○			
	882	I-67	IIIb	土師器	焼塩土器	口縁部	—	—	—	指圧痕	ナデ	橙	橙				○		赤色粒		
	883	I-66	IIIb	土師器	焼塩土器	口縁部～胴部	13.6	—	—	ナデ 指圧痕	布圧痕	橙	橙		○				赤色粒		
	884	I・J-64～67	IIIb	土師器	焼塩土器	口縁部～胴部	—	—	—	ナデ 指圧痕	布圧痕	橙	橙	○	○				赤色粒		一括
	885	J-65	IIIb	土師器	焼塩土器	口縁部～胴部	—	—	—	ナデ 指圧痕	布圧痕	明黄褐	明黄褐					密	赤色粒		
	886	I-67	IIIb	土師器	焼塩土器	口縁部	—	—	—	指圧痕	布圧痕	橙	橙						赤色粒		
	887	I-67	IIIb	土師器	焼塩土器	口縁部	—	—	—	指圧痕	布圧痕	橙	橙				○				
	888	I-65	IIIb	土師器	焼塩土器	口縁部	—	—	—	指圧痕	布圧痕	橙	橙	○	○						
	889	I-65	IIIb	土師器	焼塩土器	口縁部	—	—	—	指圧痕	布圧痕	橙	橙					○			
	890	I-66	IIIb	土師器	焼塩土器	口縁部～胴部	—	—	—	ナデ 指圧痕	布圧痕	橙	橙			○		○			
	891	I-65	IIIb	土師器	焼塩土器	口縁部～胴部	—	—	—	ナデ 指圧痕	布圧痕	橙	橙	○	○				赤色粒		自然釉付着
	892	I-65	IIIb	土師器	焼塩土器	口縁部～胴部	17.0	—	—	ナデ 指圧痕	布圧痕	橙	橙		○				赤色粒		一括
	893	I-67	IIIb	土師器	焼塩土器	口縁部	—	—	—	指圧痕	ナデ	橙	橙					○			
	894	I-66	IIIb	土師器	焼塩土器	胴部	—	—	—	指圧痕	布圧痕	橙	橙			○					
	895	I-65	—	土師器	焼塩土器	胴部	—	—	—	指圧痕	布圧痕	橙	橙	○	○			○			
	896	I-65	IIIa	土師器	焼塩土器	胴部	—	—	—	ナデ 指圧痕	圧痕	にぶい橙	にぶい橙			○		○			
	897	I-67	IIIa	土師器	焼塩土器	胴部	—	—	—	指圧痕	布圧痕	橙	橙					○			
	898	J-67	IIIb	土師器	焼塩土器	胴部	—	—	—	ナデ 指圧痕	布圧痕	橙	橙					○	赤色粒		
	899	H-50	IIIb	土師器	焼塩土器	底部	—	—	—	指圧痕	ナデ	橙	橙					○			
207	900	H-53	—	青磁	皿	口縁部～胴部	15.4	—	—	透明釉	透明釉	暗オリーブ	暗オリーブ					密			花弁型→稜花口縁
	901	H-52 I-56	IIIa	瓦質土器	鉢	胴部	—	—	—	摩滅	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						
	902	J-57	IVb	瓦質土器	鉢	胴部～底部	—	10.2	—	ミガキ 沈線	ミガキ	黒褐	黒褐		○						
	903	I-57	—	陶胎磁器	碗	口縁部～胴部	11.8	—	—	透明釉	透明釉	灰	灰					密			草花文,沈線カクラン
	904	—	—	磁器	碗	胴部～底部	—	2.4	—	草花文 灰釉	灰釉	灰白色	灰白色					密			畳目釉剥ぎ 圏線
	905	中上段	表採	磁器	皿	胴部～底部	—	6.4	—	透明釉	草花文	灰白	灰白					密			底釉拭取り跡 釉溜
	906	—	表採	陶器	埦	胴部～底部	—	3.4	—	透明釉	透明釉 蛇ノ目釉剥ぎ	暗褐	暗褐					○			胴部下位以下無釉
	907	I-57	Ⅰc	陶器	皿	口縁部～胴部	14.2	—	—	透明釉	透明釉	灰黄	灰黄					密			一括
	908	—	—	陶器	皿	口縁部～底部	12.0	5.4	2.6	鉄釉	鉄釉	灰黄褐	灰オリーブ					密			胴部中位以下無釉　一括
	909	—	—	陶器	鉢	口縁部	17.6	—	—	鉄釉 口唇部釉剥ぎ	鉄釉	暗灰オリーブ	暗灰オリーブ					密			一括
	910	—	表採	陶器	鉢	胴部～底部	—	19.4	—	鉄釉	鉄釉	暗褐	褐		○						底面無釉
	911	I・J-67	—	陶器	擂鉢	口縁部	—	—	—	外帯一段 鉄釉	単位櫛目	褐	にぶい褐					密			口唇部釉剥ぎ 一括
	912	—	表採	陶器	擂鉢	胴部	—	—	—	鉄釉たれ	単位櫛目	オリーブ褐	暗褐	○	○			○			
	913	—	表採	陶器	鍋	底部	—	6.6	—	ナデ	ナデ	褐灰	灰褐	○	○						一括
	914	I-63	IIIb	陶器	甕	胴部～底部	—	24.8	—	鉄釉	鉄釉	黄灰	黄灰		○						底面に目跡
	915	—	—	陶器	土瓶	口縁部	7.6	—	—	鉄釉	鉄釉	灰オリーブ	灰オリーブ					○			一括
	916	—	—	陶器	土瓶	耳	—	—	—	透明釉	透明釉	暗褐	暗褐					密			一括
	917	—	—	陶器	土瓶	底部	—	7.8	—	無釉	透明釉	灰黄褐	灰オリーブ					密			一括
	918	H-58	IIIb	陶器	土瓶	底部	—	4.0	—	外面腰部以外無釉 算盤玉形	鉄釉	にぶい赤褐	灰黄褐	○	○						
	919	—	—	陶器	土瓶	脚部	—	—	—	鉄釉	鉄釉	暗褐	暗褐					密			胴部下位以下無釉,脚付き 一括
	920	I-67	IIIb	陶器	瓶	頸部	—	—	—	鉄釉	鉄釉	暗オリーブ褐	暗灰黄					密			

第５節　出土石器

南部では，石鏃が２点，石匙１点，磨製石斧１点，磨石２点，軽石製品３点の計９点が出土しており，出土点数は少ない。軽石製品を除く石器は縄文時代のものと思われるが，前述の通り縄文時代の調査は部分的であるので台地部からの流れ込みの可能性が考えられる。それぞれの出土区，石材，計測値などは，第34表に示した。

１　石鏃（第208図921，922）

921は正三角形型の石鏃で，浅めの抉りにより作り出された脚は長さが異なる。石材は蛋白呟である。側面は細かい連続した剥離が施され，鋸歯状を呈する。922は，黒耀石を利用したもので，抉りの深い両脚部の先端は欠損しているが長身鏃である。

２　石匙（第208図923）

923はチャート製の石匙である。薄い剥片を利用し側面に抉りを入れて摘み部を作り出し，直線的な刃部も連続する細かい剥離を施す。両面中央に自然面が残る。

３　磨製石斧（第208図924）

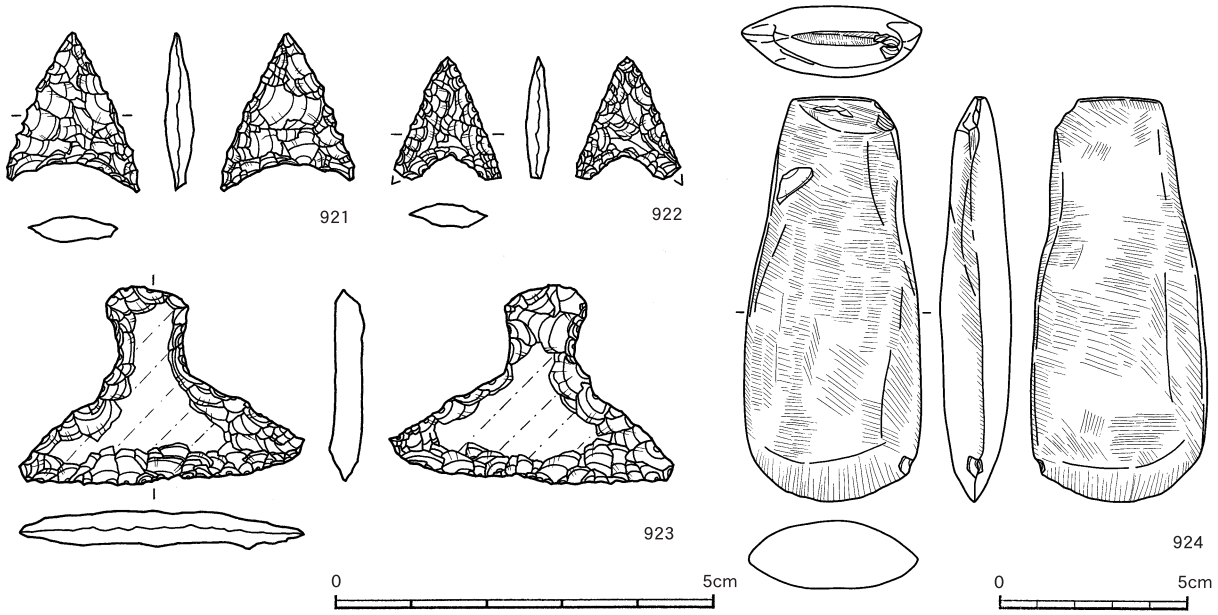
924は砂岩製の磨製石斧である。扁平な自然石を細く敲打し，刃部，基部を作り出した後，全身に丁寧な研磨を施す。刃部は両刃状に削られ鋭く尖っており，残存状況も良好である。基部の側面はわずかに面取りを施している。横断面の形状は，厚みのあるレンズ状を呈す。

４　磨石（第209図925，926）

925は磨石である。円形の安山岩を使用したもので，正面上部，左側面，左側面下部，裏面に摩耗面が認められ，用途によって面を使い分けていたと思われる。また，下面，右側縁に敲打痕が残ることから，両機能を備えた磨石である。926は，正面，裏面に広く摩耗面が残るもので，正面磨り面は中央がやや凹んでいる。安山岩を使用している。

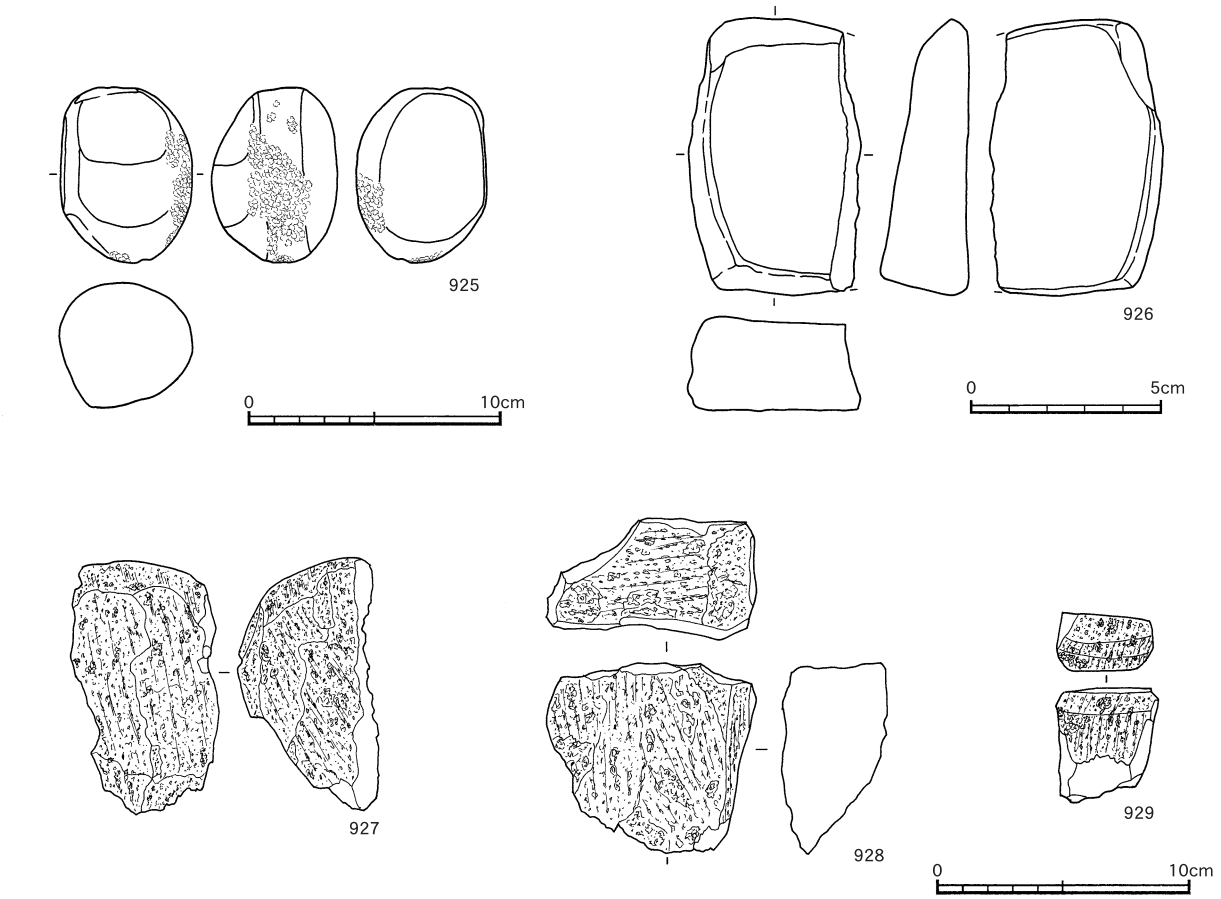
５　軽石製品（第209図927～929）

軽石は石の特性上破損品が多く，南部調査区では破損品を含め計336点出土している。



第208図　南部　縄文時代の石器(1)

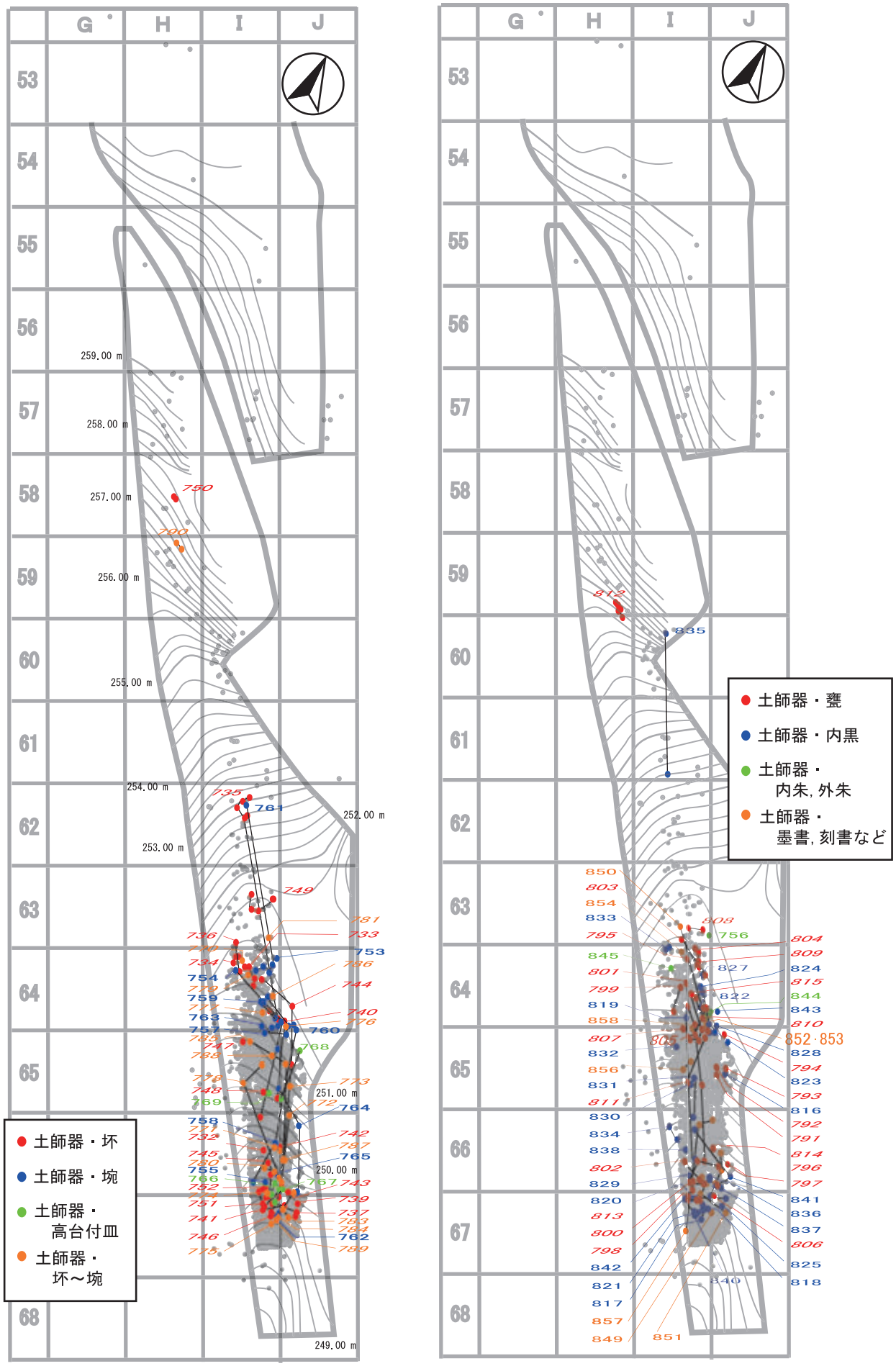
927～929は，明らかに人為的な加工を施したと思われる軽石製品である。927は上面を平坦に加工し，上面から側面へかけて丸くなるように加工を施している。上面は研磨され滑らかである。刃物状工具の使用痕が残る。上面は火熱を受け赤化している。破損品であるため全体形状は不明である。928は，正面に面取りされた部分が残り，一部赤橙色に変色している。929は，角面柱状に加工された軽石の角の部分に当たると思われ，上面，側面が平坦に加工され，角部分は数回の削り調整後砥石等で研磨を施し丸く仕上げている。上面に工具痕が残り，加工面は全て火熱を受けた事による赤化が見られる。



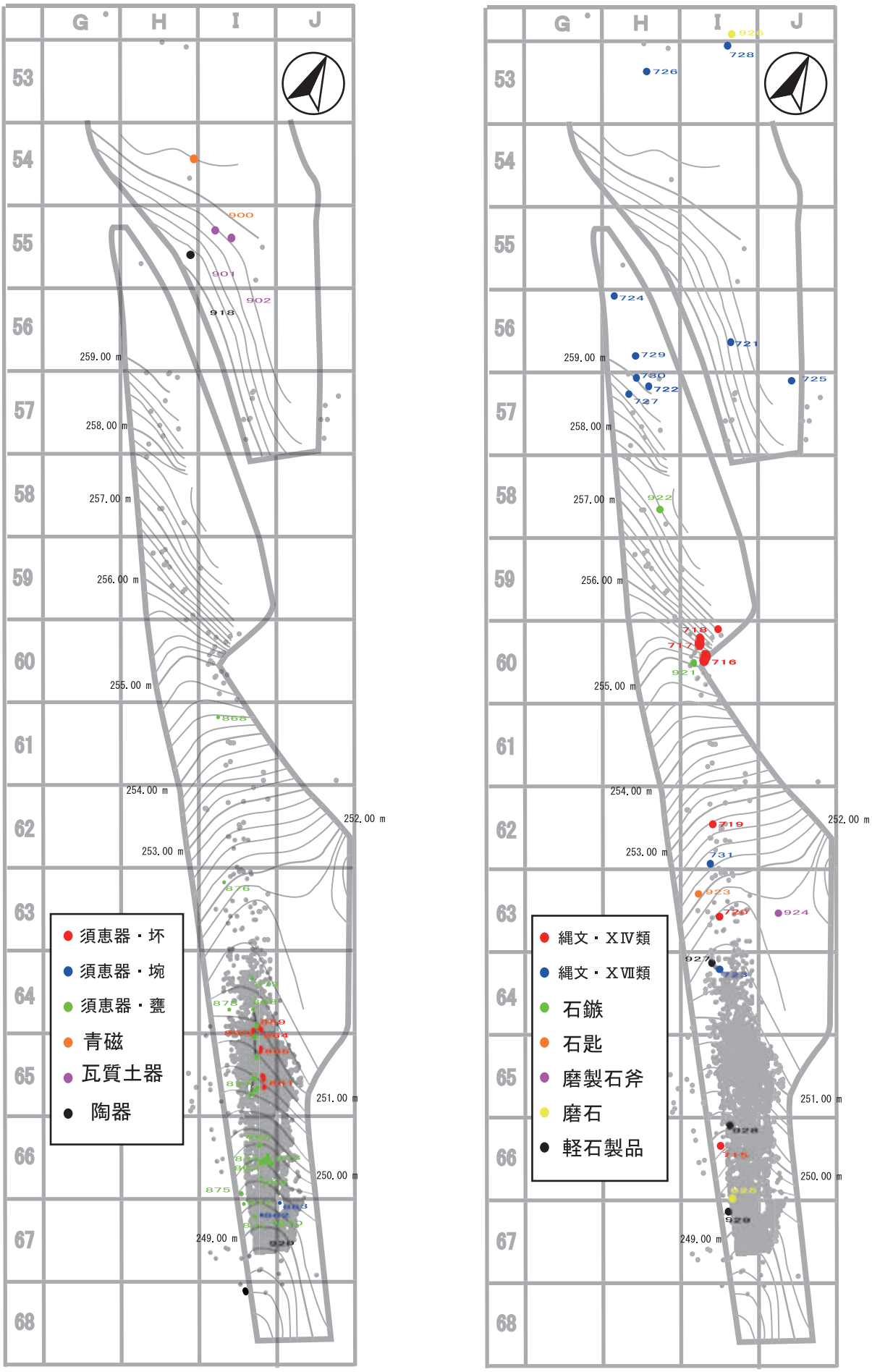
第209図　南部　縄文時代の石器(2)，古代の石器

第34表　南部　石器観察表

挿図番号	レイアウト番号	器　種	出土区・層		石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
208	921	石鏃	51T	IVa	玉髄	2.1	1.8	0.3	0.83	
	922	石鏃	H-58	IIIb	黒曜石	1.6	1.4	0.2	0.45	
	923	石匙	I-63	IIIb	チャート	2.6	3.8	0.5	3.36	
	924	磨製石斧	J-63	IV	安山岩	10.7	4.7	1.8	135.11	
209	925	磨石	I-67	IIIa	安山岩	6.9	5.2	4.9	251.47	
	926	磨石	46T	VIa	安山岩	7.3	4.6	2.5	171.21	
	927	軽石製品	I-64	IIIb	－	9.9	5.7	5.5	78.60	
	928	軽石製品	I-66	IIIb	－	7.5	8.2	4.8	82.70	
	929	軽石製品	I-67	IIIb	－	4.5	3.9	2.4	14.60	



第210図　南部　遺物出土状況図(1)



第211図　南部　遺物出土状況図(2)

第Ⅶ章　科学分析

第１節　放射性炭素年代測定

１　㈱加速器分析研究所測定結果１（平成18年度実施）

①　遺跡の位置と測定対象試料

狩俣遺跡は，鹿児島県曽於市大隅町大谷2154（北緯131°36′06″，東経130°56′06″）に位置する。測定対象試料は，G-８区土坑48号から出土した炭化物（№１：IAAA-62436），I-42区集石14号から出土した炭化物（№２：IAAA-62437），H-39区集石13号から出土した炭化物（№３：IAAA-62438），合計３点である。

②　化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

２）AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理，アルカリ処理，酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～１Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。

３）試料を酸化銅１ｇと共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素(CO_2)を精製する。

５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(還元)し，グラファイトを作製する。

６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着し測定する。

③　測定方法

測定機器は，３MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また，加速器により$^{13}C/^{12}C$の測定も同時に行う。

④　算出方法

１）年代値の算出には，Libbyの半減期5568年を使用した。

２）BP年代値は，過去において大気中の炭素14濃度が一定であったと仮定して測定された，1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。

3）付記した誤差は，次のように算出した。

複数回の測定値について，χ^2検定を行い測定値が１つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い，みなせない場合には標準誤差を用いる。

4）δ^{13}Cの値は，通常は質量分析計を用いて測定するが，AMS測定の場合に同時に測定されるδ^{13}Cの値を用いることもある。

δ^{13}C補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$\delta^{14}C=[(^{14}A_S-^{14}A_R)/^{14}A_R]\times1000$ (1)　$\delta^{13}C=[(^{13}A_S-^{13}A_{PDB})/^{13}A_{PDB}]\times1000$ (2)

ここで，　$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$または$(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$または$(^{14}C/^{13}C)_R$

δ^{13}Cは，質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}A_S=^{13}C/^{12}C$）を測定し，PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として，それからのずれを計算した。但し，加速器により測定中に同時に$^{13}C/^{12}C$を測定し，標準試料の測定値との比較から算出したδ^{13}Cを用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また，Δ^{14}Cは，試料炭素が$\delta^{13}C=-25.0$(‰）であるとしたときの^{14}C濃度($^{14}A_N$)に換算した上で計算した値である。(1)式の^{14}C濃度を，δ^{13}Cの測定値をもとに次式のように換算する。

$^{14}A_N=^{14}A_S\times(0.975/(1+\delta^{13}C/1000))^2$　($^{14}A_S$として$^{14}C/^{12}C$を使用するとき）　または

$=^{14}A_S\times(0.975/(1+\delta^{13}C/1000))$　($^{14}A_S$として$^{14}C/^{13}C$を使用するとき）

$\Delta^{14}C=[(^{14}A_N-^{14}A_R)/^{14}A_R]\times1000$　(‰)

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については，海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため，同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合，同位体補正をしないδ^{14}Cに相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として，pMC（percent Modern Carbon）がよく使われており，Δ^{14}Cとの関係は次のようになる。

$\Delta^{14}C=(pMC/100-1)\times1000$（‰）　　$pMC=\Delta^{14}C/10+100$（%）

国際的な取り決めにより，このΔ^{14}CあるいはpMCにより，放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age;yrBP）が次のように計算される。

$T=-8033\times ln[(\Delta^{14}C/1000)+1]=-8033\times ln(pMC/100)$

5）^{14}C年代値と誤差は，１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6）較正暦年代の計算では，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv 3.10較正プログラム（Bronk Ransey1995　Bronk Ransey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001）を使用した。

⑤　測定結果

G-８区土坑48号出土炭化物（№１：IAAA-62436）が2900±30yrBP，I-42区集石14号出土炭化物（№２：IAAA-62437）が7260±40yrBP，H-39区集石13号出土炭化物（№３：IAAA-

62438）が8230±50yrBPの^{14}C年代である。暦年較正年代（1σ＝68.2%）は，№１が1130BC～1010BCであり，縄文時代後期末から晩期初頭，№２が6210BC～6130BC（42.4%）・6110BC～6060BC（25.8%）であり，縄文時代早期中葉，№３が7340BC～7170BCであり，縄文時代早期前葉から中葉にかけての年代である。化学処理および測定内容に問題は無く，妥当な年代と考えられる。

参考文献

Stuiver, M.and Polash, H.A.（1977）Discussion：Reporting of ^{14}C data. *Radiocarbon*，19：355-363

Bronk Ramsey C.（1995）Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy：the OxCal Program, *Radiocarbon*，37（2）425-430

Bronk Ramsey C.（2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon*，43（2A）355-363

Bronk Ramsey C.，J. van der Plicht and B. Weninger（2001）'Wiggle Matching' radiocarbon dates，*Radiocarbon*，43（2A）381-389

Reimer et al.（2004）IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. *Radiocarbon* 46, 1029-1058

第35表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果⑴

IAA Code Ï.		BP ض⅔ ╟┘ ー ﻑ	
IAAA-62436	ﻘﻤﻢ 2154	Libby Age yrBP	2,900 ± 30
	هي	ə ^{13}C X	-29.52 ± 0.92
		A ^{14}C X	-303.1 ± 3.0
	(Ï 1	pMC	69.69 ± 0.30
		ə ^{14}C X	-309.5 ± 2.6
	( ) ə ^{13}C ー ⇔	pMC	69.05 ± 0.26
#1593-1		Age yrBP	2,980 ± 30
IAAA-62437	ﻘﻤﻢ 2154	Libby Age yrBP	7,260 ± 40
	هي	ə ^{13}C X	-29.18 ± 0.73
		A ^{14}C X	-595.0 ± 2.0
	(Ï 2	pMC	40.50 ± 0.20
		ə ^{14}C X	-598.5 ± 1.9
	( ) ə ^{13}C ー ⇔	pMC	40.15 ± 0.19
#1593-2		Age yrBP	7,330 ± 40
IAAA-62438	ﻘﻤﻢ 2154	Libby Age yrBP	8,230 ± 50
	هي	ə ^{13}C X	-27.24 ± 0.92
		A ^{14}C X	-641.0 ± 2.0
	(Ï 3	pMC	35.90 ± 0.20
		ə ^{14}C X	-642.6 ± 1.9
	( ) ə ^{13}C ー ⇔	pMC	35.74 ± 0.19
#1593-3		Age yrBP	8,270 ± 40

IAA Code Ï		Libby Age yrBP
IAAA-62436	Ï 1	2900 ± 34
IAAA-62437	Ï 2	7260 ± 39
IAAA-62438	Ï 3	8228 ± 44

ここに記載するLibby Age（年代値）と誤差は下１桁を丸めない値です。

2 ㈱加速器分析研究所測定結果２（平成20年度実施）

① 測定対象試料

狩俣遺跡は，鹿児島県曽於市大隅町（北緯31°37′40″，東経130°56′35″）に所在する。測定対象試料は，確認調査８トレンチから出土した土器の付着炭化物（№３：IAAA-80770）である。

② 測定の意義　　土器の年代を明らかにしたい。

③ 化学処理工程

⑴ メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

⑵ 酸処理，アルカリ処理，酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では１Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお，AAA処理において，アルカリ濃度が１N未満の場合，表中にAaAと記載する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。

⑶ 試料を酸化銅と共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

⑷ 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

⑸ 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

⑹ グラファイトを内径１㎜のカソードに詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着する。

④ 測定方法

測定機器は，加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置を使用する。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

⑤ 算出方法

⑴ 年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。

⑵ ^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は，δ^{13}Cによって補正された値である。^{14}C年代と誤差は，１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±1σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

⑶ δ^{13}Cは，試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを示した値である。同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により^{13}C/^{12}Cを測定した場合には表中に(AMS)と注記する。

⑷ pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。

⑸ 暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は，下一桁を四捨五入しない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv4.0較正プログラム（Bronk Ransey 1995 Bronk Ransey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

⑥ 測定結果

土器付着炭化物の^{14}C年代は2480±30yrBPである。試料の炭素含有率は53.2%であり，十分な値である。化学処理および測定内容にも問題は無く，妥当な年代と考えられる。

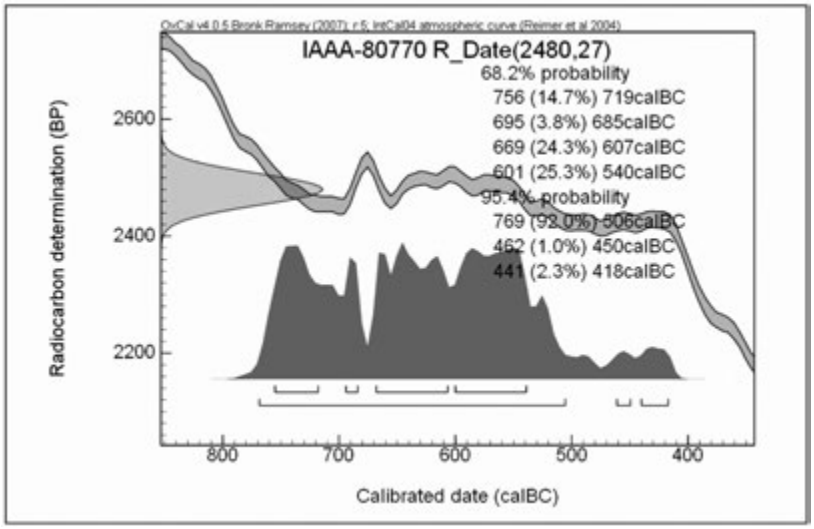
第36表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果⑵

					^{13}C ( ) (AMS)	^{13}C	
						Libby Age yrBP	pMC (%)
IAAA-80770	3			AaA	**-21.57 ± 0.30**	**2,480 ± 30**	**73.43 ± 0.25**

［#2351］

	^{13}C			1σ ض	2σ ض
	Age (yrBP)	pMC	(yrBP)		
IAAA-80770	2,420 ± 30	73.95 ± 0.24	2,480 ± 27	756BC - 719BC (14.7%) 695BC - 685BC (3.8%) 669BC - 607BC (24.3%) 601BC - 540BC (25.3%)	769BC - 506BC (92.0%) 462BC - 450BC (1.0%) 441BC - 418BC (2.3%)

［参考値］



第212図　暦年正年代データ(1)

参考文献

Stuiver M. and Polash H. A. 1977 Discussion : Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy : the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058

3　㈱加速器分析研究所測定結果３（平成20年度実施）

①　測定対象試料

狩俣遺跡は，鹿児島県曽於市大隅町（北緯31°37′40″，東経130°56′35″）に所在する。測定対象試料は，G-７区の畝跡から出土した炭化物（№１：IAAA-80831）とⅢｂ層から出土した炭化物（№２：IAAA-80832）である。№１は直径１㎝程の炭化物片を測定試料に選定した。№２は２×５㎝程の木炭であったため，その年輪の最外部から採取した。

②　測定の意義　畝や層位の年代を明らかにしたい。

③　化学処理工程

⑴　メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

⑵　酸処理，アルカリ処理，酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では１Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用い

て数時間処理する。なお，AAA処理において，アルカリ濃度が１Ｎ未満の場合，表中にAaAと記載する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。

⑶　試料を酸化銅と石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

⑷　液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

⑸　精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

⑹　グラファイトを内径１㎜のカソードに詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着する。

④　測定方法

測定機器は，加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置を使用する。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

⑤　算出方法

⑴　年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。

⑵　^{14}C年代(Libby Age：yrBP)は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。この値は，δ^{13}Cによって補正された値である。^{14}C年代と誤差は，１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差(±1σ)は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

⑶　δ^{13}Cは，試料炭素の^{13}C濃度(^{13}C/^{12}C)を測定し，基準試料からのずれを示した値である。同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により^{13}C/^{12}Cを測定した場合，表中に(AMS)と注記する。

⑷　pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。

⑸　暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は，下一桁を四捨五入しない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv4.0較正プログラム（Bronk Ransey 1995 Bronk Ransey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

第37表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果(3)

					ə ^{13}C (X) (AMS)	ə ^{13}C №╡	
						Libby Age yrBP	pMC (%)
IAAA-80831	Ï .1	˛ ﺗﻤﻰ		AAA	-29.34 ± 0.41	100 ± 30	98.74 ± 0.33
IAAA-80832	Ï .2	˛ й b		AAA	-24.65 ± 0.42	1,200 ± 30	86.10 ± 0.30

	ə ^{13}C ⌂ ⇔		(yrBP)	1 ɨ ض	2 ɨ ض
	Age (yrBP)	pMC			
IAAA-80831	170 ± 30	97.87 ± 0.32	101 ± 27	1695AD - 1726AD (21.5%) 1814AD - 1853AD (22.6%) 1868AD - 1893AD (15.8%) 1905AD - 1918AD (8.3%)	1682AD - 1735AD (27.3%) 1805AD - 1930AD (68.1%)
IAAA-80832	1,200 ± 30	86.16 ± 0.29	1,202 ± 27	780AD - 869AD (68.2%)	715AD - 745AD (5.5%) 767AD - 894AD (89.9%)

［#2368］［参考値］

^{14}C年代は，畝跡出土の炭化物（№１）が100±30yrBP，Ⅲｂ層出土の炭化物（№２）が1200±30yrBPである。№１の暦年較正年代（1σ）は江戸時代前期末から明治時代の前半であるが，安永ボラ層の下位から出土であることを考慮すると，江戸前期末から中期初に年代を絞り込むことが可能である。№２は平安時代前期前半頃に該当する。試料の炭素含有率は共に67%程であり，十分な値であった。化学処理および測定内容に問題は無く，妥当な年代と考えられる。

参考文献

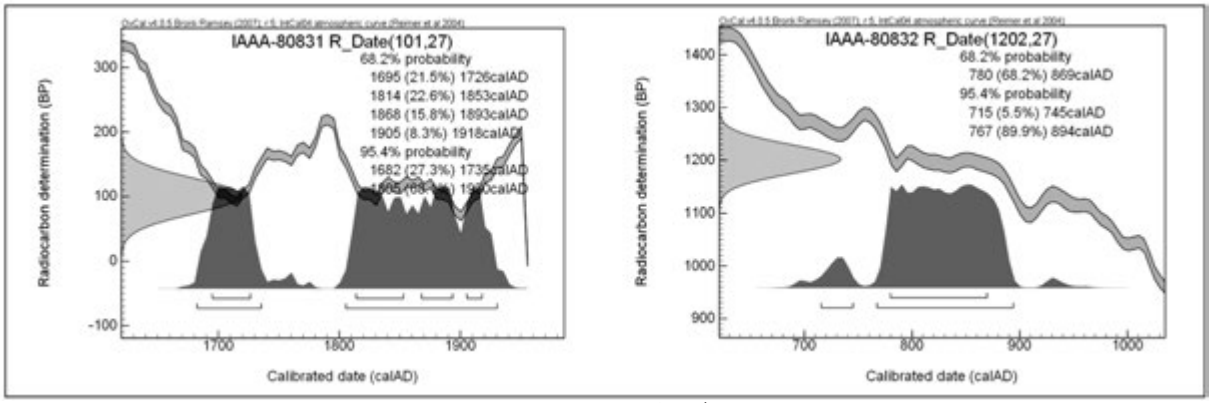
Stuiver M. and Polash H. A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058



第213図　暦年正年代データ(2)

4　㈱加速器分析研究所測定結果４（平成21年度実施）

①　測定対象試料

狩俣遺跡は，鹿児島県曽於市大隅町（北緯31°37′40″，東経130°56′35″）に所在し，標高約290mの台地上に位置する。測定対象試料は，土坑２出土炭化物（№11：IAAA-90896），竪穴住居跡出土炭化物（№12：IAAA-90897），合計２点である。

②　測定の意義　　遺構の年代を明らかにする。

③　化学処理工程

⑴　メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

⑵　酸処理，アルカリ処理，酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Ｎの塩酸(80℃)を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では１Ｎの水酸化ナトリウム水溶液(80℃)を用いて数時間処理する。なお，AAA処理において，アルカリ濃度が１Ｎ未満の場合，表中にAaAと記載する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Ｎの塩酸(80℃)を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。

⑶　試料を酸化銅と共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

⑷　液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素(CO_2)を精製する。

⑸　精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

⑹　グラファイトを内径１㎜のカソードに詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着する。

④　測定方法

測定機器は，３MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

⑤　算出方法

⑴　年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。

⑵　^{14}C年代（Libby Age:yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。この値は，δ^{13}Cによって補正された値である。^{14}C年代と誤差は，１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差(±1σ)は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

⑶　δ^{13}Cは，試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを示した値である。同位体比はいずれも基準値からのずれを千分偏差(‰)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により^{13}C/^{12}Cを測定した場合には表中に（AMS）と注記する。

⑷　pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。

⑸　暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は，下一桁を四捨五入しない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv4.1較正プログラム(Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

^{14}C年代は，№11，№12とも9530±50yrBPである。これらが採取された遺構は薩摩火山灰層上面で検出された。

炭素含有率は60%を超える十分な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

第38表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果⑷

					^{13}C ( ) (AMS)	^{13}C	
						Libby Age yrBP	pMC (%)
IAAA-90896	№.11			AAA	**-21.87 ± 0.50**	**9,530 ± 50**	**30.55 ± 0.17**
IAAA-90897	№.12			AAA	**-25.79 ± 0.59**	**9,530 ± 50**	**30.52 ± 0.18**

[#3067]

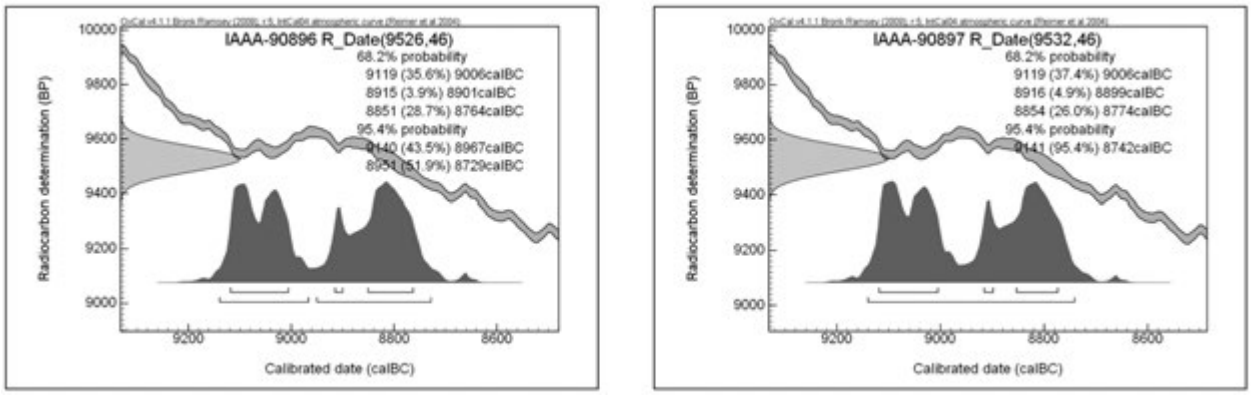
	^{13}C		(yrBP)	1σ ض	2σ ض
	Age (yrBP)	pMC			
IAAA-90896	9,480 ± 50	30.74 ± 0.17	9,526 ± 46	9119BC - 9006BC (35.6%) 8915BC - 8901BC (3.9%) 8851BC - 8764BC (28.7%)	9140BC - 8967BC (43.5%) 8951BC - 8729BC (51.9%)
IAAA-90897	9,550 ± 50	30.47 ± 0.17	9,532 ± 46	9119BC - 9006BC (37.4%) 8916BC - 8899BC (4.9%) 8854BC - 8774BC (26.0%)	9141BC 8742BC (95.4%)

[参考値]

参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion : Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19, 355-363
Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy : the OxCal Program,

Radiocarbon 37(2), 425-430
Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389
Reimer, P. J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058



第214図　暦年正年代データ(3)

5　パレオ・ラボ測定結果（平成20年度実施）

鹿児島県に位置する狩俣遺跡から検出された試料について，加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。試料の調製は廣田，瀬谷，Lomtatidze, Jorjoliani，測定は伊藤，丹生，小林が行い，報告文は伊藤，中村が作成した。

① 試料と方法

測定試料の情報，調製データは第39表のとおりである。試料は狩俣遺跡の炭化材２点である。

試料は調製後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクトAMS：NEC製　1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}C年代，暦年代を算出した。

第39表　測定試料及び処理

PLD-11049	H-51 24 No. 5	dry	(:1.2N, :1N, :1.2N)
PLD-11050	K L-26 27 No. 6	dry	(:1.2N, :1N, :1.2N)

② 結果

第40表に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値，慣用に従って年代値，誤差を丸めて表示した^{14}C年代，^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。暦年較正に用いた年代値は年代値，誤差を丸めていな

い値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には，^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また，付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお，暦年較正の詳細は以下の通りである。

③　暦年較正

暦年較正とは，大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動，及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することで，より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.0（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお，1σ暦年代範囲は，OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり，同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し，二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち，その確率が最も高い年代範囲については，表中に下線で示してある。

第40表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果(5)

	ə ^{13}C X	ض (yrBP±1ɨ)	^{14}C ض yrBP±1ɨ	^{14}C ض ╨ ض ⌐ ⇔ √ ض	
				1ɨ ض	2ɨ ض
PLD-11049 No. 5	-23.33±0.21	8747±37	8745±35	7937BC(2.4%)7928BC 7916BC(4.3%)7900BC 7837BC(61.5%)7679BC	7946BC(94.1%)7636BC 7623BC(1.3%)7614BC
PLD-11050 No. 6	-28.01±0.20	2846±26	2845±25	1047BC(58.3%)974BC 956BC(9.9%)941BC	1113BC(2.8%)1099BC 1089BC(92.6%)923BC

④　考察

試料について，同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。2σ暦年代範囲（95.4%の確率でこの範囲に暦年代が収まることを意味する）に着目して結果を整理する。年代値と考古学編年との対応について，縄文時代はキーリ・武藤1982と小林2008，弥生時代は春成・今村編2004，西本編2006，西本編2007を参照した。

狩俣遺跡の試料№5（PLD-11049）は7946-7636calBC(94.1%）および7623-7614calBC（1.3%）で，縄文時代早期中葉に相当する。試料№6（PLD-11050）は1113-1099calBC（2.8%）および1089-923calBC(92.6%）で，縄文時代晩期から弥生時代にかけての時期に相当する。

参考文献

Bronk Ramsey, C.(1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy：The OxCal Program.

Radiocarbon, 37, 425-430.
Bronk Ramsey, C.(2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
キーリ C.T.・武藤康弘（1982）縄文時代の年代．縄文文化の研究第１巻，雄山閣，246-275.
小林謙一（2008）縄文時代の暦年代．縄文時代の考古学２ 歴史のものさし 縄文時代研究の編年体系，同成社，257-269.
中村俊夫 （2000） 放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代．3-20.
西本豊弘編（2006）新弥生時代のはじまり第１巻 弥生時代の新年代，雄山閣，p.143.
西本豊弘編（2007）新弥生時代のはじまり第２巻 縄文時代から弥生時代へ，雄山閣，p.185.
春成秀爾・今村峯雄編（2004）弥生時代の実年代，学生社，p.253.
Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E.(2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

第２節 種実同定

１ ㈱加速器分析研究所測定結果１

① はじめに

鹿児島県に所在する狩俣遺跡では，植物遺体が出土している。これについてその種類を同定したので，以下にその結果を示す。

② 調査方法

0.5㎜メッシュの篩を用いて試料№５～９の土壌サンプルを水洗し，検出された植物遺体を実体顕微鏡にて観察し，その形態から種の同定を試みた。（すでに種実のみが検出された№４，試料№７以外は検出されなかった。）その際，石川茂雄（1994年），大井（1978年），北村・村田（1979年），中山・井之口・南谷（2000年）を参照した。

③ 結果

木本１種と不明１種が認められた。写真を示し，同定結果を第41表に記す。学名は北村・村田（1979年）によった。

第41表 種実同定結果(1)

試料№	出土地点	和 名	科 名	学 名	種類	部位	写真№
4	G-７区，土坑94号内	モモ	バラ	*Prunus Persica Batsch*	木本	核	1~3
5	Ⅰ-８区，畝状遺構内	－	－	－	土壌サンプル中に植物遺体を含まず	－	－
6	D-21区，畝状遺構内	－	－	－	土壌サンプル中に植物遺体を含まず	－	－

7	K-33区，畝状遺構内	不明	不明	不明	不明	種子	4
8	H-51区，畝状遺構内	－	－	－	土壌サンプル中に植物遺体を含まず	－	－
9	H-53区，畝状遺構内	－	－	－	土壌サンプル中に植物遺体を含まず	－	－

④　観察結果

１）モモの核である。全体は広楕円形を呈し，縁は稜をなす。また全面に短い溝が並ぶ。長径約2.0㎝～2.3㎝。

２）不明の種子である。表面には多数のへこみがある。直径約1.0㎜。

［参考文献］

石川茂雄（1994年）『原色日本植物種子写真図鑑』，石川茂雄図鑑刊行委員会
大井次三郎（1978年）『改訂増補新版日本植物誌　顕花編』，至文堂
北村四郎・村田　源（1964年）『原色日本植物図鑑　草本編』上，中，下保育社
北村四郎・村田　源（1979年）『原色日本植物図鑑　木本編』Ⅰ，Ⅱ保育社
中山至大・井之口希秀・南谷忠志（2000年）『日本植物種子図鑑』，東北大学出版会
牧野富太郎（1989年）『改訂増補牧野新日本植物圖鑑』，北隆社

※）本測定は，当社協力会社・㈱吉田生物研究所にて実施した。

１．モモの核（×1）　２．モモの核(×1)　３．モモの核(×1)　４．不明種皮(×10)

図版４　狩俣遺跡出土の植物遺体(1)

２　㈱加速器分析研究所測定結果２

はじめに

鹿児島県曽於市大隅町狩俣遺跡では，縄文時代早期の住居跡・土坑，近世の畑の畝跡・溝・古道などが検出されており，それらの遺構から種実が出土している。今回の自然科学分析調査では，種実の同定を実施し，植物利用等の状況を知る。

①　試料

試料は，23トレンチの住居跡内埋土（試料番号１～３）と土坑２号内埋土（試料番号４），I-64区のⅢｂ層（試料番号５），H-51区の畝間内埋土（試料番号６～８），集石24号の焼土内（試料番号９，10）より出土した種実10点である。

②　分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し，ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体を抽出する。現生標本および石川（1994），中山ほか（2000）等との比較から，種実遺体の種類と部位を同定し，

個数を数えて表示する。

③　結果

結果を第42表に示す。木本３分類群31個，草本８分類群26個，計57個の種実が検出されたほか，炭化した鱗茎（おそらくユリ科ネギ属やヒガンバナ科の類）や炭化材，菌類の菌核などが確認された。

種実の保存状態は，破片，摩耗，表面に土が付着しているなど，不良である。栽培種は，I-64区のⅢｂ層より，モモの核の破片26個（合計１個体未満），H-51区の畝間内埋土よりオオムギの胚乳７個，コムギの胚乳４個，ムギ類（オオムギとコムギの判断が困難なもの）の胚乳２個が確認され，炭化している。

栽培種以外は，木本は，23トレンチの住居跡内埋土や土坑２号内埋土より落葉高木のキハダ，クマノミズキが確認され，炭化している。草本は，H-51区の畝間内埋土よりオヒシバ，カヤツリグサ科，サナエタデ近似種，ヒユ科，キランソウ属，アキノノゲシなどの明るく開けた場所に

第42表　種実同定結果(2)

試料番号	備考	分類群	部位	状態		個数	備考
1	23トレンチ　住居跡内埋土	種実確認されず	－	－	－	－	炭化鱗茎(破片２;接合？),長さ12㎜,径９㎜
2	23トレンチ　住居跡内埋土	種実確認されず	－	－	－	－	炭化材(1)
3	23トレンチ　住居跡内埋土	クマノミズキ	核	炭化	破片	3	
4	23トレンチ　　土坑２号内埋土	キハダ	核	炭化	破片	1	
		クマノミズキ	核	炭化	破片	1	
5	I-64区　Ⅲｂ層　№6953	モモ	核	炭化	破片	26	合計１個体未満，最大12㎜
6	H-51区　畝間内埋土　サンプル４	オオムギ	胚乳	炭化	完形	5	
					破片	2	
		コムギ	胚乳	炭化	完形	4	
		ムギ類	胚乳	炭化	完形	2	オオムギまたはコムギ
		オヒシバ	種子	－	完形	2	
		カヤツリグサ科	果実	－	完形	1	
		ヒユ科	果胞	－	完形	2	
		キランソウ属	果実	－	完形	3	
7	H-51区　畝間内埋土　サンプル４	サナエタデ近似種	果実	－	完形	4	１個花被付着
		アキノノゲシ	果実	－	完形	1	
8	H-51区　畝間内埋土　サンプル４	種実確認されず	－	－	－	－	菌類の菌核
9	集石24号　焼土内	種実確認されず	－	－	－	－	炭化材(1)，不明炭化物
10	集石24号　焼土内	種実確認されず	－	－	－	－	菌類の菌核，不明炭化物

生育する，いわゆる人里植物に属する分類群が確認され，炭化していない。以下に，各分類群の形態的特徴等を記す。

＜木本＞

・モモ（*Prunus persica* Batsch）　バラ科サクラ属

核（内果皮）の破片が検出された。炭化しており黒色。完形ならば長さ1.5～2.5㎝，幅1.2～２㎝，厚さ1.2～1.5㎝程度のやや偏平な広楕円体で，基部は切形で中央部に湾入した臍がある。１本の明瞭な縦の縫合線上が発達し，背面正中線上に細い縦隆条が，腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。破片は最大で1.2㎝程度。内果皮は厚く硬く，表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり，全体として粗いしわ状にみえる。核の内側表面は平滑。

・キハダ（*Phellodendron amurense* Rupr.）　ミカン科キハダ属

核（内果皮）の破片が検出された。炭化しており黒色，長さ3.3㎜以上，幅2.7㎜，厚さ1.3㎜程

度のやや偏平な半広倒卵体。内果皮は硬く，表面には浅く微細な縦長の網目模様が配列する。

・クマノミズキ（*Swida macrophylla*（Wall.）Sojak） ミズキ科ミズキ属

核（内果皮）の破片が検出された。炭化しており黒色，完形ならば径3.5～4.5㎜程度の偏球体で基部に小さく浅い凹みがある。破片は，表面に一周する１本のやや幅広く浅い縦溝と２室に分割する隔壁に沿って割れた半分以下で，長さ2.9㎜，径3.7㎜程度。内果皮は硬い。炭化し表面の状態が悪いため，数本の細く浅い縦溝の配列は不明瞭。

＜草本＞

・オオムギ（*Hordeum valgare* L.） イネ科オオムギ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色，長さ6.3㎜，径2.7㎜程度のやや偏平な紡錘状長楕円体で両端は尖る。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝がある。背面は，基部正中線上に胚の痕跡があり，径1.5㎜程度の楕円状に窪む。胚乳表面には微細な縦筋がある。

・コムギ（*Triticum aestivum* L.） イネ科コムギ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色，長さ4.3㎜，径３㎜程度の楕円体。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝がある。背面は，基部正中線上に胚の痕跡があり，径1.5㎜程度の円状に窪む。胚乳表面には微細な縦筋がある。なお，頂部を欠損するなど遺存状態が悪く，オオムギとの判別が難しい個体をムギ類としている。

・オヒシバ（*Eleusine indica*（L.）Gaertn.） イネ科オヒシバ属

種子が検出された。黒褐色，長さ1.5㎜，径0.8㎜程度の三稜状狭倒卵体。20数個の細い隆条が基部の臍から放射状に配列する。

・カヤツリグサ科（Cyperaceae）

果実が検出された。灰褐色，長さ1.3㎜，径0.5㎜程度の三稜状狭倒卵体。頂部はやや伸び，基部は切形。果皮表面には微細な網目模様がある。

・サナエタデ近似種（*Polygonum* cf. *lapathifolium* L.） タデ科タデ属

果実が検出された。黒色，長さ2.1㎜，幅1.5㎜程度の偏平な円状二面体。頂部は尖り，２花柱を欠損する。基部は切形で灰褐色の萼がある。果皮表面は平滑で光沢がある。表面に花被が付着する個体もみられる。萼から長さ２㎜程度の線状の花被が数本伸び，先が２つに分かれ反り返る。

・ヒユ科（Amaranthaceae）

種子１個を包む果胞が検出された。種子は黒色，径1.3㎜程度の偏平な円盤状。縁は稜状で，基部は凹み臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が配列し，光沢がある。果胞は種皮と別組織で灰褐色，径1.7㎜程度。表面は粗面。

・キランソウ属（*Ajuga*） シソ科

果実が検出された。淡灰褐色，長さ1.7㎜，径1.1㎜程度の楕円体。腹面基部に長さ１㎜程度の大きな楕円形で表面は粗面，小突起が密生する着点痕がある。果皮表面には深い凹みによる網目模様が分布する。

・アキノノゲシ（*Lactuca indica* L.） キク科アキノノゲシ属

果実が検出された。黒灰黒色，長さ４㎜，幅2.3㎜程度の偏平な非対称倒卵形。頂部は尖り，白色の冠毛を欠損する。背腹両面の正中線上に１個の縦隆条があり，両縁は翼状。果皮表面には微細

な網目模様と短い伏毛状体が横に多数並び，鱗状模様をなす。

④　考察

モモ，オオムギ，コムギは，栽培のために大陸より持ち込まれた渡来種とされる。I-64区のⅢｂ層より確認されたモモは，観賞用の他，果実や核の中にある種子(仁)などが食用，薬用，祭祀等に広く利用され，弥生～古墳時代以降多数の遺跡出土例がある。H-51区の畝間内埋土より確認されたオオムギ，コムギなどのムギ類は，胚乳が食用される植物質食糧である。これらの栽培種の可食部である種実が，炭化した状態で出土したことから，本遺跡周辺域における利用と，火熱を受けたことが推定される。

栽培種以外の分類群では，木本類は，23トレンチの住居跡内埋土や土坑２号内埋土より，キハダ，クマノミズキが確認された。これらは，山地の沢沿いの林内などに生育する落葉高木であることから，本遺跡周辺域の森林に生育していたものに由来することが考えられる。また，炭化していることから，火を受けたことが推定される。

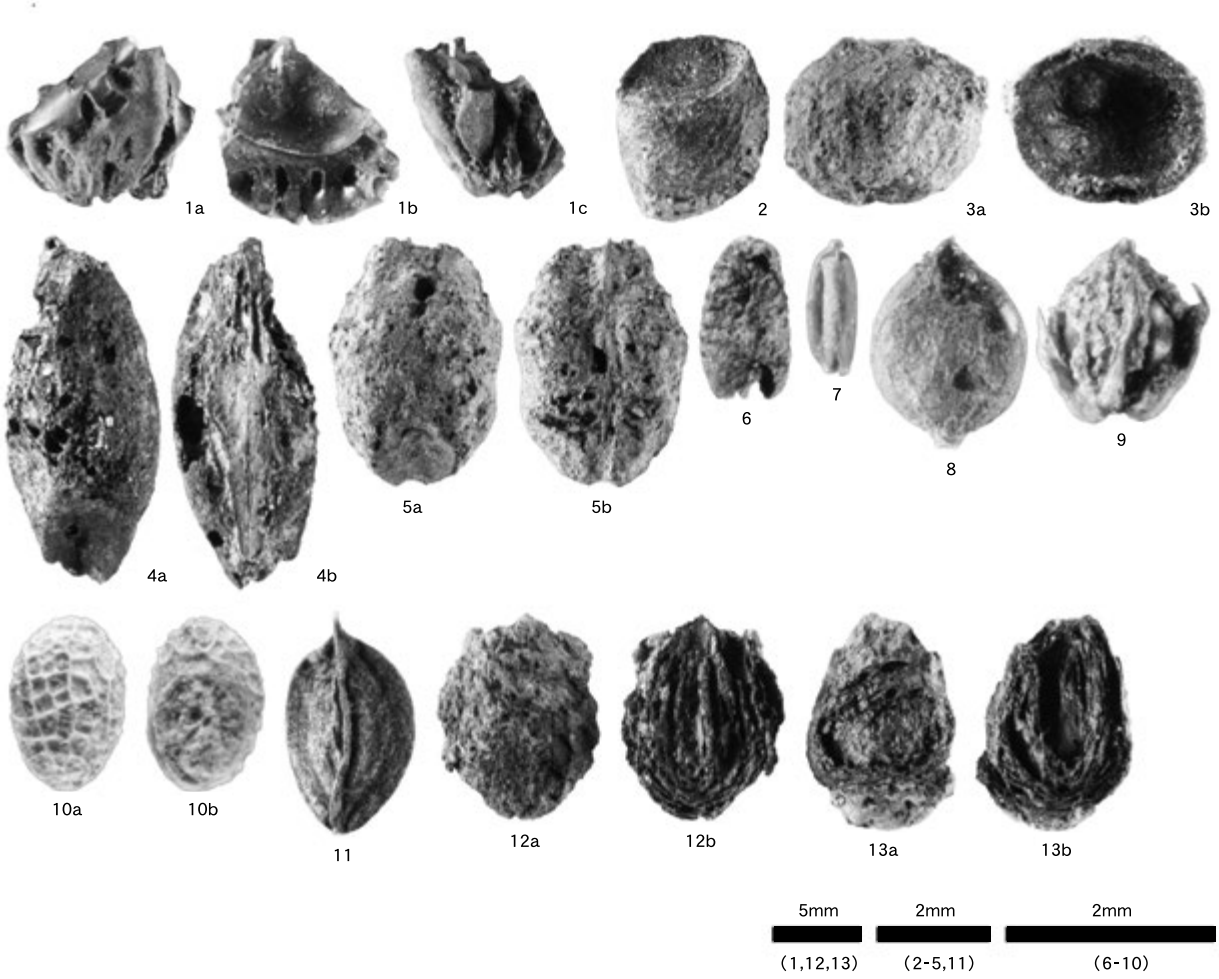
草本類は，H-51区の畝間内埋土より，オヒシバ，カヤツリグサ科，サナエタデ近似種，ヒユ科，キランソウ属，アキノノゲシなどの人里植物が確認された。これらは，道ばたや畑などの明るく開けた場所に普通に生育する分類群であることから，調査区周辺域の草地環境に由来するものと考えられる。ただし，保存状態が良好で炭化していないことから，土壌の撹乱などにより後代のものが混入した可能性がある。なおこの点に関しては，遺跡から出土する種実のうち，低湿地以外から出土した炭化していない種実は，炭化物と同様に扱うには問題があるとの指摘がある（吉崎，1992など)。

以上，確認された種実の種類について検討したが，今回受領した添付資料等には各試料の時代時期等に関する情報がなく，この点に関する検討は今後の課題として残された。

引用文献

石川　茂雄，1994，原色日本植物種子写真図鑑．石川茂雄図鑑刊行委員会，328p.
中山　至大・井之口希秀・南谷　忠志，2000，日本植物種子図鑑．東北大学出版会，642p.
吉崎　昌一，1992，古代雑穀の検出．月刊考古学ジャーナル，№355，2-14.

※）本測定は，当社協力会社　パリノ・サーヴェイ株式会社にて実施した。



図版５　狩俣遺跡出土の植物遺体(2)

1. モモ 核（I-64 IIIb層 №6953 試料番号5）
2. キハダ 核（23T 2号 試料番号4）
3. クマノミズキ 核（23T 住居跡 南東1/4床部埋土 試料番号3）
4. オオムギ 胚乳（H-51 畝間内埋土 サンプル4 試料番号6）
5. コムギ 胚乳（H-51 畝間内埋土 サンプル4 試料番号6）
6. オヒシバ 種子（H-51 畝間内埋土 サンプル4 試料番号6）
7. カヤツリグサ科 果実（H-51 畝間内埋土 サンプル4 試料番号6）
8. サナエタデ近似種 果実（H-51 畝間内埋土 サンプル4 試料番号7）
9. ヒユ科 果胞（H-51 畝間内埋土 サンプル4 試料番号6）
10. キランソウ属 果実（H-51 畝間内埋土 サンプル4 試料番号6）
11. アキノノゲシ 果実（H-51 畝間内埋土 サンプル4 試料番号7）
12. 鱗茎（23T 住居跡 北西側1/4埋土 試料番号1）
13. 鱗茎（23T 住居跡 北西側1/4埋土 試料番号1）

第Ⅷ章　まとめ

狩俣遺跡の調査の結果，Ⅲａ層から古代～中世，Ⅲｂ層から縄文時代晩期～古代，Ⅳ層から縄文時代後期～晩期，Ⅶ～Ⅷ層から縄文時代早期の遺物が出土した。このことから，本遺跡は縄文時代早期から近世まで続く複合遺跡であることが明らかとなった。また，各時代の包含層からは，集石遺構，落とし穴，古道，溝状遺構，畝状遺構など多種な遺構も検出された。

古墳時代の土器は，谷部と中央部で出土した成川式土器のみである。口縁部や底部など良好に残存するものであるが，縄文時代，古代の遺物量と比べると極端に少なく，遺構も発見されていないことから，弥生時代～古墳時代は本遺跡の空白の時代と想定される。

以下，縄文時代，古代～中世を中心に検出遺構，出土土器，出土石器について考察を行う。また，本遺跡のほぼ全域から検出された畝状遺構についても考察を加える。

第１節　検出遺構

１　縄文時代

集石遺構は全てが北部または中央部の台地上で検出され，23トレンチの２基を加えて，総数25基である。未調査部分も多く残されているが，検出範囲が広範囲であり，本遺跡の台地上全体に多くの集石遺構が広がっていると想定される。集石遺構の形態で最も多いのは，掘り込みを持たず礫が一定範囲に散在するタイプで11基である。次いで，掘り込みを持たず礫が集中するものが６基，集石内に集中部と散礫部を併せ持つものが５基，掘り込みを持ち散礫状に広がるものが２基，掘り込みを持ち礫が集中するものが１基である。集石下位に掘り込み部や炭化物の確認はされていないものがあっても，構成礫の多くが赤化したり，熱によると判断される破砕が認められることから，集石遺構使用後の残骸として取り扱っている。

25基中３基が黄褐色軽石層（桜島火山灰Ｐ11）直下のⅦ層のもので，それ以外はⅧ層黒色土からの検出である。縄文時代早期の遺物出土点数は，Ⅶ層が420点，Ⅷ層が364点と大きく分かれているので，縄文時代早期は少なくとも２つの文化層が存在したと想定される。両時期とも尾根状に伸びる台地の縁辺部に集石遺構の集中が見られる。（第94図，第10，11表参照）

２　古代～中世

北部調査区では，古代～中世のものと思われる古道や溝状遺構が集中して検出された。北側の台地から本遺跡中央の台地へ向かって野首状に狭まる地点であり，両側は急峻な崖に挟まれている。

古道の硬化面は時間差を持ちながら，現在の市道とほぼ同じようなルートで数条が重なるようにして検出している。台地部は中世～近世にかけての削平のため遺構，遺物の発見は少ないが，南部では，斜面が緩やかになる地点の台地部からの流れ込みと想定される８世紀後半～10世紀代の土師器や須恵器の坏や埦，皿，甕などの生活雑器が土器溜りとなって大量に出土している。さらに，古代の掘立柱建物跡，畝状遺構，大型土坑が隣接してセットで検出されていることから，同じような集落活動が台地部全体で行われていた可能性が高い。これらの古道は，集落での生活のため人々の往来や物流が頻繁に行われていたことを物語る。（付図：古代～中世参照）

その後，11世紀代からは集落としての機能は失われ，15世紀代以降は畠作地帯へと変化していく。畝状遺構の変遷や栽培品目等については第４節にてまとめる。

第２節　出土土器

１　縄文時代

本遺跡の縄文時代の土器については，早期から晩期までⅠ類からⅩⅦ類までの17種類に分類される。Ⅰ類からⅫ類土器までが縄文時代早期の土器であり，遺物量の大半を占める。ⅩⅢ類からⅩⅤ類土器が縄文時代前期，ⅩⅥ類土器が縄文時代後期，ⅩⅦ類土器が縄文時代晩期である。

Ⅰ類土器は貝殻条痕文を主とする円筒土器で，前平式土器に比定されるものである。口唇部形態及び貝殻条痕の施文により２種類に細分される。Ⅰ－ａ類土器は口唇部が鋭角で，貝殻条痕が斜行するもの，Ⅰ－ｂ類土器は，口唇部が平坦で貝殻条痕が横位に施されるものである。

Ⅱ類土器は，貝殻条痕文の上に沈線文等を施文する二重施文土器で，志風頭式土器に比定されるものである。志風頭式土器には，円筒式土器と角筒式土器があるが，本遺跡では角筒式土器のみが出土している。

Ⅲ類土器は１点のみの出土である。貝殻刺突文を施す円筒土器で，加栗山式土器に比定される。

Ⅳ類土器も出土量が少なく，２点のみの出土である。横位の貝殻押引文が施文される円筒土器で，吉田式土器に比定される。

Ⅴ類土器は，口縁部に貝殻刺突文を施し，胴部には貝殻条痕文横位・綾杉状等に施文するもので，石坂式土器に比定される。

Ⅵ類土器は，貝殻刺突文を主体とするもので，下剥峰式土器に比定される。

Ⅶ類土器は，口縁部に横位の貝殻条痕文を施すもので，中原式土器に比定される。

Ⅷ類土器は１点のみの出土である。ヘラ状工具による斜格子状の文様が施されるものであるが，型式の不明なものである。

Ⅸ類土器は押型文土器であるが，１個だけ押型文と貝殻条痕文の２種類を施文するものがある。Ⅸ－ａ類土器は，山形押型文及び楕円押型文を施すものである。特殊なものとして，「いちご」と称されるものがある。松の木などの突起物を持つ枝による回転施文がなされたと考えられるもので，Ⅸ－ｂ類土器は口縁部から胴部中位に山形押型文，胴部中位から底部に貝殻押型文を施すものである。

Ⅹ類土器は，完形土器１点と破片１点で，手向山式土器に比定される。完形土器は縄文原体を巻き付けた棒を回転施文したと考えられる特殊な施文であり，胴部の屈曲部もなだらかなものである。

Ⅺ類土器は２点のみの出土である。外反する口縁部で，連続刺突と沈線文が施されるものであり，平栫式土器に比定される。

Ⅻ類土器は，微隆起突帯を巡らす壺型土器で，塞ノ神式土器に比定される。

ⅩⅢ類土器は，みみず腫れ突帯を巡らし，胴部は貝殻条痕が施されるもので轟式土器に比定される。

ⅩⅣ類土器は，短沈線文を主とするもので曽畑式土器に比定される。

ⅩⅤ類土器は，胴部に貝殻復縁による連点文が施されるもので，深浦式土器に比定される。

ⅩⅥ類土器は，胴部に沈線文を施すもので宮ヶ迫式土器に比定される。沈線のやや太いものと細いものに分けられる。

ⅩⅦ類土器は，深鉢形土器（ⅩⅦＡ類），浅鉢形土器（ⅩⅦＢ類），鉢形土器（ⅩⅦＣ類）の３種類の器種に分けられる。鉢形土器には，底部に組織痕が認められるものもある。縄文時代晩期の最終末段階に位置するものと思われる。

2　古代

土師器を中心とした古代の遺物は，中央部の台地南側から南部斜面にかけて多量に出土した。大部分が坏や埦，皿など供膳具と，甕などの貯蔵具で占められ，出土遺物の口径，底径，器高，器形などの形態により時期的な変遷がうかがえる。土師器についてはこれまでの研究により口径や底径が大きなものから小さなものへ，体部が直線的なものから丸みをもつものへ変化していくことが知られ，鹿児島県内出土の土師器については中村和美により編年が提示されている。（中村1994・1997）

本遺跡出土の坏は，Ⅰ類の直線的な体部を持つものと，Ⅱ類の丸みのある体部を持つものに分けられる。数量的にはⅠ類がやや多く，口径約12㎝，底径約６㎝，器高５㎝前後と底径が大きく深さもあり，須恵器模倣形態を残すものも含まれる。Ⅱ類も器高が約４㎝と低くなるが大型の坏であり，小皿のような器高の低い坏はほとんど見られない。また，底部切り離しは全てヘラ切り離しである。これらの特徴から，８世紀中頃から９世紀代が主体であり，10世紀中頃まで続くと思われる。

内黒土師器の出土点数も多量であり，Ⅰ類の直線的に開く器形のものが多い。埦は器壁が厚く広めの底部に「ハ」の字状に開く短めのしっかりした高台が付くものが主流である。全てが埦ではなく坏も見られることから坏の年代とほぼ同じであり，11世紀までは下らないと思われる。

須恵器の出土点数は少ないが，坏，埦，高坏，鉢，壺，甕など多種である。作りもしっかりしており甕など実用的なものも多いことから，他の地域との出入りが多い人々によってもたらされたと想定される。遺物は８世紀後半から９世紀代のものがほとんどである。

墨書，線刻土器は計10点で，墨書が８点，線刻が２点である。記載部位は，底部外面が２点，体部外面８点であり，判別できたものはわずかである。記載などから本遺跡の性格を知ることは難しいが，特徴としては墨書８点中３点が内黒土師器であった点である。多くの遺跡では，墨書される器は土師器が圧倒的に多く内黒土師器は割合は少ない中で，記載率37.5%はかなり高いと言える。

焼塩土器は中央部の南側から南部を中心に，小破片も含め439個出土している。全て広口の小鉢形を呈したもので，内面に布圧痕，外面に指頭圧痕の多数残る簡素なものである。周辺の他遺跡と比べても出土量が膨大であることから，海から遠く離れた本遺跡でなぜこれだけの焼塩土器が見つかったのか疑問である。畠作に従事する人々が取り寄せたと考えるよりも，生産地から大量の塩が組織的に運ばれてきたと想定されることから，出土した土師器や須恵器の形態変化と同じように，他の地方との活発な交流を感じさせる遺物である。

また，本遺跡出土の土師器埦には，特徴的な形態が認められる。それは，欠損した埦の高台に残る調整痕である。高台の一部が欠損した後も，周りを打ち欠いて高さを調節し，刀子などの刃物で削りながら短い高台に再び仕上げている。ヤスリや砥石等で磨りながら調整したものも見られ，仕上げ後は食器として再び利用したと想定される。当時の人々がものを大事にし，破損後も再利用できるものは補修を重ねながら長く使用していた実態を感じることができる。

これらの古代の遺物の特徴から，地域によって異なる様相を示すこともあるので一概には言えないが，本遺跡には少なくとも８世紀中頃から10世紀代までの集落が存在したと考えられる。ただし，７世紀以前や11世紀以降については不確定である。律令制度が全国に定着した時期と重なることから，物資の移動に伴う人々の交流を官衙施設との関係も視野に入れた観点から考える必要があろう。

今回の調査は遺跡全体から見れば狭い面積であるので，これからの調査結果に期待したい。

3　中世～近世

中世～近世の遺物の全体量に対する割合は非常に少なく，図化した遺物総点数929点中32点でわずか3.4%である。前述の通り，本遺跡では８～10世紀を中心に盛んに人々の生産活動が営まれていたと思われるが，1471年の桜島の大噴火により大隅半島北部には大量の噴出物（文明ボラ）が厚く堆積し，生産活動はほぼ壊滅したと想定される。その後，しばらくの間は放置され荒れ地であったと思われるが，台地部では大量なボラの除去，耕作地の基盤整地などに多くの時間を費やし，再び生産活動が軌道に乗るには長い年月が必要であったと推測される。その過程で居住域と生産域が分けられ，本遺跡は大規模な畠作を中心とした生産域に限定されたことを遺物量が示している。また，1779年の安永の大噴火でも，大量の噴出物が本遺跡に降り注ぎ大きな被害が出たと想定され，中世～近世の苦難の時期を乗り越えて現在に至っている。

第３節　出土石器

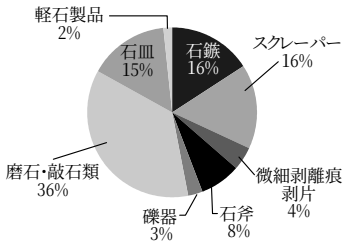
1　縄文時代早期

縄文時代早期該当の石器はⅦ・Ⅷ層から出土している。

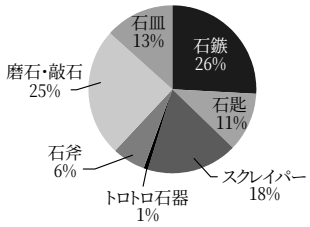
本報告書では石器と認定したものは全て掲載しており，その石器の組成が右の表である。狩俣遺跡とすぐ北側に位置する建山遺跡の石器組成をあげてみた。２つの遺跡の石器組成を比べながら考察してみよう。縄文時代早期の石器組成の特徴としては，どちらの遺跡も，木の実の製粉具として使用されたと考えられる磨石・敲石・石皿の割合がいずれも高いということがあげられる。

石器の分布については，特にこれといった特徴を見いだすことはできなかった。ただ，狩俣遺跡のスクレイパーについては，13年度の確認調査で住居跡が検出されている23トレンチからのみ出土しているのが興味深い。このことからも，生活の中心は23トレンチ付近であったことが推定できる。

縄文時代早期の石器組成
（狩俣遺跡）



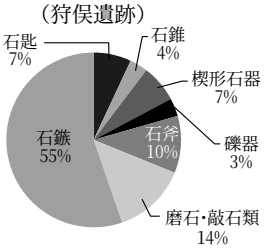
縄文時代早期の石器組成
（建山遺跡）



2　縄文時代晩期

縄文時代晩期該当の石器はⅢ・Ⅳ層から出土している。早期と比べると，両遺跡ともに石鏃の割合が半分近くを占めている。その一方で，磨石・石皿の割合がかなり減っている。このことから，縄文時代晩期には，この遺跡の周辺が生活の場というよりも，狩猟の場へと変遷していったことが推定される。

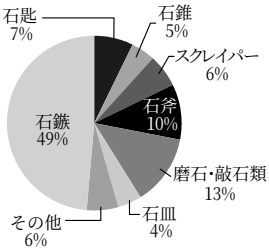
縄文時代晩期の石器組成
（狩俣遺跡）



3　古代

古代の遺物としては，軽石製品が出土している。破損が激しく用途を特定する事は難しいが，熱を受けているものがみられる。このことから，加工のしやすさを活かし，軽石で炉を組んだことも想定できるのではないだろうか。

縄文時代晩期の石器組成
（建山遺跡）



第４節　畝状遺構

本遺跡の畝状遺構は，遺構の特徴から19群が発見された。これら19群を検出された層位や状況，埋土などから分類し，畝状遺構の変遷を以下のようにまとめた。（第215図参照）

ここでは，畝状遺構の変遷，栽培作物，調査方法についてまとめる。

新旧	時代	検出面	谷　部	北　部	中　央　部	南　部
（旧）	古代	Ⅳ				畝13
	中世	Ⅲａ	畝２	畝１	畝11	畝14, 15, 16, 17, 18
	文明ボラ（Ｐ３・1471年）					
	中世～近世	Ⅳ～Ⅱ		畝３ 畝４Ａ～Ｃ	畝５，６，８ 畝10Ａ～10Ｃ 畝９Ａ～９Ｃ 畝７	
	近世	Ⅰｃ			畝12	畝19
	安永ボラ（Ｐ２・1779年）					
	大正３年（Ｐ１・1914年）					
（新）	現　代　の　耕　作　土					

第215図　狩俣遺跡　畝状遺構変遷図

１　変遷について（第215図，第29表）

第２節で述べたように，律令制度が定着した８世紀中頃から本遺跡台地部には集落が形成されていたと想定されるが，大規模な集団ではなく各戸別単位で，しかも斜面は利用されず平地の狭い面積を耕作していたと考えられる。（畝状遺構13）

その後，地名にもあるような在地領主の演習場である「狩場・狩倉」として利用されていた可能性もあるが，10世紀後半から荘園整備が本格化し大規模な畠地利用の時代へと変化していくと，集落は住居域を近隣の便利な場所へ移し，本遺跡周辺は集団により管理された畠地に利用されていく。しかし，生産性向上のため平地のみならず谷間の斜面域まで開墾して畠地にしているが，人目につきにくい谷部の畠地部分が実際の租税対象の耕作地として認識されていたかは疑問であり，この地方の支配者が隠し畠として私財を増やしてきた可能性は否定できない。（畝状遺構１，２，14～18）

1471年の厚く降り積もった桜島噴出物（文明ボラ）により生産活動は途絶え，しばらくの間荒廃したと想定される。その後，再び畠地として利用するために，以前の土地利用をさらに向上させ，台地部を中心に大規模なボラ抜き作業を行い，より生産効率を高めるため削平を行いながら平坦化し，耕作面積を広げていった。そして，境界溝などにより区画整理を行いながら畠地の大規模化を進めたことが，牛馬などの道具を利用した規則的に整然と並ぶ大型の畝状遺構から推測される。（畝状遺構４，５，６，８，10）また，畠形態を変えることで生産品目の多種化にも取り組み，生産性は飛躍的に向上したと思われる。

中世～近世にかけては台地部が生産の中心であり，一部を除いて（畝状遺構３）斜面については文明の大噴火以来利用されていない。しかし，斜面に流れ込んだ堆積物が長期間の自然堆積により平坦に近い緩斜面が形成された。1779年の桜島噴出物（安永ボラ）が本遺跡に降り注いだ頃には，台地部だけではなく，斜面も再び利用されていた痕跡も確認されている。（畝状遺構12，19）

2　栽培作物について（第215図，第41，42表，図版４，５）

本遺跡の畝状遺構で栽培されていた作物は何であるか，特に斜面の等高線に合わせるようにして作られた小型の楕円形を呈するものについては最大の疑問である。ここでは，文明ボラを埋土の主体とする中世の畝状遺構について，科学分析の結果や指導助言の内容を含めて考える。

埋土の主体は軽石層であり，埋土中より有力な植物遺体は検出されなかった。そこで，畝間底面の土壌サンプルを計５ヶ所採取し種実同定を行ったが，植物遺体は発見されなかった。（第41表）その後，採取したサンプルより植物遺体らしき個体を抽出し同じく種実同定を行った結果，炭化した大麦または小麦が発見された。（第42表）しかし，個体数が非常に少なく炭化しているので，流れ込みの可能性も捨てきれない結果となり確証を得られなかった。

次に，畝状遺構の立地や形状から考えてみるといくつかの特徴がある。畝状遺構16，17で分かるように，楕円形を呈する畝状遺構は斜面のみであり，同じ時代であっても平地では現在と同じような小溝状を呈し，麦などの穀類を栽培していたと考えられる。（第196図参照）

続いて斜面に作られた畝状遺構が水田か畠かと考えると，シラス台地上に厚いテフラが堆積してできた黒色土に作られているため，慢性的水不足，排水過良，降雨時の水食，乾燥時の風食，塩基やリンなど栄養分の欠乏など決して耕作条件が良いとは言えない。このような条件の他に，標高200m前後に湧水点がありそこから田頭となる水田が広がっていることから，水田である可能性は低い。（斜面の標高は230～270m程度）

畠地である斜面に作られた畝状遺構の特徴としては，①ほぼ等高線に沿っている，②南側の日当たりの良い斜面，③畝間の間隔が非常に狭く隣接している，④畝間の底部に掘り込んだ小さな凹みがあることが言える。①については上方からの水分が溜まりやすく，作物残渣や落ち葉，課程からの廃棄物やし尿などを投入して養分補給がしやすい，②については冬でも日射を受けやすく，桑や果樹などの栽培に適している。③については畝を作り作物を栽培したとすると畝部分が非常に狭くなり移動の際に使用する畦幅の確保も難しく作物を栽培する状況ではなくなる。④については整地や盛土を均一にする必要のあるイネ科やマメ科などの穀類の可能性は低い。

これらの特徴から考えると，平地に見られるような畝を作る方法ではなく，楕円形を呈する畝間単位で作物は栽培され，作物としては穀類ではなく種物すなわち里芋などの栄養繁殖植物の栽培痕と考えるのが妥当である。「入来院文書」の15世紀末の資料では，畠物として麦，麻芋，芋などの貢納物として見え，その他にも養蚕のための桑が広く植えられていたことが分かっていることから，本遺跡でも平地では麦などの穀類，斜面では芋類などを栽培していたのではないかと想定される。

3　調査方法について

本遺跡の畝状遺構は，遺跡全体に広がりを持ち，時代の経過による変遷が立地や形態に強く表われている貴重な資料となった。しかし，発掘調査の方法や科学分析の有効的な活用などで多くの課題も残った。遺構内遺物がほとんど見られない状況では，畝状遺構の検出が非常に重要な情報となる。検出面からあるがままの露出作業に入る際，掘り込んだ農具痕や作物の痕跡，人や牛馬の足跡などの情報を見逃さないためにも，自らの足跡や一輪車の轍などが加わらないように注意する必要がある。また，検出後の風化や劣化が急激に進行するため，実測や所見，記録写真は露出した範囲を当日中に処理し，正確な情報の時間経過による変形や変質を防ぐことが大事である。

Ⅲ　建山遺跡

第Ⅰ章　調査の経緯

第１節　調査に至るまでの経緯

東九州自動車道建設に伴い，埋蔵文化財の取り扱いについて交わされた鹿児島県教育委員会と各開発関係機関との協議等の経緯については，Ⅰ－第１章に記されたとおりである。その経緯を受けて建山遺跡は平成17・18年度に用地買収済みであった部分の確認調査・本調査を行った。

第１図に建山遺跡における各年度の調査範囲図を示す。

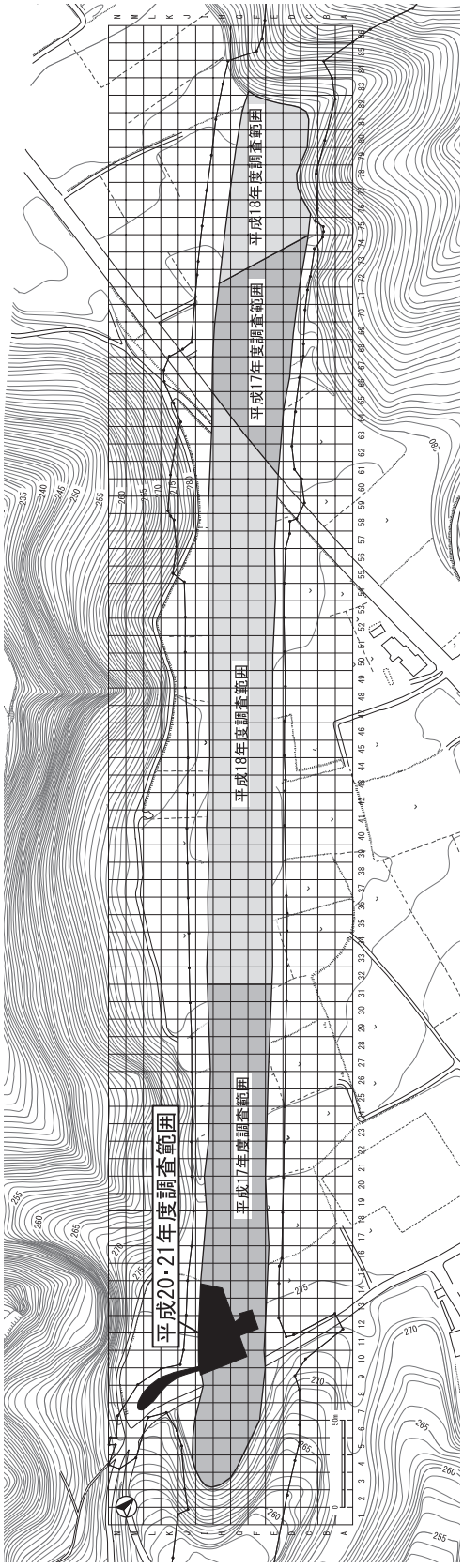
平成17年度の確認調査の結果，遺跡は全域に広がることが明らかとなり，引き続き遺跡の南端部及び県道63号線の北側部分（一部）の本調査を実施した。また，平成18年度は遺跡の北端部及び中央部の本調査を実施した。

調査の結果，シラス直上のⅫ層を中心とするナイフ形石器文化やＸ層を中心とする細石刃文化の遺物，縄文時代早期の竪穴住居跡２軒，竪穴状遺構２基，連穴土坑１基，土坑10基，集石遺構30基，落とし穴13基等の遺構の他，多数の土器や石器などの遺物が出土した。また，Ｖａ層から縄文時代前・中期の遺構・遺物が出土している。

上記の調査成果については，平成20年度に整理作業と報告書作成作業を行い，「鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（139）建山遺跡　西原段Ⅰ遺跡　野鹿倉遺跡」として報告書を刊行した。

さらに平成21年３月，用地問題の解決に伴い，急遽，未調査部分について発掘調査を実施することとなった。調査は年度内の完了を目指して行ったが，縄文時代早期の竪穴住居跡が発見されたこと，また，隣接する用地内の掘削された断面において，薩摩火山灰に黒色土の落ち込みが認められ，竪穴住居跡の可能性が高く調査が必要と判断されたことなどから，平成21年４月まで調査を延長することとなった。

調査は平成20年度が２月23日から３月19日の実働16日間，平成21年度が４月13日から４月24日の実働10日間行った。



第１図　建山遺跡調査範囲図

第２節　調査の組織

１　平成20年度（本調査）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，鹿児島県土木部高速道対策室		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	宮原　景信
調査企画	〃	次長兼総務課長	平山　　章
	〃	次長兼南の縄文調査室長	池畑　耕一
	〃	調査第一課長	彌榮　久志
	〃	主任文化財主事兼	
	〃	調査第二課第一調査係長	中村　耕治
調査担当	〃	文化財主事	遠矢　勝幸
	〃	文化財主事	木内　敏生
事務担当	〃	総務係長	紙屋　伸一
	〃	主査	五百路　真

２　平成21年度（本調査・報告書作成）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，鹿児島県土木部高速道対策室		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	山下　吉美
調査企画	〃	次長兼総務課長	齊藤　守重
	〃	次長兼南の縄文調査室長	青﨑　和憲
	〃	調査第二課長	彌榮　久志
	〃	主任文化財主事兼	
	〃	調査第二課第一調査係長	長野　眞一
調査担当	〃	文化財主事	池畑　耕一
	〃	文化財主事	長﨑慎太郎
作成担当	〃	文化財主事	大久保浩二
	〃	文化財研究員	藤島伸一郎
事務担当	〃	総務係長	紙屋　伸一
	〃	主査	髙﨑　智博
企画委員	〃	文化財主事	永濵　功治

報告書作成検討委員会　平成21年12月11日　山下所長ほか　９名

報告書作成指導委員会　平成21年12月２日　青﨑次長ほか　２名

遺物指導	鹿児島大学法文学部	准教授	本田　道輝

第３節　調査の経過

調査の経過は，日誌抄により週単位で略述する。

１　平成20年度

平成21年２月18日（水）～20日（金）

環境整備，G～M－７～14区重機による表土剥ぎ。G～M－11～14区Ⅶ層調査。

平成21年２月23日（月）～25日（水）

環境整備，G～M－７～10区重機による表土剥ぎ。G～Ⅰ－11～14区Ⅶ層調査。

平成21年３月２日（月）～６日（金）

G～Ⅰ－11～14区Ⅶ層調査，重機による表土剥ぎ。　土坑１号検出・写真撮影・掘り下げ。

グリッド杭打ち。

平成21年３月９日（月）～13日（金）

H～Ⅰ－11～14区下層確認トレンチⅧ層掘り下げ・H～Ⅰ－11～14区Ⅶ層遺物取り上げ。

H～Ⅰ－12～14区Ⅸ層上面検出・Ⅷ層遺物取り上げ・コンター図作成。H－12区１号落とし穴実測。

Ⅰ－10区２号落とし穴検出状況写真撮影。Ⅰ－12～14区土層断面図実測。

平成21年３月16日（月）～19日（木）

G～Ⅰ－11区Ⅸ層上面検出。G～Ⅰ－９～10区Ⅶ層上面検出・Ⅶ～Ⅷ層調査・遺物取り上げ。

Ⅸ層上面検出。H－12区１号落とし穴実測。Ⅰ－10区２号落とし穴実測・配置図作成。

Ⅰ－11区１号住居跡検出状況写真撮影。Ⅰ－10～11区土層断面図作成。

H～Ⅰ－10～12区Ⅸ層上面コンター図作成。G～Ⅰ－10～14区調査範囲図作成。

１号住居跡配置図作成。

２　平成21年度

平成21年４月13日（月）～17日（金）

調査区全景清掃・写真撮影。付け替え道トレンチ設定・掘り下げ。

３号住居跡検出・周辺調査・遺構掘り下げ・遺物取り上げ。

４号住居跡周辺調査・遺構検出・遺物取り上げ・写真撮影・遺構掘り下げ。

３号落とし穴状遺構実測・写真撮影。付け替え道路敷き部分（調査時の呼称は「枝道」）内のトレンチ掘り下げ。調査範囲図作成。

平成21年４月20日（月）～24日（金）

１号住居跡掘り下げ。出土状況写真撮影・平面実測・遺物取り上げ。

断面写真撮影・遠景写真撮影。

２号住居遺物出土状況写真撮影・取り上げ・実測完了。

付け替え道路敷き部分掘り下げ・遺物出土状況実測・遺物取り上げ。

Ⅷ層上面コンター図作成。

Ⅴａ層調査・遺物取り上げ。遺跡全景写真撮影，

調査終了。

第Ⅱ章　調査の概要

第１節　調査の方法及び層位

調査はＧ～Ｉ－９～14区の本線敷及びＩ～Ｍ－７～10区の付け替え道路敷き部分の1120㎡を対象として実施した。それに加えて，当初は調査対象としていなかったＦ・Ｇ－12・13区（平成18年の調査終了後，引き渡しを行った部分の法面）において竪穴住居跡らしきものが見つかったため調査対象に加えた。調査対象面積は1304㎡となった。第２図に今回の調査区グリッド図を示す。

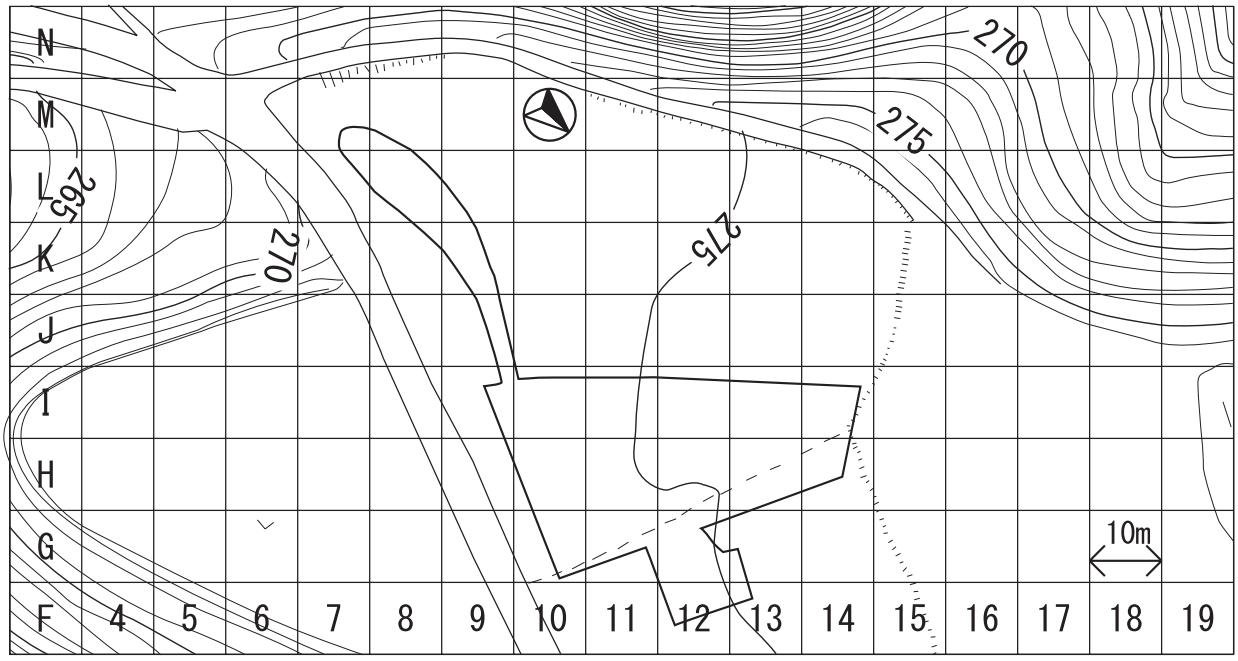
Ｉ層（現表土層）及び造成土層（天地返し）と無遺物層と確認されたＶｂ層については重機により掘削し，遺物包含層及びその可能性のある層については，人力による掘り下げを行った。

グリッドの設定は平成18年度までのものを踏襲し，西日本高速道路株式会社により設定された高速道路センター基準杭のSTA243とSTA243＋80の２点を結ぶ直線を基準軸として，東から西側に向かって１，２，３・・・，北から南側に向かってＡ，Ｂ，Ｃ・・・とする10m間隔のグリッドを設定した。

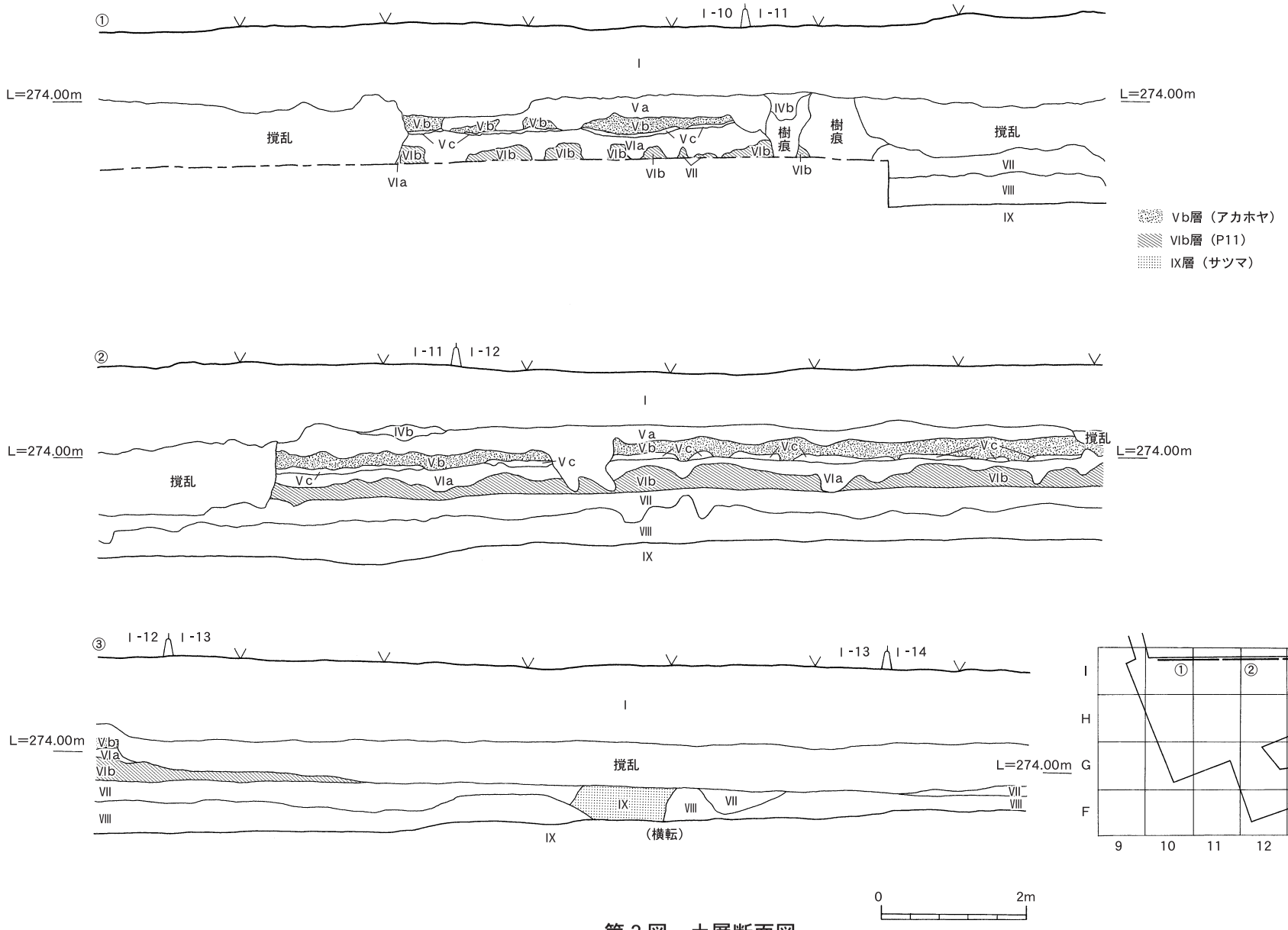
基本的な層位については，Ｉ－第Ⅴ章層位の項（９頁参照）に記されている通りである。

Ⅴ層はアカホヤ火山灰で，ａ層の二次堆積層とｂ層の火砕流一次堆積層とに分かれる。ａ層は縄文時代前期の包含層である。Ⅵ層は軽石を多く含んだ青灰色のａ層と，桜島起源の火山噴出物であるＰ11軽石からなる黄褐色軽石層のｂ層に分けられる。Ⅶ層の明黄褐色土層とⅧ層の黒色土層が縄文時代早期前半の包含層にあたる。Ⅸ層がいわゆる薩摩火山灰層で，Ⅸ層上面が縄文時代早期前半の住居跡検出面となる。

今回の調査では，縄文時代早期の竪穴住居跡２軒と同時期の包含層，縄文時代前期の包含層，縄文時代中期の落とし穴３基を発見している。



第２図　調査区グリッド図


①
I -10
I -11
I
L=274.00m
L=274.00m
攪乱
Va
Vb
Vc
IVb
樹痕
VIa
VIb
VII
VIII
IX
Vb層（アカホヤ）
VIb層（P11）
IX層（サツマ）
②
I -11
I -12
③
I -12
I -13
I -13
I -14
（横転）
0
2m
I
H
G
F
9
10
11
12
13
14

第３図　土層断面図

第２節　縄文時代早期の調査

１　調査の概要

Ⅵａ層からⅧ層までを縄文時代早期該当層として調査したが，Ⅵａ層の堆積状況は薄く不安定で，遺物も全く出土しなかった。遺物の出土はⅦ・Ⅷ層に限られ，主体はⅧ層である。

遺構としてはⅨ層の薩摩火山灰上面で竪穴住居跡２軒を検出した。平成18年度の調査でもＦ・Ｇ－80・81区から竪穴住居跡（１号，２号）が検出されているため，今回の遺構は３号，４号として報告する。

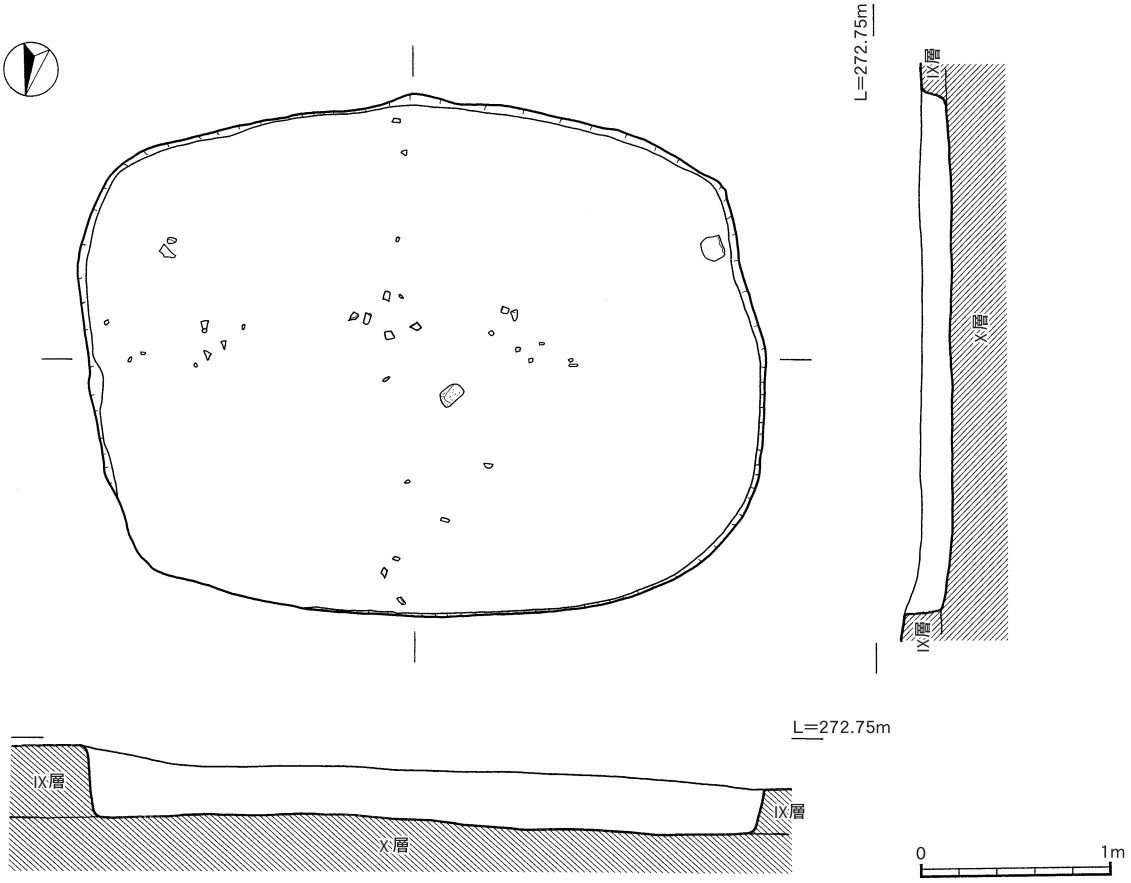
遺物は早期前半のⅠ・Ⅱ・Ⅲ類土器と，石器は打製石鏃・石匙・削器・磨製石斧・礫器・石核・剥片・磨石・石皿等で構成される。Ⅰ類土器は加栗山式土器であり，出土土器の大部分を占めている。Ⅱ類土器は下剥峯式土器，Ⅲ類土器は手向山式土器である。

第７図に遺構配置とⅠ類土器・石器出土状況図，第19図にⅡ・Ⅲ類土器出土状況図を示す。

２　遺構

⑴　３号竪穴住居跡（第４図）

Ⅰ－11・12区Ⅸ層上面で検出した長辺3.6m，短辺2.8mの隅丸長方形の平面形を呈する竪穴住居跡で，床面積は約8.5㎡である。短辺がほぼ南北方向を向いている。検出面からの深さは20～30㎝である。Ⅸ層（薩摩火山灰）を掘り込んでおり，床面は西側へ向かって下降している。東側ではＸ層（通称チョコ層）上部まで掘り込んでいるが，西側はⅨ層下部がうすく残っている。このことから床面をⅨ層下部としたことが想定できる。東側に比べ，西側は約10㎝下がっている。埋土はゴマ状の黄白色細粒土を含む黒色土で，これを分層することは不可能である。一部に薩摩火山灰のブロックが混ざっている。埋土中の遺物の主体はⅠ類土器であり，他に礫器，軽石加工品がある。



第４図　３号竪穴住居跡

第５図が３号竪穴住居跡を中心とした水平・垂直方向の遺物出土状況である。垂直分布を見ると検出面より20～30㎝高いレベルまで遺物が集中して出土していることが確認できる。土器の接合検証では，この間で接合が確認できることから，検出面より20～30㎝高い位置で竪穴住居の掘り込みが開始されたと推定される。そのレベルは周囲に出土している土器の下限ともほぼ一致しており，そこが当時の地表面（掘り込み面）に近いと推測される。第５図中に掘り込み面推定ラインを示す。

ア　遺構内遺物の接合（第６図１，53，28，39）

上記を裏付ける土器の接合状況については，あまりに煩雑でわかりにくいため，第６図に代表的な土器ごとの出土状況を示した。

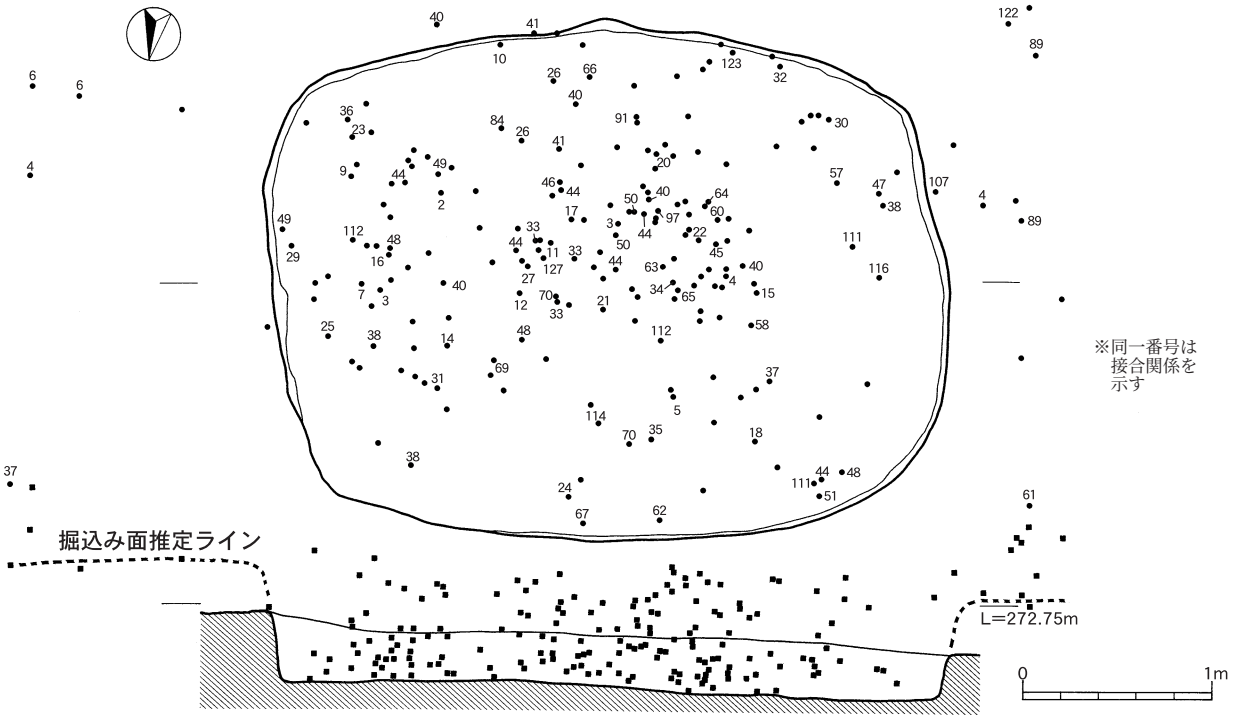
１は口縁部上面観がレモン形を呈する土器で，完形に復元できたものである。破片は住居の範囲内からのみ出土しており，床面に近いレベルからも多くの破片が出土していることから，住居に極めて近い時期のものと考えられる。

53は楔形貼付文と縦位の貝殻刺突文（方形の凹点状）を施した角筒土器である。住居外から破片が１点出土しているが，ほとんどの破片は住居埋土内にまとまって出土している。

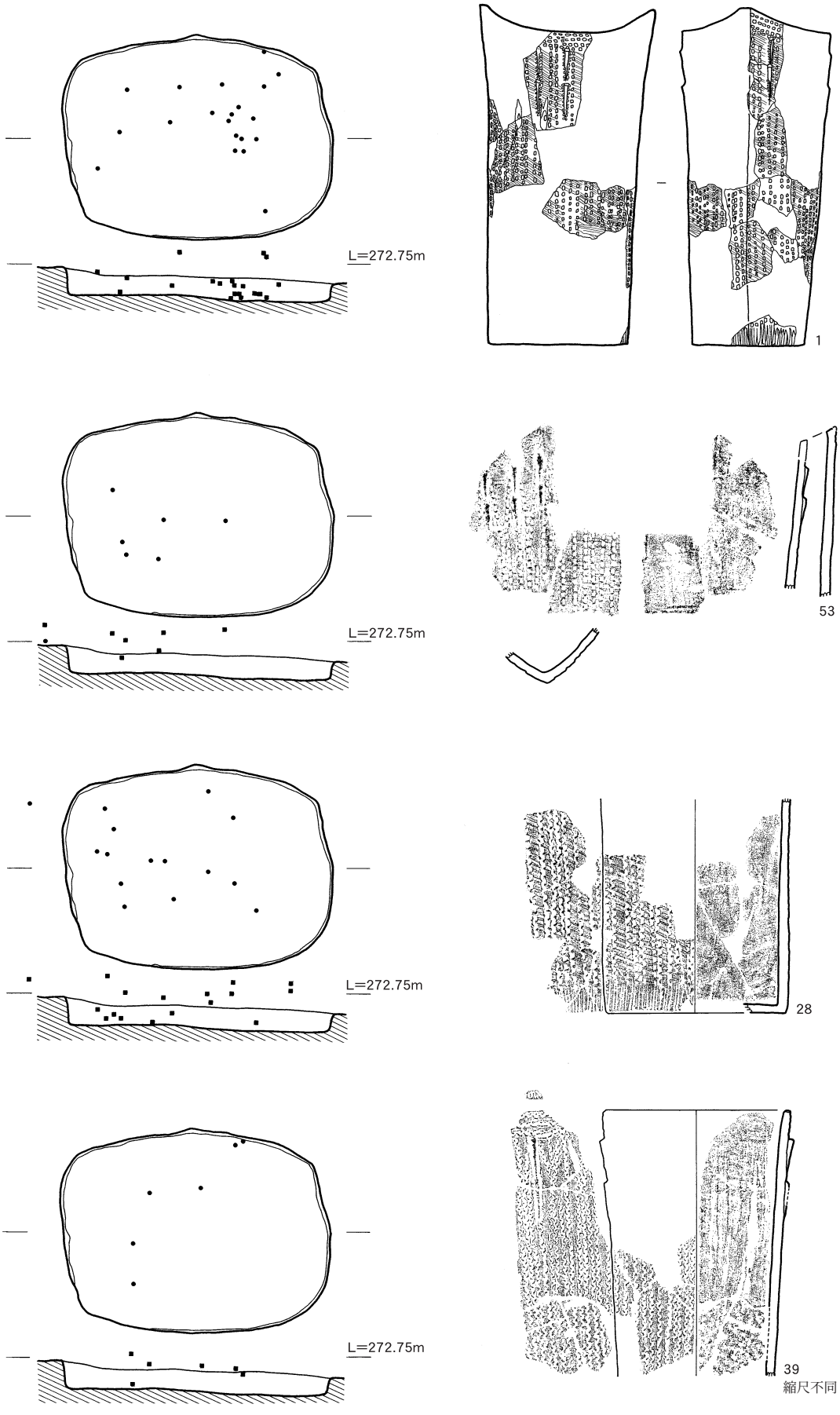
28は貝殻条痕文の上に，貝殻刺突文を施した円筒土器の胴部から底部である。住居外からも破片が１点出土しているが，住居の床面近くから埋土の上部までにわたって多くの破片が出土している。

39は貝殻刺突文と楔形貼付文を施した円筒土器である。住居埋土からも数点の破片が出土しているが，Ｉ－12区から２点，Ｈ－10区から１点と，十数m離れた地点からも接合する破片が出土している。

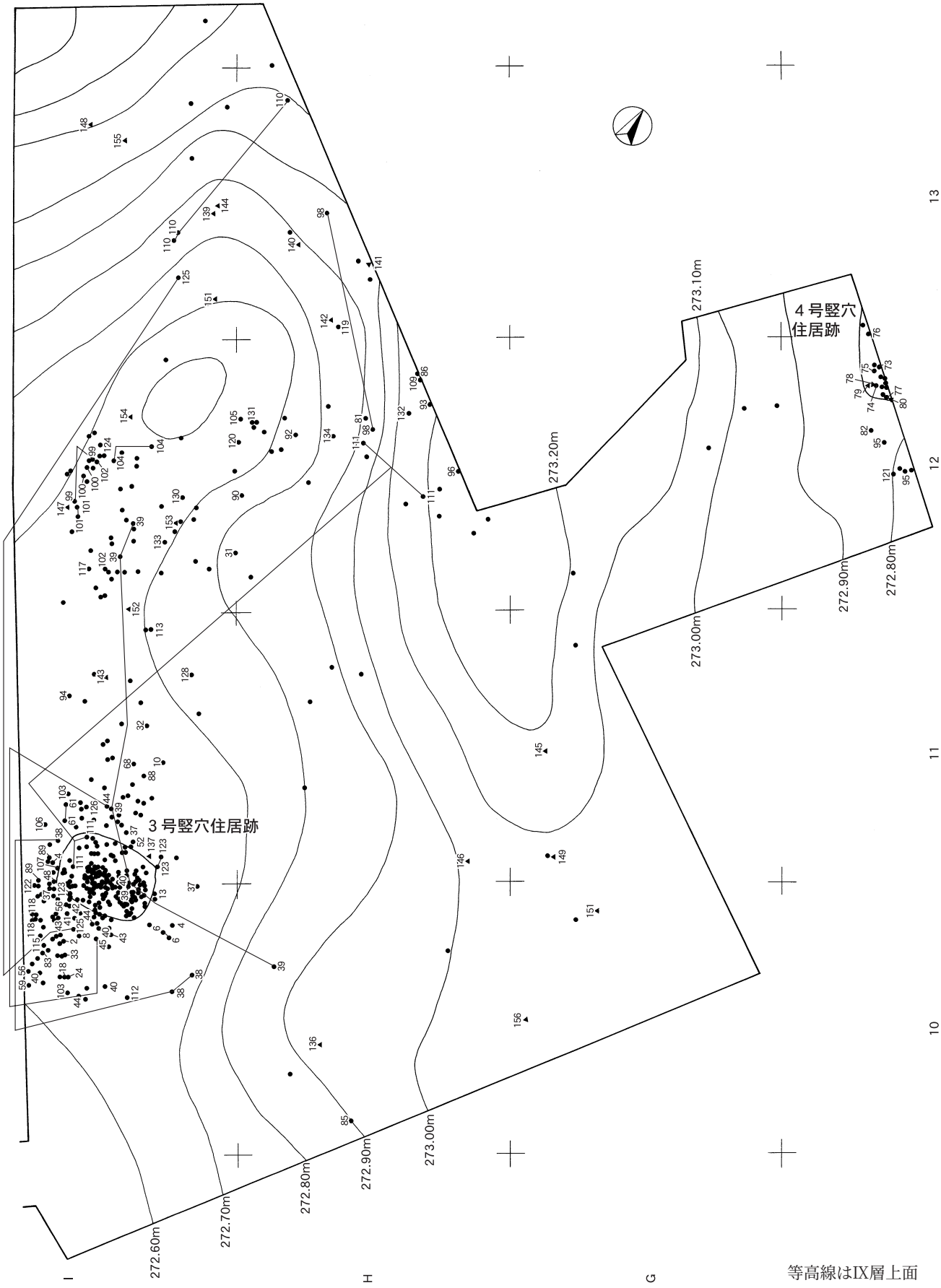
住居に直接伴う土器は明らかでないが，住居が廃棄され埋没していく過程で，周囲に散在していた土器片が土砂とともに流入してきたことが想定され，特に住居床面に近いレベルで出土しているものについては，時期的に近いものと考えられる。



第５図　３号竪穴住居跡内遺物出土状況図



第 6 図　3 号竪穴住居跡内土器別出土状況図



第７図　Ⅰ類土器・石器出土状況図（10mグリッド）

イ　遺構内遺物（第８～12図１～72）

１から72は３号竪穴住居跡内の出土遺物である。１から70はⅠ類土器，71，72は石器である。

１から24は，横位または斜位の貝殻条痕文を施した上に，縦位または斜位の貝殻刺突文を施したものである。

１は口縁部上面観がいわゆるレモン形を呈する土器である。底部付近を一部欠くが，全体のバランスやフォルムを元に完形復元したものである。高さ23㎝，長口径11.7㎝，短口径10㎝を測る。底部から口縁部にかけてレモン形のように対になる２か所の頂部（角）をもち，やや外反しながら立ち上がる器形である。口縁部は２か所の頂部だけが船の舳先のように伸び上がり強調されている。器面全体に浅い貝殻条痕文をやや斜位に施し，その上から口縁部には横位に４条の貝殻刺突文を巡らし，胴部には二本単位の縦位の貝殻刺突文を施している。刺突文は方形の凹点状を呈するものである。口縁部下には縦位の楔形の粘土紐（以下，クサビ）を二段に貼り付けている。クサビの両側には細かな刺突が施されている。口唇部は平坦に仕上げ，縦位の刻みを密に施している。また底部側面にもやや長めの縦位の刻みを密に施している。内面はケズリの後，丁寧なナデで仕上げられている。器壁は５㎜弱と薄く均一で精緻な作りである。胴部には縦長の補修孔が開けられており，口縁部付近の表面には一部ススの付着が認められる。

２，３もレモン形を呈する可能性があるものである。横位の貝殻条痕文を施した上に，口縁部には横位の貝殻刺突文を３条巡らし，胴部には刺突文を斜位に交錯させてＸ字状に施している。それに重ねてクサビを２段に貼り付けている。クサビの両側には細かな刺突が施されている。口唇部は平坦に仕上げ，縦位の連続した刻みを施している。内面はケズリの後，丁寧なナデで仕上げられている。器壁も薄く精緻な作りである。１のレモン形を呈する土器とよく類似しているが，相違点は貝殻刺突文が方形の凹点状を呈するものではなく，波線状を呈している点である。器壁は５㎜弱と薄く均一で，精緻な作りである。２には縦長の補修孔が開けられている。３には表面にススの付着が観察される。

４，５，７は円筒土器の口縁部で，同一個体と思われる。文様の構成は２，３と同じであるが，胎土がやや赤みを帯び，焼成は非常に堅致である。６も同様な施文が施されているが，表面の剥落が激しい。８には２段のクサビが貼り付けられている。９，11，12は斜位の貝殻条痕文を施した後に器面を軽くナデて仕上げている。10は器面が風化により荒れているが，同様な施文が観察される。13は縦位の刺突文が４条密に施されている。14から24も，横または斜位の貝殻条痕文を施した上に，貝殻腹縁を用いた波線状の刺突文を縦位または斜位に施す文様構成は同じである。

25は底径12.3㎝の円筒土器の底部である。底部側面には縦位の浅い刻みを密に施し，その上を軽くナデている。底面の仕上げはミガキである。底部内面には指押さえ，指ナデの後が観察される。底面の中心から１㎝ほどずれた所には，径７㎜・深さ３㎜の円形の凹みが作られている。これは焼成後二次的に作られているもので，同時期の円筒土器底部にいくらかの類例があるものである。胴部の立ち上がり部分できれいに割れて円盤状を呈しており，意図的に打ち欠いたのかもしれない。凹みとの関連も考えられ興味深い。

26，27は底部から胴部の立ち上がり部分である。27は底径7.2㎝の小型の円筒土器である。貝殻条痕文をナデ消した後，縦位の刺突文，縦の刻みを施している。28は斜位の貝殻条痕文の上に，３

～４本を単位とした貝殻刺突文を間隔を空けて施したものである。円盤形の底部を巻くようにして胴部が立ち上がっており，土器製作の状況が分かるものである。

29から44は，地文となる貝殻条痕文が施されず，器面調整はケズリの後，丁寧なナデで仕上げられ，その上から縦位もしくは斜位の貝殻刺突文を施すものである。

29は縦位の貝殻刺突文とクサビが２段貼り付けられている。30，31，32，34，35，36，37は同一個体と考えられ，胴部径約12㎝の円筒土器である。器面は丁寧にナデられており，その上から縦位の貝殻刺突文を密に施し，クサビを貼り付けている。内面も掻き上げるような縦方向のケズリの後，ナデられている。33の外面には，ほぼ全面にススが付着している。38，39も同一個体の円筒土器である。地文の貝殻条痕文が施されないというだけで，文様構成は前述の１～10などと同じである。口縁部に横位の貝殻刺突文を３条巡らし，胴部には縦位の貝殻刺突文を底部まで施す。クサビを２段貼り付け，クサビの両側には先端の鋭い工具による細かな刺突文が並んでいる。クサビとクサビの間には縦位の貝殻刺突文に斜位の貝殻刺突文を重ね，Ｘ字状を呈している。

39には縦長の補修孔が途中まで開けられている。貫通はしていない。40～44も同一個体と考えられるものである。胴部径は約21㎝で，口縁部と底部を欠くが，文様や器壁の厚みから，41が口縁付近，44が胴部，40が底部付近であると思われる。土器の大きさに見合った厚みのあるクサビを２段貼り付け，貝殻刺突文は一部Ｘ字状を呈する部分もある。また，外面にはススの付着も観察される。

45から52は，縦位の貝殻刺突文が方形の凹点状を呈する円筒土器である。

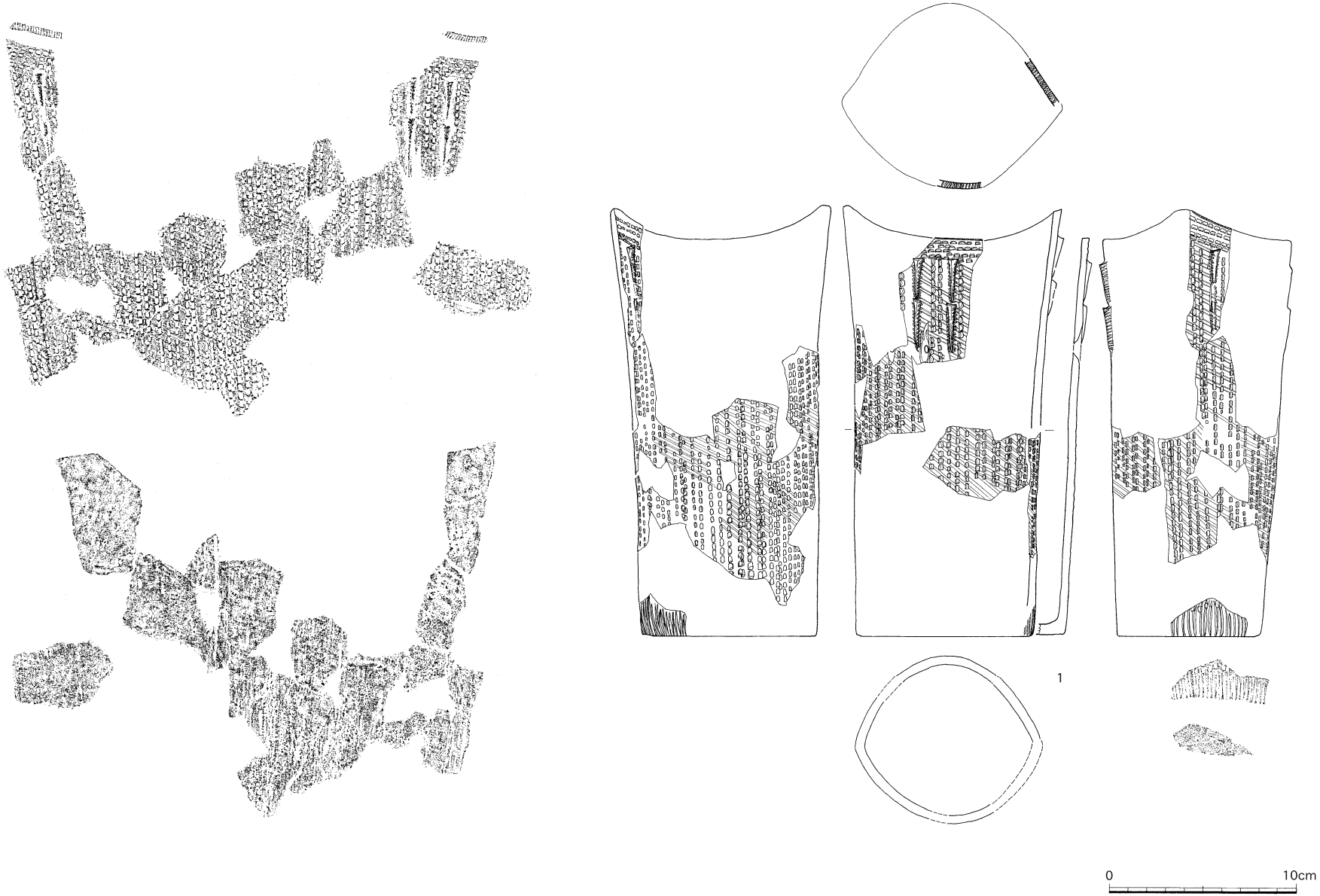
45は縦位の刺突文が密に施されており，ひとつひとつの刺突は４㎜×３㎜ほどの長方形の凹点である。２段のクサビを貼り付けている。地文の貝殻条痕文はナデ消されているようである。胎土には砂粒とともに金雲母が含まれており特徴的である。47には斜位の浅い貝殻条痕文が残る。48は横位の貝殻条痕文が間隔を空けて施されているように観察されるが部分的である。49はクサビの間に縦位と斜位の貝殻刺突文を重ねてＶ字状を呈している。52は斜位の貝殻条痕文がナデ消された上に，方形の刺突文を密に施している。

53から70は，角筒土器と考えられる一群である。いずれも文様構成は円筒形土器とほぼ同じであるが，角筒土器に分類したものには縦位の刺突文は方形の凹点状を呈するものがほとんどである。

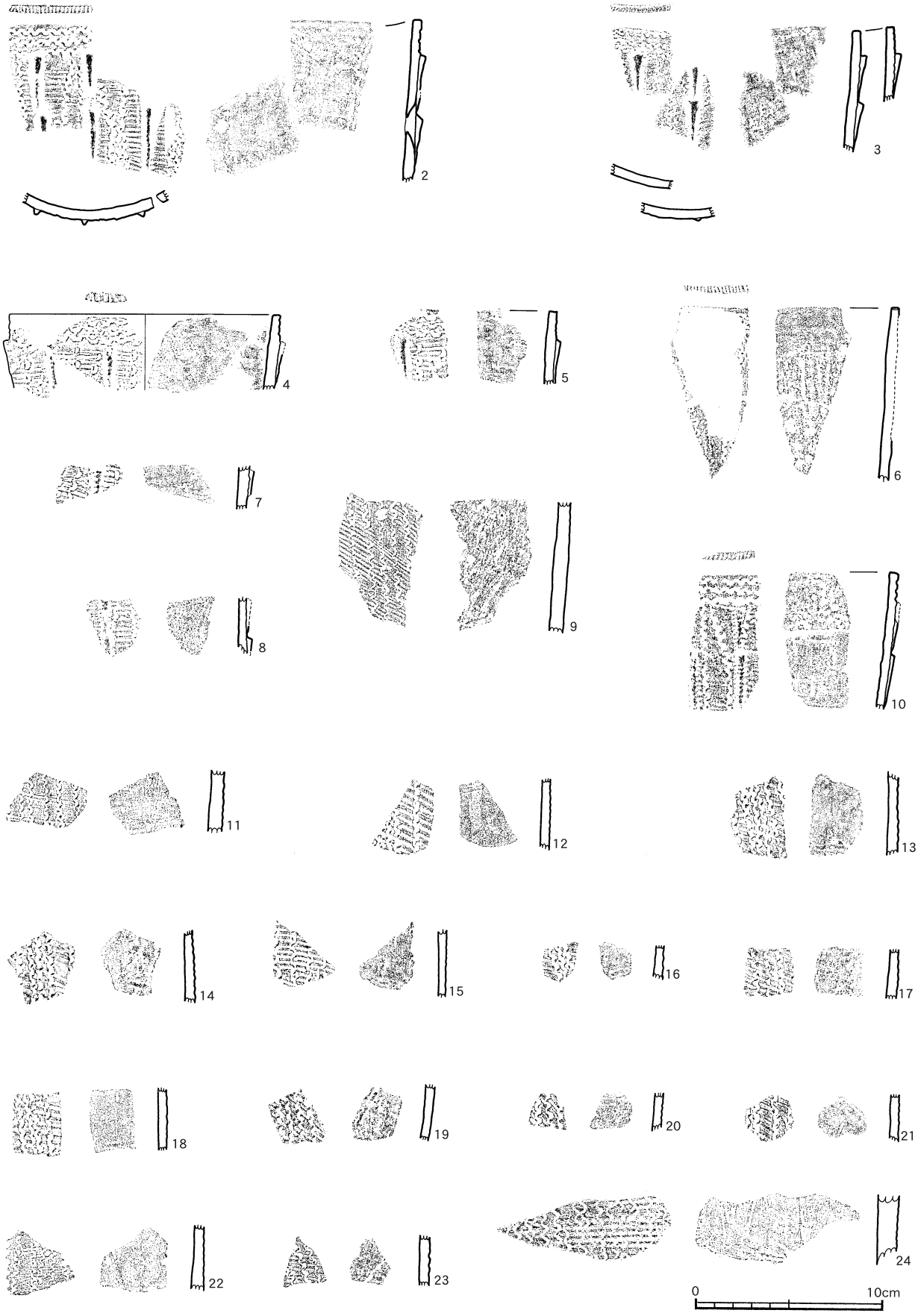
53，54は同一個体の角筒土器である。口唇部は平坦に仕上げ，縦の刻みを施している。口縁部には横位の貝殻刺突文（波線状）を３条巡らし，その下に２段のクサビを貼り付けている。縦位の刺突文は方形の凹点状を呈するもので，１個体の中で２通りの刺突文を観察できるものである。55，56は角筒の角の辺に沿って刺突文が施されている。57～68は角筒土器の胴部，69，70は角筒土器の底部である。胴部の立ち上がり部分には縦の刻みを施している。

71，72は３号竪穴住居跡床面から出土した石器である。

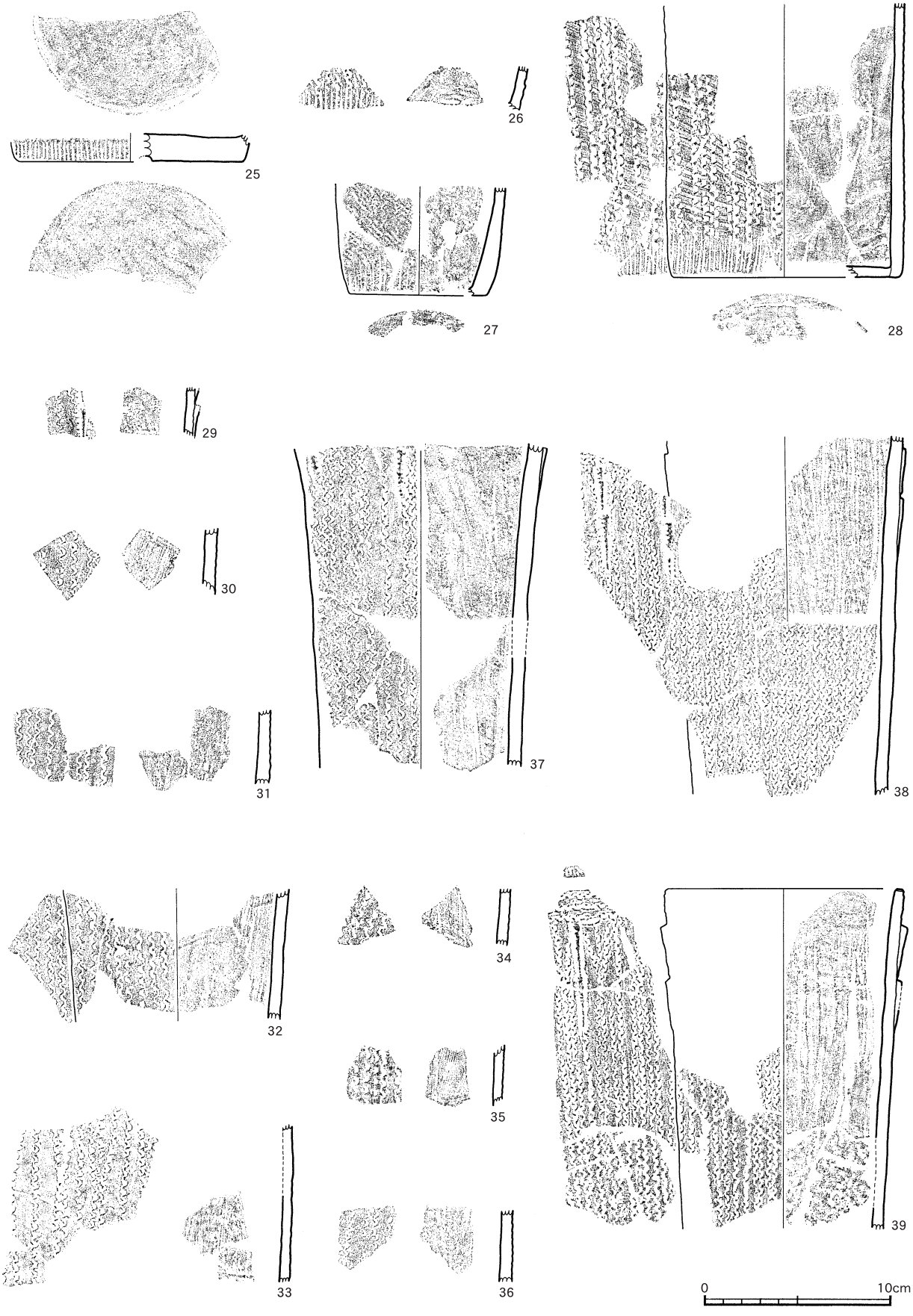
71は先端が鋭い扁平な礫を利用した礫器である。刃部には使用による刃こぼれと考えられる細かな欠損が認められる。72は軽石加工品である。粗く長方形に加工され，裏面はゆるい曲面となっている。片手で持ちやすい形状である。



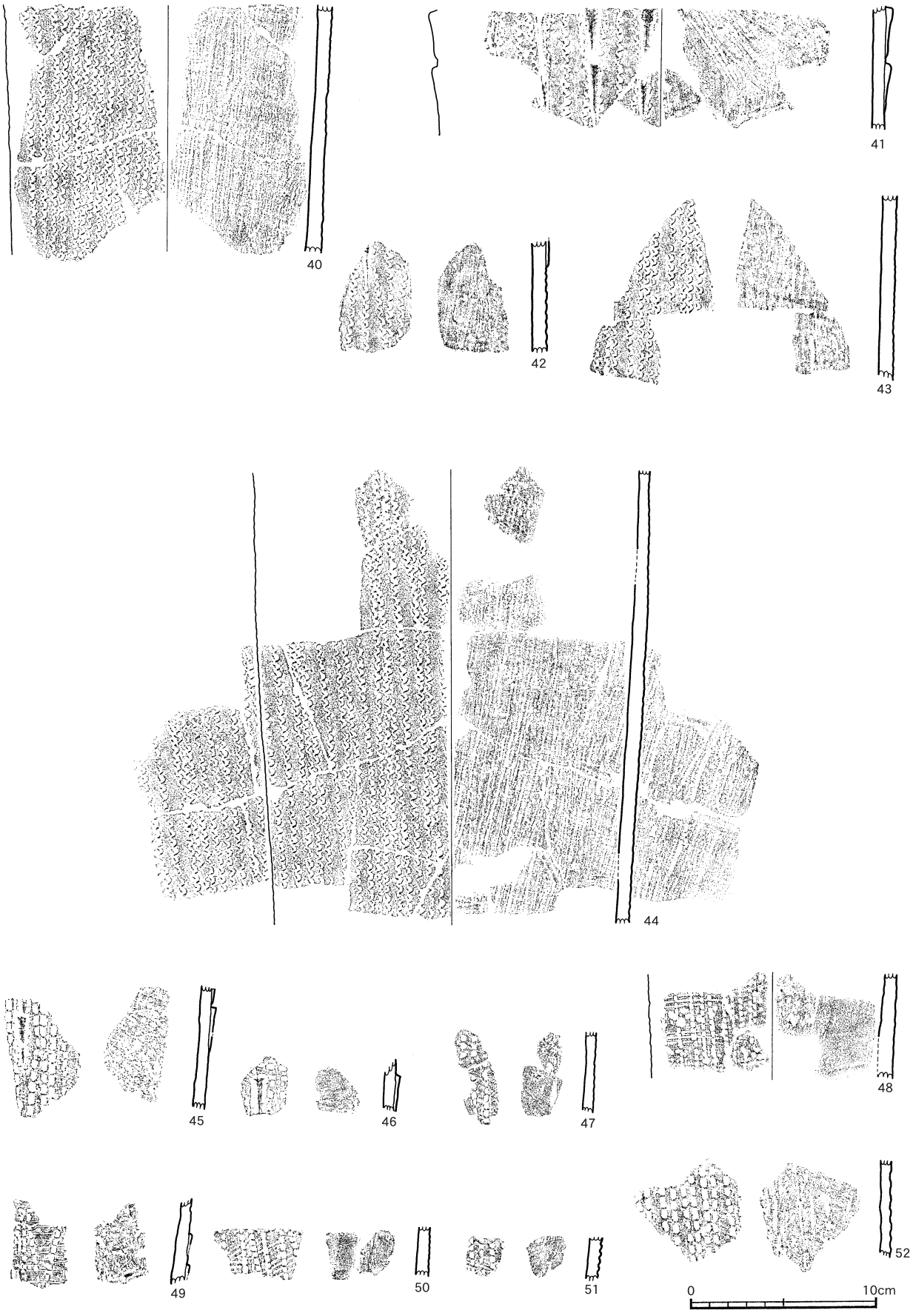
第８図　３号竪穴住居跡内遺物①



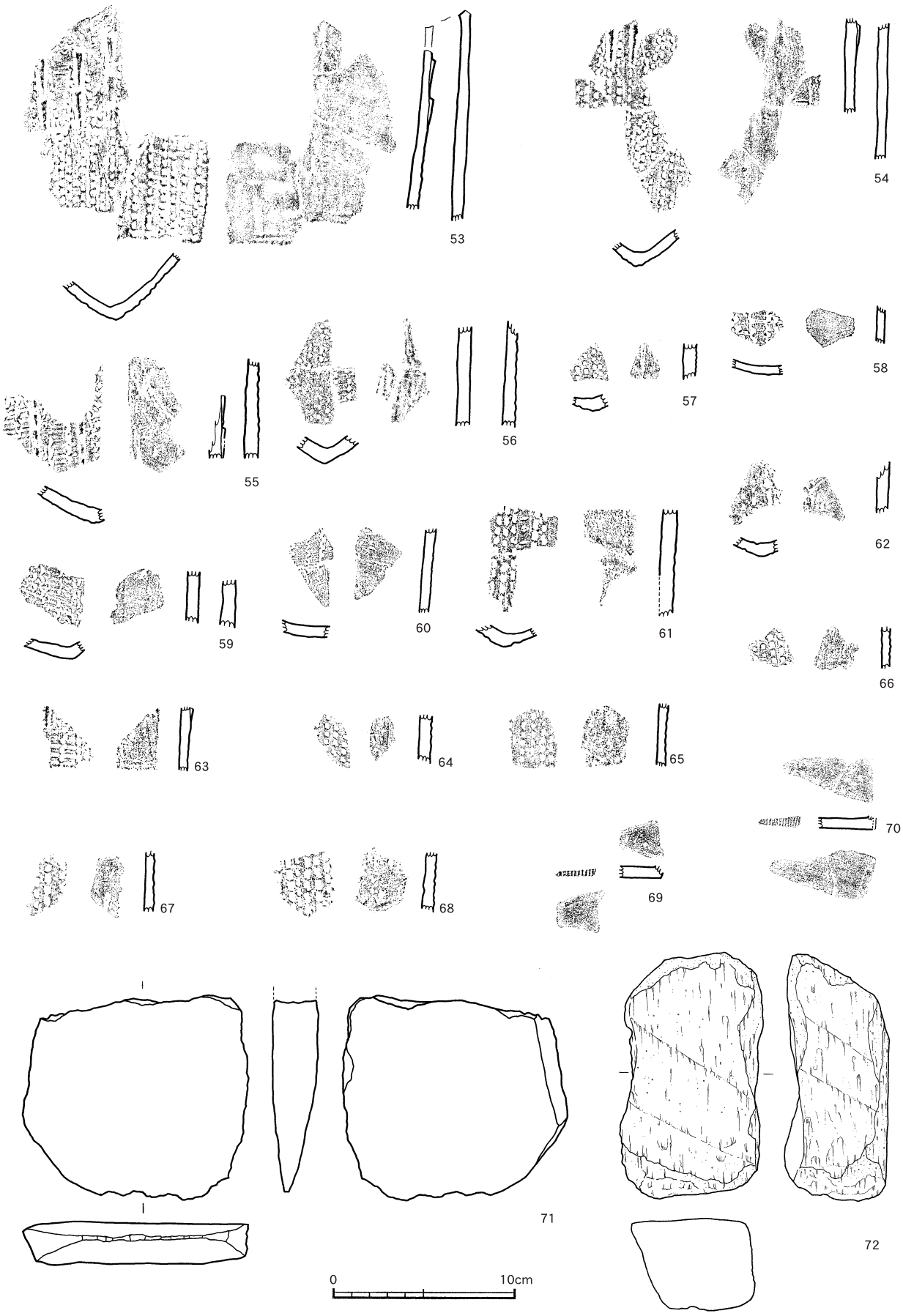
第９図　３号竪穴住居跡内遺物②



第10図　3号竪穴住居跡内遺物③



第11図　3号竪穴住居跡内遺物④



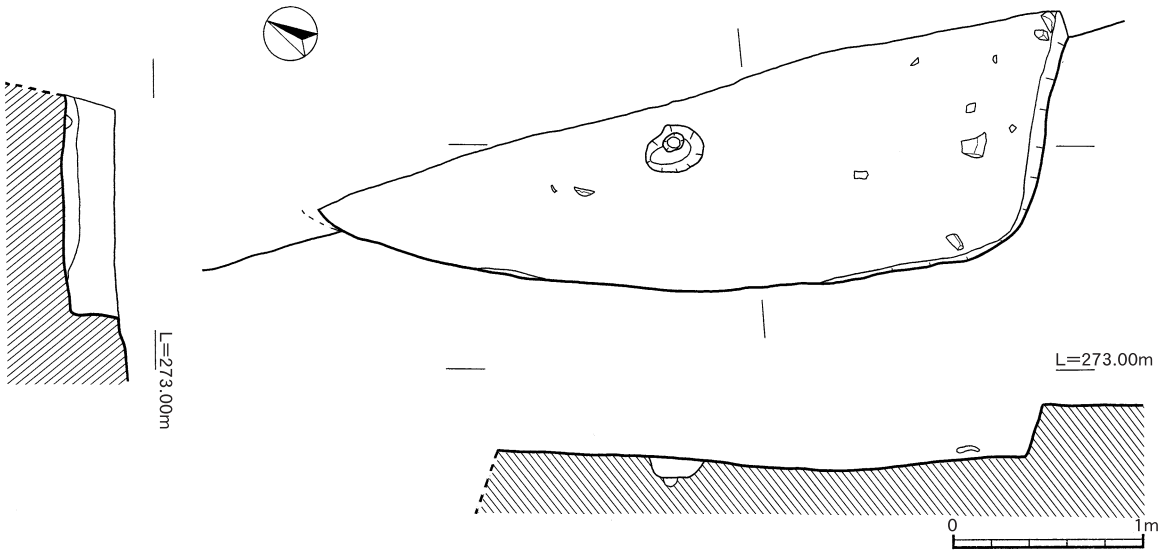
第12図　3号竪穴住居跡内遺物⑤

⑵　４号竪穴住居跡（第13図）

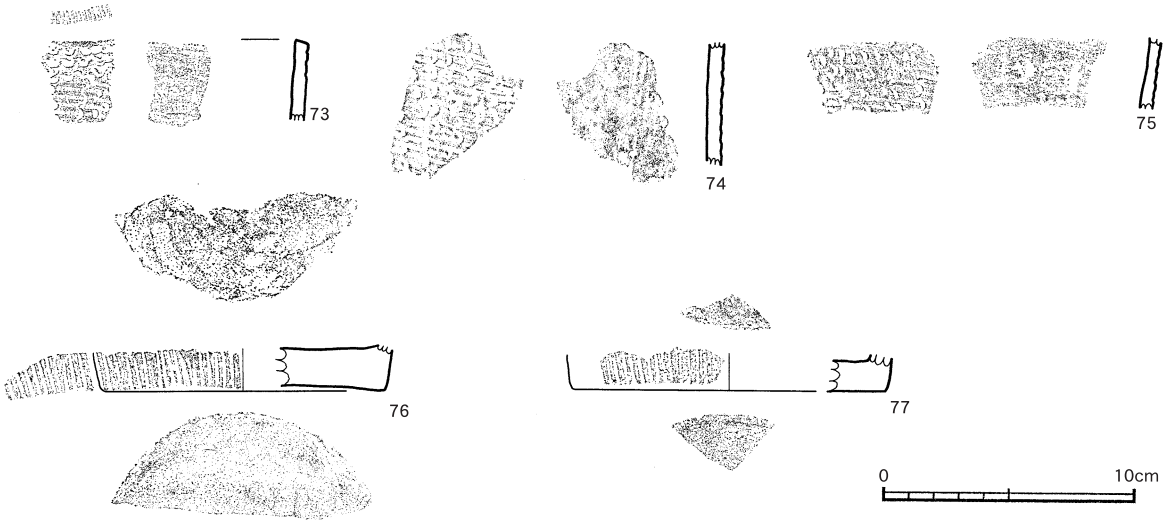
Ｆ－12・13区で，道路建設のためにすでに掘削されていた壁面に見えていたものである。Ⅸ層（薩摩火山灰）への掘り込みは明らかであったので，上層のⅧ層で平面的に掘り込み面を検出すべく慎重に掘り下げを進めたが，結果的にⅨ層上面に至るまでプランを捉えることはできなかった。

検出できたのは住居跡の南西隅のコーナーを含む，長辺3.8m，短辺1.4mの三角形状であった。残存していた部分の床面積は約3.5㎡で，３号と同様に隅丸長方形のプランであったと考えられる。長軸はＮ－30°－Ｗである。検出面からの深さは約30㎝でⅨ層を掘り込んでおり，床面の多くはチョコ層に達しているが，一部に薩摩層が残っていることから，薩摩層の下部を床面としていた可能性が強い。壁面にはでこぼこがあり，こん棒状の工具で掘削したと想起できる状況が読み取れる。中央西側よりに浅いくぼみ状のピットが１基検出された。住居跡の埋土はゴマ状の黄白色細粒土を含む黒色土で，Ⅷ層の黒色土と区別できない。下部にはややＸ層が混ざる。

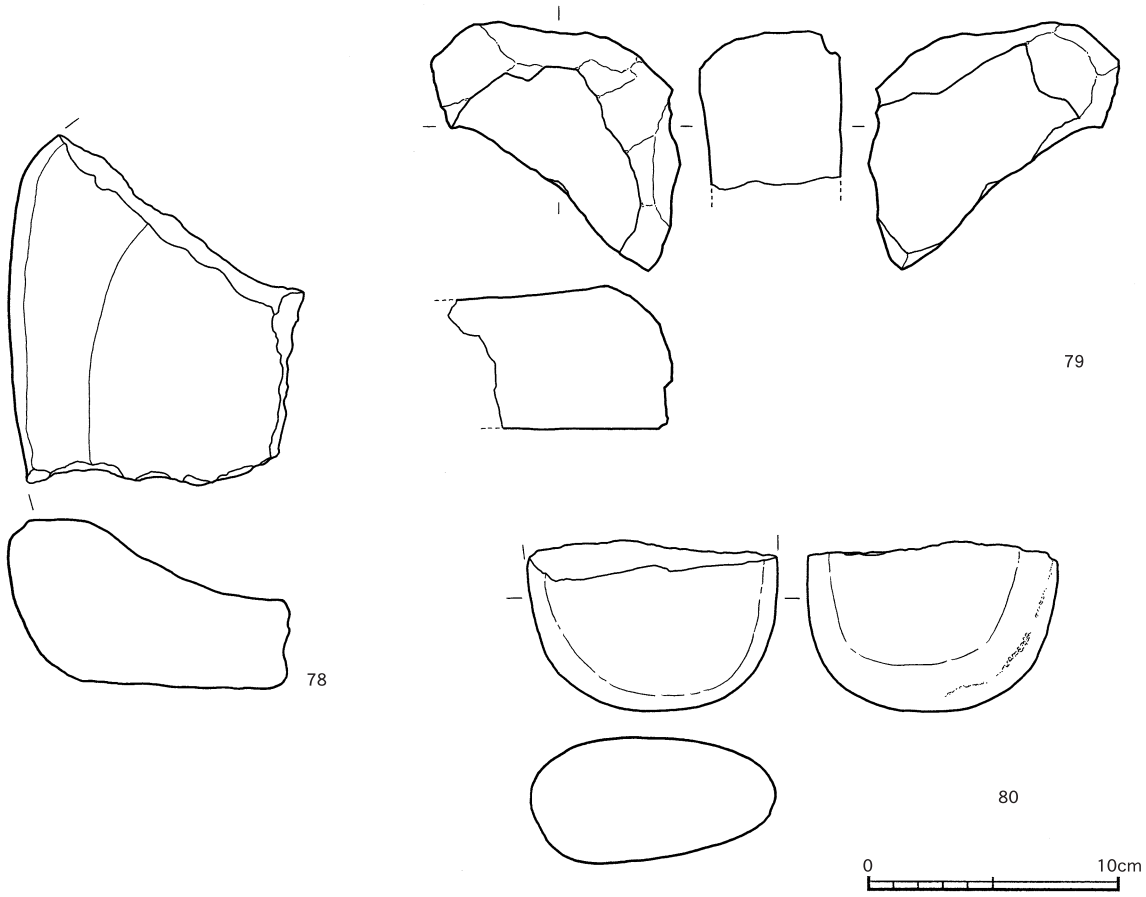
埋土中からⅠ類土器５点（第14図73～77）のほか，磨石，石皿（第15図78～80）が出土している。



第13図　４号竪穴住居跡



第14図　４号竪穴住居跡内遺物①



第15図　４号竪穴住居跡内遺物②

第14・15図の73から80は，4号竪穴住居跡内から出土した遺物である。73から77はⅠ類土器である。78から80は石器である。

73は円筒土器の口縁部である。口唇部は平坦に仕上げ，連続した縦の刻みを施す。器面には横位の貝殻条痕文が浅く施され，口縁部には横位の貝殻刺突文を３条巡らしている。その下に同じ貝殻腹縁による波線状の刺突文が縦位に施されているが，その周囲には別の貝殻腹縁による爪形文状の刺突文が施されている。内面は横方向のケズリの後ナデられている。75はその胴部片と思われる。74は斜位の貝殻条痕文の上に縦位の刺突文を密に施している。内面には縦方向のケズリが観察される。76は復元径11㎝の円筒土器底部である。底面はミガキで仕上げ，胴部の立ち上がり部分には縦の刻みが密に施されている。77も同じ底部と考えられる。73，75，76，77は砂粒を多く含む胎土も類似しており，同一個体ではないかと考えられる。

78は成形された石皿の破片である。周囲を敲打で整えた後，研磨により成形している。底面も平坦に仕上げている。作業面は大きく凹み，表面はよく磨滅している。石材は安山岩である。敲打成形やその形態的特徴から，この時期特有の台形状の「定型石皿」の可能性が高い。79も表面が磨滅しており，石皿の破片と考えられる。80は磨石の半欠品である。周囲には若干敲打の跡が観察される。

3　遺物

⑴　土器（第16～20図）

81から135は包含層（Ⅷ層主体）出土の土器であり，54点を図化した。

81から129　はⅠ類土器である。81から98は，地文に横位または斜位の貝殻条痕文を施した後に，貝殻腹縁による波線状の刺突文を施したものである。

81は口唇部を平坦に仕上げ，連続した縦位の刻みを施している。口縁部には横位の貝殻腹縁による刺突文を三条巡らす。その下にやや斜めに貝殻刺突文を施し，クサビを二段貼り付けている。器面が１～２㎜の厚さで剥落しており，内面側の砂粒を多く含んだ粗い胎土に対し，表面にはより細かな粘土を貼り付けて土器を製作している様子がうかがえる。82は斜位の貝殻条痕文を施した後，二本単位の縦位の貝殻刺突文の上に斜位の貝殻刺突文をＸ字状に重ねたものである。83は口唇部に斜めの刻みを施している。口縁部に貝殻刺突文を横に三条巡らし，高さ４㎜，幅２～４㎜，長さ30㎜のクサビを貼り付けている。クサビの両側は先の鋭い工具で刺突文が施されている。この施文はクサビ（楔形の粘土紐）を器面に貼り付け，よくなじませるためのものとも考えられる。器壁の厚さは４～５㎜で，薄く精緻な作りの土器である。86もクサビの残る胴部片である。クサビの長さは土器によりまちまちであるが，おおよそ２～３㎝の長さである。

84から98は胴部片である。87，88，95のように器壁の厚さが５㎜程度の薄いタイプと，85，92，98のように10㎜程度の厚いタイプがある。

99～102，104は，地文の貝殻条痕文が縦位に施されているものである。

99，100，101は同一個体と考えられる。条痕が縦方向に途切れることなく一気に施されている。その上から縦位の貝殻腹縁による刺突文が二条密接して施されている。部分的には刺突を深く差し込み，二条の貝殻刺突の間を盛り上げるように施して，そこが楔状に見えるところもある。横並びの位置が揃っているので，楔形貼付文を意図した施文と考えられる。102は胴部から底部にかけての破片で，復元径は18㎝の円筒形である。縦位の条痕文の上に，二条の刺突文を密接して施している。底部には約４㎝の縦の刻みが，間隔は不規則であるが連続して施されている。

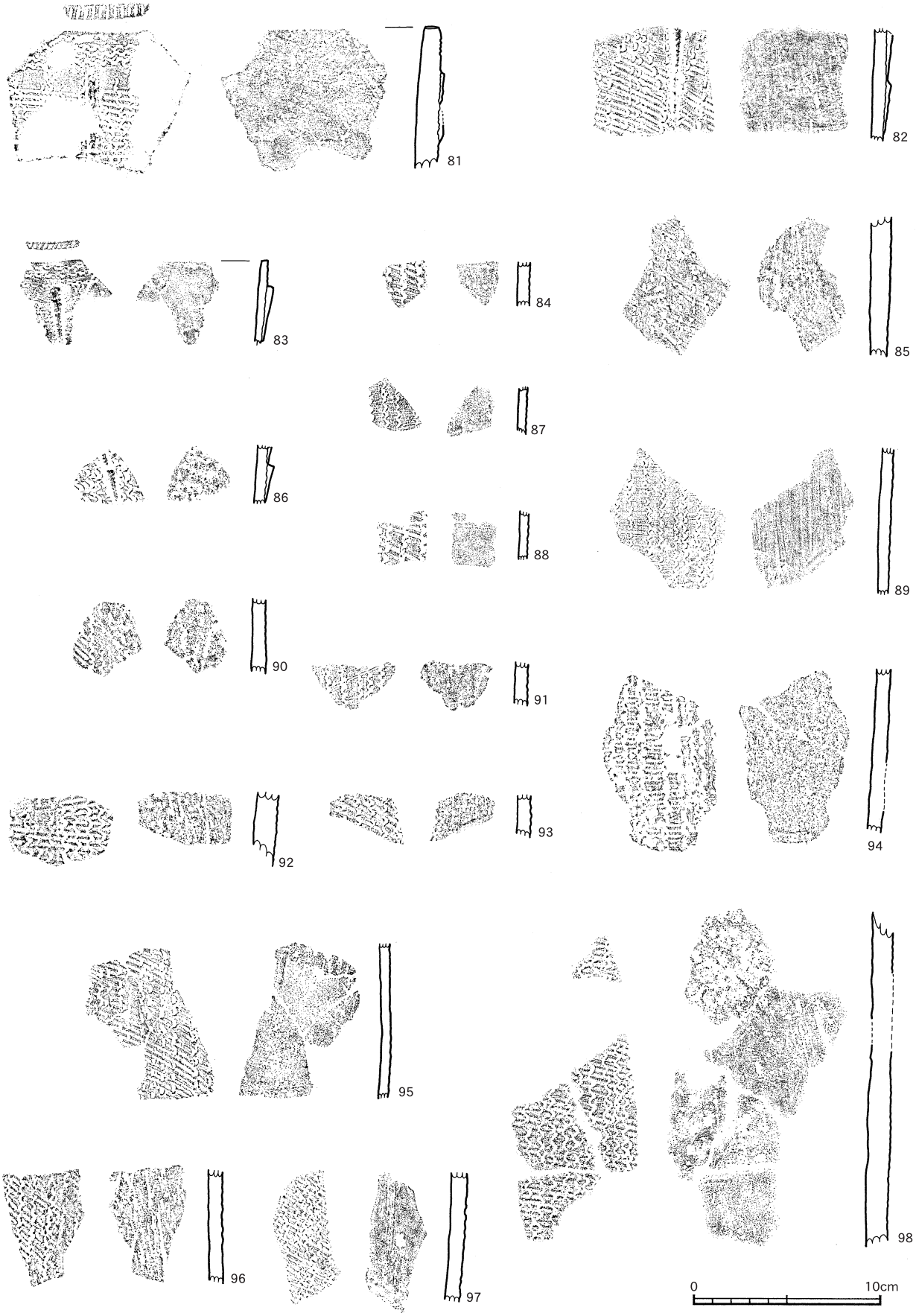
103，105～111は縦位の貝殻刺突文のみ観察されるものである。地文の貝殻条痕はナデ消されたものと考えられる。

111は復元径11㎝を測る円筒土器の底部である。底部には縦の浅い刻みが施された後，その上から軽くナデている。112は復元径18.5㎝の円筒土器の胴部である。ナデにより器面調整された後，貝殻腹縁による縦位の刺突をほぼ等間隔に施している。

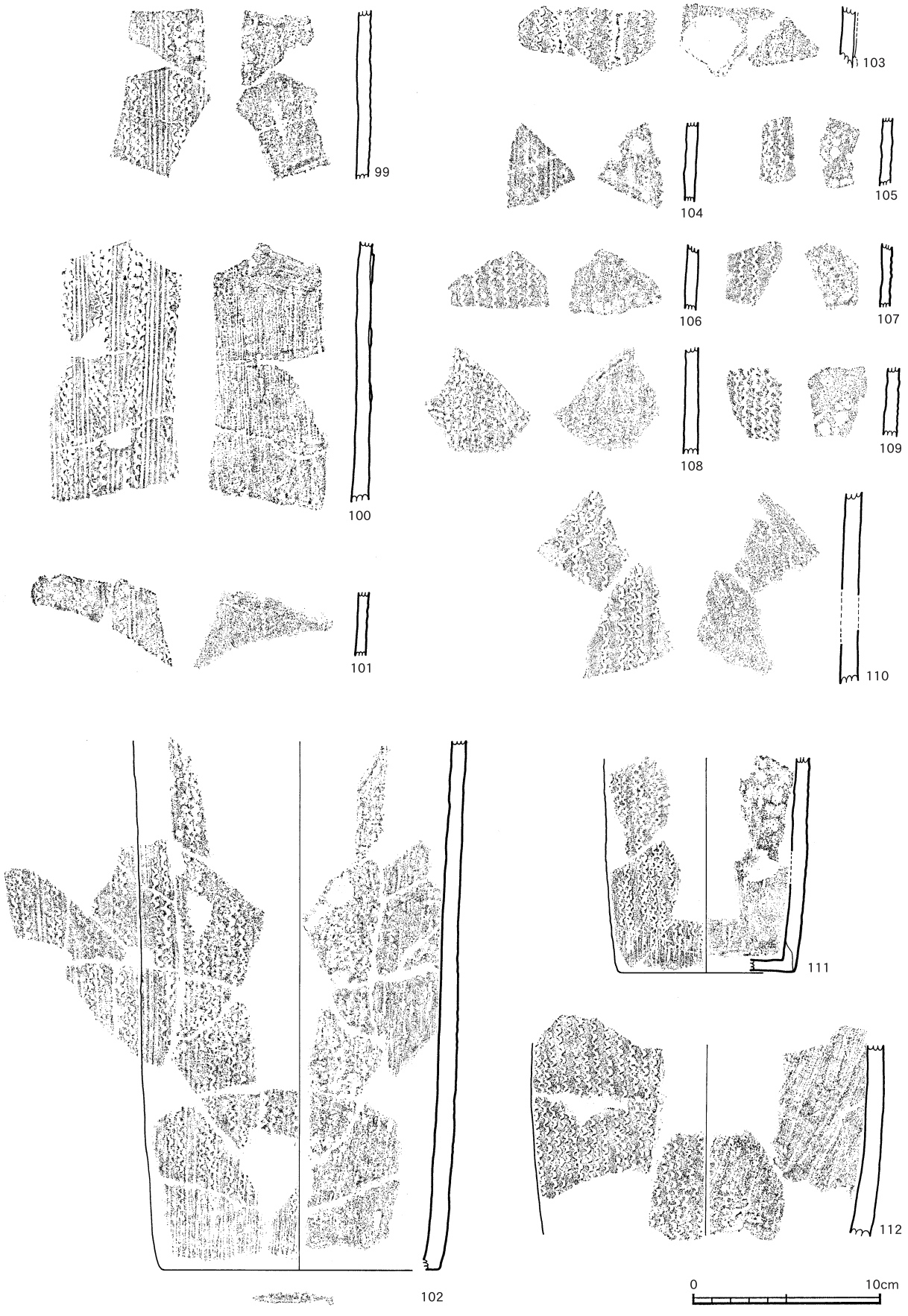
113から123は角筒土器である。

113と114は縦位の貝殻刺突文が方形の凹点状を呈するものである。同様な施文は119や123にも観察される。115，116，118は，横～斜位の貝殻条痕文の上に細い波線状の貝殻腹縁による縦位の刺突文を施すものである。117は角筒土器のコーナーの部分である。122と123は角筒土器の底部である。どちらも底部外面に縦位の刻みを施している。123は底部の一辺が5.5㎝で，四辺がややふくれた方形をした角筒土器の底部である。

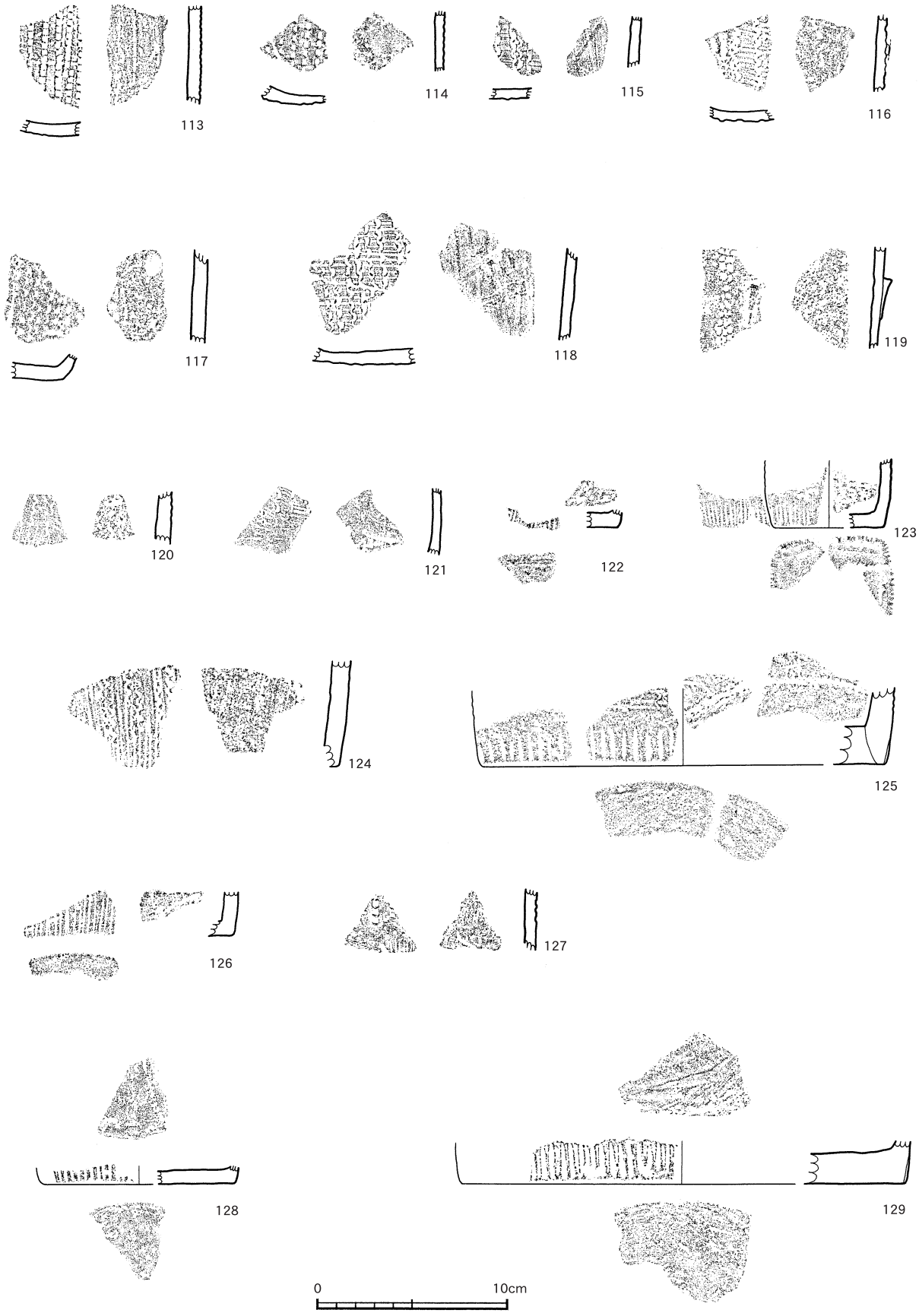
120，121，124～129は円筒土器の底部とその付近の胴部片である。いずれも側面には縦の刻みが施されている。124は縦の密接した二条の貝殻刺突文に，底部側面には縦の刻みが施されている。



第16図　縄文時代早期の土器①（Ⅰ類）



第17図　縄文時代早期の土器②（Ⅰ類）

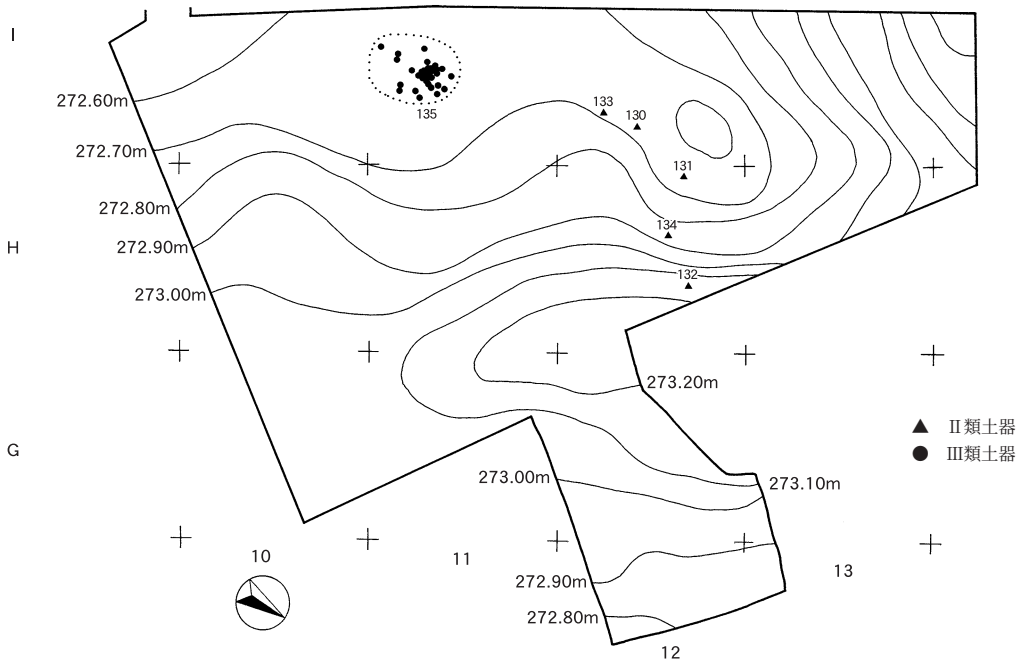


第18図　縄文時代早期の土器③（Ⅰ類）

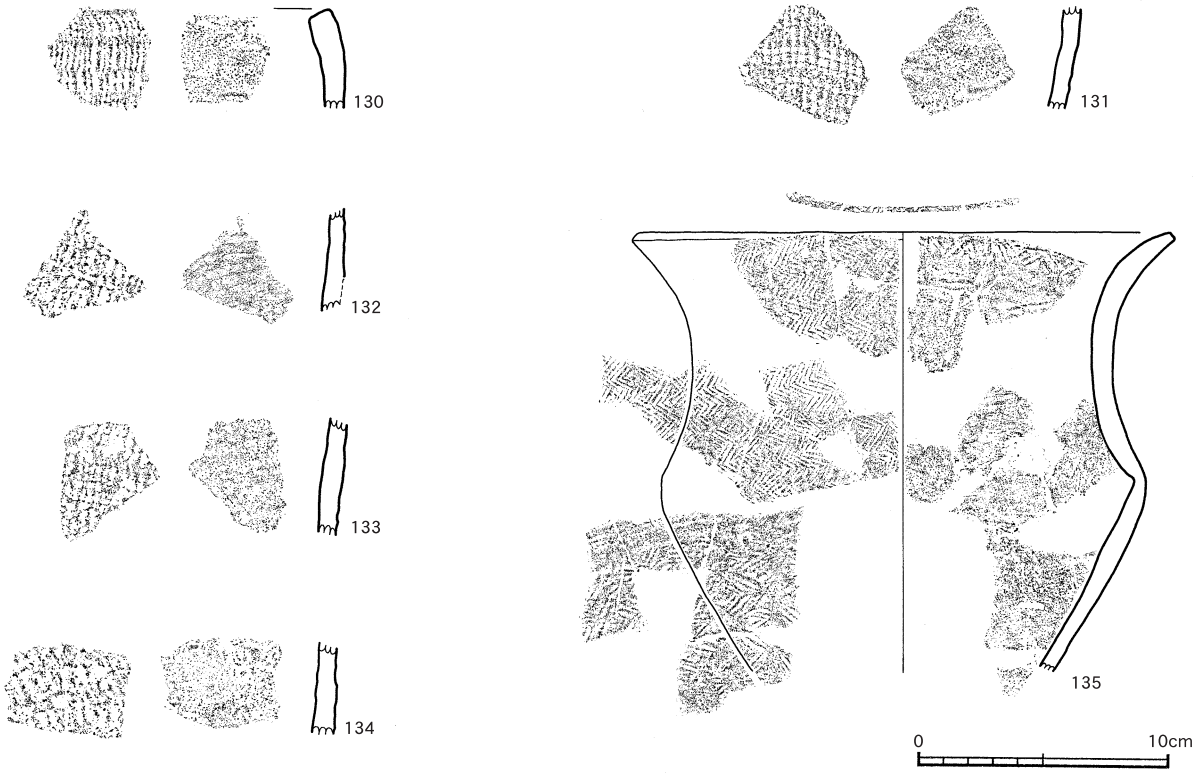
102と同一個体と思われる。127は縦位の刺突文が方形の凹点状を呈するタイプである。125と129は厚手でやや大型の円筒土器の底部である。125は復元径22㎝，129は復元径24㎝である。

130から134はⅡ類土器，135はⅢ類土器である。出土状況を第19図に示す。

130は内湾した口縁部である。器面が風化しており判別しにくいが，貝殻腹縁による縦位の刺突を横方向に連続して施している。短い腹縁を用いた３段の刺突帯が観察される。口縁部にかけてや



第19図　Ⅱ・Ⅲ類土器出土状況図（10mグリッド）



第20図　縄文時代早期の土器④（Ⅱ・Ⅲ類）

や肥厚しながら内湾し，内傾した口唇部は平坦に仕上げている。131から134は胴部片である。器形や貝殻刺突による施文の状況から，Ⅱ類土器は下剥峯式土器の範疇に入るものと考えられる。

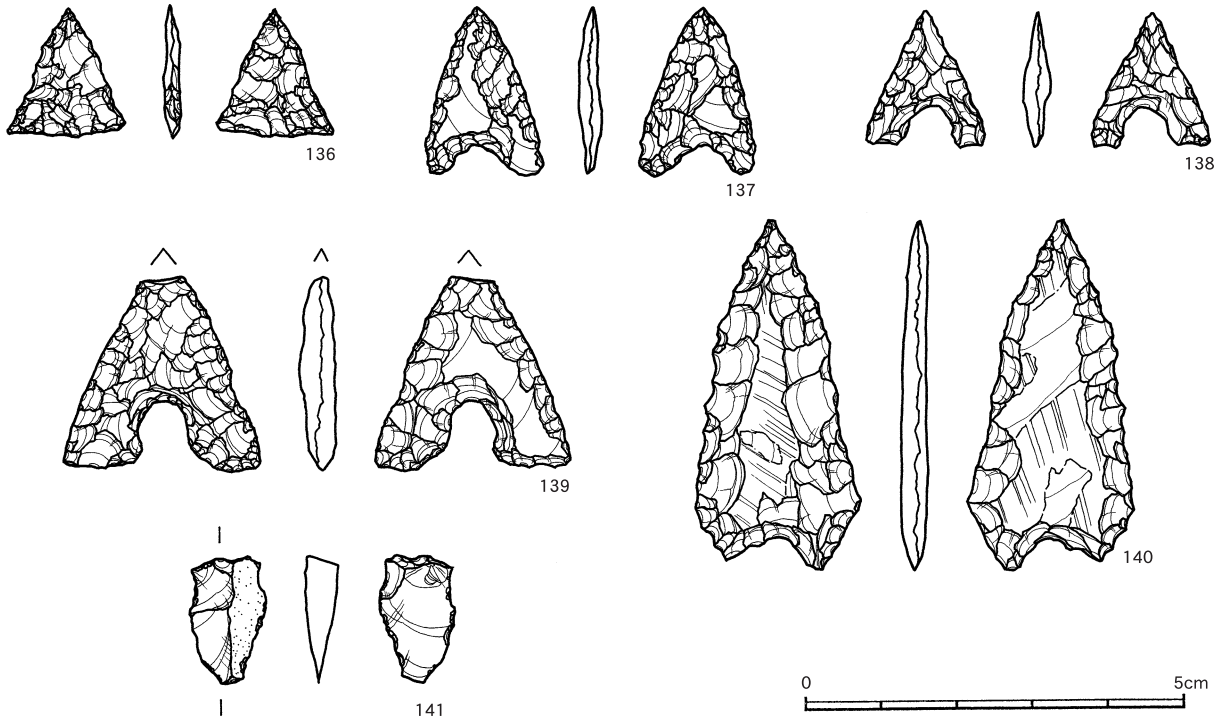
135はⅢ類土器で，Ⅰ－11区で集中して出土した。１個体が割れて散在している状況で，約２分の１が復元できたが底部を欠く。復元口径約22㎝，器高17㎝以上である。口縁部が大きくアサガオ状に外反し，締まった頸部から胴部で屈曲し，膨らみをもって底部に収束する器形を呈している。外面には間延びした山形押型文が縦方向に密に施され，その上を軽くナデて仕上げている。内面はナデ調整が施され，口縁部内面にも横方向に山形押型文を巡らしている。外面にはススが付着している部分がある。Ⅲ類土器は手向山式土器であると考えられる。

⑵　石器

石器は打製石鏃・石匙・削器・磨製石斧・礫器・石核・剥片などが出土した。いずれも縄文早期包含層のⅦ・Ⅷ層から出土したものである。22点を図化した。

①　打製石鏃（第21図136～140）

136は平基の三角形鏃で，石材は透明感のある黒曜石である。137，138は基部に抉りを入れた二等辺三角形状を呈する。137の両側辺はやや内湾している。石材は137はチャート，138は安山岩である。139はやや大型の三角形状で，U字状の深い抉りを施したものである。石材はチャートである。140は最大長4.6㎝を測る長身の二等辺三角形鏃で，両側辺は鋸歯状の剥離を施し，両脚は逆三角形状に加工している。また，表裏面ともに研磨して平滑にした跡が観察される。横：縦の比率は１：2.2である。



第21図　縄文時代早期の石器①

② 石匙（第22図142，143）

142，143はチャート製の石匙である。142は身部に対してつまみ部が大きく，刃部は丸みを帯びて仕上げている。143は刃部を大きく欠損しており全体の形状は明らかでないが，143と類似した形状が復元できる。

③ 削器（第22図144，145，146）

144は自然面を残す剥片を用い，周縁に表裏から刃部加工を行っている。表面に残る凸部分は製作過程でうまく剥離できなかったもので，ヒンジフラクチャーをおこしている。石材はガラス質が少なく，透明感のない灰黒色の黒曜石である。145，146は灰色に黒い筋が入るチャートを用いている。145は上辺から右側辺にかけて細かな剥離を施して刃部を作出している。右側辺を底面に配置すると，石匙的な機能を強く感じられる。146は横広剥片を素材とした削器である。主要剥離面側からの剥離により刃部を作出している。左半分は欠損したとみられる。

④ 磨製石斧（第23図150）

150は小型の磨製石斧である。側面や基部には剥離痕を残したまま，刃部と表裏面を研磨で仕上げている。石材は南九州の縄文早期で多用されるホルンフェルスで，直刃の形状など該期の特徴を備えているが，最大長5.2㎝，最大幅2.8㎝という非常に小型の形状は類例が少なく特筆される資料である。

⑤ 礫器（第24図152，154）

152は扁平な礫を用いて周囲に加工を施し，刃部は片側からの剥離によって作出されている。基部近くには若干の抉りも認められるので，棒状のものに装着して使用されたことも推定される。154は扁平な礫素材の左側面に，背面方向から刃部加工を行っている。石材は安山岩である。

⑥ 石核（第24図151，153）

151は砂岩の石核である。亜円礫の平坦面を打面として，弧状の不定形剥片を剥出している。不定形剥片の大きさは縦横４㎝程である。153は剥片素材の石核である。分割面をそのまま打面としている。縦長の剥片を剥ぎ取っている。

⑦ 剥片（第21図141・第23図147，149）

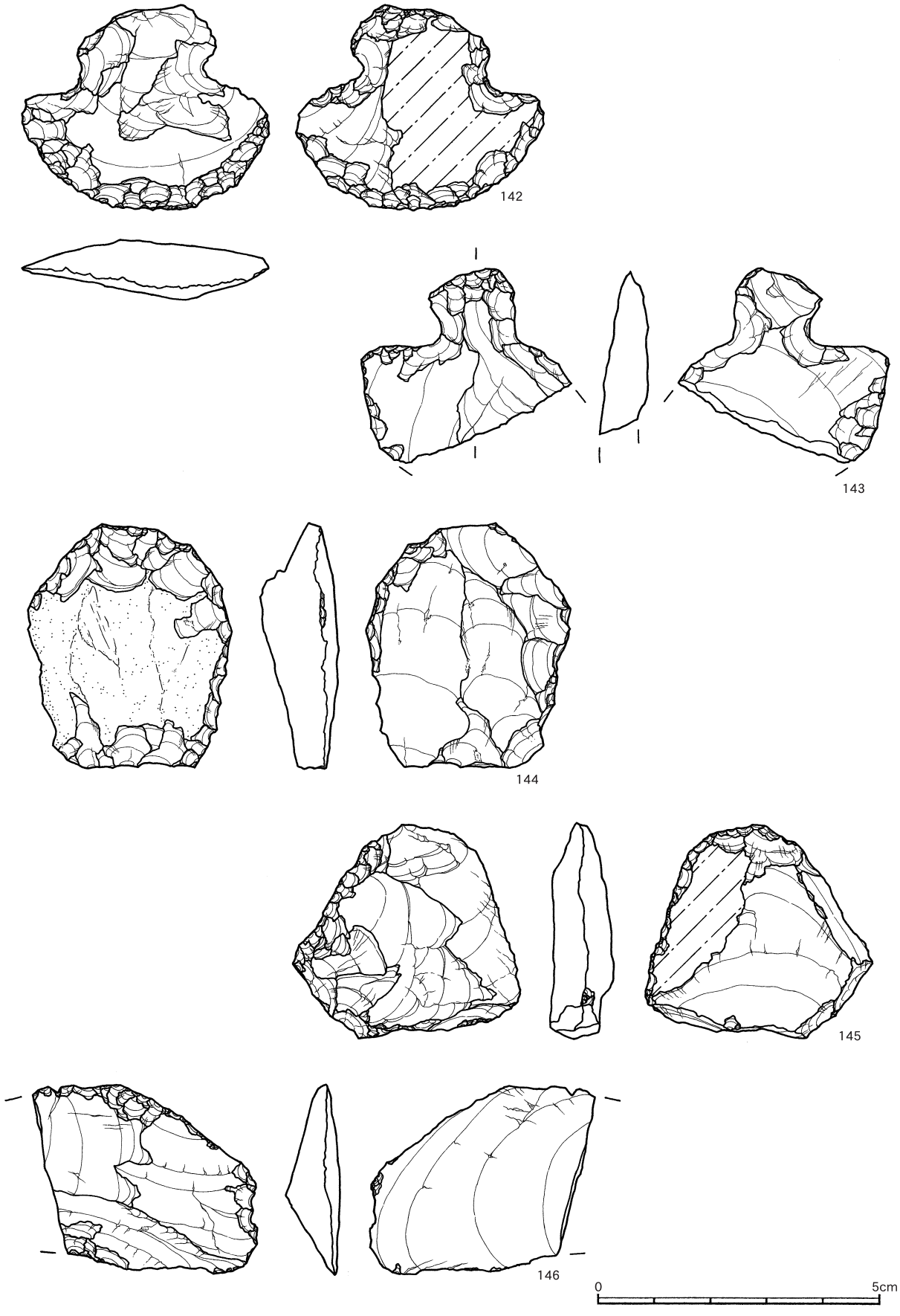
141は黒曜石製の小型剥片である。縦長の側辺に微細な使用痕が観察される。一部自然面が残るが，サンドペーパー状のざらついた感じの自然面である。147はチャート製の横長剥片である。149は剥片として図化したが，磨製石斧の刃部の欠損品の可能性も考えられる。その場合は図の天地が逆になる。

⑧ 磨石・敲石（第25図155）

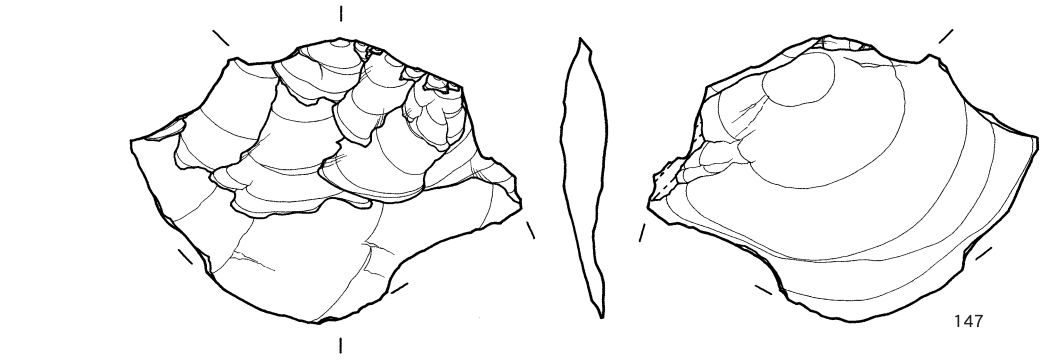
155は砂岩の円礫を用いた磨石・敲石である。磨石としてより敲石としての用途が主だったようで，表裏面と側面全周に敲打痕が巡る。表面のやや上部には敲打痕が集中している部分があり，用途を考える上で興味深い。

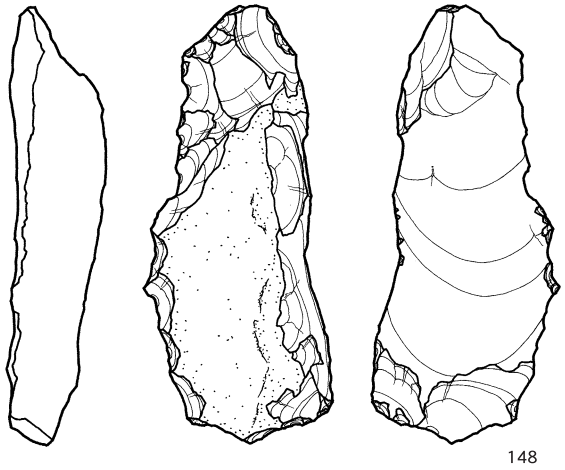
⑨ 石皿・台石（第25図156）

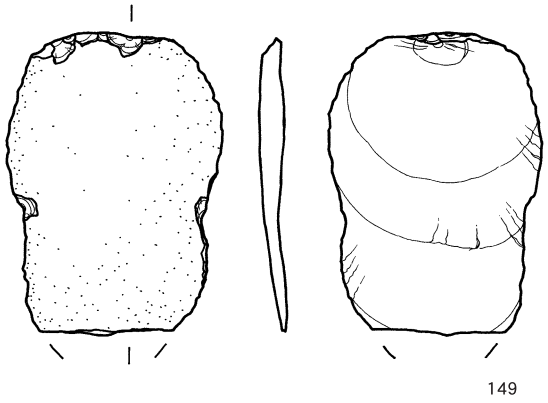
156は安山岩の扁平な円礫を用いた石皿・台石である。表裏面ともに磨滅した面が観察されるが，あまり使い込まれた様子はうかがえない。敲打によるものと思われる凹みもあり，台石としての用途もあったものと思われる。

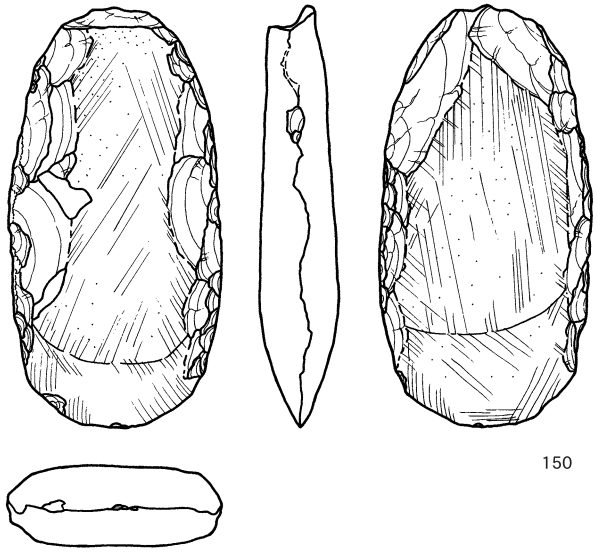


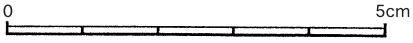
第22図　縄文時代早期の石器②



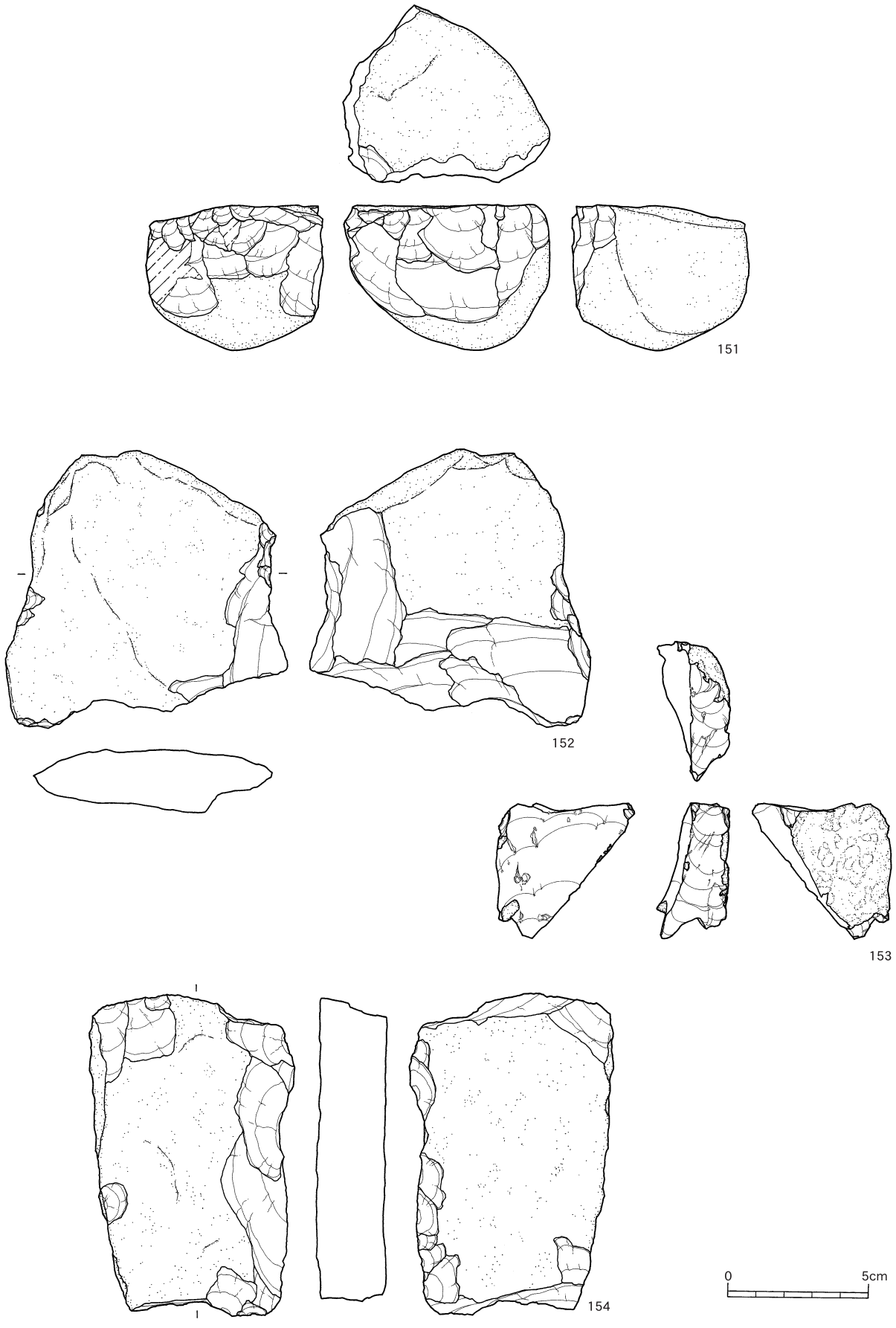




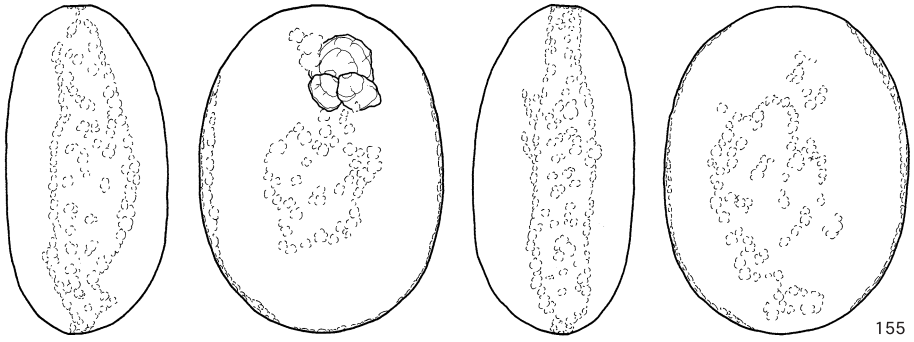


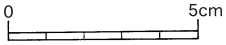


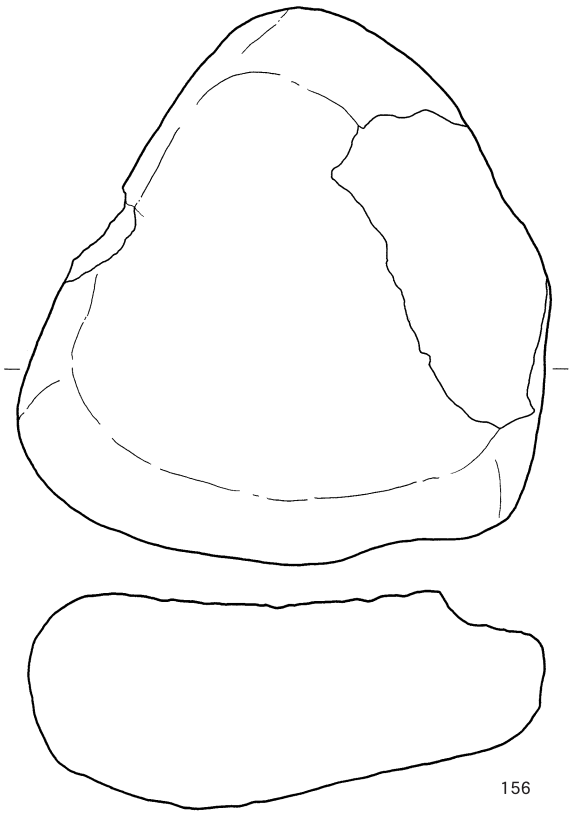
第23図　縄文時代早期の石器③

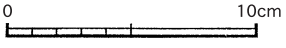


第24図　縄文時代早期の石器④









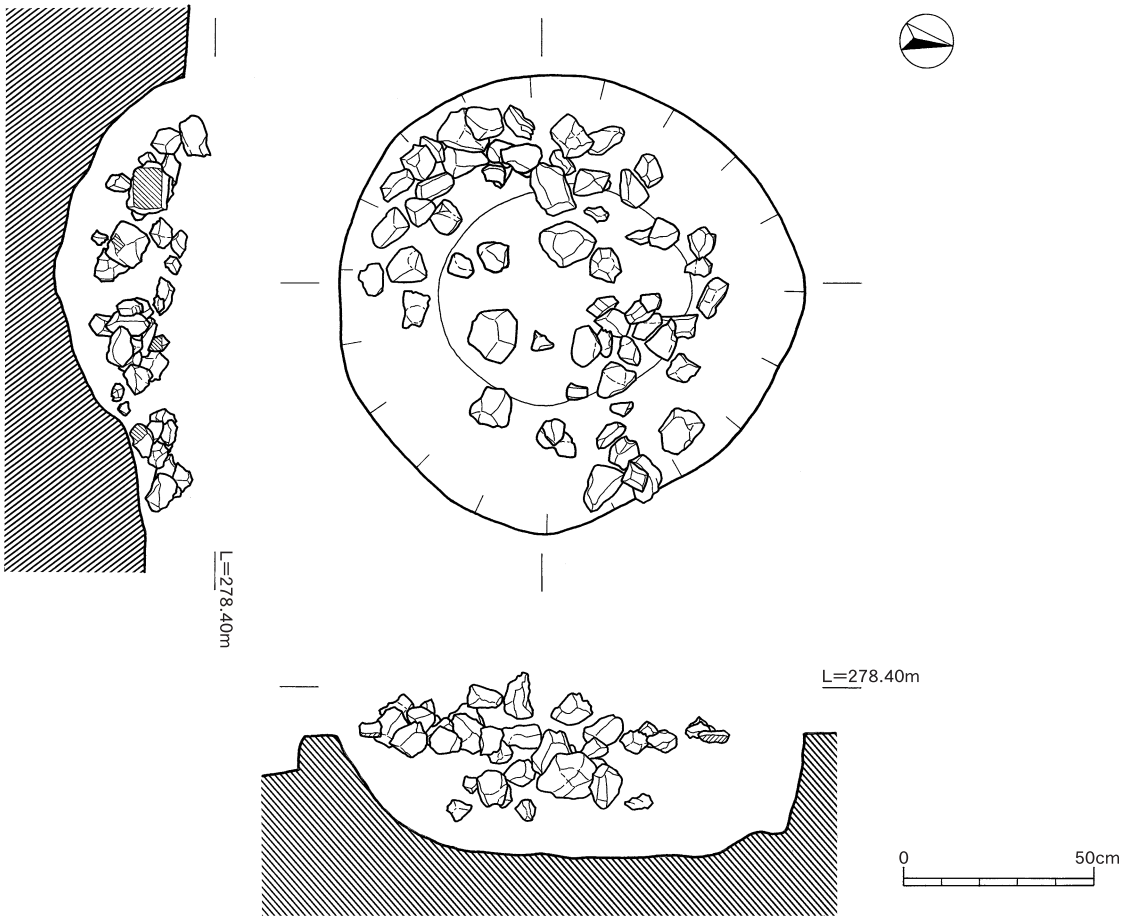
第25図　縄文時代早期の石器⑤

4　その他（平成17年度調査分追加資料　縄文時代早期　集石31号）

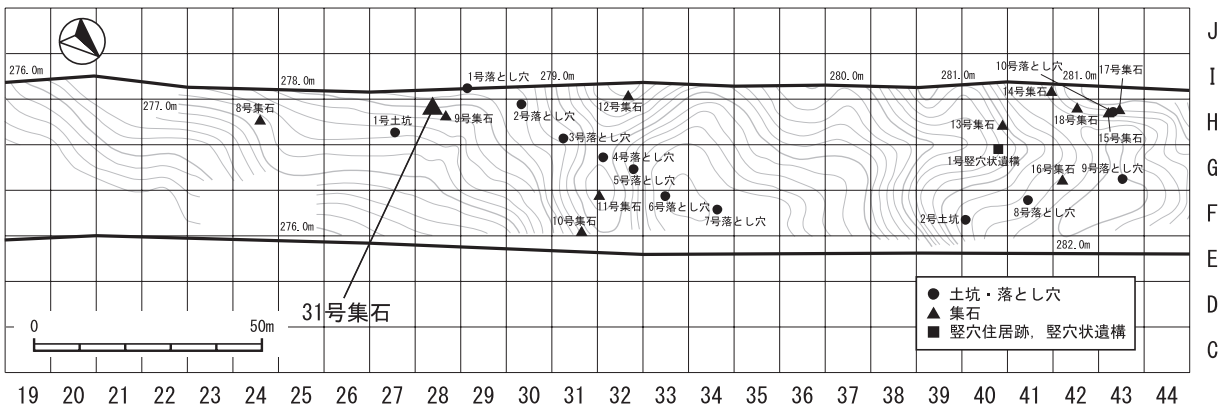
建山遺跡において，平成17年度の本調査で検出した集石遺構であるが，平成20年度刊行の報告書（鹿埋文報139）から記載漏れした資料である。平成17・18年度の調査で集石遺構は合計30基報告されているので，31号集石として報告する。

31号集石はH－28区Ⅶ層下部から検出された。直径約120㎝のほぼ円形のプランで，深さ34㎝の深皿状の掘り込みを持つものである。掘り込みの埋土下部には炭化物を多く含む黒色土が堆積しており，その上に礫がまとまって入れられている状況である。礫は拳大のものが多く，被熱により赤化したものやひびが入っているものが多い。礫の総数は65個で，石材は安山岩が主体である。

平成17年度調査区の遺構配置を含めた集石31号の位置図を下に示す。



第26図　集石31号



第27図　集石31号周辺遺構配置図

第３節　縄文時代前期の調査

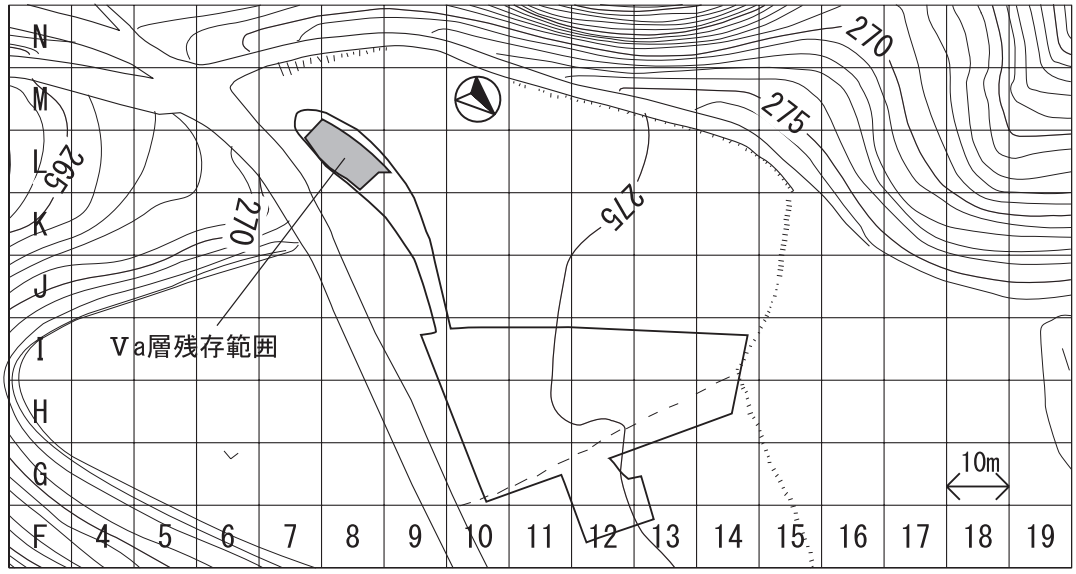
１　調査の概要

遺跡地内はボラ抜き※や天地返し等の造成により深く撹乱されており，包含層の残りはよくなかったが，付け替え道路部分の南端近くで縄文時代前期の包含層（Ｖａ層）が残存しており，そこから轟式土器，曽畑式土器が出土した。第28図にＶａ層残存範囲を示す。

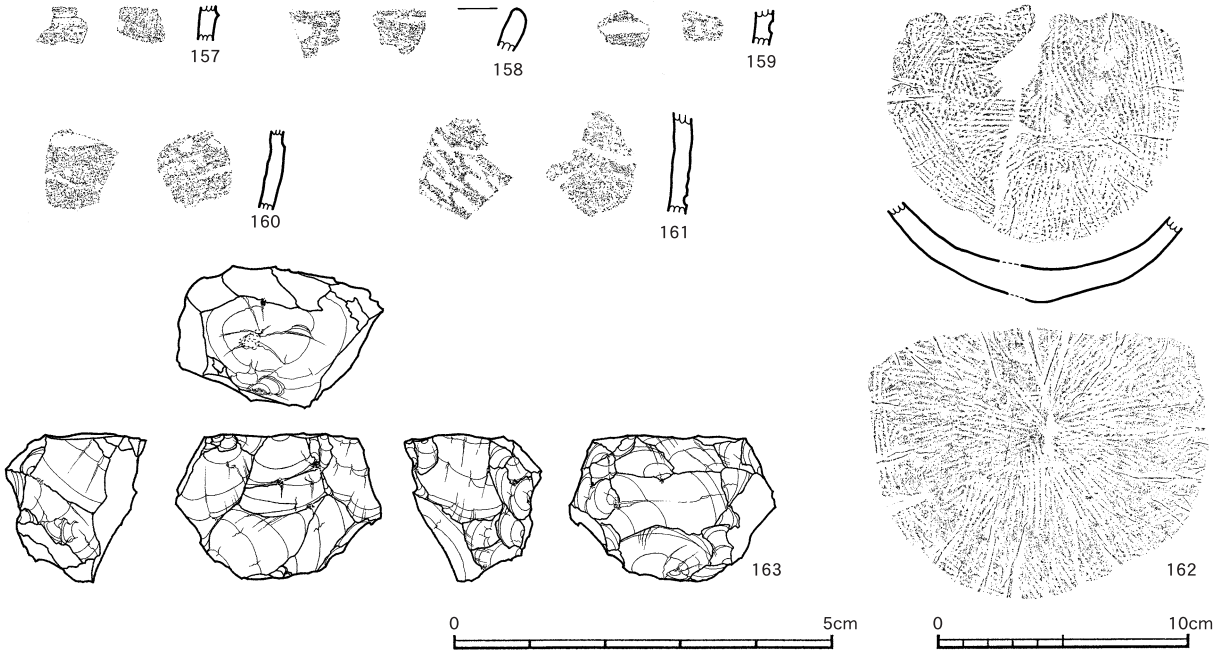
※ボラ抜き　文明年間に降下した桜島起源の軽石が厚く堆積する地域で，営農に不利益を及ぼすこの軽石層を除去する作業のこと。

２　遺物（土器：第29図157～162，石器：第29図163）

157は微隆突帯を貼り付けている。158は口唇部を丸く収めた口縁部，159～161は横位や斜位の凹線が施されたものである。162は尖底状の底部で，内外面ともに貝殻条痕が施されている。157，162は轟式土器，その他は曽畑式土器であると考えられる。163は黒曜石製の小型の石核である。



第28図　Ｖａ層残存範囲



第29図　縄文時代前期の土器

第４節　縄文時代中期の調査

１　調査の概要

縄文時代中期の遺物は出土しなかったが，Ⅶ層上面で３基の落とし穴が検出された。埋土に御池火山灰を含むことから，縄文時代中期の遺構と判断した。落とし穴の形状は長方形から隅丸長方形で，底面にはいずれの落とし穴からも小ピットが３か所ずつ検出された。

第30図に周辺地形と落とし穴配置図を示す。

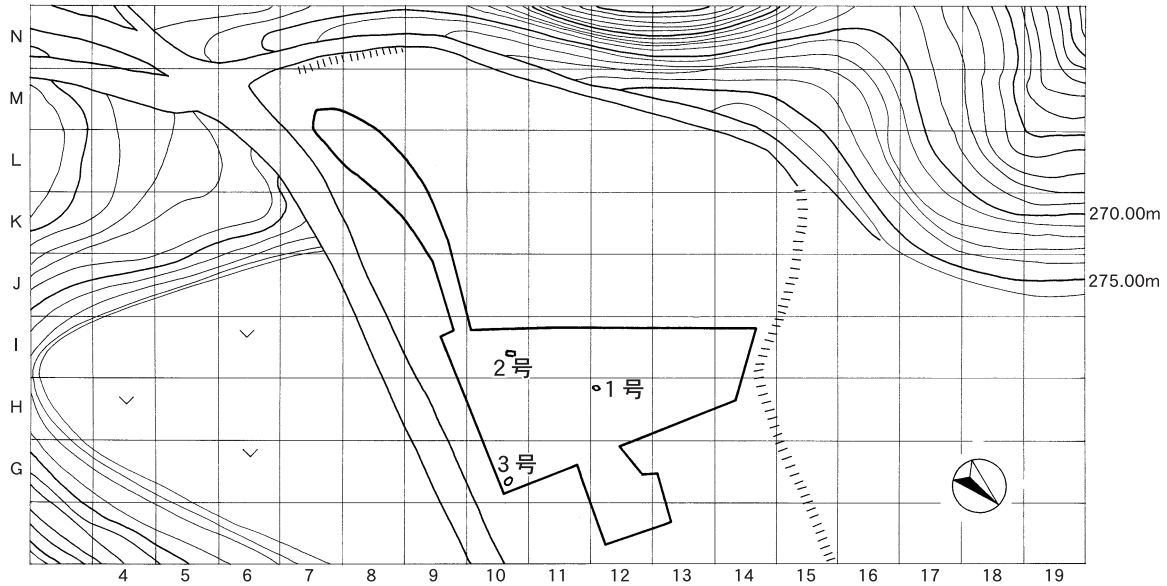
２　遺構

⑴　１号落とし穴（第31図上）

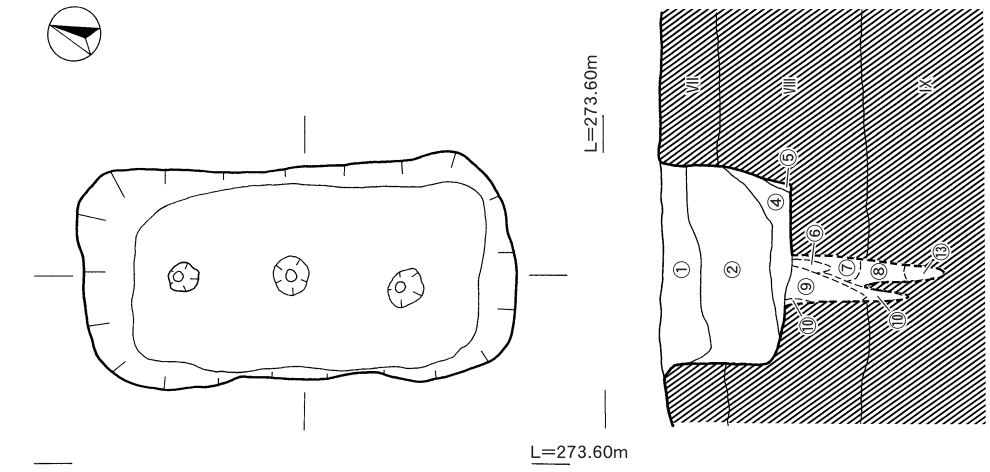
Ｈ－12区のⅦ層上面で検出された。平面プランは長径114㎝，短径58㎝の隅丸長方形で，長軸方向はＮ－20°－Ｗである。掘り込みはユニットバスのような形状で，検出面からの深さは36㎝である。底面からは長軸に並んで３か所の小ピットが検出された。小ピットの大きさは北側から直径８㎝，深さ34㎝，中央が直径９㎝，深さ44㎝，南側が直径12㎝，深さ30㎝である。先端に向かって尖っていく形状で，硬質のⅨ層（薩摩火山灰層）まで達している。埋土の主体はパミスを含んだ黄橙色土で，Ⅳｂ層（御池火山灰）を含んでいる。小ピット内にはＰ11やＰ13を含む黒褐色・茶褐色土が含まれる。遺物は含まれていなかった。

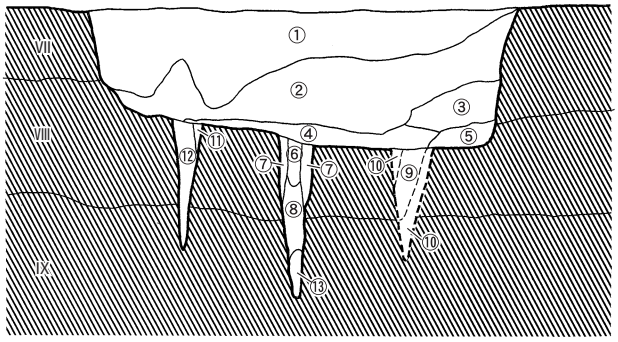
⑵　２号落とし穴（第31図下）

Ｉ－10区のⅦ層上面で検出された。平面プランは長径120㎝，短径61㎝の長方形で，長軸方向は１号落とし穴と同じＮ－20°－Ｗである。検出面からの深さは46㎝で，ほぼ垂直に掘り込まれている。底面は平坦面をなし，３か所の小ピットが検出された。大きさは北側から直径８㎝，深さ42㎝，中央が直径９㎝，深さ46㎝，南側が直径６㎝，深さ40㎝である。１号の小ピットより細身で，まさに杭を突き刺したような形状である。硬質のⅨ層を掘り抜き，先端はＸ層に達している。主体となる埋土は黄褐色火山灰土で，下部にはそれに由来すると思われるパミス層が入っている。小ピット内には暗褐色土が含まれる。遺物は含まれていなかった。



第30図　周辺地形と落とし穴配置図（10ｍグリッド）

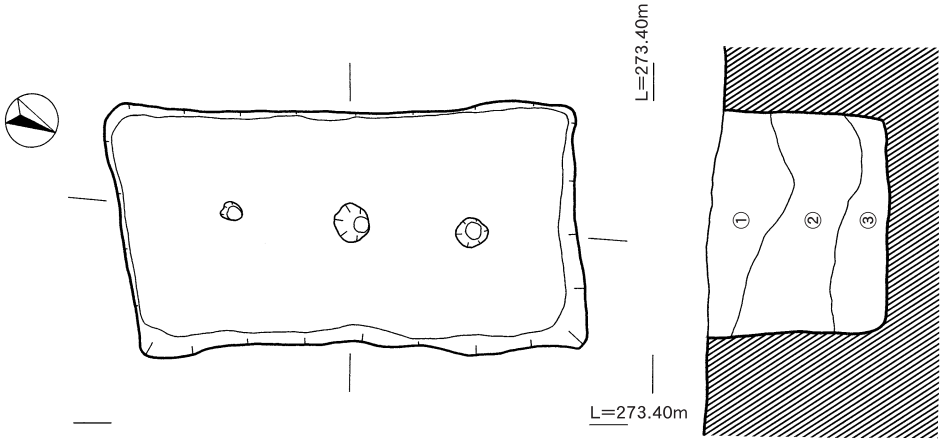


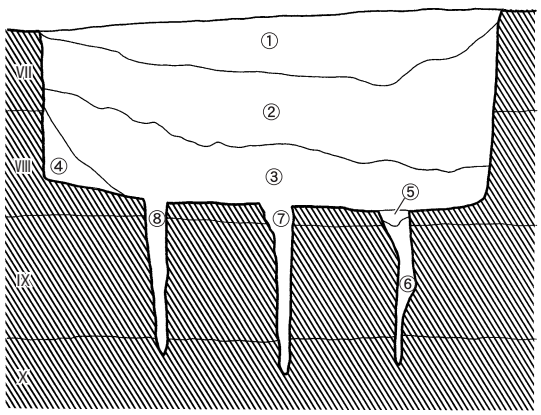


1号落とし穴
① 黄橙色粘質土（パミス混じり）
② 黄橙色弱粘質土
③ ①にやや黒みが混ざる
④ 黒色土と黄橙色土の混土
⑤ 黒色土
⑥ P11を含む黄橙色土　パサパサ感
⑦ 黒褐色弱粘質土
⑧ 茶褐色土（黄色の粒混じり）
⑨ P13を含む茶褐色土
やわらかく粘り気有り
⑩ ⑦に同じ
⑪ ⑦に同じ
⑫ ⑨に同じ
⑬ 明黄橙色細粒土　硬質

0 50cm

1号





2号落とし穴
① 黄橙色火山灰（御池火山灰相当）
② 黄色パミス（御池由来？）
③ 黄褐色土
④ 茶褐色土（パミス混じり）
⑤ 黒褐色土
⑥ 暗褐色土
⑦ 暗褐色土
⑧ 暗褐色土（P11を多く含む）

0 50cm

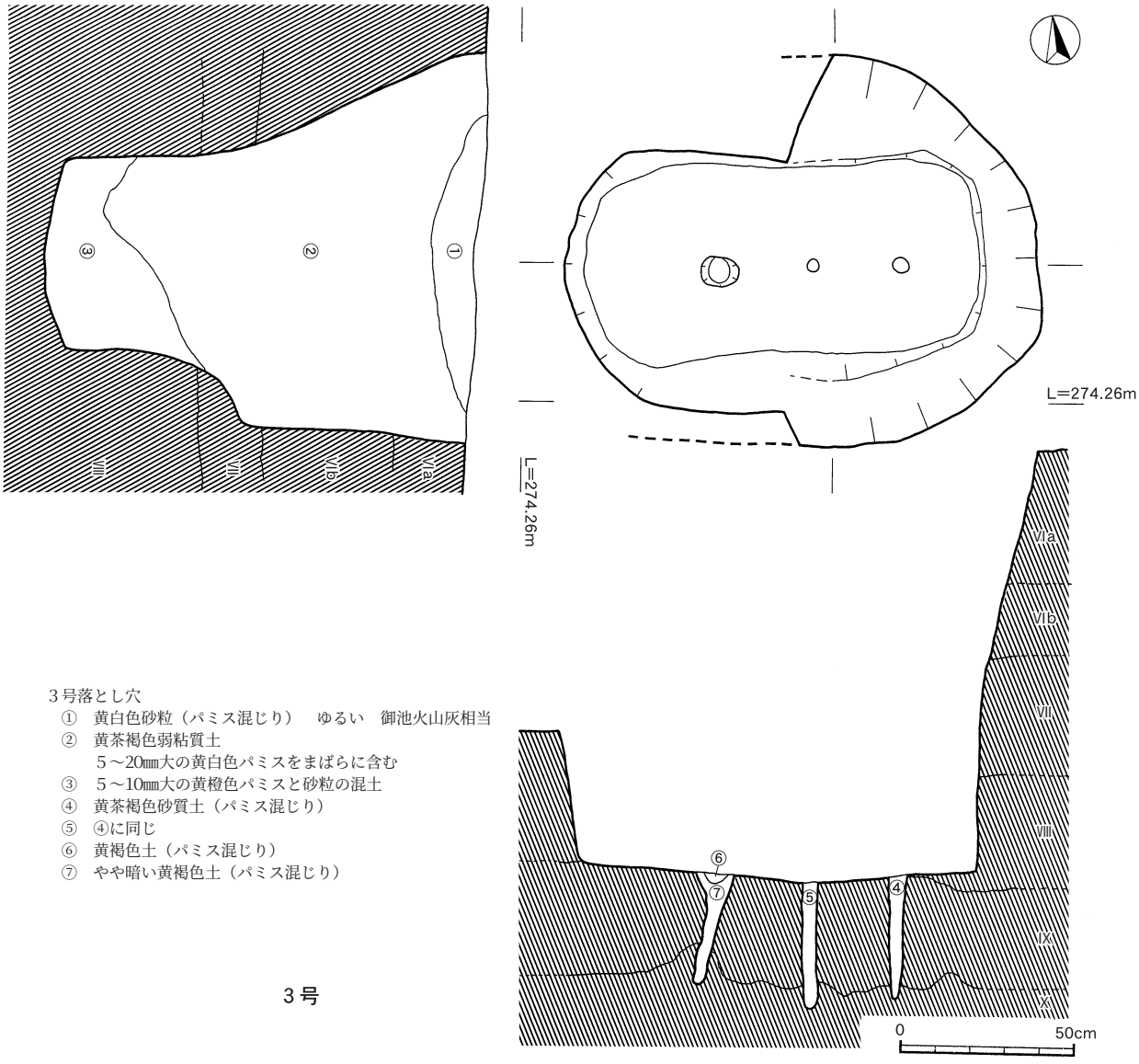
2号

第31図　1・2号落とし穴

⑶　３号落とし穴（第32図）

Ｇ－10区で検出されたが，西側半分が削平されているために形状・規模がはっきりしない。残存部でみると，平面プランは長径138㎝，短径112㎝の隅丸長方形を呈し，深さは122㎝あり，ほぼ垂直に掘り込まれている。長軸方向はＮ－80°－Ｗであり，１号・２号とは並びを異にする。埋土はＰ11パミスをまばらに含む黄茶褐色土が主であり，下部には崩落したＰ11パミスが堆積していた。最上面のくぼみには御池パミスが堆積している。底がＸ層に達している小ピットが３か所みられる。大きさは東側が直径５㎝，深さ36㎝，中央が直径５㎝，深さ38㎝，西側が直径10㎝，深さ30㎝で，西側のピットは入り口が広い形状になっている。先端は尖っており，各１本の細い木を使ったものと思われる。ピット内には，パミス混じりの黄茶褐色砂質土が埋もれている。

平成17・18年度の調査では，29区から49区あたりで縄文時代早期の落とし穴が13基検出されているが，前期から中期にかけての落とし穴は検出されていない。



３号落とし穴
① 黄白色砂粒（パミス混じり）　ゆるい　御池火山灰相当
② 黄茶褐色弱粘質土
　５～20㎜大の黄白色パミスをまばらに含む
③ ５～10㎜大の黄橙色パミスと砂粒の混土
④ 黄茶褐色砂質土（パミス混じり）
⑤ ④に同じ
⑥ 黄褐色土（パミス混じり）
⑦ やや暗い黄褐色土（パミス混じり）

３号

第32図　３号落とし穴

第１表　出土土器観察表①

挿図番号	遺物番号	取上番号	レベル	地区	層位	部位	調整		色調		胎土					焼成	備考
							（外）	（内）	（外）	（内）	石英	長石	角閃	輝石	他		
8	1	266, 237外21	272. 27	I-10･11	Ⅶ, Ⅷ	口縁～胴部	貝殻条痕 ナデ	ナデ	暗褐色	暗褐色	○	○	○			良	外面スス付着
9	2	434, 379	272. 46	I-10	Ⅶ	口縁	貝殻条痕	ケズリ ナデ	灰褐色	茶褐色	○	○		○		良	補修孔あり
	3	549, 599	272. 35	3号住	埋土	口縁	貝殻条痕	ケズリ ナデ	灰褐色	灰褐色	○	○		○		良	
	4	293, 389, 595	272. 36	I-10･11	Ⅷ	口縁	貝殻条痕	ケズリ ナデ	暗赤茶褐色	暗赤茶褐色	○	○		○		良	
	5	235	272. 81	I-11	Ⅷ	口縁	貝殻条痕	ケズリ ナデ	暗赤茶褐色	暗赤茶褐色	○	○		○		良	
	6	291, 292	272. 94	I-10	Ⅶ, Ⅷ	口縁	貝殻条痕	ケズリ ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○		○	赤岩片	普	
	7	262	272. 82	I-11	Ⅷ	胴部	斜位貝殻条痕	ナデ	暗褐色	暗赤褐色	○	○		○		良	
	8	283	273. 18	I-10	Ⅶ	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	灰褐色	灰褐色	○	○		○		普	
	9	609	272. 39	3号住	埋土	胴部	斜位貝殻条痕	ケズリ ナデ	茶褐色	暗褐色	○	○		○		良	
	10	6, 282, 74	273. 16	I-10･11	Ⅶ	口縁	貝殻条痕	ケズリ ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	○	○		普	
	11	438	272. 56	3号住	埋土	胴部	斜位貝殻条痕	ケズリ	赤褐色	暗褐色	○	○				良	
	12	245	272. 86	I-11	Ⅷ	胴部	斜位貝殻条痕	ケズリ	褐色	茶褐色	○	○		○		良	
	13	279	272. 75	I-10	Ⅷ	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	茶褐色	暗茶褐色	○	○	○			良	
	14	478	272. 57	3号住	埋土	胴部	斜位貝殻条痕	ナデ	黄褐色	灰褐色	○	○				良	外面スス付着
	15	597	272. 28	3号住	埋土	胴部	横位貝殻条痕	ナデ	暗褐色	暗褐色	○			○		良	
	16	578	272. 56	3号住	埋土	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	暗褐色	灰褐色	○					良	
	17	601	272. 38	3号住	埋土	胴部	斜位貝殻条痕	ナデ	黒褐色	暗褐色	○	○		○		良	
	18	238	272. 70	I-11	Ⅷ	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	暗褐色	茶褐色	○	○		○		良	
	19	284	273. 18	I-10	Ⅶ	胴部	斜位貝殻条痕	ケズリ ナデ	褐色	暗褐色	○	○				普	
	20	250	272. 79	I-11	Ⅷ	胴部	貝殻条痕	ケズリ	茶褐色	暗褐色	○	○				良	
	21	303	272. 60	I-11	Ⅷ	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	暗褐色	灰褐色	○	○				普	スス付着
	22	606	272. 35	3号住	埋土	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	黒褐色	茶褐色	○	○		○		良	
	23	491	272. 58	3号住	埋土	胴部	斜位貝殻条痕	ナデ	黒褐色	灰褐色	○	○				良	
	24	608	272. 39	3号住	埋土	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	茶褐色	赤褐色	○	○		○		普	
10	25	488	272. 38	3号住	埋土	底部	ナデ	ナデ	褐色	褐色	○	○	○	○	火山ガラス	良	内外スス付着
	26	440, 442	272. 55	3号住	埋土	胴部	斜位貝殻条痕 ナデ	ケズリ ナデ	灰褐色	黒褐色	○	○		○		良	
	27	437, 9	272. 67	I-11	Ⅶ	胴～底部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	茶褐色	灰褐色	○	○	○	○		良	
	28	248, 562外19	272. 42	I-10･11	Ⅶ, Ⅷ	胴～底部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	黄橙	黄橙	○	○		○		良	
	29	574	272. 08	3号住	埋土	胴部	ナデ	ケズリ ナデ	暗褐色	暗褐色	○	○		○		良	
	30	460	272. 58	3号住	埋土	胴部	ナデ	ケズリ	明茶褐色	暗褐色	○				火山ガラス	良	
	31	258, 206	272. 85	I-11･12	Ⅷ	胴部	ナデ	ケズリ ナデ	明茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○		良	
	32	207, 464	272. 42	I-11	Ⅶ下	胴部	ナデ	ケズリ ナデ	茶褐色	茶～暗茶褐色	○	○		○		良	
	33	602, 561外2	272. 41	I-10･11	Ⅶ	胴部	ナデ	ケズリ	褐色	茶褐色	○	○	○	○	赤岩片	普	スス付着
	34	471	272. 37	3号住	埋土	胴部	ナデ	ケズリ 工具ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○				良	
	35	234	272. 69	I-11	Ⅷ	胴部	ナデ	ケズリ ナデ	明茶褐色	褐色	○	○		○		良	
	36	428	272. 65	3号住	埋土	胴部	ナデ	ケズリ ナデ	赤褐色	黒褐色	○					良	
	37	294, 240外2	273. 10	I-10･11	Ⅷ	胴部	ナデ	ケズリ ナデ	茶褐色～褐色	茶褐色～褐色	○	○		○	火山ガラス・赤岩片	良	
	38	486, 484外4	272. 36	I-10･11	Ⅶ, Ⅷ	胴部	ナデ	ケズリ ナデ	暗褐色	褐色	○	○		○	赤岩片	良	外面スス付着
	39	342, 457外8	272. 52	I-10･11	Ⅶ, Ⅷ	口縁～胴部	ナデ	ケズリ ナデ	褐色～茶褐色	褐色～茶褐色	○	○	○	○	赤岩片	良	外面スス付着
11	40	270, 260外7	272. 60	I-10･11	Ⅶ, Ⅷ	胴部	ナデ	ケズリ ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○		○	赤岩片	良	
	41	271, 273外2	272. 91	I-10･11	Ⅶ, Ⅷ	胴部	ナデ	ケズリ	暗茶褐色	茶褐色	○	○		○		良	
	42	272	272. 89	I-10	Ⅶ下	胴部	ナデ	ケズリ ナデ	暗茶褐色	茶褐色	○	○		○		良	
	43	336, 269	272. 93	I-10	Ⅷ	胴部	ナデ	ケズリ ナデ	暗褐色	茶褐色	○	○		○	赤岩片	良	
	44	11, 251外9	272. 49	I-10･11	Ⅷ	胴部	ナデ	ケズリ ナデ	褐色～茶褐色	赤茶褐色	○	○		○	赤岩片	良	スス付着
	45	546	272. 39	3号住	埋土	胴部	貝殻条痕	ケズリ	暗褐色	茶褐色	○	○		○	金雲母	良	
	46	304	272. 69	I-11	Ⅷ	胴部	斜位貝殻条痕	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○			金雲母	良	
	47	462, 27	272. 40	I-11	Ⅶ	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	明茶褐色	明茶褐色	○	○				普	
	48	255, 391外3	272. 49	I-11	Ⅶ, Ⅷ	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	明茶褐色	暗茶褐色	○	○		○		良	
	49	432, 564	272. 46	3号住	埋土	胴部	貝殻条痕	ケズリ	茶褐色	茶褐色	○	○		○	金雲母	良	
	50	448, 449	272. 49	3号住	埋土	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	灰褐色	灰褐色	○	○		○		良	
	51	236	272. 80	I-11	Ⅷ	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○		○		良	
	52	232	272. 85	I-11	Ⅷ	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	茶褐色	暗茶褐色	○	○			金雲母	普	
12	53	295, 298外2	272. 56	I-11	Ⅷ	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	黒褐色	黄橙	○	○	○		赤岩片	良	
	54	480, 277外2	272. 55	I-10･11	Ⅶ, Ⅷ	胴部	貝殻条痕	ナデ	赤褐色	黄橙	○	○	○		赤岩片	良	
	55	318	272. 71	I-11	Ⅷ	胴部	貝殻条痕	ケズリ	灰褐色	明茶褐色	○	○	○		赤岩片	普	

第２表　出土土器観察表②

挿図番号	遺物番号	取上番号	レベル	地区	層位	部位	調整		色調		胎土					焼成	備考
							(外)	(内)	(外)	(内)	石英	長石	角閃	輝石	他		
12	56	1, 267, 288	273. 21	I-10･11	Ⅶ, Ⅷ	胴部	貝殻条痕	ケズリ	明茶褐色	灰褐色	○			○		普	
	57	244	272. 66	I-11	Ⅷ	胴部	ナデ	ケズリ	灰褐色	灰黒色	○	○		○		普	
	58	241	272. 47	I-11	Ⅷ	胴部	貝殻条痕	ナデ	暗褐色	明茶褐色	○	○		○		良	
	59	289	273. 19	I-10	Ⅶ	胴部	貝殻条痕	ケズリ	明茶褐色	灰黒色	○	○		○		普	
	60	454	272. 41	3号住	埋土	胴部	斜位貝殻条痕	ケズリ	黒褐色	暗褐色	○	○				良	
	61	63, 225	273. 14	I-11	Ⅶ	胴部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○		○	金雲母	良	
	62	233	272. 69	I-11	Ⅷ	胴部	ナデ	ケズリ ナデ	茶褐色	灰黒色	○	○			金雲母	良	
	63	472	272. 48	3号住	埋土	胴部	貝殻条痕	ケズリ	灰褐色	明茶褐色	○	○	○	○	赤岩片	良	
	64	455	272. 39	3号住	埋土	胴部	ナデ	ケズリ	褐色	灰黒色	○			○		普	
	65	247	272. 94	I-11	Ⅶ	胴部	ナデ	ケズリ	明茶褐色	明茶褐色	○	○		○	赤岩片	普	
	66	585	272. 48	3号住	埋土	胴部	ナデ	ケズリ	明茶褐色	灰褐色	○	○				良	
	67	589	272. 45	3号住	埋土	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	褐色	褐色	○	○			金雲母	良	
	68	212	272. 87	I-11	Ⅷ	胴部	ナデ	ケズリ	茶褐色	褐色	○	○			金雲母	良	
	69	500	272. 41	3号住	埋土	底部	ミガキ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○		○		良	
	70	590, 475	272. 35	3号住	埋土	底部	ミガキ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○		○		良	
14	73	402	272. 74	4号住	埋土	口縁	貝殻条痕	ケズリ ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○		○	赤岩片	良	
	74	405	272. 60	4号住	埋土	胴部	斜位貝殻条痕	ケズリ ナデ	茶褐色	赤褐色	○	○		○	赤岩片	良	
	75	401	272. 58	4号住	埋土	胴部	横位貝殻条痕	ケズリ(横)	明赤褐色	明赤褐色	○	○	○		赤岩片･火山ガラス	良	
	76	399	272. 69	4号住	埋土	底部	ナデ	ナデ	赤茶褐色	明茶褐色	○	○		○		良	
	77	406	272. 62	4号住	埋土	底部	ナデ	ナデ	赤茶褐色	明茶褐色	○			○		良	
16	81	155	273. 29	H-12	Ⅶ下	口縁	貝殻条痕	ケズリ ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○	○	○		良	胎土が三層
	82	407	273. 02	F-12	Ⅶ	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○		○		良	
	83	378	272. 78	I-10	Ⅷ	口縁	貝殻条痕	ケズリ ナデ	暗茶褐色	茶褐色	○	○	○	○		良	
	84	397	272. 69	I-10	Ⅷ	胴部	貝殻条痕	ケズリ	暗茶褐色	茶褐色	○	○	○			良	
	85	320	273. 35	H-10	Ⅶ下	胴部	貝殻条痕	ケズリ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○	○	○	赤岩片	良	
	86	152	273. 50	H-12	Ⅶ	胴部	斜位貝殻条痕	ナデ	茶褐色	黄褐色	○	○		○		良	
	87	347	272. 94	I-10	Ⅶ	胴部	貝殻条痕	ナデ	黒褐色	褐色	○	○	○	○		良	
	88	73	273. 29	I-11	Ⅷ, 横転	胴部	斜位貝殻条痕	ナデ	黄橙色	橙色	○	○	○	○		良	
	89	356, 360	272. 79	I-11	Ⅷ, 横転	胴部	横位貝殻条痕 ナデ	ケズリ ナデ	暗褐色	茶褐色	○	○		○		良	
	90	134	273. 38	I-12	Ⅶ	胴部	斜位貝殻条痕	ケズリ ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○		○	赤岩片	普	
	91	5	273. 24	I-11	Ⅶ	胴部	斜位貝殻条痕	ケズリ ナデ	黄橙色	灰褐色	○	○		○		良	
	92	145	273. 24	H-12	Ⅶ下	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○		○	赤岩片	良	
	93	150	273. 64	H-12	Ⅶ	胴部	斜位貝殻条痕	ナデ	灰褐色	灰褐色	○			○		良	
	94	85	273. 00	I-11	Ⅶ	胴部	貝殻条痕	ケズリ	赤茶褐色	茶褐色	○	○		○	赤岩片	普	表面剥離多し
	95	408, 409	273. 21	F-12	Ⅶ	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○		○	赤岩片	普	
	96	148	273. 59	H-12	Ⅶ	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	明赤褐色	明赤褐色	○	○	○		赤岩片	良	
	97	392	272. 69	I-11	Ⅷ	胴部	斜位貝殻条痕	ケズリ ナデ	暗褐色	明茶褐色	○	○	○		赤岩片	良	
	98	164, 153外3	273. 45	H-12･13	Ⅶ	胴部	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○		○	赤岩片	良	
17	99	110, 117	273. 16	I-12	Ⅶ	胴部	縦位貝殻条痕	ケズリ	暗褐色	赤茶褐色	○	○		○	赤岩片	良	
	100	182, 191, 192	273. 06	I-12	Ⅷ	胴部	縦位貝殻条痕	ケズリ	褐色	赤茶褐色	○	○	○	○		普	
	101	107, 109	273. 23	I-12	Ⅶ	胴部	縦位貝殻条痕	ケズリ ナデ	明茶褐色	赤茶褐色	○	○		○		良	
	102	93, 193外12	272. 81	H･I-12	Ⅶ, Ⅷ	胴部	縦位貝殻条痕 ナデ	ケズリ	明茶褐色	赤茶褐色	○	○	○	○	赤岩片	良	
	103	64, 376	272. 69	I-10･11	Ⅶ, Ⅷ	胴部	斜位貝殻条痕	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○		○		良	
	104	116, 133	273. 27	I-12	Ⅶ	胴部	縦位貝殻条痕	ケズリ	赤茶褐色	赤茶褐色	○			○	赤岩片	普	
	105	139	273. 33	H-12	Ⅶ	胴部	ナデ	ケズリ	赤茶褐色	暗褐色	○			○		普	
	106	358	273. 16	I-11	Ⅶ	胴部	ナデ	ケズリ	赤茶褐色	暗茶褐色	○	○	○	○		良	
	107	361	272. 78	I-11	Ⅷ	胴部	ナデ	ケズリ ナデ	茶褐色	褐色	○	○	○			普	
	108	204	273. 39	H-11	Ⅶ下	胴部	不明	ケズリ	灰褐色	明茶褐色	○	○	○			普	
	109	151	273. 62	H-12	Ⅶ	胴部	ナデ	ケズリ ナデ	赤茶褐色	茶褐色	○	○	○		赤岩片	普	
	110	168, 169, 185	273. 46	H･I-13	Ⅶ下	胴部	ナデ	ケズリ ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○		○	○	赤岩片	良	
	111	14, 25 外2	273. 41	I-11,H-12	Ⅶ	胴部～底部	ナデ	ケズリ	赤茶褐色	茶褐色	○	○	○			普	
	112	17, 331	273. 02	I-10･11	Ⅷ	胴部	ナデ	ケズリ	明茶褐色	明茶褐色	○	○	○		赤岩片･火山ガラス	良	
18	113	83	273. 09	I-11	Ⅶ	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○	○			良	
	114	26	273. 23	I-11	Ⅶ	胴部	ナデ	ケズリ	明茶褐色	明茶褐色	○	○	○			普	

第３表　出土土器観察表③

挿図番号	遺物番号	取上番号	レベル	地区	層位	部位	調整		色調		胎土					焼成	備考
							(外)	(内)	(外)	(内)	石英	長石	角閃	輝石	他		
18	115	345	273.12	I-10	Ⅶ	胴部	横位貝殻条痕	ケズリ	灰褐色	灰褐色	○	○				普	
	116	18	272.91	I-11	Ⅶ下	胴部	斜位貝殻条痕	ケズリ	暗褐色	暗褐色	○	○	○			良	
	117	91	273.32	I-12	Ⅶ	胴部	不明	ケズリ	明茶褐色	茶褐色	○	○	○	○		普	
	118	349, 384外2	272.88	I-10	Ⅶ	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	灰褐色	灰褐色	○	○	○			良	
	119	158	273.41	H-13	Ⅶ	胴部	ナデ	ケズリ	明茶褐色	明茶褐色	○	○	○		金雲母 赤岩片	普	
	120	136	273.36	H-12	Ⅶ	底部	ナデ	ケズリ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○	○		赤岩片	普	
	121	410	273.10	F-12	Ⅷ	胴部	貝殻条痕	ケズリ ナデ	明黄褐色	にぶい黄褐色	○	○	○			普	
	122	355	273.03	I-11	Ⅶ	底部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	○			普	
	123	3, 34, 35	272.98	I-11	Ⅶ	胴～底部	ナデ	ナデ	赤褐色	黄橙	○	○	○		赤岩片	良	
	124	118	272.23	I-12	Ⅶ	底部	縦位貝殻条痕	ケズリ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○	○	○	赤岩片	良	
	125	167, 372	272.69	I-10・13	Ⅶ, Ⅷ	底部	横位貝殻条痕 ナデ	ケズリ ナデ	明茶褐色	明茶褐色	○	○	○		赤岩片	良	
	126	57	273.10	I-11	Ⅶ	底部	ナデ	ケズリ	赤茶褐色	赤茶褐色						普	
	127	393	272.64	I-11	Ⅷ	底部側面	ナデ	ケズリ	茶褐色	茶褐色	○	○		○		良	
	128	188	273.05	I-11	Ⅶ下	底部	ナデ	ケズリ ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○		○	赤岩片	良	
	129	205	273.29	H-11	Ⅶ下	底部	ナデ	ケズリ ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○	○			良	
20	130	131	273.37	I-12	Ⅶ	口縁	ナデ	ナデ	褐色	茶褐色	○	○	○			普	
	131	141	273.34	H-12	Ⅶ	胴部	不明	ナデ	褐色	褐色	○	○	○	○		不	
	132	149	273.50	H-12	Ⅶ	胴部	ナデ	ナデ	茶褐色	暗茶褐色	○	○		○		良	
	133	126	273.21	I-12	Ⅶ	胴部	ナデ	ケズリ ナデ	茶褐色	褐色	○	○	○			普	
	134	146	273.32	H-12	Ⅶ	胴部	ナデ	ケズリ ナデ	茶褐色	暗褐色	○	○	○	○		普	
	135	219, 213外31	272.90	I-11	Ⅶ, 横転	口縁～胴部	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	○	○	○			良	外面スス付着
29	157	568	271.94	M-8	Va	胴部	ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	○	○				良	薄くスス付着
	158	532	272.16	M-8	Va	口縁	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○		○		良	
	159	531	272.11	L-8	Va	胴部	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	○	○	○		火山ガラス	良	
	160	528	272.16	L-8	Va	胴部	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○	○		岩片	普	
	161	570, 542	272.14	M・L-8	Va下	胴部	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	○	○	○			普	
	162	503, 504, 507	271.82	L-8	Va	底部	貝殻条痕	貝殻条痕	明茶褐色	明茶褐色	○	○	○			良	

第４表　出土石器観察表

挿図番号	遺物番号	取上番号	地区	層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
12	71	607	3号住	埋土	礫器	11.2	12.3	2.5	488.0	ホルンヘルス	
	72	604	3号住	埋土	軽石加工品	12.9	7.6	4.9	145.0	軽石	
15	78	404	4号住	埋土	石皿	13.5	11.6	6.4	1090.0	安山岩	
	79	422	4号住	埋土	石皿	9.8	9.8	5.6	620.0	安山岩	
	80	426	4号住	埋土	磨石	9.9	6.7	5.0	495.0	砂岩	
21	136	310	H-10	Ⅷ	打製石鏃	1.7	1.6	0.2	0.4	黒曜石	
	137	33	I-11	Ⅶ	打製石鏃	2.2	1.6	0.3	0.7	チャート	
	138	170	I-13	Ⅶ下	打製石鏃	1.8	1.6	0.4	0.6	安山岩	
	139	10	I-11	Ⅶ	打製石鏃	2.6	2.6	0.5	2.5	チャート	先端部欠損
	140	162	H-13	Ⅶ	打製石鏃	4.6	2.2	0.4	3.6	頁岩	磨面あり
	141	161	H-13	Ⅶ	剥片	1.7	1.0	0.5	0.6	黒曜石	
22	142	159	H-13	Ⅶ	石匙	3.7	4.4	1.1	15.7	チャート	
	143	79	I-11	Ⅶ	石匙	3.5	3.7	0.9	8.7	チャート	約1/3欠損
	144	171	I-13	Ⅶ下	スクレイパー	4.4	3.6	1.4	17.0	黒曜石	
	145	307	G-11	Ⅶ	スクレイパー	3.8	4.1	1.2	17.2	チャート	
	146	306	H-11	Ⅶ	スクレイパー	3.4	4.0	1.0	10.8	チャート	
23	147	108	I-12	Ⅶ	剥片	3.8	5.2	0.6	11.3	チャート	一部欠損あり
	148	177	I-13	Ⅶ	スクレイパー	5.8	2.5	1.3	16.2	チャート	
	149	308	G-11	Ⅶ	剥片	4.0	2.8	0.4	4.9	砂岩	一部欠損あり
	150	166	I-13	Ⅶ	磨製石斧	5.6	2.8	1.1	24.7	頁岩	つぶれ・摩耗あり
24	151	314	G-10	Ⅶ下	石核	5.2	7.4	6.3	310.0	砂岩	
	152	88	I-12	Ⅶ	礫器	9.9	10.0	2.3	230.0	頁岩	
	153	128	I-12	Ⅶ	剥片	4.8	2.6	4.9	41.2	黒曜石	
	154	121	I-12	Ⅶ下	礫器	11.5	7.3	2.5	390.0	花崗岩	
25	155	175	I-13	Ⅶ	磨石	8.7	6.5	4.3	370.0	砂岩	
	156	321	H-10	Ⅶ下	石皿	22.0	20.9	8.2	4500.0	安山岩	
29	163	543	L-8	Va	コア	2.7	1.9	1.7	9.5	黒曜石	

第Ⅲ章　まとめ

今回の調査をもって，東九州自動車道建設に伴う建山遺跡の発掘調査は終了した。ここではこれまでの調査の成果も踏まえつつ，竪穴住居跡が出土した縄文時代早期前葉の建山遺跡についてまとめてみたい。

1　竪穴住居跡について

今回の調査では縄文時代早期前葉と考えられる２軒の竪穴住居跡を検出した。平成18年度の調査でも２軒検出されているので計４軒となる。平面プランは１号・２号が隅丸方形，３号は隅丸長方形を呈し，いずれも竪穴内外に柱穴は検出されなかった。４号は竪穴の一部の調査であり，竪穴内に浅い窪み状のピットを１基検出したが，柱穴であるかは判断できなかった。

隅丸方形や隅丸長方形の平面プランはこの時期の竪穴住居跡によく見られる形状であり，柱穴が検出されない例も多い。しかしながら竪穴外部に柱穴が存在する可能性は否定できず，竪穴の掘り込み面の問題から後述する。

竪穴住居跡の床面積については，１号が5.1㎡，２号が3.4㎡，３号が8.5㎡である。ほぼ同時期の竪穴住居跡が多数発見されている南九州の遺跡例を見ると，加栗山遺跡（鹿児島市）が8.47㎡，前原遺跡（鹿児島市）が6.01㎡，上野原遺跡（霧島市）が7.3㎡，定塚遺跡（曽於市）が5.34㎡※であることから，ほぼ同規模の住居サイズであると言えよう。なお，１号竪穴住居跡から出土した炭化物を測定した暦年較正用年代は，8961±40yrBPと報告されている。

2　竪穴住居跡の掘り込み面について

南九州では縄文時代早期の集落跡が各地で発見されているが，竪穴住居跡の大方が薩摩火山灰層上面で検出されているのが現状である。その原因は薩摩火山灰層の上を黒色土が覆っており，住居跡内の埋土と違いが見出せないことに起因する。しかし，その掘り込み面が薩摩火山灰上位の黒色土中にあることは，遺物の出土状況や集石遺構の検出状況からも明らかであると考えられている。

こうした様相の中，今回は４号住居跡が工事によって地表から検出面まで地層を見れること，３号住居跡は多くの土器が住居の周辺に集中していることなどから掘り込み面を深るべく慎重に調査を進めたが，今回もその検出はできなかった。黒色土内の石粒などの違いなどもこまかく比較したものの，その違いを見出すことはできなかった。

そこで，遺物の出土状況からその掘り込み面を推定することとし，竪穴住居跡検出前の包含層出土として取り上げた遺物も含めた垂直方向の出土状況を検討した（第５図参照）。結果は第Ⅱ章第２節２遺構の項（P313）に記した通りである。住居内の上下で接合する遺物の上限と，周囲の遺物の下限のレベルがほぼ同じ（検出面より20～30㎝高いレベル）であり，そのあたりに竪穴住居の掘り込み面（当時の地表面）が推定できそうである。図面を提示していないが，短軸方向の断面に投影した垂直分布でも同様な結果が認められた。このことから当時の竪穴の深さを復元すると，検出面からの深さが20～30㎝である３号住居跡の場合は，40～60㎝程の深さがあったものと考えられる。

また，このことは竪穴外部に柱穴が掘られていた場合，柱穴の深さが20～30㎝の範囲内であれば気づかずに掘り下げてしまっていることになる。そのような状況での調査方法を含め，竪穴外部に柱穴が存在する可能性については今後の検討課題としたい。

3　遺物について

縄文時代早期前葉の土器はⅠ類とした。Ⅰ類土器は貝殻条痕文の上に貝殻刺突文を施すもので，

加栗山式土器に比定される。本遺跡で出土しているⅠ類土器の口縁部には，すべて楔形の粘土紐貼付文（クサビ）が施されている。器形は円筒形・角筒形の他に，口縁部上面観がレモン形を呈するものとがある。数量的には円筒形が大部分を占めており，角筒形・レモン形は少ない。

地文となる貝殻条痕文は器面調整の結果が文様効果も表していると考えられるが，中には貝殻条痕が観察されず，器面をナデ調整した上に貝殻刺突文を施したものもある。よって加栗山式土器の器面調整には，貝殻条痕によるものとナデによるもの両方が存在すると言える。貝殻条痕文は横または斜位に施されるものがほとんどであるが，99～102のように縦方向に長いストロークで貝殻条痕文が施されているものがあり特筆される。

貝殻刺突文については，細い波線状を呈する刺突文と，方形の凹点状の刺突文が見られる。波線状の刺突文については貝殻腹縁を立てて刺突することにより施文できるが，方形の凹点状刺突文については施文具・施文方法がはっきりしていなかった。今回，鹿児島大学の本田道輝先生の御教示により，波線状の刺突文に使用するものと同様な貝殻を用いて，類似した文様を再現することができたのでその方法を以下に述べる。施文具とするのは凹凸のはっきりした貝殻腹縁を持つアナダラ属などの貝殻である。

図版１　方形押引刺突文の施文法

貝殻の外側（肋がある側）を自分の方に向けて縦位に持ち，少し斜めにして腹縁を器面に押し当てる。軽く刺突してそのまま横にわずかに引き，貝殻を器面から離すと方形の凹点状の文様が施文できる（図版１）。これを縦方向に移動しながら直線的に繰り返すことで，縦位の貝殻刺突文を施していると思われる。実験に用いた貝殻の大きさでは，腹縁のカーブにより直線的に施せるのは肋が３～４本分であるが，実際の土器では肋５～６本分のものもあり，貝殻の大きさや種類などまだ検討すべき課題も残している。

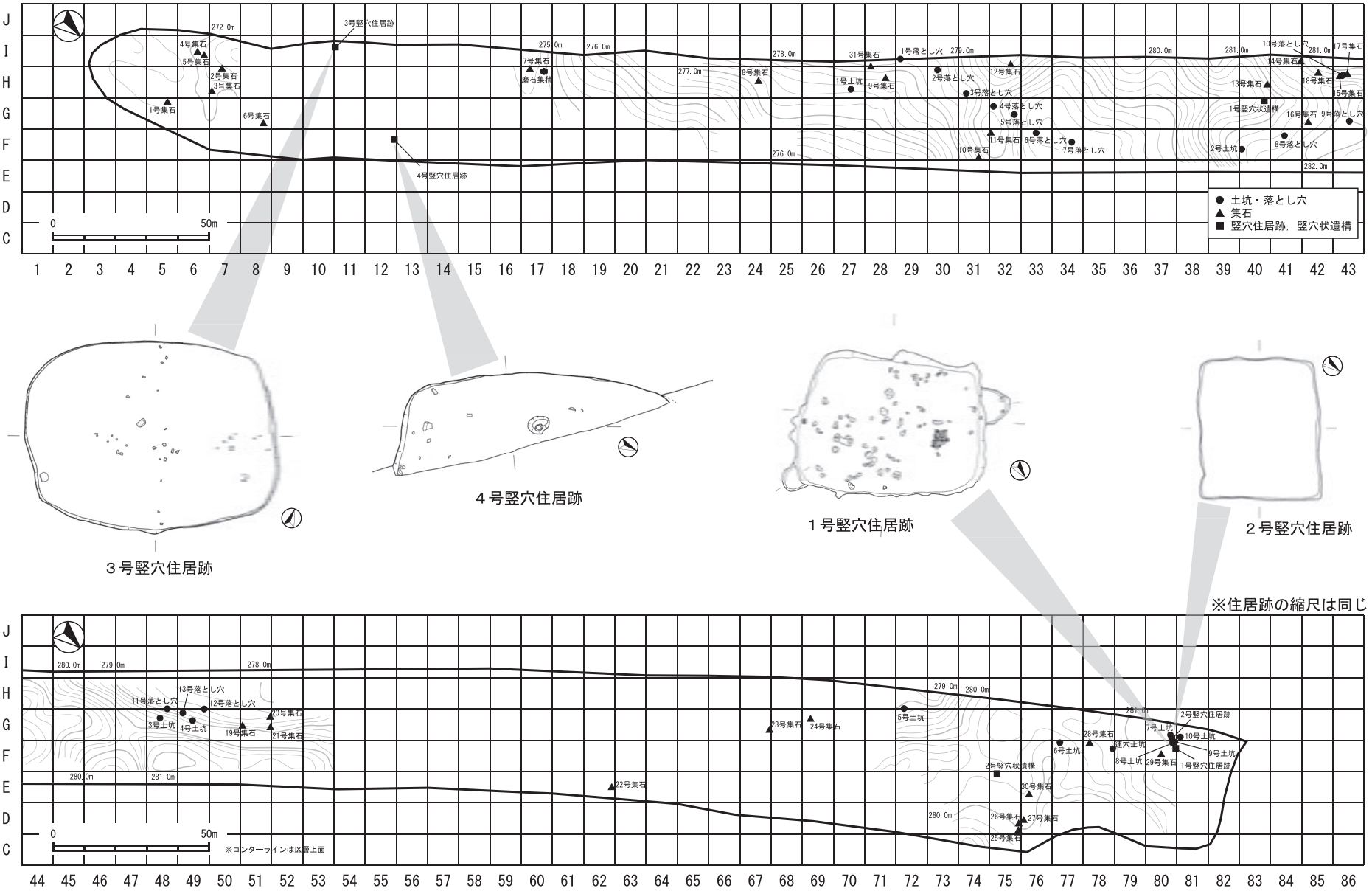
石器について特筆されるものは，４号竪穴住居跡から出土した石皿である。周辺を加工した定型的な石皿は，草創期から出土し早期前半で終わるものであるが，早期前半のものは指宿市岩本遺跡などのように使い込んで深く窪んでいる傾向があり，ここの石皿も同様の様相を示している。

４　全体を通して

当該時期の集落は縄文時代の他の時期の集落に比べて多様な遺構から成っている。つまり，竪穴住居・土坑・連穴土坑・集石遺構・道などである。建山遺跡では前の調査を加えて，竪穴住居跡４軒，竪穴状遺構２基，集石遺構31基，連穴土坑１基，土坑13基から成る。遺跡はさらに東西に広がる可能性はあるが，その中核部を高速道路は抜けていると思われる。

第33図に全体の遺構配置図を示したが，竪穴住居跡は遺跡のほぼ北端と南端に２軒ずつ位置し，直線距離で約650m離れている。この距離は同じ集落と考えるには無理があり，同時期に併存していた別々の集落か，どちらかに移動してきたのか，加栗山式土器を使用していた時間幅の中で考えていく必要があろう。また，集石遺構や土坑，落とし穴はその中間の30区～40区あたりに集中しており，集落の在り方や空間利用の在り方として今後の検討課題としたい。

※「定塚遺跡・稲村遺跡」　2010．３　鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書132　鹿児島県立埋蔵文化財センター



第33図　全体遺構配置図（縄文時代早期）

Ⅳ　西原段Ⅰ遺跡

第Ⅰ章　調査の経緯

第１節　調査に至るまでの経緯

東九州自動車道建設に伴い，埋蔵文化財の取り扱いについて交わされた鹿児島県教育委員会と各開発関係機関との協議の経緯については，Ⅰの第１章に記されたとおりである。その経緯を受けて西原段Ⅰ遺跡は，平成18・19年度に未買収地を除いた部分の確認調査・本調査を実施した。

平成18年度は遺跡の南側（Ａ地点）と北側（Ｂ地点），平成19年度は遺跡の南端（Ｃ地点）を調査した（第１図参照）。調査の結果，旧石器時代から縄文時代の早期，中・後期，古代～中世と長期に及ぶ遺構や遺物が発見された。特に注目される遺構は，縄文時代早期の集石遺構，古代～中世の硬化面を伴う道路状遺構，畑の畝跡，落とし穴などが挙げられる。遺物については組織痕文土器，中津野式土器，土師器，石鏃，磨石，石皿等が出土した。その調査成果については平成20年度に「鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（139）建山遺跡　西原段Ⅰ遺跡　野鹿倉遺跡」として刊行されている。

平成21年３月には用地取得できたＡ地点に隣接する部分（中央の市道より南側）の確認調査を行った。その結果，遺構・遺物ともに発見されなかった。

残りの未調査部分（中央の市道より北側）については，平成21年４・５月に確認・本調査を並行して実施することとなった。

調査は平成21年４月13日から５月26日の実働27日間行った。

第２節　調査の組織

１　**平成21年度**（本調査・報告書）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，鹿児島県土木部高速道対策室		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	山下　吉美
調査企画	〃	次長兼総務課長	齊藤　守重
	〃	次長兼南の縄文調査室長	青﨑　和憲
	〃	調査第二課長	彌榮　久志
	〃	主任文化財主事兼	
	〃	調査第二課第一調査係長	長野　眞一
調査担当	〃	文化財主事	大久保浩二
	〃	文化財研究員	藤島伸一郎
	〃	文化財調査員	岩下　直樹
作成担当	〃	文化財主事	大久保浩二
	〃	文化財研究員	藤島伸一郎
事務担当	〃	総務係長	紙屋　伸一

	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主　　査	髙﨑　智博
企画委員	〃	文化財主事	永濵　功治
報告書作成検討委員会	平成21年12月11日	山下所長ほか	９名
報告書作成指導委員会	平成21年12月２日	青崎次長ほか	２名
遺物指導	鹿児島大学法文学部	准教授	本田　道輝

第３節　調査の経過

調査の経過は，日誌抄により週単位で略述する。

平成21年４月13日（月）～４月17日（金）

調査機材搬入，ベルトコンベア設置。Ｂ～Ｄ－19～22区Ⅶ・Ⅷ層調査，土坑１号・２号検出。

平成21年４月20日（月）～４月24日（金）

Ｂ～Ｄ－19～22区Ⅶ・Ⅷ層調査。土坑１・２号調査。Ｅ－27区周辺の表土処理。約１ｍの造成土の下に文明ボラ層あり。土坑１号半掘・写真・埋土観察。土坑２号は横転と判断，写真撮影。１～４トレンチ設定。Ｂ～Ｄ－19～22区Ⅷ層まで調査終了。旧石器確認トレンチＡ～Ｃトレ設定。Ｂ・Ｃ－19区南側土層断面写真・断面実測。１トレンチ，Ⅸ層まで終了。Ｃ－20区，Ｃ－19区，Ｂ－21区旧石器確認トレンチ設定，Ⅹ・Ⅺ層調査。土坑１号完掘，写真，平面・断面図作成。１トレンチ拡張，Ⅹ・Ⅺ層調査。Ｂ～Ｅ－27・28区表土剥ぎ。

平成21年４月27日（月）～５月１日（金）

Ｂ・Ｃトレンチシラス上面まで掘り下げ終了，完掘状況撮影。Ｃトレンチ土層断面図作成。１トレンチ清掃，写真，土層柱状図作成。Ｂ～Ｅ－27・28区Ⅱ層～Ⅲｂ層掘り下げ。一部Ⅳ層掘り下げ。

Ｂ～Ｄ－19～22区Ⅸ層（サツマ）上面まで清掃，完掘状況撮影。遺物取り上げ（平板測量）。

平成21年５月７日（木）～５月８日（金）

Ｂ～Ｅ－27・28区Ⅳａ層～Ⅳｂ層掘り下げ，範囲図作成。５・６トレンチⅣａ層～Ⅵｂ層掘り下げ。２トレンチⅤａ層～Ⅻ層掘り下げ。

平成21年５月11日（月）～５月15日（金）

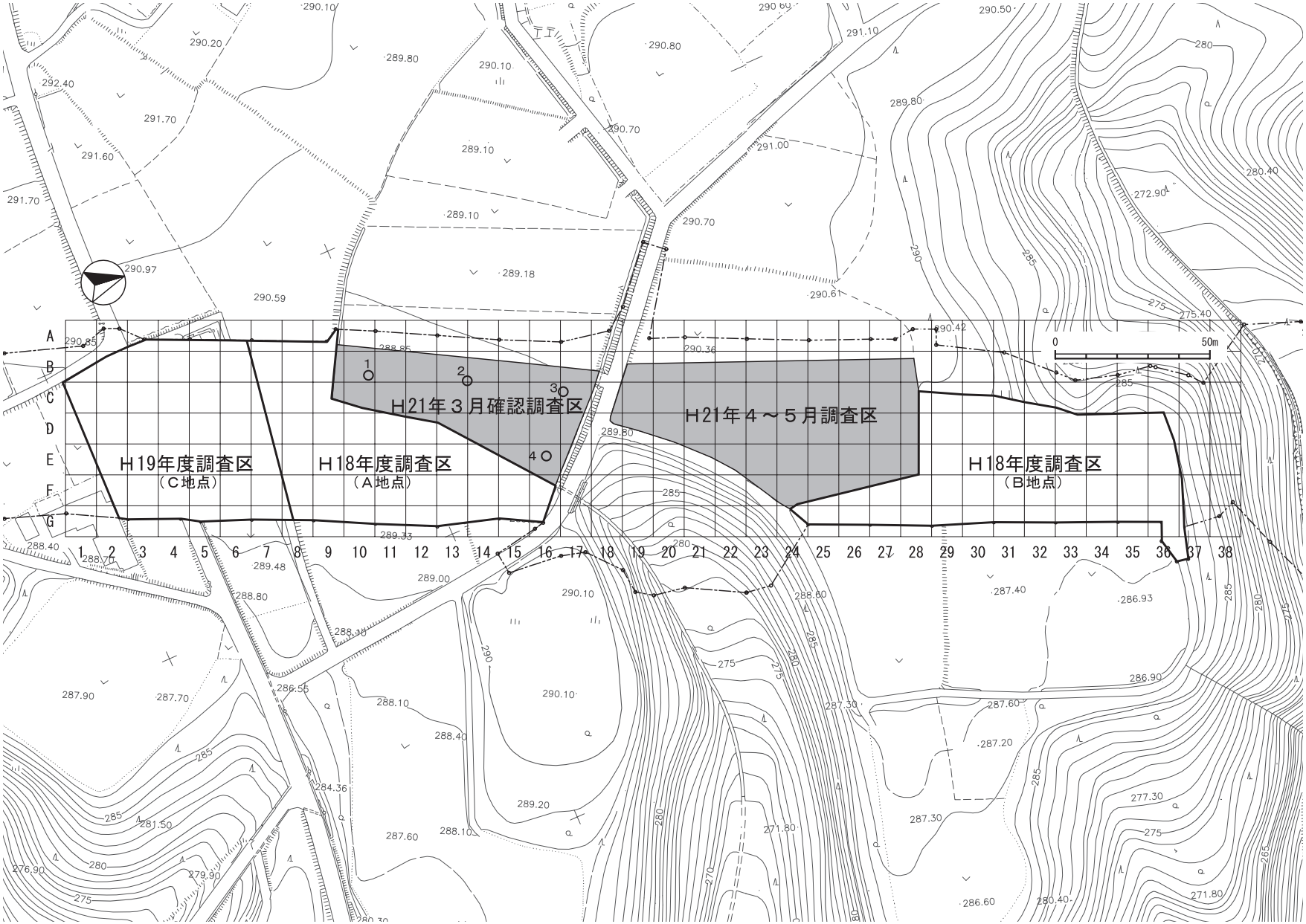
Ｃ・Ｄ－28区先行トレンチ２ヶ所Ⅴａ層掘り下げ。２トレンチ拡張区Ⅸ層上面写真撮影及びⅨ層～Ⅻ層掘り下げ。Ⅻ層・ⅩⅢ層写真撮影及び土層断面図作成。Ｃ－22・23区７トレンチⅦ層～Ⅸ層掘り下げ。範囲図作成（１・２・４・６・７トレンチ）。

平成21年５月18日（月）～５月22日（金）

Ｃ－22・23区７トレンチⅩ～ⅩⅥ層掘り下げ，完掘状況写真撮影及び柱状図作成。Ｃ－Ｄ－27・28区８トレンチⅨ～Ⅻ層掘り下げ，上面検出状況写真撮影。10トレンチⅦ・Ⅷ層掘り下げ。Ｄ・Ｅ－28区９トレンチⅥ～Ⅷ層掘り下げ。Ⅸ層上面検出写真撮影。Ｄ・Ｅ－27区10トレンチⅥ～Ⅷ層掘り下げ，Ⅸ層上面検出。11トレンチⅥ層掘り下げ。Ｃ－27区６トレンチⅥ～ⅩⅢ層掘り下げ，シラス検出状況写真撮影及び柱状図作成。Ｄ－27区11トレンチⅥ層掘り下げ。Ｃ～Ｄ－28区北壁土層断面清掃写真撮影。

平成21年５月25日（月）～５月26日（火）

Ｄ・Ｅ－27区10トレンチⅨ層完掘状況写真撮影，Ⅹ層掘り下げ。Ｄ－27区11トレンチⅧ層掘り下げⅨ層上面検出。Ｃ～Ｅ－27・28区の清掃及び全体の写真撮影，現場終了。



第１図　西原段Ｉ遺跡全体図

○１～４は確認調査トレンチ

第Ⅱ章　調査の概要

第１節　調査の方法・概要及び層位

調査区域は10m×10mのグリッドを設定して調査を行った。グリッドの設定は，平成18・19年度本調査のものを踏襲し，工事用基準杭STA262＋60とSTA262＋80の２点を結ぶ直線を基準軸とし，西側から東側に向かってＡ・Ｂ・Ｃ・・・，南側から北側に向かって１・２・３・・・とした。第２図に調査区のグリッド図を示す。

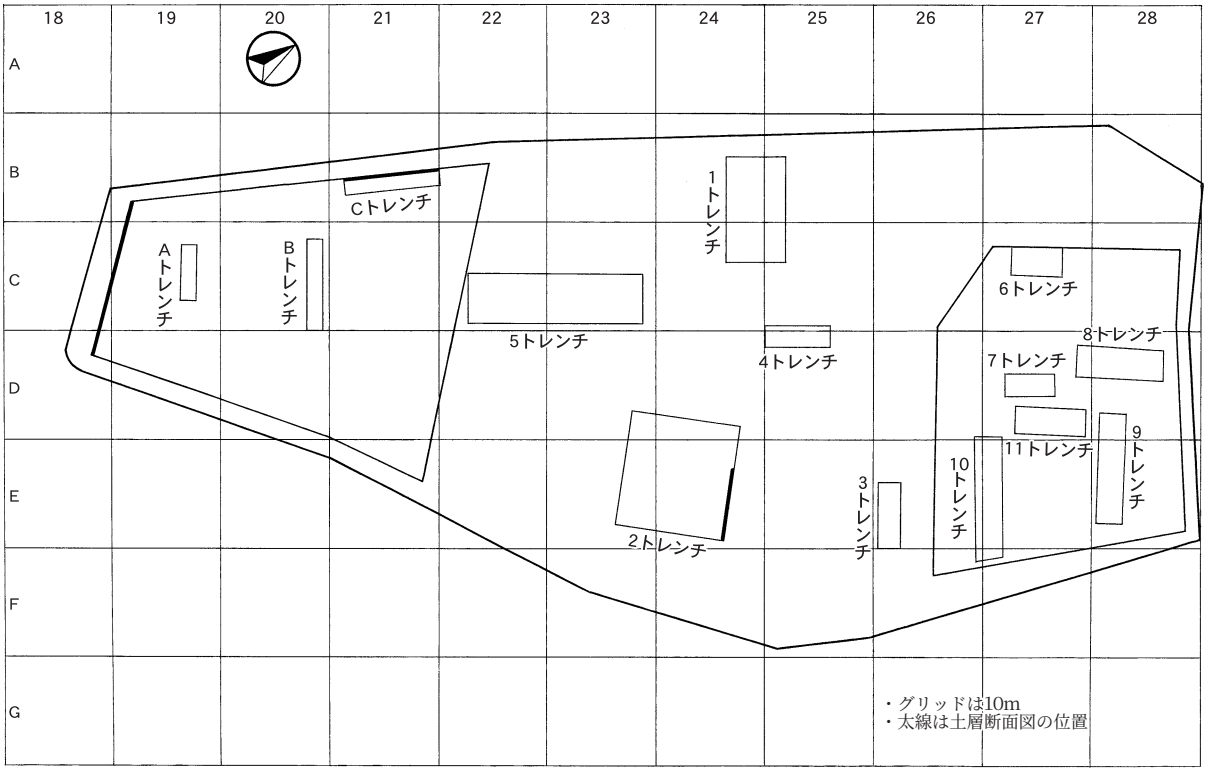
調査地は植栽が行われていたため，上部を伐採・撤去後調査に入った。樹根及び表土については，立ち会いの下，重機により除去したが，大部分が圃場整備による天地返しのため地表から３m近くまで撹乱を受けていた。

橋脚工事の関係で，Ｂ～Ｅ－21区から調査に入った。天地返しによる撹乱が深いため，Ⅵb層（Ｐ11火山灰）まで重機で除去し，Ⅶ層から人力で掘削を行った。またＡ・Ｂ・Ｃの３か所にトレンチを設定し下層確認をおこなったが，遺構・遺物ともに発見されなかった。

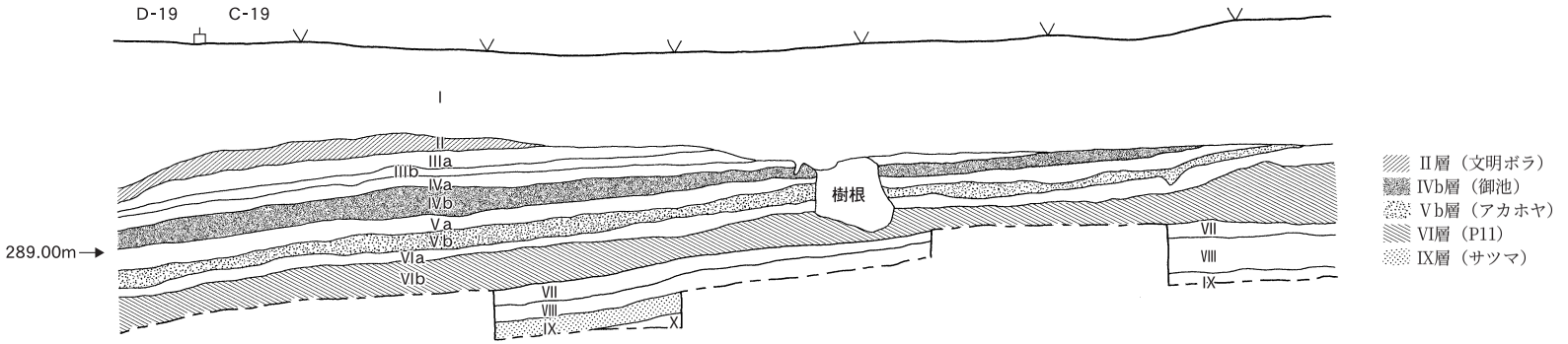
この範囲で土坑１基，遺物６点しか出土しなかったため，Ｂ～Ｆ－22～26区については５か所にトレンチを設定し，確認調査を行った。その結果，２トレンチのⅦ層から打製石鏃が１点出土したためトレンチを拡張して調査したが，他に出土は見られなかった。

Ｂ～Ｆ－26～28区については一部Ⅱ層の文明ボラ層が残存していたため，畑跡の存在を想定し慎重に調査を進めたが，畝跡等は検出されなかった。そのままⅣａ層までは全面的に掘り下げたが，遺構・遺物ともに発見されなかった。その後，６～11トレンチを設定し下層の確認を行ったが，同様に遺構・遺物ともに発見されなかった。

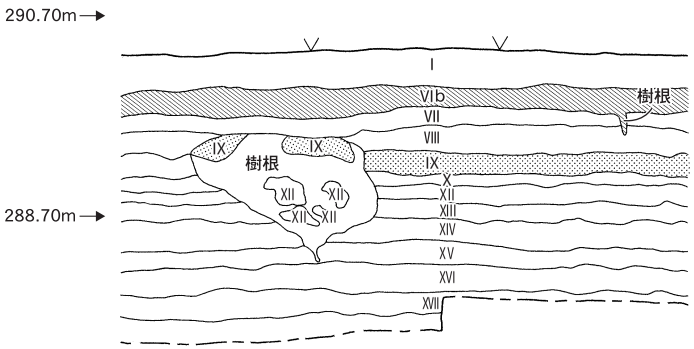
層位はⅠ－第５章（９頁参照）に記されている通りである。第３図に遺跡内の土層図を示す。



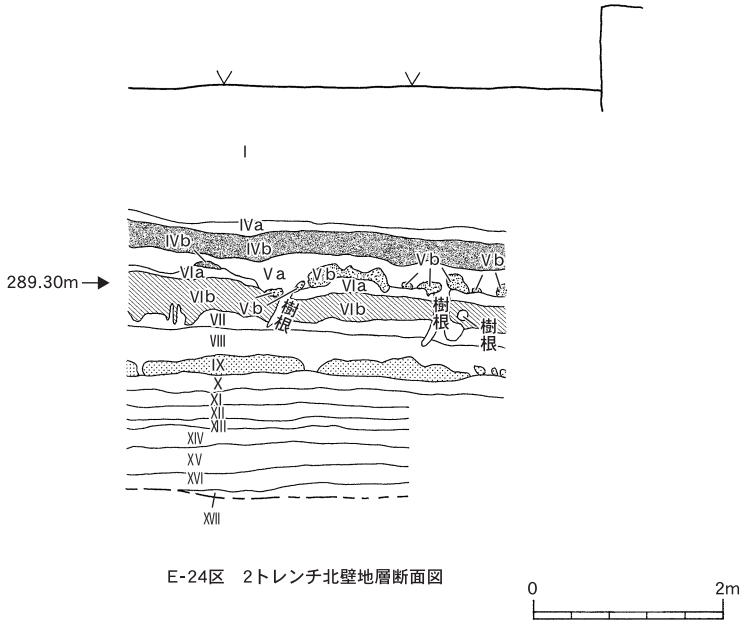
第２図　調査区グリッド図及びトレンチ配置図



C-19区　南壁地層断面図



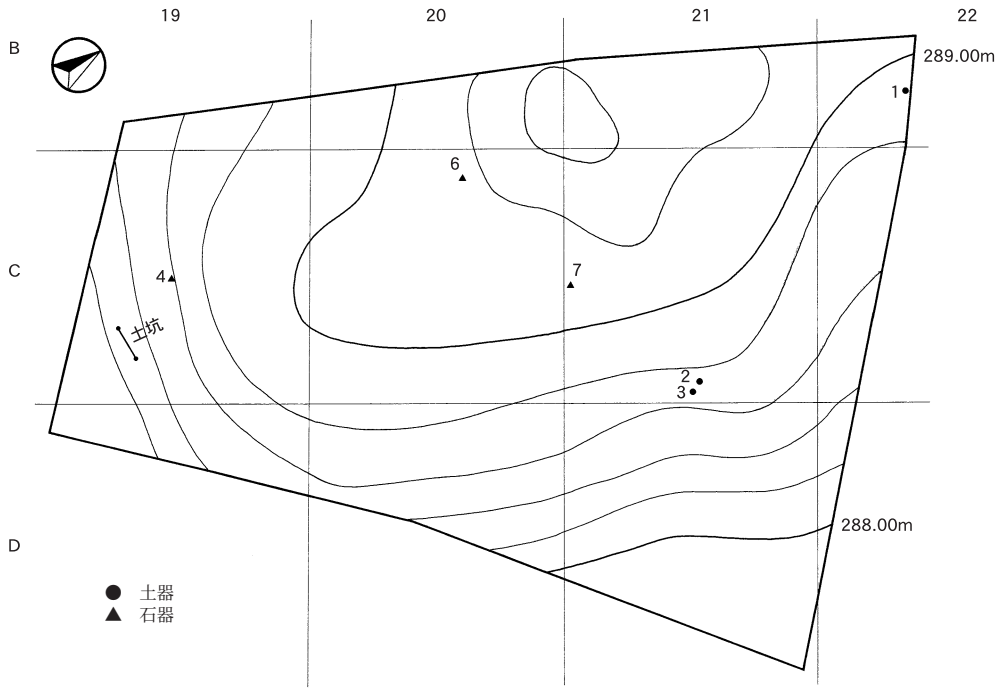
B-21区　Cトレンチ西壁地層断面図



E-24区　2トレンチ北壁地層断面図

0　2m

第３図　土層断面図

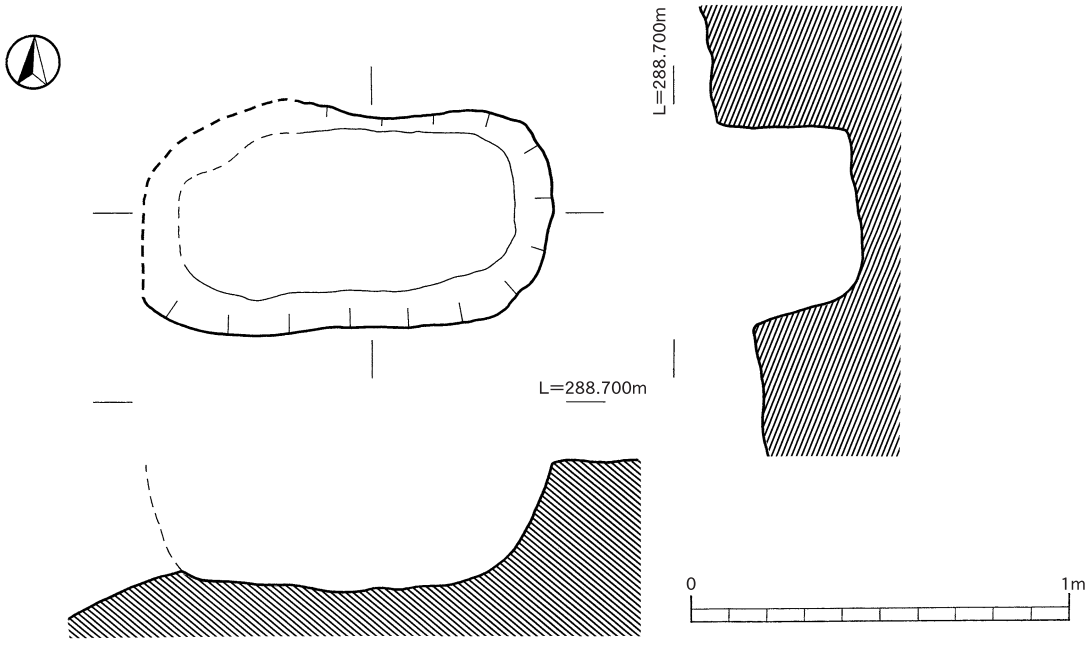


第４図　Ⅸ層上面コンタ図と土坑位置図・遺物出土地点

第２節　遺構

１　土坑（第５図）

Ｃ－19区のⅨ層（薩摩火山灰層）上面で検出された土坑である。検出面でのプランは長軸が108㎝，短軸は55㎝の隅丸長方形で，軸線はＮ－100°－Ｗである。東側から延びる谷へ下る傾斜面に掘られている。検出面からの深さは約25㎝であるが，上部はかなり削平されているので，当初はある程度の深さがあった可能性もある。埋土は黄褐色砂粒土の単一で，白い砂粒を多く含み，５～10㎜程度の黄色パミスが混ざっている。これはⅣｂ層（霧島御池火山灰層）に相当するもので，よって土坑は縄文時代前期から中期の遺構と考えられる。底面の断ち割りも行ったが，小ピットの痕跡は検出されなかった。



第５図　土坑

第３節　遺物

遺物は縄文時代早期前半の包含層であるⅦ層・Ⅷ層から出土した。土器３点，打製石鏃２点，磨石・敲石１点，石皿１点である。５の打製石鏃のみが２トレンチⅦ層からの出土で，他はすべてＢ～Ｅ－21区のⅦ・Ⅷ層からの出土である。

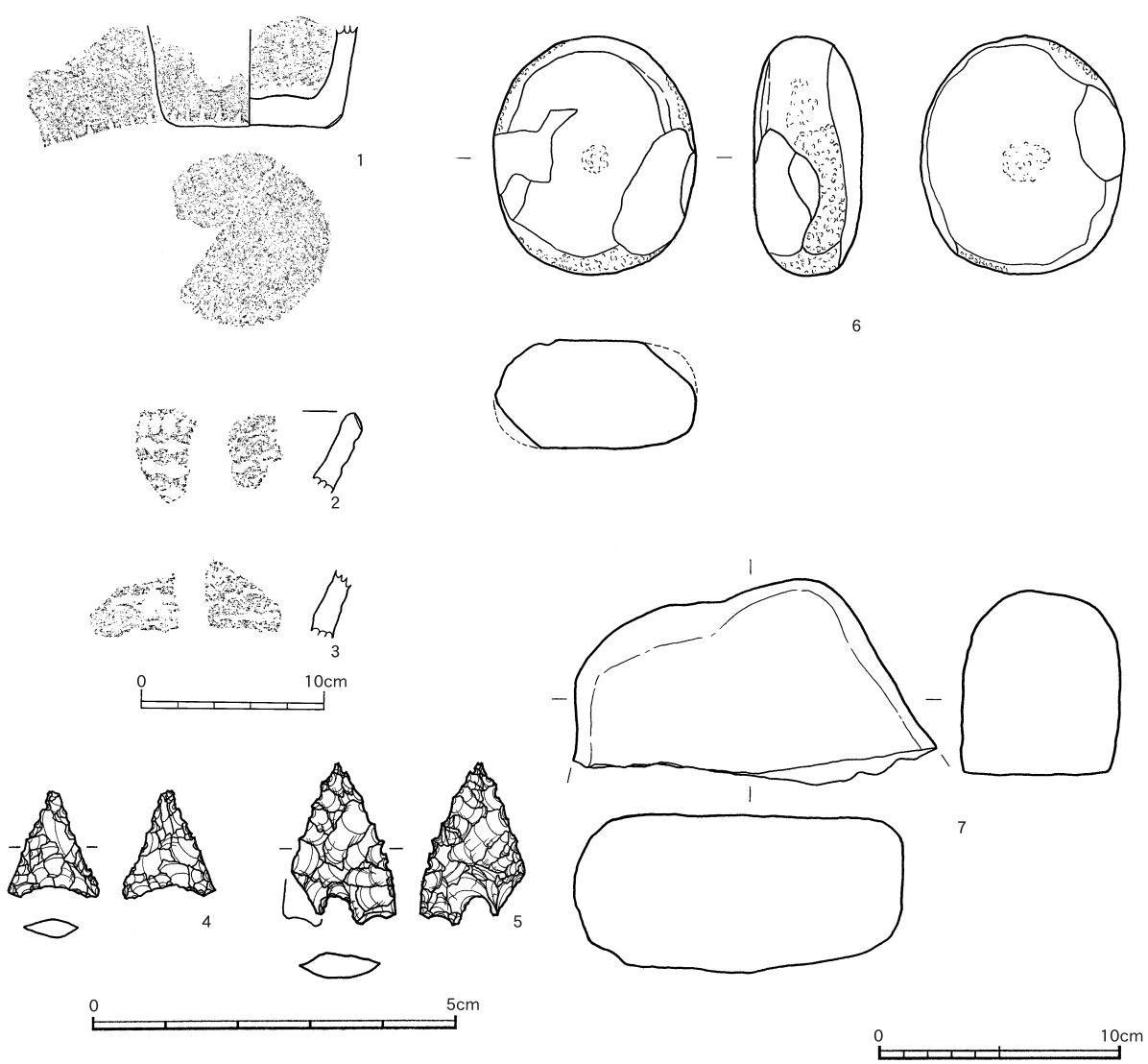
１　土器（第６図１～３）

１は底径５㎝を測る小型土器の底部である。高さ３㎝ほどしか残存していないが，外面は丁寧なミガキで仕上げられており，底部から胴部の立ち上がり部分に，短い縦の刻みを等間隔に施している。内面には指ナデの痕が観察される。

２，３は楕円押型文土器の小片である。Ⅷ層から出土した。

２は口縁部の小片で，口唇部には縦の刻みを施し，胴部外面には楕円押型文が横方向に施されている。内面にも浅く楕円押型文が観察されるが，施文後にナデ調整されている。

３は胴部の屈曲部分である。外面は米粒状の楕円押型文が施されたのちにナデられている。内面は屈曲部より上位には浅い楕円押型文が観察されるが，下位にはケズリ痕のみである。



第６図　出土遺物

2　石器（第６図４～７）

４は正三角形状を呈する小型の打製石鏃で，基部はやや内湾している。石材は透明感のある黒曜石である。Ⅷ層から出土した。

５は２トレンチのⅦ層から出土したもので，二等辺三角形状を呈する打製石鏃である。両端はやや鋸歯状に剥離を施し，基部には深い抉りを施し脚部を作り出している。石材は黒みを帯びたチャートである。

６は磨石・敲石である。表・裏面に磨り面が観察され，両面とも中央には凹石状のごく浅い敲打痕が残る。全周には敲打痕が巡り，一部は敲打により欠損したと見られる。石材は砂岩である。

７は石皿の破片である。やや肉厚で扁平な安山岩の転石を利用し，表面には明瞭な磨滅面が観察される。６の磨石とは約６m離れて出土している。

第１表　出土土器観察表

挿図番号	遺物番号	地区	層位	部位	調整		色調		胎土				焼成	備考
					（外）	（内）	（外）	（内）	石英	長石	角閃	他		
6	1	B-22	Ⅶ	底部	ミガキ	指ナデ	明茶褐色	明茶褐色	○	○	○		良	
	2	D-21	Ⅷ	口縁部	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○	○		良	
	3	D-21	Ⅷ	頸部	ナデ	ナデ	茶褐色	暗茶褐色	○	○	○		良	

第２表　出土石器観察表

挿図番号	遺物番号	地区	層位	器種	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
6	4	C-19	Ⅷ	打製石鏃	1.5	0.2	0.5	黒曜石	
	5	2T E-24	Ⅶ	打製石鏃	2.2	0.4	1.0	チャート	
	6	C-20	Ⅶ	磨石	9.9	4.4	530.0	砂岩	
	7	C-20	Ⅶ	石皿	15.1	6.6	970.0	安山岩	

第Ⅲ章　まとめ

今回の調査地は平成18・19年度に行われた調査地のほぼ中央にあたるため，これまで以上の調査成果が期待されたが，天地返し等の撹乱が多かったことや，東側からの谷が大きく入り込んでいる傾斜地形であったことなどから，わずかな遺構・遺物の発見にとどまった。

しかしながら，西原段Ⅰ遺跡の所在する台地全体の空間利用としてみた場合，平成18年度の調査で縄文時代早期の集石遺構や縄文時代晩期の土器等が多く発見された台地北側は住の空間，今回の調査地は谷頭を利用した狩り場的な空間として捉えることもできる。Ｃ－19区で検出された土坑も底面の小ピットこそ検出されなかったが，谷頭の等高線に沿う形で掘られており，落とし穴の可能性が考えられる。また，平成18年度の調査では集石遺構に伴うⅦ・Ⅷ層の土器が検出されていなかったが，今回該当する層から小型土器底部，押型文土器が発見されたことは，集石遺構の時期を考える上でひとつの指標になろう。

そのⅦ層出土の小型土器については，底部に丁寧なミガキがかけられており，側面の上部にも貝殻条痕の上からミガキで仕上げた形跡がある。底部の立ち上がり部分には短い縦の刻みが等間隔に連続して施されている。底部にミガキを施す手法は吉田式土器にみられるものであるが，縦の刻みは石坂式土器にみられるものである。両者を併せ持つ土器については詳細不明であり，今後の資料の増加を待ちたい。

写　真　図　版

図版６　狩俣遺跡遠景（北側より）

図版７　狩俣遺跡遠景（確認トレンチ）

作業風景

作業風景

落とし穴１号

落とし穴１号

落とし穴１号

図版８　13年度確認調査１（落とし穴１号ほか）

落とし穴２号

落とし穴２号

集石１号

集石２号

土坑１

土坑２

土坑３

土坑４

図版９　13年度確認調査２（落とし穴２号，土坑）

土坑 5

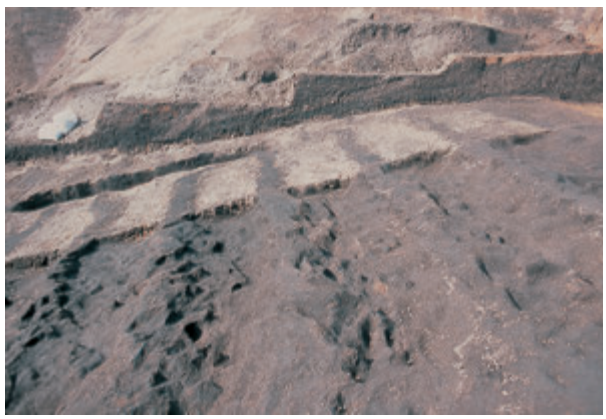
土坑 6

23トレンチ遺構検出状況

竪穴住居跡

竪穴住居跡

畝状遺構 1



畝状遺構 1

図版10　13年度確認調査 3 （竪穴住居跡ほか）

調査区全景

南調査区

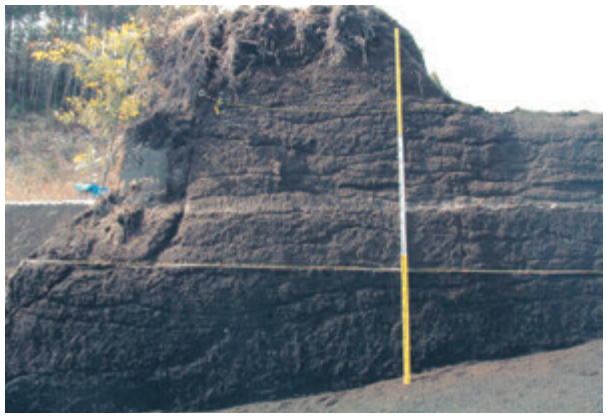
北調査区

図版11　谷部の調査１（調査区全景）

調査区全景

調査風景

調査風景



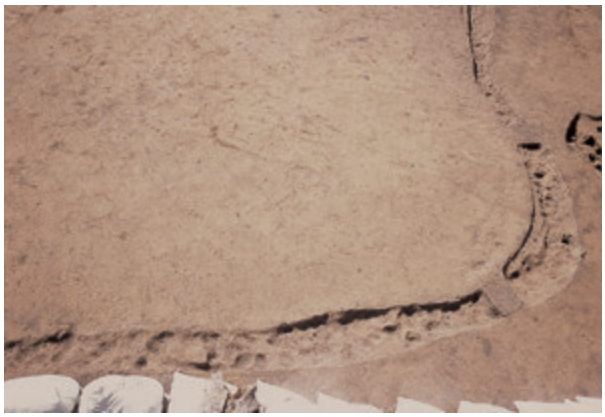
土層断面

土層断面

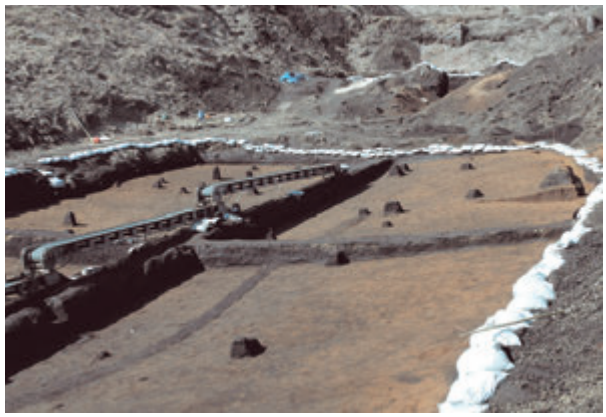
図版12　谷部の調査２（調査風景，土層）

Ⅲ，Ⅳ層遺物出土状況

Ⅳ層遺物出土状況



溝状遺構 1



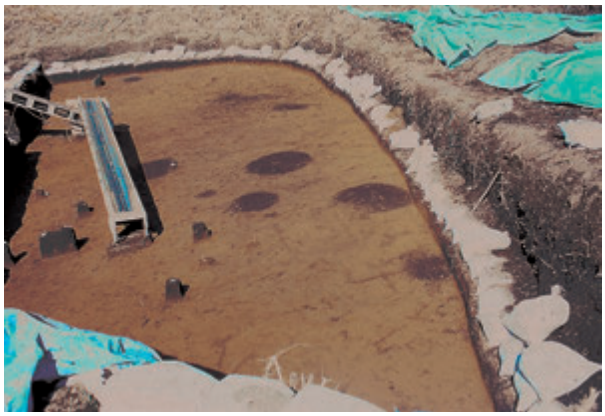
溝状遺構 3

溝状遺構 3

溝状遺構 7

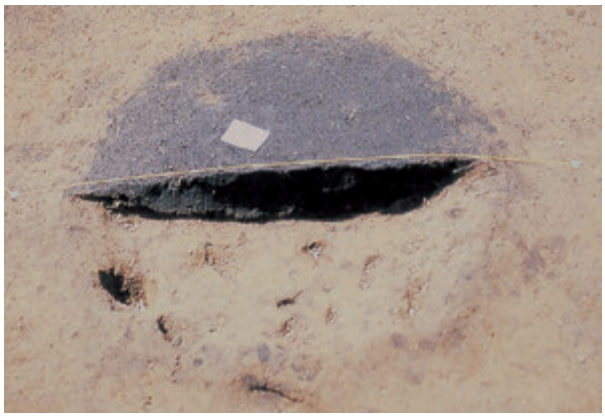
溝状遺構 7

図版13　谷部の調査３（遺物出土状況，溝状遺構）



遺構検出状況（谷部北）

遺構検出状況（谷部北）



土坑25

土坑26

土坑27

土坑40

土坑42

図版14　谷部の調査４（土坑ほか）

畝状遺構２（全景）

畝状遺構２（全景）

畝状遺構２（完掘状況）

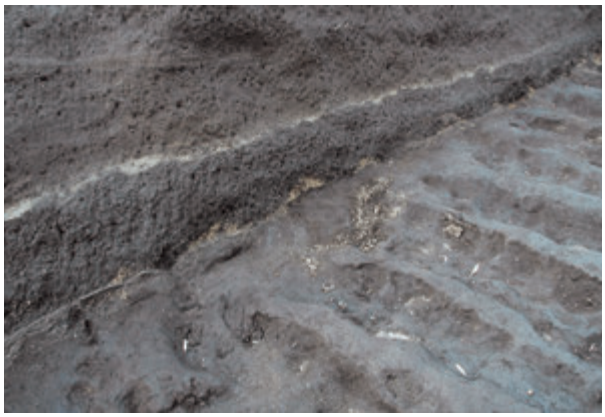
図版15　谷部の調査５（畝状遺構２－①）

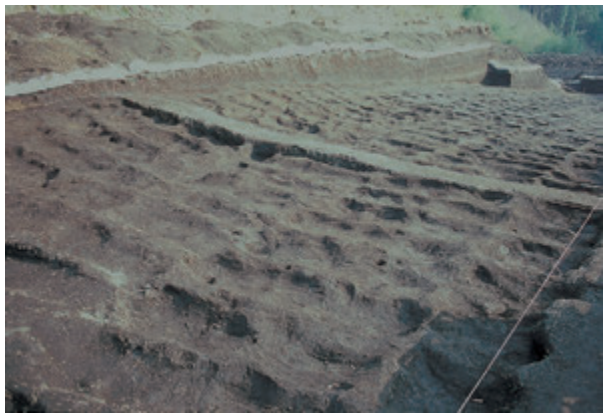
畝状遺構２（検出状況）

畝状遺構２（検出状況）

畝状遺構２（検出状況）

畝状遺構２（完掘状況）

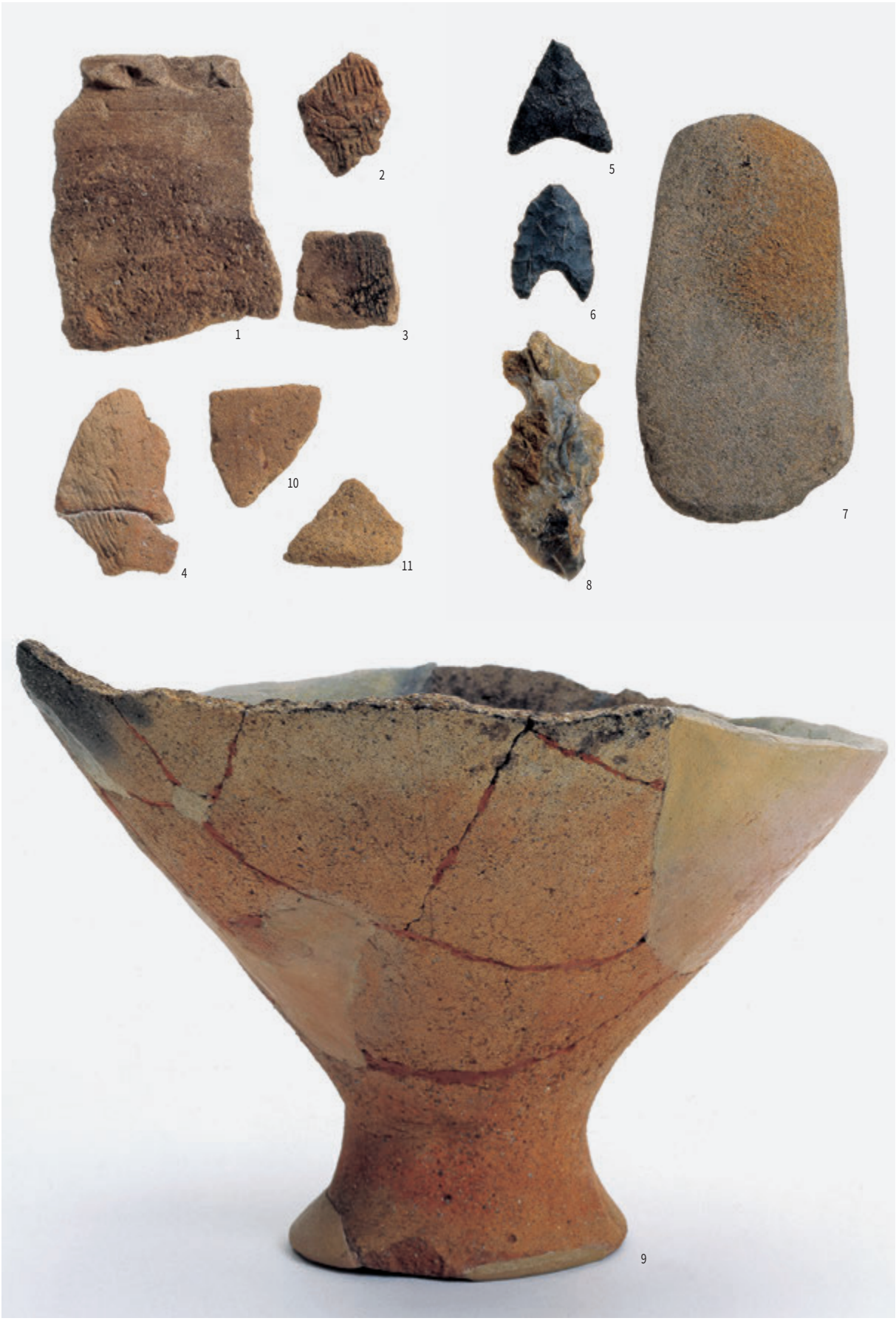

畝状遺構２（断面）


畝状遺構２（完掘状況）

畝状遺構２（完掘状況）

畝状遺構２（完掘状況）

図版16　谷部の調査６（畝状遺構２－②）



図版17　谷部の遺物１（縄文時代，古墳時代，石器）

図版18　谷部の遺物２（古代～近世）

調査区全景（東側）

調査区全景（西側）

調査風景（西側）

調査風景（東側）

土層断面（西側）

土層断面（下層確認）

図版19　北部の調査１（調査風景，土層）

土師器出土状況（Ⅲｂ層）

遺物出土状況（Ⅷ層）

縄文土器出土状況（Ⅷ層）

石皿出土状況（Ⅷ層）

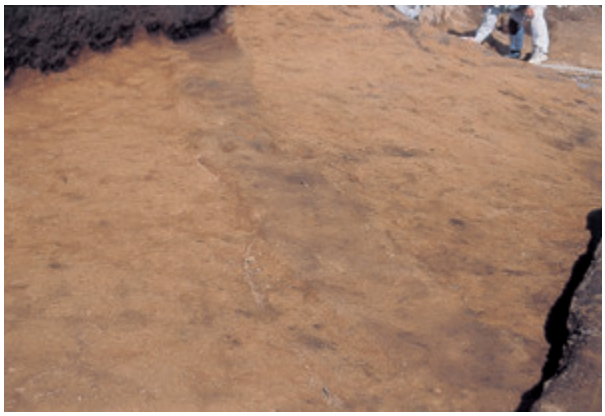
集石３号

集石４号

集石５号

集石６号

図版20　北部の調査２（遺物出土状況，集石３～６号）



古道２

古道３，４

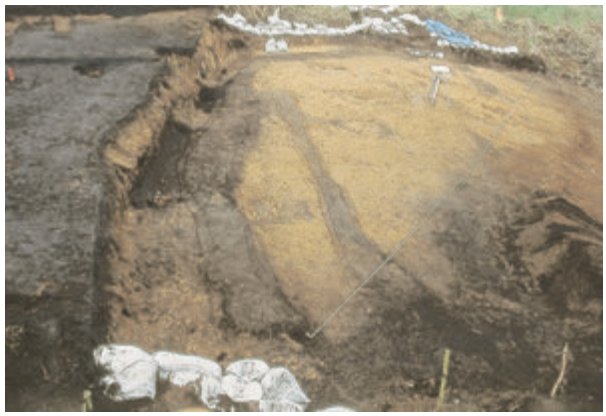
古道２，４，６

古道５

古道４（断面）

図版21　北部の調査３（古道２～６）

古道９，10号（検出状況）



古道９，10号（完掘状況）

古道９，10号　溝状遺構11

溝状遺構８

溝状遺構13（完掘状況）

溝状遺構13（断面）

図版22　北部の調査４（古道9，10，溝状遺構8，11，13）

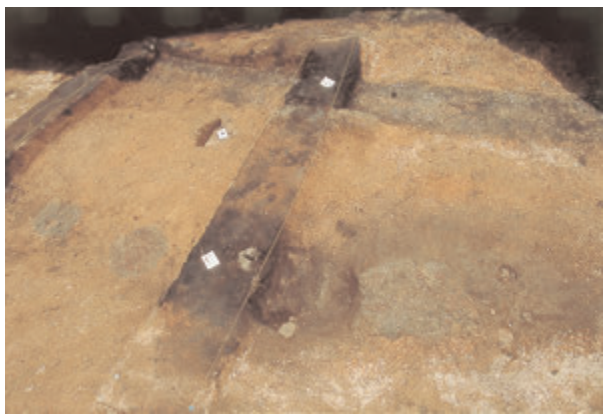
溝状遺構10，12（検出状況）

溝状遺構10，12（検出状況）

溝状遺構12（検出状況）

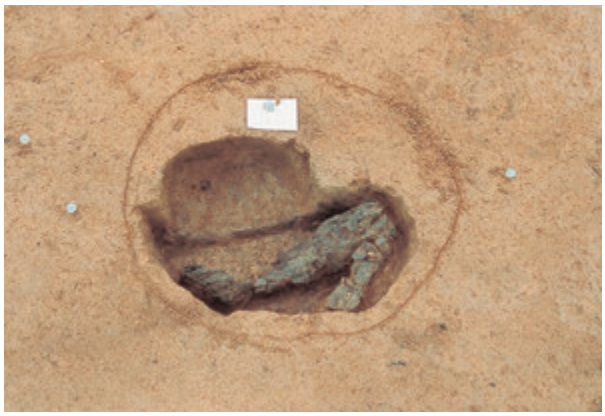
溝状遺構12（硬化面検出）

溝状遺構12（完掘状況）



溝状遺構12（硬化面断面）

図版23　北部の調査５（溝状遺構10，12）



土坑48（炭化木）

土坑54

土坑62

土坑75

土坑94（種子）

土坑120

土坑90～93

図版24　北部の調査６（土坑）

畝状遺構３（検出状況）

畝状遺構３（完掘状況）

畝状遺構４

畝状遺構４（検出状況）

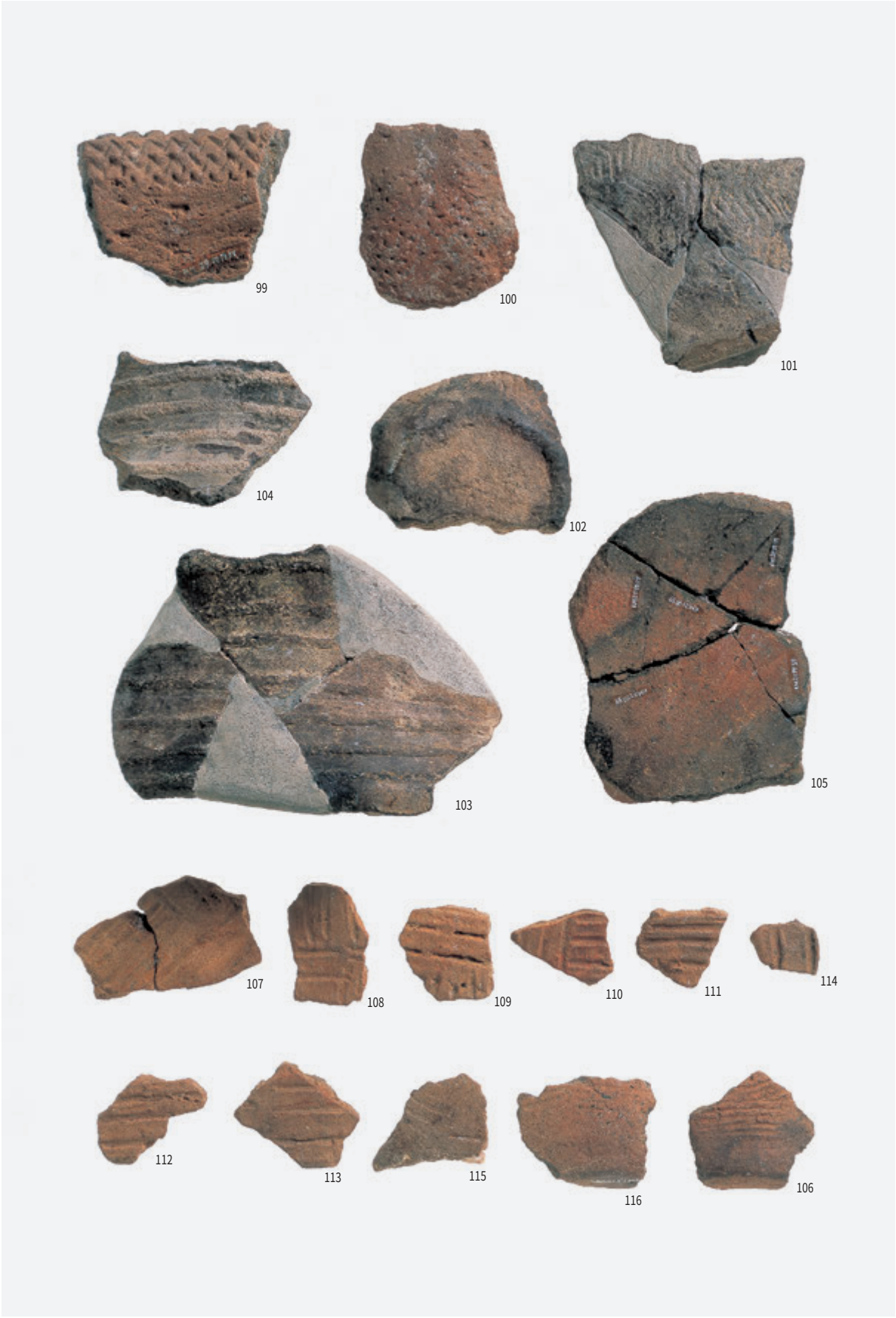
畝状遺構４（完掘状況）

図版25　北部の調査７（畝状遺構３，４）

図版26　北部の土器１（縄文早期①）

図版27　北部の土器２（縄文早期②）

図版28　北部の土器３（縄文早期③）



図版29　北部の土器４（縄文早期④，縄文前期）

図版30　北部の土器５（縄文後期，縄文晩期）

図版31　北部の土器６（古代）　北部の石器１（石鏃）

図版32　北部の石器２（石斧，磨石，石皿ほか）

調査区遠景（中央部北側）

土層断面（天地返し）

土層断面（Ｊ－30～36区）

土層断面（Ｊ，ｋ－37区）

土層断面（Ｇ～Ｉ－47～51区）

図版33　中央部の調査１（土層断面）

作業風景（Ⅱ，Ⅲ層）

作業風景（Ⅲ，Ⅳ層）

作業風景（Ⅶ，Ⅷ層）

作業風景（集石）

作業風景（中央部北側）

図版34　中央部の調査２（作業風景）

遺物出土状況（Ⅲ，Ⅳ層）

須恵器出土状況

磨製石斧出土状況

縄文土器集中（Ⅶ層）

縄文土器出土状況（Ⅶ層）

遺物出土状況（Ⅷ層）

図版35　中央部の調査３（遺物出土状況）

集石７号

集石８号

集石９号

集石10号

集石11号

集石12号

集石13号

集石14号

図版36　中央部の調査４（集石７～14号）

集石15号

集石16号

集石17号

集石18号

集石19号

集石20号

集石21号

集石21号（下面）

図版37　中央部の調査５（集石15～21号）

集石22号

集石23号

集石24号

集石24号（断面）

集石25号

図版38　中央部の調査６（集石22～25号）

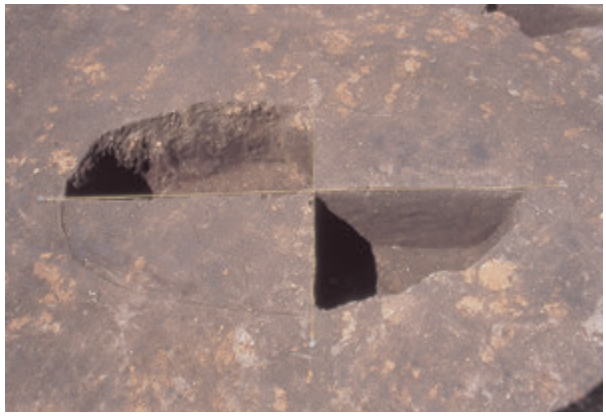
集石24号，縄文土器集中

石器集石遺構

土坑（130，133）

土坑134

土坑135



土坑136

土坑148

土坑148（半掘状況）

図版39　中央部の調査７（集石24号，土坑）

落とし穴４号（検出状況）

落とし穴４号（埋土状況）

落とし穴４号（半掘状況）

落とし穴４号（完掘状況）

落とし穴４号

図版40　中央部の調査８（落とし穴４号）

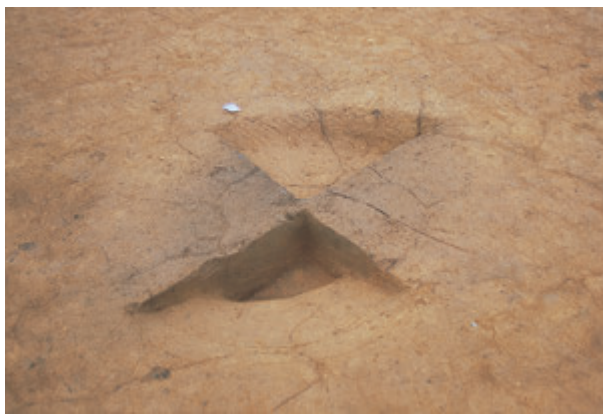
落とし穴５号（検出状況）

落とし穴５号（完掘状況）

焼土１，２

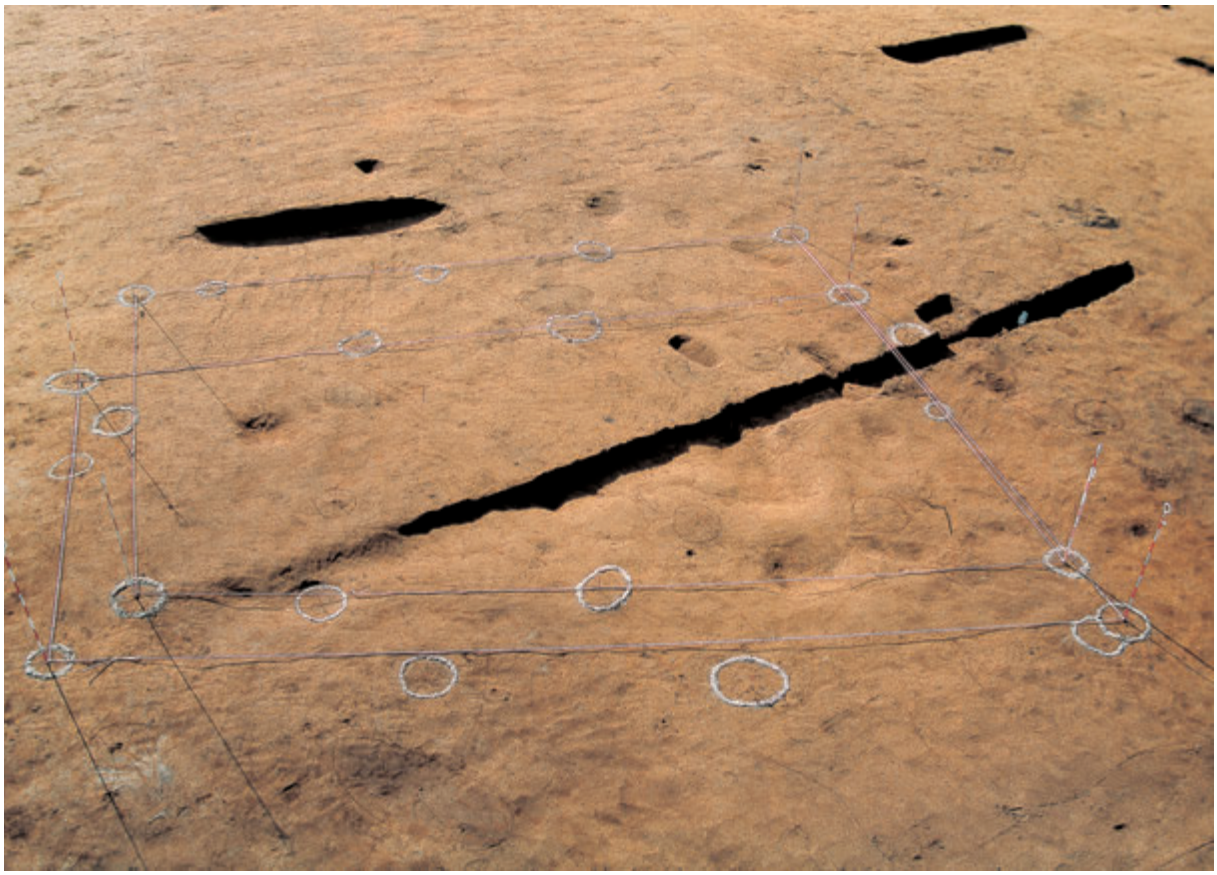
焼土１，２（完掘状況）

土坑150



土坑157

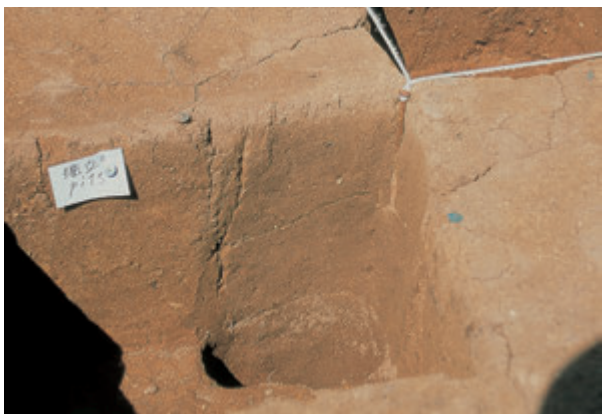
図版41　中央部の調査９（落とし穴５号，焼土，土坑）



掘立柱建物跡１，２号

掘立柱建物跡１号（Ｐ８）

掘立柱建物跡１号（Ｐ９）



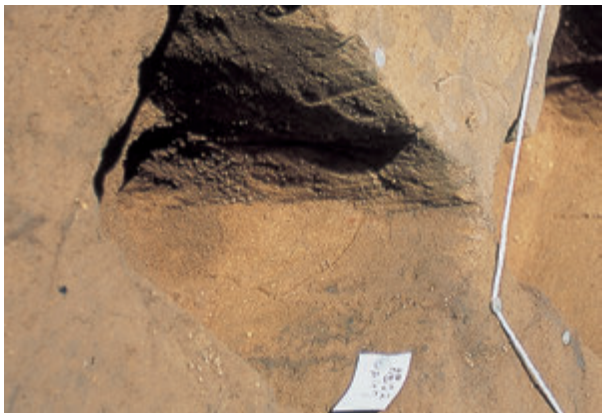
掘立柱建物跡１号（Ｐ10）

掘立柱建物跡１号（Ｐ11）

図版42　中央部の調査10（掘立柱建物跡１号）

掘立柱建物跡２号（Ｐ１）

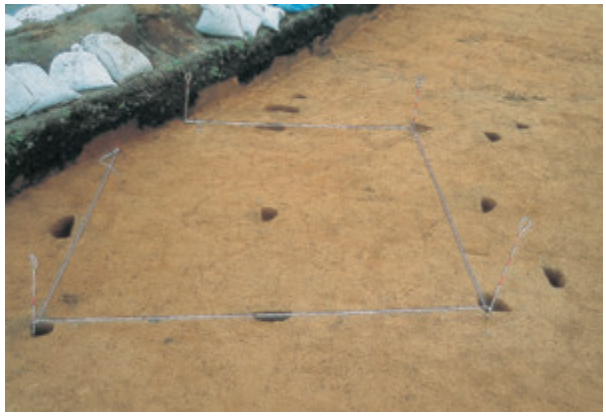
掘立柱建物跡２号（Ｐ５）



掘立柱建物跡２号（Ｐ７）

掘立柱建物跡２号（Ｐ８）

掘立柱建物跡３号



掘立柱建物跡３号（半掘）

掘立柱建物跡３号（Ｐ５）

掘立柱建物跡３号（Ｐ７）

図版43　中央部の調査11（掘立柱建物跡２，３号）

溝状遺構16

溝状遺構17

溝状遺構18

溝状遺構19

図版44　中央部の調査12（溝状遺構16～19）

溝状遺構20

溝状遺構20（南側）

溝状遺構20（断面）

溝状遺構25，26

図版45　中央部の調査13（溝状遺構20，25，26）

畝状遺構５

畝状遺構５（断面）

畝状遺構６

畝状遺構６（完掘状況）

畝状遺構６（断面）

図版46　中央部の調査14（畝状遺構５，６）

畝状遺構 7

畝状遺構 7 ～ 9

畝状遺構 7 （断面）

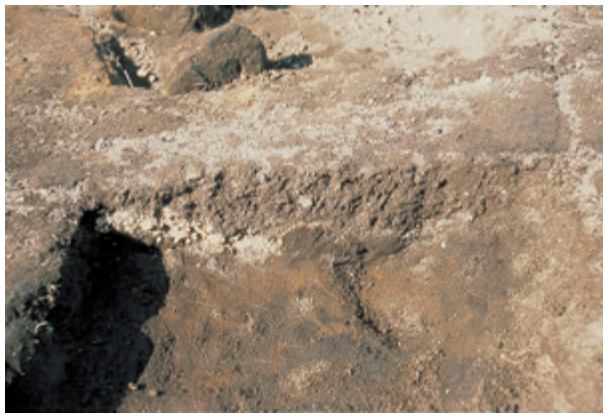
畝状遺構 9

畝状遺構 6 ～ 9

図版47　中央部の調査15（畝状遺構 7 ～ 9 ）

畝状遺構10

畝状遺構10（断面①）



畝状遺構10（断面②）

畝状遺構10（完掘状況）

畝状遺構10（断面③）

畝状遺構10（断面④）

図版48　中央部の調査16（畝状遺構10）

畝状遺構11（南側）

畝状遺構11（完堀状況）

畝状遺構11（北側）

畝状遺構11（全景）

畝状遺構11（完掘）

畝状遺構11（全景）

図版49　中央部の調査17（畝状遺構11）

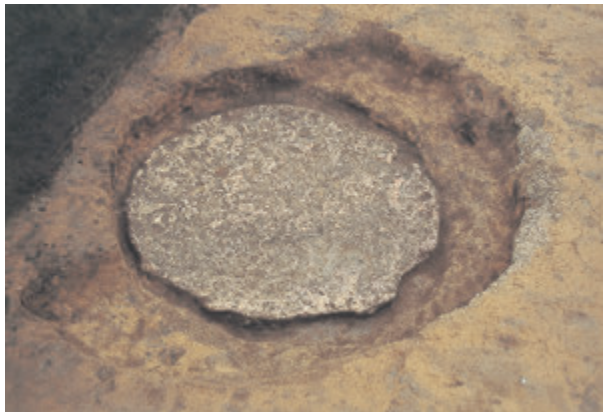
畝状遺構12

畝状遺構12（検出状況）

古道11

古道11（断面）

土坑156



土坑156（完掘状況）

土坑189

土坑206

図版50　中央部の調査18（畝状遺構12，古道，土坑）

図版51　中央部の土器１（縄文早期①）

図版52　中央部の土器２（縄文早期②）

図版53　中央部の土器３（縄文早期③）

図版54　中央部の土器４（縄文早期④）

図版55　中央部の土器５（縄文早期⑤）

図版56　中央部の土器６（縄文早期⑥）

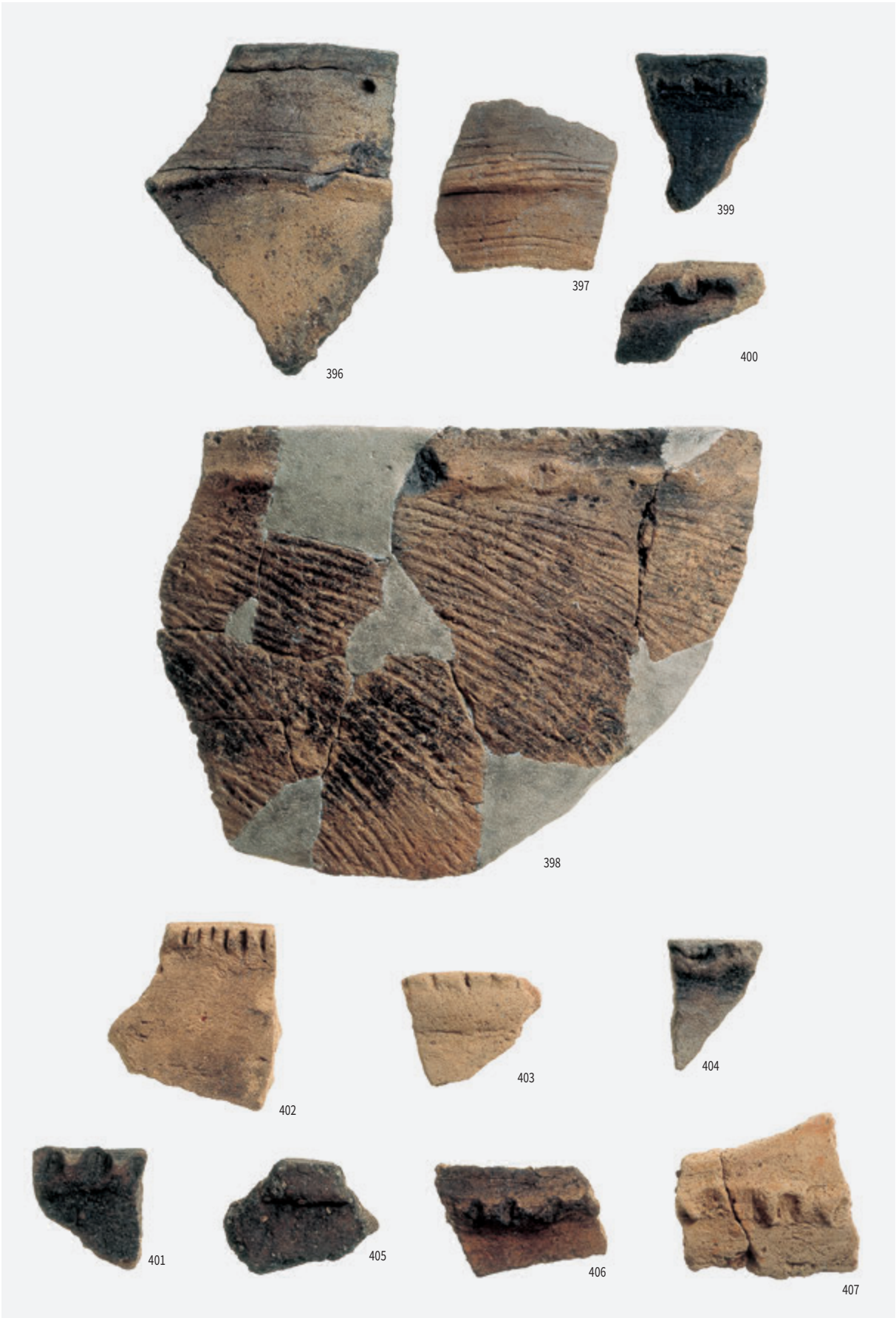
図版57　中央部の土器７（縄文早期⑦）

図版58　中央部の土器８（縄文早期⑧）

図版59　中央部の土器９（縄文早期⑨）

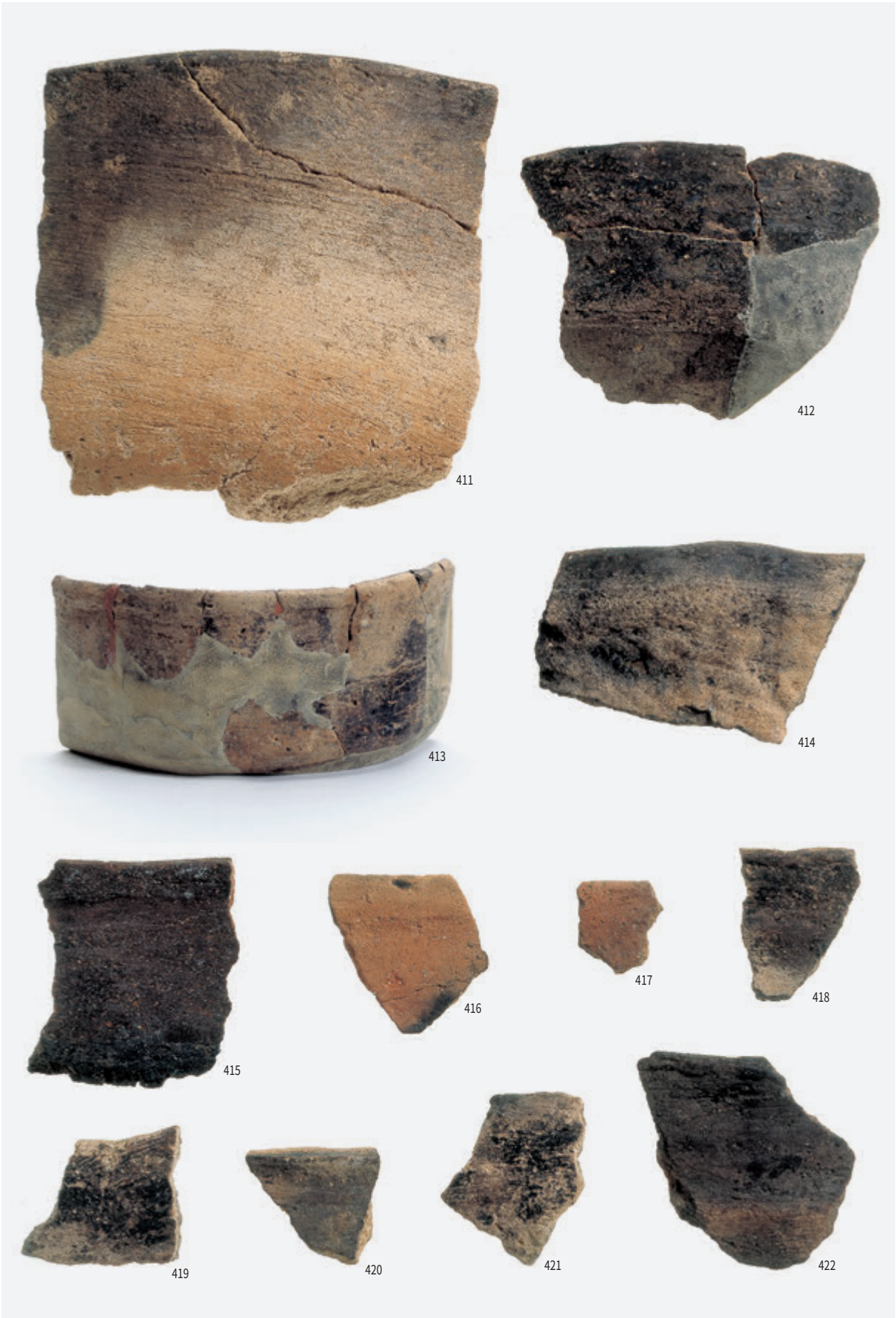
図版60　中央部の土器10（縄文前期，後期）

図版61　中央部の土器11（縄文晩期①）



図版62　中央部の土器12（縄文晩期②）

図版63　中央部の土器13（縄文晩期③）



図版64　中央部の土器14（縄文晩期④）

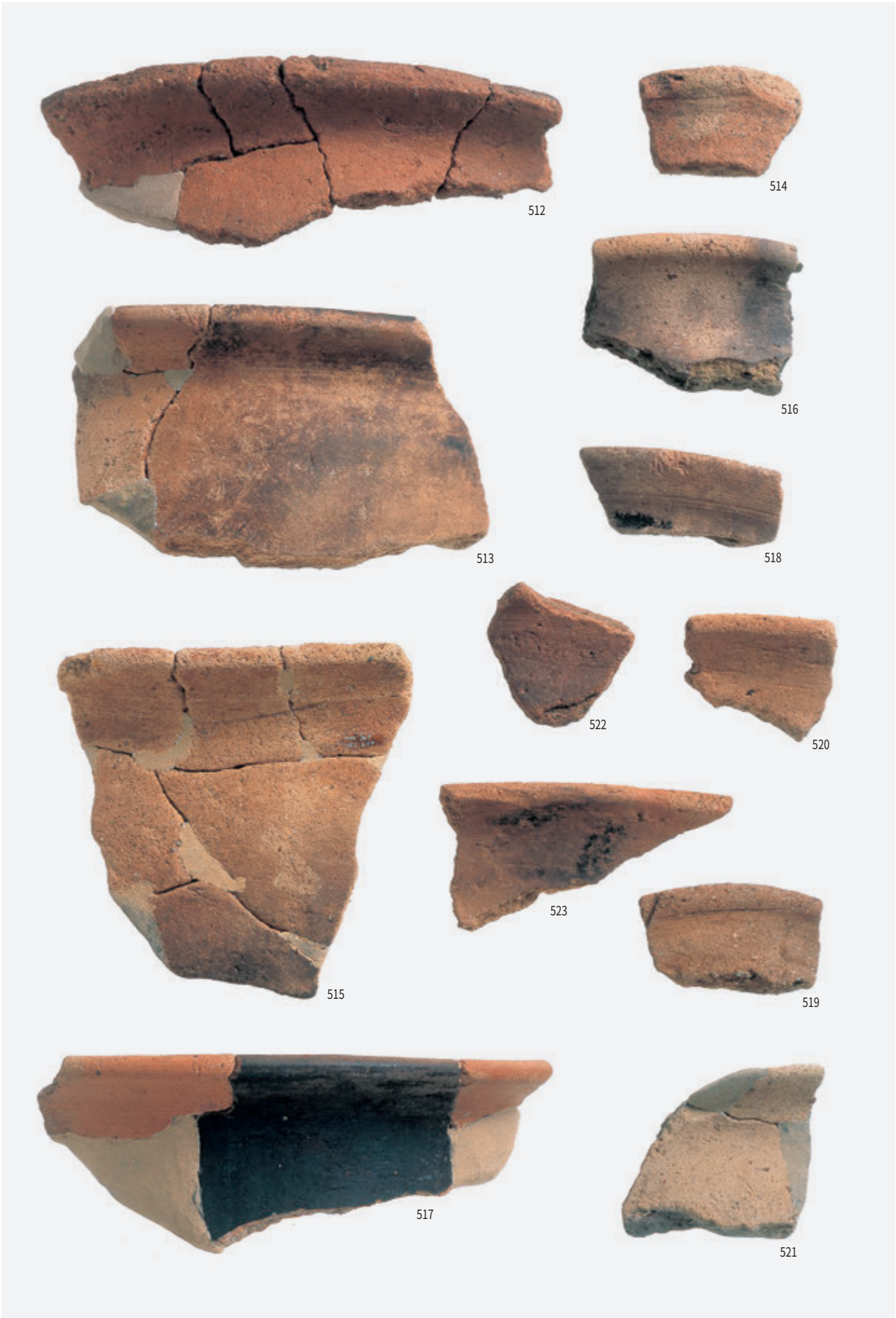
図版65　中央部の土器15（縄文晩期⑤）

図版66　中央部の土器16（縄文晩期⑥）

図版67　中央部の土器17（縄文晩期⑦）

図版68　中央部の土器18（古墳時代）

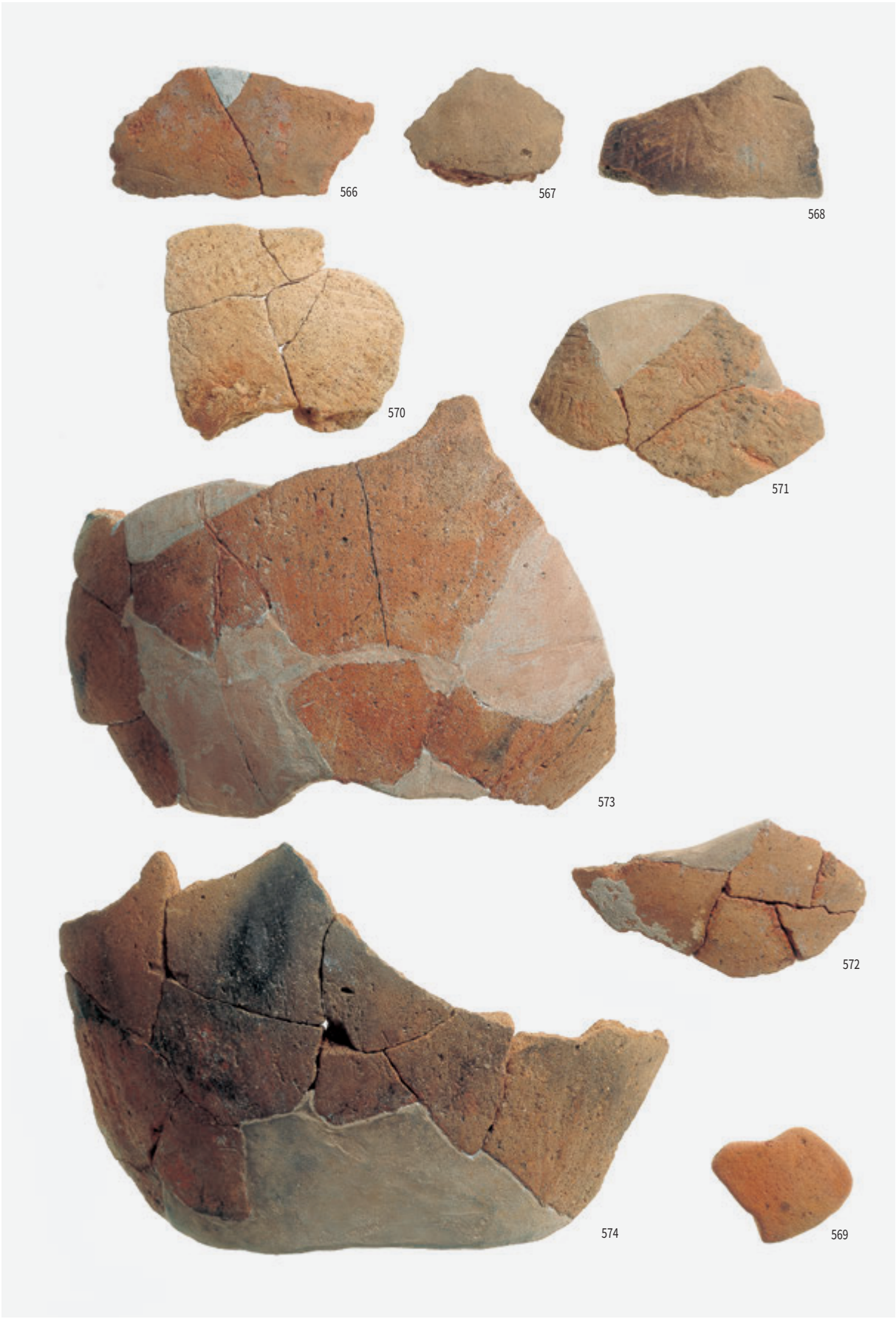
図版69　中央部の土器19（土師器①）



図版70　中央部の土器20（土師器②）

図版71　中央部の土器21（土師器③）

図版72　中央部の土器22（土師器④）



図版73　中央部の土器23（土師器⑤）

図版74　中央部の土器24（須恵器）

図版75　中央部の土器25（焼塩土器，中世～近世）

図版76　中央部の石器１（縄文早期①）

図版77　中央部の石器２（縄文早期②）

図版78　中央部の石器３（縄文早期③）

図版79　中央部の石器４（縄文晩期，古代）

南部調査区全景

土層断面（H－59～54区）

土層断面（P 1 ～P 3 残存状況）

図版80　南部の調査 1 （南部全景，土層）

作業風景（Ⅳ層）

作業風景（畝状遺構）

作業風景（畝状遺構）

作業風景（全体）

遺物出土状況（Ⅲ層）

磨製石斧出土状況（Ⅳ層）

土師器出土状況（Ⅲ層）

図版81　南部の調査２（作業風景，出土状況）

掘立柱建物跡４号

掘立柱建物跡５号

図版82　南部の調査３（掘立柱建物跡４，５号）

畝状遺構13

土坑221

土坑222

土坑223

土坑224

図版83　南部の調査４（畝状遺構13，土坑）

土坑225

土坑226

土坑227

土坑228

Ⅳ層遺構検出状況

図版84　南部の調査５（土坑）

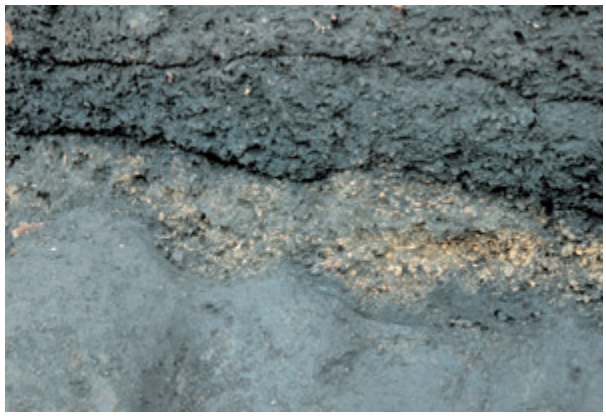
畝状遺構14

畝状遺構15（検出状況）

畝状遺構15

図版85　南部の調査６（畝状遺構14，15）

畝状遺構15（南側断面）



畝状遺構15（西側断面）

畝状遺構15（完掘状況）

畝状遺構15（完掘状況）

畝状遺構16

図版86　南部の調査７（畝状遺構15，16）

畝状遺構16（検出状況）

畝状遺構16（検出状況）

畝状遺構16

畝状遺構16（完掘状況）

畝状遺構16（完掘状況）

図版87　南部の調査８（畝状遺構16）

畝状遺構17

畝状遺構17（検出状況）

畝状遺構17（検出状況）

畝状遺構17（断面）

畝状遺構17（完掘状況）

図版88　南部の調査９（畝状遺構17）

畝状遺構15～17

畝状遺構19

畝状遺構15，19

畝状遺構19（断面）

畝状遺構19（完掘状況）

図版89　南部の調査10（畝状遺構19）

畝状遺構11～17

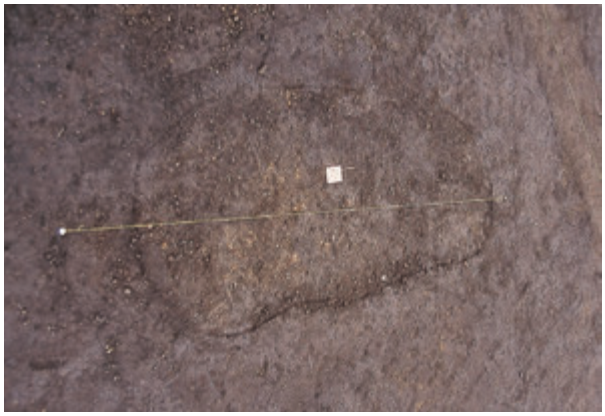
図版90　南部の調査11（畝状遺構11～17）

炭化木 1

炭化木 1 ～ 3

土坑229

土坑230



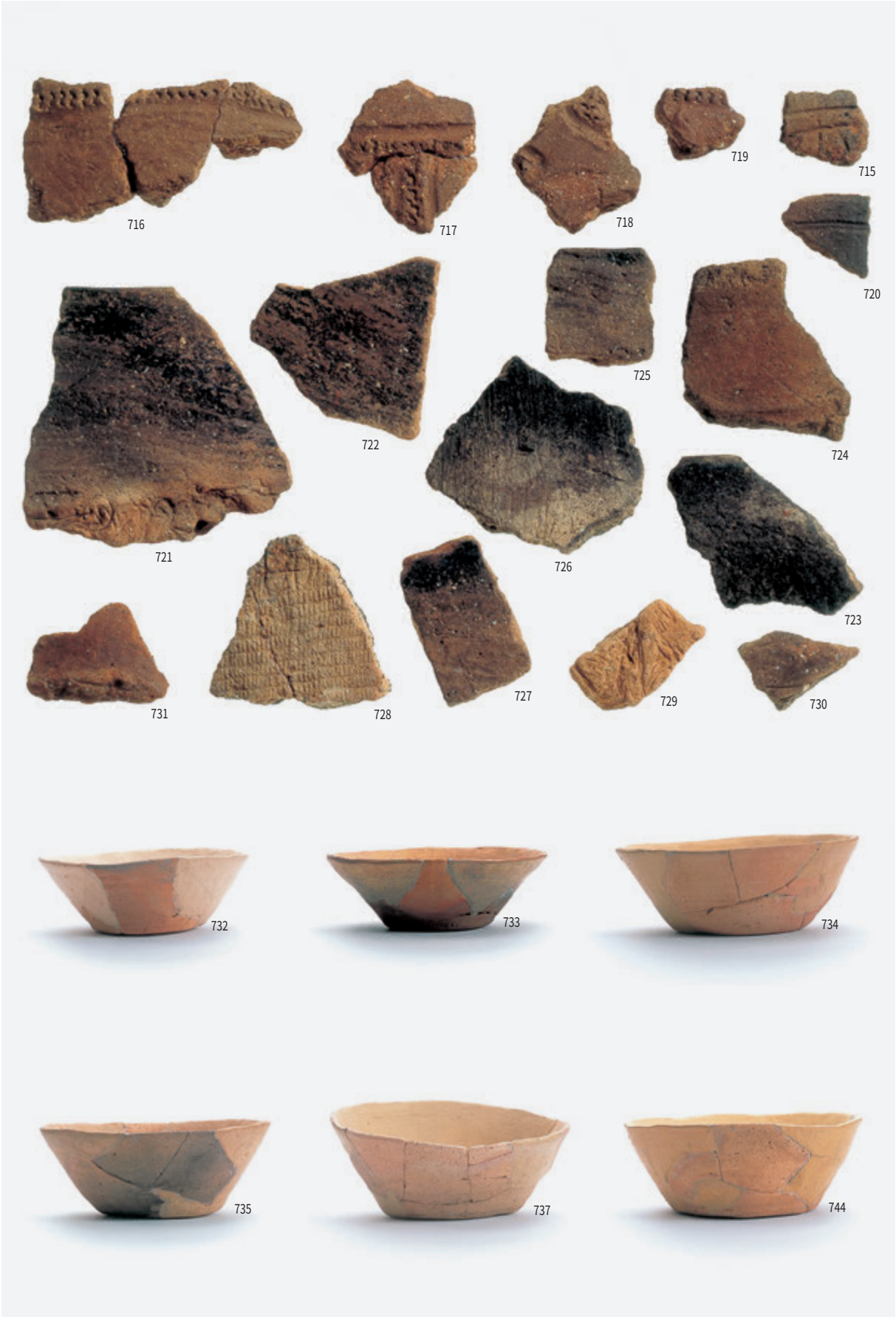
土坑231

土坑233

土坑236

土坑251，252

図版91　南部の調査12（炭化木，土坑）

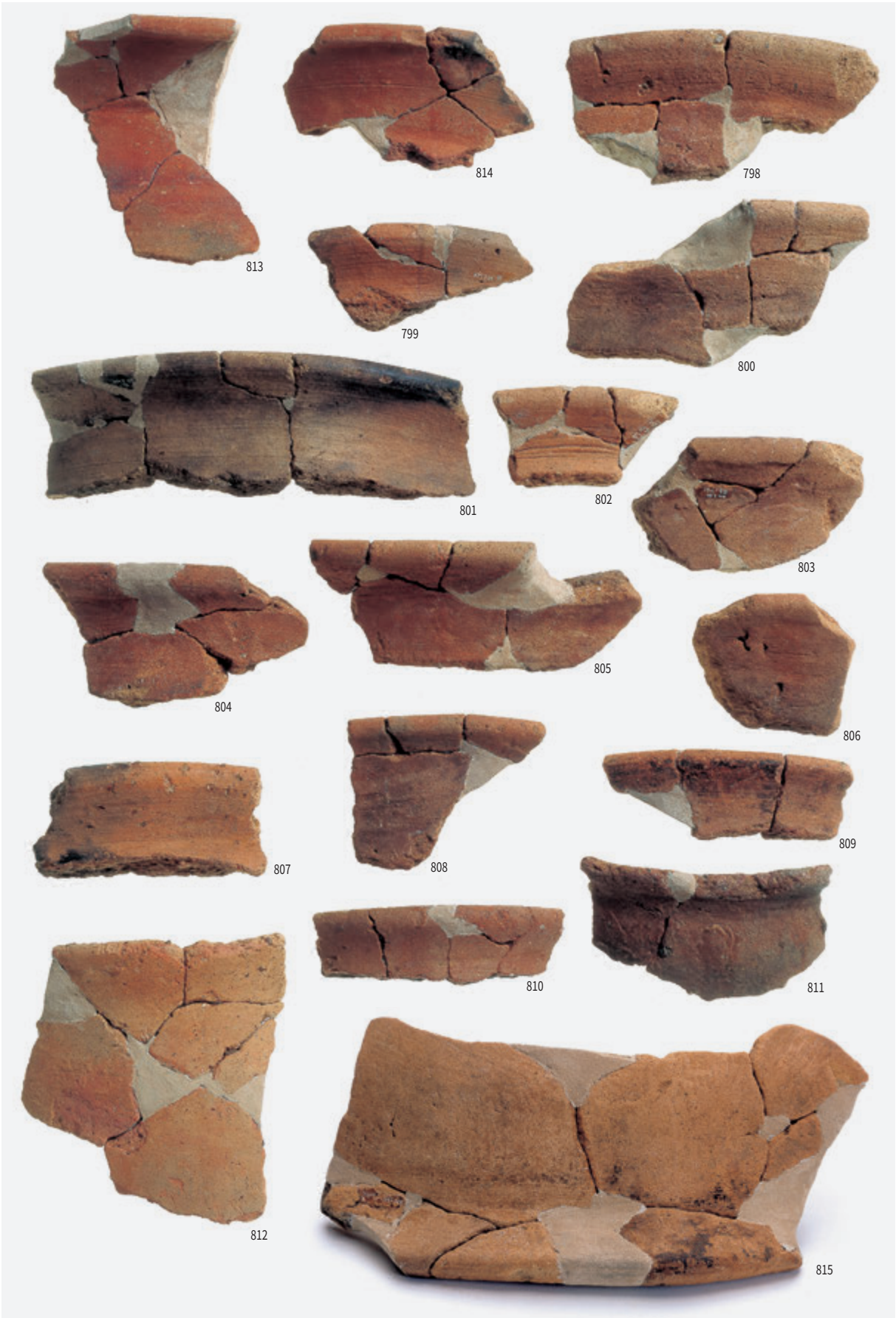


図版92　南部の土器１（縄文土器，土師器①）

図版93　南部の土器２（土師器②）

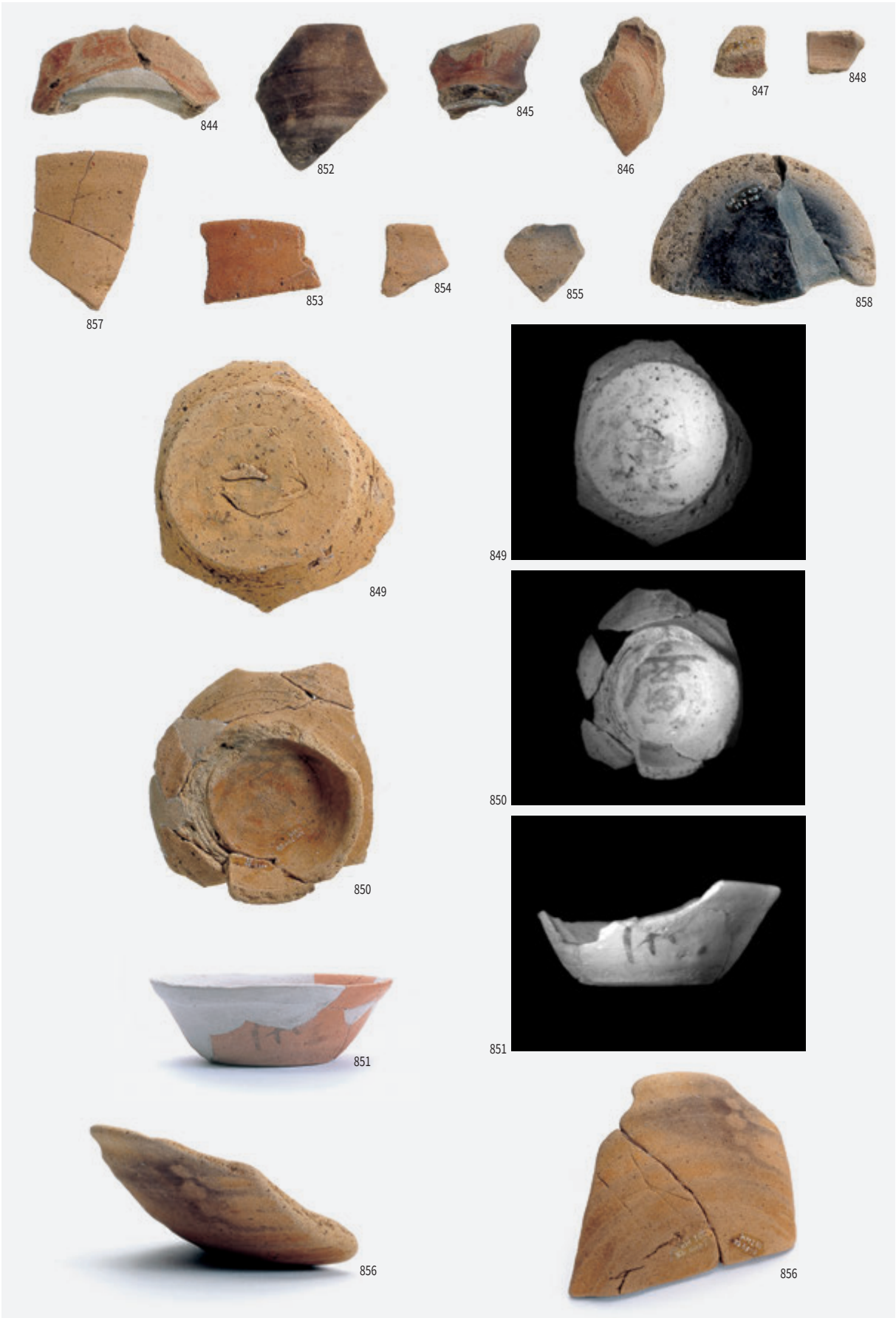
図版94　南部の土器３（土師器③）

図版95　南部の土器４（土師器④）

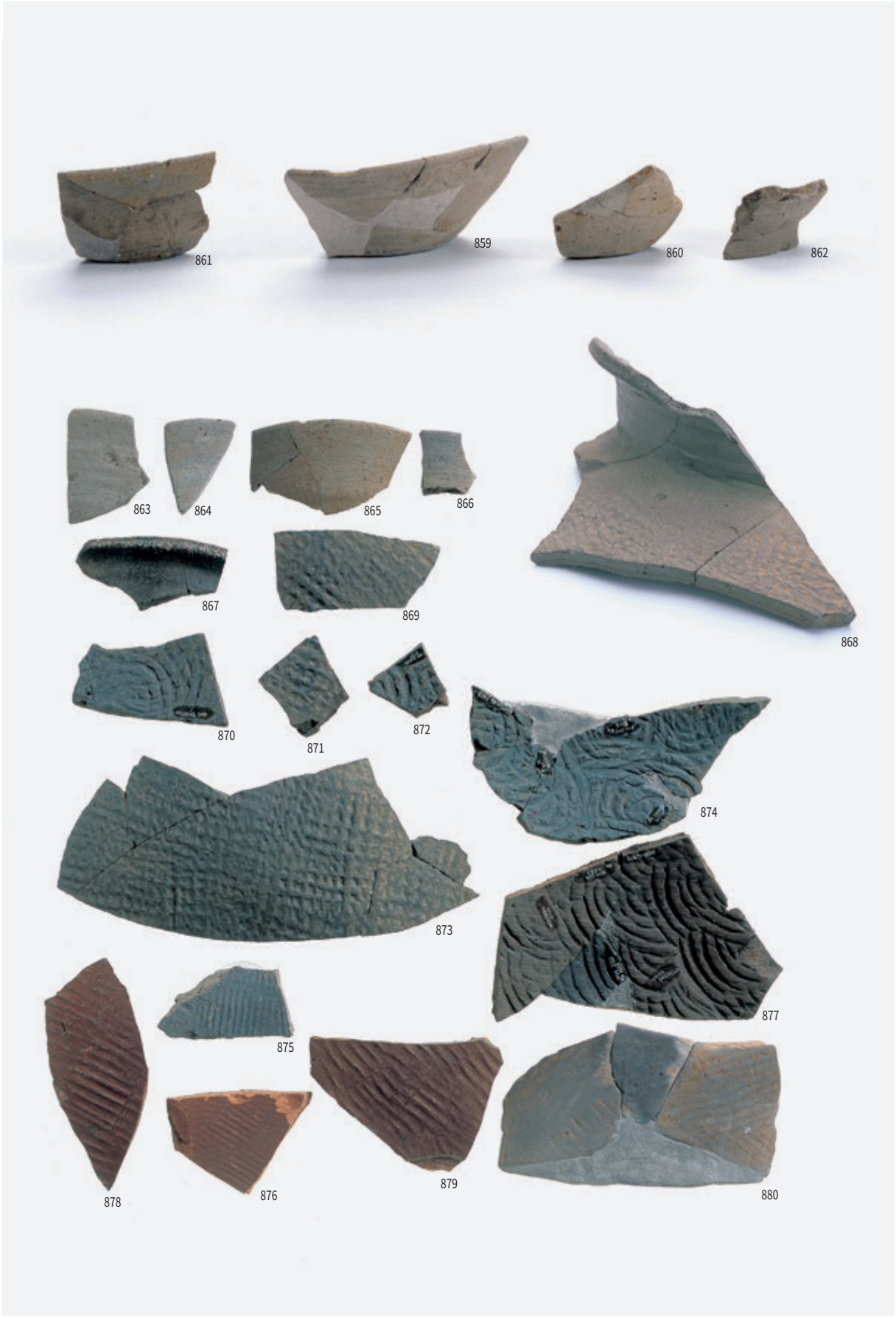


図版96　南部の土器５（土師器⑤）

図版97　南部の土器６（内黒土師器）



図版98　南部の土器７（墨書土器，線刻土器）



図版99　南部の土器８（須恵器）

図版100　南部の土器９（陶磁器），石器

現地指導（飯沼先生）

現地指導（濱崎，佐々木先生）

現地説明会（パネル展示）

現地説明会（火山灰観察）

現地説明会（遺構見学）

現地説明会（土層断面見学）

現地説明会（発掘風景見学）

現地説明会（発掘体験）

図版101　現地指導，現地説明会

遺跡近景　北から（Ⅷ層遺物出土状況）

遺跡近景　南から（Ⅶ・Ⅷ層遺物出土状況）

図版２　遺跡近景

左上　小型磨製石斧
　　出土状況
右上　Ⅰ類土器出土状況

調査状況

土層堆積状況
Ⅰ－11～13区西壁

図版３　遺物出土状況　土層断面

左上　３号竪穴住居跡
検出　西から
右上　埋土中遺物出土
状況　南西から

３号竪穴住居跡
埋土堆積状況
西から

３号竪穴住居跡完掘
南西から

図版４　３号竪穴住居跡

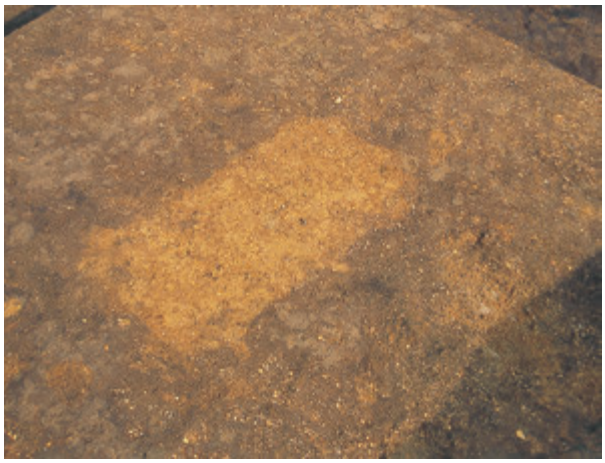
４号竪穴住居跡検出状況　東から

４号竪穴住居跡検出状況　北から

４号竪穴住居跡　完掘　北から

４号竪穴住居跡（手前）と３号竪穴住居跡（奥）

図版５　４号竪穴住居跡

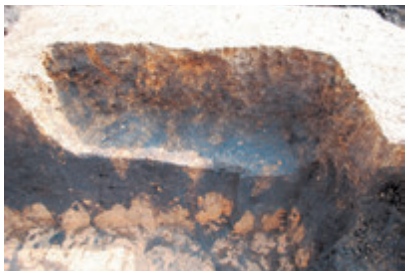


１号落とし穴検出

１号落とし穴完掘

２号落とし穴検出

２号落とし穴埋土堆積状況



２号落とし穴半裁

２号落とし穴小ピット完掘

図版６　落とし穴１号・２号

３号落とし穴検出

３号落とし穴埋土堆積状況

３号落とし穴完掘

３号落とし穴（上から）

３号落とし穴小ピット完掘

図版７　落とし穴３号

1

図版８　３号竪穴住居跡内土器①

図版９　３号竪穴住居跡内土器②

図版10　３号竪穴住居跡内土器③

図版11　３号竪穴住居跡内土器④

81
82
83
84
87
86
88
89
90
91
92
85
93
94
97
98
95
104
105
96
103
109
106
107
108

図版12　Ⅰ類土器①

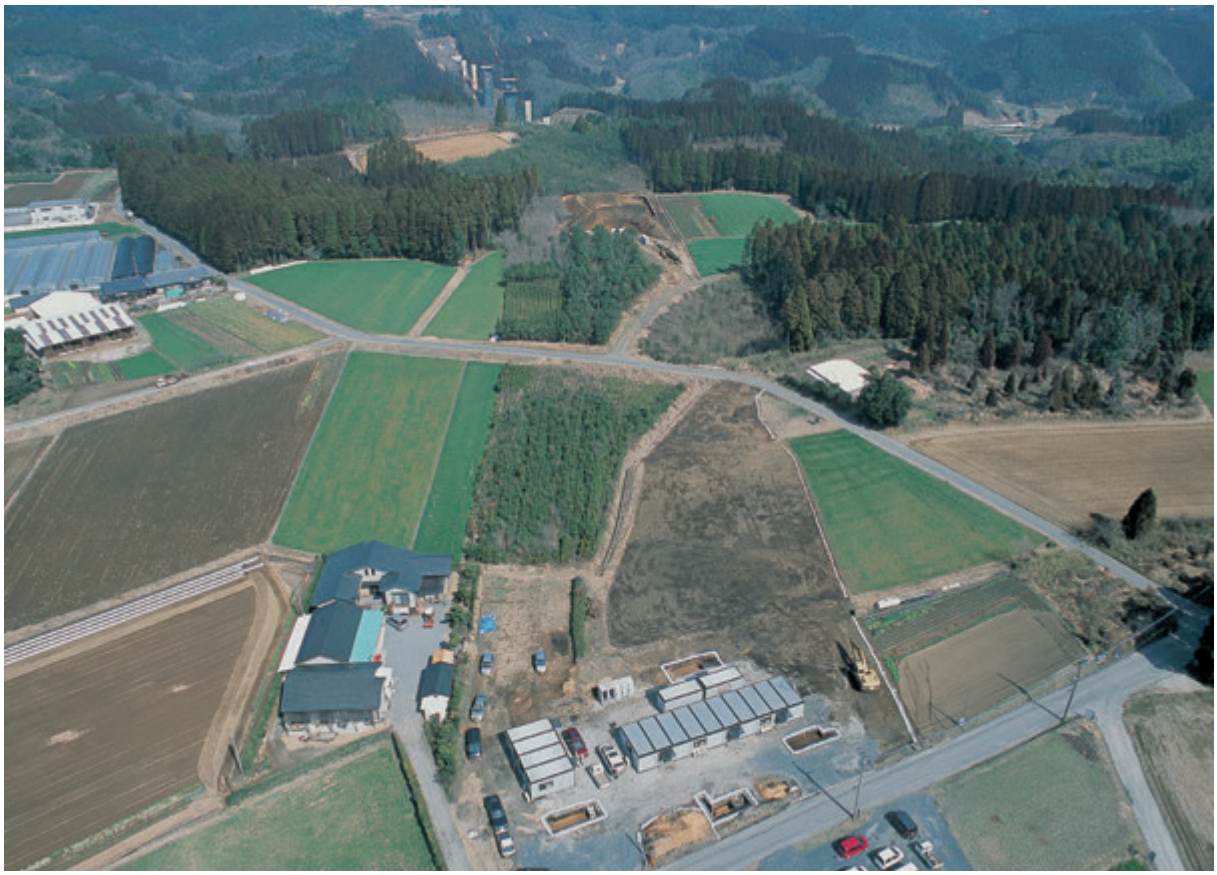
図版13　Ⅰ類土器②

図版14　Ⅰ類土器③　竪穴住居跡内出土石器

図版15　Ⅷ層出土石器①

図版16　Ⅷ層出土石器②

図版17　Ⅱ・Ⅲ類土器　縄文前期土器



遺跡遠景（中央の木立が調査地点　南から）

調査前の状況（南から）

調査前の状況（北から）

重機による表土剥ぎ

Ｂ～Ｄ－19～22区Ⅷ層調査状況（南から）

図版１　遺跡遠景　近景　作業風景

土器底部出土状況

磨石出土状況

土坑内埋土堆積状況

土坑完掘状況

Ｂ～Ｄ－19～22区Ⅸ層上面（南から）

Ｂ～Ｄ－19～22区Ⅸ層上面（北から）

土層堆積状況（南壁）

土層堆積状況（西壁）

図版２　遺物出土状況　土坑

１トレンチ完掘状況

火山灰の堆積（上がＰ11，中央は薩摩火山灰Ｐ14）

２トレンチ調査状況

２トレンチ土層堆積状況

Ｃ～Ｅ－26～28区　文明ボラ層検出

Ｃ～Ｅ－26～28区　調査状況

Ｃ～Ｅ－26～28区　トレンチ配置状況

土層堆積状況（北側）

図版３　トレンチ等調査状況

５トレンチ完掘状況

Ｃ～Ｅ－26～28区調査状況

図版４　出土遺物

あ と が き

「発掘調査をするということは，遺跡を壊すということでもあるんだよ。だからこそ，自分たちには，可能な限り正確に遺跡の記録保存をする責任があるんだよ。」

この言葉を念頭に，発掘現場では，責任の重さを感じながら，調査をしてきた。

狩俣遺跡では，多くの畝状遺構が検出され，しかも台地の上だけではなく，谷間の斜面にまで多くの畝跡が検出されました。一つ一つの畝状遺構を調査していると，その昔ここで暮らした先人たちの「生きる力」を感じ，「エネルギー」に圧倒されるばかりでした。

また整理作業においては，発掘の成果をなるべくわかりやすく記録するよう心掛けたつもりです。この報告書を手にとった方が，少しでも我々と同じ感動を味わってもらえたら幸いです。

最後になりましたが，発掘作業に従事して下さった地元の作業員さん，報告書作成のために努力して下さった整理作業員さんをはじめ，関係各位の方々に厚くお礼を申し上げます。

参考文献

仙台市教育委員会　1993　『下ノ内浦遺跡』　仙台市文化財調査報告書第173集
仙台市教育委員会　1995　『下ノ内浦遺跡』　仙台市文化財調査報告書第202集
福島市教育委員会　1995　『勝口前畑遺跡２』　福島市埋蔵文化財報告書第68集
福島市教育委員会　1995　『勝口前畑遺跡３』　福島市埋蔵文化財報告書第74集
群馬県北群馬郡子持村教育委員会　1990　『黒井峯遺跡発掘調査報告書』　子持村文化財調査報告第11集
福島市教育委員会　1995　『勝口前畑遺跡３』　福島市埋蔵文化財報告書第74集
宮崎県埋蔵文化財センター　2001　『梅北砂土原遺跡・中尾遺跡・蓑原遺跡』
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第42集
宮崎市教育委員会　2006　『本野原遺跡三』　宮崎市文化財調査報告書（田野町文化財調査報告書第53集）
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2003　『前畑遺跡』　鹿児島県立埋蔵文化財センター（56）
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2005　『大島遺跡』　鹿児島県立埋蔵文化財センター（80）
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2008　『関山西遺跡』　鹿児島県立埋蔵文化財センター（126）
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2008　『唐尾遺跡・高古塚遺跡・菅牟田遺跡・中之迫遺跡』
鹿児島県立埋蔵文化財センター（127）
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2009　『建山遺跡・西原段Ⅰ遺跡・野鹿倉遺跡』
鹿児島県立埋蔵文化財センター（139）
石井克己　2007　「畑遺構の調査法」『渋川市埋蔵文化財専門研修地質環境調査課程』　群馬県渋川市教育委員会
中村和美　1997　「鹿児島県における古代の在地土器」『鹿児島考古第31号』　鹿児島県考古学会
三垣恵一　2000　「鹿児島県内出土の煙管について」『大河第７号』　大河同人
日本考古学協会　2000　『はたけの考古学』　日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集第１集

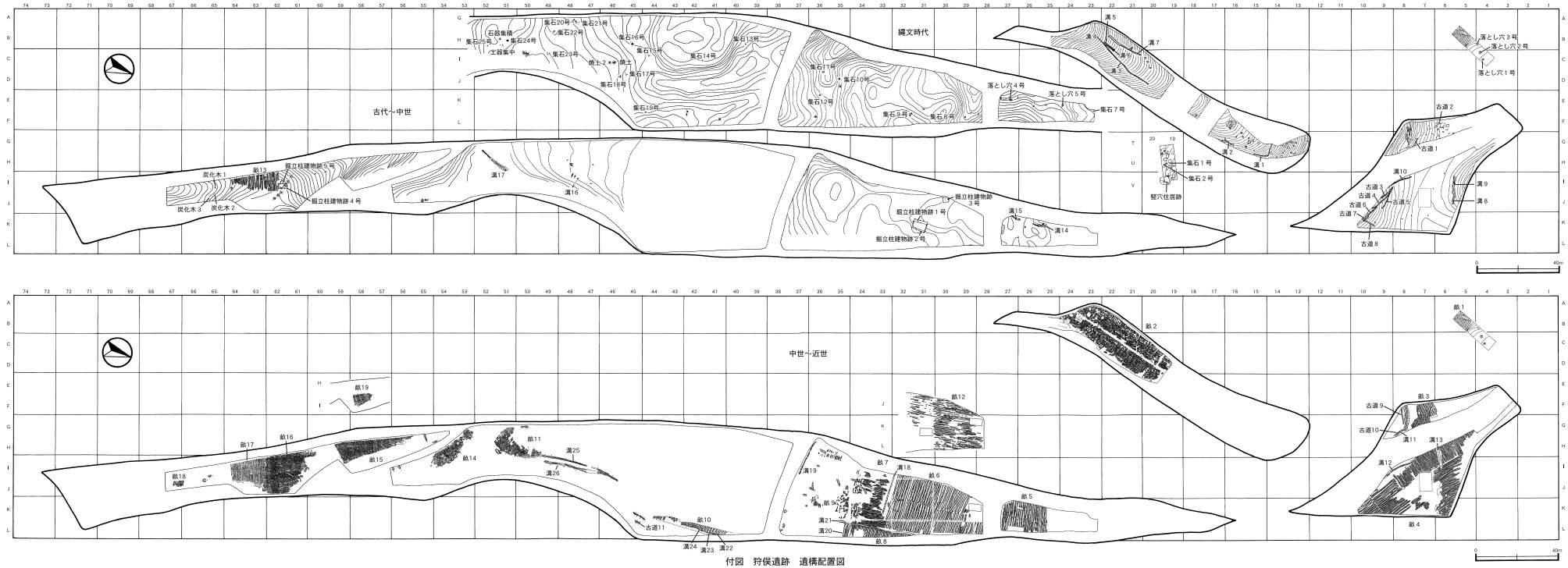
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（152）
東九州自動車道建設（曽於弥五郎ＩＣ～末吉財部ＩＣ間）
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅴ）

狩俣遺跡・建山遺跡・西原段Ⅰ遺跡

発行日　2010年３月

発行者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899－4461　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
ＴＥＬ（0995）48－5811

印刷所　株式会社あすなろ印刷
〒899－0041　鹿児島市城西2－2－36
ＴＥＬ（099）214－3757



付図　狩俣遺跡　遺構配置図